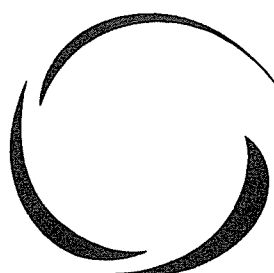


C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

# 大室政右 オーラルヒストリー

元国民精神総動員運動事務局員  
元東京都議会自民党幹事長



GRIPS

政策研究院  
政策研究大学院大学

## 目次

C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト

# 大室政右 オーラルヒストリー

略歴……………4

## 第 1 回

大室家と大國魂神社……………9

幼少時～小学校時代の思い出……………15

明星中学時代と将来の夢……………18

早稲田専門部時代……………22

国民精神総動員中央聯盟に就職……………26

## 第 2 回

精動運動の始まり……………33

第一期―五つの調査委員会……………36

第二期―精動運動の強化……………45

第三期―精動聯盟から精動本部へ……………49

各総理大臣を回顧して……………52

三多摩の地盤争い……………55

## 第 3 回

第一期精動での仕事……………61

婦人向け運動と○○週間……………65

時局認識を促す各種事業……………69

組織の改編―仕事企画課専門に……………74

各省との関係・演説会など……………77

非常時意識の高揚……………82

精動運動を総括して……………88

## 第 4 回

精動本部から大政翼賛会へ……………93

大政翼賛会の推進員に……………97

府中翼賛壮年団……………99

壮年団の活動……………104

戦時下の多摩……………108

第二次世界大戦の開戦……………110

## 第 5 回

翼賛選挙の助っ人に……………117

翼賛政治体制協議会……………123

演説会と情勢視察員……………125

候補者の推薦について……………128

推薦候補者への応援……………130

候補者たちを回顧して……………135

翼協時代のエピソード……………138

## 第 6 回

東京市翼賛市政確立協議会へ……………145

候補者の選考と選挙運動……………148

選挙法と応援活動……………153

海軍民政府へ―任地への出航……………156

浅間丸コレラ事件……………161



## 第 7 回

マカッサル到着	171
情報課の活動	172
マカッサルでの日常生活	174
当時の生活と戦局概観	175
民政部の事業	178
タラカンへ	181
タラカンの軍政と戦局の悪化	185
終戦・抑留・復員	190

## 第 8 回

マーケットの出現——商店街連合会の活動	197
戦後選挙の応援活動	201
戦争をふりかえって	207
都議選出馬と自民党支部長	209
都議一年生	214

## 第 9 回

都議一期目——同和問題・企画総務理事	223
都議二・三期目——幹事長・都知事選	228
都議四期目——都庁移転・長期計画	238
都議五期目——引退	242

## 第 10 回

大國魂神社との関わり	249
府中翼賛壮年団への関与	255
精動時代、輿論調査について	259
精動から大政翼賛会へ	262
都議時代について	264

府中の選挙活動	267
---------	-----

これまでの足跡を顧みて	271
-------------	-----

渡辺美智雄氏との関係	272
------------	-----

国会議員との関係	273
----------	-----

都議会との関係、都知事のことなど	276
------------------	-----

## 資料編

1 国民精神総動員運動加盟団体	281
2 戦後援強化二関シ上申ノ件	
3 各調査委員氏名	
4 実践網組織図	
5 国民精神総動員本部事務局組織概略図	
6 賢沢全廃委員会委員	
7 推進員の報告書	
8 府中翼賛壮年団役員名簿	
9 府中翼賛壮年団昭和一七年度事業報告書	
10 翼賛数へ歌	
11 翼賛政治体制協議会事務局職制	
12 翼賛政治体制協議会名簿	
13 各区委員長に対する内示	
14 情報視察員名簿	
15 東京市会議員選挙運動二関スル協定事項	
16 東京市会議員選挙運動二関スル警告事項	
17 府中翼賛壮年団結成要綱	
18 推進員報道	
19 団運営会見発表会要項	
20 翼賛壮年団二如何ラシテ協力スルカ	
21 翼賛壮年団結成二関スル道府県六大都市組織部長会議々要項	
22 輿論調査に就て	
23 輿論とは	
24 輿論調査に就いて	
25 精動は新政治体制を如何に考ふべきか	
26 部落会と町内会その常会の話(資料)	

## あとがき

# 大室政右（おおむろ・まさえ）略歴

年（元号）	月	事 項
1916（大5）年	10月3日	東京府府中町に、大室市五郎の次男として生まれる
1923（大12）年	4月	府中町立尋常高等小学校入学
1929（昭4）年	4月	明星中学校入学
1934（昭9）年	3月	明星中学校卒業
1937（昭12）年	4月	早稲田大学専門部政経科入学
1938（昭13）年	3月	早稲田大学専門部政経科卒業
1940（昭15）年	11月	国民精神総動員中央聯盟
1941（昭16）年	4月	国民精神総動員本部
1942（昭17）年	11月	同、解散。事務嘱託
1943（昭18）年	10月	大政翼賛会協力会議部
1944（昭19）年	11月	同、辞職
1945（昭20）年	6月	府中町翼賛壮年団結成に尽力
1946（昭21）年	3月	翼賛政治体制協議会
1947（昭22）年	5月	東京市翼賛市政協議会
1948（昭23）年	6月	海軍民政府情報課（セレベス、マカッサル）
1949（昭24）年	7月	ボルネオ民政部タラカン州知事庁
1950（昭25）年	10月	終戦。オーストラリア軍により武装解除、抑留。
1951（昭26）年	7月	内地帰還
1952（昭27）年	4月	（株）しめのうち 代表取締役
1953（昭28）年	4月	宗教法人大國魂神社責任役員
1954（昭29）年	3月	東京小売酒販常務理事（昭和56年3月）
1955（昭30）年	3月	府中市都市計画審議会委員
1956（昭31）年	4月	むさし府中商工会議所三号議員
1957（昭32）年	9月	自民党府中支部長
1958（昭33）年	7月	自民党総裁表彰
1959（昭34）年	7月	都議会議員（1期）

年	月	事 項
1974 (昭49) 年	7月	企画総務委員会理事 昭和47年度各会計決算特別委員 都議会自民党政務調査会副会長(昭和50年7月) 財務主税委員会理事 予算特別委員
1976 (昭51) 年		企画総務委員会副委員長 昭和49年度公営企業会計決算特別委員 武蔵府中法人会顧問 総務都民生活委員会副委員長 都市計画公害委員 昭和50年度各会計決算特別委員会副委員長 予算特別委員
1977 (昭52) 年	7月	都議会議員(2期) 建設労働委員会委員長 予算特別委員 建設清掃委員会委員長 財務主税委員 昭和52年度各会計決算特別委員会理事 予算特別委員会理事 警務消防委員会理事
1980 (昭55) 年	8月	都議会自民党副幹事長(昭和56年7月)
1980 (昭55) 年	10月	むさし府中商工会議所顧問
1981 (昭56) 年	10月	議会運営委員会副委員長
	7月	衛生労働経済委員会理事 予算特別委員会副委員長 東京小売酒販組合理事(平成2年3月) 都議会議員(3期) 建設清掃委員会理事

年	月	事項
1982 (昭57) 年	7 月	都議会自民党幹事長（昭58年8月） 議会運営委員会委員長 住宅港湾委員 総務生活文化委員 昭和57年度各会計決算特別委員 予算特別委員会委員長 都議会議員（4期） 財務主税委員 昭和60年度公営企業会計決算特別委員 総務生活文化委員会理事 総務生活文化委員会副委員長 警務消防委員会 総務生活文化委員 昭和62年度各会計決算特別委員会理事 吊辞起草特別委員 都議会議員（5期） 警務消防委員 平成元年度公営企業会計決算特別委員会理事 賀詞起草特別委員会副会長 平成3年度各会計決算特別委員 賀詞起草特別委員会委員長 政治臨時条例等審査特別委員会 都議会議員を引退。 東京都神社総代会会長 北多摩神社総代会会長 大國魂神社責任役員 伊勢神宮崇敬会常務理事 全国神社総代会理事 などを務める。
1985 (昭60) 年	7 月	
1989 (平1) 年	7 月	
1989 (平1) 年	7 月	
1993 (平5) 年	7 月	
2003 (平16) 年		

# 大室政右 オーラルヒストリー

## 第1回

---

日 時：2002年7月10日（水）

13：30～15：30

場 所：大室政右宅（府中市）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

武田 知己（政策研究院特別研究員）

清水 唯一朗（政策研究院リサーチアシスタント）

## ■ 大室家と大國魂神社

武田 今日第一回目ですので、先生がお生まれになったところから、できれば精動「国民精神総動員本部」の事務局に入られる前ぐらいまでのお話を伺いたいと思います。もちろんお話はたくさんございますので、もし今日で間に合わなければ次回に続けていただいてもよろしいんですが。

大室 どんなお話をしたいかわかりませんが、どうもしゃべり出すと、つい余計なことばかり言うので、どうぞ遠慮なくご指摘ください。実は私も先が短いものですから、家の関係とか店の関係も何か書いておこうと思って、そういう材料はうんと持っているんです。これはみんな一庶民のことですから、ご参考になるかどうかというのは非常に疑問です。ただ、わりあい材料はありまして、よくわかってるんです。

武田 そうですね。先生のご家業のことあたりからお話いただければ、と思います。

大室 もし差し支えなければ、大室というものから話したほうがいいのか。それからお宮との関係にしますか。それでいいですか。

武田 はい、そういう形で結構です。

大室 私はじつは九代目なんです。まあ、百姓だったんでしょうけれども、九代前から始まっているんです。だいたいこれは『府中市史』（府中市一九四一）などに出てくることとよく合うんですが、なんといつても大したことはないんです。

武田 初代の方から府中なんですか。

大室 大室家の分家だったようです。大室本家は墓が残っていて、いまは私どもが継いでおりますが、どういうわけかなくなっちゃったんですね。それで分家のほうが残っております、ちょうど私で九代目になるんです。私は次男ですから、本当は継ぐつもりではなかったんですが、たまたま兄が戦死したものですから、「継ぐこ

とに」なっちゃったんです。

一番最初のころはよくわかりませんが、比留間家という、府中では一番の豪族というか、よそから来て二十何代続いている立派な家があります。「府中市史」にもたくさん出ております。その何代目かの豊郡（とよむれ）という人の五男の五兵衛という人を、生まれてまもなく養子にもらっているんです。私のところの先代は、政右衛門から始まって何代目なんて、ずっとあとのものが書いてるので、それと勘定すると合うんです。

それで文化四「一八〇七」年の「市史」ですが、「宿内緒札書」の中に、「大室市郎右衛門五兵衛より当市郎右衛門まで四代目」とあるんです。それも持ち高はわずかに「六斗四升八合」と書いてあります。六斗四升だったら一俵半じゃないですか。そんな程度です。

それから天保になってからの「宿内宗門人別帳」という調べがあります。それによると妙光院旦那の百姓で、持ち高がこれだけ、と書いてあります。大室市郎右衛門というのはそのとき三十三歳で、倅がなんとか、と書いてあります。ですから、そういうものを合わせると、一番最初は政右衛門とっているようでしたが、市郎右衛門を代々やっている。市郎右衛門なんとか、というようでした。

そしてもう少し下って、四代目か五代目に相模の国から田中丈右衛門という者が養子に来るんですね。これは士族だったらしいんですが、その養子をとったこちらの家付きの娘が二人の息子を産んで亡くなりまして、今度はほかから跡継ぎをもらうわけですね。そうすると、両方とも別々になってしまいますね。その倅に文治郎と勘次郎というのがいたんですが、ここに男三人しかいないですね。若くて亡くなったものだから、嫁をもらうわけですね。それは名前もわかっております。それがのちに、両方とも血筋が違うせいだかなんとか知らないけれども、うまくいったのかいかな

のかわからないんですが、旗本の用人の株を買って、今の文教区だか台東区だかに行っちゃうんですね。だからそれだけの資格はあったんですね。ああいうものは、株で売っていたんでしょう。それが永井土佐守だか佐渡守か何かなんです。

これはのちの話になりますが、私の弟は市原市の教育庁におりまして、だいたい書いたものやなにかあるんです。それを調べたら、そのひいおじいさんだかなんだか、その人が行った先の旗本の領地が「市原に」あったんです。これは偶然だなんて、うちのおやじも言っていました。うちのおやじに言わせると、旗本に行った時に、田畑や山林は売られちゃった、というようなことを言っていました。用人株を買うためだったと思います。

それで関連があるんですが、そこで残された倅の文治郎と勘次郎がいます。一人は養子にやっていますが、文治郎というのは発奮して、いろいろ自分で苦勞してやるらしいんですね。この文治郎の倅に市五郎ができるんですが、その時はもう江戸の末期です。「市五郎は」私のおじいさんになるわけです。その市五郎が小さいときに、出ていったおやじ「文治郎の父」がときどき遊びに戻ってくるんだそうです。来ると、孫「市五郎」を連れて帰っちゃうんだそうです。「文治郎は」それを知っていて、「なんだ、またおやじは倅を連れていきやがった」なんて言っている。けれども、むこうに行くと、子ども「市五郎」は、武士のような丁髷にして、袴か何かをはいている。そして食べるものもお菓子でもなんでも、向こうに行くと違うらしい。それで、「またか、またか」というくらいにちよいちよい来ては連れて行つたらしい。

それでその市五郎は、早くから江戸の内部の様子をよく知っていたんですね。そして利発だったんだろうと思うんですね。市五郎という子どもは、いろいろなことをあとでやっております。この「市五郎の父の」文治郎というのは、そのころ百姓ではあるけれども、甘酒とか白酒を扱っていたと思うんです。白酒というの

は濁酒じゃないかと思うんですね。私どものいまの家にはもうありませんけれども、場所があります。その土蔵の中に穴蔵をつくって、麴をつくったりしていたらしいんですね。その証拠になるらしいものは、明治五年ごろの酒類なんかの領収書がありますから。きっとそうじゃないかと思っています。

そういうことがあって、その市五郎が二十歳のとき、ちょうど明治四、五年になるわけですが、大國魂神社で神仏分離令「習合していたものが分離に」なりますね。あそこにも観音堂があったり、いろんな仏像、国宝なのか重要文化財か知りませんが、鎌倉時代の金仏様なんかがありまして、そういう物を全部取り払ってしまったんです。神社には神官と社僧というのがいるんですね。「社僧」の一部は、神官になりたいものは神官に変えてもいいし、辞めるものは辞めてもいいと思うんですね。

話をすると長くなってしまうんですが、この大國魂神社というのは、五百石を徳川からもらっているわけです。最初のころ、関ヶ原に行く時にも、家康がここで祈願をして行っているわけです。御殿山というのが、いまでは駐車場かなになつて府中本町の駅のところにあります。家康が隠居して駿河に行つて、こちらに秀忠がいたときに、両方が府中のその御殿山に来て、話をしているんです。

これは歴史上の話なんです、そういうことで、五百石もらっていたここ「大國魂神社」の宮司は猿渡（さわた）さんというんですが、これは二十何代と続いているんです。この宮司というのは、要するに五百石の殿様ですよ。家来を持って、やるような感じだったんじゃないかと思う。ですから、徳川の縁をいただいているんですが、後世になりますと、国学者が出たり、勤王党みたいなものが多くなるわけです。あのころでも、歌をうたったりとかありますね。そういう本も出ております。

それで、例のご維新になりまして、一番先に東京へ攻めてきま

すね。東海道、中山道とかいいですね。それで中山道から甲州街道に来るわけです。有栖川宮さんが大将です。そのときに家来を連れて町外れまで迎えに行っているんですね。迎えに行つて、あとで府中へみんな泊まっている時に、「戦勝祈願をいたしましょう」と言ったら、「あとでやるから」といつて断られるんです。有栖川宮さんのほうは、それを用いなかったんです。だけど、自分はそういう志があるという考え方があるものですから、例の神仏分離で分かれた時には、早くからやるんです。日本の中でほうほうでやっていますけれども、一番早いほうだったんじゃないでしょうか。「明治」五年にはもう、すぐにやっている。

ところが、やったのはいいけれども、五百石といつても自分で持っているわけではないでしょう。みんな家来に分けているから、神社としての収入がなくなつて困るわけです。経済も違つてきますしね。そこでその時の何代目かの宮司の容盛―「ひろもり」と読むのか「かたもり」と読むのかわかりませんが―が更正策を考えて、大國魂神社の門前に町を作るんです。

「図を描く」、「図1」参照」いまは大國魂神社は、鳥居があつて、本殿がありますが、こここのところ「鳥居の前、甲州街道沿いの部分（図1の①）」に門前の町といいますが、小さな店屋をつくつて、商売をしようとするんです。それが明治五年ごろのことです。構想は明治五年ですけれども、実際にやったことについては、書いたものがあります「『幻の門前町』を出す」。これは大雑把なものです、あとでごらんください。

その構想をいろいろと町の人と相談して、宮司がいちばん目をつけたのが、いまの大室市五郎なんです。大室市五郎というのは都内のこともよく知っているし、新しいこともよく知っているし、また非常によく働いたらしいんですね。百姓もやりながら、いろいろなことをやっていたんですね。そのころの文献をみると、人の田んぼを借りてやっているわけです。お盆と暮れの節季勘定で、

一回に借りている耕作料として二分（にぶ）ぐらいずつ払っているんです。二分というのは、非常に多いそうですね。

武田 かなり利益もあつたんでしょうね。

大室 そういうことが考えられます。それも、いくつも借りているんです。宮司の畑だとか、神主の畑だとか、地主の土地を借りている。一人でそんなにできないのに。そうしたら、その米を麴にして、白酒だの甘酒をやっていたんです。それをやると合うんですね。自分の家族が少ないのに、女房をもらつても田んぼがそんなにできるわけではないでしょう。だから、誰かにやつてもらったんですね。その市五郎のおやじが文治郎ですね。この文治郎というのは、甘酒を売ったりしていたので「甘文（あまぶん）」なんて言われていた。これが苦労した。おやじがいなくなつたせいだと思うんですが、親分みたいにならずにぶん働くんですね。

その息子の市五郎が、いま言つたように江戸のほうにしょっちゅう行つていたので、新知識を知っている。もちろんお宮にも出入りをしていただろうと思います。それをこの人「宮司の容盛」が認めて、おやじではなくて倅の市五郎を使って、休憩所、休み所をやらせた。いままではお茶とお菓子ぐらいしか出さなかつたところで、食べるものもやつてもいいし、飲み物もやつてもいいからといって、やらせるわけです。そういう資料は現在でもたくさんあります。

府中で八つのお神輿がありますが、一宮、二宮というのは、昔はみんな遠くから来るんです。いまでも来ます。そのうちの二宮に、休み所みたいなものがあつたんです。これは境内の中にあつて、八幡町という町内の人が持っているんですが、その建物を大室市五郎が百円で買うんです。わりあいに大きな建物ですが、ちやんとした家ではないんです。お祭りの時に休憩するところですから。それは、勝手に買つたりはできない。それはみんなこれ「宮司の容盛」がやつたんだらうと思う。大室市五郎に対してこ



れを売るといような書類はみんなあります。田中なんとかという人が売っているんですが、証人をつけてちゃんとやっています。境内の中で借りてやっているわけですね。お祭りに関係する建物だからよかつたんだけれど、それを売ったり買ったりすることとは、ちよつとわれわれは不思議だつたんですね。それも高いんです。「百両」と書いてあつたから、明治五年で百両ということと相当なものです。

武田 大金ですね。建物は、どのくらいの広さなんですか。

大室 それはちよつとここではわかりませんが、何か細長いものですね、ちゃんとした建物じゃない。それを直して使うんですね。それを起点にして、こちら側とこちら側へ「鳥居の右側と左側に」やるんです。それが最初のころの話で、本当にこれ「門前町」ができるのは、それから五年ぐらいかかるんです。これは地所もみんなお宮です。ですから、大室市五郎がこのくらい借りて、その次に秋元さんが借りて、その次に誰かが借りる。元神官の鹿島田さんという人も借りて、辞めてから、生糸の糸繰りというんでしょうか、大きく長いものがありますね。そういうことをここでやっていたんですが、その人はすぐに引き揚げました。

それで、正式に両方に「鳥居の両側にいくつもの店が」できたのが、明治十一年ごろです。そのとき、市五郎はいろいろなことをやっている。それまではお茶とお菓子とおでんぐらいだったんでしょうが、本格的にやらせて、酒も売れば、飯も食わせるということをやつたらしい。ただしここは住まいを持つてはいけなから、みんな通いで来るわけです。

自宅はいまの宮町の三丁目になります。約四百坪で、敷付きといつて竹藪があつたんです。そんな大きなものではないんですが「長方形の図を描く」、ここ「長方形の左上」に竹藪があつて、ここ「長方形のほぼ真ん中」に母屋があつて、ここ「母屋の左」に土蔵があつて、ここ「長方形の左下」に貸家があつて、あとで

は貸していましたが、こういうものだったんです。

武田 四百坪といつたら広いんじゃないですか。

大室 そういうことを大室市五郎というのが、ずいぶんやりました。それが明治四十年まで続くんです。これはいろいろ変遷がございます。それから、今度はここ「現在交番のある位置」に警察が来たりするんですね。

武田 それは面白いですね。本当に町ができていくんですね。

大室 ええ。むかし府中に警察があつて、それが神奈川県になったり、品川県になったり、いろいろするでしょう。それで最後に東京府になるんです。三多摩にいろいろあつたとき、神奈川県時代に、ここに警察の分署ができるんです。前に屯所（警察の）みたいなものはあるんですけれども、分署ができて、その分署の写真なんかもあるけれど、最初のものはきわめて珍しい建物です。ただ、小さいものですから、すぐ大きくするんですが。

これをやったことについて、一番内容的にも商売もよかつたんでしょう。繁盛したようでした。これをやったのが大室市五郎といつて、私どものおじいさんになるわけです。

境内の中の店の屋号を「注連内（しめのうち）」というんです。注連縄（しめなわ）の中にあつたから。あとから、私の父ぐらいのときになると、「之」を入れて「注連之内」にした。私どもが跡を継いでやつた時には、「ちゅうれんのうち」だとか、「しのうち」さんだとか、「メノウチ」さんだとか言われた。注連縄というのがなかなか読めないんですね。それで私の代になつてから、「しめのうち」とひらがなにしました。それから略字では「メの内」を使つたり、蕎麦屋のほうでは「志免乃内」を使つたりしました。いろいろ使つておりますけれども、この「注連内」という屋号も容盛さんがつけたらしいですね。この「しめのうち」も現今ではあやしくなつてきましたけれどもね。

武田 府中には、もうお酒屋さんとかはないんですか。

**大室** そのころは明治になっていたので、製造家もありましたし、野口酒造店もありましたね。

**武田** 野口というのは、銘柄は「國府鶴」ですか。

**大室** そうです。それは明治になってからですね。

**武田** じゃあ、もう最初のころなんですね。

**大室** ここは酒屋で、つくっているわけではなくて、売っているわけです。最初の大室市五郎がやっていたのは白酒といって、これは「比留間日記」にも、毎年買った、とかいろいろ出てきますが、白酒というのは濁酒のことだと思っんですね。ふだんは甘酒をやっていたけれど、麴でやりますから、昔のやり方ですね。

縁日とかお祭りがありますね。昔から御酉様とか、大國魂神社ですと、一月はお正月で七日ぐらいまで賑やかですね。その次に節分があるわけです。五月は大きな大祭です。昔から何万どころではなくて、十万人以上来ていたと思うんですね。ほうぼうから来る。武蔵国の総社だから。その次の七月になりますと、二十日の日に「すもも祭り」というのがある。それから八月一日には「相撲祭り」というのがある。これが昔は非常に盛大だった。あの時代はあまりなかったでしょう。素人相撲ですね。賞品がもらえたりするものだから、近郷近在、ほうぼうから来る。それが八月一日です。それで九月はあまりなかったんですが、いまは献灯祭という「栗祭り」があります。これはあとになってからできました。いまそれは、私の担当でやっています。その次にあるのが、御酉様の酉の市です。これも明治の何年ごろかに、いまの大室市五郎が年をとってから、ほかにあった神社をこっちに持って来て、一緒にやっているんですね。

神社の関係では、そういう意味で、いろいろご厄介になったり、ずいぶん働いてもおります。いろいろ面倒をみたり、寄付したりしている。大きなものはできませんけれどね。神社との関係は、この「注連内」をいただいたということですが、明治二十三年に

大國魂神社が官幣小社になるんです（※1）。東京府になりましたからね。官幣小社になると、今度は内務省の管轄なんです。全国にそういうところがたくさんあったらしいんです。それで、民間でやっているものは全部外へ出ろ、返しなさいということで、三十何年ごろに達しが出るんです。それで、四、五年待ってもらって、これ「門前町」を全部取り払って、四十年にやっと全部返還した。それでいま明治生命があるあたりに縦に場所を買って、そっちに移ったんです。

**武田** だいたいこの門前町ごと、そこに移ったんですか。

**大室** それは全部、それぞれが別々にです。

**武田** そのとき市五郎さんは、まだご存命ですね。

**大室** ええ。大正八年か六年に亡くなっていますから、それをやっていますね。店の話になりますが、こっちへ移してから、なかなかそのころとしては新しいこともやっています。そのころ、ビールを扱ったり、ウイスキーを扱うというのは、なかなかなかったでしょう。

**清水** 早いですね。

**大室** そのころ、売っていたみたいなんです。

**武田** それはつくったんですか。

**大室** いやいや、みな仕入れてきた。酒もそうですしね。

**武田** ビールというのは、そのころ日本でつくっていたんですかね。

**大室** わりあい早くキリンとかサッポロとかアサヒとか知らなけれども、あるんですね。ただし昔は、われわれの時もそうでしたが、ビールというのは箱に一ダースなんです。このくらい「二メートル×四〇センチぐらい」の、こんなに「二―三センチ指を開く」厚い杉の板でできていて、「ビールは」苞（つと）という藁でつくったものでかぶせて、半ダースずつ、「二列に」入っている。大きい箱は二ダースだったかな。それは「二列」一ダ

イスずつ入っている。いまみたいにビールも普通にはない貴重品だったんです。だから壊れないように、こんなに厚い杉の板の中に入れて、真ん中に仕切りがあつて、あれは二ダース入っていたのかな、一ダースずつ互い違いに入っていた。

清水 横置きなんですか。縦置きではないんですか。

大室 横にね。苞(つと)という麦わらがかぶさっている。いまはビールか何かでありますね。ああいうようなものを藁でつくっていた。第一、箱がもう立派なものでしたからね。私どもは、ここから退いたところに、ここに来て家を造るんですが、最初のうちは、多摩川の向こう側の関戸にいい松の木があるなんていうんで、それを持って来た。そのためにわざわざ飯橋を造つて曳いてきたなんていうことがあつた。そのうちだんだんやつていくうちに、金もなくなつてきたので、ビールの箱がこんなに厚いので、後の廊下はみんなそれでつくつた。こんな渡り廊下じゃないけれど。古くなつてきても、まだきれいでしょう。家を壊したときに裏を見ると、「〇〇麦酒」なんて印刷してあるんです。

だから、それはいろいろやりました。その市五郎もそうですが、甘文という人が、おやじさんがいなくなつたので発奮したのか、ずいぶんいろいろなことをやっているようですね。これはいま言つたように、甘酒だか白酒をやつていたんですね。

それから私のおやじの代になり、いろいろやつていましたが、どちらかというとわれわれのほうは庶民派なんです。だから、人の面倒見はともいいんです。ですから、すぐ前に大きな金持ちの薬屋さんなんかありました。その旦那さんが亡くなつても、お葬式に来るのは二百人以下ですね。大室市五郎の長男というのは、十九才の若くして死ぬんですけれども、お通夜だけでも二百五十人ぐらいのお膳を出しているんです。その代わり安い香典で、高いのはないんです。そういう帳面もありますからね。だからどちらかというと人の面倒見がいい方だった。

その次に、市五郎の息子はたくさんいたんですが、長男が庄太郎でいま「葬式の話をした」亡くなつた人なんです。その次男が幸次郎で、のちに幸次郎改め市五郎という名前になりますが、これが私のおやじなんです。

武田 お父様は次男なんですね。

大室 ええ。商人としては、なかなか名物的にやったことになる。ところが、このころ、奚疑塾(けいぎじゅく)なんていう塾があるんです。いまの高等学校ぐらいなのが行っているんですが。それから小学校なんかの免状なんかもみな残っておりますけれども、いい加減なもんですね。そのころは「幸二郎」になつたりしている。卒業証書というのは、毎年出すんです。どれが本当かなと思うくらいに、昔は「名前の文字について」いい加減なものだなと思つたんです。

よくわからないんですが、養子にきた田中丈右衛門という人は、最初に申し上げましたように旗本の用人なんかをやっていたのに、結局、最後に亡くなった時は、やはりここで葬式をしたのか。その女房も明治の中頃に死んでいます。みんなうちから出してやつていそうですね。やはり同じように面倒を見ていたんでしょう。

武田 お父様、幸次郎さんは塾に通われたんですね。

大室 ええ。奚疑塾という。

武田 これは府中であつた塾ですか。

大室 これは、いまでは稲城市になつた大丸の近くです。これも書にありますけれども、窪全亮(くぼぜんりょう)という人で、このへんからずいぶん行っています。なかなかこのへんでは有名な塾なんです。尋常高等小学校というのが後からできますが、それより上ですね。特に最初の市五郎が、学問を奨めてみんなにやらせたりなんかしているのは、新しい知識があつたからです。みんなその奚疑塾へ行つて書をやつたりするから、全国で入賞するとかしている。それから、今も言つた長男の庄太郎がまたおか

しくて、庄治郎になったり庄太郎になったりしている。こつちも「庄ちゃん、庄ちゃん」というのを聞いているんでね。これは天才だったらしい。優秀だったという。「庄太郎」書いたりしたいろいろ写本なんかを見ていると、やはり立派なものですね。

いずれにしても、一町人で、ただ、人のことをやるのが私のところの家系だというのは、そこじゃないでしょうか。人の面倒を見る。いまは、わりあい違ってきましたけれど、昔はいろいろありましたね。人がみんなそこへ集まったり、人の世話をしたりする。庶民ですね。

**武田** 親分肌の人なんです。

**大室** それが一族ばかりではない。私の女房の家は調布なんです。同じ様に面倒見がよい。いま来ましたの「お茶を運んでくださった方」が長男の嫁なんです。その家が、さっき言った「國府鶴」の家なんです。そういうことが、やっぱりあるんですね。

## ■ 幼少時〜小学校時代の思い出

**武田** では、そろそろ先生のお生まれのころのお話でよろしいですか。先生は大正五「一九一六」年にお生まれになるわけですね。ちようど私の弟と同じ誕生日で、十月三日にお生まれですね。ちようどこの「いまインタビューをしている」お宅でお生まれになったわけですか。

**大室** ここではなくて、「明治」四十年に移りましたから。「図」を描く、「図1」参照。これが甲州街道で、ここにお宮がありますね。そして、このへん「図1の②の部分」に私の家、店があったんです。いまの住まいはここ「図1の（現在の大室宅）」です。これが交番です。「私が生まれた家は」このへん「図1の②」にあります。いま再開発になってよくわかりませんが、裏側の道があったところまで、みんなこういうふう「縦に長く」、

隣の人も持っていたんです。これを「明治」四十年より前に買っているんです。

**武田** では、そこにお住まいになっていたわけですか。

**大室** ええ。「明治」四十年にここに来ていますから。

**清水** 門前から移動されたんですね。

**大室** 昔、ここ「門前」にいた時は、最初は住まいをさせないんです。全部させないんだけど、途中からいいだろうということになった。というのは泥棒が入ったりするでしょう。品物だつてあるものだから、まあいいだろうということになった。ただし葬式は出しちゃいけないという。たいていここ「門前」に入つていった人は、もともと自分の家を持っていた人なんです。洋服屋さんが出たり。そのころは洋服屋というのは珍しいんですけれどもね。判子屋とか。たいてい食料品屋、漬物屋、魚屋、八百屋というのはあるんですが、いろいろやつていた。こちらに「明治」四十年にきました。私のおやじが結婚したのは大正になってからでしょうからね。だからこちらへ来てからですね、きつと。

**武田** そのころは酒屋さんをやられているわけですね。

**大室** 面白いのは、酒屋と蕎麦屋とをやっているんです「図を描く」、「図2」参照。これが甲州街道だとしますと、このへん「道路から入口を入って左」で缶詰を売っていた。そのころは缶詰を売っている人はあまりいない。缶詰だの乾物だの、鰹節だのやつていたわけですね。真ん中の土間のところにテーブルかなにかを置いて、蕎麦をやっていた。二階にも昇つて行ける。

それから、こつち「入口を入って右」が酒屋なんです。酒樽だの醤油樽が置いてある。ここ「真ん中」から入っていくけれども、こつち「中央の蕎麦屋」にも行けるし、こつち「右の酒屋」にも行けるといふ店だったんです。昔の家ですから、間口は六間ぐらいあったでしょう。

**武田** 大きいですね。住居はどこだったんですか。このお店の裏

とかになるんですか。

大室 「図を描く、【図2】参照」この廊下はビールの箱でつくってあったんですけれども、ここにトイレがあつて、ここに部屋が三つあつて、ここから二階へ上がるところがあつて、ここ「部屋③の手前」が帳場です。

武田 本当に昔ながらの家ですね。

大室 ここに小さな部屋があつて、ここが土間で、こつちが酒屋で四斗樽がいくつも置いてあつた。このところがテーブルで、蕎麦屋だったんですね。だから、われわれがたいいていいるのは、ここかここ「図2の部屋①か部屋②」なんですね。

武田 先生のお父さん、お母さんは、朝早く起きて、準備をして、よる遅くまで――。

大室 このころ私のところは大所帯なんです。最低でも十五人ぐらいいました。

武田 使用人がいたんですね。

大室 使用人の男の子、女の子を使っていましたからね。私のところが十五人になった時は、ずいぶん少なくなったなと子どもの時に思いました。たいてい二十人ぐらいいたんじゃないですか。

武田 みんなここに住んでいるんですか。

大室 中二階、二階がありましたからね。だから、家族はだいたいいことここ「図2の部屋①と部屋②」に住んでいて、使用人がここ「図2の部屋③」に住んで、ここに中二階「図2の中2階」があつて、女の子が寝ていたようですね。それで、二階もちょうど三つの部屋になっていたんです。十畳が三つだったかな。

武田 先生のご兄弟も多かったんですか。

大室 ええ、兄弟も多いですね。

武田 それじゃあ、もう毎日賑やかですね。

大室 だから、子どもを入れて二十人だと思えますけれどね。もう、いつも多かった。だけど、そんなに金持ちでもなければ裕福

でもない。

武田 でも、これだけ店が大きければ。

大室 それだけ無理しているということはないだろうけれど。われわれが学校へ行く時もそうでしょうけれども。私は、中学は私立の明星中学校へ行つたんですが、兄貴は早くから商売の跡を継ぐというので、渋谷のほうにあつた府立第一商業に行つた。それも夜間だったんですね。上の学校へ行く時に、自分は見習いをするからといって、親戚の間屋さんを回ったりしていた。私も行つたんだけれども、私も専門学校しか出ていないでしょう。やつているともう少し勉強したくなつて「上の学校に」行こうと思つたけれど、家のことを考えると、そうもできないなと思ひましたね。苦しくはないけれど、景気もいろいろでしたからね。昭和の初期は景気が悪かつたでしょう。

武田 先生はだいたい何歳ぐらいからご記憶がありますか。

大室 そうですね。「小学」一年生の時に大震災でした。

武田 このへんも大変でしたか。

大室 燃えたりはしなかつたけれど、それはいまでもよく覚えています。

武田 お店なんかは、倒れましたか。

大室 店は倒れたりしなかつた。これはしつかりした店ですから。だけど、あとでみると、真ん中の柱も一尺ぐらいズレてしましました。あとでずいぶん直したんですけれどもね。あとといつても、ずっとあとになつてからです。ただ、倒れるようなことはなかつた。でも瓦は落ちるし、道路も歩けないくらいだった。ここでは土蔵が一軒倒れただけで、あとはそういうことはなかつた。しかし、それはいまでもよく覚えています。大変なものだった。

武田 あれはお昼ぐらいでしたね。

大室 昼だった。

武田 先生は学校にいらつしやつたんですか。

大室 九月一日というのは二学期の始まりなんです。それで、帰

ってくるでしょう。帰ってくると遊び場に行くわけです。「図を描く、【図1】参照」。ここ「大國魂神社の右側」が櫓並木なんです。ここ「甲州街道の図の下側」にずっと家があって、私のところも、これから五、六軒目。足袋屋さんの裏へ行きますと土蔵があつて、そこにちよつと空き地があつたんです。みんなここへ集まるわけです。それで急いで行つていたんですが、まだ人が来ないうちにぐらぐらと始まつた。その大きな土蔵の扉はこんなに「三十センチぐらい手を開く」厚いんですよ。それはふだん開けてあるんですが、それがボタン、ボタンとなるんですね。それで土蔵というのは、みんなどういふわけだか丸太やなにかが、何に使うんだか吊してあるんです。いまでも田舎へ行くとありますが、それがごろごろ落ちてくる。あの時は、私は不思議でしうがない、一年生の時なのに、これが天地開明だ、という印象を持った。それは空を見ると、何か舞つていふように飛んでいる。

それでまた「揺れている時間が」短くなつたでしょう。柿の木があつたので、その柿の木にみんなつかまつている。最初のうちは大人が出てきても、声なんか出ないですよ。みんなそれぞれ自分のことで必死でした。それはいまでもよく覚えていますね。ここにあつた家の人が、子どもの名を呼んで騒いでいた。そのうちに、この母屋の、足袋屋さんをやっていた土蔵を持っている人が出てきてギヤーギヤー言つていたけれども、みんな人間の声が出なくなるんです。

やつと「表の道に」出てきてみたら、道路がいろいろなものでいっぱい、歩けないくらいなんです。うちのおふくろも子供達心配で表へ出て来ていた。こどもが大勢いたけれど、みんなあちこちに行つていたものだからね。学校は府中の第一小学校でした。これは第一学年の、東京府北多摩郡府中町府中尋常高等小学校の賞状ですね「賞状を入れたファイルを示す」。昔は一等、

二等なんていうんですね。

武田 二等ですね。

大室 一年生ですから、一等も二等もないんだけど。これも二等だ。どうも私はいつも二等だった。こういう賞状を一年ごとにくれたんですよ。「小学校一年から、六年までの賞状を見せる。」「二等 本学年間ノ成績優秀ナルコトヲ證ス」などと記されている」

武田 府中にはいくつ小学校があつたんですか。

大室 この時は一つなんです。一つだから、大きな学校のようにだつた。生徒が多い。いまの市役所のところにありました。府中尋常高等小学校というのがひとつだつた。尋常科はあるけれど、高等小学校というのはあまりないから、近郷の人も、西府村の人も幾人か来ていました。そのうち、みんなやるようになりましたね。

武田 そのころの小学校はクラスは何人ぐらいですか。

大室 五十人ぐらいですね。それでわれわれの時には、男子組と女子組と男女組と三つありました。

武田 それが普通なんですかね。

大室 その時の校歌で、「生徒一千三百余」なんて歌つていたんです。最初は一千三百ではなかつたけれど、人数が増えるたびに、「歌詞の」そこだけを増やすんです。みんな歌うといういろいろあるけれども、われわれが覚えているのは一千三百が多いから、そのくらいいたんじゃないかと思ひます。だから多かつたんですね。約一万近い人口で、一小学校しかなかつたんですから。

武田 先生は得意な教科とありましたか。

大室 わりあい国語なんか得意だつた。地歴・算数もね。理科系はあまりなかつたけれど、私は理科系が全然駄目でした。小学校の時にはね。

余談になりますが、むかしは大勢いるでしょう。私はいまでもやつているけれど、正月になるとカルタなんかやるでしょう。みんなで大勢集まつて、店の者なんかも入れて、百人一首をやる。

昔の百人一首は変体仮名で書いてある。それを子どもでも覚えちゃうわけです。ですから小学校へ上がって、一冊の教科書なんかも丸暗記できるんですね。「ハナ ハト マメ マス」なんて、いまでも言えますからね。だから、一年の時は本当にまいりましたよ。

武田 簡単だったんですね。

大室 ただ、私は二等というからではないけれど、長男がまた大物でしてね。二つしか違わないんですが、子どもの面倒をみる。兄弟喧嘩はしても、私は殴られたことがない。いつも、何かのときはかばってくれる。ですから二番目は、かえって好きだったですね。ね。小学校はいまの役所のところにあつたので、すぐ近くでしたからね。みんなわりあい仲良くやっていましたよ。われわれは男子組だったんです。女子組というのは女子ばかりです。男女共同組になかなか優秀なのがいきましたね。

武田 はあ、なんだろう。じゃあご兄弟はみんな第一小学校に通われたんですか。

大室 そうです。小学校はそうです。ほとんどそこですね。私が卒業してから、昭和十年に現在の第一小学校に移ったわけです。人が入りきれないので、新しくできたんです。

## ■明星中学時代と将来の夢

武田 それで中学が明星中学ですね。そのころはどこにあつたんですか。

大室 明星中学は府中にあつたんです。

武田 いまも府中にあるのかな。

大室 ありますよ。いま明星学苑といっていますね。児玉九十という有名な校長がいました。私立の中でも第一人者です。亡くなってしまうって残念ですが。

武田 明星に行かれたのどういう経緯だったんですか。

大室 それは私のおやじが町にいましたから、校長先生を知っていて、「あの学校はいい学校だから、おまえあそこへに入りなさい」と。それに「私学でなければだめだ」とも言ったんですよ。試験前明星は行った人がみんな、雰囲気がいいという。平屋で、前に芝生なんかあつて非常に感じがいいという。誰かがキリスト教じゃないかというような話をしたんですが、そうじゃないんです。ところが中にキリスト教の人がいたものだから、みんなが「われわれはアーメンと言わなければいけないかな」なんていう人がいたんですがね。実際にはそういう学校ではなかったんです。そのころけっこう競争率があつたんですけれども、割合入学試験の成績はよかった。ところがそのころから私は野球を覚えましてね。

武田 そうですか。私も野球少年でした。

大室 子どもの野球をやっていた。急に「野球に対する」熱が出ちゃったんですね。中学へ行つてからもずっとやって、子どもの野球でライオンクラブというのをつくった。私とさつき言った比留間さんという私より一つ上の人、これはクリスチャンなんですけれども、その人と二人で、監督、オーナー、コーチといろいろ兼任しているようなものですね。夏ですと、小遣いを持ちだしては、みんなに氷水を飲ませたりしていました。馬鹿に野球が好きになって、勉強をおろそかにしちゃったんです。それでも、まあ普通のことをやらせていただいた。

武田 先生の小学校の同級生で、明星と一緒にいった方はけっこういらつしやったんですか。

大室 そういえば、ほとんど死んでしまいましたね。その時に行ったのは一人。もう年ですからね。

武田 明星というのは、そのころ有名な学校だったんですか。

大室 それはもうー。ヒューマンタッチの教育というんですね。

児玉先生は、歴史上で調べただけの方です。成蹊学園の教頭か何かをやっていた児玉先生の教育がいいというので、星野鏡三郎という鉄道関係の会社をやっている人を見込んだんですね。その人の住まいは伊豆の伊東です。鉄道建設の特殊な技術を持っていたんじゃないですか。その方が「児玉氏を」見込んで、一切を任せて、金だけ出して、とやかく言わないで、その先生にやらせたんですね。最初は明星実務学校といていた。それから中学校になりました（※2）。そのころは、定員がクラスで四十名です。そのころはそれ「少人数」でやれたんですね。全部で二百名いないんですから。

武田 ご兄弟の中で明星に行ったのは、先生だけですか。

大室 兄貴は行きませんでした。商業学校に行ったから。弟が二人行きました。私は九人兄弟でしたから。その弟は二人とも、もう死んでしまいました。一人が、さっき言ったように、のちに兵隊で千葉のほうへ行って、そこに居着いてしまった。資格を持っていたものですから、小学校の先生をやったり中学の先生をやるとかいって、それから教育委員会に引つ張られた。地方史については相当よく調べたようです。市原市の教育委員会にいろいろとまとめたものがあります。

武田 明星のときの思い出は、やはり野球になりますか。

大室 野球もありますが、明星はマナーがいい。一番の欠点は、学問的な競争をあまりしなかったということです。優秀なやつもいましたけれど、そういう競争をしないで、人間形成が主だったようです。だからずいぶんいろいろなことをやりました。明星に行って一番喜んだのは、旅行が春夏二回あることです。

武田 遠足みたいなものですか、修学旅行みたいなものですか。

大室 修学旅行が春夏で、それも全校生徒で行くんです。そのあいだに、ふた月にいっぺんぐらい遠足があるんです。

清水 修学旅行はどちらに行かれたんですか。

大室 最初に行った時は、春は犬吠埼でした。その次は伊豆でした。いっぺん夜、道を間違えたことがある。たいていは、どこを見るとかちゃんと「目的が」ありますね。あまり遠くへは行きませんでした。いろいろなところに行きました。日光も、足尾から日光に行ったりしましたね。ずいぶん昔ですから、山越えをしました。そのころ、われわれの仲間にもいましたが、ハワイとかカナダから留学生が来ているんです。クラスには、カナダから来ているのと、ハワイから来ているのがいました。それこそ、いろいろなことを聞いて親しくなりました。

武田 留学生というのは、一緒に勉強するわけですか。

大室 同じように「勉強する」。それから寄宿舎がありましたから、そこへ泊まっていました。

清水 「留学生は」日系の方ではなくて、外国人なんですか。

大室 いや、どちらも日系です。コバヤシとか、日本名でしたからね。

清水 それでは日本語で普通に授業ができるような感じなんですね。

大室 ええ。

武田 アジアからの留学生もいらっしゃいましたか。

大室 そのころはいないですね。

武田 先生がいらっしゃったのは何年ぐらいになるのかな、昭和五、六年ですか。

清水 明星に入られたのは何年ぐらいですか。

武田 あとで先生の年表を作るときに、年代が必要になるんです。大室 昭和四年に明星に入ったんですね。それで「昭和」八年か九年に卒業しているんだな。

武田 じゃあちょうど先生が中学にいらっしゃったころは、満州事変とか、そのへんの時代ですね。

大室 早稲田に入ったのが九年ですから、「明星は」九年に卒業で



すね。

**武田** 明星中学にはどうやって通われていたんですか。

**大室** それは歩いて行っただけ。一五〇〇メートルぐらいですから。バスもありますけれど、よほどのときでなければ乗ってはいかないということ、みんな歩いて行きました。明星というのは、そのころ雪が降りますと、周りに野ウサギが出たりしましたね。ウサギ狩りをやって、取ったことはないけれど、追いかけて回したことがありますよ。

**清水** いま少しお話が出ましたが、中学にいらっしやったところ、時局が戦争の方向に向かっていくわけですが、どうお感じになりましたか。

**大室** 児玉先生というのはいろいろなことを知っていらっしやる方でしたが、あまり時局めいた話はしなかった。その中での一つの思い出は、そのころ学校で軍事教練をやるでしょう。その正式な教官は現役の中佐か少佐が来るんですが、補助教官が山本という准尉、昔は特務曹長といった人ですね。その山本という少尉が、「二・二六事件に関連した行動をとっています。山本又「文字を書く」というんです。いい人でしたね。私はついていかなかったけれど、甲府にある身延山は日蓮宗ですか、希望する生徒を連れて、歩いて行ったりしたんですね。何人かついて行った人がいたけれどね。山本又さんは、直接は関係しなかったけれど、辞表を出して辞めているんですね。この人がいたので、何かありましたね。

**二・二六事件** というのは雪が降っていたでしょう。明るく日には、白い腕章を着けた兵隊が、車で来たのか。私の家の隣は、煙草だとか砂糖だとかを売っている村田屋さんで、その番頭は元兵隊だった人です。それで雪が降って、店で掃除をしているでしょう。その兵隊の部下だった人が来たんですね。「どうしたんだ」と言ったら、何か「やった、やった」ということで、意気込んでいました。そうしたら、それは山本又先生の辞表を学校に届けに

来たんです。

**武田** それは明星のときでしょうか。

**大室** あれ、明星じゃないな。もう早稲田ですね。二・二六事件のときは、その日に私どもは陸軍省まで行っただけですよ。大雪が降っていて、学校に行って、試験前でみんないたんですね。「見に行こう」と言ったら、中には、「いやそれどころじゃない、勉強だ」なんて言うやつもいましたけれどね。二、三人で見に行っただ。途中まで市電が通っていたけれど、そのうち市電なんかなかった。長靴を履いていたから、歩いて桜田門のところから警視庁の前に来たら、そのころもう兵隊が出ていたんですね。海軍省の方はそうでもなかったけれど、陸軍省の前ぐらいに行ったら、こうやられちゃって「押し戻されて」、帰って来たんですね。帰りが困った。それから高田馬場まで歩くのはずいぶん大変でしたよ。

**清水** 学校に戻られたんですね。

**大室** いっぱい戻って、いろいろな話をしたんですね。あのときの印象は、あのころはラジオしかありません。ラジオが全国にいろいろなことを言って、そのうち戒厳令が出たりした。いろいろな話がありました。例の「兵に告ぐ」というのは非常にいい録音でしたね。何かあのころは、日本中がシーンとしたような気がしましたよ。別に聞こえるわけではないでしょうが、全国がシーンとしたような感じでした。戒厳司令官の香椎「浩平」さんという人もなかなか立派な方でした。その香椎さんに、今度は翼協「翼賛政治体制協議会」の選挙のときずいぶん助けてもらっているんです。

**武田** 先生は中学生ぐらいのときから、将来何かこういう職業に就きたいとか思われていましたか。

**大室** 今だから申しあげていますが、中学校の卒業式のときに、みんなで寄せ書きをしたりするでしょう。私もニックネームなんかで言われていて、みんなで喧嘩をしながらやっていたんですが、そ

の時に「日比谷座で会いましょう」と書いています。わかりますか。

武田 わからないですね。

大室 国会が日比谷にあったので、中でこんなこと「騒動」をやっているのを、「日比谷座」といつていたんだ。

武田 初めて聞きました。

大室 卒業アルバムが何かを見れば、書いたものがあるんです。そのころはそういう関心があったんじゃないですかね。それからおやじが非常に「政治に」関心があるから、選挙なんかがあると、夜遅くでも朝早くでも、みんなで放送を聞いているわけです。だからそのころの国会議員の名前はたいてい知っていましたよ。そういう関心があったんでしょうね。

清水 お父様が、このあたりの選挙かでどなたかを応援されていたとか、そういうことはありますか。

大室 それはありましたね。いろいろやっていました。

清水 例えばどんな方のお名前がご記憶にございますか。

大室 その時の国会議員の、このへんの人ですね。一番先は中村亨「字を書く」という調布の人なんです。戦後は栗山長次郎、津雲國利さん等。中村さんは一回当選するんですが、山林を売ってうんと金が多かったという人に推薦を奪われてしまう。その内幕は、おやじが書いたものを持っているんだけど、いっぺんそれを出したいと思っているんですけれどね。これは面白いんですよ。ここは北多摩郡でしょう。その称名寺に有志が集まって相談するんですよ。それでだいたいこの人「中村亨氏」に決めた、現職だから。ところがその時に諸江といったかな、その人が東村山だったかの山林か何かを売って、十万円入っているんだ。これは有名で、みんなが知っている。そのころの十万円というのは大変らしいですよ。

武田 この中村さんは何系ですか。

大室 政友系ではないですか。みんなそうなんです。みんな集ま

ってきて、それをやったところが、ほとんどこれ「中村氏」がいいたい言いながら、これはあまり金を持っていないものだから、こつち「諸江氏」に乗り換えた。そのために、うちのおやじなんか、握り飯を持って、草鞋履きでほうほうを回っていましたよ。私も調布でやったときに聞きにいったけれど、聞いている人がみんな涙をこぼしている。人数は百人かそこらでね。

清水 演説会ですか。

大室 演説会です。この人「諸江氏」のために大選挙違反が起ったわけだ。ほとんど捕まったんだ。

武田 お父様は、中村さんのほうの応援なんですね。

大室 そう。

武田 今でいう後援会長みたいなものですか。

大室 いやそういうことではなくて、武内武兵衛という調布の人。これは年配の人でしたが、ほとんど二人か三人ぐらいで、朝早くから、おふくろが作ったこんなに大きな握り飯を三つぐらい持っていて、それを一食に一つぐらい食べていたんじゃないかな。それで南多摩の方面に行った。そのころは三多摩は一緒ですから、大変なんです。

清水 選挙区が大きいですからね。

大室 だからそういう影響が多少はあったかもしれないね。

武田 そうでしょうね。中学のときなどには、新聞もよく読まれましたか。

大室 それは読んでいました。だからそういう常識的なことをわりあいよく知っているんです。要するに、野次馬的な話ではなくて、ちゃんとした話はわりあいによく知っていたほうじゃないでしょうか。われわれの仲間でも、そのころ俳句をつくったりしていた。仲間同士でいくつかがやって、俳句を作って新聞に載せてもらって、よく見たら名前が合っているけれど、中味が全然違う（笑）。添削が多くてね。

武田 好きな政治家とか、いらつしやいましたか。

大室 特にそういうつもりはありませんでしたが、私はおやじの  
関係なんかで、犬養毅さんなんかは知っていて、好きでしたね。

武田 犬養さんとお父様は何か関係があったんですか。

大室 何か知らないけれど、そっちの方の支持者であつて、別に  
どうということはないんですね。横に逸れて申し訳ないけれど、  
高木正年という人はご存知ですか。

清水 はい、わかります。

大室 これはこのへんから出た方です。それ「生家、墓？」は品  
川にありますけれど。

清水 のちに盲目になられたという方ですね。

大室 ここに高木という家がありますけれど、もともととはその  
人なんです。だけど向こうから来て、どっちがどうなのかよくわ  
からないけれど、十幾つかのときに、跡を継いで、大國魂神社の  
神官になるんです。それから向こうに帰るんだけど、最初に国  
會議員に出るでしょう。それも品川県だから同じ選挙区だった。  
それで、この近くで演説会をやっているんです。応援弁士からの  
葉書で、やるから来てくださいなていうのが何回も来ています  
よ。このへんは高木正年です。私は、おやじが持っていた高木正  
年の書を持っていますが、これはもつと知られてもいい人ですね。  
盲目のなんとかということ、府中ではわりあい有名です。す  
ぐ近所、隣みたいところにいたんです。

このごろほけてよくわかりませんが、そのころは相当関心があ  
ったんです。私は次男だったから、そういう楽な気持ちだったん  
でしょう。兄貴が死んでからやつぱりこうなっちゃったんでしょ  
うね。

武田 政治家の演説会とかもよく行かれましたか。

大室 そのころ演説会というのは、おやじがやっていた中村さん  
の演説会にいつぱい行きましたが、考えてみるとあれは中学生の

ころだな。おやじと一緒に、店のものが誰か連れて行つたんでし  
よう。おやじが出るから、一緒に来てどうだこうだといって、き  
つとサクラを考えた。人数が多い方がいい。「演説会場は」小学  
校でしたが、ずいぶん入っていましたよ。それで驚いたのは、み  
んなが涙をこぼして聞いているんです。しゃべる方もそうだけ  
どね。もつともそれは地元だからね。そういうことがあつた。だ  
けど、関心があつたことはたしかでしょうね。そのころの代議士  
の名前だとか、選挙区ぐらゐは大雑把に知っていましたからね。

武田 それはすごいですね。

大室 ラジオでいつも聞いていました、何票、何票というのをね。

## ■早稲田専門部時代

武田 早稲田の専門部の政経に行かれたのも、そういうお気持ち  
があつたからですか。

大室 そういうことじゃないけれど、政経に入ったというのは、  
ある程度関心があつたんでしょね。それで、私の教授の中にい  
ろいろな人がいましたよ。五来欣造さんのセミナーでわれわれは  
やつていたんです。あの人もわりあい損な人で、右翼みたいに  
いわれるけれど。あの人で珍しい話を聞いたんだけど、「中堅  
手」とか「遊撃手」というのは、あの人が言つたんですってね。  
それで、二つばかり褒められたといっていましたよ。あの人は早  
くからムツソリーニなんか会つて、ファッショの話をした。フ  
ァッショじゃないんだけど、顔がすごいからね。

武田 早稲田のときの同級生も、同じように政治に関心があるよ  
うな人ですか。

大室 関心があるというか、仲間でその後国会議員になったやつ  
はいないね。町長か何かになったやつはいた。日経の整理部長か  
何かになっているやつもいたね。いろいろいましたよ。スキーの

選手がいたり、レスリングの選手がいましたね。クラスは違いましたが、相撲の笠置山というのが同じ頃でしたよ（※3）。丁髷をつけて学帽をかぶって、よく来ていましたね。それから六大学野球はよく見ましたよ。ただ、私もそんなことはね、私はそういうつもりは何もありませんでした。

**武田** ちょうど二・二六の頃だし、世の中だんだん戦争色になっていく時期ですね。

**大室** 野球にずっと凝っていて、早稲田のときもこっちの府中クラブという社会人野球をやっていたんです。これがまた、朝から晩までではないんですが、毎日のようにやっていて、土曜・日曜になると必ず野球。そのレベルも低くはなかったんですよ。軟球では、相当のトップクラスになったんですね。その後、硬い球もやっていましたし、社会人野球でけっこうやっていました。早稲田の同級生で、二軍の主将がいましたが、それよりこっちの方がうまかったような気がする。

**武田** そうですか。でもこの時代にも野球ができるんですね。

**清水** 野球はお仕事をされてからも、されていたんですか。早稲田の頃で終わりですか。

**大室** 早稲田の頃から、そのあとも、戦後もずいぶんやりました。芋を食いながら。社会人野球、いわゆる都市対抗で、残念ながらどうしても決勝まで出なかったんですが、決勝近くまで行ったんです。

**清水** 都市対抗みたいなものにも参加されていたんですか。

**大室** レベルはわりあい上だったんですよ。プロの誘いは来ませんけれど、プロのやつが一緒の仲間にみないたんですから。阪急の山田伝なんて知っていますか。

**武田** はい、知っています。

**大室** あれはうちのメンバーの仲間でした。それで彼がビクターオートという、戦後三井物産のロンドンの支店長か何かが来て進

駐軍の車の修理とか解体だかをやっていた日本製鋼所というところに入ってきて、そこにみんな入って来たんです。その前にグラウンドがあったものですから、彼らがビクターオートの野球をやっている、われわれが府中クラブでやって、軟球でやったんです。私が本当はピッチャーではなくて、サードかショートなんですけど、ピッチャーを途中からやって、きりきり舞いをさせた。それから硬球が始まったんです。「プロは」浅野・下村というのと、阪急の三人がいたんです。その後何人か、うちのほうのクラブからプロに入った人が大勢いました。

それから南方に行ったときも、誰かが宣伝したのだから、素人野球はわりとやった方なんです。

**武田** ボルネオに行ってもやられていたんですか。

**大室** 最初のマカッサルに行ったときに、まだそのころは爆撃も大丈夫だった頃でね。そうしたら待っていて、今度内地からすごい選手が来るとか、いい加減なことをいう人がいて、私の課長だと思ふんだ。すぐ捕まって、どこをやりますかというから、セカンドぐらいやりますよと言ったら、ショートで四番だと決めているんです。それでリーグ戦か何かやった。でも原っぱでやるから、ホームラン賞だとか、打撃賞だとかもらって。でもそれはレベルがね。野球はずいぶんやりましたよ。野球の話では、スポンサーの西野屋さんというのがいて、これは本当に残しておきたいことがあるんですね。

**武田** 早稲田の専門部の話に戻りますが、昭和九年に入られたんですね。そして十二年に卒業ということですが。

**大室** 九年の四月から十二年の三月です。

**清水** 三年間ですね。

**武田** これは戸塚にあったんですね。

**大室** そうです。

**武田** どうやって通われていたんですか。

大室 京王線で新宿、それから山手線で高田馬場、それから歩いて通うんです。けっこうかかりましたけれどね。

武田 クラスは何人ぐらいだったんですか。

大室 クラスは、最初は多くて「教室に」入り切れなかったけれど、いつのまにか五十〜六十人になっていて、大学というのはいい加減なものだ。最初のころは、入り切れないんですよ。驚いた。ちゃんと学校も知っているな、と思った。

清水 減るのを見越している。

武田 ここ「府中」から毎日通われたんですね。

大室 ええ、通っていましたけれど、そのうち要領よくやりました。今でも夢に見るのが一つあるんです。簿記があつたんですよ。経済という名前があるからね。ところが簿記なんていうのは私は関係ないと思ったから、一回しか聴きに行かなかった。試験の時に困ったら、商業学校を出ているやつが大勢いるんです。「こんな簿記、簡単だから心配するな、おれが教えてやる」というけれど、簿記を教えてもらうことはできない。これは弱ったけれど、先生がいい加減だからかなんだか知らない、それでもパスになっていたからいいけれど、今でもときどき夢を見ますよ（笑い）。

武田 僕も数字が弱いので、同じような。

大室 全然「簿記の授業に」出なかったんですから。興味もなかったし。

清水 経済系の授業があれば、政治系の授業もあるわけですね。

大室 政治の授業はいろいろありましたよ。中野登美雄さんもいたんじゃないかな。教授で、憲法学を教えていた。それから、講師だったけれど、代議士をやっていた内ヶ崎作三郎さんがいました。

清水 早稲田出身ですね。

大室 あの方がいろいろアジアの話をしたけれど、なかなかいい話をしましたね。それから経済では塩沢昌貞さん。政治の方では、

五来さんのほかに、政治科学でタカハシなんとかというのがいた、あるがままのなんとかという面白い理論でしたね。もう一人、いたな。あれは服部文四郎が科長だったんです。後に総長か何かになりますね。服部さんの話もなかなかよかつたね。稲毛金七、心理学の。私は心理学が好きだったんです。雑談ですが、後に選挙なんかのときに、それが非常に役に立った。自分の選挙じゃないときに。

清水 具体的にどう役に立つんですか。

大室 それは相手方のあれ「心理」を掴むということですね。私なんかはいまでも言うんですが、「しゃべるときには、聞く人の立場にならなさい」と言うんだ。「自分でいい調子でしゃべっても、相手が眠くなるような馬鹿馬鹿しいことを言っても駄目だ」と、しゃべっている人によく言うんです。自分は卒業しちゃっているからあれだけど、ひところはね。だからありがたいことに、われわれがしゃべっていると、みんな逆に聞いてくれるんです。「私が」やめてからみんな、「このごろ大室節が聞けなくなつて残念だ」と言うけれど、こっちはそんなつもりじゃないのに、聞いている方は面白おかしく聞いていたな、と思うんです。それは心理学に通じて、相手の心理を見ながら話す。それは、ほかの人と比べるとそういうことがわかっていた方かもしれませんね。ただど実際には大したことはございません。

それからもう一つは、いまお話が出ましたが小学校のときに学芸会なんかやるでしょう。何か必ず役を押しつけられるんですよ。ところが私がやっても、不器用だから駄目なんです。それで四年生のときでしたか、「瓶割り柴田」というのをやったんです。ご存知でしょう。

清水 勝家ですね。

大室 うちの叔父がしまして、そのころどこかの工芸学校か何かに行っていた器用な人で、「よし、それじゃあおれが鎧をつくって

やる」というんです。段ボールのような紙に穴を目打ちでつけて、黒や赤のつや出しの色紙みたいなものを貼って、毛糸で縫って、実に上手な鎧をつくった。そうしたらこっちは瓶割り柴田の家来になっちゃったんだ。柴田が着るような鎧は、その役のやつにやった。私は家来で、桶に水が入っているのを、敵が来たときにわざとこぼす役だったんですね。桶に紙がいっぱい入っているわけです。それでここに来たらこういうふうにくぼせばいいということだったんだけど、とうとう話し合っているうちにこぼさないで済んじゃった。それから絶対にそういうことが嫌いになった。ほんとうに駄目なんです。あとになっていろいろなことがあったけれど、そういうときには逃げ回るのはそのせいだと思う。

武田 早稲田の頃は、弁論部とかには入りませんでしたか。

大室 それは入らない。早稲田のときには最初、新聞なんとか部というのに入っただけだけど。入らなかったのか。入ろうとしたんだけどやめたのかな。

武田 早稲田は、この頃はわりと左翼系が強いんじゃないですか。

大室 そうでもないですよ。だって戦前ですから。あまりそういう左翼系はいないですね。

武田 たしかこのすぐ後に、早稲田の弁論部が禁止になってしまったんですね。

大室 弁論部もまだそのころは大したことないね。ただそのころは、デ杯の選手、テニスのサトウがいたでしょう。それから相撲で強いのがいて、陸上もだいぶやっていましたね。それからレスリングが始まったんですね。そのころのレスリングは、ここ「藤」に穴が空いたようなユニフォームを着るんですよ。今とは全然違うんです。貞弘とかいう仲間がいましたので、よく見に行ったら。私どもが一番よく見たのは相撲の稽古で、すごいので驚いたけれど、強いのがいましたよ。二宮なんていうのが。もちろん野球はそのころはトップクラスです。それで自分のやる野球がとても忙

しかったです。

武田 それは早稲田の野球部ではなくて。

大室 自分で、帰ってきてやる。「仲間が」待っているのですからね。

武田 昭和十二年三月に専門部を卒業されるわけですね。何か専門部の時代で、思い出されることはございませんか。

大室 早稲田の穴八幡に関連して何かあったような気がしたけれどね。あの近くに第二高等学院があったんですね。今の戸塚のグラウンドで。戸塚のグラウンドはもうないでしょう。あるんですか。

清水 ないです。

大室 ないですね。あそこで早稲田祭りとかいうと、早稲田おけさなんてみんなで踊ったりしましたね。あそこのグラウンドは、練習をしよつちゅう見に行きましたね。

清水 さつき新聞部というお話がありました。が、学生的时候は二・二六を見に行ったりとかはされたんですが、政治的な運動に参加したり、ということとはなかったんですね。

大室 それはあまりなかったと思うんだけど、そのころはそろそろ中野正剛なんかが出て来た頃ですかね。名前は知っていましたし、二・二六以降、そういうことには関心を持っていたから、いろいろなことを知っていたんじゃないかと思うんです。二・二六に山本又先生が関連したこともあったし。

ずっと後になってから、われわれがやめてからか、二・二六に行っただ下士官が一人ここにいますよ。府中にいま養子で来ているのがいるんだけど、そういう話も聞いたけれど、わりあいそういう点がよく読んでいたり、知っていたかもしれないね。斎藤さんとか犬養さんとか。そういうええ思い出すんだけど、岡田「啓介」さんが。

武田 最初、殺されたと言われるんですね。

大室 それで代わりの人がやられましたね。そのときに、これはそうじゃないんだと言って逃がした憲兵か何かが、国分寺にいたんです。それが私のおやじの知人なんです。それでわりあいいろいろなことを知っていたような気がする。伍長かなにかでね。わりあいあのころは、そういうことに関心はあったでしょうね。

### ■国民精神総動員中央聯盟に就職

清水 先ほど中学の卒業文集に「日比谷座で会いましょう」とお書きになったということですが――

大室 それは中学五年。昔、選挙の票数をラジオでよく言うんですね。何区何票とか、経過を次々にいつて、あいつが勝ったとか負けたとか覚えてしまうぐらい、いろいろな名前も知っていたんですけれどね。その時になんで「卒業文集に」書いたのか、意図があつて書いたかどうか知りませんが、そういうことを書いたことを覚えてるんです。

清水 早稲田に行かれてからはどうだったんでしょう。

大室 それからすぐにはやろうというつもりはなかったんですかね。自分でやろうという「つもりはなかった」。いつもそうなんだ、私は人に言われてからやっているんだ。

武田 早稲田を卒業されてから、すぐに精動で働かれるのではなくて、別のところで働かれたんですね。

大室 そのとき野球なんかやっていたものだから、ある会社から野球で呼ばれたことがあるんです。ゴムの会社だったけれどね。でもそんなつもりはなかったし、野球はこっちでもやっていました。近所の西野屋という工場（こうば）で、われわれが野球をやっているオーナーみたいな人のところで、前の先輩もそういうの「野球での就職の話」があつたんです。そのころは「私は」ガツガツしていないわけです。自分が食うに困らないものだから。

ほんとうはいけないうれしげな話。だから就職運動なんて一つもしないんだ。ゴム会社から来たときに「野球で」と言われたら、それで入れればよかったわけですが、そういうこともない。

もう一つは、中学のときに私は野球をやっていたんですが、ときどき同じグラウンドで陸上競技の選手が練習しているわけです。ハイジャンプがありまして、野球の練習をする前にハイジャンプを飛んだりしていた。そのころ府中の青年団の陸上競技部は強いんです。それで「ハイジャンプの選手が足りないの、君、来てくれ」というので、北多摩郡の大会に二、三回出たことがありますが、飛べなかつたんですね。ところが学校を卒業するときに、それを見ていた星野くんという私より二年ばかり先輩の中距離の選手がいた。これはけっこうやつたんですが、日大に入つたんです。それで「大室、おれの方の部に来い。来れば奨学金で、あれ「授業料？」を免除してやる」というんです。

武田 いままで言うスポーツ入学ですかね。

大室 とんでもない、そのころは日大は誰もが入ったからね。そういう意味ではないけれど、そんなつもりはなくて断つた。卒業するときにいろいろな話があつたけれど、無関心だったことは確かなんです。そのうちに、ぶらぶらしているというのではなくて、仕事はしていましたけれどね。おやじが心配して、ほんとうにこここのところ「居間から庭を指して」にいらした方がいたんですよ。

こちら側は私の倉庫だったんです。こここのころは島田さんという隣の人の地所で、その貸家があつたんです。その貸家に小林さんという方が住んでおられた。その小林さんのお父さんは府中銀行の支配人で、何をやるのか知らないけれど頭取ではない。小さな銀行だから、専門家が来ているいろいろなことをやつたんですよ。その息子さんが小林千秋さんだった。小林千秋さんを知

っていますか。

武田 内務省ですね。

大室 小林さんが、ここから府立二中に行かれて、浦和高校だかどこかの高校に入られて、東大に行って、銀時計をもらって、それで内務省に入られた。内務省に入って、地方局の事務官をやっておられたんです。それでおやじが「私を」紹介したら、「じゃあ、おれのところに連れて来い」といわれて、私が行ったんです。それで東京市がどうか、企画院がどうかと言ったけれど、私は役人になるというつもりがなかったし、行ったって試験で落ちこちてしまうし、と思っていたんです。けれども、ちょうどいまの精動運動が始まって、内務省と文部省と両方がやっていたものですから、内務省の方で話をしてくれて、それで入ったんです。

武田 お父様が小林さんに紹介したという形なんです。

大室 きつと、おやじが小林さんに頼んだんじゃないですか。行ってみて、「じゃあおまえ、履歴書持って行って来い」というので、それから入れてもらったんです。やってみると、面白い仕事だったから、つい乗っちゃったんでしょうね。

清水 その住まわれていた小林さんというのは、小林千秋さんなんですか。千秋さんのお父さんが住まわれていたんですか。

大室 小林「千秋」さんもここにいたんです。そのころは「住んでいたのは」荏原といいましたか、小林さんは三井系の重役の娘をもらって、あとで私は家に呼ばれて行きましたけれどね。

清水 品川の荏原ですか。

大室 中延です。最後に知事になりましたね、三重県知事。地方局の事務官という大変な仕事でした。それで入れてもらったんです。

武田 先生の方では、何か精動に関わるとか、そういうことには関心はなかったんですか。

大室 知らなかったですね。ただ、精動運動が始まったことはよ

くわからなかったけれど、支那事変が始まって、これは大変だな、ということは知っておったんです。

武田 ちょうど支那事変が始まってすぐ、ぐらいですか。

大室 支那事変が始まったときに、精動は時局認識が一番だったんです。こういう戦争が始まって大変なんだよ、もつとみんなしっかり認識してください、ということが中心だった。そういう運動を起こそうということだった。ところがそのうち、いろいろな必要性が出て来たんだけれどね。私どもが入ったとき、「昭和十二年」十一月十二日に行ったとき、その日に日比谷公会堂で何か演説会をやっていた。そしてすぐにその応援に行かされた。だからわりあいにつきがよかつたんじゃないですか。

武田 ほとんど最初のころから関係されているわけですね。

大室 そのころは人数がいらないですから。われわれみたいなものは何人でもいいでしょう。だから総動員でなんでもやりましたね。そうするとわれわれは商人でもあつたし、立ち回りが早いし、飲み込みがよかったのかもしれないけれど、けっこう重宝に使われたのではないでしょうかね。

武田 精動に入られたというのも、小林さんのほうには何か理由があつたんでしょうか、ぜひ紹介したいとか。

大室 まだ入ったばかりで、会そのものも少人数で、次々にやることが多くて、てんやわんやだったんですね。だからときどきそういうのがあると、入れていたようですね。ところが行ったときに、あのころは常務なんているのはいないので、幹事という名前でしたか、実際にやっているのは、主事というのが大将でやっていた。その上に幹事というのがいたんです。それは三浦碌郎という人で、台湾で州長「州知事」かなにかやっていた。戦争中に立川の市長になった人です。この人がほんとうにお飾りだったんです。役人らしい人で、忙しい仕事にはとても間に合うような人じゃなかったんですね。その人のところに最初に行ったときに、ま



た変な者を連れて来やがって、という顔をされた。そのときよく覚えていますが、その年の十月にできて、十一月の十二日に「私は」入って、最初の給料は三十円しかくれなかった。そのときに言われたんです、「安いけど我慢してくれ」と。

武田 三十円というのは安いんですか。

大室 辞令をもらったのは四十五円なんです。十日間少ないから、三十円なんです。ところがそのころ相場が、専門学校が四十五円で、学部を出ると五十五円なんです。だからまあいくらでもいいや、ということだけれど、四十五円では、ほかに五十五円もらったり、六十円もらっているやつと比べた場合に、思ったんじゃないのかな。逃げられたら困るというようなことを言ったよ。辞められたら困ると。

清水 それは最初の給料をいただくまでの、十二日から二十日間ぐらい働いたお仕事がすごく評価されたということなんですかね。

大室 ですから一番驚いたのは、十二月にボーナスが出るでしょう。ほかの人はいくら出たのか知らないけれど、そのとき三十円もらった。これはすごくありがたかった。ですからあとで、どこかに書いておきましたけれど、わりあいによいしょい上げてくれているんです。

武田 そろそろ時間ですので、次回から精動で先生が働かれたときのお話を聞かせていただくということで、今日は、ちょうど「精動に」入られたところまでで、区切りもいいので終わりにしましょう。

大室 こんな話でいいんですか。よくわからないので、遠慮なくご指摘いただいて。

武田 今日のお話はテープに録っていますので、それを起こしていただいで、二十枚か三十枚になりますので先生にお送りします。われわれでどうしてもわからない固有名詞とか、ちょっと思い出さ

れたところを付け加えていただいで、また返送していただくという形にさせていただきます。では次回の日取りを決めたいと思います。

武田 精動の話は盛り沢山にあるんじゃないですか。次回、どのあたりまでお聞きすればいいのかなんですが、先生が書かれたこの本『渦巻く時流の中で』（現代史調査会・一九八八）は、われわれも読んでおりますが、この話をもっと聴きたい、というところもたくさんあるんですが。

大室 これは系統的に書いていないんですね。項目、項目で書いているうちにまとめたものですから。それは先生の方からご質問をいただくと、本当は出ると思うんです。あと、あそこにありますね『国民精神総動員運動』（長浜功編・明石書店・一九八八）を指す。あれが概要ですから、あれを見ればだいたいわかると思います。精動関係の資料というのはあまり持っていないんですが、幾つかありますから、見てみます。

武田 精動関係の資料はけっこうお持ちですか。

大室 何かあると思いますよ。

武田 あの本を書かれたのは官邸で書かれたんですね。そのときの資料はお持ちなんですか。

大室 もう全体的には持っていないですね。

清水 一部はお持ちになつていらっしゃるんですか。

大室 一部、自分でやったものは多少あります。よく見てみます。それは別にしてあるんですけれどね。自分の辞令とかは、用意してあるんです。こういう、四十五円から五十五円という辞令があります「辞令のファイルを示す」。「そのうちの一枚を開き」これは残務整理のとき「の辞令」ですね。

武田 では『国民精神総動員運動』の本と、先生がお書きになった本で質問させて頂きます。

大室 あれをお貸ししましょうか。これ一冊しかないのですからね。もしお入り用なら、いいですよ。

武田 ちよつと見せてください。

大室 これ『国民精神総動員運動』は私どもが作ったときは五百部しか作っていないんです。それで各官庁と各府県の中央図書館に渡したんです。マスコミにもやったと思います。あとは、われわれ職員がいくらかもらった。

武田 先生が『渦巻く時流の中で』を書かれたときは、これを参考にかかれたんですか。

大室 それもありますが、そのときはまだいろいろなことを覚えていましたからね。

武田 この本には第一期、第二期と時期別に書いてあるんですね。

大室 第三期がありますね。それは浮田「辰平」さんという人がまとめを書いたんです。この方が創設をやって、あとの概要というのは事務的なまとめですから、それは私がやらせていただいた。ただし、「昭和」十三年にはもうできていた。

武田 この時期区分も参考にして考えたいと思います。お聞きしてみないとわかりませんが、ここの部分で二回とかお聞きしてもかまいませんか。

大室 かまいませんが、創設が順序よく書いてありますね。その中の具体的なものについて、われわれは事務的に見ていましたが、昭和十五年に精動本部になってから、一番内容があることをやっているですね。

武田 そのあと大政翼賛会になりますね。

大室 それをやめてから大政翼賛会になる。大政翼賛会では、具体的にはないですよ。ほとんど内容がないです。

武田 このときに関わられた委員の方もだいたい覚えていらつしやいますか。

大室 「私が入ったのは、精動ができてから」ひと月遅れですが、ひと月のあいだには、あまりそういうことをやっていないでしょう。委員会ができたかなんかしたのは、みんなわれわれが行って

からです。そういうときは人数が少ないから、中に入って書記をやらせたり、受付をやったり、聴きにいったり、あの先生はどうだとかということをやっていましたから。

武田 そういうお話もぜひ聞かせていただければと思います。

大室 それから婦人団体のはじめみたいなものは貴重だと思うんです。

清水 それはぜひお願いします。

武田 市川さん、山高しげりさんなどですね。

大室 市川房枝さんと金子しげりさんは、非常にわれわれと懇意でしたからね。

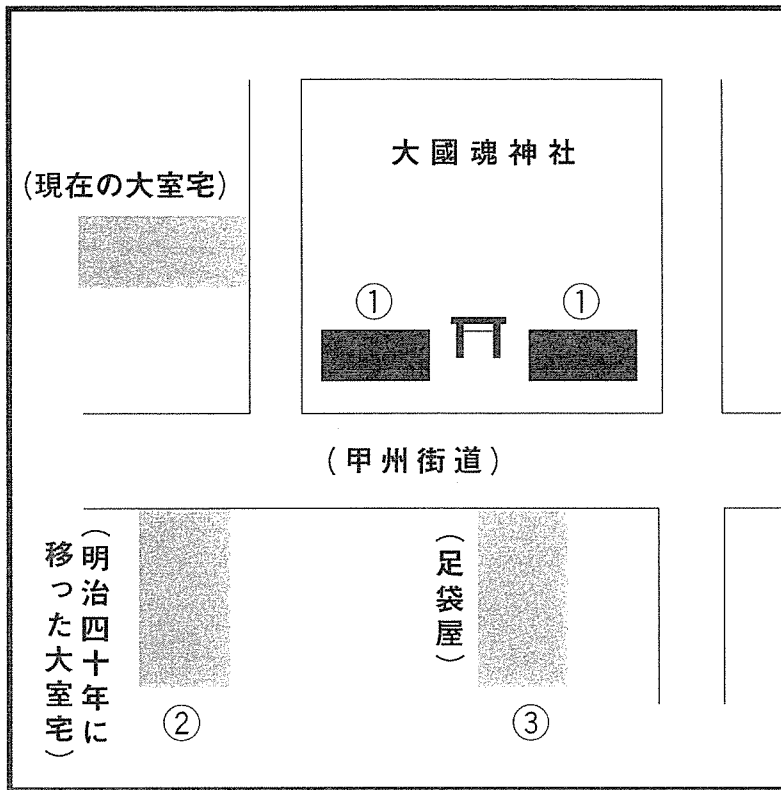
武田 吉岡「弥生」さん、大妻「コタカ」さんなんかたくさん出て来ますね。ではちよつとこれをお借りしたいと思います。少しこちらの方で、あらかじめこういうことをお聞きしたいということをお出しします。今日のお話でも思い出されたことがあったら、速記録に付け加えてください。

大室 昭和十五年ぐらいは最後の方ですが、非常に成績が上がっている。ここにも書いてありますが、こういうふうになったというだけですね。その経過なんかも面白いことがあるんですね。

武田 では次回、よろしくお願いいたします。どうもありがとうございます。

〈以上〉

図 1



【注】

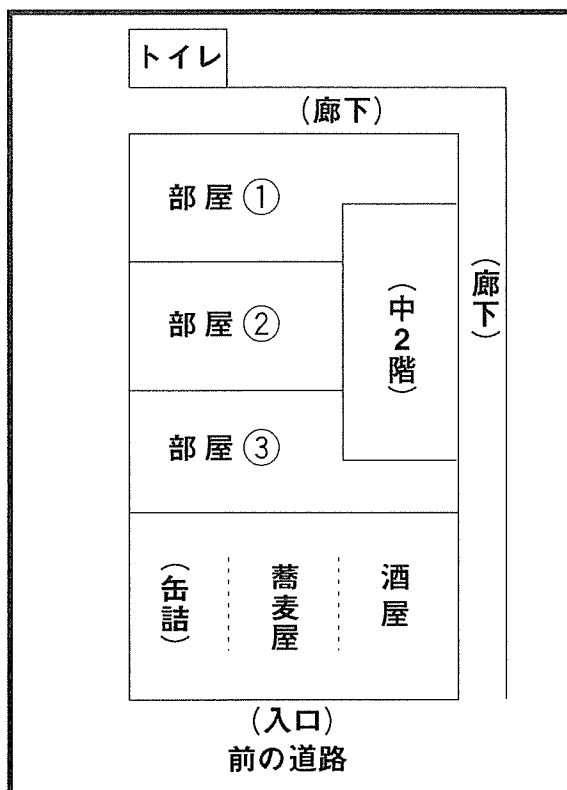
※1 大國魂神社のホームページ (<http://www.oookunitamajinja.or.jp/frame/ooj01.html>) では、「明治元年（一八六八）勅祭社に準ぜられ、同七年（一八七四）県社に列し、同十八年官幣小社に列せられた」となっている。

※2 明星学苑のホームページより。

([http://www.tokyoshingaku.com/serch/koukou/212meisei\\_main.html](http://www.tokyoshingaku.com/serch/koukou/212meisei_main.html))

「経営母体の学校法人明星学苑は、大正十二年に設立された明星実務学校をその前身としている。昭和二年に財団法人明星中学校と改組され、昭和二十三年には高等学校が開校になった。児玉九十の教育理

図 2



念のもと、その後も着実な歩みを続け、現在では幼稚園・小学校・中学校・高等学校、及び二つの大学を擁する総合学園に成長している。」

※3 笠置山勝一（かさぎやまかついち）

本名、仲村勘治。生年月日、明治四四年一月七日。出身地、奈良県大和郡山市。

常陸山の孫娘の夫、小常陸の義理の甥。

小学生の時から相撲で活躍し、県立郡山中学校では柔道部に所属した。昭和三年九月に入門して早稲田中学校に転校し、部屋から中学校・早稲田第一高等学院・早稲田大学専門部政治経済科に通った。初土俵は卒業後の予定だったが春秋園事件で早められた。（初土俵昭和七年二月幕下）

# 大室政右 オーラルヒストリー

## 第2回

日 時：2002年7月31日（水）

13：30～16：10

場 所：大室政右宅（府中市）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

武田 知己（政策研究院特別研究員）

清水 唯一朗（政策研究院リサーチアシスタント）

馬場 治子（府中市郷土の森博物館学芸員）

## ■ 精動運動の始まり

武田 今日、われわれの方から質問事項を差し上げたいんですが、国民精神総動員中央聯盟で働かれてからのことをお聞きしようと思います。

『国民精神総動員運動』を読んだんですが、だいたい時期区分として、質問事項のペーパーにあるように、第一期が昭和十二年十月～十四年三月、第二期が十四年四月～十五年三月、第三期が十五年四月～十五年十月となるようですが。

大室 これ『国民精神総動員運動』は、辞めたときに書いていますから、間違いありません。特に一期の、私どもが勤めた最初の一年間というのは、ごく少数でやって、だんだん仕事が大しってきたんです。逆に言うとそのことで、内容の如何にかかわらず、やっていることが非常に大きくて速いものですから、いろいろな注文が出て来て、もっと強化しろ、強化しろ、ということが毎年出てくるんですね。

この時期の分け方は、第一期が昭和十二年十月から十四年三月になっている、この通りだと思う。昭和十二年十月に創設されて、私は十一月に入りました。三月までの予算はわれわれも知らなかったんですが、何かの機会に調べてわかったのは、十万円ということです。『渦巻く時流の中で』七五ページ参照。ちょうど半年ですが、十万円。職員、役員ではなくて、実務をやっている職員は十一人しかいない。それで全国を相手にして、大変な仕事をしているでしょう。だから人数が増えてくると楽になるということです。そのころの働き手は大変なものがあったという気がするんですね。

第一期の始まりは、総説でござんになって趣旨はおわかりだろうと思いますが、支那事変が始まったということで、主として時局認識が中心だったと思うんです。これは大変なんだよ、局地じ

やないんだよ、だから国民もしっかりよく認識してもらいたい、というところから始まっているんですね。そのときのスローガンが「挙国一致」「盡忠報告」「堅忍持久」ということで、「堅忍持久」というのはどういうことかわからないけれど、みんな一緒に頑張ってひとつ国のために頑張らしましょう、というような意味だと思えます。その内容は、日本精神の高揚だということなんです。そういう中で、国民精神総動員中央聯盟というのができるんです。

先生方のご質問の中に、この「加盟」団体【資料1】をどうして選んだのか、ということがありますが、最初の七十四団体は、すべて各省に關係のある団体ですね。内務省關係や文部省關係。そういう全国的な組織で、各省から庇護を受けているというか、指導をいただいたり、援助をもらったりしているような団体ですね。全国的な組織がおもだったものです。それを中心に中央聯盟をつくって、その団体を通して国民全体に呼びかけようということです。最初のうちはそうなんです。

しかし対象は全国民ですから、それだけでは済まないんですね。総括的な話になりますけれど、実際の仕事というのは、中央聯盟のいわゆる精動運動でやっているけれど、各省が何か問題が出ると、みんなここに押しつけ、頼みに来るわけです。要するに実践躬行とか、総説のところに出ていますね。これがそのときのあれ「方針」だと思うんですね。

- 一、外面的宣伝的ならずして内面的精神的なるべきこと。
- 一、概念的講說的ならずして具体的実践的なるべきこと。
- 一、断片的単独的ならずして全体的協力的なるべきこと。

わかったようなわからないような話ですが、要するに理屈なんかを言わないで、格好をつけないで、実際の仕事をしましょうというように、いままでの運動の方針とはずいぶん違うんです。だから理屈ではない、実際にやるんだということが主だと思

う。派手にやることはないよ、内面的で精神的な問題でいいんだよ、ということですから、仕事はずいぶん早くやったと思う。

いま申しあげましたが、このときの十一人のメンバーもありますけれど、理事の会長とか役員がいますね。その下の事務局では監督役みたいなことで、香坂「昌康」理事が会長から指名されて、常務理事とは言わないけれど指名の理事で、監督にあたった。その下に事務局の方では三浦という幹事が一人おられた。この前話が出ました三浦稼郎さん、台湾の州知事か何かをやった人。その下に伊藤博と瀬尾芳夫という二人の主事がいる。実際の仕事はこの二人がやったわけですね。

**武田** その伊藤さんと瀬尾さんは、どこの方ですか。

**大室** もともとは新聞記者上がりで、伊藤さんは千葉県出身の方なんです。報知新聞じゃないかと思うんです。あのころ報知はまだやっていましたからね。秋田の支局長か何かをやって、なかなか成績が良かった。それからこちらに帰ってきた。その伊藤さんがさっきの漫画の主人公なんです「丸顔で眼鏡をかけて口ひげを生やしている。漫画のモデルになったという」。「その漫画は」どこか探せばあります。その方が選挙粛正中央聯盟で、選挙粛正という運動がありますが、そのときに働いているんです。

瀬尾さんもそうだと思うんです。瀬尾さんも、どこか知りませんが、新聞社にいて、やはりそういうことをやっていた方でした。この二人がやっているんです。瀬尾さんは早稲田を出た私の先輩なんです。伊藤さんはどこを出られたかよく存じません。家には行ったことがあります。この二人は選挙粛正の本部にいたものですから、やるのが早いんですね。それは選挙戦の期間の話で終わりますからね。

この二人の下に、何人もいないんです。ほかにいたのは浮田辰平さん。この人は嘱託で、のちには主事になります。それから柴田「達夫」という人も嘱託でした。浮田さんという方は文書関係

の仕事の担当で女学校の校長さんだった方です。非常に立派な方で、文章を書く方で、起案はこの人が専門にやっていた。柴田さんはたしか東大を出た人だと思いますが、例の講演者、弁士のお願いに行く係だった。伊藤さんは総括的なことをやって、瀬尾さんが事業というか、主として出版関係をやったんですね。出版物をずいぶんたくさん出してあります。

**武田** 編集者みたいなものですか。

**大室** それはどういうことかという、講演会をやりますでしょう。演説会とはいわないんです、そのころは講演会です。講演会をやって、大臣の演説とか、誰かが来て特別な話をする、それをすぐに速記して、一週間ぐらいでパンフレットにして出すんです。そのパンフレットはどこかにありました「資料類を探す」。小さい薄っぺらなものです。こういうようなものです「パンフレットの現物を示す」。こういう程度のもですが、これをつくるのが、また早いんです。これ「別の資料を出す」はこちらで書いたものですが、パンフレットといっておりました「さらに資料を探す」。

**武田** 先ほど刊行物集をお持ちでしたね。その箱の中にあつたのではないのでしょうか。

**大室** これ「精動刊行物集」(大室氏所蔵の資料)はあとから作ったものです。精動本部になってからのものです。その前にもこういう形でつくったんですね。いろいろなものが入っておりますが、こういうパンフレットをつくるのが非常にたくさんあります。半年ぐらいで何種類も出しているんです。それから例の新聞「国民精神総動員」という新聞の復刻版(国民精神総動員本部編 緑蔭書房・一九九四)がありますね。これは一日、十五日と月に二回しか出していないのですが、全部揃っております。これは十二月十五日からで、少し遅れています。精動がやってきたときの広報として、全部揃っています。これは復刻版が出て

いますが、資料としての話です。

そういう中で第一期にやりましたことは、お尋ねの中にもありますが、各団体に対して、何か決まりますと、協力を求めるわけですが、これは全国的な組織が多いですから、たいてい行き渡るんですが、そのほかに府県に出します。府県宛てはあとからになります。最初は団体を中心をやっていたわけですね。初期に私どもが入った頃はそうなんですが、みんなわれわれが何でもやらなければいけないんです。

例えば役員会があります。何か決まりますと、それをすぐに、伊藤さんとか瀬尾さんが主で、それから浮田さんたちだと思うんですが、まとめますね。するとすぐにタイプに回して印刷をして、すぐにその晩に加盟団体とか関係の方に発送するわけです。それが早いんです。われわれみたいな若い者はあまりいなかったんですが、それができると同時に、みんな手伝って発送するということでしたね。最初のころはすいぶんよくやっていましたね。

**武田** 少しお話が前に戻りますが、そもそもこの「国民精神総動員」という名前ですが、これは当時よく使われていた言葉ですか。

**大室** そのころ、こういうことを聞かれたことがあるんです。これは少し後になってからですかね。「国民精神総動員運動」というのは国民の精神総動員の運動なのか、国民精神の運動なのか」と。わかりますか。国民精神なのか、国民の精神運動なのかどちらか、というわけなんです。それはわれわれに対してではなくて、聯盟に対してですね。国民精神というのは日本精神的な特別なものを考えているわけでしょう。だから単に国民の精神運動ではない、日本固有の精神的なものをやるべきだということで、そういうお答えをしていましたね。

**武田** この運動の前には、国民教化みたいな運動がずっとあったわけですね。

**大室** ええ、中央教化団体連合会とか、いろいろ優秀なものがあります。

**武田** それとは違うものだ、という意識ですか。

**大室** 全然違います。国民精神総動員運動という名前を誰がつけたかは知りませんが、教化団体だとか中央教化団体連合会は、やや宗教的なあれ「傾向」があるでしょう。多少あります。あのころは立派な方でしたよ。誰がやっていたかな。

役員の組織を申しあげますと、第一期のときには、有馬良橘さんという海軍大将を会長に立てたんですね。これは明治神宮の宮司をやられておったんです。有馬さんは、例の日露戦争で旅順閉塞隊に出た大変な人で、これは人格が神様に近いような方でしたね。その下に理事がいたわけです。その中にはそのころの貴族院、衆議院から始まって、各種団体の人がおりました。その名前はわかっていきますね。言いましょうか。この中央聯盟をつくったときの後ろ盾は政府がやったんですが、文部省と内務省と内閣が主にしているわけですね。内閣にはのちに情報部ができますね。

**武田** 九月にできますね。

**大室** 「文部省、内務省と」その内閣情報部の三つが担当なんです。それで最初に理事の中に文部次官の伊東延吉さんと、内務次官の廣瀬久忠さん、それと「内閣」書記官長の風見章さんが入っているわけです。

**武田** 情報部の長官なんですね。

**大室** 情報部はこの指揮下ですから。そのとき、情報部長というのが確かできていなかったと思うんですね。あとになってできるんです。それでこの名簿を見ますと、各種団体に入っている方の中から理事が選ばれた場合が多いんです。例えば井田「磐楠」さんというのは右翼の貴族院議員、男爵ですね。この方は時局協議会の議長をやっていたと思います。今井「建彦」さんは衆議院、岡部「長景」さんは。加盟団体の主要な人が出ている場合が多

いんですね。岡部さんは文化団体の何かだと思いましたね。

**武田** 岡部さんはいろいろなことをやられていますからね。

**大室** ええ、いろいろなことをやっていますね。小原直さんは検事総長だった人で、のちに司法大臣。風見さんは内閣書記官長、月田藤三郎さんというのは産業組合中央会の会頭だったと思いますね。この人も立派な方だった。それから中川望さんという方は日本赤十字社の副社長さんだ。松井茂さんというのは内務官僚なんです、この人も何かの団体だ。

**清水** 警察関係ですね。このころは貴族院ですか。

**大室** 内務官僚ですね。松村謙三さんはご承知の通り衆議院です。藤原銀次郎さんは財界から出たということです。

**武田** 元商工大臣ですね。

**大室** この人も何か団体がありましたね。それから小泉六一さんというのは、帝国在郷軍人会の副会長でした。香坂「昌康」さんは青年団長もやっていたんですが、前の東京府の知事をやっていた方ですね。それから酒井忠正さんは伯爵で、貴族院議員です。

**清水** 帝国農会の理事長ですね。

**大室** そうですね。そういうような団体の方と、官庁からと、貴衆両院から何人か、という構成だったんですね。それで七十四の団体の中から評議員が出ているわけです。評議員会は年に何回かですが、それを通じて決まったことを出すわけですね。

## ■第一期——五つの調査委員会

**大室** 一番先にやりましたのは、これからの事業として初年度に調査委員会というのを作るわけです。これは十二月頃から始まるんですが、いろいろ議論した結果、五つの調査委員会になったわけですね。「銃後後援に関する調査委員会」「社会風潮に関する調査委員会」「農山漁村に関する調査委員会」「家庭実践に関する調

査委員会」「実践網に関する調査委員会」、こういう五つの調査委員会を作りました。何人かずつの担当理事を決めまして、理事の中の一名が委員長になる。互選はするんですが、そういうことになる。これを何回かやって、ある程度行きますと、特別委員会をその中に作っております。細かいことを決めて、最終的な結論を出しているわけです「各委員会の名簿は【資料3】」。

この五つの委員会の中で、「銃後後援に関する調査委員会」というのは非常に早く内容がまとまりまして、政府にずいぶん答申したりして、法制化されたものがたくさんございます。最初は銃後後援といいますが、出征兵士の問題です。遺家族の問題ということに重点を置いていましたから、そういう点でわかりやすく、やりやすかったんでしょうね。専門家もいらつしやったものですから、早くやりました。

その次の「社会風潮に関する調査委員会」というのは、のちに申しあげたいと思うんですが、これが一番難しかった。というのは委員の中にもいろいろな方がおられまして、いまで言えば左右両翼の人がいるわけですね。それもありますから非常に活発で、私どもはいつも中に入って記録をとったりいろいろやっているんですが、それは活発なものでした。そのメンバーは、委員長が井田磐楠男爵ですね。この方は菊池武夫さんと同じように、のちに理事になります。貴族院でも右翼で国体派なんです。ひげも生えて立派な人で、どこから見ても昔流の人でした。それから担当理事が岡部さんと松村さんと松井さんがなっています。中のメンバーがいろいろいるんですね。ここに書いてありますように、田中確一さんというのは青年団の人です。それから女子青年団の吉岡弥生さん、この方も立派な方ですね。

**武田** 女子医大ですね。

**大室** その次、国体擁護連合会というのがあるんですね。蓑田胸喜さんというのは国学院かどこかの教授をやっているでしょう。



武田 この人も右翼ですね。

大室 右翼というか、これがまた強いんです。私どもは「胸喜」というので、「狂気」といつていました（笑い）。また狂気かよ、と思うぐらい、引っ掻き回されちゃうんです。こんなことを言うのと叱られちゃうけれど。

座間止水さんというのは修養団の方で立派な方です。あとは山榊儀重さん、太田眞一さん。このころの中央報徳会はご存知ですね。報徳社とか二宮金次郎さんのあれをやっている中で、立派な方が多かったですね。中立的です。赤木朝治さんというのは元内務官僚じゃないですか。このころ選挙粛正の何かをやっていましたね。時局協議会の永野友章さん、純正日本主義は誰か後で出ていますね。日本労働組合会議の菊川「忠雄」さんなんていうのは左の方でしょう。

武田 そうですね。

大室 それから愛国農民団体協議会というけれど、北山「亥四三」さんも、愛国となっているからどちらか。それから農民組合の杉山「元治郎」とか。

武田 このへんは全部、そうですね。

大室 だから両方入っているんです。私はいろいろなことを聞いて、杉山さんなんかはずいぶん立派でしたよ。松本勇平さんというのは、忘れでしたね。川原次郎吉さんもなかなかよくて、加藤咄堂さんというのは、さっき言った教化団体の人で、なかなか有名な方でした。高島米峰さんだとか、ああいう方に近い方ですね。それから杉山謙治さんというのは、日独同志会で、早稲田の教授だと思ったな。あと、神道協派連合会、武内紫明。仏教、キリストも入っているんですね。このころはキリストもやっているんだ。それと大日本報徳社の佐々井信太郎さん、この方がわりにイニシアチブをとってやっていましたね。小貫弘さんというのは、内閣の情報官。後は内務省の保安課長だの警務課長、文部省は成人課

長と企画課長なんかが入っていて、一番あとに出てくる山本良吉というのはどこかの本屋さんでしょう。久布白落實さん、三輪田元道さん、添田敬一郎さん、安藤正純、これらの方は学識経験者で団体とは別に選ばれた人なんですね。安岡正篤さんも入ってらっしゃいますけれど、ここで非常に喧喧諤諤、活発な意見が出た。

武田 最初の「銃後」の委員会の方についても、少し教えてください。

大室 これにつきましては小原さんが委員長でございまして、今井理事と陸軍中将の小泉六一さんが「理事の委員に」なっておられた。この委員会の人は、わりと切実な問題をよく知っている方が多くて、内容的に非常に細かいものが出たと思うんですね。この委員を申しあげますと、青年団の方から石原治良さん、帝国馬匹協会という馬の方も関係しておりました。農林だか陸軍だかわかりませんが。

清水 銃後で馬が関係するというのはどういうことですか。

大室 馬匹の供出があるんでしょう。陸軍で使っていたでしょう。だからこれは農林「省」ではなくて陸軍「省」かもしれませんよ。馬匹改良とかいって、そういういろいろな運動があったりするんです。これは全国的な組織ですから。

それから女子青年団の松平「友子」さん。国防婦人会の杉山「得一」、これは事務局ですね。井上秀子さんというのは女子大の先生だった。それから水難共済会の木下「義介」さん、中央融和事業協会の榊山「保一」さん。方面委員の生江「孝之」さんといったかな、中央社会事業協会の原泰一さん。全日本司法保護事業聯盟の森山「武市郎」さん。私設社会事業聯盟の三谷「此治」さん。薬剤師の福澤「常吉」さん。ここにまた出てくるけれど、在郷軍人会の小泉さん、愛国婦人会から小原新三さん、帝国軍人後援会なんているのがあったんですね、田岡「美賀之助」さん。商工会議所から依田「信太郎」さん、日本医師会から内ヶ崎「騰次

郎」さん、歯科医師会から廣瀬「武郎」さん。少年団「協会」から大島「長三郎」さん。少年団聯盟から酒井「幾造」さん。国体擁護連合会の山根「謙一」さん。陸軍省から、陸軍歩兵中佐という佐々眞之助さん。これは情報部だと思えますね。海軍の方から川崎「進」中佐。農林省から、のちに次官になるんですか、小平権一さん。内務省の軍需扶助課長の福本「柳一」さん。傷兵保護課長とか警保局、官邸の役人も出ていますね。それから東京府と東京市から出てもらっています。

武田 これはなぜ、東京府と東京市から出ているんでしょうか。

大室 何かやるとき、すぐに東京府が問題になったりしますでしょう。そのころは、東京府と東京市と聯盟と共催でやっている場合が多いです。いろいろな事業を、最初のころは。講演会なんかもずいぶん都内で、まず地元からとやっていますでしょう。いろいろな講演会がありますね。質問の中にあつたけれど、どうしてこの場所を決めたのか、星製薬でやったとか、早稲田大学の講堂でやったとか。みんな各ブロックごとにやったときに、大勢が入れるところがないでしょう。そういうところを借りてやっている。それは府と市と聯盟が共同でやったものです。中央でやるような会ではないものをやっていますから。ですからたいいてい府と市が、府か市が入っています。これは最初のうちですね。しまいには、だんだん普通の府県と同じぐらいになつてしましますけれど。

話は戻りますが、この委員会も、こういうメンバーで何回もやっているんですが、一番先に結果が出ていますね。

武田 「銃後後援に関する調査委員会」ですね。

大室 十二年度には間に合わないけれど、十三年度ぐらいのうちに結論が出ているわけですね。十二年度は三回ぐらいしか「委員会を」やっていませんからね。

清水 こちら「『国民精神総動員』」を見ると、十三年二月に政府に上申というのがありますね。

大室 そのころ、わりあいにとまつて、あたりまえだと思ふようなこともやっていない場合が多かつたんですね。そういうことを早く指摘して、やらせていただきますね。

武田 具体的にはどういうことですか。

大室 「資料を調べる」なにしろやることがたくさんあつて。

清水 「『国民精神総動員』」の七三ページですか。

大室 これは十二年度でしょう。十二年度ではなくて、あれ「政府の上申」を出しているのは。

清水 それは「『国民精神総動員』」の九一ページです。

大室 ああ、政府へ上申の文書ですね。「銃後後援強化に関する上申事項」「資料2」というのがありまして、政府に出しておりますが、さつき申しあげました細かいことというのは、「軍事扶助の施設に関してはいつそう力を入れてもらいたい」という中で、細かいことを言えば、「診療券下付に要する手続につき、地方により甚だしく繁簡の差あり」というような、基本的な些細なことです。これを知っている人が「調査委員会」に入つてやつていたものですかね。

武田 それで、わりと早く上申書がまとまつたんですね。

大室 「扶助給付金を査定する場合、府県により著しく手加減に相違するものあり」とか、実際にいろいろなことがありました。遺家族とか、出征家族、留守家族に対するものとか、なかなかそういうものが最初うまく行っていなかったんですね。そういう細かいことをわりあいにな上申していると思います。これはすぐ政府が取り上げてやつていたという気がします。だから非常に効果があつたんじゃないかと思えますね。

武田 調査委員会の上申書は、まず評議委員会あるいは理事会で了承を取りますか。そのまま政府の方に行くんですか。

大室 調査委員会が決まつたものは、役員会に報告されますけれど、そのまま上申すべきものは上申するというをやっている。

というのはその中に担当理事が入っていますでしょう。だからふだんから経過の報告はしていますから。

清水 理事会で、ですか。

大室 ええ、理事会でね。だいたいこういう方向でこうだということはやっているわけです。それは一斉に五つの調査委員会の日にちを変えてやっていますから、なかなか大変なんです。そういうような委員会がありますと、私どもが受付をやつて、中に入つて。だって何人もいないんですよ。

武田 先生は速記もやられるわけですか。

大室 速記はできませんけれど、誰が発言したとかこうだとかということもやつた。私が全部やっているわけではありません。私がつたり、誰がつたり、交替で誰かいた。でも速記はとっていましたね。これはちゃんととっていました。

武田 理事会も、評議員会も全部議事録はとっていたんですか。

大室 理事会は速記をとっていないですね。理事会は私も入れませんから。評議員会は大勢で、用事があるものですから、そばにいましたけれどね。理事会だけは入れません、受付だけです。

武田 それはどういうことですか。

大室 それは、最高の話ですからね。理事会にわれわれが入ったらおかしいでしょうね。

武田 分かりました。では、そうすると「社会風潮に関する調査委員会」は――。

大室 結論らしい結論が出ていないんですね。大雑把なものを出しておりますけれど、非常に議論伯仲して、いろいろやつておりましたけれどね。私がつそのときに一番感じたのは、先ほどお話がございましたように、そのころの左翼系の人がおつたでしょう。その人たちもなかなかいろいろなことを言うし、極端なあれ「左傾化した意見」はなかったですね。ただ右の方の人が極端で、強いんだ。これには出て来ないけれど、歌の方で有名だった三井甲之

さんという人がいまして、これもどこかの教授でしたね。和歌で有名な方ですね。蓑田さんというのは、ワンワンやるんです。たいていほかの人はまいっちゃうけれど、その人が言つたからといって決まるわけではない。われわれが聞いていても、少し無理だな、というぐらひの話でしたね。

武田 詳しい話はおいおい思い出してお話ししていただくとして、「農山漁村に関する調査委員会」はいかがですか。

大室 「農山漁村に関する調査委員会」はみんな専門家が出ていましたね。名簿【資料3】は七十ページですか。月田藤三郎さんという方は途中で亡くなつてしまふんですが、産業組合中央会長、非常な人格者で、私ども何回かお宅に行つたりして、いろいろな話を聞きました。酒井さんは例の農業関係のことをやつていましたからね。松村謙三さんは、そのころの民政党の大物ですね。これも立派な方でした。

メンバーはごらんの通り、市町村会の市村「高彦」さんとか、水産会の一ノ瀬「福巳」さん。産業組合中央会の宮城孝治さん、この方がずいぶん発言していました。それから中央蚕糸会の加藤「知正」さん。中央畜産会の河野一郎、これは例の河野さんと「字は」同じですけど、「人は」違います。

武田 そうなんですか。中央畜産ですから同じかと思つていました。

大室 違うと思ひましたよ。そのころ有名じゃなかったですよ。それから深田雅治さん、山林会。獣医師会の加藤「眞吾」さん。満州移住協会。愛国農民団体、ここにも北山さんが出て来ますね。帝国農会の東浦庄治さんと、その次の愛国労働農民同志会の中澤辨次郎さんという方がいろいろなことをよく知つていて、この方が主としていろいろなことを言つていましたね。中澤辨次郎さんという人も、その方面では有名な人だったそうですね。あとは内務省の小林「千秋」事務官とか市来「鉄郎」事務官、文部省

からも山榊さんと山口「啓市」さん、ここには農林省から小平さんが出ておられます。企画院は田中長茂ですね。

武田 それから農政学者ですね。東畑「精一」さんとか。

大室 東畑先生以下は学者で、近藤「康男」さんもそうでしょう。横尾惣三郎さんもそうです。こういう人と一緒になってやりました。農山漁村というのはそのころあまり補助を受けていないんでしょうかね。そういうこともあったし、非常に困っていたのをずいぶん助けたような話をしておりましたね。これも内容についての答申をしました。

武田 十三年に答申を出されているんですね。

大室 これはずいぶん何回もやっていますね。調査委員会をやつて、特別委員会に任せて、内容の細かい検討をさせている。特別委員会というのは、八回ぐらいやっていますね。

武田 特別委員会は、調査委員会の権限でできるわけですか。

大室 調査委員会の中でいろいろ議論が出て来たら、とりまとめてやるために、特別委員を委員長が指名するわけですね。

清水 特別委員というのは、調査委員の中から何人かが任命されるということですね。

大室 必要があるときにはよそから呼びますけれど、だいたいその中の人です。だいたいその中でとりまとめておったと思います。特別委員会は七七ページに出ていますね。市村高彦さん、一ノ瀬さん、宮城さん、深田さん、佐藤貞次郎さん、東浦さん、中澤さん、東畑さん、国枝「益二」さん、こういう方々が八名指名されていますが、東畑さんは参考的な意見を出しています。特に宮城孝治さん、東浦庄治さん、中澤辨次郎さんあたりが、まとめ役をやっていたみたいな気がしますね。

武田 四番目が「家庭実践に関する調査委員会」ですね。

大室 ここでは松井さんと、月田さんと今井さんが担任になるんですが、松井茂さんが委員長ですね。メンバーがご婦人で、この

ころ婦人団体というのがあっても、いまみたいにあれ「国レベルで活動する」ではありませんでしょう。でも精動がご婦人の方をずいぶんよく使っているんです。これがいまの基礎になっているような気がしますね。というのは、一番先にこれを選んだとき、伊藤さんや瀬尾さんが選挙粛正で「これらご婦人方と」一緒にやっているんですね。選挙粛正中央聯盟の運動の中には、「婦人」参政権はないけれど、一緒になって選挙粛正を言っておられたんじゃないですか。そういうことがありまして、市川房枝さんとか、その他婦人の方とは懇意なんだ。だから伊藤さんと瀬尾さんの功績は大変なものだと思います。非常に和やかだった。

私はのちも関係しますけれど、市川さん、山高さんたちは事務局に来て、一緒に話をするぐらいでした。山高さんは、そのころは金子しげりというんです。山高は後で別れたから。婦人団体はまたあとから出てくるでしょう。そういう中で、杉山得一さんというのはどこかの団体の主事をやっていたかたです。

清水 国防婦人会ですね。

大室 国防婦人会ですね、これは事務局にいた。甫守ふみさんという人だとか、丸岡秀子、棚橋源太郎さん、石川ふささん、二本謙三、高島米峰さん、三武錠史さん、赤松常子さん、市川房枝、吉岡弥生、倉橋惣三、堀口きみこ、戸田貞三、暉峻義等、吉田久、道家斉一郎、原元助。原元助というのは役人で、情報官です。こういうような方ですね。その中で、七十一ページにあります、大日本連合婦人会というのがあって、ほかに国防婦人会、愛国婦人会というのがありますが、国防婦人会がいつも杉山さんという事務局の人が出ていましたけれど、本野久子さんというのは愛国婦人会で、この人もなかなか有名な方でした。それから甫守ふみさんというのも事情があったんですが。

武田 調査委員では、市川房枝さんなんかがまとめ役ですか。

大室 いや、そうばかりとは限らなかった。市川さんも相当まと

めていましたね。

武田 これは家庭の問題があるので、婦人運動家が多いということですか。

大室 そういうことですね。最初の調査委員会はー。

武田 家庭愛国運動とか、家庭報国運動とか、ちよつと名前だけ聞いてもイメージが湧いて来ないんですけれどね。

大室 「家庭報国三綱領実践十四要目」というのを作るんですね。それはどこかにありましたね。こんな大きなパンフレットをつくって書いてもらったんです。そういうものがこういう中に入っていたんです。中央聯盟の中にあったんですが、それがありません。誰かにやっちゃった。図書館にやったのかな。それにはみんなリーフレットまで綴じ込んであったんですけれどね。

武田 それはまた出て来ましたらー。最後に「実践網に関する調査委員会」ですが、これはどういう方がいらつしやるんですか。

大室 「実践網に関する調査委員会」というのは特筆してもいいんですが、委員長には中川さんという日赤の副社長さんがなられて、月田さんと二人が担当理事だったんですが、これは本当に、日本の下部組織について、非常に有能というか、関心があったり、そういうことを知っている方が集まっているんですね。

人数は少ないんですが、選挙肅正の方から松原一彦さん、選挙肅正中央聯盟の幹事をやっていた。報徳社の佐々井「信太郎」さん。報徳社も全国的な組織を持っていた。五人組とかをやったのはこの方です。それから帝国農会から青鹿「四郎」さんというんですか。それから産業組合から宮城孝治さんに出てもらっている。全国町村町会の市村「高彦」さんというのはどこかの村長さんだと思いませんか。青年団から栗原「美能留」さん、中央強化団体から古谷敬二さん、内務省の小林「千秋」事務官、文部省の清水「芳一」課長、柴山「直」さん、不破「佑駿」さん。農林省からも三浦「一雄」という総務課長が来ている。内閣情報部の方から、

小貫さんと西村「直己」さん。東京府の廣橋「眞光」さんは地方課長です。それから市からも動員課長の林清さん。大阪からも監査部長を入れて、民間的な婦人団体は市川さん一人が入っている。臨時委員としてあとでは平林「廣人」さんという人が入りますが、これはそういう問題が出たときのあれなんですね。

これはどういうことをやったかという、いろいろやったもの「決まったこと」を、組織ができていないから、組織をつくる必要があるんじゃないかということですね。どこかに系統的なものがあるんですが、昔は五人組とか十人組とか、部落によっていろいろやり方があるんです。全国のそういうものを集めまして、何がいいか。それで最終的にできたのが隣組で、部落会とか町内会にして、それを市町村にまとめて、それを郡にまとめるという組織をつくったんですね。

これは画期的なものだったんです。場所によっては隣保班といったり、いろいろ名前があるんです。隣組というのはそのときからできたので、名前がそうなった。これはずいぶんこの人たちの専門的意見が出て、この組織ができて、最後の最後まで実践網というつもりで、組織の確立のためにやりましたので、ほとんど出来上がったんですね。都市部は隣組、町内会のやり方。町村部になると部落会というようなことです。その隣組の会合を常会と称したんですね。部落常会とか。それをずっとやって全国的に、最後は一〇〇%近くできたんですね。

武田 これは精動のときにできるんですか。

大室 そうなんです。

武田 大政翼賛会ではなくて精動で、ですか。

大室 大政翼賛会ではありません。大政翼賛会はこれを利用したに過ぎないだけですね。大政翼賛会は、失礼だけれど、まとめてやったものがありますか。

武田 まあ、ないと言われていますけれどね。

**大室** 何もないんじゃないですか。あれは大失敗ですね。屁理屈ばかり言っていて。

**清水** 精動実践網というものです。

**大室** この実践網は本当の専門家が来て、いろいろ検討した。私も驚いたんだけど、いろいろな組織が昔からあるんですね。特に五人組、十人組というのは、江戸時代によく聞きますね。そういうものもあるし、藩によっていろいろあるんですね。神戸の近くでは隣保班とかいう。

**清水** 組織的なものを全国的に画一化したということなんです。

**大室** そうなんです。ここにあればいいんだけど、リーフレットをつくって、組織をつくったんです。

**武田** 簡単な図は私も見ました。これでしようか「本のコピーの組織図を示す【資料4】」。

**大室** これでいいんです。昔は五人組、十人組というのがありましたね。市町村によつては、市はこうやるんですが、部落によつては部落を大事にしなければならぬ。片方は町会でいいでしょう。それで両方でこういうものをつくったんですね。

**武田** そういう町内会、あるいは部落会を作ろうというアイデアは、内務省あたりから出てくるんですか。

**大室** いやそれは最初に五つの調査委員会をやったときから。内務省「から出た」ということでもないんじゃないですか。中央聯盟じゃないですか。

**清水** ほかの調査委員会に比べますと、この「実践網に関する調査委員会」というのは名前からしても特殊ですね。ほかの委員会は個別の問題を扱っている。銃後のことであるとか、農村のことを扱っているのに、これは普及という、どちらかというとハードを作っていく面ですね。

**大室** 要するにいろいろ運動をやってみているうちに、まだあまりやっていないわけでしょう。最初に考えたのは、中央聯盟とい

う団体を作つてやればうまく行くんじゃないかと思つてやつたわけです。ところがそれじゃあ一般には行かないでしょう。それでいろいろ考えているうちに、いまのそういう組織をつくらなければいかん、ということから実践網というのが始まった。これは非常に力を入れて、あとからでもいろいろな事業のときに、実践網の指導者育成協議会とか、錬成会とか、最後までやっています。できていないところがあるからですね。われわれも全国に視察に行かされたり、模範的なものがあつたら取り上げたりして、ずいぶん行きました。ただこれは非常に確立されて、いろいろな事業がかなりよくできた。

これは特色があるんです。「上意下達」ということがあると同時に、「下情上通」ということがある。これは私はえらいと思つているんです。何かやると必ず、下の意見も聞く。講習会をやったり、錬成会をやつたりすると、あとで集めた人の話を逆に聞いて、それを持つて来て、こういう意見がありました、とやるんですね。ですからむしろ、そのころの方が下の意見を聞いていたんじゃないかと思うんです。

**武田** これはかなり後のことですが、講習所とか、錬成所とかは、そういう下からの意見を聞く場所として考えられたんですか。

**大室** それは指導者の錬成会です。実践網に関することはわれわれのときからずっとやっています。なかなか決定しないわけですよ、昔のしきたりがあるから。名前も違うでしょう。五人組でやっているとところもあれば、十人組でやっているとところもある。ということとは、形態が違うから、隣組を作るといつても三軒しかないとかね。それはそれなりの方法を考えるわけですね。

**武田** また、十二月に地方指導者協議会『国民精神総動員運動』巻二・昭和十二年度・五七〇六五ページ参照』というのをやっているんですね。これは何日間かやっていますね。

**清水** 十二月七日からですね。各県でだいたい二人ぐらいの人を

呼んでやっているんですね。

大室 指導者協議会というのは、いろいろなところで何回もやっているでしょう。それは十二年度ですか。

武田 はい。

大室 これは、私も日本青年会館で泊まり込みでやらされたんです。われわれがいろいろお膳立てをする役で、ずいぶん飛び回ったんですね。最初の国民精神総動員指導者協議会というのは、中央聯盟ができて、国民精神総動員運動というのはどういうものかという趣旨の説明から始まっているんですね。

武田 実践網の話とはちよつと違うんですね。

大室 そこまでやっていません。それは、「中央聯盟が」できて、外郭団体の実際にやっている中心者を集めてやったんですね。なかなか厳しい話がたくさんあつて。幾日泊まったんでしたかね。

武田 十二月七日から十日までですから、四日間ですか。

大室 四日間ですか、朝早くから起こされたことを覚えています。このころは、「事変の真相に徹すること」とか、「我国内外の情勢に通暁すること」なんていうことを言っておりますが、ある程度、時局認識から始まって、これは甘くはないんだよ、というようなことが主だったと思いますね。それであとで実践網の指導者協議会とかいろいろありますね。これは何回もやります。

清水 そういう段になると、下からの意見の吸い上げということもやっていくわけですね。

大室 そうですね。このときもあとで意見を聞いていますよ。必ずそういうことはやっていましたね。

武田 それからもう一つ、加盟団体事務連絡会というのがあるんですね。これは加盟団体の代表者がだいたい評議員になっていきますね。

大室 評議員になっているほかに、事務的な方も入るんですね。片方だけでは無理がある。金はくれないけれど、通知が来る。そ

の人たちが傘下にこれをやらせるのは大変でしょう。それは義務的にやるんだ、というような格好で、趣旨を説明して、そのためにお金をやりたりするんじゃないんです。加盟団体にいくらかやっているのかと思ったら、やっていないんですね。加盟団体は大きいのも小さいのもあるでしょうけれども。そのころは、加盟団体のほとんどが各省の傘下団体みたいなものですから、よくやっていました。ところがそれでは全国民に均等に、というかそれほど浸透できないようなことになって、実践網というものがどうしても必要だということですね。

武田 なるほど。

大室 あとになって精動本部になると、もう加盟団体が中心ではなくなりますね。

武田 いまのお話でだいたい第一期の概要になるでしょうか。

大室 付け加えたいのは、お尋ねの中にもありましたが、地方大講演会というのがございましたね。それはここをこらんなつていただければわかりますが、東京、京都、仙台、横浜、大阪、熊本、札幌、函館の八ヶ所で行っているんですね。これらにつきましては、最初のころですから、時局認識が主なんです。こちらから出て行ってやっていたということ、ここから始まるわけです。

そのほかに講師派遣幹旋という話がございます。これはいろいろありますが、地元からの要請に対して出していたわけです。ですから旅費や講師に対するあれ「謝礼」はこちらで持つ。それがまたひっきりなしに来るんですね。それと同時に、私も最初にやっていたときに、印刷物、いわゆるパンフレット、薄いものですけれど、たくさん出すんですね。講演会があつたりすると、一番最初は「中央聯盟の結成について」なんていうものからありますが、そういうものがたくさんあると、できたときには、中央官庁、加盟団体とか、府県へ送るんですね。そのほか一般からも申し込みがあるんです。これは有料でやるんですね。それを

私どもは、そういうのが来ると、手続、発送をしたりなんかしているんです。こういうのが、いろいろ最初のうち、十銭とか五銭で来るんです。

それからもう一つ、最初に私が驚いたのは、堅忍章のバッジをつくったり、さつき言った絵はがきを作ったりしたんですね。これがそうなんです「絵はがきを示す」。これは造幣局でつくっています。堅忍章のバッジはこういうもの「実物を示す」ですが、これも十何万個つくっています。こういう本は「本を示す」、精動本部になってからですね。

武田 これは初期の段階でまとめてつくっているんですか。

大室 みんな中央聯盟でつくっている。

武田 後半になると作らなくなるんですか。

大室 ええ、もう最初だけで、「あとになったら」やりません。さつきごらんにいれました絵はがきがありましたね。

武田 こういうものも最初の段階で作ってしまっただけですね。

大室 そういうものについて、また申し込みがあるんです。なぜこんなものを、と私は最初は思っただけなんですけれどね。

清水 横山大観の絵はがきですね。

大室 それが最初は本当の金（きん）を使ったりしていたんですね。日の丸、これ「絵はがきを示す」はあとのものだから、駄目なんです「金（きん）」を使っていない。これは竹内栖鳳でしょう。それからもう一人、いろいろなものを作るんですね。これ「大観の太陽の絵の絵はがき」は本金を使って、とてもきれいなものなんです。ところがこの赤が大観が気に入らないんだ。こんな赤じゃないというんだ。私も原画を見たことがありましたが、それは素晴らしい。同じ日の丸でも違うんです。ところがだんだんやっているうちに金（きん）を使って贅沢だと言われるんですね。これは本金を使っているじゃないですか。これは一流の人が本気になって描いているんですから。これが単に赤ければいいか

という、許さないんですよ。この色は駄目だ、赤が違うというんですよ。それで金でできていて、とてもよかつたんですよ。いくつか持っていたけれど、みんなあげちゃった。それから、鷹と宮城を描いたものがあって、三部作なんですね。鷹を描いたのは誰でしたかね。いま珍しいものだけれど、こういうものもあるんですよ。当時の鉄道省から出ています「『東京を中心とする戦勝祈願神詣で』（地図）を示す」。

武田 こういうものを作った最初のころは、第一期ということでしょうか。

大室 そうです、第一期です。こういうものを出すでしょう。そうすると、こういうものが欲しいというのが来るんですよ。ところでこれがそのときの第一期の事務局です「事務局員の集合写真を示す」。

武田 その話もお聞きしたいと思っていましたが、一番最初事務は内務省の地方局でやるわけですね。

大室 それは本当に一週間ぐらいで、事務局を作りますということを決めて、中央聯盟ができてからはこっち「写真の背景の建物を示す」に移っているわけです。

清水 では大室先生がいらっしゃったときは、事務局は旧貴族院の中にあつたということですね。旧貴族院の中のどんな場所にあつた部屋で、どれぐらいの部屋ですか。

大室 旧貴族院は、これ「写真の背景の建物を示す」がそうなんです、事務局なんですね。昔は木造で、正門からも入れます。正式なものがあるかもしれませんが、ここが議場ですね「図を描く。以下、図を描きながら説明、【図一】参照」。ここから入って行くんですが、横の方を使っていました。廊下で行けるんですね。議場なんかはしょっちゅう見に行きましたけれど。いくつか部屋があつて、事務局がここ、ここが役員室、このへんに小使いさんが住んでいて、これが倉庫みたいになって、こういう本「精動の



パンフレットを示す」や何かがあつて、荷造りした。ここが会議室だと思いましたね。

武田 会議はだいたいここでやったわけですね。

大室 少ない会議の場合は、ですね。

武田 調査委員会などもここでやられたんですね。

大室 ここでやった場合も多いですね。むかし「貴族院で」委員会か何かをやっていたとみえて、それができる部屋なんですね。この図は、四つではなくて、もう少し部屋があつたと思います。

清水 会長の部屋とかもあるわけですか。

大室 役員室ぐらいで、会長特別の部屋はなかったですね。もう少し「部屋が」あつて、幹事なんかは別のところにいましたね。

「図を使って説明」日比谷公園の向こうが正門で、新橋の方がこっちで、こっちが虎ノ門の方の道でした。何か自動車屋か何か（清水 貴族院前はヤナセですね）がありましたね。

武田 貴族院のところに来たというのは、何か理由があるんでしょうかね。

大室 誰も使っていなかった。

武田 誰もいないから、場所が空いているということですか。

大室 あとで衆議院側で本位田祥男さんが、経済なんとか、何かやっていました。私は引つ張られたんですよ。これは雑談だからね。あまり余計なことを言つてはいけません。あるとき、私が辞めたときに来て、赤坂の方で一杯やるから来てくれと言った。それで飯を食つて、といつてもそのころだからろくなものがないけれど、馬鹿にご馳走してくれるな、と思つたら、その何かに来てくれと言った。いや私は辞めても行くつもりはないんだ。そのとき、総務課長か何かというけれど、そんなものできるわけないし。本位田さんはそのころずいぶんやっていましたが、一人だけだったね、やつてゐるのは。

武田 ああ、そうなんです。

大室 いや、いるんだけど、本人ばかりが目立つちやつていて。

いまの第一期というのは、非常にいろいろなことをやっています。全国からずいぶんそういうことがあるんですね。これ「新聞『国民精神総動員』の復刻版」はごらんになりましたか。もしあれなら、これをお持ちいただいて。経過的には、これと合わせるとうわかりやすい。これは全部揃っていますから、いろいろなことでわかりやすいんじゃないかな、という気がいたします。調査委員も出ております。

## ■第一期——精動運動の強化

武田 細かい話はまたあとで伺います。第二期ですが、十三年になると、機構改革があるんですね。

大室 十二年から始まつて、十三年になりました。「蒋介石を相手とせず」というのが出るでしょう。それで、いざ長期戦ということになるものから、十三年度の始まりが長期戦対策なんですね。そこで、片方では、調査委員会や何か、いろいろ答申もできましたし、内容的にも濃くなったものですから、組織をだんだん強化し始めたわけですね。

一番先にやったのは何かというと、いままでのようにごちんまりやつたのでは間に合わないということで、理事を増員しまして、大蔵省、商工省、厚生省、通信省、農林省の各次官を理事に入れるんですね。それと同時に、民間から新聞の関係を入れたりますんですね。これは大きな強化策になった。それから職員もずいぶん増えました。間に合わなくなつてしまふんですね。そのころになると、予算や何かもずいぶん大きくなつたんじゃないかと思ひます。わかりませんが。また、組織が強化されると同時に、新しく十九団体が入つて、加盟団体が増えるんです。やはり関係の団体です。『国民精神総動員運動』巻二・昭和十三年度・十三

ページ参照」。

そのときに始まったのが、「非常時国民生活様式委員会」ですね。いままでは、時局認識とか、挙国一致、尽忠報国、堅忍持久という日本精神の高揚につながっていたのが、今度は具体的に、銃後後援ということと同時に、「消費の節約」とか「物資の活用」になるわけです。その次に来るのが「貯蓄奨励」なんです。そういうことが実際の運動になると、各省がそういう必要性を感じても、みんな中央聯盟に持ってくるわけです。具体的に国民に通じる実践力がここにはありますからね。それでその後できたのが、「服装委員会」で、国民服を作ったり、国民儀礼章をやったりしたんですね。だから具体的にどんないろいろなことが始まる時期ですね。それからだいたい職員も増えてまいりました。それが十三年の三月ぐらいまでは、最初にできた頃と同じような状況でワーストと行っていると思うんですね。

武田 第二期は、官民一体みたいな感じですか。

大室 そうですね。官の関係の次官をたくさん理事に入れます。同時に民間からもたくさん入れて、いままで入れていなかった新聞関係とかも入れるわけですね。

三月ぐらいになると、物足りないというか、改革の話がいつも出るんです。というのは最初の第一期のときもそうだと思うんですが、十月から始めて三月までやって、年度末に話が出るのはどういうわけなんですかね。非常にいろいろな運動をやっているものだから、受ける方は「この仕事を」大きく感じているわけです。それにこっちももっと大きな仕事をしたいわけだ。そこでもっとどうだこうだとなる。それからだんだん職員を増強したり、予算も増えてきて、本格的にやって、十三年度をひとまわりやって、十四年の三月になるとまた始まるんです。これじゃ駄目だ、物足りない。そこで強化策が出るんですね。

十四年の三月に、第一期が終わって、二期目に入るときですが、

「事務局に」各部ができてまして、小松東三郎さんと湛増庸一さんという二人の部長が来たり、職員が本格的になった。いままでは総務係とかなんとかろくろく決まっていなかったような状況だったのが、きちんと職制ができるわけです。「国民精神総動員運動」巻二・昭和十三年度・二七ページ参照」。

武田 部と課ができるわけですね。

大室 ええ、部とか課ができてまして、人間もうんと増えて。それと同時に、そのころ新東亜建設とかいろいろなものが出た。平沼内閣になったのはいつでしたかね。

清水 平沼内閣になったのは昭和十四年一月です。

大室 十四年一月ですか。近衛さんから平沼さんですね。それで新体制とかなんとかいう話ができますでしょう。それで十四年三月に国民精神総動員委員会ができて、聯盟の改組強化ということがでてくる。みなさんがよくおっしゃる旅順がどうこうというのは、このときに大陸方面からの反響が非常に強いんですね。向こうに行つたものからみれば、国内の運動には物足りない点もあったんでしょう。いろいろなことがあつて、これは裏の話だからわれわれも本当のことはわかりませんが、そのときに初めて、陸軍の筑紫熊七という中将、これは満州国の参与をやっていた人ですが、これがこっちに乗り込んでくる。乗り込んで来るといっていいかわかりませんが、理事長として出てくるわけです。これはなかなか優秀な方なんだそうですね。政治家でなかなか影の実力者だという。ただ、小柄なおとなしい方でしたね。その方が事務局の理事長になりました、だいたい理事も増えるし、いろいろ変わるわけです。

武田 先生の本『渦巻く時流の中で』（七二ページ参照）を拝見すると、松井茂さん、岡部長景さん以外の理事は、すべて替わっているんですね。

大室 替わるんです。

**武田** この松井さん、岡部さんが残ったのは彼らがそれなりの有力者ということでしょうか。

**大室** 松井茂さんと岡部さんがどうしてそうなったか、わかりません。なんべんかやっていると出すかもしれません。岡部さんはその後事務総長になりますね。そういうこともあったんでしょうね。なかなか、いろいろなことをよくやってらっしゃる方です。

**武田** いま先生のお話で、大陸からの反響があったといいますけれど、精動は朝鮮半島や台湾とかでもやっていたわけですか。

**大室** いや、やっていません。やっていないけれど、時局はどんどん進展してきて、戦争が拡大されている。現場にいる連中にしてみれば、内地では何をやっているんだ、ということがあったんでしょう。一方で国民運動が起こっているけれど、物足りないという面もあったんでしょうね。それでわれわれがいつて、乗り込んできたわけではないけれど、推薦されて来たのが筑紫さんなんです。ところがやってみればわかるわけです。筑紫さんは非常に人格者で、立派な方ですよ。やったのは、満州国とか中国とか、そういうものを入れた経済懇談会みたいなことだけですよ。中央聯盟は、外地までやる団体ではないんですね。ところがそういうことを一回やりましたよ。青島だか大連だか、大きな市の市長さんが出て行って、経済的なことでしたけれどね。だから認識が違っているんですね。だから筑紫さんは、あまり余計なことを言いませんでした。それだけ自分の意志でやったけれど。

それから事務局の整備が行なわれまして、いろいろな点がうまく行ったわけです。変わってきたのは、物資の活用だとか、消費の節約ということがだんだん主になってくる。そうすると当然、公私の生活の刷新をやらなければいけない。

それからこのころから出て来たのが、その前からもありますが、勤労増進とか、体力増強。いろいろ戦争をやっていると、戦死者がだんだん増える。片方では結核が多かったりして、補充がなか

なかなわらない。同時に体力増強だとか体位向上ということをし、勤労増進ということを図りながら、そういうことを運動でやってきた。その一つが結核予防です。そのころは、厚生省ができてまもなくでしょう。

**武田** そうですね、このころですね。

**大室** そのときに担当の技師が来て、結核予防の運動をやりたいからと言って、私とその担当になって、「非常時なんとか結核予防国民なんとか」なんていう標語をつくった覚えがあります。われわれは素人だったけれど、楠本という専門の技師が来ました。うちのほうの部長と同じ長野出身で懇意だから、もう離れない。彼らは理論があっても、国民に直接やるやり方を知らないでしょう。だからこちらを頼りにしてきて頼むというので、ずいぶんいろいろ書いています。この厚い本『国民精神総動員』の中にあると思います。十四年のところに、結核予防なんとかという要項があるでしょう。『巻二・昭和十四年度・一二八―一五〇ページ』。それは実は私が起草したものです。でもずいぶんそのとき勉強していますからね。結核というのはこういうものだとすることを初めて知りました。北向きに寝るとか、ずいぶんあのころ、逆のことをしていたんですね。

**武田** あと、世論調査をされるのもこのころですか。

**大室** 私が企画に入りましたときに、全国的な世論調査というのは、そのころはないんです。そういう方法がないかと思って、いろいろ調べて、各新聞社とか図書館に調べてもらったんです。そうしたらみんなこういうことなんです。『新聞社や図書館から来た返信の葉書を示す。』世論調査をしていない、その方法も知らない」という文面。ないというんですね。みんなで調べてみても、何もないんです。日本にはありません。そのとき、中央公論だか文藝春秋だかに、外務省の囑託みたいな人が、例のアメリカの世論調査をやっているところがあって、そのことを書いたもの

があつて、それは非常に参考になった。日本でもそれをやろうと思つて、いろいろやっているうちに、案はつくつたけれど、ものにならないうちにおしまいになつちやうたんですけれどね。そのころ世論調査は、相手として商工会議所を利用しようと、そんなことしかなかつたんですね。これがそのときの原案なんです、これは世に出ておりません「薄い紙にタイプされた書類を示す」。

武田 これは第三期でしたのでまたあとでお聞きます。第二期でやられたお仕事は、結核予防以外に何がありますか。

大室 第二期には大坪「保雄」さんが来ているのかな。

武田 大坪さんがいらつしやつています。

大室 そのときに、予算を出せとかなんとか言われて、企画部の予算を作つたりしてありましたね。それからいろいろなこと、電気・ガスの節約について、なんてね。それは二人でやつたんですけれどね。それはおかしいんだ、私がどうしてそんなことをやらなければいけないか。

武田 先生は部課制ができたときには企画部に配属されたわけですね。

大室 ええ。

武田 「年史」を見ますと、昭和十四年六月には、先ほどお話があつた精動指導者の錬成所というのができているんですね『国民精神総動員運動』巻二・昭和十四年度・二〇八―二二二ページ参照」。先生はそれには関係されないんですか。

大室 ええ、それは指導者錬成所というのが別にありましたね。これは半分こんなことをやる「両手を合わせて拝むような格好をする」ほうで、冷たい水、川へ行ったり滝にあたったり、天照大神なんてやりながら、いろいろなことをやって、本当に肉体的な錬成を兼ねた指導で、なかなか厳しい。だけどこれをやった人はみんな、よかつた、と言つていますよ。私もこれ「拝む格好」じゃなくて、一回大寒のときに館山の海でやらされたことがあります。

すけれどね。辞めてから。これは非常に役に立つたですね。ろくなものを食べずに、もつんですもの。

武田 それから昭和十五年の二月になると、精動時局指導者協議会というのができます。これも先ほどお話が出ましたが、ブロックごとに分けて大会をするんですか。

大室 それは全国的なブロックごとにやる。

武田 錬成所とか、精動時局指導者協議会を担当している部局は何部なんですか。

大室 それは全国をやるから事業部だとか。全部でやらなければできないわけですよ。人数が少ないから。それで担当が決まつていまして、この部長は名古屋とか、福岡だとか。こっちはどうだとか。私が行つたり来たりしたということですか。

武田 そうですね。

大室 そういうことを言うとおかしいけれど、われわれがいないと心配になるのか何か、向こうに行つてみると、こっちにすぐ来いと言う。こっちに來ると、またこっちに來いと言われて、ひどい目に遭いましたよ。最初福岡に行つていたら、福岡は始まつていたからよかつたんです。そうしたらすぐに名古屋に來いというでしょう。そのころ、汽車ですから、名古屋に來るんだって十何時間かかるわけでしょう。福岡に行くには一昼夜二十四時間ぐらしかかるんですから。やつと着いて、私も福岡に行ったことはなから見物でもできるかなと思つたら、始まつたらすぐに名古屋に來い「と言われる」。名古屋に來たら、まもなく仙台に來いというでしょう。行かなくてもできているんだけれど。

それともう一つは、部長がみんな担当が違ふものだから。私どもは演説会とかいろいろなお膳立てとかやつていたせいですかね。そういう指導者協議会をやりますでしょう。必ずあとで感想をとるんです。良かつたとか悪かつたとか、意見があれば言いなさいという。そういうものをまとめたっていましたね。

武田 それは先生がまとめられるんですか。  
大室 私は講習会の現場の担当ではなかったですけどね。手伝いに行きました。

### ■ 第二期 — 精動聯盟から精動本部へ

武田 それで最終的には、国民精神総動員本部になるんですね。それが十五年四月でしょうか。

大室 この国民精神総動員本部になったのは昭和十五年からなんですけど、ちょうど平沼さんが替わって—。

武田 阿部信行、米内光政、です。

大室 精動本部になってから。その前の十四年九月ぐらい、要するに第二期のときですが、岡部さんが事務総長になって、理事の中に「諮議」というのをつくるんですね。そういうものをつくって、理事の中の何人かが出て来てやるんですね。

武田 それはどういう役目なんですか。

大室 まあ常任理事みたいなものでしょうね。

清水 それは諮議理事とは言わないで、諮議というんですか。

大室 はい、諮議という名を使う。

武田 理事と兼任するわけですね。

大室 役員なんですけれどね。それは青木さんと千石興太郎。これは農業関係で、非常に使える人でしたね。青木得三さんというのは大蔵省系でしたか、だから非常に円満でまとめ役で、貴族院が何かをやっていた。千石さんというのは非常にはきはきしていました。中村馨さんは陸軍中将、それは在郷軍人の方から来ている人ですね。それから花田「仲之助」さんは大臣をやった人じゃないかな。それから古野さん。私が一番印象に残っているのは古野伊之助さんだ。これは同盟の通信社長だけれど、戦後もずいぶん活躍していますね。これは実力者で、やることも早いし、言うこと

もはつきりしている。この方はすごい人だ、総理大臣ぐらいにしたいような気がしたな。守屋栄夫さんはなんだっけな。

清水 もともと内務官僚で、そのあと衆議院に出ています。

大室 ああ、衆議院で出ているんだね。それから吉田茂さんは、例の茂さんじゃない。われわれは「目白の吉田さん」と言っていたんだけど、これは大物です。西郷さんみたいな太っ腹で、厚生大臣が何かやりましたね。私どもは直接いろいろな話を聞いたことがあるけれど、非常に親しみがある人で、非常に大物と云う感じでした。それで常務に大坪さんというのが、内務省の保安課長から上がってきて、常務理事になる。戦後代議士をやっていますね。いまその息子がやっているかな。このときに各部ができて、総務部、企画部、事業部という三部になって、総務部長が湛増さん、企画部長が小松さん、事業部長が高山「一三」という内務省の官吏が来ている。それで、主事と言っていましたけど、課長連中も、さっき言った伊藤とか瀬尾。それから浮田さんが今度は課長になった。それから、多田「勲生」、宇野「正志」というのがなる。

そこでいまおっしゃった錬成所ができて、中村馨さんが確か兼任で所長をやっていて、代理が中村正一、課長クラスが星野弘一。中村正一という人が面白い人なんだ。得体の知れない満州浪人、何かそういうことをご存知ありませんか。われわれもよくわからなかった。

武田 知らないですね。

大室 特異な人でしたね。早くから来ていて嘱託になって、あとでわかったんだけど、高給を取っているんだ。だれかの引きで来ていたのかね。

武田 この第二期のときに来るんですか。

大室 早くから嘱託できていて、錬成所の所長代理になった。大陸から来た。右翼でもないけれど、そういう関係か、若いけれど

顔が利く人でしたね。

これまでにいろいろありますけれど、十四年に部ができたときぐらいからは、非常に内容が整ってきて、能率も上がっているんですね。いろいろなことがございます。このころになると、改革案が年度末になると必ず出る。ところがわれわれがいつも言っているのは、一歩後退二歩前進というのが普通のはずですけど、場合によっては二歩後退して二歩前進かな、というようなことがあった。ただ機構、組織が大きくなって、やっている基本には変わりがない。いまから考えてみますと、実際にいろいろやることについては、時局の認識だとか、物資の活用だとか節約だとか、生活の刷新だとか、勤労奉仕だとか、節米とかいろいろなことをやっていますね。そういう国民的な世論はみんながついてきているんですね。ところがこれでは物足りないというのは、もつともらしい指導的立場の人なんです。実際に部長にあたっていない人が、言いたいことを言う。それが例の改革の基本みたいなものになりますから、さっき言ったみたいに、一歩後退二歩前進ならいいけれど、二歩後退じゃないかという話になったこともある。

ですけれども実際には、精動というのは全般的に見て、内閣で困つてくるとみんなここに持つてくるんですね。電気・ガスの節約なんて、そんなものをここで、なんて言うんだけど、電気の問題があるでしょう。燃料の問題から始まった。ガスもそうです。そういうことをみんなこういうところに持つて来る。それで木を伐つて軍事的にも使うようになると、植樹報国だとか、そういうこともやるんです。いろいろなことをやるんですね。さっき言った結核の問題、健康の問題だとかもやるんですが、健康週間なんてやる。

ちよつと言い忘れたんですが、初期の頃に「勤労奉仕」という言葉が出て来ますね。これは例のドイツのアルバイト・ジンストという組織をずいぶん勉強して、それから話が出たんです。いま

アルバイト、アルバイトと言うけれど、いまのアルバイトというのは金を取るアルバイトだけれど、昔のアルバイトというのは勤労奉仕なんです。そういうところから「勤労奉仕」という言葉が生まれ、一般的になったわけなんです。そういうことはいまになってみると当たり前になっていますけれど、本当の勤労奉仕、アルバイト・ジンストは、いまなんていうんですか。

清水 ボランティアですか。

大室 ボランティアか。ボランティア的なものが本当なんですね。これはドイツから来ているんです。ドイツがこうなっている「勢いづいている」ときにいろいろやっていて、それを採り入れて始まったんですね。

武田 そういうことは、事務局の方で勉強されるんですか。ドイツの事情とかは。

大室 ずいぶん本を読んでいました。向こうの本なんかですね。だからヒトラーのことだとか、例の『わが闘争』なんていうのはみんな読んでいますよ。いまでも調べたらあつたけれど、あのころは「孫子の兵法」から始まって、いろいろなことを読んでいましたね。

武田 各種委員会ではアイデアを出すだけではなくて、先生のような事務局の方も、こういうふうにしたらいんじゃないかというアイデアを出すわけですか。

大室 そういうこともあつたと思います。運動が次々に来るでしょう。その運動についてどうやった方がいいということが、われわれには大いにあるわけです。電気・ガスをなんとかしろ、と来るわけでしょう。どうすればいいんだといつてもしょうがないから、難しくなく、みんなが読んでわかるようなものを出そうと、そのころとしては画期的なものなんです。つまらないことを書いてたんですね。電気・ガスをどうこう、といまになってみるとあれですけれどね。なにしろやるのが早いです。すぐに対応する。

**武田** でも、企画部の仕事というのは、こういう仕事があったときにどういうふうにするかということを考えるんじゃないですか。

**大室** これからどうするかなんていうことを考えている余地はないんですね。私がそういう中でやろうとしたのが世論調査だったんです。だから自分で文献を調べたりして、基本的なものをやろうとしたけれど、結局間に合わなかったんです。比較的そういうものの必要性は、いわゆる下情上通という意味で中央聯盟は認識していましたね。

**清水** 少し話が先走ってしまうかもしれませんが、世論調査をやるうと思われたのは大室先生ですか。

**大室** 主として私ですね。

**清水** なぜそう思われたんですか。

**大室** それはいろいろやるでしょう。そうすると、国民の本当の声を聞いてやらなければ政策というのはできないじゃないですか。会議をやって、錬成をやって、感想みたいなものを返してやるだけでしょう。そうじゃなくて、それぞれの本当の国民の声を聞く必要があるんじゃないかという意味からです。そのころは、「世論」という言葉をあまり使わないんですよ。学問的には群集心理だとか何とかいって。世論というのは「輿論」と書いたでしょう。そういうのを見て、いろいろ調べても、ないんですね。新聞社でも、そういう世論調査を「やっていない」。アメリカが一番進んでいる。ドイツなんかでもずいぶんやっているけれど、アメリカのギャロップが一番進んでいたみたいですね。それを真似してみようと思った。けれどその文献がないんです。さっき言った文藝春秋だか中央公論だかに、外務省の嘱託だった人が書いていた。それをとっておったんですが、それはずいぶん参考になりました。

**清水** それは時間切れでできなくなっちゃったということですか。

**大室** もう一つは、そういう大局的なことを言う余地がなくなっちゃったんですね。次々とやるべきことが多くて。特に昭和十五年に精動本部になってからはそうなんです。精動本部の話に入っていますか。

**武田** はい。このころの話はまた補充させていただきます。

**大室** 精動本部という名前になったと同時に、所帯も大きくなっていろいろやりましたけれど、総理大臣が会長になって、内務大臣が副会長で、こちらでは堀切善次郎さんが副会長になる。実際の事務局の理事長にもなされた。各省の次官は、いったん役人は全部切ります。民間だけでやって、それでまたうまく行かなくなると、各省次官だの衆議院だの、いろいろ入れた。両方いれば、わりあい強力なことができる。これが馬鹿にうまく行ったのは、各地方の知事を精動本部の地方の本部長にしたわけです。ですから官民一体というか、ずっと流れができた。前はよその民間団体がやっているのを応援しているとか、協力してやるということだったのが、流れが非常に良くなった。

それと同時に、時局がだんだん迫ってきた。精動本部というのは、全体がワーツとなってきた、仕事がものすごく捗った。捗ったからおしまいなんですけれどね。半年やって。そのときに始めたのが「贅沢全廃委員会」だとか、「企画委員会」だとかでしょう。食料の報国運動とか、新経済道德確立運動とかいろいろありますが、そこで目立ってやるのは、冠婚葬祭、新様式なんかやむを得ず、具体的なことがどんどんできるようになる。貯蓄奨励なんか、このときにずいぶんあがっているんです。一方で飛行機を献納したり、タンクを作ったりもしている。

それからもう一つは、基本が変わってから、小松東三郎さんという事業部長が特に功績があるんです。みんな雑誌でもマスコミでも、紙はないし、紙面は少ないし、手は余って、取られるものは取られているでしょう。広告代理店の専門家がいたのが、やや

お手上げになっちゃったんですね。そういう人たちを連れ込んで

きた。どちらかというとそういう連中は部外者だったから、それをみんな入れ込んでやったら、ガラッと内容が「変わって」庶民にアピールするようなものが出て来た。それが一つはぜいたく運動の中で、「ぜいたくは、敵だ!」というスローガンです。あれは広告人協会というのがありまして、その専門家たちが作った。

「ぜいたくは、敵だ!」というのと、「日本人ならぜいたくはできないはずだ」というのを裏表でやっただけです。「欲しがりません、勝つまでは」なんていうのは、名文句だと思いましたね。それで同時に、自分たちのやることとして、献納広告というのをやったわけですね。こんなあれ（マーク）をつけまして、自発的にやって協力してくれて、これはこうしますよ、というのをちよつとやってくれた。いろいろなことで、ずいぶん内容的に進むんですね。ところが、本当に仕事もできなし、いろいろな点で進んだときに、大政翼賛会になっちゃった。大政翼賛会というのは、いままでの精動から見たら、こんなに大きなものです。各省の小さなものを作ったようなものです。あれはどういうわけだか、あのバックというのは、近衛さんだから昭和研究会でしょう?

武田 まあ、関係していますね。

大室 ところが理屈ばかりでね。だって東亜局なんてつくって、ダーツと局を作って、各省がまたできたようなものだ。だから所帯は大きくなつたけれど、何もやることがない。私はその間、これが終わってから半年ばかり手伝っていました、なんとか協力会議というのがあった。

武田 中央協力会議ですか。

大室 国会と同じように、下から積み上げて行く中央協力会議。これは第一回の成果。それは書類もありますし、議案もありますけれどね。それをやったんですが、惜しかったですね。

武田 いま昭和研究会の話が出ましたが、昭和研究会は精動とは

全く関係ないですか。

大室 関係なかった。ただ、みんな知っていましたからね。あれは丸の内の赤煉瓦の「ビルが」あったでしょう。東京駅の前の丸の内に、三菱か何かのビルがあつて、その一角にあった。大將は誰でしたっけ。

武田 後藤隆之助。

大室 そうそう、化け物みたいな人ですね。最初に始めたのは、精動でも近衛さんですよ。最後の東條「英機」さんの前も近衛さんでしょう。それで見ていると、近衛さんは自分の意見がないですね。誰かがこう。だから昭和研究会の中では、有馬頼寧さんなんかもそうでしょう。

武田 有馬さんが大政翼賛会を支えるわけですからね。

大室 彼が最初に、大政翼賛会の総裁か何かに就くんですね。だから理論的にはこうであるけれど、内容はちつともないわけです。

武田 有馬さんも精動とは全然関係ないですか。

大室 前に何かでやっています、理事が何か。そういう意味では知っていますよ。農業関係の団体ですね。

## ■各総理大臣を回顧して

武田 近衛さんは精動運動には積極的だったんですか、最初にくきたときは。

大室 だって近衛さんが作ったんだから。それで最初るとき、われわれが一年生のときに、近衛さんが来て演説をするんだけど、ただ読んでいるだけだからね。ただ、あの方は雰囲気があるからね。特別の雰囲気がありました。力強さはないけれど。

さつきちよつと申しあげたけれど、理事がたくさんの方になつたけれど、そのころは大した人がいて、理事には立派な方が多かつたですよ。



武田 平沼さんはどうですか。

大室 平沼さんは阿部さんの後でしたか。

武田 前ですね。

大室 前ですか。その前は誰でしたっけね。

武田 その前が近衛ですね。近衛、平沼、阿部、米内。

大室 平沼さんが「総理」大臣になられたときには、「総理を誰にするか」困っていて、「平沼氏は」枢密院議長をやっていたらしいんですよ。年齢だから、というのを担ぎ出したんですね。ところが足下も少しあやしいし、あれだった。というのはその第一声を日比谷公会堂でやったんです。あれは二回やったのかな。徳富「蘇峰」さんと一緒にやったときにあったんですが、私が担当だった。平沼さんは足元がおぼつかないようだったけれど、声を出したらピリツとしているんです。大したものですよ。

そのころ日比谷公会堂で時局講演会とかやると、長蛇の列なんです。例えば一時に始まるとか、夕方五時に始まるとすると、二時間も三時間も前からワーツと並んで、日比谷公園の中まで渦ができる。あそこの定員は本当は二千何百人でしょう。それを四千人ぐらい入れちゃうんです。消防署がやかましくなかったからね。後ろの方は立っているわけです。通路には立たせませんでした。が、両翼にずっと立たせて、たいてい倍ぐらいは入れた。それでも入りきれない。平沼さんのときにはどういうわけか、全部で一万ぐらい来たんじゃないですか。それでいっぱい入ったけれど、あとはいれないので、館前に人がいたんです。それでマイクを用意したのかな、外にも聞こえるように。そうしたら平沼さんの二回目だか一回目だか忘れたけれど、終わってから前の人に対して、日比谷公会堂の二階のロビーみたいところから挨拶をしたんだ。それは全然予定外だった。平沼さんは謡をやっておられたので、声は常にしっかりしていた。身体はよぼよぼしていたけれど。そういうような印象でした。それはどこかに出ていますが、い

まで言えばハプニングというんですか、予定外のことを総理大臣がやられたんですよ『渦巻く時の中で』七七ページ参照。小泉さんじゃないけれど。なかなかしっかりしていた。

武田 阿部信行さんはどうですか。

大室 阿部さんは、「総理」大臣になってからすぐに辞められた。あの方は非常に温厚な方なんです。それで、何とか常識的な方ですから、威厳があるけれど、力強さというのは感じなかった。非常に良識的な方です。のちに選挙のときにあの方が会長でやりますけれど、やっぱりしっかりした人だなと思いました。その次が米内さんですね。米内さんのとき、十五年に、ここ『渦巻く時流の中で』(一三五―一三九ページ)に書いてありますが、有田さんの事件があるでしょう。

武田 有田八郎外務大臣ですね。

大室 そのころ有田さんは、自由主義的で英米に偏っていると見られていたんですね。だから右翼から狙われておりました。あれは何でしたか、支那事変三周年の演説会でしたかね。日比谷公会堂でやった。そのときは情報が入ったんです、右翼がいたずらをするんじゃないかと。日比谷の公会堂は、ご存知の通り、壇上が高いでしょう。このくらいまで「胸ぐらいまで、と高さを示す」ありますからね。そこへずつと、一メートルおきぐらいに警察官が立つ。入るときも厳重にチェックして、その日はあまりぎゅうぎゅう入れなかった。外にもいますからね。それで米内さんが「演説を」やって、陸軍大臣は誰だっけ。

武田 畑俊六。

大室 そう、それから海軍大臣が吉田善吾かな。そういう連中が「演説を」やって、有田さんの番なんだ。有田さんになったら急に野次が飛ぶんだ。連中は本職だからうまいんですよ。こつちで言っただけで、あつちで言ったりしてね。そのうち真ん中あたりで立ち上がって「有田、どうだ、こうだ」という。そうすると

警察官が寄るでしょう。その隙に、一番前にいた若いやつがバンと飛び上がった。有田さんは、テーブルのここ「壇上左前」に松の木鉢があつて、こうやって「壇に手をつけて胸を張って」話をしているところに對して、いきなり飛びかかった。

武田 何か持っていたんですか。

大室 それは、「嚴重な警備を」やっているから何も持っていない。ところがそういう情報を知っていたから、うちの宇野「正志」という宣伝課長が、予備の陸軍少尉か何かだった。そういう席には、片方は総理大臣、こちらは情報部長がいて、堀切さんがいて、こっちの部長が司会だから座れないわけです。ところがなんとか名目をつけて軍服を着させて、一番端に座らせていた。向こうが手をつけると、「宇野氏が」バツと飛んでいって、向こうがこうやってきたとき「有田氏に殴りかかろうとしたとき」に、こっちがこうやって「殴ろうとした腕を取り押さえて」、取っ組み合いになった。ドタンバタン、ドタンバタンとね。「宇野氏は」小さかったけれど、柔道初段だったからやらせたんだろうけれど、いい勝負だね。

ちようどそのころ、袖の上でラジオが中継していた。そうしたらドタンバタンがみんな入っちゃう。中でウワァーッとやっているでしょう。外にいる人もみんなびつくりしちゃっているわけだ。外でも何千人と聞いている。そのあいだ、さすがに大臣だ。有田さんはこうやって「先ほどの姿勢のまま」身構えて、たじろぎもしないというやつだ。米内さんは目をつぶってこうやっている「背筋を伸ばしている」んだ。そして陸軍大臣の後ろにはいつのまにか憲兵が立っている。海軍大臣のところにも、なんていうのか憲兵みたいなのが後ろにいる。ほかに普通の大臣がいましたね。そこには誰もいない。それでどうしようかと思っているけれど、米内さんがこうやっている「じつと瞑目している」から、動くことができない。みんな黙って座っているわけだ。こっちの連中も

座っているのは何もしない。ただ見ている。そのうち警察が舞台の後ろから来て、やつとふん捕まえた。

そのあいだ、ぎゃーぎゃー言っている状態でしょう。司会者がお静かに願います、お座りください、とやっているんだ「両手を前にあげて、静まるように上から下におろす」。私はしょうがないから反対側の袖で、声を出すわけにはいかないけれど、こう「両手で静めるような動作を」やっていたんですね。担当でしたからね。それでやや静まったかと思ったら、表の方でワァーとなつてくる。最初はラジオもやっていたけれど、ラジオは切れてしまふ。それで外が騒いでいる。どうなることかと思つたけれど、後は続けてちゃんとやりました。そんなこともありましたね。

武田 もう大政翼賛会になるかならないか、という時期ですが、かなり時局も危なくなっているし、国内でも右翼も左翼もいろいろ活動している時期でしょうかね。

大室 それが十五年ですね。だから内外の情勢がだんだんこうなっている「困難になつていく」ときで、日本もどうするかということ、あとになつてみるといういろいろありますけれど、そういうときだから、いろいろあつたんですね。そういう意味では、米内さんが総理大臣になつてからかな。必勝祈願で明治神宮に精進の役員と並んで行った。そのときも情報が入って、ことによつてやられるかもしれないので、われわれが――。そのころは警察官をどうしてやらないんだか、われわれが――。われわれがいたつてすぐにやられちゃうんだけれど、若いやつが前の方で両側から並んで行ったことがあつたけれど。

武田 米内さん自身も英米派だと見られていたんですね。

大室 いや、そうじゃないですね。米内さんというのは、われわれは情報を聞いていたんだけれど、最後になつてくると、米内さんもだいたいお頭に來ているらしいですよ、新橋あたりでもって荒れていますよ。ということが後になるとわかるんですね。例の開戦

の間近になっていろいろなことがあったんでしょね。

武田 そのあと大政翼賛会になるということですね。だいたい全体的なお話は聞きましたね。

大室 どうもとりとめのない話になって申し訳ありません。

武田 それでは今回はこれで終わらせていただいて、次回はいろいろな資料をまたまとめてまいりますので、先生が実際に働かれたご経験を中心に、講演会に行ったときにご苦労された話なども少しまとめて、精動の時期のお話をお聞かせいただくことにしたいと思います。

大室 どうも私の話は尻切れトンボで、お恥ずかしい。だいぶボケているから。いろいろ用意したけれど、その用意したものが見つからない。

武田 また速記をお送りしますので、また見ていただいて、赤を入れていただければと思います。

大室 わりあいにもそういう資料的なものはあると思っています。また後で、必要なものはいずれもお持ちください。

武田 それでは今回はこれで終わりにいたします。

馬場 「東京鉄道局の『東京を中心とする戦勝祈願神詣で』の地図を示して」大國魂神社が入っているのは、先生が選んだからですか。

大室 いや、全然関係ない。これはこのあいだ見て、びっくりしたんです。とってはあったけれど。いま観光協会どうだこうだ、言っているでしょう。これはよく知らなかったけれど、とってあった。これは協力する意味で鉄道省がやったんでしょね。

馬場 これは何年頃につくったんですか。

大室 たぶん昭和十四年頃だと思いますよ。

清水 割引があるんですね。

馬場 スタンプラリーみたいなものですか。

清水 比較的昔から、鉄道局の作るものにはあるんですよ。

武田 私の実家はここなんです。梁川。靈山神社に初詣によく行きます。

大室 大きな神社が書いてあるんですね。

清水 うちがあっちですね。戸隠ですから。

武田 先生、先に今回の日程だけいただいてよろしいですか。

## ■三多摩の地盤争い

武田 ところで、前回お話があった中村亨さんについて、お父様が書かれた記事があるということですが――。

大室 私もこっちのローカルの秘話の中で書きたいと思っているんですが、そのころ、代議士の候補者になるには、北多摩郡なら北多摩で有志が集まる。あれは政友系ですから、各町村が集まって候補者を決めるわけですね。中村さんというのは前にやっていたんですが、調布の人で、おとなしい立派な方なんですが、そのころの話をするとお金がないんですね。ですから、だいたい代議士をやって使ったりして、井戸堀までは行かないけれど、そんなに余裕がない。

ところが諸江吉五郎さんという村山の人山林を売って十万円ばかり入った。これ使ってやるんだ、という話なんです。そのころ表（おもて）にそういうことが出るのはおかしいんですが、最初に称名寺の広間に北多摩中の人が集まって協議をする。そのときには中村さんがいままでやっているんだから、中村さんでいいんだろうと決めた。ところがいまの諸江さんがお金があつて、その次に決めるようになったら、いっぺん決めといて、みんな諸江さんになっちゃった。そこでうちのおやじだのはその会議に出ているんですが、いわゆる、そのころでいえば正義的な何人かで立ち上がって、そんな馬鹿なことあるか、と言うけれど、押し切られちゃうんですね。そこで、有志が集まって、本当に草鞋掛

けで駆け回ってやるけれど、落ちてしまう。両方落ちてしまうんです。ところが諸江吉五郎さんというのはみんなこうやった「金をばらまく手振りをする」ものだから、あとで郡内の有志がみんな捕まってしまう。各町村とも捕まらない人がいなかった。

清水 諸江さんは落選なさったんですね。

大室 落選。

清水 それで捕まったという話になるんですね。

武田 政友会が分裂して共倒れになるんですね。

大室 それで面白いのは、府中町からもういぶん捕まっているわけです。その人たちの慰問に何とかといって、金を集めていて、出しているんです。

清水 それはどちらでやられているんですか。

大室 府中から捕まった人がいるんだ。あまり具体的なことは、隣の人とかね。偉い人で、青年団長とか町会議員をやったのが、何人も捕まるんです。そうしたら、こっちは地元だから、終わっただから、気の毒だから、その人たちの応援のために助けてやろうという文書がありましたよ。

清水 選挙が終わった後の手打ちというか、仲直りというか、そういう作業なんですかね。

大室 もともと仲間だったんだけれどね。中村さんという人も、それだけの人格者であるけれど、もう一つ足りないものがあつたんですよ。それが柏屋なんです。

馬場 捕まったって。

大室 柏屋の田中三四郎、そのお嫁さんが中村さんの娘なんだ。田中さんというのは明治天皇の行在所なの。そこに何回もお泊まりになった。

馬場 府中宿で一番の高持ちだったというおうちなんですね。

大室 名家だったんです。呉服屋さんと酒屋の小売りをやっていて、昔から名主まで行かないけれど、なんていうのか。

馬場 百姓代。

大室 そこがそういうことで、関係の人たちをー。

馬場 それがきっかけなんですか、ちよつと肩を持たれたのは。

大室 そうなんだ。前にも応援していますからね。頼まれてやつたんでしょうけれど、それで今度あれをやるわけです。あのころは、普選ではありますけれど、有権者も少ないですからね。

武田 近代の政治史の研究をしていますが、三多摩あたりの地盤の話とか、どういう政治家がどういう応援をされて出て来たのか。本当に有名な方がたくさんいるんですね。中村高一さんもそうだし、昭和でも津雲「国利」さんとか、本当に聞きたいことはたくさんあるんですけれど。

大室 私なんかは、中村高一さんととも懇意なんです。中村高一さんは社会党ですけれど、向こうの方が私をよく知っているんだ。私は小僧なんですけれどね。津雲さんもよく知っている。それから、私はいま選挙のことをちよつと書いているんだけど、私が初めて選挙権を持ったときが、例の昭和十七年の翼賛選挙なんです。そのときにこちらから出ていたのが、津雲さんとヤスナミさんと坂本一角。坂本一角が一番危ないというので、私は坂本一角に入れた。あまり好きじゃないんですよ、あの人は。拓大の教授か何かやっていたけれど、だいたい柔道が強くて、悪い人じゃないけれど、あまり役に立つ人でもない。

武田 ぜひその話を。

大室 そういう参考になるか。それで年代は私の方がずっと小僧ですからね。ただ知っているのは、津雲さんも久原房之助の関係でずいぶんやって、ひと頃は飛ぶ鳥を落とす勢いだったんだ。すごいんだ。久原さんは金も持っているだろうし、一方の旗頭だったでしょう。うちのおやじも最後には津雲さんを応援していますからね。私もよく知っています。翼賛政治会というのをそのときにやった。晩年は、あの人が一番いいところは、仏像を建てたん

ですね。

清水 それは念珠仏ぐらいの大きさのものまでなんです。

大室 そんな大きいかどうか知りませんが、おやじなんかよく知っていましたよ。いまでもいくらか残っているんじゃないかな。晩年ひと頃のいわれはなかったですね。なんとなく人気もなくなつたですね。それはしょうがないですね。それはひと頃は、議会の中でも大したものだった。

武田 そうですよ、津雲さんは。

大室 先生もよくご存知ですね。

武田 僕もそのへんをずっと研究しているの。

大室 一つわからないのは、その前の村野常右衛門が出ている頃なんです。

武田 三多摩壮士からお話ししてください。

清水 逆にそのへんは私が聞きたいところです。

大室 こっちは子供のときですからね。ただおやじがそれを聞いたなんて、町田の医者が殴り込みをかけられるでしょう。なんといつたかな。三多摩壮士というのがいて、その反対側が来て、お風呂に入っているときに斬り込みに来るんだ。

清水 三多摩というのはそういうところなんです。

大室 そのへんの話の中で、うちのおやじが当事者から聞いた話がメモにあったんだ。

武田 先生、それはぜひまとめてー。

大室 そのへんはあまり自信がないから。

武田 いえ、思い出さなければいいんです。

清水 お父様から伺われた話、ということでもけっこうです。

大室 だからね、私なんか色川大吉さんの話なんかあまり信用していないんです。

武田 私も信用しておりません。

大室 あんなものはね。それからもう一つ、府会議員で面白い話

があるんです。無産党というのがあって、村山から出ていた人がいるでしょう。なんといったかな。府会議員だと、こっちから吉野豊次郎という人が出るんです。吉野さんが出て、向こうに行つて何か物を配つたとか、やつたとかやらないとかという話が出て、後援者である幹部の人、府中の人に脅しが来るんだ。実際にはそういうことではない。だんだんやつていって、最後に泣きが入つて、お金がなくて、どうしても三百円欲しいので、という。それが無産党かなにかの党首になつていっているんだ。そのやりとりの手紙を持つていっているんだ。

武田 本当に日本の政治史をやるときに、そのあたりは、かなり抜けているところなんです。

大室 でもこっちの関係とか、翼賛選挙なんかはわりあい知つていの方じゃないかと思えますけれどね。ただ津雲さんでも、翼賛政治会に入る。私も「翼賛政治会、どうだ」と言われたんだけど、その事務局なんか。いやおれはそんなものやらない。選挙が終わつてからね。あれをつくつたあれを知っていますし、いろいろなことがありました、あのころの津雲さんはすごかった。

武田 中村高一さんが、『三多摩社会運動史』『都政研究会・一九六六』という本を書かれていますね。ああいう類の本があまりないんじゃないでしょうか。

大室 中村さんは早稲田の出身で、社会党で内閣ができたなら警視總監かと言われた人ですね。どういうわけか向こうがよく知つていのは、中村さんが出て来たときに、このへんの人も応援しているんですね。若い人も。それで私なんかその理解者だと。そういうことを言うとおかしいけれど、私が選挙をやるとわりと影響力があるものだから、中村さんを直接応援したんじゃないけれど、いやあの人だつてこうだ、と言つた程度だが、それが中村さんの耳に入つていて、本人が私のことをよく知つていっているんだ。何回も会っています。それは、社会党だろうが共産党だろうがいろ

いろいろありますけれどね。中村先生なんかあまり認識がなかった。ただあの人は酒を造る酒屋さんだ。西多摩から出ているんです。あれは千代鶴と言ったかな。だから酒屋の関係でね。私も、酒屋の関係で参議院に出るなんて言われたことがあるけれど、とんでもない。どうもつまらないことを言っていました。

武田 だいぶ時間もオーバーしましたが、また次回、よろしくお願いします。

大室 どうもすみません。よくわかりませんが、本当に申し訳ありません。

武田 みなさん最初のうちはたいていそうおっしゃいますから。

〈以上〉

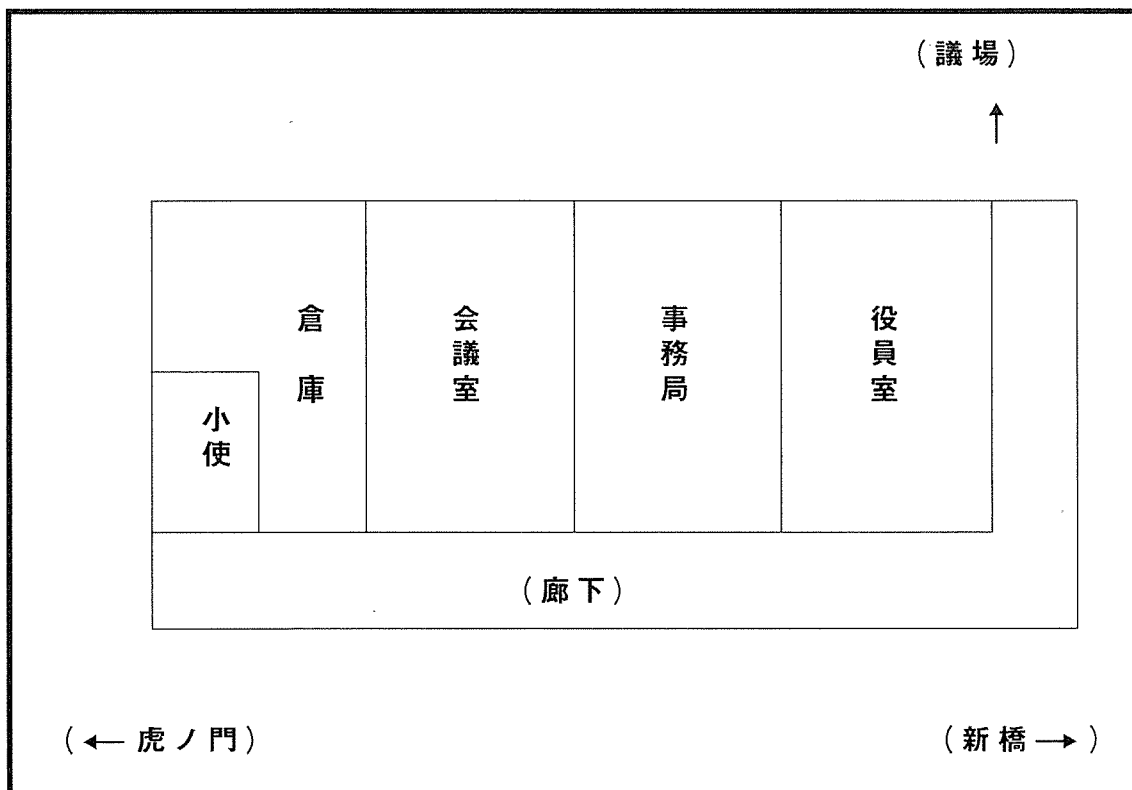


図 1

# 大室政右 オーラルヒストリー

## 第3回

---

日 時：2002年8月30日（金）

13：30～16：30

場 所：大室政右宅（府中市）

【インタビュー】（肩書きはインタビューの時点）

武田 知己（政策研究院特別研究員）

清水 唯一朗（政策研究院リサーチアシスタント）

馬場 治子（府中市郷土の森博物館学芸員）

## ■第一期精動の仕事

武田 始まる前に、うちのプロジェクトで出している冊子です『竹本孫一オールラリストリー』を渡す。

大室 竹本孫一さんというのは、元の企画院か何かにいた人だね。こういうふうになるんですか。

武田 はい、先生のこのインタビューも、だいたい同じような感じになると思います。

大室 よく頼まれて話をするんだけど、速記をそのままとっていると、とてもおかしい話をしている。聞いているときは、みなさんそう思わないけれど、書いてみると本当にひどいものだと思う。

清水 そんなことはありません。

大室 だけど、読んでいると恥ずかしい。

武田 いえいえ。前回の速記も充実していて、たいへん面白く読ませていただきました。

大室 やつているとだんだん思い出してくるんですけれどね。ただ、これ『渦巻く時流の中で』一九八八年」を書いた頃は、意欲が多分にあったんです。なんとかしたいということですね。資料もあつたし、一気に書けたんですね。もうふた月ぐらいあれば、完結したんですけれどね。これは私が都議会を四回やったときで、もう辞めるよ、と五月頃宣言して、六月頃からこれを始めて、八月頃までに個々にわかっていることだけ集めて作業をした。そうしたところが、八月末になったら、あと『の候補』がないから駄目だということで、最初から『新たな選挙運動を』何もやらないんだ。

清水 選挙は何月でいらしたんですか。

大室 その次の年「一九八九年」の七月なんだけれど、秋頃から準備しないといけないわけです。選挙は半年前からやりますからね。支部とか何とか組織があるでしょう。新しい人を決めて、

いろいろな会合をやったりするんです。それでしょうがない、これをやめた。本屋の方も半分選挙と思っていたんでしょう。私のほうは選挙をやめるつもりだったから、これ「同書の口絵写真など」がなくても構わないけれど、本屋はあつた方がいいというのですよ。本にこういうのはあまりないよ、と言ったんだけれどね。それでとうとう、この本はお蔵にしちゃって、関係者に配っただけでやめちゃったんです。だからいまでも五百ぐらいあるのかな。私の念願は、この最後に書いてあつたでしょう。精動時代とポルネオと、それから翼賛選挙の三部作ですね。それでちょうど十年間やつているわけです。昭和十二年から。だから、まあいいところなんです。

清水 これは今日の参考になればということで、「精動が」本部になりましたときの事務局の組織図をわかりやすいような形でつくってきました。あとでその話の時にご参照ください。

大室 これは最終の時ですね。精動本部の時にきちんとつくったんですね。あと今度これ「精神総動員」の新聞合冊版」をお持ちになってください。これを見た方が早いですね。順序がわかります。結構長いものですけれどね。このときになって、編集者が違つてくると内容が違ふなと思いますね。

清水 その新聞、機関紙はずいぶん数が出ていたんですね。

大室 いや、たくさん出ていたんです。精動本部というのは一年やっていないのに、あれだけやつているわけでしょう。ただし薄っぺらなもので、その頃はパンフレットといわなかったけれど、小冊子です。演説会をやるでしょう、大臣なんかがやると、速記しておいて、一週間後ぐらいで出しちゃうんですから。新聞社の連中だから早いですね。この広報を見てみると、最初のころは何でもやるから、泊まり込みで印刷屋に行つて校正をやったんですが、なにしろ早いです。編集者が新聞社の連中だから、その日のことでも明るる朝出ぐらいなんです。月に二回しか出さ



ないんですけれどね。その日のものはだいたい明くる日の新聞に間に合っているんですね。こういう広報では珍しい。

武田 そうですね。それだけみなさん、情熱を込めてつくられていたんですね。

大室 最初のころのことは、スタッフが少ない代わりに、すごくよくやったんじゃないかな。

武田 精動のあとの新体制の話とか、大政翼賛会の話はけっこうわかっているところがあるんですが、精動のことはあまりわかっていないので、大変面白く思います。

大室 あとで話がありますが、途中で大政翼賛会になってしまつて、その大政翼賛会の結末がつかないうちに戦争になってしまつて、それで負けたものですから、なんだかわけがわからなくなつてしまつたけれど、実際の精動の働きはすごかつたんじゃないですか。いままでの国民運動というか、政府がやつたにしてもね。ちょうど軌道に乗ってきたときが変わつて、大政翼賛会になつちやつたんですね。その頃はもう新体制なんとかといういろいろな名前が出ていましたからね。

清水 ではよろしいですか。前回のインタビューでは、精神総動員運動の概要ということで、最初から最後までの流れをお話しいただきました。今回は詳しいこと、より各論的なことを、先生ご自身の体験を中心にお話しいただければと思います。先生がご所属されていた部局でどういうことをされたかとか、先生ご自身の目からごらんになつてどういうふうにお感じになつたか、ということを中心にお話いただけるとありがたいと思います。

大室 昭和十二年から十三年が第一期ですか。このころは、私は本当に使い走りみたいなもので、何でもやっていたので、主導権的なものをもつてやつたものはありません。ただその中で、重宝に使われたことは間違いないですね。何でもやるわけですからね。

演説会にも行けば、受付もやれば、会議であれ「文字を書く手振りをする」もやつたりして、だんだん慣れてきたわけです。十二、十三年度は庶務というわけでもないけれど、人数が少なかったから、何でもやる。それで十三年四月ぐらいから、だんだん職員も増えてきていますね。しかし給仕さんとタイピスト以外では、私が歳が一番下なんです。ですから順序で行くといつも下の方だけれど、仕事はその連中の頭みたいな仕事をしていたということかもしれないね。

清水 先生のこの時期は肩書きは、なんというものでしたか。

大室 事務員か書記でしょう。事務員かもしれませんね。

武田 そうすると、仕事で、直接大室先生に差配してくださる決まつた上司はいらっしゃらなかったんですか。

大室 そのころ、昭和十二年度、十三年度は、伊藤「博」主事と瀬尾「芳夫」主事が本当の仕事をやっていた。瀬尾さんというのは事業部になつていなければならないけれど、実際には広報をやつたり、パンフレットをつくつたりしていた。これまた早いし、たくさんつくります。伊藤さんというのは総務課長であるけれど、いろいろなことを全部やつていた。

清水 では先生は、どちらかというとい藤主事の指揮の下で動いていたわけですね。

大室 それでも、瀬尾さんがやっている広報があつて、間に合わないで夜行くと、終わったら朝の五時になつたなんていうこともあるし、何でもやつたわけです。だから何でも覚えたわけですね。事務的なことでも、そのうち官庁付きの起案も当たり前になるようになりました。

それで昭和十四年になつて機構改革をして人数が増えてきますね。それもまだ、広報なんかを見ていると実際とは違うと思う。最初は企画部と事業部で、なにしろ部長が二人しかいないんですからね。新聞を見ると、庶務部に経理部なんて「書いてあるけれ

ど」、そんなものはなかったですよ。部長がいらないんですから。その次になると、また機構改革の中で出ていますけれど、総務部と事業部みたいなものができて、幹事が小松東三郎さんと湛増庸一さんです。小松さんというのをご存知ですか。

清水 はい、私は地元が近いので。

大室 じゃあよく知っている。

清水 長野の上水内の方でしたね。

大室 そうそう。お父さんがお医者さんですね。だから長男じゃないんでしょうけれど。それで報知新聞で、記事になる人ですよ。最後は報知新聞の政治部長をやっていて、報知新聞がなくなつてからこつちに來たんですね。最後に海軍の方に引つ張られて、民政部の情報課長になつた。それで私はついて行つたんです。

清水 小松さんのお話も、セレベスに行かれるところで詳しくお伺いしたいと思います。

大室 そうなるとキリがなくなつちやう（笑い）。私は小松さんの子分みたいなものですからね。あの方は二・二六、岡田「啓介」さんでしたね、のときにスクープ記事を出しているんです。あれはみんな、ほうほうに砂を撒かれたり、新聞社はやられたでしょう。脅されているときに、報知新聞だけは出しているんです。というのは、記事を書いて、消して出したんです。

武田 記事を書いて消すというのは？

大室 みんな書けないわけですよ。朝日新聞なんかは、砂を輪転機にばらまかれたし、そうでないところも脅かされたわけです。そこで考えたのは、記事を書いて、見えないように、わざと書いたものを消しているわけです。だいたい何かあった、ということとはわかるでしょう。

武田 報知新聞はそういう形でごまかしたんですか。

大室 そういう形で、それを出したのは報知新聞しかない。それからもう一つ、五・一五の始まりかな。五・一五のほうが先です

ね。その時もスクープを出しているんです。新聞記者の若いときで、官邸にいてね。だから長野新聞が、長野の人物評の中にそれに近いことを書いてあります。

清水 信濃毎日新聞ですかね。

大室 そうかもしれません。何か知りませんが、長野の人物なるとかという本が出ていますよ。あれは戦争中に出たのかな、戦後かな、今度見つけておきますよ。この方も、そのときはすごいですね。

清水 さきほどの組織のことですが、「大室先生は」総務系の事務職をされていたということですね。

大室 総務というより、みんなが何でも屋なんです。事務局の内容を申しあげますと、伊藤さんと瀬尾さんがいますね。瀬尾さんの方の出版は、田家君「漢字は大室氏の説明」という人が一人しかついでいません。これは何か、そつちの方の關係をやつていましたね。だから会議にも出てくるけれど、記事も書いたりしていました。全部まとめるのは瀬尾さんがやつておられました。

伊藤さんはそのほかのことを全部やっているわけです。經理の監督もやつていた。それで庶務的なこと、辞令を書いたり、いろいろ書いたりすることは大蔵省から來た属官、判任官というのがいたでしょう。西山さんという年配の人でした。經理の方は内務省から來ていた後藤さんというのがいるんです。これも属で、これまた上がりだかなんだか知らないけれど、二人は仲が悪いんです。常にいりがみ合つていて、どつちも自分を売り込んでいた。ところがどつちも仕事があるのすぐよくできる人でした。大蔵省の属官だったり、内務省の属官でした。特に西山さんは字が上手で、辞令なんか書いていました。私も一度、途中で伊藤さんに、「君、これを書いて」なんて言われて、簡単な辞令書の「○○ヲ命ズ」なんていうのを書かされたことがあるんです。ところが私は筆で書く字が下手ですからね。それは西山さんがやつているけ

れど、なかなかやかましいんですよ、「こんな筆じゃ書けない」とか、墨がどうかという。

武田　こだわりがあるんですね。

大室　いやだとなると、必ずそう言うんだ。たしかにそれは立派なものですよ。私ももらったものを持っています。だから、字が下手でよかったと思う。そうでないと、庶務でずっと捕まっちゃう。そんなことで、最初の昭和十二、十三年は何でもやったわけです。それで私より若いのはタイピストと給仕さんぐらいで、そのうち何人か来たかもしれないけれど、それはずっと後ですね。十三年になって、教員上りの人だとか何人か来るんですけどね。それで十四年からは、部がはつきりできて、部長、幹事が二人増えますね。小松、湛増ですね。湛増さんというのは、だいたいわかっていきますか。

清水　名前は存じ上げているんですが、どのような方かちょっとよくわからないんですが。

大室　なかなか難しいところなんだけれど、岡山県出身で、一回衆議院議員もやっているんですよ。岡山新聞の編集長か何かもやったことがある。アメリカ帰りでしたね。

そう、こういうことを言ってもいいかわからんけれど、同和系の人なんだ。なぜそんなことを知っているかというと、宇野「正志」という宣伝課長がいるでしょう。それがやっぱり岡山で、どっちも岡山新聞にいて、急に専務だか常務だか役員が替わって、湛増さんがアメリカから来て編集長になったという。それでバリバリやるので、なんだこの野郎、と思っただけで、すごい力があるんだというんだ。いろいろな意味でね。それがどういうわけか「精動」に入ってきたんです。幡ヶ谷か何かについてね。それで私もあとで困っちゃうんだけど、その人と小松さんで引っぱりつされた。だから最初に二人の幹事ができたときに、事業部というのと企画部ができた。企画が最初にできたかどうか忘れ

たけれど、私だけが兼任で、こっちの部とこっちの部なんだ。

武田　正式に兼任なんですか。

大室　そう。だけど、そんなことはできやしない。ただし、企画にいろいろどこにいろいろが、大きな演説会、講演会をやるとかなんとかというのは、みんな得手伝うんですからね。そんなことで、最初のうちはそういうことからやっていって、十二年、十三年は本当の下働きというか、何でも屋だった。それでだいたい「仕事を」覚えて、機構改革になるのが十四年ですね。幹事さんが出て来て、部長が決まった。それも最初のうちはごくこぢんまりしていたんですが、そのうち精動本部になってからは、機構もはっきりしたんですね。さっきいただきました機構図のようになったんです。

清水　ちよつと話が先走ってしまうんですが、あの方になると、精動で融和運動をずいぶんやられますね。それとこの湛増さんの存在は、何か関係があったんですか。

大室　いや、湛増さんが来られましたが、そういうことではありません。あのころは融和事業と言いましたかね、中央融和事業。中に入っているその問題はなかった。ただ、そういう大きな団体はみんな入っていますからね。

ただ、一つだけ事故があったんです。大阪にどこの大学の講師が行ったときに、演説の中で差別的な話をしちゃったわけだ。それが問題になった。こっちに帰ってきたら、そういうことは早いに、解決するのが。融和事業の中央会の話もあるし、そういうことを知っている人が多いわけだ。

私は最初は融和事業というのはなんだかよくわからないけれど、それからいろいろ勉強して覚えています。都議会で美濃部の時に融和問題があったでしょう。あれは知っていますか。

武田　はい。

大室　あれは面白い話でしょう。警視庁なんかもいざというとき

にはかなわなかったんだから。それで共産党を頼りにしてやった。そのときに、自民党の都議会議員で融和事業をわかっているのは私ぐらいしかいなかったんだ。しかし私は一年生なんだ。それで、うちの自民党の融和関係のほうに引つ張り出されて、大勢陳情に来たり、話を聞いたりした。そのときに驚いたのは、自民党系の代議士の代わりに、秘書官が来てやるわけですよ。二つの大きな団体があつたでしょう。そこでいろいろな話を聞いて、名刺を見て驚いた。そっちの系統の人が多いんだ。

**武田** 湛増さんという方は、それなりの団体の代表か何かだったんですか。

**大室** 岡山新聞から来たので、誰か知っている人がいた。この人は別にどうって言うことはなくて、やり手の人ですね。アメリカに行っているいろいろな勉強をされていた。あれは違うのかな。岡山はリングだとかブドウだとかは、早くから向こうを研究して品種改良しているでしょう。いまはみんな大きなものをやっているけれど、あれはアメリカから入れていると思うんです。

**清水** 岡山の桃は桃ではなくて、白桃が入っているんですね。桃はあまり作っていないで、白桃がほとんどだというので、外から持ってきたという話は聞いたことがあつたんですが。

**大室** 外から持って来たかどうか知りません。白桃というか、われわれは桃と言っています。その桃は一番が岡山なんですよ。二番が山形で、三番が静岡で、四番目が山梨ぐらいだったんです。いま山梨がよくなりましたけれどね。これは商売の方で、缶詰で知っていたんです（笑い）。

## ■ 婦人向け運動と○○週間

**清水** それでは十二年度の話なんですが、質問票の方にいくつか事業を挙げさせていただいたんですが、家庭報国三綱領ですとか、

国民精神総動員産業週間ということで、特にご記憶のことはございますか。

**大室** 家庭報国三綱領というのは「新聞の合冊を開いて」、例の家庭実践の委員会がありますね。あれから始まりまして、家庭でこういうことをいうことで、「家庭報国三綱領」という、このくらしいの「小さな」リーフレットをつくって、書いたものがあるんですね。実践項目といって、最初が健全なる家風の作興、二番目が適正なる生活の実行、三番目が公民としての子女の養育ということですね。これを基本にして、実践項目が十何項目とずっと書いてあるわけです。『国民精神総動員運動』巻二・昭和十二年度・二一―二二〇参照。そういうものを出して、いろいろな形で、婦人会を通じたり、だんだんやるわけですね。家庭報国運動というのをだんだんやっていくと、非常時様式委員会の手先にもなるし、服装の問題にもなる。これは主として、いままでやっていなかった婦人向け、主婦向けの運動です。いままでそういうことを国民運動ではやらないでしょう。そういう意味では、精動というのはきめが細かい。

これは基本ですが、あとで質問がありますように、いろいろと宗教人を使うとか、教育者を使うとか、本当にいろいろなことをよくやっていますね。こういうもの「新聞の合冊」を見ていただければ。第五号ですね。

**武田** かなり早い段階でできるわけですね。

**大室** そうなんです。これは十二年の調査委員会の中から出ているわけですから。

**清水** こちらの本を見ますと、調査委員会の中に特別委員会をつくって、そちらで話されたということなんですが、先生はその特別委員会は、ごらんになったこととか、いらつしやったことはありますか。家庭実践の中に特別委員会ができましたね。市川「房枝」さんを中心につくられたということだったんですが。

**大室** それは、非常に活発な意見が出ました。というのは、いままでは政府関係のものもそうですが、女性の方が委員になっているのは少ないでしょう。ごく一部しか入っていない。これには相人入っていますからね。半分ぐらい婦人の委員が入っているでしょう。やっぱりいろいろと具体的な意見が出て、まとまりもよかったですんじゃないかと思います。それに合わせて、何かやるということになりますね。

まだこの段階、十二年、十三年頃は、これは総括の話になってしまふけれど、最初ですから時局認識だったわけです。時局認識の裏側は銃後の問題でしょう。それをやっているうちに物資の問題で、節約とか資源愛護だとかになるんですね。それをやっていると今度は人間の問題になって、健康だとか体育になって、勤労増進ということになってくる。食糧増産の前に、白米を一割減らせとか、節約になるんですね。

**武田** 家庭報国三綱領というのがかなり早い段階でできるのはなぜでしょうか。

**大室** 銃後が一番先にやっていますね。その次に家庭ができたと思います。このころの話は難しく、形式的なことともずいぶん入っています。最初のころは、不思議なことですが、精動ができたとき言っていたことは、日の丸を掲げましょうなんてやっているんですね。

**武田** それは最初のころですか。

**大室** その頃ですよ。

**清水** 実践十四項目の二番に上がっていますね『国民精神総動員運動』巻二・昭和十二年度・二二ページ参照。

**大室** あるでしょう。それから神社にお詣りしましょうとか、敬神崇祖みたいなことを言っていますね。

**武田** それは何故なんですか。

**大室** やっぱり協力一致というか、思想の統一というんじゃない

けれど、ある程度そういうことがあったんじゃないですか。手っ取り早かった。いまみたいに、神社に行くのは難しくないですよ。氏神様にお詣りするの当たり前ですから。理屈がないですから。だから行きやすかったわけだ。お酒の統制のときがそうでしょう、朔日、十五日は御神酒をあげますといって、増配してくれたんだから。それは戦争になってからですが、だからみんな、朔日、十五日は大喜びなんです。仮に一合でもお神酒用として別に！。

**武田** お酒が飲めるわけですからね。

**大室** 話が飛んで申し訳ないけれど、昔は市電で桜田門あたりを通ると宮城遙拝とか、靖国神社のところを通ると、車掌さんが中で遙拝をしたんです。強制じゃないけれど、みんなやっただけです。そういうこととか、贅沢委員会でいろいろやったりすると、局部的には極端なものに走るんです。それは本部が出しているのではなくて！。

**武田** 自然にそうなるんですね。

**大室** 東京都の婦人部が何か、指輪をしてはいけないとか「言ったけれど、精動では」そういう細かいことは言っていないんですね。だから贅沢全廃運動なんかでも、ちよつと困ったことがあるんですよ。行き過ぎた面がある。それは自分たちでやっているんだから。

**清水** 末端の人たちというか、末端の組織がそういうふうになるんですね。

**大室** そうです。だから全部、全国じゃないんです。東京都は特に、馬鹿に強く言った。パーマメントはやめましょう、なんていうのもあるでしょう。そこに行くとき最後の方の話になります。

**清水** その次の、精神総動員の産業週間というのはちよつとよくわからないんですが、どのようなものでしょうか。

**大室** これは、そのころ商工省と農林省が、こういうことに協力しろというものを出したんです。それに対して、「政府の方でこ

う言っているから、みんな応援してやってください、協力してくださいよ」という程度です。これはこっち「精動」の方のことじゃないんだ。

**清水** 広報的なことをお手伝いされたわけですね。

**大室** それも、厚い本『国民精神総動員・民衆教化動員資料集成Ⅱ』長浜功編・明石書店の二二ページぐらい「巻二・昭和十二年度・二二〇ページ」にあるでしょう。これは加盟団体の方に「政府からこういう通知が来ているよ、だからみんな協力してやってください」という通知を出した程度です。だから、こういうものがあつた、という程度ですね。

**武田** このころ、〇〇週間がたくさん設けられますね。それもだいたい同じような感じで、各省から下りてきたものですか。

**大室** それはものによつて、ですね。精動ができて最初のころは、政府ができて手足がないでしょう。都道府県を通じてやるという組織はあるけれど、なかなか直接下まで行かないですね。ところが精動は下の方まで行くでしょう。だから政府が何かやるべきになると、主なものをみんな「精動に」持つてくるわけです。だからわれわれが最初に企画といったときには、自分の企画ではなく、そういうものが来たときに、どういう運動方法をするかという企画なんです。要項をつくつて、加盟団体にこうしようとか、市町村にこうしようというのは、われわれのあれ「企画」だったんですね。企画ということ、こちらが単独でやるなんていうことは、十四年ぐらいになってからです。最初は、だいたい来るものが、電気・ガスを節約しろという、じゃあどういふふうに国民に言ったらいいかということで、こちらで要項をつくつたりした。そのこと政府にもだんだんわかるので、何でも持つてくるわけだ。

**武田** この〇〇週間の反響はどうでしたか。

**大室** 要するに、十二年頃は支那事変が始まった。何かわけがわ

からないけれど、だんだん「非常時」という言葉を使うようになった。非常時という意識が国民に浸透してきたわけです。そうでしょう、貯蓄なんていうのはゆとりがあるから。その次には公債とか国債を買えということになるでしょう。その裏に行けば、物資の節約ということは、輸入物資が入らなくなったということだ。ですから昭和十六年に大東亜戦争が始まったときに、私に言わせれば、国民の有識者の方は勝てると思つてやつていないと思うんだ。それでも、これ以上、勝つて負けない、とみなすつきりしたと思うんです。これ以上、勝つても負けても。ところがまずかつたのは、最初に勝ち過ぎちゃつたわけですよ。あれで、間違えたんです。あんまり調子がいいので、勝てると思つちやつた。

**武田** 倭約とか、〇〇週間ですが、これは国民の側ではそれなりに喜んで実施したわけですか。

**大室** 週間をやるでしょう。そうすると、最低でも大きなポスターを政府がつくるんですよ。場合によつては、そこに国民精神総動員中央聯盟なんていう名前が入つているときがあるけれどね。たいいてい入れたかな。それで実際の運動は、都道府県にポスターを出して、こうするよ、ということ、それはみんなやっていますよ。健康週間という、ラジオ体操をやつたり、いろいろなことをやる。こちらでも健康週間の時には驚いたんだけど、まだ日劇のダンシングチームがあつたんですよ。それを日比谷公会堂にもつてきて、足を上げさせてやつたんですよ。精動がそんなことをやつて、こっちはみんな楽しんで、大したものだと思つた（笑）。

**清水** いちおう健康美を、ということなんですかね。

**大室** 健康美ですよ。

**清水** ああ、健康美ショーというのはそれですか。

**大室** そう、だからあのときはこつちも驚いた。これは海老原君という私の先輩で早稲田を出た人で、西条八十の教えを受けた人だったんです。あのころミュージカルみたいなものを書いて入選

しているんです。ところがそれができなくなっちゃった。それでこっちに入って来て、映画だとか演劇だとかの担当になった。その人が一番先に持って来たのが健康週間の日劇のダンシングチームなんだ。あれはこっちの役員もびっくりした（笑い）。いまその息子さんが、テレビなんかで原作とか演出とか、よくやっていますよ。「父の方は」海老原靖兄というんですよ。「だから海老原靖芳という名を見て」ああ、これは息子だな、と思った。

清水 先生、いまの〇〇週間の話なんです、基本的には国民の動きを制限することになるわけですね。制限というか、こういうふうにしなさいということで、行動方針を立てたりするわけですから、制限することになりますね。これに対して不満とか、そういう声が上がってきたりはしませんでしたか。

大室 その頃は、やったからといって強制的なものじゃないんですよ。

武田 具体的にはポスターを貼ったりとか、そういう作業ですか。大室 例えば体力の関係なら、運動会みたいなことをやるとか、そういう時を利用して、その一週間のあいだに体育的な催しをやっているわけですよ。それは、いちいちこちらが指示しているわけではありませんから。その次には体力強化策なんてあるでしょう。そういう運動もやっているわけです。

そういうことになったときに、ある程度の裏付けは結核予防なんです。結核予防について精動は、私も関連したからいうわけではないけれど、えらい効果を出した。だっていままでは、結核がでるでしょう。そうするとみんな自分の家で一番薄暗いところに隠しちゃうんだから。風通しの悪い北向きのところに寝かせて布団も干さないから、蔓延するのは当たり前なんだ。だからこの家庭でも一人かかると次々にかかるんだ。それをオープンにして、こういうことから、それではいけません、病人は南の日当たりのいいところに持って来なさいとか、そういう運動を起こしたん

ですね。いままでは隠していたわけだ。それを、そんなことじゃ駄目だ、ということをやってから、ずいぶん違ってきた。これは大きな意味で、結核予防運動の画期的な転換期になったと思いますよ。

武田 こういう〇〇週間とか、〇〇運動を全国各地で実施するときには、どういう方に協力していただくんですか。

大室 〇〇週間というのは、こちらが持ち出したものじゃないですよ。みんな政府です。

武田 それを実施するときには、中央聯盟の人が例えば地方に行くわけですか。

大室 それは場合によってはやりますけれど、こういうものがありますかね。

武田 いろいろありますね。たくさんあるんです。

大室 産業関係が多いんじゃないですか。

武田 まず「明治節奉祝及び国民精神作興週間」、これが昭和十二年十月ぐらいに決定されているんですね。それから「国民精神総動員第二回強化強調週間」なんていうのもありますね。

大室 「明治節奉祝及び国民精神作興週間」は、私どももよく知らなかったし、いまでもあまりよく知らないんですが、国民精神作興詔書というのが、昭和十二年のいつかに出ているでしょう。その頃かもしませんが、だいたいそういう問題は頭から来るわけです。それを利用するわけですね。こちらは何回もこういうことを言っています。言っているけれど、精神作興週間にこういうふうにやりましょうということ、宮城遙拝するとか、決まったしきたりがあるんです。そういうときはこういうことをやりなさい、というような通知は出していると思う。

武田 通知を出すんですね。

大室 ええ。この週間運動というのは、こちらの運動としては主たる運動ではございません。

清水 通知を出すと、その通知に出していることを実施するのは下部組織とか、加盟団体なんですね。

大室 われわれ自身がやっている運動じゃないんですから。ただ政府が〇〇週間と決めてやっているわけですね。そのあいだにこうしましょう、ということですね。

武田 例えば地方の市町村の事務方が、本省からの指令を受けて、こういう週間をやりましょうということですか。

大室 何かやっています。各地区で必ず何かやっています。特にこういうことをやらなければいけないということはないんです。ただそれに合わせるようなことをいろいろやっていますね。週間行事というのは、一週間のあいだに何かをやっていると見た方がよろしいんじゃないでしょうか。

清水 それから十二年度のこと、日独伊防共協定の一周年記念大会がございましたね。こちらの方は、どうも中央聯盟が中心になってやられているようなんですが。

大室 東京の場合はね。通知は全国にも出していますが、東京の場合は、どういうわけかこちらが主催のような格好で、芝と上野とどこか三ヶ所で、日独伊三国同盟の祝賀会をやった。私は芝公園だったかな、に行った。日独伊の偉い人が集まっていた。イタリーの大使か何かへたくそな日本語でやったのが受けたね。相撲のあれ「表彰式」みたいで。

武田 これは主催は精動になるんですか。

大室 精動と、どこかと三つぐらいでやったわけです。それはいいですか。

清水 昭和十二年十一月二十五日になります。

武田 ちょうど一周年ですね。

大室 あれっ、十二年十一月は、三国同盟をまだやっていないんじゃないですか。

清水 まだやっていないですね、三国同盟じゃなくて防共協定で

ですね。

大室 防共協定のときは、大したものじゃないですよ。三国の何かができたでしょう。それを二月頃だかにやっているでしょう。

清水 三国同盟の祝賀会ですね。

武田 それはついぶん後ですね。昭和十五年ですか。

大室 あとですよ。平沼内閣の前でしょう。それは、東京都の場合は精動が主催になってやったんです。それはいまいった通り、三ヶ所でやったんですね。

武田 そうですか、それはまたあとで伺いたいと思います。

## ■時局認識を促す各種事業

清水 それでは十三年度のお話に移らせていただきます。十三年度は事業の各論で伺いたいと思います。質問票の方で都市実践網指導者協議会、非常時国民生活様式委員会、服装に関する委員会、体力向上、貯蓄奨励、買溜防止と挙げさせていただいたんですが。

大室 都市実践網指導者協議会というのは、日本青年館でやったんです。あそこにあるでしょう。

清水 神宮外苑にありますね。

大室 あそこで泊まり込みでやりました。全国から相当たくさん来ていますね。その人たちを集めて、泊まり込みで四日間ぐらいやったんです。そのころの狙いというのはどうということかと、都市から早く隣組みたいなものをつくりなさいということです。こういう精動運動が始まって、どこでも困っていたのは、そのころきちんとしたものがないわけです。そういうものをつくって、何かあれば、下までずっと通じるようにしなさいという協議会であると同時に、それには時局認識をさせなければいけないというので、偉い人から実務の人から、入れ替わり立ち替わり話す。聞いている方はかなわないんだ、朝から晩まで（笑い）。おれも



一緒になって聞いていなければしょうがないから、飛び回ってやっていたんですけれど。これは最初のころだから、気合いの入ったものでした。これは、その「明石書店の本の」十四年版の六六ページぐらいにありますでしょう『「国民精神総動員運動」巻二・昭和十三年度・六五〜七二ページ』。

清水 ええ、ございます。いま先生は、「都市から」隣組とかそういう組織をつくっていくとおっしゃっていたんですが、都市から農村、町村に組織を――。

大室 何故かというと、都市は隣組がやりやすいわけです。農村は部落本位ではあるけれど、あつちに五軒、こつちに六軒といつて、なかなか難しいんですね。

武田 山を一つ越えて、とかありますからね。

大室 逆に言うと、それでもわりあいまとまっているんです。

武田 農村の方が、ですね。

大室 ええ。都市の方が、そのころでもだんだん隣を知らなくなっているんですね。

清水 都市でつくったものをモデルに、さらに町と村に行くというよりは――。

大室 モデルというより、都市は都市だけれど、実践網というのはそれなんです。それには、それをまとめる人たちの頭を改造しなければいかん。これが指導者協議会なんです。

武田 このときの指導者というのは、具体的にはどういう方なんですか。

大室 この場合の指導者というのは、府県とか市のなんとか課長という課長クラスの人、担当の人ですよ。いまでいえば、市民課とかの窓口がありますね。そういう課長連中です。それは何年でしたか。

清水 昭和十三年六月七日です。札幌市の課長とか、そういう方ですね。

大室 これ「新聞の合冊」を見ると出ていますね。

清水 本「明石書店版」の方にもありますね『「国民精神総動員運動」巻二・昭和十三年度・七〇ページ』。例えば小樽市教育課長の小野「栖平」さんとか、そういうレベルの方ですね。

大室 みんな課長クラスの実務者です。そういう連中の頭を変えなければいけません。それからもう一つは、講師も最初は偉い人が出て行って、あとは大阪や東京の実務をやっている部長クラスがやっています。

武田 内務省の官僚などはどうですか。

清水 そこまでではないと思います。

武田 こういう方を指導者とするのは、誰が考えたんでしょうか。

大室 こちらで通知を出すときに実務者を出せ、ということですね。東京でいえば、市や区のそういう人を出せ、ということだったと思います。

清水 東京ですと、東京市から主事がいらつしゃっていました、区は軒並み書記の方がいらつしゃっていますね。ですから管理職というよりは本当に実務にあたられる方ですね。

大室 実務者です。肩書きはどうか知りませんが、そういう点では何回も指導者をやります。でも同じ人が出てくるとは限らないですね。

清水 このときに講師の方がしゃべられたあと、会場でフロアからの質疑応答があるんですね。

大室 必ずそれはやるんですよ。あるいは感想を書くか。場合によって、質疑応答を書いたものがありましたけれど、だいたいは実情に合わせて、どうしたらいいか、こうしたらいいか、という具体的な話をしている。

清水 こういうときはどうしたらいいか、という質問になるわけですね。

**大室** みんなうちに帰ってやらなければならぬけれど、全部違うでしょう。東京と大阪では、同じ町内でも違いますからね。それに合わせなければならぬでしょう。

**武田** 活発な議論になりますか。

**大室** 自分たちで解釈すればいいんだけど、頭から言われてこうしなければいけないと思うと、できない場合があるじゃないですか。こちらはそうじゃないんです。基本はこうだから、そっちの事情に合わせていいんだと言っているんですね。

その一つの例を申しあげますと、私も常会で、偉い人のお供をして秋田に行ったことがあるんです。湯沢の常会に出たわけです。そうすると町長さんが来たり、駐在所の巡査がいたりする。そのときに駐在所の巡査がいろいろ話をしているのを聞いたたら、その時から道路は左側通行というのが決まったんですね。そういう通知があるんですね。

**武田** 歩く方ですか。

**大室** 歩く道です。いままでは構わず勝手に歩いていたのが、うなつたといつて、自動車はどうだと言っている。だから、なぜこんなところであんな話を長々とやっているんだといったら、上から指令がきているんだという。あとで、ここは自動車はどのくらい通るんだと聞いたたら、一日に十台ぐらいだという。それが困っちゃうんです。それもまた簡単に、今度こう決まったから気をつけなさいよというのならいいけれど、長々と説明しているんだ。上からきつとそういう説明があるんでしょうね。秋田市内ならともかく。その頃は全国でも自動車は七十万台ぐらいしかないんだから。

**清水** 本人は職務に忠実なんですね。

**大室** そういうことを、われわれが行って話をしながら、それはいいんですよと言つてやらないと、杓子定規に勘定するのが多いです。これが協議会なんかの一つのテーマじゃないですか。そう

いうことは言わなければならないけれど、質問があれば、それでいいんだよ、と言うわけです。

**清水** 次の非常時国民生活様式委員会はいかがでしょう。

**大室** これは家庭のあれ「家庭実践委員会」からのつながりもありますけれど、贅沢「委員会」の前ですね。こういう非常時になったので、いろいろな生活様式をそれに合わせる、節約して、形式的なことはなるべくやめなさいということ、これは非常に大きい。あとになって広報が来ればわかりますが、メンバーは書いてありますね。国民生活の刷新という格好です。これはどうしても必要性があつてやるんですが、これから始まった。ここ「新聞の合冊」にもメンバーが書いてありますが「『国民国家総動員運動』巻二・昭和十三年度・一一五―一二四ページ参照」、あとになって女の方も相当出ています。いろいろありました。これは六月三十日にやるんですね。これで例の冠婚葬祭の略章とかも決めるんですね。

**武田** 逆に言えば、まだその程度なんですね。

**大室** だけど、これもなかなかあれ「有効」だった。結婚式を簡素にしないといろいろあるわけです。よそに行つて質疑の時に、このぐらいの簡素でいいとか、どこから言ってきた。行つてみたら、お嫁さんはこういうの「派手な衣裳」を着ている。「そういう格好じゃなくて略章でやりなさい」というでしょう。ところが「これはお金がかからない、貸衣装でやったから十五円でできた」という。片方は、「十五円でできたのがいんじゃないやなくて、貸衣装でやるんじゃないやなくて、そういう気持ちをもつてやらなければいけないんだ、それが狙いなんだ」なんていうことを言っているという話が、この「新聞の合冊の」どこかに出ていたな。詳しいことはありますが「新聞合冊を示しながら」、だんだん徹底してくるわけです。

**武田** 「新聞の合冊の見出しを見て」「非常時国民生活様式とは」

とありますね。

**大室** 盆暮れのあれ「贈答品」とか、餞別をどうするとか、そういう細かいことまで言っているわけです。

**武田** これはどのぐらいの強制力があるんですか。

**大室** 強制力は何もありません。ところがこのころの人は、いまのわれわれと違って、割合と協力的なんです。だから具体的に実施するかどうかというのは、その地区によつてです。ある程度受け止めているものもあれば、これはどうでもいいところもあつて、それでいいんです。ところがそれをその通り徹底的にやっていると、そこもあるんです。そうすると、国民儀礼章というのもあるけれど、それが強く出て、どうかと思うのもあるんです。

いまやれば反発を受けるけれど、そういう反発はない。受けやすいものでないとやらないですよ。これなんか、盆暮れの贈答はお仲人さんには必ず挨拶しなければいけない、とかね。いまはみなさんあまりやらないでしょう（笑い）。

**武田** いまは全体的に簡素化されているんですね（笑い）。

**大室** だから、こういうものがあれば逆にずいぶん助かるわけです。そういうものを含めて、ずいぶん細かく、こんなことまで、と思うようなことまでやっているのは、ご婦人の方が気がつくことが多いですね。

**清水** じゃあ、委員会の中で、女性の委員の方から出てくるような――。

**大室** こういう細かいこと、例えば贈り物の返礼廃止なんていうことは、普通の人はやらないでしょう。

**武田** 奥様方がやられるんですね。

**大室** 世の中ではそのころ、そういうことをやらなければいけなかったのに、これはいいじゃないかということ、こういうところで決めてもらえば、助かるじゃないですか。時候見舞いの廃止とか、いろいろあるんですよ。要項が書いてあると思います。こ

れは解説的なものがあるし、委員長なんかこういうふうについておりますから、これ「新聞の合冊」をごらんになっていただくとずいぶん違ってまいります『国民精神総動員運動』巻二・昭和十三年度・一二五―一三〇ページ参照」。これですいぶん助かったところがあるんです。最初のうちはゆとりがあるんですが、実際にはないんですもの。われわれもよく知っているけれど、お葬式なんか、昔は紋付きを着たりして大変でしょう。みんな腕章をつけなければならぬ。それなしで、これ「略章」一つでいいということになる。ずいぶん助かっていますよ。

**清水** 次に服装に関する委員会というのがございますが、こちらはいかがですか。

**大室** これは、やつていくうちに、物資がなくなっちゃうんです。自由に回つてこない。あのころスフか何かの合成繊維の発明があるでしょう。いまみたいな立派なものではないけれど。それで話が始まつて、贅沢をしてはいけないということで、何か規範を決めたらいいんじゃないかということから始まつたと思うんです。これを指導したのが、服装委員会で、十三年十一月に何かありますね。

**清水** 決定事項は「明石書店版の本の」一三七ページにあります。服装に関する委員会は一三〇ページですね「ともに巻二・昭和十三年度」。

**大室** これは本格的に考えたということで、最初は偉い人の名前ばかりでしょう。この服装委員会というのは、相当大がかりでやるつもりでいたんでしょうね。各界のうるさそうな人はみんな入っているんです。昔は言論界とは言わないけれど、新聞社なんかも入っているでしょう。学芸部長とか、えらそうないろいろな人が入っている中で、実際にこれを指導したのは、幹事役になっている被服本廠とか、衣料課長とかですね。これが具体的なものを見せていたんですよ。

**武田** それはどこですか。

**大室** 陸軍です。

**清水** 陸軍被服本廠ですね。

**大室** 本所かどこかにあって、明治の頃からの服が残っている。ストックがあるんだけど、そういうものは使えなくなつた。昔の方が生地がいいわけです。だんだんその生地がなくなつちゃうわけです。それを参考にして、どうしたらいいかということ、この人たちがずいぶん有効だったということ覚えていますね。

**清水** 被服本廠というのは、大震災の時のいわゆる被服廠ですね。

**大室** あそこだろうと思います。作るほうで、陸軍は昔から、肋骨「旧陸軍の制服の胸につけた飾り紐の俗称」から始まってずっとあるでしょう。普通の時でも戦争のために相当のストックを持つて、中には古いのを着ていたのがいたでしょう。それでいろいろと生地を考えたのが、国民服なんです。

**清水** これは中を見ていくと、総動員服という名前で出てくるんですが、国民服でよろしいんですね。

**大室** 最後には国民服という名前ですね。ところが最初の見本ができた頃は、生地もよかつたんです。中国に行ったときに「見ることが出来る」、あのような服ですよ、人民服みたいなものを着ていたでしょう。最初は生地もよかつた。だんだんよれよれのスフの服になった。だからそれはあまり着なくなつたんだ。すぐに穴が空いちゃうし、しまいにはしわくちやになつちゃう。でも、ずいぶん着ていましたね。

**清水** 私の、あくまでもイメージなんですが、歩いている人はみんなあの服を着ているようなイメージがあるんですが。

**大室** いや、そこまで行かないですよ。男の人はずいぶん着ていたけれどね。そういうものを作るんだってなかなかできなくなつ

ちやつたから。要するに背広を着ていたのを、そういうもので間に合わせる。だから作業服も儀礼服も一緒になった。最初はよかつたんです。わりあいにしわも寄らない。しまいにはしわだらけになつちゃうんだ。

**清水** その次は、先ほどちよつとお話がありましたが、体力向上と貯蓄奨励、買溜防止と続くんですが、このあたりはいかがでしょうか。

**大室** 体力向上については健康週間もありますし、その後は人的資源ということが言われたんです。戦争で相当犠牲者が出たり、傷害者が出たりしますね。戦死者ももちろんです。そこで一番問題になったのは、補充する人間の中でいろいろ考えてみると、核だったわけです。それと同時に、勤労意欲を上げる勤労増進という運動をやつた。それには体力を上げなければいけないというので、歩け歩け運動とか、いろいろなことをやつた。体力向上という言葉を使っていますね。ですからこれは、みんなそれぞれがやることで、何をやつたらいいということもありますが、そういうことより、健康週間に関連したもので、裏付けになるものが結核予防であつたわけですね。

**清水** これは厚生省から来たものなんですか。

**大室** 健康週間とか体力向上というのは陸軍省あたりからそういう要望があります。体力向上とか、さっきの足を上げたあれ「日劇ダンシングチーム」なんかも、厚生大臣が小泉親彦という陸軍中將でした。あつ、知っていますか？

**馬場** 友人の祖父でした。大学の同級生のおじいさんでした。

**大室** 軍医中將でしたか。何か知らないけれど、この人は威張り腐らないで、厚生大臣としてはよかつた方じゃないですか。その時だ、日劇が来たのは。そんなことがわかるような人だから。「体力向上について」という、小泉さんがその時に演説したパンフレットが出ていますよ。国民体力強化策とか、集団で体操をや

るとか。ラジオ体操もずいぶんきかんにやっている。なにしろやることは早いんですよ。それで間口がどんどん広がってきて、大変なことは大変だった。

武田 次の貯蓄奨励はどうですか。

大室 貯蓄奨励というのは最初はみんな貯蓄をしてくださいというものでしたが、そのうち百億貯蓄というのを、あのころは大蔵省ですか、が言ってきた、しまいは百二十億貯蓄になるんですね。それで、こういう貯蓄をやってくださいといって、各加盟団体とかに出す。貯蓄奨励に対する要項みたいなものができて、こうしてくださいということをやっています。

これについてはどこの先生が戦後書いていましたね。精動の運動で貯金は大きな成果を上げていたらしいということが、何かの本にありました。二、三年前に見たんですが、見直した、というようなことを言っていましたね。これはずいぶん「成果が」上がっているんじゃないですか。だってほかに使わせないんですもの（笑い）。

清水 使う先がないんですね。

大室 入る方も大変だけれどね。しょっちゅう貯蓄奨励をやるわけですね。貯蓄奨励のあとで、今度は経済道徳とか経済戦というのが出るでしょう。経済戦に打ち勝つとか、大きな意味での経済問題が出てくるんですね。これは主として一般に対するより、指導者級の人に対することになるわけですね。これもずいぶん商工省や大蔵省あたりがやっていました。それはずいぶんこちらも「経済戦に打ち勝つには」とやっていますね。その裏付けになるのは、輸入に対する制限の問題になってくるわけですね。

清水 買溜防止というのは、具体的にどうやって行なったんでしょうか。

大室 買溜防止というのは、家庭実践などの中で、買溜はやめましょうとか、こうだとか、ということを一般的な話として、難し

くなく出しているんです。ですから、これはみんなそうですが、強制できる問題ではないけれど、一般的なモラルとしてそういうことはやめましょうということをやっています。それがだんだん徹底してくるから、もちろん穴はあるけれど、浸透してくるわけですね。

精動のいいところは、そういうことがあるとすぐに下の方に通知をしたりする。それがところによつては極端なところができるんです。それはかえって刺激になって、ありがたいことですからね。もし何か取り上げられるとすると、そういうところがあるんですね。逆の意味で、あまり強制的なことを「するところが取り上げられる」。さっきの贅沢運動で、贅沢はやめましょうぐらいならいいけれど、極端になっちゃうんです。

## ■組織の改編——仕事企画課専門に

清水 わかりました。次に組織改編のお話に入って行きたいと思っています。昭和十三年に理事が増えたり、加盟団体が増えたりして、だんだん大きくなっていくわけですが、十四年二月に組織改編がございますね。先生は先ほど、企画部と事業部と両方兼任されていたとおっしゃいましたね。十四年二月に組織改編があったときは、先生はどちらに所属だったんでしょうか。

大室 十四年二月になったとき。最初は事業課と企画課で兼任でつかまつってしまったけれど、これが増えてから企画課専門になりますけれどね。そのころから、いままでのような使い走りじゃないけれど、いろいろなことをやっていたのが専門的な業務になるわけです。ところが、例えば大臣が演説会をやるとかいと、みんな応援に行くんです。特に私どもは、演説会は担当じゃないんですが、例えば十五年の支那事変三周年記念とか、平沼「騏一郎」さんがやっているとかというと、たいてい私は引っ張り出さ

れて、手伝うことになる。だいたい課がありますけれど、大きな行事はみんな総がかりです。

**清水** 先生はこのとき企画部にご所属されたということですが、企画部というのは、だいたいどういうお仕事をされたんでしょうか。

**大室** 企画課というのは、のちには企画課の予算を作れとかだったけれど、その前は、政府から来る仕事があるでしょう。政府からでなくとも、時局として。そういうものに対する要項を作るとか、運動方針をどうするかというのが企画課の仕事。こちらから何か改めて仕事を見つけて、ということではなかったんです。

**清水** それは十四年の半ばぐらいから変わってくるんですか。

**大室** ちゃんと部長が増えたりしますね。その頃になると本当に分担的になって、このあいだのお話のように、こちらで必要な世論調査をやるうとかということを考えることができたわけです。そのころは、いまでいう企画とは違って、向こうから運動方針を作ったりするのが企画でした。例えば資源愛護で電気・ガスの節約をどうしてもいって、特に油の問題があるから、なんとかしてくれと来るでしょう。

**武田** そういう形で来るわけですか。

**大室** 電気・ガスを節約するという政府の方針が来るでしょう。それを国民にどう訴えたらいいかというのがわれわれの仕事になる。だから電気・ガス節約の要項をつくって、パンフレットみたいにしたりするんですね。

**清水** このときの改変で、精動が内閣に出した文書を見ますと、「政府との連携がうまく行っていないので組織を改編したい」ということが書いてありますが。

**大室** それは精動委員会ができてからー。

**清水** いや、その前の段階の十四年の組織改編のときですが。

**大室** 精動委員会というのが、早くできるでしょう。これは総括

的な問題に関連しますが、精動が十二年にできて、一回りして年度替わりになると、もっと増やすという。だって、十人か二十人では足りないんだ。その次の年度替わりになると必ず出てくるわけだ。最初に入っていた理事は、民間と内閣と内務省と文部省とかだけだったでしょう。それが、どっちが先だったか忘れてたけれど、一回役人を全部出しちゃったでしょう。それでまた大勢入ったりする。いろいろなことがあって、しまいに精動委員会というのを内閣直属で作るわけです。その要項を見ると、実施は精動聯盟がやるような感じでしょう。

**武田** これは二本立てになるんですね。

**大室** だから二本立てというのは、向こう「精動委員会」が企画をやって、実施は精動「中央聯盟」だというつもりだったらしいんですね。この規約をみると、そんなことになっているんですね。それで委員長は荒木「貞夫」さんか。

**武田** 文部大臣ですね。

**大室** 文部大臣だけれど、大勢入れて官邸でやっているわけですよ。その中にはこちらの理事も幹事も、幹事役として入っているわけだから、幹事が案を作りますからね。そのときは私も、本当のことをいって、あまりそういうことはよくわからなかったんですよ、上の方でやっていたから。こっちはこっちでやっているけれど、例えば内閣の精動委員会をやったといったら、勝手に決めたって、じゃあ誰がやるんだということになる。実践部隊とか、実際に国民とやるのは精動「聯盟」を使わなければならないわけですよ。できないわけではないけれど、そういうもの「実践部隊」がないんですね。

これ「新聞の合冊」をもらいになってください。これは十四年四月一日号ですが、「国民精神総動員委員会官制交付される」とありますね。委員の顔ぶれもここに出ておりますね。そして、総括に書いてありました通り、こちらはこちら「精動委員会」でや

ったって、こっちはこっち「精動聯盟」でしょう。言ってこなければやらないでしょう。これ「精動委員会」の狙いは、大きな思想的なことから始まっていると思うんですよ。例えば日本の行く末だとか、大きな方向から考えてやろうとしたんじゃないかと思うんです。

**武田** それで「精動」委員会が必要だということですか。

**大室** だから、国民精神総動員というのは、国民を相手にして実践的な具体的なことをやっているわけです。「精動委員会」それをもっと大きな意味で「やろうとしている」。そうでなければ、こんなに多くの各界の有力な人を入れて委員会にする必要がない。逆に言うと、足がないあれ「機構」になっている。だから出て来ても大きな話だから、何をやっていいんだか。それらしいことはありません。

こういうものがあります「新聞の合冊を示す」。精動委員会の幹事をやっていた小松さんが委員会の経過と内容を書いています。これをやっているうちに、阿部「信行」さんがすぐにやめるでしょう。なんだか、ろくろくやらないうちににおしまいになっちゃうんですよ。

**武田** この委員会が？

**大室** 委員会は。それで一つになって、米内「光政」さんが会長になって、精動本部になるわけです。実際には、何をやったの、と言いたくなる。上の方でやっていたんでしょうが。

**清水** 先生の目からごらんになっていると、何をしているのかよくわからなかった、ということですか。

**大室** だからあまり気にしていなかったね。けしからんとか何とか言っているのは、うちの幹部が言っていたと思うんです。だからこういうことを書いています。浮田「辰平」さんが書いた総説にも、三者がどうだこうだと書いてありましたね。それは下はわからないですよ。例えば都道府県に来るでしょう。けれどもどう

したらいいのかということが来ないから。

**清水** そうすると、委員会が発したものが精動「聯盟」を通らずに府県に行ったりすることもあったんですか。

**大室** そういうこともあったんでしょうね、きつと。精動「聯盟」としても、何をやれとか、こうだというのならいいけれど、つかみ所のないようなことだと、こちらの運動としてもできないでしょう。ここ「精動聯盟」は具体的なことをやる場所でしょう。だから、そこに齟齬があったんじゃないですか。これ「精動委員会」ができたのがー。

**武田** 十四年三月二十八日ですか。

**大室** 三月でしたか。何か知らないけれど、あまりやらないうちにおしまいになっちゃうんです。

**武田** 小松さんは委員会の方にー。

**大室** 幹事役で行っているんです。精動委員会の幹事役に、こちらからも理事が何人も出ているんです。

**武田** 小松さんがどうおっしゃっていたかご記憶にありますか。

**大室** 小松さんだとか、うちのほうの幹事が「精動委員会の」幹事になっているんです。

**武田** 小松さんは批判的だったんですか。

**大室** 小松さんが批判的だということではなくて、委員会の経過を言っているだけで、そういう意味で書いているんじゃないやしません。

**清水** 例えば小松さんが委員会に出られて、中央聯盟に帰っていらっしゃって、今日の委員会はどうにもならなかった、とか、そういうお話をされたとか。

**大室** そういう話はわれわれまで来ないですね。だからわれわれ現場は、あまりこの精動委員会というのは気にしていなかったです。総説を見ると、浮田さんが、「両方齟齬を来して、都道府県でも困っていて、どっちを向いていいのかわからなかった」というようなことを書いていますが、そんな感じはわれわれは知

らなかったですね。議論はしているけれど、内容的なことは下に行かなかったんじゃないですかね。

それで、これじゃあまずいというので精動本部ができる。これは総理大臣が会長になって、副会長に大臣と、こちらから堀切「善次郎」さんが出て、その下に強力な事務局を作らせるんですね。

## ■ 各省との関係・演説会など

**清水** その前の委員会の時は、委員会の事務局を内閣情報部がやっているんですが、情報部と中央聯盟の関係は。

**大室** 情報部とは一体でしたよ。内閣情報部ができてから、最初に部長になったのは（清水 横溝さんですね）、そう横溝光暉さんだ。横溝さんがあとから部長になった。あのころ部長はなかったでしょう。それから内務省と文部省がやっていたわけです。この三つで中央聯盟を作らせたわけですよ。

**清水** ということは、精動委員会事務局を情報部がやっているということとは、精動「聯盟」にとっではいままでも知っている団体であるから。

**大室** 幹事役のメンバーが出ていますね。そこにこちらの幹事がみんな入っているし、理事にも入っていますからね。ですから案を作るには事欠かないと思うんですが、偉い人が大勢だから、どういいう話になるのかわかりません。いろいろ話は聞いていたんですが、委員会といっても、あんなにたくさんいたら形式的になっちゃうでしょう。

**清水** 先生は先ほど、委員会から聯盟を通さずに都道府県に直接行っていたものがあるかもしれないというお話をされましたが、逆に自分たちが受けている仕事は、これは政府から来ているのか、これは委員会から来ているのか、そういうことは意識されたことがございますか。

**大室** それはわれわれも知らなかったです。

**清水** ではまったく同じものとしてこなしていたということですかね。

**大室** そのへんが、われわれ現場にいるものはよく知らなかったんですね。こっちはこっちで忙しかったからということもあるかもしれないけれどね。どうも下の方では困っていたという話です。それから、そういうこともあったんでしょうね。

**武田** 文部省と内務省と情報部で、いろいろ権限争いをしているとか、対立しているということも、なんとなく。

**大室** それはわりあいになかったですね。最初の十万円は文部省が出したんです。半年分はどこかが十万円出したんですね。だいたいわれわれが聞いているのは、私の本でしたか、十万円というのは、あとで調べてわかったんですね。そのほかに、軍事援護のことをやったり傷兵保護院からなんとか資料として三万円を寄越すとか、向こうの予算でこちらがやってやったものを二万円とか。だから十二、三万円で作っているんですね。あとはその十倍で、百万円ぐらいになるんでしょう。その頃の十万円は大したことないかなと思ったら、いまなら一億とか、それぐらいになるんですかね。しかしそれだけのあれ「予算」でよくやったんじゃないですか。いつも内閣の情報官というのが二人ぐらい、しょっちゅう来ているんです。それから文部省は成人教育課とか、内務省は保安課長とか地方局とか。

**清水** 出向で組織にいらつしやっているだけではなくて、頻繁に本省の官僚の方がいらつしやるんですね。

**大室** ですからわれわれなんか、総理大臣の官邸に情報部があったでしょう、しょっちゅう行きましたもの。だから新聞記者なんかの「クラブのある」、総理の官邸にずいぶん行ったことがありますよ。これ『渦巻く時流の中で』に書いたけれど、あるとき「官邸記者クラブに」行ったら、これ「花札」をやっている。そ



の頃は当たり前だからあまり思っていなかったけれど、いまから考えてみると、けっこう使い走りをやらされていましたからね。

**武田** 企画院はどうですか。

**大室** 企画院はあとから入って来たけれど、ものによっては企画院のメンバーが来ますけれど、あそこはあまり積極的に仕事をするところじゃないですからね。

**武田** あまり交流はなかったですか。

**大室** いや、ないことはないですよ。いろいろな委員になっていくでしょう。

**清水** どなたかご記憶の方とかいらつしやいますか。

**大室** 竹本孫一さんなんかそうじゃない。あの人なんかよく知っていたよ。たしかそうだったね。

**武田** 奥村喜和男さんはどうですか。

**大室** 奥村さんというのは名前を覚えていませんね。企画院から何人か来ていて、竹本さんはいろいろやっていくわけだ、こっちのことを。

**清水** ああそうですね、電力関係とかをずいぶんやっていらつしやいますから、そういう意味では精動がされていたようなことと近いのかもしれないね。

**大室** いまどんなことを言っているか知れないけれど、具体的に国民に何かというと、みんなこつちに押しつけてくる。その電気・ガス節約なんているのは、油の問題から来ているわけでしょう。それで私と小西「利雄」君で案を作って電気・ガス節約というて、その頃としてはわりあい平易な言葉で、いま読んでみるとあまり名文じゃないけれど、そういうことはわれわれにやらせた。

**清水** 先生は企画院自体はどうごろんになっていましたか。

**大室** これは大きな政府のあれ「機関」でしょうけれど。みんな困っていたのは、いまになってみるとわかるのは、資源の問題じゃないですか。資源がないものを、その資源をどうするかという

ことが一番の問題になっちゃったんじゃないのかな。全部をあとになって振り返ってみると、国民が時局認識をだんだんしてきたということは、裏返すと国際関係で、そのころは国際問題とは言いませんが、身近な問題になると油でしょう。

私どもにはそのころ、これは私の担当ではなかったけれど、統計局をやめて応援にきたやつがいるんですよ。いろいろな、あまり外に出しちゃいけないなんていう統計をもらったり話を聞いたりしたけれど、そのころ日本の自動車というのは、全国で七十万台しかない。民間を入れて、ですよ。そういうことを知っている人はあまりいない。「あまりそんなことを言うなよ」なんて言われたけれど、統計をいくらかもらった。

そして一番先に、私が精動に入って二年ばかりやって気がついたのは、日本の経済のことがわからなければ駄目だということで、株屋に行こうかと思ったんですよ。親戚が課長クラスでやっているから、聞いたんだ。そうしたら、「株はとんでもない、もうおしまいで、みんな店仕舞するところだ」というんです。普通の売買なんてできないでしょう。そのうちこつちの方が忙しくなった。すぐに戦争が大東亜戦争になるとは思っていなかったから、一年ぐらい給料はいらなから株屋で使ってくれと思って、言ったことがあるんです。そのころは、だんだん経済戦争的なことを言っているけれど、結局最後には資源の問題なんだ。資源ということ、あのころは油だけでしょう。新経済なんとかというのを見ても、みんなそういうことに関連しているんですね。

**武田** そういう話は演説会とかでやるわけですね。

**大室** やっております。昔はラジオしかないし、あまりそういうことがないから、何かやるというついででもいい来てくれるんですね。それは大したものですよ。

**武田** 先生は演説会の企画にも関係しましたか。

**大室** 演説会を企画するということはないけれど、例えば経済問

題をこうやるんだというのは、上の方から決まって、これをこうしろという。その会場や何かは、どういうわけかたいてい私に押しつけられた。私は企画の方だから、そんなことは関係ないんだけれど、いざというときにはいつも引つ張り出されてやっていたから、わりあい、そういうときにしゃべる人の周りにいることができましたね。例えば平沼さんがやったときとか、米内さんのときとか。有田「八郎」さんのことはこれ「新聞の合冊」を見ても何も書いてないね、やられたことは。

清水 先生はこのとき二十代ですね。ちょうどいまの私と同じぐらいで、そういう方の周りにいらつしゃったのは率直にすごいなと思うんですが。

大室 それはどういうわけだか、演説会は日比谷公会堂。共立講堂も何回か使ったけれど、あそこはあまり具合がよくなって、公会堂になる。それをやると、入ってくる人に渡す宣伝のパンフレット、リーフレットから始まって、内外にポスターを貼ったり、しまいには外にマイクを用意するとか。それから私はたいてい講師の控室にいて、その内部にいた。われわれは司会はできませんが、偉い人が来ると、内部でもあまり入れさせませんが、どういうわけかそういうことをやっていた。

武田 代議士の方も講演されたりしたんですか。

大室 しましたよ。そのころは星島二郎さんとか。あの人は立派な人でした。あの人のお供をして東北に一回行ったことがありますけれどね。

武田 そうですか、どんな人ですか。

大室 星島二郎さんと視察に行ったわけですよ。府県を回って、山形、秋田、福島と回って、われわれ三人ぐらいがついて行った。星島さんというのは立派な方でしたね、岡山でしょう。

武田 どんなことを演説されるんですか。

大室 行って、ちゃんと挨拶をして、都道府県ごとに常会という

のをやって、そこで話を聞いたり、こちらから行ったりする。要するに座談会的な話をするんです。そういう点は、私は精動の特色だったと思うんです。こっちからしゃべりつ放しではなくて、話を聞くんです。それから国会議員では、西武の堤康次郎さん、あの人が副議長でした。あの人はおとなしい人でね。あのころじゃないですが、箱根の土地か何かでだいぶよかつたのは。

清水 おとなしい方だったんですか。

大室 おとなしいんだけど、精動というのは道徳的というか、モラルみたいなものがあるでしょう。あの人は奥さんがたくさんいたものだから、それでまいっちゃったんだ（笑い）。だから静かにしていたよ。それはやり手だったんじゃないですか。

清水 演説会とかでそうやって回られると、泊まるわけですから、夜とかお食事とか一緒にされたりとかはしないんですか。星島さんとは東北を回られたというお話でしたが、当然何泊かするわけですね。そうすると、星島さんをはじめとして同道された方とお話されるような時間はあるわけですね。ご記憶のこととかございますか。

大室 星島さんで行ったときは上山温泉かな、天皇陛下が泊まったなんていう部屋を星島さんが使った。大きな旅館があつて、中に橋が架かっているようなところで、ここに陛下がお泊まりになったというところに星島さんが泊まって、われわれはずっと下の方にいたわけです。あの方は話がわかつた。代議士というのは威張っている人はいないから。いろいろな話を聞いて、杉の話をずいぶん聞いた。あと、国会議員というのはたくさんいますが、太田正孝さん、これは話がうまかつた。直接話したことはないけれど、ずいぶん来てもらった。あの人の話を聞くのは楽しみだった。そのころ、話が上手なのは太田正孝さん、これは経済問題ですから、わかりやすく話した。それから下村海南さん。もう一人永田秀次郎さん。これはどちらもうまいんだ。いい話でしたね。永田

さんは元市長だったかね。

武田 そうですね、東京市長でしたね。

大室 これは楽しみな人でしたね。それから国会議員で、やはり風格があったのは松村謙三さん。民政党だったんだ、政友会じゃないからね。

武田 松村さんはどういう話をされるんですか。

大室 あの人はいくつから頭が白かったけれど、紳士というか、強面ではないけれど、貫禄十分でしたね。

武田 やはり農業問題の話ですか。

大室 そればかりではなくて、あのころは政治の一角を担っていましたからね。まだたくさんいますが、だいたいここに来る人は代表的な人ですからね。

武田 このころ演説で有名だった中野正剛とかはどうですか。

大室 中野正剛さんは、こちらとは直接関係はないんですが、若いときはみんな聞きにいったものですよ。あの人は青年会館でよくやっただんですが、しまいにはおかしいな、と思ったな。それとか、このあいだ死んだけれど、国粋大衆党をやっていた、競艇のなんといったつ（武田 笹川良一）、それがいまの外務省、国会議事堂の前にながってるところで、ナチス張りの黒い、肩の張ったような服で、十人ぐらいだったか。彼は大阪ですから、デモに来たんだか陳情に来たんだか知らないけれど、胸を張って歩いていた。それで知っているんです。

武田 精動の演説会とかは関係がないですか。

大室 笹川さん「の話」は聞いたことがあったな。右翼の連中なんかも、どうしてもはつきりしないんだけど、頭山「満」さんには会ったような気がしたけれど。

いろいろな来るけれど、最初、ああいう連中はすぐに脅しに来るんですよ。小遣いでももらいうようなつもりで来るんだけど、精動は国体擁護連合だとか、髭のすごい右翼のえらいのがいるんで

すよ。そこにいるわけではないけれど、そういう団体がある。だからそういうことはほとんどなかったね。若いのが来てからかった、一緒に遊びに行こうなんてずいぶん言われたことがあったけれど、われわれはそういうのは相手にしなかった。

清水 頭山さんはたまに、大会とか演説会の発声をされているということが記録に残っていますね。さっきの三国防共協定のときの発声も、頭山さんがされたりしていますね。ですからそういうところでお目にかかったんじゃないかと思えますけれど。

大室 そうかもしれません。立派な人というのは、私も例の本『渦巻く時流の中で』に書いていますけれど、一番驚いたのは安岡「正篤」さん。そのころ、神韻という言葉があったでしょう。そういう感じでしたよ。

武田 安岡さんと精動はどういう関係なんですか。

大室 社会風潮の委員会の委員か何かをやっています。ところが、そのころあの人は儒学ですかね。

清水 朱子学ですか。

大室 朱子学ですかね。何か知らないけれど、あのころの偉い人の一番の先生なのね。

武田 戦後もずっとそうですよね。

大室 後藤文夫さんをはじめ、政界の人たちはみんな弟子みたいなものです。とくに官界が多かった。安岡さんは、何かほかのことで事務局にいられたことがあって、みんな出迎えた。あのときは眼鏡はかけておられたけれど、坊主頭なんですよ。羽織か何か着て、ちようど夏だった。いや驚いた、普通の人間じゃないと思ったな。

清水 それは何故ですか。

大室 ずっと歩いているだけで、それだけの風格があるんです。いまの話で、われわれが勉強して知らないけれど、神韻という言葉があるでしょう。そんな感じを持ちましたね。あの方だけは

までも印象がある。それで戦後の写真を見たら、頭「髪の毛」を伸ばしちゃっているから、全然イメージが違う。

清水 昔から頭を剃っていたんですかね。

大室 剃っていましたよ。

清水 逆に私たちは髪の毛が伸びているイメージじゃないんです。

大室 そうでしょう。その前はそうだった「剃っていた」んです。やはり大したものですよ。

武田 精動の中でも、安岡さんをそういうふう感じていらつしやる方がー。

大室 それは特別扱いみたいでしたね。何にいられたんだったか、ずいぶん偉い人が来た。頭山さんもそういえば来ていた。それから、右翼の人もいましたよ。

それで私はいま考えてみて、どうしていろいろなことを知っているのかな、と思ったら、何かあると報道班員が来て、陸軍でも海軍でも戦況を話をしてくれるんですよ。参謀部もね。髭の戦軍隊のフジタというのがいたでしょう。少佐だか中佐になった人で、これが報道班に来了。上海事変か何かで、戦軍隊で有名な人です。その人が来たりして話をするものだから、時局の本当のことをわりあいによく知っていた。これは精動の職員に対してやるんです。

武田 それは定例なんですか。

大室 定例ではなくて、必要があると来て話すんです。ノモンハンが起ったときには、入江「徳郎」さんが朝日の特派員で行って、帰ってきてから報告を聞いているから、ノモンハンの本当のことを知っているわけです。入江さんは本を書いているけれど、三分の一ぐらいは削つてある。

清水 そうやって聞かれたことは、しゃべってはいけない守秘義務である、という考え方はございましたか。

大室 そういうことはお互いに言いませんが、それぞれが感じて

いましたね。ただ、この前申しあげましたが、精動にいたときには、陸海軍とかからの圧力を感じたことはありませんでした。筑紫「熊七」さんが来られましたが、あの人は満州国の参議か何かやっていて、陸軍の一方のホープだったんですね。あとで機構改革の時に、この前もご質問がありましたが、岡部「長景」さんが残っていますね。岡部さんは関係があつて、知っていて、こうなっているのかもしれない。筑紫さんも非常に立派な方でしたが、いろいろ調べると、陸軍きつての頭の良さで、政治的な能力も高かったそうですね。その方は理事長だからしよっちゅう来ていましたが、やられたことは、大連と青島の市長か何かを連れてきて、経済協力とかをやっただけです。軍人会館が九段にありますね。いまなんといったつけ（清水 九段会館です）。そこでやったのを覚えています。八割ぐらいしか入らなかったけれどね。

清水 あまり人気ではなかったということですかね。

大室 だって、精動とは関係ないもの。あの方は満州とか大陸を考えているからね。それはやってみてわかったんじゃないですかね。清水 この前もちよつと出たんですが、満州とか朝鮮半島では、精動の仕事はされていなかったんですか。

大室 こっちは直接はやっていないけれど、向こうは真似してやっていた。

清水 そうなんですね。朝鮮版、満州版の精動運動に近いものがあつたんですね。

大室 こちらの運動を見て、真似してやっておりましたね。

武田 それは連絡はあるんですか。

大室 ほとんどないですね。ただ、中央官庁から行っているかもしれない。いま精動がこうやっている、とか。とても海外まで、台湾まではね。朝鮮なんかはずいぶん、朝鮮の精動聯盟がやっていたようです。いまの連中とは違うんです。昔われわれは、「同じ天皇陛下なのに、どうしてわれわれを差別するんだ」なん

て、朝鮮の人に逆に言われていたんだから。だからいまとは全然違う。その頃は向こうも一所懸命やるつもりがあった。

清水 そろそろ先に進めてよろしいでしょうか。

大室 一息入れてください。

武田 一息入れましょうか。話をお伺いしていると、だいぶ時代のイメージがわかりますね。

大室 話をしていると、だんだん出てくるんですね。

武田 そうですね、どんな思い出していたいて。

大室 ただありがたいことに、私どもはよく言うんですが、ずっとやっていて昭和十四年から十五年ぐらいになると、新聞を見ると裏がわかるようになった。誰々がどこに行つたというのと、ああ、あの問題だな、ということが読めるようになりました。ですから、大東亜戦争なんていうのは、われわれは情報としては夏に聞いていましたね。

武田 そうですか。日中戦争の動きもだいたいわかるわけですか。

大室 日中戦争のことは、行っている人が帰ってきたりしましたから。上海で、井田さんが帰ってきたら、いま韓国で使っている国旗を持ってきて、「上海のある地下室まで行つたら、これをやつていて、いま向こうで相談しているんだよ」と言っていた。それは昭和十五年ぐらいじゃないかな。

清水 李承晩（イスンマン）ではなくて、金九とか、あのあたりの人の運動ですか。それはどうやってご存知だったんでしょうね。当然地下運動ですよ。

大室 あの人も右翼だけれど、そういう方面もいろいろ持っているんですよ。地下とかいうか、どこかで会つたと言っていたよ。本人が持ってきたものを見せて、われわれも聞いていたんですけれど、「どうなんでしょうね」なんて言つて心配していましたけれども。そのころから独立運動があつたのかね。

武田 三国同盟とか、ソ連の動きとか、そういうこともわかりま

したか。

大室 三国同盟については万歳をやつたでしょう。三国同盟の祝賀会なんていうのを、さっきも言ったようにやつたけれど、なんとなく内容的にじっくりしないんですね。というのは松岡「洋右」さんがずいぶんやつたけれど、その頃になると松岡さんが蔑ろにされているような、どうもおかしいという空気になっているんですね。あのときは松岡さんは出て来ているかな。松岡さんも名演説で、昔はこぞつて聞きに行つたものだけれどね。最初に「堅忍持久せよ」なんていう話をしたときは、まだわれわれが入つた頃で大変だつたけれど、そのうちに松岡さんは政府系からやられていたみたいだつた。ところがそのうちに、日独伊三国同盟になるでしょう。ああそうか、ソビエトとやつたので。

清水 「欧州情勢複雑怪奇」ですね。

大室 それで辞められた。あのころからおかしくなつちゃうんだな。だから松岡さんというのは絶対に信頼があるのかな、と思つたけれど、その頃からおかしいな、と思つていましたね。海軍の人は、参謀なんかがよく来て、話をしてくれた。われわれを相手にこんな話をしているのかな、と思うような本当の話をしてくれた。

ですから、ガムラン湾ですか、仏印進駐だとかは、われわれは早く知っていましたね。これは十五年から行っているのかな。仏印を借りて日本の海軍は行っているんです。それでイギリスから抗議が来て、新聞の下の方に「イギリスの駐在武官が外務省訪問」なんて書いてあると、ああこれは抗議に行つたなと思って、聞いてみると、その通りなんだ。

## ■非常時意識の高揚

清水 では次の話をよろしいでしょうか。先ほど委員会ができたところまで話が行きましたが、それで中央聯盟が解消していくわ

けですね。解消したあと本部になるわけです。本部になって、今日お渡しした表「国民精神総動員本部事務局組織概略図」【資料5】があると思いますが。

**大室** これは非常にうまくできたと思うんです。広報の三〇号から三一号ぐらいに出ています。最初に委員会が解消して、中央聯盟も解消して、国民精神総動員本部ということで中央聯盟がそのまま移行するわけですが、役員その他が替わってまいります。会長には総理大臣がなって、いままでの理事や何かをやっていた人を顧問にしましょうですね。それで新たに十一名の理事を決めて、それから参与がたくさんおるわけです。いろいろやって、その下の精動本部の事務局を強化するんですね。会長が米内さんで、副会長が兒玉秀雄さん、これは内務大臣ですね。それから堀切さんが副会長で、理事長を兼ねるわけです。その下ということはないけれど、顧問に各大臣や偉い人を並べた。実際の仕事は理事長の堀切さんを中心にして、常任理事が大坪保雄さん、これはのちに小泉悟郎に替わります。それから理事に情報部長の熊谷「憲二」さん、内務次官の大達「茂雄」さん、大蔵次官の大野「龍太」さん、陸軍次官の阿南「惟幾」さん、海軍次官の住山「徳太郎」さん、文部次官の赤間「信義」さん。農林次官の荷見「安」さん、商工次官の岸「信介」さん、厚生次官の児玉「政介」さん、ここまでは官界なんですね。その次に衆議院として加藤鯛一と堤康二郎、中井一夫、西方利馬が入りまして、新たに、同盟通信の社長の古野「伊之助」さん、大日本青年団の栗原「美能留」さん、ほかに在郷軍人会から小泉「六一」さん、産業組合中央会から、月田「藤三郎」さんのあとですが、千石興太郎さん、産業団体連合会の膳桂之助さん、これはいまの経団連みたいなものですか、が入りました。

**清水** これは従来の理事に代わって、新しい理事を選んで理事会を開くということですか。

**大室** 新しい理事ですね。それで堀切さんが理事長です。  
**清水** その次に参与がおられるんですが、参与はどんなことをされるんですか。

**大室** 名前だけじゃないですか。会議をやったけれど、あまりやっていないでしょう。

**清水** そうすると、あとは実際には事務局ということになりますね。

**大室** それで事務局を作るんです。この事務局は非常に大袈裟になって、事務局総長が堀切善次郎理事長がなって、次長に常任理事の大坪さん、幹事に小松さんと湛増さん。それから高山一三というのは兵庫県の警察部長か何かをやった人で、内務省です。それから野村重臣というのは京都帝国大学の教授ですね。それから伊藤博さんは前からやっていた伊藤主事です。それから主事には、浮田「辰平」さん、宇野「正志」さん、多田「勲生」さん、星野「弘二」さん、稲垣守克と岩崎重太郎というのは兼任になっておりますのは、精動指導者錬成所のほうですね。

主事というのが課長なんですね。幹事が部長という格好になります。総務部長が湛増さんで、総務部には秘書課、文書課、経理課とあります。調査部は、部長が野村さん。ここに調査課と企画課と資料課があります。その企画課に私がいるわけです。その次に地方部があります。これはあとで村田「五郎」さんが来るんですが、最初は決まっておりますませんでした。連絡部は高山一三です。事業部が小松さんです。

**清水** 先生は事業部の小松さんの下ではなかったんですね。

**大室** 事業部の中には事業課と宣伝課と出版課があるんです。

**清水** 先生は調査部にいらっしゃって。

**大室** このときは兼任はありません。

**清水** 直接の上司は野村さんということになるんでしょうか。

**大室** そうです。

武田 事務局の場所、建物は変わらないんですか。

大室 変わりません。みんな旧貴族院のところですよ。このあいだ話したよりもっと広いですね。角が事務局だったと思うんですがよく覚えていないんですが、ずいぶん広いんです。あの図面はだいぶ小さかったな、と思います。その連絡部は、連絡課と団体課。それから精動指導者錬成所というのがあります。この所長が中村馨という陸軍中將です。幹事に古河武さん、これもたしか京都大学の教授だったと思うな。それで主事に海後勝雄さんがいた。みんな指導となっている。稲垣守克さんなんて、後半に外交評論家みたいなことをやっているでしょう。それから辻明さん、岩崎重太郎さん。

清水 この指導者錬成所というのは事務局の直属だと考えてよろしいんですか。何かの部に属しているわけではないんですね。

大室 全然別です。

武田 場所はどこですか。

大室 ほうほうで錬成をやっていました。錬成というのは心身の錬成が多いんですね。要するに天照大神をやったり、水の中に入ったり、滝に打たれたり、そういうことと同時に泊まり込みでいろいろ教える。

清水 錬成所という建物なり場所が特にあるわけではないんですね。

大室 あるわけではないんです。

清水 組織としてあるということですね。

大室 ほうほうを使っていました。これもなかなかよくやっていました。

清水 このとき先生は企画課にいたということですが、ここは先ほどおっしゃったような具体的な企画になっていくということですか。

大室 ですが、いま言ったように、このころ企画課の課長事務取

扱というのは部長がやっているわけです。それで最初の時に熊田「文雄」さんと私がやっていました。熊田さんは私よりももちろん先輩です。これは元神主さんで、石川の方の宮司さんで、もう引退していますけれど、国学院を出た人です。このときに私が企画課の予算なんかを作れと言われていたんです。それで作って、常任理事のところを持つていった覚えがありますけれどね。その後、企画課も三人ぐらい増えます。有馬さんとか、麦林さんとか、東大出の優秀な選手が来ます。でもそこで、改めてこうしようという企画はあまりない。結局運動が出てくると、やる。麦林さんだったかな、囑託で大した人でした。備長炭の話が出たな。委員会とかはみんなこちらでやっていましたからね。

清水 職制を見ますと、企画課の業務は「企画委員会に関する事項、会議議案に関する事項、中央諸官庁との連絡に関する事項」とありますが、具体的にどういうことをされているんでしょうか。

大室 企画委員会というのができましたでしょう。その運営とかをやっていました。それから官庁との連絡というのは、官庁の方でこういう運動をやってくださいと来たものを、具体的につくるということが主ですね。ただ普通の事務的な連絡ではないんです。それが必ずあるわけです。それに対して、徹底を図るために運動要項をつくるわけですね。

清水 このころは、どんなことをされましたか。

大室 昭和十五年になってからは、こういうものがありましたか。電気・ガスは十四年でしたね。食糧報国運動じゃないかな。

清水 それをちよつとお伺いしたいんですが、食糧報国運動は生活上では当時一番問題になっていたことですね。供出米の供出がうまくとれないとか。どういうことを、運動としてされたんでしょうか。

大室 いろいろあるんですね。節米とか混食をしろという一般に對するものと、増産をやるということとか。そういうことに対す

る認識を深めるために、食糧報国運動というのはいろいろなことをやって、協議会だとか、みんなを集めてやっているんですね。一般はそう「食糧不足だ」と思っていないからね。農村なんかに行けば、自分のところにはまだ食い物があるんだから。そういうものを総合的にやった。なかなか難しい問題だったんですが、だんだん行くと、例の混食だとかいろいろの問題になってくるわけです。

**清水** 供出米のことで何かご記憶はございませんか。

**大室** 供出なんかは、こちらで特に言うようなことはなかったですね。そこまで行っていないんじゃないかな。供出という言葉はあまり聞きませんでしたね。一般的には当たり前で、やらなければいけないと言っているけれど、そのあとから増産が始まるんです。野菜の増産とか、開墾するということが始まるんですね。その全体的な問題で、消費者に対することは、白米をなるべく食べないようにするとか、玄米がいいとか。そのうち、混食、代用食。だんだんそういうところに入るんですね。

**武田** 私はイメージが湧きません（笑い）。

**大室** しまいにはやむを得なくなるけれど、そこまでまだ行っていないんですね。

**清水** それに続く贅沢全廃とか、献納広告運動というのは、ご関係されましたか。

**大室** 贅沢全廃とかは、委員会などは私どもの担当なんです。贅沢全廃も非常時様式なんかから始まって、物資がないから、いろいろやるということでも、できないわけです。贅沢全廃委員会というのは、これ「委員のリスト【資料6】」を見るとずいぶん大袈裟にやっているじゃないですか。どうして贅沢全廃でこんなにやるのかというと、そういう雰囲気を作ることだったと思うんですね。贅沢全廃をやっているようになると、国民精神総動員本部の運動が全国的に盛り上がっているんです。だから

危機感が大きくなったんじゃないのかな。

**武田** それは前の時代との違いを感じましたか。

**大室** それがどういふことかというところ、スタッフが小松さんなんです。小松さんは前からやっているんだけれど、新聞関係のマスコミを使うとか、雑誌を使うとか。一番先にやったのは、広告人協会とか何とかです。その人たちが新聞の広告もなくて、手が空いているわけです。その当時としては一流の人たちなんです。

**清水** この前の「ぜいたくは敵だ」というスローガンを作られたという話ですね。

**大室** その人たちが積極的に手伝いに来た。それで「ぜいたくは敵だ」とか、われわれには考えつかないスローガンを出しました。それから「欲しがりません、勝つまでは」とか「日本人ならぜいたくはできないはずだ」とか、その人たちは大したものですね。

**武田** 広告人の発想なんですね。

**清水** その方たちは、どちらの課にいらしたんですか。

**大室** それは事業部でやっていたわけです。小松さんのほうでやっていた。

**武田** 正式な職員ではなくて、嘱託みたいな感じなんですか。

**大室** そうではなくて、集まっているいろいろな意見の交換なんかやっているうちに、手伝ってもらったことになるわけです。

**武田** 給料は？

**大室** 逆に言えばボランティアみたいなもので、力を貸してくれたわけだ。みんなそうなるんです。献納広告がそれにつながるわけです。自分たちが関係している、全部こんなマークを入れて、その部分はいくらか出して、タンクを作るとか飛行機へ作るほうに献納するわけです。マークがありましたね。

**清水** じゃあ献納広告運動というのは、積極的に呼びかけたというよりは、広告業界がかなり自主的にやったような部分があるんですかね。



**大室** 献納広告は献納広告委員会というのができますね。その人たちがやった。とてもほかの人ではできませんからね。

**清水** こちらの本「明石書店版の本」にございました。日本広告主協会献納広告実行委員ですね。ですから精動の中ではなくて、広告主協会の中にできたんですね「『国民精神総動員運動』巻二・昭和十五年度・一九七〇九ページ参照」。

**大室** いやいや、こちらの中で、そういうものを認めてやったわけです。だけどそっちに任したわけです。そういうふうになると、いまだから言えばそうなんだけれど、みんな遅れをとりたくないでしょう。だから漫画家が協力するとか、いろいろな方面がみんな協力してくるわけです。だって、ほかにやることないでしょう。まだ徴用に行っている時期ではありませんけれど、みんな仕事がなくっているわけです。新聞の紙面は少なくなるし、雑誌は紙が少なくなる。結局、積極的にやりたいということになる。

そのへんが非常に盛り上がったことの裏付けは、非常時意識が非常に強くなったということです。食糧の問題でも、着るものでも、生活のことを考えても、だんだん窮屈になってくる。一番最後にくるのは、油の問題でしょう。それだから、それだけ真剣になってきたんじゃないですか。非常時意識が高まったところにもってきて、具体的な話が来るから、みんな協力してくれた。だから精動本部の時はよくやっているし、逆に言うとききたんですね。不思議なくらいにいろいろなことができたんです。それでちょうど調子がよくなったら大政翼賛会になっちゃった。

**武田** この時期には、今日もお話があった実践網というのは、だいたい形が出来上がっているんですか。

**大室** それはまだできていないところがあるから、常にやっているわけです。実践網の組織もそうだけれど、結局実践網を通じて、いろいろな趣旨を徹底させなければならぬ。だから常にそれは、指導者に対してやっているわけです。隣組ができた隣組常会と

いつて話し合って、今度はこういうことだよ、というようなことをやる。

**武田** いくつかにできている場所はあるんですね。

**大室** もうずいぶんできている。十五年になったときには、八割以上できているんじゃないですか。

**武田** このとき各県の知事を地方の本部長にするんですね。これはいままでとは違う形ですね。

**大室** 違うんです。いままでは府県の知事は知事で、行政機関があつてただ単に協力をお願いしますということだった。今度は知事を中心に、府県の精動本部をつくったわけです。ですから体制ができたわけです。それでうまく行っているところで、精動をやめちゃうんだ。今度は大政翼賛会の支部をつくりまされけれど、それがなかなかうまく行かないうちにだんだん時間が経っちゃったんじゃないですか。

**武田** このときに、各省の次官が理事で入られますね。少しいまでも感じが違うということはありませんか。

**大室** 最後には必要なものだけになったでしょう。少なくするわけですね。確かそうだと思いますね。「新聞合冊を調べる」あれはできたのはいつですか。

**清水** 本部ができるのは四月十五日です。おそらく「新聞では」四月三十日号に載っているのではないかと思います。

**大室** 次官は本部の理事に大勢出ていますね。内務、大蔵、陸軍、海軍、文部、農林、商工、厚生と主なものはみんな入っていますね。官民一体で、地方長官を本部長にするので、それが必要だったのかも知れませんね。このときは非常にうまく行っているんですね。地方長官を集めて、地方長官会議なんかをやった。精動本部の各府県の本部長なんですよ。それを首相官邸でやって、米内さんが出て来て、堀切さんもいて、私もそこにいた写真がありましたね。あれはそのときなんです。だから官民が一体になった姿

で、それを精動本部の指示によってやる。だからこれは非常にうまく行って、歯車が回り出して、仕事がいぶんできたときに、こう「大政翼賛会に」なっちゃったんですね。

**清水** あと二点、十五年度の事業でお伺いしたいと思います。このとき紀元二六〇〇年の式典がごございますが、二六〇〇年の式典はどういうふうにご記憶されていますか。

**大室** 式典は政府がやったので。ただ、何か知らないけれど、手伝いに行っていましたよ。私なんか宮城前のテントのところへ何回か行かされて、うちのほうの役員とか幹事クラスも呼ばれて行っています。ただその時に、もう言ってもいいと思うけれど、帰ってきたら、湛増さんだと思っただけで、この大式典はなんとなく暗い、と言うんだ、何かおかしいな、と言う。普通なら盛り上がってこう「ワツと」なるところだけれど、違うと言ったね。何か頭の中にもやもやがあっただろうか。そういう盛り上がりがないと言って心配していましたね。

あとは、そういうことをやりなさいという通知は出しているけれど、直接というのは、あまりありません。私どもはその時に、ありがたいことに観艦式だの観兵式を見に行った。

**清水** あと、雑誌対策ということがございましたが、先ほども雑誌ですとか広告主がいぶん協力的だったというお話がありますが、これは先生ご自身が携わられているのではないと思いますが、何か小松さんが話されたようなことで、ご記憶のことはございますか。

**大室** 私の方の関係ではなくて事業課がやっていたんですが、その頃はいろいろなものを集めてやっていたんですね。雑誌や何かは、材料をもらいにくいこともあるけれど、普通でもいろいろ聞きに来るんです。それで幹部を集めて、協力してもらいたいというようなことから始まったわけなんです。時局的な記事の中にもそういうものがいくらか入っているし、われわれも前に『軍

国の母』『国民精神総動員中央連盟・一九四〇』なんていう本を出しましたでしょう。銃後援で、戦死者遺家族などの本を出しているんです。

私も神戸の方に実際に見に行ったことがあります。その記事も、博文館とか講談社なんかがその頃よく来ていましたから、記事をやつて、そつちで書いてくれればいいということです。そういうこともやっていました。その後、いまの雑誌の会議というのは、編集者を集めて、向こうも協力して、こちらも協力してくださいというようなことなんです。その前段階でもいったようないろいろなことがあるんです。材料をもらいに来るとかね。

**清水** それではギブ・アンド・テイクがいぶんあるんですね。

**大室** ただ、私はそれで失敗したことがあるんだ。兵庫県に行つて話をしたときです。あのころ驚いたんだけど、受けた博文館の書くやつ、ライターというのは着物を着ていて、角袖なんです。年配の人ですね。講談社もそうだった。角帯で来る。こんな人が、と思つたら、これ「筆記用具」を持って来て、やるんですよ。それでなんとかの物語みたいにしてまとめて出したわけだ。それは架空の名前にしたんだけど、同じ名前の人がいたんだ。それで、「大室さん、この人がいて、これはこの人だと言われて困っているんだ」という。悪い方の例だったんだね。それは違うといって、苗字だけでですけど、同じなんです。それで弱っちゃつて、お詫びの手紙を書くのがやつとだったけれどね。それがいまの雑誌なんかは、全般的にみんなが協力体制になつてきた。

だから私は、いま考えてみると、非常時意識が非常に強くなつてきたことだと思う。それで戦争が始まったときにも、みんなが、というのはいき過ぎかも知れませんが、これはやむを得なかった、これはよかつたという気持ちになつた人の方が多かったと思います。

**武田** 雑誌対策の話ですが、これは情報部の仕事ではないんですか。

大室 それは具体的なことです。情報部ではなくて事業部がやった。新聞社ともずいぶんやっていますからね。政治部長とか、ほかにもいろいろやっています。そういうことが、急にワッと両方から息が合ったところだったんですね。

## ■精動運動を総括して

清水 それでは最後のところなんです。いま昭和十二年から十五年まで年次順に追ってお話をいただきました。精動運動全体について、いままでにもいくつかお話をいただいています。先生が目からごらんになって、総括という形でお話をいただきたいんですが。

大室 精動運動が始まったときには、支那事変が拡大して、これからはそう簡単には行かないよ、というところの時局認識から始まったと思うんですね。その時局認識をいろいろな意味でやっていますと、当面戦争をやっていますから、銃後の問題とか遺家族の問題、出征兵士の家族とか、いろいろな問題が出てくる。その次には傷病兵の問題が出てくる。そういうものに対して、一般の国民がちゃんと目を向けて、いろいろなことをやりなさいよ、ということから始まっていると同時に、だんだん拡大強化してきたわけです。

精動としては、時局認識をしているうちに、政府からの要請として、お金がないから貯蓄をやれとか、非常時だから生活様式を直しなさいとか、服装がどうか、あるいは戦死者や傷病者が増えてくると、人的資源の確保のために人間を増やさなければいけないとか、それには体力強化だとか、健康だとかいうことをやらなければいけない。やっているうちに、今度はお米の問題で食い物に困ってくると、増産をやる、白米はあまり食べるな、玄米にしろ、混食だとか代用食だとか、とだんだんなる。

そういうことのために具体的なものを、政府の手先というとなんですが、実際にはお願いするような団体として細かくやった。そのために一番必要なのは組織だということ。実践網というのを早くからやりました。これはのちになってみると画期的とも言えるように、各郡、町村、部落、町内会、隣組というような組織が出来上がって、これが非常に効力を発揮した。

それと同時に、最初は中央聯盟で加盟七十四団体の傘下を相手にしてやっていたのが、そればかりではなくて都道府県と一緒にやる。特にその中の全国組織の各団体を上手に使っているんですね。宗教人であれば、神道、仏教、キリスト教まで必要に応じてやっている。それから教化団体とか報徳社という精神的なつながりのあるような団体も、率先してこういうときは非常時だからいろいろ協力しましょうというようなことをやってくれる。その次に、食糧増産だとかは農業団体がやっていますね。そういうあらゆる方面に向かってやって、最後に物がなくなると、廃品回収から始まって、物資の節約ということと同時に、贅沢をしてはいけないとか、生活はどうしろ、ということになった。

そういう意味では最初の小さな国民精神総動員中央聯盟のスタッフから、全国的な運動としては画期的なことをやっていたんじゃないか。それが途中でいろいろな変化があつて、強力になつて一番成果が上がりが始めたのが精動本部になったとき。時局の進展といいますが、最後になりましたが、私は全般的なこととはよくわかりませんが、非常に成果が上がったものではなかったか。

ただ、この運動のよかったことは、頭から押しつけるということではなくて、こちらからお願ひするけれど、下の意見も聞きながらやっていたことだと思います。だからそれだけの成果があつたのではないかと思います。こういうことを考えますと、いまになつてみるとなんとも言えませんが、政府にしてみると、あのときをやった運動は、かつてない効果のあつた運動ではなかったか

な、という気がいたしております。

**清水** これは次回の話に若干かぶってしまっていますが、精動本部が解消されて大政翼賛会になるときのお気持ちはいかがでしたか。

**大室** 大政翼賛運動という名前は、その頃から使っていますから知っておりましたが、これは何をしようというのか、不思議に思った。われわれ精動本部の主なもの分けていきますが、中央協力会議というのがある。これは何をやるのかといったら、市町村の協力会議があつて、郡の協力会議があつて、府県の協力会議があつて、それから中央の協力会議がある。そういつてずっとやっていると、ちょうど政治の組織と同じなんです。国会があるのに、どうしてこういうものが必要なんだと思つた。その頃は、悪いけれど国会は役に立たないということになっていたけれど、これでいいのかな、という気持ちもあつた。しかし最初にそういう中で間に合わないから、中央協力会議というのは、こちらから指名してやるわけですね。その手伝いに行くということで、われわれはいたんです。

私はこの「精動運動の」後始末をしたものだから二、三月月遅れたんですが、その当時としては、大きく飛躍できるという気持ちもあつたと思う。

**武田** 大政翼賛会になつて、ということですね。

**大室** なつて。ただ、東亜局なんていうのはどうするのかな、と思つた。また政府が別にできるのかな、少しおかしいんじゃないか、と思つた。そのうちずっと見ていると、喧喧諤諤で議論ばかりしているんですね。文化部なんていうのは岸田「国土」さんが行つたので期待していただけたけれど、大したことやらないうちにおしまひになつちやうたでしょう。みんな有名な人がやつたけれど、頭でかちというんじゃないかもしれないけれど。

最初は、いまの東京會館に入るんです。そのうち、あんなとこ

ろは贅沢だということになりますね。その頃は、大政翼賛会運動も困つたんでしようけれど、われわれはそのへんでやめてしまひましたから、よくわかりません。何か大きくなり過ぎて、一番困つたのは政府じゃないですか。そこで実践部隊の翼賛壮年団というのができるんです。これが実働部隊です。いまの精動に代わるものが翼壯です。

**武田** 何回かお話があつたんですが、新体制運動がありましたね。先生はあれをどういうふうにごらんになつていらつしやいましたか。

**大室** その頃、時局に対応できない。例えば戦局も拡大する。だんだんやつていくと、東亜新秩序という大きな構想になる。それに対応しなければならぬ。その頃、汪兆銘が何かのあれを作るでしょう。あれから新体制というのが使われたんです。そういう新しい、東亜の新秩序という言葉が使われ始めた。こちらもそういうパンフレットを出したりしていますが、実際の運動としては、そういう大きなものは、具体的にどうこう、ということはやっていません。ただ、話としてはだんだんそうなつてきています。

**武田** 新体制運動は、ちよつと話が大きくなり過ぎるな、というご印象ですか。

**大室** そういうときは当然だ、というような感じですからね。私が一番心配したのは、結核予防の国民運動の要項を書いたときに、何か決まつたように書いてしまつたんですね。新体制の中国のなるとかが緒について、というような言葉を使つたんだ。それが氣になつて、ずいぶんみんなに相談したんだけど、いやそうなんだという。というのは、汪兆銘ができたから、体制ができたようなことを書いた。のちにひっくり返つてしまいますけれどね。そういうときでしたから、「使つてもいいんだ、これでその通りなんだ」と上の人は言う。

**武田** 次回はもう少し補足していただきながら、大政翼賛会と翼

壮の話ですね。

**大室** 大政翼賛会は私はあまり長くおりませんので、協力会議の一部しかわかりません。

**武田** 大政翼賛会を辞められたあと、府中で翼壮を作られるわけですか。

**大室** それは途中からやっているんですが、大政翼賛会は五月か六月に辞めているんですね。半年ぐらいです。それで家に帰ってきたらつかまつちゃって、翼壮の運動が始まる。翼壮の運動は、昭和十六年からその話があるわけですね。十六年の頃から、あのころ「府中は」町ですから、町の連中から何かつくってくれと言われて、私が規約だとか要項だとかをつくった。そのころは役員を作ることがたいへんだった。それで結成したのは十七年の三月です。そのあいだに私も館山に行つて、錬成をやらされたりしたことがあるんですけどね。

ところが、十七年の三月から、私は翼賛選挙の手伝いに行くんです。

**清水** ちょうど同時なんですか。

**武田** いろいろなことが同時並行で進んでいるんですね。そういうことなんですね。

**大室** 同時進行で、こっちから東京會館に通っているんです。帰つてくると十時ぐらいになっちゃうんですが、待っているんですよ。「どうしたんだ」と言ったら、「いま役場の二階で会議をやっているんだけど、大室さんが来なくては話ができないから頼む」と言うんだ。行ってみると、翼壮と在郷軍人会があるんでしよう。軍人会の分会は一番力があるんだ。分会長が役員になっているんだけど、新しくできた分会長が、兵隊として強いのがいるでしょう。これは優先的で、軍人分会を馬鹿にしているような話なんだ。それで二階に上がって会議をやつて、これはこうこうで、こうすればいいんだといったら、それで簡単に三十分も経たないで済んじゃうんです。それを二回やりましたね。後で考えてみたら、

私が向こうに行つているとき、三月幾日かに結成式をやっているんです。あのとき私は帰ってきて、やったのかな、ということを感じていない。

**武田** 私も先生の年譜を見て、これはどういうふうに関係しているのかな、ということがよくわからなかったの。

**大室** ですから大政翼賛会は本当に半年ぐらいしかいなかったけれど、協力会議だけはやりました。テーマとしては、私は精動と選挙の話は詳しいんです。あと府中の翼賛壮年団も、ローカルですが、これは本当のことをいって、私しかわかりません。府中の翼壮の話をすると、十七年の選挙が終わつてからは、ほとんどずっと十八年の五月ぐらいまで、七月に私が南方に行くまではやっているんですよ。府中の翼壮は模範的によくやった。私がいなくなつてからもよくやっているんですね。

**武田** その話を次回一回していただいて、その次の回に選挙の話をお聞きするということになりますか。

**大室** そうですね。では次回の予定を決めさせていただきたいんですが。

(以上)

# 大室政右 オーラルヒストリー

## 第4回

---

日 時：2002年9月24日（火）

13：30～15：30

場 所：大室政右宅（府中市）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

武田 知己（政策研究院特別研究員）

清水 唯一朗（政策研究院リサーチアシスタント）

馬場 治子（府中市郷土の森博物館学芸員）

## ■精動本部から大政翼賛会へ

大室 調べたときは思い出すんだけど、明るくなる日になるとわからなくなってしまう。もう駄目ですね。

武田 いいえ、私もそうですから。

大室 『府中市史』を見てみると、ほとんど見ているから「自分で引いた傍線が」入っているんです。ここは違っているとか、こうなっているとかいふ。しかしもう覚えていない。「前回速記録に手入れをしたものを渡しなから」話し具合がどうも堅くて。何をしゃべっているんだか、よくわからない。

馬場 リードがいいから、大丈夫です。

武田 いいえ。前回の速記録を見ても、ずいぶんお話ししていただけるので大変助かります。お話を聞いていると、面白いですね。

大室 このあいだ、竹本「孫一」先生のことをお話ししましたが、見ると思い出しますね。

武田 竹本さんはちょうど同じぐらいの時期ですね。

大室 同じですね。お年は、向こうの方が上だけれど。私は不思議に思っているんですが、官僚になった人のほうが年をとっているんですね。それとわれわれは民間人だけれど、やっている仕事は、こつちのほうが先にやっている。先というのは、仕事ということではなくて、仕事の内容が上を行っているのかな、という気がする。いまになつてみると。そういう感じがしましたね。

いま私はお宮のことをやっているんですが、伊勢神宮の民間小宮司をやられた幡掛正活さんという有名な人がいるんですね。この人は私より三つか四つ上なんですね。今度引退されましたけれど。いろいろな話を聞いていると、その人は内務省に入っていて、事務官ぐらいいなつたときには、年は上でも仕事そのものはねー。民間だと年にかかわらずやっているから、ずっとそういう感じが。原さんなんかもそうですけれど。原文兵衛さんが昭和十七年、

ちょうど私が選挙の手伝いに行っているときに、鹿児島県の公安課長が何かをやっていた。公安といいましたか、特高ですね。のちに書いていらつしやいますが、その影響する本部にいた。原先生は二つぐらい上かな。あの方は最初から警視総監候補だったから。生意気なことを言うけれど、もうずいぶんばけていますから。つくづく能力が落ちていくことを感じます。

武田 いいえ、本当に思い出されたことを何でもお話しただけたらと思います。

清水 よろしくお願いします。

大室 それから「質問を」いろいろいただいています。今日は翼賛「翼賛壮年団」と大政翼賛会ということでした。これは私が持っている資料です。「府中町翼賛壮年団関係資料」「リスト」と「大政翼賛会関係資料」「リスト」を渡す。

武田 すごいですね。府中の翼賛の資料はあらかた揃っているんですね。

大室 これは私がやっていた分だけです。ごく最初のもので。それから、酒井「三郎」さんが書いた『昭和研究会』という本がありますが、仲間がいて、会って話を聞いてきました。これは先生方、ご存知でしょう「中公文庫版の本を示す」。これは相当そのまま書いてありますね。

武田 この解説を書かれた伊藤隆先生は、うちの大学におります。大室 この人「酒井氏」ではないんですが、この人に懇意な人に会ったんです。私よりも歳が上だから相当ばけています。精動から大政翼賛会に行った人で、いま九十幾つなんですが、よく勉強していると思えましたね。

武田 その方は精動から大政翼賛会に行かれたんですね。

大室 ええ。選挙のときも一緒に来ているんです。選挙の話聞いたんですけれど、大政翼賛会のほうにも行っていたんですね。でも、これを見てもおわかりのように、文化部といつても、

何をやったんだ、ということになりますね。

武田 そうですか。

大室 基本が違うんですね。

武田 今日は、いまお話ししていただいたようなことも含めてお願いします。今日は早いもので第四回目になります。先生は精動をやめて、大政翼賛会に行かれますが、府中の壮年団の結成のお話もありますので、この二つを中心にお話しいただきたいと思います。

最初に精動運動から大政翼賛会に移るときのことについて、先生のほうでご記憶のことがあればと思って、いくつか質問を出させていただきました。

大室 ご質問とも関連がありますが、事業概要はどうかという話ですが、昭和十五年十月二十二日に精動は解散しているんですね。そして十月二十三日付で、私どもは大政翼賛会の総務局協力会議部、という辞令をもらっています。そのときには、大政翼賛会のほうに全部が「包摂」されるということで、「精動の」組織の全員が大政翼賛会に移ることだったんです。そして「精動の」財産がどうのといって、財産なんかありませんが、そういうものを全部移すということで納得してやったんですね。私どもは協力会議部と言われたんです。

武田 それは企画部がそのまま協力会議部になったということですか。

大室 精動の主な連中で、仕事をするような連中は協力会議部に行ったんですね。そして常任理事をやった小泉悟郎さんという人が部長でした。これは最初のころですね。後藤「隆之助」さんが組織局長をやったり、有馬「頼寧」さんが事務局長のときですから。協力会議部というのはすぐに臨時協力会議を召集しますから、慣れたやつにやらせるということだったんじゃないか。まあ「精動の職員は」いろいろ分散しました。総務局に行ったり、都市課

に行ったりいろいろありますが、それ「協力会議部に行った者」が多かった。

そのときの辞令がこれです「大政翼賛会の書記に任ず、という辞令を示す」。十月二十三日付になっているんですが、それで話をつけて、これをやらせられるんです「精動本部の残務整理を命ず、という辞令を示す」。

残務整理というのは、例の事業概要をつくれということで、それを首相官邸の和室でやったんです。昔はそこに総理大臣がお住まいだったんだけど、例の二・二六からみんな入らなくなつて、それを情報部が使っていたんですね。内閣情報部はスタッフも少ないので、その一室の大きな立派な机を借りました。庭がきれいでとても環境がよかった。そこに私だけ。ほかの連中は、主任の文書課長をやっていた浮田「辰平」さんが総説を書いて、できたものを印刷に回すときに、額「浩」さんという編集の人がやりました。内容はほとんど私がやった。昭和十二年はできておつて、十三年も半分ぐらいできておつたので、実際には十四年、十五年を主に、全部私がやったんですね。時間がなくて、二週間ぐらいでやったんですね。いまから考えてみると、あれだけのものを二週間でやるのは――。

武田 大変ですね。

大室 できてから褒められましたよ。そのときの言葉は「君は組織力があるな」ということだったんですが、「なんでこれをつくって組織力というんでしょう」といったら、目次の並べ方がよかった、ということなんですかね。

武田 目次、構成から全部先生が決められたんですか。

大室 内容については全部です。総説を「浮田さんが」お書きになつて、内容についてはほとんど私がやりました。ほかの人はやりません。額さんというのは新聞の編集をやっていたんですね「精神総動員の新聞の合冊版を示す」。その後たくさんの人が入り



ますが、「台湾画報」か何かの編集長か何かをやっていた人です。年は上の方でした。内容はほとんど、ほとんどじゃない、全部とっていいくらいです。

そのとき、みんな向こう「大政翼賛会協力会議部」に移っているわけでしょう。それで一番先にやる仕事は、臨時中央協力会議をやるということですね。その協力会議のメンバーがだいたい決まって、途中で誰が来たか、部長か、もっと偉い人が私のところに来て、「君は児玉九十先生の弟子だそうだな」という。弟子じゃない、学校を出ただけなんですね。「だから児玉先生のところに行つて内諾を得てこい」と言うわけです。それで一日、土曜から日曜にかけて家に帰ってきて、児玉先生にお目にかかったら、快諾してくださった。そのころ私学の関係では児玉先生でした。教育会では、早稲田の総長とか慶應の総長とか東大の総長が出ておられましたかな。それから一高の校長だった安倍能成さん、そして私学のほうで児玉先生でした。

児玉先生は、推薦した人が青年団長の栗原美能留さんとか、もう一人どなたか教育界の方が知っているんですね。ところが近衛「文麿」さんが知らないと言ったそうです。近衛さんがそのころ教育の関係の新体制みたいなことをやっているでしょう。それを見て、児玉先生はこれは結構だということがあったらしい。「市史」にはそんなようなことが書いてありますね。あれは半分想像じゃないかな。それで児玉先生の快諾を得て、ご報告を申しあげた。それは「精動の残務整理の」途中でやったわけです。あとは急いで運動概要を仕上げまして、それで翼賛会のほうに行つたんです。

それからいろいろご質問がありました。大政翼賛会と新体制運動というような、わかつたようなわからないような話がありましたが、そのときの世の中の「空気」ですね。革新的なというか、もつと前進しろということがあったから、これから大きくなるん

だということ、特にここに言うような内部からの反発や何かはなかったと思います。

「精動本部の」最後の日に午餐会か何かがあつて、簡単に蕎麦か何かでやつたんですが、そのときの集合写真もあります。そのときの事務総長は岡部長景さんだった。岡部さんがみんなに集合写真をつくってくれて、いまも私は持っています。ここには持つて来ませんでした。

それから見てみると、こちらの「精動本部の」人もだいたい「大政翼賛会」に入った。ただ部長クラスが全部入ったということとはなかったですね。課長クラスから下はほとんど入った。部長の中では、小松「東三郎」さんが情報局に入つたんです。情報局の国民運動課長になるんですね。第五課長かな。あの方方は残つた方もいますが、湛増「庸一」さんなんかは入っていないから、辞めたんでしょうね。

「私が精動本部を」辞めた経緯というのはその程度で、特にありません。ただ年史をつくらせていただいたのは、どういうわけか。どうして私が、というんだけど、浮田さんから「君が一番よく知っている」と言われたんですね。それは不思議なんです。百人ぐらいいて、記者をやつた方だとか課長だとか部長がいるんですけれどね。まあ部長は書かないでしょうね。

武田 でも先生は、最初のころから精動に関わつていられていますからね。

大室 とはいんですが、一番年若ですからね。入つたのは二十二歳です。そのころの勘定は満ではないんですね。一つずつ上になつていきますから、最初に入つたときは二十一歳ということになる。そのころは二十二歳ということで、その次に東京市の選挙をやつたときのものを見て、全部職員の給料を書いた名簿を持っているから、こんなことをやっていたのかな、と思う。

武田 このころは、先ほども名前が出ましたが、昭和研究会が新

体制運動みたいなものを支えていくわけですが、何かご記憶のこととはございますか。

**大室** 直接は関係ありませんが、三菱の何号館だか、赤煉瓦のところでした。そこに二、三回使いに行ったことがあります。後藤さんという方は、われわれのほうでは「怪物」ということでした。

**武田** 怪物ですね。

**大室** 顔を見ても、そういう感じの方だった。それでそこに関係している人は、有馬さんでもなんでも、みんな精動の役員をやった方でしょう。ところが、昭和研究会の内容的なことは、精動のときには一つもそういう声が出ないんです。ですから上の方は、どちらも知っていてやっていたんだらうと思います。これ「酒井三郎『昭和研究会』」を見ますと、近衛さんの個性が出ていらして強いところがあるらしいけれど、政策的なことを昭和研究会がやっているということは承知しておりました。

**武田** 精動のほうは実践で、案内を出したり、通知を出したり。昭和研究会とはどういう関係でしょうか。

**大室** 昭和研究会は全然関係がありません。直接のつながりはありません。何もありません。それから思想的な影響もありません。ただ個々の先生方がそういうことをやっているけれど、これ『昭和研究会』を見てみますと、そういうことはありませんね。

それから先に進んでみますと、精動運動というのは、具体的に実践組織をつくったと同時に、仕事をやる団体なんです。いわゆる実践躬行の団体である。実践躬行ができるようなことを政策的にやっていた団体なんです。食糧増産にしても、勤労の問題、健康の問題でも、いろいろな問題について具体的にやる。大政翼賛会は思想的なものばかりに走ってしまつて、具体的にやっている暇がなかったんじゃないですか。文化部はその当時もずいぶん脚光を浴びました。特に岸田さんは評判が良かったので、やっていますが、あれ『昭和研究会』を見てみると、地方に行つてい

ろいろ講演をしているぐらいですね。そういう雰囲気をつくらうということだったんでしようが、内容的には何をやったのかよくわかりませんね。

私どもが疑問に思ったのは、中央協力会議をやっているときにそう思ったんですが、国会があるのにどうして中央協力会議という組織をつくるんだらうということですね。ところがそのころは政党をなくしてしまつて、大政翼賛会で、最初からかあとからか、議会局をつくりましたね。それにはみんな衆議院の連中も入っているんですが、そこで議会が運営されるということで反発があつて、すぐにやめてしまいますね。それと同じように、東亜局も最初でしたか、あとから興亜局になるわけですね。それも、政府がやる仕事じゃないか、ということでしょう。あのころは拓務省というのがありまして、日本の委任統治の地域、朝鮮、台湾と南洋諸島はそこが担当でやっていた面もありますが、これをはみ出して東亜局がやるということになると、そういう力があるのか、という問題があつた。理想的なことをやっているけれど、内容的なものは。だからそれはすぐに変わりますね。

それから後藤さんが組織局長になられるんですね。しかし組織局長になつてどういうことをやるのか、やらないでゴタゴタしているうちに、相川勝六さんと交替した。相川さんは知事をやった方ですから。宮崎県でしたか。

**武田** 広島知事ですね。

**大室** 具体的な問題をやって、大政翼賛会が動き出したのはその頃からじゃないですか。地方に対しては。ただ、組織としては、大政翼賛会の地方の組織は精動の最後のときに各県知事を上にして県本部をつくつたでしょう。それをそのまま利用していますからね。その組織はあつたと思います。それから常会、その組織による郡単位、町村、部落単位というような隣組組織はそのままあつたんですが、具体的なあれ「活動」はあまりなかったですね。

一般的なものであった。ですが、各地方では大政翼賛会の支部をつくるんだということで、努力したことは確かだと思う。

その中に大政翼賛会の「推進員」というのがあるんです。これは各地域ごとにたくさんはいけれど、一、二名あるんですね。それが主体となって大政翼賛会をやった。大政翼賛会の府中なんかの支部でいうと、町長さんが支部長で、町会議員が何か委員をやっています、言われた通りをやるのであって、ほとんど行事的なことです。例えば南京で勝ったとか何かあると、宮城遙拝をやるようなことで、そういう行事的なことをやるだけで、具体的なことはあまりなかったのではないかと思います。

武田 話が戻りますが、先生は国民精神総動員運動の年史の編纂を首相官邸でやられて、そのあとすぐに協力会議部の仕事をされるんですか。

大室 そうです。

武田 そして最初の臨時中央協力会議をやるんですか。

大室 臨時中央協力会議というのがございました。

武田 昭和十五年十二月ですね。

大室 これが会議録です『臨時中央協力会議会議録』（大政翼賛会一九四〇）「七〇二ページある」を示す。私どもが概要をつくってから行ったときには、各委員の方にアンケートを出しまして、議題になるものとかを出しているんです。

武田 会議の議題ですね。

大室 そう。その意見がたくさん来ているんだ。それで項目別に議案をつくらなければいかんというので、神田あたりの下宿屋みたいな小さな旅館で寝ずにやったことを覚えている。そのときにできてきたものを見て、言われたんです、「君は組織力があるな」と。みんなわれわれより年配の連中でしたけれど。

武田 先生のお仕事の主たるものは議案の整理ですか。

大室 そう。議案づくりをやって、あとで運営ですね。いまの東

京會館の五階の大広間、大天井がある結婚式場だったところですが、そこでやりました。非常に内容のある発言でした。

武田 各委員の方にアンケートをしたということですが。

大室 全部出して、意見があれば、ということですよ。

武田 それは全国にですか。

大室 この中央協力会議のメンバーです。それは名簿もあると思います。

武田 先生は、第一回、第二回の中央協力会議にはまったくタッチされていませんか。

大室 この臨時だけで、辞めさせていただいたんです。私は最初に事業概要なんかを残されてやったときに「辞めよう」と思っただ。「そう言わないで、みんなそのまま中央協力会議があるから、手伝ってやってくれ」と「仲間に言われた」。逆に言いますと、ここで失敗すると精動の連中は何しているんだと言われますからね。その代わり仕事は早いし、慣れていきますから、みんなよくやっただと思います。これは大仕事でしたよ。

ですが、私が辞めた本当の理由の一つは、大政翼賛会というのと考え方が違うような感じがあって、最初から、そう言う方が多かった。ただ、みんな仕事を辞めると困るという人は残っていますからね。私は、ちょうど昭和十四年に長男「長兄」が戦死しまして、次男だからどうしても家に帰らなければならなかった。そういうことがありました。それはこちらの人は知っていましたから、もうしょうがないだろうということで辞めさせていただいたんです。ですから、何ヶ月でもないわけですね。

武田 七、八ヶ月ですね。

## ■大政翼賛会の推進員に

大室 辞令としては、「昭和十六年」四月十八日付で「退職が」発

令になったと書いてありますね「退職の辞令を示す」。「本日ヲ以テ発令」だから、十八日ということですね。そして二十一日にくらかやるので退職金を取りに来いということだったんですね。

それで辞めさせていただいて、帰ってきた。それは十六年ですから、家で商売を始めたんです。そうすると、府中の推進員になれというのが来た。「大政翼賛会総裁ノ名ニ於テ推進員ヲ委嘱ス（昭和十六年十一月七日）」という辞令を示す。これは私が帰ってきて店をやっていたけれど、そのころ統制が始まるころで、忙しかったんですが、その一番のものは、そのときの府中町役場の総務課長に矢部隆治さんという人がいた。のちの二代の市長になられる人です。これはよく知っている人で、私より先輩なんです。矢部さんは明治「生まれ」ですかね。明治のおしまいのころです。私を知っているものですから、使うんです。これから始まって、大政翼賛会のことなんだからと。それで、いまの翼賛壮年団の話が出たときに、これを頼むといつて来たわけです。

武田 この推進員というのはどうやって選ばれるんですか。

大室 大政翼賛会総裁名において、というんですから、地域に一人か二人しかいないんです。府中の場合、たしか一人でしたね。武田 大室先生は中央の動きもよくわかるし。

大室 そういうことだろうと思います。こっちはそのころはそうは思っていないけれどね。それでこういう関東大会の何かに出てくれば、青年団みたいなものとか、これは鍊成か何かにやらされるんです「それぞれ書類を示す」。

武田 鍊成というのはこれ「両手で拝む身振り」修行のほうですね。

大室 これ「鍊成の修得証を示す」は、「昭和十七年」一月二十二日、大寒の日だ、館山の海でやったんです。これはうちのほうから二人行きました。青年団長をしていた田中敏夫君と二人でいった。だけど、これはよかったですよ。あとで南方に行つて、ずい

ぶん助かりました。食べ物を食べないでやれる方法を覚えたから（笑い）。

清水 いまお話に出た矢部総務課長とは、どういう過程でお知り合いになられたんですか。

大室 地元の人ですから。私より先輩ですけど、矢部さんというのは馬場先生がよくご存知だけれど、市長もやりましたし、お父さんが小作のリーダーをやつて、国会議員に出たこともある。落ちたけれどね。

武田 矢部さんご自身が、ですか。

馬場 お父さんが、です。

大室 そういう人で、こっちの人ですからよく知っているわけです。それからその町ですと、町長さんの助役は名誉職であります。が、実際の仕事はこの総務課長がやっていた。ほかに課長はなかった。のちにいろいろ課長ができますけれど、本場の事務局をやっていた。のちに市長になりました。でも、東京の市長会の会長になったりしています。

武田 先ほど大政翼賛会を辞められるときに、ちょっと考え方が違ふとおっしゃっていましたが、具体的にはどういうことでしょうか。

大室 ということは、後藤さんの話をいろいろ聴いているけれど、感服している人はあまりいなかったわけですよ。あれが裏のボスでやっているんだということはみんな心得ていたわけです。けど不思議なことに、いまになつて考えてみると、精動運動のときに圧力はどこからもありませんね。ただ幹部の人はいろいろ批判を受けたりしているけれど、こういう小さな力で、こんな大きな仕事をやっている「両手指で小さな輪をつくり、大きく広げる」。それを見ている場合には、もつとこういう規模で「さらに大きく両手を広げる」見ていて期待する。だからだんだん大きくなってきた。一番脂が乗ってきた精動本部になったときは本当によくや

ったと思う。それが短期間で大政翼賛会になった。大政翼賛会になったのは、例の昭和研究会なんかだと思うけれど、最初の精動をつくったときも近衛さんでしょう。近衛さんの精動をつくったときのあとの話を聞いてみると、これ『昭和研究会』なんかにもちつとも出て来ないでしょう。

武田 全然出て来ないですね。不思議なんです。

大室 だから考え方が違うんです。これ「精動」は具体的に、われわれの言葉で言えば、国民と一緒にやってやった。向こう側とこっち側ではないようなやり方がよかつたと思うんですね。それで時局認識がだんだん深まってきた。先生方のご質問にもありますが、戦争が始まったときどうなったというけれど、私はあのときも、国民はもうやむを得なかつたというのが大半だと思うんです。だんだん浸透してきたわけです。物資がなくなったり何かするのと同時に、結局石油の問題ですね。それからA B C Dの包囲網がだんだん厳しくなっているの、何かしなければしょうがないということだから、あの「日米開戦の」ときにみんなホツとしたんじゃないか。そのときの気持ちは、負けてもしようがない、やるよりしょうがない、ということでしょう。それがまずいことは、勝ち過ぎたことだ。私はそう思うんです。失敗のもとだね。

武田 推進員になられて大政翼賛会のお仕事を手伝われて、やっぱりちよつと違うな、というような感じがありましたか。

大室 それは現場だけですからね。府中のそういう雰囲気をつくったり、アンケートみたいなのがあつて文書を作らせられたんです。文書主任とかなつて、状況を報告したものがあつたと思います。

武田 推進員のお仕事は、そういう文書を作ることですか。

大室 世論調査みたいなことをやって、報告するわけです。

武田 支部長に。

大室 ええ。ああ、それだから一人だつたんだ。

武田 このへんを回られて、調査されるんですか。

大室 府中の管轄だけです。何をやつたとか。こういうものはどうだということもあるし、一般的に何をやつたのかということはどうどん上げていったんです。ろくなことを書いていないんだけれど、こんなことをやつたのかな、と思つた「推進員記録」のファイルを示す。当時の大室氏手書きの「報告書」がファイルされている。

武田 先生は本当によく整理されていますね。

清水 「推進員の「報告書」を見て」地方の状況を報告するとか、そういうことがあるんですね。

武田 「同じく「報告書」を見て」府中でどういうふうな翼賛会の活動があるのかとか、どう感じているのかということ報告されているんですね。月に一回ぐらいですか。こういうふうにお仕事をされたんですね。推進員はもう一人いらつしやるんでしょうかね。

清水 高沢義人さん、府中国民学校訓導と書いてありますね。

大室 そう、それは有名な若い小学校の先生でした。

武田 この方も推進員なんですかね。

大室 推進員になっていますか。それは学校の先生で、公務員です。

馬場 小学校の先生ですか。

大室 そうです。小学校は一つでした。府中の尋常高等小学校で、高沢という人はこの近くにいた若い人で、なかなかやり手でした。

## ■ 府中翼賛壮年団

武田 先生はそういう推進員のお仕事をされているあいだに、府中の翼賛壮年団の仕事に関わられるんですか。

大室 昭和十六年の末ぐらいから、大政翼賛会の中に翼賛壮年団をつくりたいという記録が出るでしょう。ところが、きちんと決

まるのには三月頃までかかるわけです。翼賛壮年団をつくりたいという話があって、全国の組織部が何かに諮るんですね。十六年九月頃にやっているんです。ところがなかなか決まらないんです。最終的に決まるのが、十七年の三月頃じゃないですか。

武田 そうですね、十七年になってからです。

大室 そうでしょう。それで各県が承認して、やるということになった。私どもも、その機運があつて、正月になってからだと思うんです、矢部さんが、何か翼賛壮年団を府中でも考えてもらいたいと言われた。

武田 それが十七年ですか。

大室 十七年一月、たしかお正月のころだった。それで一番最初に、発起人になるような、幹部になる人を七人か八人選んだんです。そして団長とか副団長をどうするかということで、それに相時間がかったと思うんです。

武田 それは矢部さんと二人で相談したんですか。

大室 二人じゃなくて、矢部さんも一員にしちゃったわけです。私が一番年下なんですけれど、ありがたいことにみんな言うことを聞いてくれるんですよ。在郷軍人会の分会長をやっている酒詰明光さん、これは妙光院の住職なんです。兵隊さんで行ってきて、伍長だか軍曹だか、乙幹「下士官候補生」だったんだ。それで帰ってきておられて、在郷軍人会の分会長。これは学者です。真言宗の豊山（ぶざん）派の僧ですね。

それから「馬場氏に向かつて」宮崎平太郎さんをご存知ですか。これは東京都の何かをやっていた人です。なにしろ七人ばかり選んで、相談しながらやっただけです。最後に団長に野口栄治さん。それから副団長に小林茂一郎という第一回の市長になった人です。副団長はよかつたんだけれど、団長がなかなか承認しなくて、三顧の礼を真似ていったことを覚えています。昔の「國府鶴」という酒屋の家なんです。そのころ、警防団ができるでしょう。

武田 警防団も府中でできますね。

大室 この方「野口さん」は警防団の団長にも推されているというんです。お母さんが出て来て、「どうしてうちの栄治ばかりそういうことをやらせるんだ」といって、えらい反対をして、「そんなにやらせないでください」なんて、ずいぶん叱られたけれど、雪が降っていたから冬だったと思うんですが、夜、三回ぐらい行って、三顧の礼を真似をして、やつと引き受けていただいた。

だいたいそういうものをつくったときに、都のほうからも細かい指示が始めて、私が規約だとか、事務局組織だとかをつくりました。その事務局組織については、結成要項、団則をつくりました。それから役員をつくって準備して、実際の発足は三月になってからです。

清水 昭和十七年の三月ですね。

大室 十七年の三月です。東京都ではなくて、本部も、実際にできたのは三月でしょう。

武田 府中に翼賛ができたのはー。

大室 いろいろな年鑑みたいなものを見ても、みんな違っていますね。正式には三月十九日です。ダブるかもしれませんが、翼賛壮年団本部は、十六年九月二十六日に結成と書いてあるんです。だけど実際にはまだ動き出していないんですね。十六年十月二十二日から、一ヶ月後ぐらいに安藤紀三郎陸軍中将が「大政翼賛会」副総裁兼翼賛の団長になるんです。ですから実際にはまだ動いていないですね。そして翌十七年一月十五日に、各省連絡会議というのがあるんですね。ここで正式に翼賛壮年団をつくらうということを決めたわけです。そして明くる日の一月十六日が一応結成式ということになっているんですが、実際の結成式は三月ではなかったかと思えます。

さっきいった翼賛壮年団結成に関する道府県支部の組織部長会議というのがありますが、これは十六年九月二十六日にやって

いるんですね。そこから始まるんです。

武田 先生は、昭和十六年の秋頃からずっと相談を受けているんですか。

大室 いや、まだ受けていません。例の多摩村の壮年団が十五年にできていますね。これは翼賛壮年団ではないんです。昔ありました壮年団で、この団長の村野三郎さんというのは、私と同じように酒屋さんでもあるんですが、これは詩人でもあって、西条八十さんなんかと親交があった人なんですが、私もずいぶん一緒にいろいろなことをやりました。この方が村会議員をやっているときに、壮年団をつくらうということで、四十名ぐらいつくったんですが、翼賛会とは関係ありません。のちに翼賛壮年団ができたときに、それを翼賛壮年団という格好にするんです。

ところが、先生方はごらんになっていると思いますが、「府中市史」では。府中が一番やっていて、ほかは大したことがないんです。多摩村は少しやっているんです。いま言ったように早くからいろいろな仕事をやっていましたからね。というのは、府中の場合には、矢部さんが終戦のときにまだ総務課長だったか、そういうものを全部燃やしてしまったんです。だから翼賛関係の資料の主なものはほとんどありません。「市史」を見ても何も書いてないでしょう。残っているものは私がみんな持っていますけどね。

それで驚くことには、翼賛壮年団が三月にできますね。それから一年間、公文書じゃないけれど、通知を出すと「府翼何号」と書きますね。一年間で百号も出ているんです。三日に一回ぐらい出しているんだ。それは一部、ここに書いているものがございます。これは通知なんかですけれどね「翼壯の通知を示す。【資料7】」。ずいぶんやっていたな、と思つて驚いた。これは、いろいろなことを具体的にやりました。これはもしお入り用でしたら、ここに事業概要があります。「府中町翼賛壮年団昭和十七年度事業概要」のコピーを示す。このほうが、やった仕事が大雑把に

わかります。十七年のものです。

武田 これは先生が書かれたんですか。

大室 それは役場の職員、元読売の通信部の記者の中村「豊作」というのがやったんです。

武田 これは当時書かれたものですか、それとも終戦後にまとめられたものですか。

大室 その当時です。その当時の原稿になるのは、こちらが本物です。それを見ればだいたい十七年にやったことがわかります。この通知を見ましても、百号まで出ているんだから、いろいろなことをやっていたんですね。

武田 ちょっと前に戻りたいんですが、大政翼賛会ができてすぐに、その壮年団のようなものをつくらうという動きが起きているようなんですが、府中では、先生のお話だと十七年になってからですね。それ以前にはまったく動きがないんでしょうか。

大室 それは大政翼賛会でいろいろやったでしょう。それがまとまったのは、翼壯ができてからなんです。というのは、青年団はほとんど兵隊に行っちゃって、あまり力がない。それから非常に力のあった在郷軍人会もだんだん召集を受けて、いなくなる。そうすると年齢を延ばさなければならぬ。残っている人は、有力者も入ってもらわなければいけません。四百名ぐらい入っているんですね。

武田 それまでは、府中にはまったく壮年団はないんですね。

大室 府中にはないんです。青年団が非常に力があった。これと在郷軍人会が非常に組織が大きかった。ところが青年団は、戦争になってから幹部がすぐにとられてしまうから。

武田 青年団というのは何歳までですか。

大室 昔は二十五歳ぐらいまでだったんですね。

武田 壮年団は二十六歳から。

大室 壮年団は四十歳ぐらいまで、ということでしたね。

武田 いま在郷軍人会のお話がありましたが、人間はダブらない

ですか。

**大室** ダブっていますね。ご質問にもありましたが、壮年団をつくるときに、軍人のほうは、おれたちが先輩かどうか、いろいろやっているんだ、という感じでした。府中の分会長はそのころの堀江甚平さんという人がいたんですが、これは下士官でおとなしい方なんです。ところが、分会なんかには実力者がいるでしょう。いろいろなことをいままでやってきた方ですが、そういう人はたいてい一等兵か上等兵ぐらいなんです。それで、どんどん始まって、役員や何かをつくって、これから本団を結成しようというときの打ち合わせを、有志が何回もやっている。町長も入って、役場の二階でやるんです。

話が少し飛びますが、三月になって私は選挙の応援に行くわけですね。

**武田** 翼賛選挙のほうですね。

**大室** 翼賛政治体制協議会に行きますね。それは三月から手伝いに行っているんですが、「府中の翼壮の」結成式の前だから「打ち合わせ」何回かやっていますが、私が「選挙の仕事から」十時頃帰ってくると、「翼壮結成の有志が」待っているんです。「どうしたんだ」というと、「いま会議をやっているけれど、途中で進まなくなったので、ぜひ来て話しをしてくれ」という。近いので急いで行きますと、在郷軍人会のえらい人がこんな「むくれた」顔をして、軍人分会を侮辱していると言っているじゃないけれど、蔑ろにしているんじゃないか、というお話なんです。それで、「いや、これはこういうことでこういうふうに行っているうちにどうこう」という話をする、だいたい三十分経たないうちにOKになるんです。それを二回やりました。

ところが、そのうち私が「選挙の仕事で」泊まり込みで帰ってこなくなつた。だからいま、これがどうしても思い出せないのは、府中の翼賛壮年団の結成式が三月二十六日でしたか、そのときに

私は向こうで泊まり込みでやっていたんですが、帰ってきたのかな。ちよつとその記憶がね。すっかりお膳立てができて、やったわけです。そのお膳立てでいまの会議をやっていたわけですから。

**武田** 三月十九日にできて、二十六日に結成式ですね。

**大室** 選挙が四月幾日に始まるので、そのころは忙しくなってきたときでしたから。でも帰ってきたかな、と思う。ただ結成式はお宮の前でやったと思うんです。

**馬場** 府中にはこれしか書いてないです「市史を示す」。

**大室** みんなこうやっちゃった「燃やしちやった」んです。

**馬場** 「大國魂神社で発会式」と書いてありますね。

**大室** 文書を焼いちゃったものだからパージが少なかったんです。翼賛壮年団長だけが「パージ」になって、あとはなかった。

**武田** 府中の翼壮ができるときに、幹部の方は七人と書いてますが。

**大室** 七人ではありません。その後つくりましたから。

**武田** 幹部の方はどういうふうに決めるんですか。

**大室** いろいろ組織が細かくできています。班長というのがいまして、本部の役員はこれかな「府中翼賛壮年団役員名簿」(和文タイプ)を示す【資料8】。これは団長から始まって、各部落ごとに班長がいるんですね。

**武田** これは馬場さんに見ていただいた方がいいかもしれません。

**大室** これは必要ならお貸しします。われわれもわけがわからないのがありますが、予算もありますし。

**馬場** あつたんですね、府中の資料が！

**大室** いや、これは三多摩で内容的には一番ですよ。組織が違いますもの。

**武田** 組織の話を伺いたんですが、これ「役員名簿」を指すのが幹部の方ですか。

**大室** 部長だけでもこれだけいるんですから「府中町翼賛壮年団



各部長並班長名簿」(手書き)を示す」【資料8】。

武田 最初からこの方全員に部長になっていただこうということですか。

大室 組織があるんです。その組織の担当がいろいろやっているんだけど、部長もあれば。何か知らないけれど、難しいやつはみんな私に押しつけられちゃって、いくつも兼任していますけれどね。部落ごとに町内会があるんですが、その班長、副班長というのがあるんです。「府中町翼賛壮年団各町内正副班長」という名簿(手書き)を示す」【資料8】。

武田 最初にできたときに、ある程度部長が決まっているんですか。

大室 そういう組織をつくって、事務局規定だとかをつくって、それに基づいて、宣伝班は宣伝班でやる。竹脇昌作はご存知ですか。そのころニュースのアナウンサーをやっていましたよ。

馬場 竹脇無我のお父さんです。

大室 そう。非常に上手で、ニュース映画のアナウンサーをやっていました。それが来て、紙芝居なんかずいぶんやりました。そのとき講師で来たことがある。いろいろなことをやっています。

武田 この部長さんは、どういうふうに決まるんですか。例えば小村さんにこの仕事をお願いしようとか。

大室 それは役員会で決めるんですね。

武田 だいたい、みなさん地元の有力者ですか。

大室 みんな私が決めたんだ、本当は。そんなこと言えないけれど。

武田 いや、もう言うってください。言っていたかかないとわからないので。

大室 適材適所でやって、班長さんは地元でやる。要するに使える人を使ったわけです。

清水 班長さんは、そのあたりで戸長をされていたとか、そうい

う方ではないんですか。

大室 だいたい隣組というか、町内でしょう。町内に役員があるでしょう。それに入っている人と入っていない人があるけれど、だいたい入っていますからね。このころになると、みんなよくやってくれるんです。意識が違いますから。

武田 部長さんは、だいたいどういう肩書きの方ですか。

大室 役員になっているような、理事だとかになっていますね、そういう人が多いと思います。

清水 これはどういう方を選ばれたんでしょうか。

大室 町内全体を見て、有力な方とか、やれる人です。ここで言えば、総務部長の小林さんというのは副団長。それから実践挺身部なんて変な名前だけれど、「部長は」私がやっています。これが事業的な仕事をするわけですね。その下に、事業班とか宣伝班とか、増産班とか錬成班とかあって、錬成の郡司「秀」さんというのはお宮の神主さんなんだ。茨城のほうの宮司になりました。茨城から来ていた人です。それから体育部長というのは、さっき言った高沢さん、これは学校の先生です。それから錬成班長。

主としてやったのは、企画委員がいろいろ難しいことをやっていたわけです。あとはみんな具体的にやりましたね。文書活動主任なんていうのは、みんなつかまつて。

武田 「大室先生は」ここ「企画委員」にもいらっしゃるし、ここ「文書部活動主任」にもいらっしゃる。先生はご自分でやられたいとおっしゃったんじゃないですか(笑い)。

大室 いや、そうじゃないんですよ。みんなこっちにおんぶにだっつこでそれをやるんだ。だいたいこういうあれでも私が行って、指導したりしてね。私は威張っていないからみんながついてくるし、聞きに来る。ほとんどの人が全部私より年上です。年下の人はいないです。

武田 こういう名簿が決まるのが三月ということですね。

**大室** そうですね、結成式ときにはこれできていますわけです。  
**清水** 一月頃から人選をされて、三月には決まって、それで結成されるということですね。

**大室** ですから私が選挙「の仕事」をやっているときには、原案はだいたいできておった。こういうメンバーかどうかは知りませんが、組織はできていた。

**清水** これは総務についていらつしやる方と、企画委員になつている方がいらつしやいますか。

**大室** これは具体的な事業でしょう。総務というのは庶務をやったり経理をやったり。ところが企画委員というのは全体の団の企画をやつて、本当はこれが常務委員みたいなものなんです。

**武田** 実質的にいろいろなことを決めている方ですね。

**大室** そうですね。文書のほうは、いろいろなものを通知したり、書いたり、いろいろありますからね。たくさんの人を入れているのは、部落ごと、町内会ごとにやっているとことですね。だから特殊な人ばかりがやっているのではなくて、みんなで作るという感じです。幹部だけがやっているのではなくて、全部がやっている。各班の人が出て来てやらざるを得ない。

## ■ 壮年団の活動

**大室** 一番先にやったのは、金属の回収です、銅、鉄の。これはみんな大変なものを出しちゃつて、看板まで取っちゃつた。私が戦後何もしなかった理由はそこにもあるんです。帰ってきたら、樋か何かでも銅を使ったものがあるでしょう。それから火鉢だとかも、みんな出してくれちゃうんです。ここに置けないわけです。そういう運動になってくると。それでわれわれが行くんじゃなくて、その地域でやるでしょう。それで最後に、お祭りのときですか、私の店に幔幕を張つて、貴重なものだけそこに展示したこと

があるんですよ。火鉢だとか、銅のものなど昔のものをたくさん持つて来た。私のところも、釘隠（くぎかくし）という、亀と鶴の「装飾を施したものが」あるでしょう。これまで取っちゃつたら、おやじが、「ここまで取らなくても」と言つたけれど、「ひとに言っているんだから」といった。

もう一つは、供木運動というんです。これは私がやる少し前ぐらいでしたね。ケヤキの木とかカシの木という堅い木を船の材料にするんですね。もう鋼鉄の船はできないから、木の船を造る。ところがこれが何メートル以上とかあるでしょう。そうすると縄を持つていつて、こういうふうにやつちゃう。ところが帰つてきたらそれがゴロゴロしているわけだ。そうしたら、いくらか値が下がつたら駄目なんだそうですね。あれを見てから、本当に申し訳ないと思つた。

**武田** 先生は組織をつくるときには、どこかほかの都道府県でやっている壮年団の例を参考にしたり、ということはないですか。

**大室** そういうことはありません。北多摩なんかで何かをやつていても、上から言われた通り。私の考え方は、この府中なら府中にあつたものをやらなくてはいけないということですから、基本は同じです。規定だとか目的だとかはやっていますが、細かくこんなことまでやる必要はないんだけど、どうしてもそうなつちやつた。事務局規定なんか、こんな難しいものがあるんです「事務局規定」を示す。あとになってみると。

**武田** こういうものは上から来るわけですか。

**大室** いや、みんなこつちでつくつたんです。だいたいいろいろなものがありますからね。私はずいぶんそういうものを作つたりしたこともあるし、運動要項だとか、そういうものはお手の物だったわけです。だいたい同じことですよ。ただ、ここまでやっているところはあります。そう思いますよ。

私ども、北多摩の役員会に出て行つたことがあるけれど、全然

駄目なんです。三多摩にはそれはありませんよ、と言っても、向こうから言ってきたから、なんてなっちゃうんだね。

武田 昭和十七年に、中央で大日本翼賛壮年団連盟といいましたか、それができたところに矢部さんから先生にお話があったんですか。

大室 大政翼賛会の推進員から何から、ほとんど矢部さんですよ。矢部さんも役員の中に入っているでしょう。これ「府中町翼賛壮年団役員名簿」を指す」が一番の幹部なんです。これが総務です。

武田 これが、一番最初に手伝ってもらおうと決められた方ですか。これがいいたい一月ぐらいですか。

大室 これを一番先につくって、名誉団長が町長です。矢嶋「健吉」さんですね。それで野口さんが団長で、副団長が小林茂一郎さんです。それから私。秋元諒一というのは日本精鋼の課長が部長です。日本精鋼は広島からこつちに来て、戦車をつくつたりしていた。軽戦車ですが、軍需工場として大変なときですね。大砲をつくつたり。

武田 府中であつたんですか。

大室 府中にできたばかりだったんです。東芝もあとからできるんです。

清水 さつきの班長「名簿」の中に、東芝と日本精鋼が入っているじゃないですか。

大室 そうですか。東芝と日鋼と、大きいのは二つあるんですが、日鋼のほうが先にできたんですね。秋元さんというのはわれわれよりずっと先輩で、たしか部長か課長ぐらいの人でした。よくやつてくれました。仕事が、こつちの仕事の担当になった。地域と協力しろというんでしょうね。

清水 会社の中で翼賛担当ということになるんですか。

大室 そうみたいです。

清水 「名簿を」拝見していると、競馬場の班長という方もいらつ

しゃるんですけれど。部落ごとにあるのと。

大室 そういうものがあつたのかもしれませんがね。職域的なものです。『名簿を見て』ああ、芝浦班長、日本精鋼班長、ありますね。相当細かく組織ができていたんでしょう。

武田 こういう誰を入れる、どういう職域の人を入れるという指示は全くなくて、先生が考えられたんです。

大室 ほとんど地元と相談しながら、この人が適当だろう、ということですね。このときはどういふわけかみんな私がくついている。

武田 それは政府とか翼賛会とかの指令ではないわけですね。

大室 指令ではありません。そういう無理はありませんし、雰囲気によりますでしょう。

武田 逆に、壮年団はつくらなくてもよかったんですか。

大室 いや、そんなことはないでしょう。

武田 それはつくらなければいけないですね。

大室 それはやはり、こちらにいても何か協力したいじゃないですか。国に対しても。そのころ、いわゆる「非常時」という言葉を使ったでしょう。非常事態だから何か協力したいという気持ちがある。それでまたまた翼賛壮年団。この人たちは、明日また召集を受けるかも知らん、という人たちなんだ。だからそのうち半分ぐらいすぐにはなくなっちゃうんです。普通の人で、行かない人というのはいないんじゃないですか。会社の人は知らないけれど。昭和十八年になると、この「翼賛の」組織はなかなか難しくなっちゃうんですよ。

武田 それは何故ですか。

大室 だって人がいなくなっちゃうから。私なんかもないんですけどね。ずいぶんこの翼賛壮年団はよくやった。鍊成までやってね。東府中に東郷寺というのがあったんですよ。東郷「平八郎」さんの関係で。

**武田** 東郷さんは、こつちに別荘があつたんでしたか。

**馬場** 別荘ですね。

**大室** 別荘だったんですか。そのあとお寺になりました、そこをお借りして、そこで禊ぎをやったんです。一晚泊まりぐらいで、煙草を止めるなんていうのが大変だったね。

**武田** 壮年団の具体的な仕事は、鍊成所だけではないですね。具体的にはどういうことですか。

**大室** これは十七年度だけですが、一番影響力があつたのは、宣伝的に紙芝居をよく使ったことです。宣伝班が出て行って、そのころの紙芝居がありますね。このごろも何かでさかんに宣伝しているけれど、津波が来たらどうこう、なんて高知の話なんて、そのころのぶり返しですね。みんなわれわれが使っていたやつです。

**武田** 空襲があつたときにはこういうふうに対処するんだとか、そういう紙芝居ですか。

**大室** そうそう。わかりやすくいろいろやつたりね。

**武田** 見に来るのは子供が多いんですか。

**大室** いや、大人が多い（笑い）。それとか、常会に出て行ってやるんですよ。それから、いろいろな演説会をやったり、ポスターを貼ったり。このごろもそうだけれど、歩きながらの煙草をやめましょう、なんてやっていました。いま言っていますね。

**武田** 条例になつたんですかね。

**大室** そういうことをやつたり、廃品回収とか、いろいろやるでしょう。夏になると、力仕事でやるのは干し草刈りなんです。軍馬のために割り当てが来るんです。多摩川の堤防やなんかで草を夏に刈ってきて、草ばかり刈らないで、手を刈ったり足を刈ったりして、ずいぶんいろいろなことがあつたんですが、それを競馬場のコンクリートのところに持つていつて干すんです。それで縛って、そのころで十貫目ぐらいずつにしたものをずいぶんつくりました。これは非常に体力のいる仕事でした。ここに書いてあ

りますね。三二一九貫というのは、大変なものですよ。

それから「府中町翼賛壮年団昭和一七年度事業報告書」【資料9】の十月十七日の項に「増産事業ノ一端トシテ小松菜種子ヲ無償ニテ町民ニ配布セリ」なんてあるでしょう。これは増産にだんだん困ってきた。増産運動というけれど、農家や何かは当たり前で、ずいぶんいろいろ技術的なことを、担当がいいますから、やりましたけれど、これは一般の家庭を対象にした。それで種子屋さんに小松菜の種子といたら、じゃあ協力しましょうと言って、昔の一斗缶いっぱいくれた。日にちを決めて、われわれの前でただ配った。小松菜というのはすぐにできるんですね。われわれも初めてやつてみたけれど、案外簡単にできて、けっこう食料になるんです。小さな種子でしたけれどね。これもなかなか成果がありましたよ。

それからこのときにはまだ出ていないけれど、供木運動。それから銅・鉄の回収をしたり、一般的な行事で、のちには移動演劇を呼んでね。これは精動時代からやっていたんですけれどね。

**武田** 移動演劇というのは何をやるんですか。

**大室** そういう団体があるんですよ、三多摩に。そういうのが来て、映画館でやつてもらったりする。それは無料でやるわけです。

**武田** それは娯楽ですか。

**大室** そうです。それから自分たちが鍊成をやったり、ずいぶんいろいろなことをやりましたけれどね。これはまだ最初のころだから。

**武田** 当時は大政翼賛会もあるわけですね。大政翼賛会のお仕事と重複するようなことはないんですか。

**大室** そういうことはありません。大政翼賛会というのは、町長が会長で、そういうものがあるというだけで、やるのはたいいてい式典だけです。宮城遙拝、戦没者に対する黙祷ということはやりますけれどね。

ただ、ここ「翼壮」でできなかったことで、公会堂建設というのが委員の中から出たんです。そういうものがないでしょう。それはとうとうできなかったんです。これはやめようということになった。やっぱりそういう人がいるんですよ。いまになって考えてみたら、頑張ったのは建築屋なんだ。

武田 今も昔も同じですね。

大室 いまでも覚えているんだけど、小林さんって市長をやったでしょう。あの人が副団長で、それが「寄付をするなら身上を削るつもりでやらなければできませんよ」と言うわけだ。それは偉いな、と思ったんですよ。寄付を募ってやって、自分が小遣いを出すぐらいのつもりではできませんよ、というんだ。それでやめたんです。考えてみたら、そのときも一番最後まで頑張っていたのは建築屋とは言わないけれど、大工さんなんだ。

武田 いまの「府中町翼賛壮年団昭和十七年度事業報告書」の九月二十二日を見ると、府中町の常会に議案を提出しているんですね。「府中町常会ニ公会堂建設並ビ二省電常時運転実施促進運動建議案ヲ提出セリ」とありますね。

大室 省電というのは、南武鉄道なんです。あのころ南武鉄道というのは、乗り手が少なく、あまり来ないんです。戦後は最初から黒字でしたがね。だいたいあれは、氷川というから、青梅の奥多摩の石灰岩を横浜に持つていくために、会社が始めていますから、貨車はいぶん通るけれど、人間を乗せるほうはあまり通らないし、また乗っていないんだ。その代わり、そのころのボデイは、イギリス製の日本でも優秀な車体だったんです。みんな寝ながら乗っていた。それをもう少し回してください、ということだったと思いますね。

武田 これは翼賛壮年団として、常会に議案を出すんですか。

大室 本部で決めたことを、みなさんでやる場合もありますし、下から来るものをやることもあります。ですから翼賛壮年団でや

っていることは、壮年団員がやるんだけど、一般にも呼びかけてやるから。府中がこういう運動のものになるわけですね。

武田 翼賛壮年団の具体的な仕事の内容がよくわからないんですが、議案を提出したりもするんですね。

大室 こういうきちんとした組織でやっていると、全国でもあまりないと思いますよ。ただ仕事はみんなやっています。廃品回収だとか、金属回収だとか、供木だとか、増産だとか、いろいろやっていると思いますが、ここもある程度、町でしょう。農村地帯というわけではないですからね。そういう意味では、隣組組織がきちんとできていますから。常会をやるでしょう。隣組の常会なんか、必要があるとちよいちよいやっていたんじゃないですか。

武田 常会に出ている人と、壮年団の実質的な運動をしている人とほとんど同じような人なんですね。

大室 同じですけれど、壮年団は壮年団で常会を開くわけだ。その意向を、隣組のところに行つて召集したり、話をしたりする。ですから、やることに足を持つているわけです。壮年団だけでやるべき仕事と。そういう意味で、紙芝居なんかを持つていくのはそれなんです。一般の人のところへ。

清水 先生が中央聯盟のときにやられていた実践網と翼賛壮年団というのは、決して同じものではないんですね。

大室 いや、同じですよ。そのときつくった実践網が生きているわけです。実践網という言葉で言うからおかしんですが、要するに精勤は隣組組織をつくったわけでしょう。それをみんな利用しているわけですね。

武田 壮年団が開く常会も、町内会みたいなものですね。

大室 みんな常会で、それをほとんど使うわけです。だからわれわれ壮年団員だけでやる常会もありますよ。それはこちらでやるけれど、隣組は隣組常会に出て来て、こっちから応援に行つて、

出て行って話をして、紙芝居をやったりする。だいたいそういう場合には、班がありますと細かくできるけれど、町内会の常会というのもあるわけです。大勢になりますけれど、そういうところにも行ってやります。だいたい同じ人でしょう。幹部級の人は同じですからね。ですからダブるというのではなくて、あたりまえにできるわけですね。

武田 先ほどもお話がありましたけれど、在郷軍人会の方は、先生が出て行って、こういうことだと説明すると、わかりましたと言って、もう対立することはないわけですか。

大室 それは二回ばかりやりましたけれど、向こうはプライドがある。何故かという、われわれはまだ兵隊に行かないから補充兵でしょう。しょっちゅうしごかれたわけですよ。訓練があるわけです。向こうは現職で行って来たといつて威張っているわけだ。一等兵か何かでも。われわれは補充兵だから「肩章の」星がないでしょう。だからそういうプライドもあったんでしょうね。そういうこと「対立すること」はありませんでした。私どもは幅が広いから、こちらだけということはありませんでしたから。

武田 在郷軍人会の方も壮年団に入られるんですか。

大室 入っています。ただ、いま言ったように、そういう人たちはこつちが認めないからあまり役員になっていないんだ（笑い）。もちろん、なっているのがありますよ。みんな在郷軍人ですからね。蕪木清次だつてそうだし、酒詰さんがそうだ。ただ、いま気がついたらけれど、文句を言っているような人は役員になっていない（笑い）。年はずつと上の人ですけれどね。だけどこれは考えてみると、みんな私より年配なんです。結構やっていた人がよく言うことを聞いたと思う。

武田 それは何故なんでしょうね。やはり先生はかなり信頼されていたんでしょうね。

大室 やっぱり、話「の筋」がちゃんと通っていたんじゃないで

すか。言っていることに納得しなければやらないでしょう。私はどちらかというと、先輩の人にはわりあいと可愛がつていただいているほうなんですね。あまり変なことを言つてはいけなけれど、帰ってきたときも、三十近くなつて戦後初めての町長選挙のときにも、おまえどうだ、と言われたことがあるんだ。けどそのときは帰つてきて、貯金帳から千円だけでもらつてきて、同窓会をやつたら、三百円取られたのでびっくりした。全然わからないときですから。

武田 先生は当時からいろいろ人望が厚かつたんでしょうね。

大室 考えてみたら全部上だもの。私ぐらいの人も何人かいますけれど、われわれ級じゃなかなか役員になれなかった。

## ■戦時下の多摩

武田 全体的な組織のことも伺いたいと思つていたんですが、府中に翼賛壮年団ができますね。そして多摩村にもできますね。ほかにもできるんですか。

大室 西府村にもできたけれど、西府村というのは、そのころ役場の職員が十人ぐらいいたんですかね。西府はほとんど何もしていません。ですから、書類が全部そのまま残っている。

清水 逆に、残しても大丈夫だったということですね。

大室 そんなことまで考えが行かないんでしょう。それは全然行かなくて、ただ来たものが綴じてある。だから一番残っているわけです。

武田 西府とは横のつながりはあるんですか。

大室 ないけれど、みんな府中を見ながらやっていますからね。

武田 三多摩のほかの地区にもありますね。そういうところとは横の交流は――。

大室 全部あるんです。北多摩だけは郡の常会なんかありません

て、翼賛の代表者が集まったことはありましたが、そう言ったら悪いけれど、レベルが違いましたね。

**武田** 北多摩地区で常会が何回かあって、それに壮年団も出るわけですか。

**大室** 最初のころね。結成の時も武蔵野の団長とか、そのころ青年団が力があつて、その団長をやっていた人とか、実力者がたくさんいるわけです。そういう連中がいろいろいますけれど、私もいつぱい行ってみた。地域ごとと言ったけれど、そういうのは集まらないですね。上から言ってきたその通り、なんてね。私もはひとことはあまりお節介しちやいけないから、自分のほうだけ一所懸命やる。

**武田** 北多摩の上の、三多摩の地区のようなものはー。

**大室** それは東京府の管轄ですから、何かありますけれど、それは行事的なものだけですね。

**武田** 先生からいただいた資料リストがありますね。

**大室** 「東京府翼賛資料「リスト」」を示す

**武田** すごくですね。全部資料が残っている！

**清水** これは都の公文書館にもないんじゃないですか。

**大室** これは東京翼賛壮年団なんかという、こういうのが来ますね。

**武田** これはたぶん東京都でも残っていないんじゃないかと思えますよ。

**大室** みんなこういうものを焼いてしまわないと、責任を問われるとー。「東京府翼賛会」のファイルを開きながら、資料を示して「こういうこともやっているんですよ。」

**清水** 補助貨引き換えですね。アルミ貨ですか。

**大室** これは昔のびた銭というんですか、出て来たね。これは銅を取るのやったんでしょうね。

**武田** これは東京府の指示でやったんですか。

**大室** 大政翼賛会の戦時物資活用協会なんていうのがあって、翼賛会から来たのが、東京府からこちに回ってきたんですね。

**武田** そういう、上から来た仕事も当然やるわけですね。

**大室** ええ。それで、これは私的なものですが「東京府翼賛会」のファイルの資料を示しながら、大政翼賛会の東京府に、鈴木「義志」という新聞社の記者がいた。デスクぐらいやつたでしょう。若いけれど、なかなか一所懸命やった人だ。これ「ビオノール」のチラシを示すは二十三年、戦後困ったものだから、事業をやってみんなを救おうというか、共同事業みたいなことをやるといつて、やったことがある。もちろん失敗していますけれどね。

**清水** どんなことをされたんでしょうか。

**大室** こういう「ビオノール」という「養鶏のエサとかね。『同ファイルの別の資料を指して』ここに大木達夫がいるわ。『昭和研究会』の本をみると、ずいぶん出て来ますよ。これが選挙のときの連絡員にいますよ。

**武田** 東京府からの指示は、直接、団長に来るんですか。

**大室** 翼賛壮年団ができてからは団長に来ます。それをいま申しあげました、元読売新聞の通信員で年配の人がいたんです、中村という人ですね。これが手が足りなくて役場に入つて、これ「書記」担当でやつていた。字はへたくそでしたが、どういうわけだか、よくやつてくれた。しょっちゅう来て、私の意向を聞いてやつてくれました。

**武田** 先生からいただいたリストを見ると、東京府翼賛壮年団結成準備会連絡委員というのがありますね。

**大室** それは三多摩でやった。結局いつぱい集めて話をするという程度なんですね。

**武田** これはさっきの三多摩のものでしょうかね。東京府なんですね。

**大室** 一号、二号と二つあるんですね。

**武田** これはそれぞれの地区で、翼賛壮年団ができてからのことですか。

**大室** このころはできているところが多いと思うんです、八月ですから。

**武田** その関係者なんですね。

**大室** これはどうしてもそうなんですが、非常に進んでいるところ、あとからほかがやっているからやらなければいけないというところがある。それはやむを得ないと思うんです。府中は独自のことをやって、やり過ぎるぐらいやったところがあるんですね。いまになってみると、廃品回収ならいいけれど、供木もやったから。そのころは必要だから、というので、下のほうは行き過ぎちゃうんです。縄を持って行くんです。

**武田** なんでも持つて来ちゃうんですね（笑い）。

**大室** そういうところがずっとあったんですね。私のところなんか伐つても構わないけれど、帰ってきたら何本もゴロゴロしているんです。どうして持つて行かないんだと聞いたたら、最初は無理だったんだね。一年ぐらい経ったら、寝かせておかないと、枯れさせてからやるんでしょう。

**武田** だいたい大室先生は壮年団の組織をつくったりされて、いつごろまで関わられたんですか。

**大室** 昭和十八年の五月ぐらいまでおりました。それで最後に私がやったのが、お祭りのとき、そのときは壁新聞といっておりましたが、つくったものがあるんです。ちょうどお宮の前の塀に大きなものをつくりまして、「祭りだ、祭りだ、わっしょい、わっしょい。怪我をしないように」。五月十二日に南方の辞令をもらいましたが、まだもう前だったんです。それが最後だったんです。

**武田** それは翼政とか東京市の選挙のお手伝いをしながら、翼壮のお仕事をするということですか。

**大室** 地元の翼賛壮年団だけでしたからね。しかしそのころどん

どん召集か徴用かどちらかでしょう。私も二月頃から行くことに決まっていたけれど、なかなか辞令が出なかったんです。これも死に損なった話ですけれどね。これ「大室政右著『秘境ボルネオ戦記―生き残り海軍民政要員の手記』（総和社・一九九六年）」に関連しますが、二冊しかないけれど、差し上げます。

**武田** 清水 ありがとうございます。これはなかなか手に入らなかったんです。

**大室** これはこういうあれ「タイトル」じゃなくて、『死に損なった話』とすれば面白いんです。いろいろあるんです。最初に潜水艦にやられて、コレラでやられて、それから飛行機が火を噴いたり、釣りに行って船がひっくり返ったり、雷でやられたとか、しまいにはボルネオで動物にやられる。それは戦闘員じゃなくてね。爆撃なんかではしょっちゅうみんなやられていますから。そういう書き方をすればいいのに、本屋は『秘境ボルネオ』なんてー。ボルネオは半分だから。

## ■第二次世界大戦の開戦

**武田** それはまたこの回の際にぜひお願いします。その間に開戦がございますね。それはどこでお聞きになりましたか。十二月八日の日米開戦ですね。

**大室** 十二月八日のときは、家にいました。これは不思議なんです。なんとなく胸騒ぎがして、早く起きたんです。うちなんか店ですから、硝子戸の大きいものがあって、「硝子戸の」あいだに「新聞が差されて」入ってくる。朝、五時ぐらいに取りにいったんです。そしてみたら、そのころは東京日日新聞でしたね、毎日ではなくて。それから朝日と、読売と日経、昔は中外商業「新報」の三つか四つ取っているんです。それで、東京日日新聞で、隠忍なんとかという最初のトップを見たら、戦争が始まっているんで



す。それでびっくりしたわけです。そしてほかの新聞を見たら、何も書いてないんです。

**清水** やっぱり日日は早かったんですね。

**大室** それで、これはおかしいなというので、すぐラジオをかけたんです。そうしたら例の大本営発表です。

ただ、私はその前提があるんです。十二月一日だったと思うんですね、競馬場の二号館というところをお借りして、三多摩だったか北多摩だったか、東京府の翼賛会があつて、われわれ、翼賛じゃなくて推進員だと思っただけで、集めて話があつたことがあるんです。そのときを見たら、すぐに戦争が始まるような印象を受けたわけです。たしか一日か二日だった。それでびっくりして、みんなこんなのにのんびりしてはいられないんだ、と思った。その前提があつたから、いつかということとはわからないけれど、これはやるんじゃないかと思った。特に私は、なぜかということ、八月頃陸軍の情報として、アメリカとやるぞ、ということを知っていたわけです。どうもそうらしいということで、仏印なんかの情報に注目していましたけれどね。いまの十二月に来たときにはびっくりした。それで何人かの人が、「おかしいな、これは本当に始まるのかな」と言っていた。それがおかしい話で、十二月八日になって何か胸騒ぎがして早く起きて、新聞を見たんです。そしてラジオをかけたなら、「軍艦マーチ」が始まったんだ。

そういうことだったけれど、そのころ地元の人声は、ABC Dで囲まれておつて、もうやむを得ないな、という空気があつた。ただ勝つとは思っていない。勝つか負けるかはやってみなければわからないけれど、大変だということ、みんなすごく緊張したと思う。これは国民の大多数だと思う。あとになってみると、なんだかんだといろいろつけていますが、そのころはそのほうが多かった、そういう空気でしたよ。ところがまずいことに、勝ち過ぎちゃった。

**武田** 最初はずいぶん勝ちましたからね。

**大室** その後の話で恐縮なんです、二月十一日ごろにシンガポールが落ちたでしょう。あのときに、講和条約をしたらどうだというのが出たでしょう。小松さんに聞いたのかな。近衛が行つてやればなんとか、という話だったんですね。そのときにどうするんだといったら、南方をだいたい取り始めたころでしょう、スマトラを一つもらえばいいじゃないかという話が、本当にあつたかどうか知らないけれど、そういう話を聞きましたよ。ところがそれをやつたら殺されちゃうというんだ、陸軍に。

**武田** 似たような話が、その酒井三郎さんの本にも書いてありますね。だいたい同じような話ですね。

**大室** 私は小松さんから聞いたんですよ。

**武田** 小松さんは当時情報局ですか。

**大室** そのころ、情報局の課長をやっていたんですよ。その小松さんですが、海軍の民政府というのがあるでしょう。陸軍は軍政部だけれど。海軍の民政部の本部がセレベス島のマカッサルにあった。そこに情報課をつくる。それで小松さんがスカウトされた。そのとき小松さんは中部日本の編集長にと言われていたんですよ。古野「伊之助」さんと久富達夫（情報局次長）というのがいますね。ところが「小松さんは」海軍と話をして、海軍でぜひと言うから引き受けたので「編集長には」行かないよ、という。そのころ編集長というのは月給三千円くれるというんだ。内閣総理大臣よりずっと多い。どうしてそんなに高いかというと、いかにいろいろ使うか、ということなんです。

**武田** 機密費込みですか。

**大室** だから奥さんに聞いたら、そのときそういうふうにもらつたら、癖がついてあとが困るというんだ。せいぜい多くても五百円ぐらいですからね。総理大臣だつて八百円ぐらいじゃないですか。それを断わったというんですね。片方「海軍民政部」に行く

と、課長で戦時の手当てで六百円ぐらいかな。それで行くことにな  
っていて、私も一緒に連れて行ってもらうことになっていました  
す。それは十二月頃から決まっていたんです。

これは次の話になってしまふけれど、おやじに相談したら、  
「嫁をもらわなければ行っちゃいけない」というんです。それで  
困って、十二月頃、用意していたのがあって、急に見合いか何か  
して、急遽二月に結婚式を挙げたんです。そのお仲人さんが小松  
さんになっていました。そうしたら小松さんは飛行機で向こう  
に先に行っちゃったんだ。それで奥さんに出て来てもらって、や  
ったんです。そのころお宮で結婚式をやった。粗末なものですよ、  
鯛なんかないときだから。

それで、小松さんは行っちゃったけれど、私の辞令が出ないん  
ですよ。大丈夫だと言っていたけれど。それで四月だか五月にな  
ってからだか、海軍省の担当のところにいったんです。そうした  
ら「今度必ず出すから、もうちょっと待ってくれ」という。結婚  
したばかりだから、遅らせてくれたんです。みんなうちのスタッ  
フは鎌倉丸で行ったんです。それがやられちゃった「撃沈された」。  
四月十五日か何かに、二十何人か乗っていた情報課のスタッフは  
みんなやられちゃったんだ。一人だけ助かりましたけれどね。そ  
れで私がねじ込んだけれど、それがあつたから少し置いておいて  
やれ、ということだったんでしょね。ひと月ぐらい遅れた。そ  
ういう経緯がありました。

**武田** ちよつと話が戻りますが、戦争が始まったときには、翼賛  
壮年団では式典のようなことをやったんですか。

**大室** 何かお宮で必勝祈願か何かやったような気がしますね。そ  
れは要するに式です。何かあると、宮城遙拝、戦没者への黙祷を  
やりましたから。それは日常的なことでした。ただ格好良く言  
うんじゃなくて、これ「開戦」はもうやむを得ないという感じが  
強かったと思うんですよ、全体的に。

**武田** いろいろな方の日記を読んでみても、だいたいみなさんそ  
ういう感じですね。しょうがないという。

**大室** 本場に言った人はそうだと思う。われわれが南方に行く  
ときもそうだったけれど、噂で、やられているのは知っているわけ  
です。ところがみんな向こうへ行つて、どうせ徴用に取りられるか  
兵隊に取りられるかだから、自分の好きなことをやった方がいいと  
いうので、そういう志願者が多いわけだ。

**武田** 戦争前後の府中の様子はどんな感じでしたか。必勝祈願を  
やるときにはみなさんが集まったんですか。

**大室** 非常に緊張していましたね。ちよつと桁が違う。二・二六  
のときがそうでした。声は出さないけれど、なんとなく緊張した  
空気があつた。その空気がどうだというのは難しいけれど、それ  
を感じましたね。ところが今度の戦争の場合は、周りがみんな  
行っているでしょう。家族で兵隊に一人も行っていないところ  
はないもの。だから考え方が違うんですよ。いまお考えになるの  
はね。どこの家でも、いないところがない。戦死者を出すか、戦  
病者を出すか。私のところでも、二人ばかり家系から出ています  
からね。ですからみんなそういう覚悟だったんじゃないですか。  
ただ、どこにいるかわからない。南方にいるんだか、満州に  
いるんだか、みんな移動したでしょう。

**武田** このあいだ馬場さんからお借りした本で『府中町青年団の  
あゆみ』『府中市教育委員会編 府中市一九九三』に、先生のお  
兄様が亡くなられたときのことが出ていますね。

**大室** これは、この前申しあげましたが、私の書いた本『渦巻く  
時流の中で』の中にあるでしょう。あれがそうなんですけれど  
ね。「兄は」召集で二十五歳で行ったんですが、歩兵一連隊とい  
うんでしょうか、麻布にありましたね。それで新兵がたくさんい  
る中で事故がありました。何かなくしたんだか、失敗したんだか、  
上の古いやつに「おまえやったのか」と言われて誰も名乗りをし

なかった。そうしたら、みんな並べてびんたを食ったり、蹴飛ばされたりやられちゃうわけです。あまり長くてどうしようもなくて、うちの兄貴が、「私がやりました」と名乗り出たんです。そのときには、幹部候補生になっていたわけです。「なんだ、おまえがか」ということで、半殺しになった。そのために、やったやつがあとになってだいぶー。ほかの人は知っているんですよ、やったやつを。そういう男気があったんですよ。青年団の支部長をやっている、なかなかね。

そのときにお宮の前で出征すると、幟を立てて町長さんが来て、激励の言葉を五、六人やりましたけれど、そのときの「兄の」挨拶が立派だったとずいぶん言われましたね。もう帰ってこないような話をしていたといつて。

**武田** 新聞にもそう書かれていましたね。

**大室** それぐらい大した人でしたね。それから四月か五月に入隊して、三ヶ月ぐらい中国に行くんですね。手紙や写真も送ってきまして、死ね覚悟だな、と思った。ところが十月一日ですから、向こうに行つてから二ヶ月ぐらいで、戦死しちゃうんですね。そのころ戦死者が少ないから、町の小学校で町葬ですよ。大変でした。

ところが、そのときの小隊長だか中隊長だか、班長さんという人、これは東芝に勤めていた人なんですが、「自分が班長で部下を殺して申し訳なかった」と言つて、終わつて帰つてきてから、毎年来られましたよ。偉い人でしたね。この人は召集解除になつてから、内地の川崎で、捕虜収容所の班長になったんですが、評判が良かった。捕虜「収容所の仕事」をやったのは、みんな捕まつてあとでやられているんですが、その方は川崎の東芝に行つていたんですね。

そのころは、十月一日頃よく嵐があつたんですよ。それでも夜、来られているんです。「今日はどうだ」なんて、おやじは待っていてね。毎年来る、申し訳ない、なんて言っていたけれど、たい

い夜来られるんですよ。来るものですから、そのころ酒は配給で、ないときだけれど、ビールか酒か何か用意しておくけれど、「私は飲めませんから」といつて手を着けないんです。それで必ずお線香を上げてくれる。

そして「その人が」亡くなつて、お葬式に行つて聞いたたら、「うちの主人は飲んべえで」なんて奥さんが言つていた。うちに来られたときは、一切やらなかった。立派な方でしたね。十年ぐらい来られました。

**武田** そろそろ時間です。それでは次回、少し思い出されたことがあつたり、こちらでも質問があつたら、また補充で質問させていただきますことにします。次回は翼賛選挙のお話をお願いします。

**大室** いま資料がある項目だけを書いたんですが、これが「翼賛政治体制協議会資料」です。これが「東京市翼賛市政確立協議会資料」です。

**武田** 次回また二時間ですが、翼政の話と、東京市のお話を聞きますと二時間ぐらいになりますかね。

**大室** そのくらいになりますね。細かくなると、そのくらいになると思いますね。

**武田** では次回、またちょっと戻りますが、昭和十七年のお話、選挙のお話をお聞きすることにしたいと思います。また質問事項等を考えてお送りします。

**大室** これはメモ的に書いたんですが、こういったようなことを書いております。大政翼賛会との違いというのがありましたね。大雑把に言うところなことです。「大政翼賛会と精動運動との異」という手書きの原稿を示す。そんなこととお話しようかと思つたんですが。趣旨はそういうことです。

**武田** ではこれはお借りしてもよろしいですか。

**大室** はい結構です。もし資料がお入り用でしたら、活用していただければありがたい話です。私が持っていますが、私がいなくな

ったらどうなりますかね。市に寄付しますかね。

馬場 ぜび。府中がらみのものに関してはずび。

大室 それを心配しているんです。

武田 私もいくらでも整理しますんで。でもだいたい整理されているから。

馬場 資料のリストもつくられていますし。

大室 精動のやつもみんな書いておけばよかったと思って。あれだけつくっておきましようか。ほかの人はほとんど持っていないでしょうからね。

武田 先生のインタビューが終わったぐらいに、一度先生の資料を見せていただくかと思っていたんです。まだまだ先ですが。

大室 何か集中してやると、あそこに参考書があるとわかるでしょう。明くる日になると、それがわからなくなる。もう駄目ですね。何かお役に立つものがあれば。

清水 これだけ丁寧に整理されて持たれている方はいらっしゃらないですよ。

大室 これを見ると、参考書がわかるわけだ。いまの市の資料が

あったでしょう。あれを見たらいっぱい書いてあるんだ。印がつ

いている。あれは全部見えていますからね。昔はああいう本でも全集本でも全部目を通さないとはいえなかった。いまは全然駄目ですな。だから相当おかしいことを言っているんじゃないかと思って。

大室 「馬場氏に向かつて」こういう数え歌をつくっている【資料10】。宣伝班長だけれど。こういう器用なのがいるんだ。

馬場 宣伝班長、ああ「田島」虎洲さんで何かお名前を聞いたことがありませんね。

大室 看板屋だったんですが、これがなかなか熱心で、右翼の青年が来たのをかばったりしていて、終戦後帰ってきたら、メーデーをやっている。だからそういうのを御するのは大変なんですよ。歳は上でしょう。うちのほうの隣組長をやっているけれど。

武田 それではどうもありがとうございます。次回の日程を決めさせていただきますと思います。

〈以上〉

# 大室政右 オーラルヒストリー

## 第5回

---

日 時：2002年10月22日（火）  
13：30～15：30  
場 所：大室政右宅（府中市）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

武田 知己（政策研究院特別研究員）

清水 唯一朗（政策研究院リサーチアシスタント）

馬場 治子（府中市郷土の森博物館学芸員）

## ■翼賛選挙の助っ人に

**大室** 「『翼賛選挙』助っ人の記録」というペーパーを配布―大室氏の執筆予定の本の内容が、四十二項目にわたって箇条書きにされている。それぞれの項目について草稿もある」この通りになるとは限りませんが。

**武田** ではどうでしょうか、この項目でお話いただきましようか。

**大室** それは先生の方の都合でいいんですが、これは順序が書いてありますから。これから直そうと思うんですが、書いておかないと間に合わないものですか。見出しもこのまま使えるものもある、使えないものもあります。「東条内閣の選挙対策」なんていうのはいいんですが、資料としてもあるんです。

**武田** むしろ先生に、この項目に従ってお話していただいて、こちらでも準備をしてきていますので、ところどころで質問を挟むという形の方がいいかもしれませんね。

**大室** 先生はいろいろなことを見ていらつしやるから。ただ、なんといいんですか、現代資料集がありますね『資料日本現代史』4、5 吉見義明・横関至編・大月書店・一九八一。あれには一番先に軍部のこととか憲兵隊のことを書いてあるんですね。選挙というのはハートをつかむものですから、権力でやれば逆ですよ。また時代感覚が全然違うんですね。戦争中だというと、これは勝たなければしょうがない。みんながそういう気持ちでいるわけですよ。そういう点で、頭からこうやって投票するのをこうだという書き方だから、全然変わってきちゃいますね。

**武田** 翼賛選挙の資料というのと、たぶんこれ「前掲『資料日本現代史』」だけですね、まとまって出ているのは。

**大室** でもわれわれも参考になることがありますよ。われわれも情報はよく取っていました。それからもう一つは、適格者なんて

いうのは、全部同じようにやっていたわけではないと思うんです。当事者が、熱心なやつかどうかの問題です。これを見ても適当なものもあるしね。これが必ずしも一致していない。「候補のリストが」来たからって、それが通るわけじゃないんです。

**武田** そうでしょうね。では、この「大室氏の見出し項目を書いたペーパーの」流れでお話しいただいて、こちらで準備してきた質問を、関係するところらせていただくといい形の方がいいと思います。

**大室** 先生方のご都合で。ただ、これを書いていたものですからね。最初の方はわりあい「わかっていているけれど」、だんだんぼけてきて、書きたいと思っていることを忘れていくわけです。この選挙は、実践部隊としては、精動の概要をつくったのと同じような立場なんです。まだ本番じゃないでしょう。こういう写真があるんです「翼協スタッフの集合写真を示す」。阿部「信行」さんが会長で、これが、少し足りないですけどだいたいスタッフなんです。

**清水** 先生、これは「場所は」どちらですか。

**大室** いまの東京会館。これ「写真」を持っている人はあまりいないかもしれない。これだけのスタッフでやっている。先生方がご覧になれば、知っている顔がうんといえますよ。この中に社会党の書記長だか事務局長になったのもいるし、いろいろですね。

**武田** それはなんとという方ですか。

**大室** あれはツノダといったかな。後になってみて、こいつ聞いたような名前だな、と思っていたんです。こっちはさっぱりわかりませんが、いろいろ「な人が」入っていたようですね。

**武田** このほかにも写真をお持ちですか。

**大室** こんな程度です。あとは、精動関係です。個人のものもありますが「写真のアルバムを示す」。これはご覧になったでしょう。これは市の選挙の時のスタッフです。これは何分の一もいま

せんね。

武田 私は「東京都」と質問票に書いたんですが、これは「東京市」ですね。

大室 あのとときは東京市です。都になっていません。市会議員の最後の選挙なんです。これから東京都になるものですから、市会というのはなくなっちゃうわけですね。

武田 これが大室先生ですか「写真に写っている若い大室氏を指す」。

大室 ああ、そうですね（笑い）。

武田 面影がありますね。先生の本『渦巻く時流の中で』に使われていた写真ですかね。

大室 そうかもしれませんね。それは事務局員ですね。それは精動時代です。これが精動の時の野村「重臣」さんという、京都大学の教授か何かやっていたわれわれの方のスタッフだったんですね。企画調査部でした。

武田 先生は国民服を着られていますね。

大室 このぐらいの人数「八十〜百人ぐらい」でやっていたというところをご承知いただければということですね。この中で、「写真」を指しながら「これが阿部さんでしょう。これが滝「正雄」さんかな。これが横山「助成」さん、これは部長です。これが私たちの部長。これが社会党の事務局長をやったやつかな。これが橋本清之助です。これはみんな一癖あるやつなんです。翼賛会から来た以外は。翼賛会事務局が多かったですけれどね。あとはみんな、大陸から来たり、いろいろです。新聞社の連中も多かったですね。新聞は縮小していたでしょう。

武田 阿部信行さんが協議会の会長ですね。事務局長が橋本清之助さんですね。そのほかにいらつしやったのは。

大室 これが協議会のメンバーですね「名簿を示す」。こういう職制は、最初まだスタッフが揃っていないときなんです。総務部だ

けが揃っていて、私の方はこれしかないんですが、これが出発の時のメンバーですね。これが職員では、いまの「写真の」半分もいませんでしょう。これは私の下書きなんです「大室氏の手書きの資料を示す」。こういうものはありますか？ 全体の名簿です「全体の名簿を示す【資料12のこと】」。

武田 全体の名簿はたぶんないですね。それには支部の名簿まで入っているんですね。

大室 そうです。

武田 それではそろそろ始めましょうか。今日は、先生が翼賛選挙に関係されたときのお話なんですが、そもそも最初に翼賛選挙に関わられるようになった経緯を簡単にお話いただければと思います。

大室 私は昭和十七年にはもう家に帰ってきておりまして、商売をやっていたんです。非常に忙しいときでした。ちょうど二月の、シンガポールが落ちた前後だと思えます。精動時代の同僚が来まして、「今度選挙をやることになったから手伝ってくれ。総務部長の横山さんから使いだ」と言うんです。

武田 横山助成さんですか。

大室 横山正一のほうです。これは翼賛会で総務部長か何かやっていた人ですね。選挙粛正中央聯盟の事務局長をやっていたんです。この方はわれわれもよく知っていますし、前からずつといういろいろなことをやっていますが、直接の上司ではありませんから関係なかったんですが、その方の使いだ、と言ってきたわけです。ただ私のほうも、ちょうど統制が始まったところでいろいろ忙しいときで、家に帰ってきたというのは、兄が戦死したものですから家に手がないからということでした。もともと、「兄が」外地にいたら同じなんです。その理由で大政翼賛会を辞めましたからね。帰ってみるとやはり忙しい。ちょうど府中の翼賛をやったり、いろいろありましたからね。私も十ヶ月ぐらい商売をしていて、

そういうことはやっていませんでしたから、お断わりしたんです。そうしたら向こうもあっさり、「そうだろうな、これは無理だと思っていけれど、横山さんがどうしても頼んで来てくれと言うものだから、来たんです」というわけです。

それでお断わりしたら、それから一週間ぐらい経って、この企画をしている小西君というのが来た。これも同僚なんです。精動時代からずっと一緒にやっていて、企画も一緒にやっていた小西利雄ですが、それから「今日行くから」と夕方電話がかかってきました。そして飛んで来て、今度は自分が出した案が通ったという。湯沢「三千男」さんが内務大臣になったばかりですね。小西君も同じ長野県なんです。何か、報知の新聞時代から湯沢さんとはつながりがあつたみたいですね。

そのとき彼が言うのは、「僕たちの意見が採り入れられて、こんどはこういうふうに行って政治を刷新するんだ」というような言い方だった。「だからおまえも当然一緒にやれ」という話になったんだ。若いときですから、前に政治の刷新とか、そういう議論をさんざんやっていますし、ずいぶん勉強もしていましたから。「そう言ったって、いま横山さんから来たのを断わったんだ」と言ったら、「そんなことは関係ない。実践部長の岡崎さんも知っているんだ」という。私は、橋本さんは知っていますが、岡崎さんというのは初耳なんです。「それも話を通っているからぜひ来てくれ」という。「いや、そんなこと言っても商売をやっているから、おやじと相談する」「そんなこと言っではいられない、どうしても」ということで、私はおやじに相談した。そうしたら、「まあ、ひと月やふた月はしょうがないじゃないか、やってやったらどうだ」と言うものですから、それでこれに参加したんです。もともとは小西君が何か大袈裟に宣伝したのかもしれませんが、そういうことです。そういうことで辞令をもらったのが三月です。

武田 それは翼協ができてからですか。

大室 もうできていました。

武田 では三月の後半ですね。

大室 辞令が出ているんです。こういうものです「ファイルに入っている辞令の現物を示す」「部員トスル、百参拾円」。三月十七日付になっていますね。部員というのは、大政翼賛会では、なかなかなかった。部員というのは高等官待遇だといっていたんです。われわれはそういう年代ではないんですが、このときはもう選挙ですからね。ところが官庁式で、ちゃんとした辞令が出たんですね。

それで行ったところが、先ほどこちよつとお話が出ましたが、東京会館に本部を設けて、翼賛政治体制協議会ができておりました。阿部さんを会長にして、二十何名かの協議員ができていました、事務局体制もできてからなんです。

武田 先生が呼ばれたのは、ですね。

大室 ええ。これがメンバーなんです「資料12のこと」。行ったところが総務部長のところ、総務部長には断わって申し訳なかったんだけど、その人が局長のところに連れて行ったり、実践部に連れて行ったりです。実践部には岡崎さんという人がいた。実践部はどういうことをやるかというと、演説会とかに応援を出すところなんです。もう一つ、われわれが行く前に、文書的なことはほとんどやっていました。注意事項をつくったり、いろいろなことですね。

事務局の構成【資料11】から申しあげますと、総務部と連絡部と実践部があります。それに企画室というのがあった。企画室というのは局長の秘書みたいなもので、小西君一人だけで、新聞発表なんかもここでやったと思うんですね。それから総務部というのは庶務的なこととか経理とかをやっている。連絡部というのは、のちにご説明申し上げたいと思うんですが、各支部とか、候補者に対する分担をして、これは選挙の内容についての連絡係なんです。



すね。後で言えば、資金を持っていたり、いろいろ具体的な応援をしたりすることをやっていた。そして選挙運動そのものについては実践部がやったわけです。

最初に何をやったかという点、昔の考え方はブロックなんです。東北、北海道とか、関東とか近畿とかあるでしょう。何ブロックだったか、演説会をやるんだといって演説会をやる。それが終わると、そこでやらなかった府県庁の所在地で演説会をやる。こういうものができて、こういう運動をやりますよ、とやるわけですね。その次に候補者が決まると、推薦候補者に対する応援を出すのが私の仕事です。演説会を道府県でやるということです。

それで私が行ったら、私の方の班長は海後勝雄という埼玉大学の学長になった人で、前から精動のほうにいたこともあって、顔もよく知っていた。みんな何もしていないんだ。書くものはみんな済んでいるわけだ。「大室君、君、いいところに来たからこれを頼むよ」という。何をやるのかと思ったら、そういうこと「推薦候補者に応援を出すこと」なんです。こっちもそんなことはやったことがない。これは全国へ、部長の方から来た指示です「古いメモ（指示書）を示す」。まあメモ的なものですが、それに対して、私がこういうものをつくったわけです「古いメモ（自作の案）を示す」。東京会場ではこういうことをやるとか。もちろん会長とかは出るようになっていましたけれど、これは私の案なんです。

武田 先生は東京担当なんですか。

大室 いや、全国担当です。

武田 全国でどういうことをやるかということを、先生が決めるわけですか。

大室 それを最初にやれというんだ。演説会をやることは決まっている。もう理事会で決まっているけれど、その内容についてはね、日にちや会場はそっちでやっても、内容はこういうふうにするのか。それで道府県の第一班とか二班とか――

武田 すべて先生がやられたんですね。

大室 これは正直な話、前段のわれわれが行く前に、文書的なことはやっているわけです。翼協のバッジをつくるとか、腕章をつくるとか、注意事項だとか、そういうものをずいぶんつくってありました。それでいざ本番、選挙が始まると、演説会だけでしよう。演説会と同時に、そのころは推薦の文書が出せるんです。

これは直接やらなかったからよくわからないんですが、何部かは郵便が無料になる。あとは推薦人がハガキや文書を出せるわけです。あのころは大袈裟に、推薦状を書状に書いて出すんです。

清水 推薦人がハガキを出すというのは、どなたに出されるんですか。

大室 推薦人が、本部で出す推薦人というのか、候補者によるんですが、一人について何枚という無料のものがあるんです。誰の名前でもいいんだけど。それはそれで、そのほかに「選挙予想で」弱いところには、もちろん有料のものを出せるんです。

武田 自己負担で出すということですか。

大室 だからこちらがずいぶん出しているわけです。いまの選挙法と違うから。このときのやつじゃなくて、ほかのもの「推薦状」は、私はたくさん古いものは持っているんですけどね。みんな書状みたいになっているんですね。印刷はしてありますけれど。

武田 それは、演説会に来てください、というものですか。

大室 そういうんじゃないの。この人を推薦します、という。

武田 推薦する人には、本部から何部か――

大室 本部からは全部出すんです。

武田 推薦候補者にはですね。

大室 あとでもって、弱いやつに対しては、一人に対して一万部ぐらい応援するとか、やるんです。地元でもやることができるけれど、郵送料がかかるからお金がかかるでしょう。

武田 それは何のハガキですか。

**大室** 「この人は適当でございますから、よろしくお願いします」という文書が、出せたんです。

**武田** 「この人は推薦候補者です、よろしくお願いします」というのをみんなですすわけですか。

**大室** そうそう、そういうことでいろいろ、もつともらしく、昔の話だから、簡単じゃなく、ハガキでも出しますけれど、いろいろ出すわけです。ただし、それは無料じゃないわけです。

**馬場** 差出人は本部なんですか。

**大室** 本部でも誰でもいいんですから。

**馬場** 費用は本部がもつんですか。

**大室** それは最初のは、公けで出せるものがあるでしょう。そのときの文章は、こういうものを使ってもいいよとか、そういうことが書いてある。そのほかに、始まってからはこちらからも重点的に出すとか、えらい人の名前が必要なときは、会長以下で相談して、また出すとか。いろいろ出しているわけです。ずいぶんほうぼうから、そういう手紙が来るんです。手紙と言った方がいいかもしれませんね、推薦状ができた。

そういう準備は、ほとんど前もって、実践部の、新聞社の連中が主でやっていましたね。書くのが上手ですからね。本番の選挙運動となるとやはり演説会でしょう。

あとは、いまみたいに自動車に乗って、ということはないんですから、演説会場をつくってやらなければならないでしょう。それに対する応援弁士も必要なんです。最初は府県庁の所在地でやる。県庁所在地でやっても、選挙区は幾つもあるんですから。普通は「県内に選挙区が」二つか三つのところが多いんですが、大きなところは五つぐらいあるでしょう。だからそこだけでやっても間に合わない。

それを全国でやって、今度は候補者が決まってから、候補者に対する応援弁士を出す。その仕事を私がほとんどやっていた。そ

の弁士は「情勢視察員」という名前なんです。情勢視察員で行ったところが、たまたま頼まれたから演説したということらしいですね。

**武田** という形にしたんですね。

**大室** だからその代わり、これはこちらで出すから、旅費だとか宿泊費を出しているわけですよ。

**武田** 翼協のほうで、ですか。

**大室** ええ、こつちで出すわけです。それを支部に任せるものは支部に任せる。直接どこに行きたいというのがあるとか。この一番からありますけれど「資料を示す」、最後に足りなくて職員を遣っておりませんが、四百何十人出して、延べにして三千何十人というものを私がやっていたんです。

また、これをやるときには、道府県の支部と最初に打ち合わせをするでしょう。ある程度大きなときはよかつたんだ、十ヶ所か何か「ブロックで」やっているとね。今度、四十何ヶ所「という道府県」になると、毎日やっていられるわけではない。一日に三ヶ所も四ヶ所もありますね。

そのころは電話なんです。これ「ダイヤルを回す手振り」じゃないんですよ。都内はこれ「ダイヤル」でできたんだ。ところが他は「もしもし」でやって、交換台を呼んで「東京の〇〇番です、大阪の〇〇番」という。また、特急、急行、普通というのが。特急でやっても間に合わないんですよ。なかなか出て来ない。もう一つは、一つの電話でやったらお話し中になっちゃうでしょう。だから私は多いときには十五本ぐらい「の電話を」前に置いておいて、やるんです。

**武田** 先生が交換士みたいですね（笑い）。

**大室** それが不思議でしょうがないんだ。大勢スタッフがいて、どうしておれが一人でやったかという、それによって臨機応変にできないんですね。あとのスタッフは、主として弁士を探して

歩く。これは十何人いて、偉い人のところに行っています。

それで電話で行き詰まったわけです。そうしたら途中から特別電話というのを私にくれたんです。それはどういう電話かという、内閣総理大臣と内務大臣と通信大臣が持ちになっているものなんです。そのころ電話は通信省の管轄でしょう。それをやりますと、申し込みより一番先に優先される。それが本部に二本来たんです。一本は事務局長か会長か何かで、もう一本を私がもらったんです。だからどんな仕事をやっているかというのはご想像いただけると思います。これはずいぶん助かりました。そうじやなければ本当にお手上げだった。それで主として仕事というのは、朝から晩までそれですよ。そのあいだに、いろいろエピソードがありますけれどね。

武田 先生ご自身は、情勢視察員ではなくて、本部にいて仕切っていたわけですね。

大室 最後には、主な職員もみんな出した。それでも「支部が」泣いてくるわけです、「本部から、誰でもいいから寄越してくれ」というんです。

武田 人が足りないわけですか。

大室 地方でいろいろやっていて、そこまで行くにはギリギリなんです。こっちもお手上げなんです。そうやって私が電話に出ると、「君がいるじゃないか、すぐ来い」という。全部出しちゃって、私以外には女子供しかいません。それで断わって、ずいぶん泣かれたこともあるんです。

清水 先生ご自身は行かれなかったんですね。

大室 このときには行かなかった。だつて行くどころじゃない。そんな余裕は全然「ない」。投票日になって初めて家に帰ってきて投票したんです。そのとき初めてです、投票したのは。

清水 それでは缶詰ですか。

大室 そのあいだは忙しいものですから、最初のうちはここ「府

中」から通っていたわけですよ。そうすると帰って来るのが十時ぐらいになっちゃうんです。そうするとこの前もお話した翼賛壮年団なんかがあつて、待っていて、やられた「駆り出された」とがあつたんですがね。ところがとても間に合わないわけです。それでいまのプレスセンターの近くに、ホテルの部屋をいくつか取った。「資料を調べて」ああ、中央ホテルというんだ。三階建てか何かだった。これは拓務省、朝鮮とか台湾とか南洋の統治地区の関係の官庁の出入り指定のホテルみたいでした。

武田 どこにあつたんですか。

大室 いまプレスセンターがあるあたりです。

武田 日比谷ですね。

大室 日比谷公会堂の反対側の、NHKがこっちにあつたところですね。そのホテルで、ほかのやつは一回か二回、一人か二人泊まっていたけれど、私はずっとホテル住まいになっちゃったんですよ。

武田 何日間ぐらい泊まっていたんですか。

大室 約ひと月ぐらい泊まっていたんじゃないですか。三月十七日から行って、三月の終わり頃からはずっと泊まっていたんじゃないですか。

その中でいろいろなエピソードがあつて、あるとき夜中の五時前に電話がかかってきて、本部からだというので受けてみた。海軍大將の中村良三というのを東北で頼んだわけです。そのころは汽車が夜中に着くでしょう。山形駅に四時何分に着いたら、どこに行つていいかわからないというんだ。それで駅長から電話がかかってきたというんだ。宿直から電話がかかってきたから、「ホテルから東京会館まで」そんなに遠くないので、駆け足で行った。あのころは、タクシーなんかないからね。

それで駅長室に電話したら、「いや、中村閣下が来られたけれど、ホームを降りたら、腕章をつけたのが旗を持って迎えに来

ているはずだと言った」というんだ。どこでやるということとは知っていても、どこに泊まってどうするかは知らないわけです。「それで困って駅長室に來たけれど、そのうち迎えに來ました、係が寝坊しちゃって。だから大丈夫です」なんていう。それが最初にあつたんです。

そんなことから始まって、ずいぶんいろいろありますよ。その話だけ先にしてしまいませんか。

武田 先生のお仕事ですね。

大室 みんな、ほとんど私の仕事なんです。このころになると、私以外にはろくな仕事をしている人はいませんよ。連絡部以外には。

## ■ 翼賛政治体制協議会

武田 ちょっと話を戻させていただきます。先生は翼賛政治体制協議会ができる過程には全く関わっていないんですね。

大室 それはだつて、そういうものじゃありませんもの。これは東条内閣が、本当は昭和十六年に選挙をやらなければいけないわけです。それが非常時だということで一年延ばしているわけです。いつやるかということを見ていたんじゃないですか。ところが最初によつたところが調子がよかつたので、ここで急いでやつてしまおうということになった。十七年に早くやろうと。

それは私どもが想像するしかできませんが、東条さんが内相を兼任しておつたわけです。それを次官だつた湯沢三千男さんに譲り渡して、選挙対策をやらせていたんです。それに小西君というのも多少関わつた。それで大東亜会館というのは、前に大政翼賛会が使つていたけれど、こんな贅沢なことはいかんといつて大政翼賛会は出た。そろそろ大政翼賛会は、おかしくはないけれど、やられていたときでしょう。その場所が空いているものだから、

借りたわけです。ここ「大室氏の項目ペーパー」に「大東亜会館と名を変えた東京会館」についても書いてありますけれどね。

武田 それはぜひ説明してください。「大東亜会館」と書いてあつて、これはどこなんだろうと思つていたんです。

大室 これは大政翼賛会が東京会館を使つたときに、大東亜会館という名前にしたんです。そのときに変えて、返してもらつてまた改装か何かしようと思つていたんでしょう。ただ、もう配給の時期になつて、お客もないし、あまりできないわけです。それでどうするかというときに、臨時だということで貸してくれたんです。私は東京会館の資料も持つていますから、そう間違いないと思います。この五階の会議室。協力会議をやつたり、結婚式をやつた大天井のところ、そこがわれわれの事務所だつたと思いますね。総務部なんかはそこじゃなくて下の方でやつていたようです。最後には実践部の仕事だけで、連絡部の人は外に出ちやいますからね。

武田 事務局は最初少なかった、とさつきおつしてましたね。

大室 最初というか、最初は少なかったというんじゃないで、それが始まるころは、総務部系の者は、ほとんど大政翼賛会から連れてきていますよ。庶務的なものとか、文書だとか、経理なんかのスタッフはほとんど。

武田 一番最初に、人数は少なかったとおつしてましたね。

大室 それは少ないです。最初につくつた書類のときには、何人もいないですよ。

清水 先生は先ほど二十六人とおつしてましたが。

大室 これは「名簿を示す」庶務の方だけ「人数が」多いでしょう。これはみんな翼賛会から來た連中です。タイピストだとかなかにも来る。私の仲間もいますけれどね。

武田 仲間というのは、精動のときの仲間ですか。

大室 精動の仲間です。前田「房子」さんもそうですね。アオキ

もそうだし、吉田「貢」もそうだし、カメヤマもそうだ。みんなそういう慣れたのを連れてきたんですね。連絡部というのは、七人ぐらい、もう一人か二人いるんだ。これはご覧になりましたか。例の資料『資料日本現代史』四巻の中で、付録で中林「貞夫」さんというのが書いていた。

武田 機密費を持っていたとかいう話ですね。

大室 こっちにも書いてある。

武田 先生は皆さんご存知ですか。

大室 翼賛会から行ったのは、石井「一美」さん、柴貢さん、城地「良之助」は違う。遠藤「正男」はそうだ。

武田 城地さんは違うんですか。

大室 城地さんは違いますね。城地さんはたしか松岡さんのあれですよ。

清水 松岡洋右ですか。

大室 洋右の二号さんの子供なんだ。ちよつとそういうことが書いてあったでしょう、中林さんの中に。はっきりは書いていませんよ。これはあまり書けないのでね。

武田 いいんです、お話ししていただいて。

清水 歴史ですから。

大室 連絡部の人は城地良之助、大木達夫、中林貞夫、宮内潔、松尾協、遠藤正男、石井一美、北沢栄一、柴貢。それを各班に分けてまして、北海道とか東北ですね。第一班が北海道・東北、第二班が関東、山梨が入っています。第三班が静岡とか信越とかあるんです。だいたい臨時に応援を出しています。というのは連絡部は、県内全部の候補者が出ると、選挙区を回らなければならぬでしょう。とても回りきれないというので、この連中は常駐しているわけです。それで、いま言った人たちを班長と称していたわけです。

班長に対して、途中で連絡部長から指示が出ています。このメ

ンバーはなかなか面白いんですよ。みんな情勢を見に行くということと同時に、最初にお金を運んでいるんですね。お金を運んでいるのは、ここがはっきりしないんですが、一つは支部宛に持っていて、支部から推薦者にやる。ところが中林さんは、自分で各候補者に全部配ったと言っているんですね。そう書いてあるんだけど、どっちがどっちかわからない。私も班長さんと会って話をしているけれど、「私は全部支部にやった」と言っているんですね。いくらか、というのはみんなわからないんです。

武田 密封されているんですね。

大室 ええ、密封されていて。だいたい一万円ずつじゃないかと言っていました。

清水 一万円ずつというのは、支部ごとに一万円ということですか。

大室 支部ごとに一万円もあったかもしれないけれど。候補者に対していくらやったかわからないけれど、中林さんのあれ『資料日本現代史』4巻・月報を見ると、一万円みたくに見えますね。

武田 一律ではなかったんじゃないか、ともおっしゃっていましたね。

大室 それであとから情勢報告をするわけです。第何区の誰々は弱いとか強いとか。

武田 それは連絡部の方がするわけですね。

大室 連絡部の仕事なんです。それが足りないものだから、うちのほうの班長とか、少し使えるやつはみんな応援に出されている。それは名前が定かではありませんが、行っていることは間違いない。みんな総動員ですからね。

武田 支部長というのは知事さんになるんですか。

大室 支部長は知事ではなくて、各支部に、こちらと同じように、東京市なら東京市本部というのをつくる。だいたい財界人ですよ。

さつき会員名簿がありましたね。たとえば福島県にしますと、会員が誰で、事務主任がどうかと書いてありますね。いろいろあります。この中には、さつきあつた翼壮の地区の団長さんとか、県会議員だとか、村長だとか。この選り方は中央協力会議なんかを選んだ。各個いろいろんな彩りをつけているでしょう。そういう関係も多いですね。

武田 支部の役員がー。

大室 あのところから一つの選り方ができているでしょう。

武田 具体的には翼壮とかですか。

大室 翼壮の人は、団長なんかには必ず入っていますね。

武田 あとは団体でいうところですか。

大室 翼壮であるとか、財界人は必ず入っています。

武田 在郷軍人会。

大室 それから県会議員の代表みたいな人。それから村長もいれば、いろいろんなが入っていますね。その地区で選んでいるんです。こちらが選んでいるんじゃない。それをこちらに持つて来て、会員と称しているわけです。

翼賛政治体制協議会というものをつくって、最初に東条さんが委嘱するわけです。最初はいつでしたか、早くに呼んで、こういうことをやりたいというので、翼賛政治体制協議会というのができて、互選のような格好で互選じゃなくて阿部さんが会長になる。それであとは、会員で二十何人でしたか、三十三名になっていますか。これが本部の会員です。それで事務局長が橋本清之助ですね。

武田 これは当時は「翼協」と言いましたね。

大室 「翼協、翼協」と言っていました。

武田 「大室先生が」翼協に入られたときには、もう地方支部はできていたんですか。

大室 地方支部は、それからだと思いましたね。

武田 それには先生は全く関わっていないんですか。

大室 関わりはありません。これは全部呼んで、ほとんど揃いましてね。

このころの考え方といいますと、これはよく認識しておいていただきたい。戦局との関係があるわけです。戦争が始まったばかりでしょう。それで最初にハワイをやったりイギリスの軍艦をやったりして調子がよかつたけれど、だんだん拡大していつて、ボルネオの一部に入ったり、シンガポールに行く。まだ勝った負けたまで行かないんです。全体が非常に緊張しているときじゃないですか。

武田 決戦態勢ですね。

大室 結束は堅いし、そのときになんだかんだという見方をするのは、ほんとうに気の毒だけれど、あまりにも知らな過ぎると思う。われわれは「時局」という言葉を使っていたけれど、そのときには思想的にどうこうという連中が表になんか出られるわけがないでしょう。

武田 そうですね。それでみんなで翼賛選挙をやるうと。

## ■ 演説会と情勢視察員

大室 ただ選挙は、そううまくは行かないんです。いまの選挙とあのころの選挙とは違うんですよ。いまみたいに車でどんどん回ってやる選挙じゃないでしょう。ですからどうしても演説会が主になる。だからこの主体は、私のほうの応援団の如何ということになる。足りないところは文書で行くけれど、文書というのは弱いでしょう。

武田 推薦します、という文書ですね。

大室 ええ。それからその演説会について、ほかの新聞を見ると、あのころ聴衆が少なくてどうだと言うけれど、それは聴いたことのない人の話ですよ。それは、演説会もほうほうでやるけ

れど、演説会というのは昔からそうで、昼間はあまりできないでしょう。お互いに忙しいから、夜でしょう。

武田 何時ぐらいから始まるんですか。

大室 だいたい学校、小学校の講堂でやるんです。ところが戦争が始まっているから警戒管制です。薄暗いんです。広いところで、二つか三つの教室をぶち抜いて、一つの教室に裸電球が一つ。それに黒い覆いがしてあるわけです。まだそのうちはよかつたんです。〔昭和十七年四月〕十八日に空襲があつてから、ガタツと落ちたんです。それは新聞に書けないでしょう。空襲があつたから、調子が低くなるってアメリカの思うつぽでしょう。だから「聴衆が少なかったとか」言っていることは全然話が違ふんです。私が一番困つたのは、空襲が終わつてから、応援団の情勢視察員が集まらなくなったことです。

清水 どういうことでしょう。

大室 だつて怖がつて、行くのがいやじゃないですか。だからなんだかんだと言つて、いっぺん行つた人にまたお願いしても、都合が悪いとかこうだとか言う。前にはわりに前向きだつたんです。なぜおれを呼んでくれないぐらいの人もいたんだけど、しまいには困つちやつた、後半になりました。

これ「大室氏のペーパー」の項目「皇居前で見た東京初空襲」は十八日です。なぜかという、四月十八日の空襲は、私たちは大東亜会館の窓から見ています。それはどういふことかと言いますと、正午頃なんです。情報係というか、ほうほうを回っているのがあるんです。それが飛んできて、「どうもおかしいぞ、空襲じゃないか」という。あのころは市電が、日比谷の交差点で、三宅坂の方から来るのと、こつちから来るのと両方あるわけでしょう。それがごうごう音を立てていて、何もないじゃないかというんだけど、どうもおかしいぞと言つて、そのころ十何人かいた連中が、窓際から皇居の方を見たんです。そうしたら何もない。そのうちに消防車

がサイレンを鳴らして宮城に入っていくんですよ。これは宮城がやられたかな、と思つたら、そうじゃなかったんだ。

ところが、「あれは何だ」と見たら、低く二機ばかり通っているんだ。ちやうど皇居の後ろの方だ。あれは目黒のほうに行った飛行機ですよ。それは、みんなこういうふうな「真上の方向を」見るでしょう。そうじゃなくて、うんと低いんですよ。山並みとあまり変わらない。そのあとから高射砲が追いかけているんだけど、高射砲は上の方なんだ。われわれは四機ぐらい見ましたよ。あそこに見えた、なんていうときになつて、やつとサイレンの空襲警報が鳴つたんだ。

このあいだ、千代田の区長と話をしたら、「おれのところには爆弾を落とされた」という。早稲田実業のところに落ちたんですね。そんなことは後になつても知らないんですよ。みんな書かないから。「おれの方じゃ大変だつた」なんて言つていた。でもそういう被害はあまりなかった。だけど、脅かしは効いたんですね。武田 それはお話を聞かないとわからないですね、書かれたものだけでは。

大室 それは、みんなわれわれが見た初めての空襲でしょう。電車も空襲警報が鳴つたら止まつて、みんなそこの防空壕に入るんだけど、どこに防空壕があるのか知らないから、みんな上を見てうろろしているだけなんです。だからこれはどうなるかな、と思つたら、何機か通つた。後樂園に高射砲があつた。後樂園の方だと思うんだ。ずっと目黒の方に回つたのをわれわれは見ただ。それで急いで、ラジオしかありませんからラジオをかけたけれど、ラジオも言わないんだ。空襲警報しか。それでしまいに、なんとか遁走せり、だ。

ところがこれが終わつてからまいったんだ。私は一番困つたわけだ。私は部長と談判して、「いろいろやつたんだけど、これじゃあしょうがないから、演説会を辞めようじゃないか」と言つ

たんですよ。

武田 先生が、ですか。

大室 はい。そう言ったけれど、部長も困って、「そう言うけれど、君、当選すればいいけれど、しなかつたらえらいことだ。それから東京はいいけれど、よそは—」という。最初は全国がびつくりしていますからね。全国はそんなに影響はなかつたんだけれど、東京は特に影響があつたでしょう。応援弁士というのは東京の人をみんな連れて行くんだから。だからあのときはまいって、二日か三日やつただけで、こつちも頭を抱えてね。「全国、こういう非常時だから、演説会なんかやつてはいられない」といつていたら、「君、そんなことを言つて全国的に見たらわからない」というんだ。

そのうちだんだんにちが経つてくると、空襲の内容がわかつてくる。あの空襲はご存知でしょう。海軍が来て、見つけたんだけれど。こちらも迂闊だったのは、戻らと思ったのがそのまま大陸に行っちゃつたので、みんな逃げられちゃつたわけですよ。何機落としたなんていうのは、本当かどうかわかりませんけれどね。それで敵の飛行機が行ったら、わが方の戦闘機が編隊で来たんだ。それははるか彼方の上を飛んでいるんだ。だから本当に見た人はびつくりするのと、馬鹿にしちゃうんだ。

清水 戸山の幼年学校にいた方に伺つたのですが、戸山は周囲よりも場所が高いですよ。やはり低いところを飛んでいるので、正面に飛行機が見えたとおつしやっていましたね。

大室 だからみんなびつくりしたんだ。家の近くというわけでもないけれど、そのぐらいで「飛んできた高さは」何百メートル以下でしょうからね。

清水 それで視察員の方が行きたがらなくなつたというお話ですが、視察員というのはだいたいどういう方が行かれたんですか。

大室 情勢視察員というのは、大学教授だとか評論家だとか、貴

族院議員とか陸海軍の大将とか将官とか、そういう人たちですが、全部出しているでしょう。

清水 それで、あとになると事務局の事務員も行くようになったということですね。

大室 それは最後に、しょうがなくて。

清水 行くと必ず演説をするということになっていたんでしょうか。

大室 情勢視察員というのは演説の応援に行くわけです。特に自分の得意なところがあれば。こちらは弱いところを重点的にやっているわけです。

清水 現地の情勢を報告するということはないんですか。

大室 情勢視察員というのは応援演説者であつて、そういう名前だけなんです。

清水 情勢視察をしているのは、さつきおつしやつた連絡部の班長さんとかですね。

大室 こちらの職員が行っている。これは最高幹部の方でいろいろやつている。連絡部というのは最初は橋本さんが部長を兼ねていたんだけれど、そのうちに田辺定義さんという市政調査会の方、ご存知でしょう。

最後に「選挙が」終わったときに、大きな壁にいっぱい書いてあるわけですが、どこで応援したとか。田辺さんは、「これは大変なものだから、市政調査会で資料としてとっておくから、くれよ」「いいでしょう」というのでやつたんだ。終わってから市政調査会に行ったら、「そういうものは一切ありません」ってさ。

武田 もしかすると田辺さんのところにあるのかもしれないね。

大室 その空襲があつた前後は人が集まらないのは当たり前でしょう。それで警視庁は四時ぐらいからやつたらどうだという指令を出した。夕方明るいうちに、ということですね。

武田 普通は何時ぐらいから始めるんですか。



大室 普通は六時からとか。四月ですから、相当「日」長くなっているけれど、六時から七時ぐらいのあいだが多いわけでしょう。それを早くやったらどうだなんていう示唆を出していましたけれどね。ところがそのときには、怖くて行けないですよ。こっちは怖いなんて言っている暇はなかったですけど、それで困っちゃったんですよ。そのうちに落ち着いてきましたけれどね。

そのときの一つの例が、東京の一區で福家俊一というのがいるんです。ご存知ですか。

武田 満州組の、岸信介の子分ですね。

大室 そうですか。四国の人です。これがどういうわけだか、東京第一區で推薦になった。われわれが聞いていたのは、あれは年をごまかしているんじゃないかということだ。あのころは、有権者は二十五だけれど、候補者は三十歳でしょう。

清水 そうですね。

大室 だから、あれは一つごまかしているんじゃないかというぐらいの人だった。若くて、上海か何かで新聞社の特派員が何かやってたんだ。岸さんの子分ですか。それは私は知らなかった。それで元気がいいんです。話はうまいし、一所懸命なんです。彼がやった報告は、こちらにも注目していましたからね。若くて、東京の真ん中で、なぜかという、有名人に混じってやっているわけだから。

報告が来ると、「今日は二十人入りました」というんだ。「そのうち十五人は味方でした」というんだ。味方というのは、自分たちのスタッフなんだ。実際は五人だというんだ。そういう連中が報告してくるんだから、聞いていたんだ。それが何回か続いたら、彼はその五人に一時間ぐらい一所懸命やるんです。これが逆になつて、後半はいつも満員になつて、何百人と集まる。これはわれわれもホッとしたことですね。熱心だった。最初はみんな心配していて、「推薦候補者がこんなものではとても駄目だ」と

言っていたんです。彼は三人ぐらいのときも一所懸命やったんだ。

武田 演説会の話ですが、先生は弁士を派遣するわけですね。演説会の会場設定とか運営とかは支部「の仕事」ですか。

大室 支部がやるんです。いついつやるというのは、支部とやって、場所もちろん向こうでやってもらう。こちらはこういう人をお送りしますよ、ということをする。

武田 支部の仕事は、基本的にそういうことですか。

大室 それと、推薦の候補者を持っていますから。

武田 候補者の推薦をするわけですね。

大室 自分とところの推薦候補者を当選させなければいけない。それが一番ですから。その応援のためにこちらが演説会をやるわけだから。

## ■候補者の推薦について

武田 候補者の推薦は支部がするわけですか。

大室 そうです。演説会なんかのときに、ブロックでやるときには本部の会員がほとんど有名な人を出すけれど、都道府県のあるときにも、やっぱりみんなが聞きに来るような、名前のある人を出しているわけです。しまいはいつべんに五ヶ所ぐらいやるときがありますからね。いろいろ苦労しましたけれど、それが一段落すると、今度は本番の候補者に対する応援なんだ。その候補者に対する応援については、われわれの方では特別に弱いものでも支部に任せて、支部がどの候補者を応援するかということをするわけですね。

武田 支部の方で塩梅するわけですか。

大室 特定の人もありますけれどね。その人が行って応援した方がいいというところがありますから、いろいろあるわけですね。

武田 先生は、支部が推薦候補者を選ぶ過程というのは、何かご存知ですか。

**大室** それは関わり合うというのではなくて、最初に支部が選定する基本が決まるわけです。第一番は定員の中でやりなさい。候補者については時局にふさわしい、ということですよ。それはどういうことかというのと、どちらかというと前の翼賛議員同盟だとか、現職がいるわけでしょう。それじゃなくて、新しい者を出そう、改革しようというのが主ですから。ところがそういう空気が全般的に出て来て、各地区で新人の推薦者が多くなってきたわけです。しかし現職というのは力があるじゃないですか。その反発があったりして、いろいろ出てくるんですよ。それで結局は、最終的に新人の方が多いんですが、前「現職」もやるわけでしょう。

**武田** 支部の中で、既成政党の代議士さんと新人とのあいだでいろいろないざごぎがあったと思うんですが、その連絡も来るわけですか。

**大室** そういう連絡というか、最終的に案がきたら、こちらに出してもらって、それを今度はこちらの銓衡委員が選ぶわけです。それで第一回は三月下旬までとかいうけれど、ぎりぎりになって全部揃わないんです。中にはいろいろあるから。できたものを逐次やって、二回になるわけですね。それで最後には徹夜で決めているんですよ。だいたい第一次は支部が推薦するわけです。

**武田** それには本部は全く関わらないんですか。

**大室** それはもう支部。支部でもって簡単に決まるところと、ゴタゴタするところがある。最終的に一番の限度は定員以内だと。四名のところは四名、三名のところは三名。ところがどうしても話ができなくて、一名増員区と、一名減員区とができちゃうんですね。だけどそれはそれでやむを得ないだろう。それから、来たものをそのまま受けるんじゃないで、中にはおかしいのがあるから、それを本部の推薦の特別委員がいましてー。

**武田** それはお名前はわかりますか。

**大室** ええ、わかりますよ。

**武田** これ「資料日本現代史」によりまして、支部による推薦候補者の選定の後に、翼協本部推薦候補者の決定というのがありますね。

**大室** 名前はわかっています。

**武田** 事務局ではないですね。

**大室** 本部の会員の中で指名されているんです。「名簿を探す」

**武田** 先生、これ「名簿を示す」はどうですか。この方々ですか。

**大室** これかもしれませんね。これですね。小磯昭昭さん、末次信正さん、高橋三吉さん、後藤文夫さん、横山助成、伍堂卓雄、平生鈺三郎、藤山愛一郎、千石興太郎、井田磐楠、太田耕造、下村宏、滝正雄、遠藤柳作、田中都吉、前田米蔵、大塚唯男、太田正孝、岡田忠彦、勝正憲、永井柳太郎、山崎達之輔、これですね。これに間違いありません。

**武田** この中で中心となった方はどなたですか。この二十何人のみなさんで決められるわけですか。

**大室** これは一緒になって、最後の決定を決めるんです。その人たちに任せているわけです。それがあって、この人たちが推薦するの、中にはあるわけだ。

**武田** この人たちを見ると、政党の長老もいますね。

**大室** それは政党代表でいいんですが、支部から上がってくる中に、自分の最良の者と、これを入れてくれ、というのがあつて、それが途中で、休憩になって話が広がったときに、そこ「大室氏ペーパー」に書いてある、末次さんのところに、私に行つて来いと言われたのがその場合なんです。

会議の途中で、休憩になったんです。局長だか部長だか、部長だろうと思うんだけど、来て、「大室君」と言うんだ。プロックの演説会をやる前からね。例の小磯さんと末次さんになかなか会えないんですよ。ああいう人たちは忙しいから。いま考えてみたら、神様みたいな雲の上の人ですからね。われわれがいっ

ても。大将でもあるし、どっちも大臣もやっているしね。陸海軍の特別の人でしょう。「いまちょうど休憩になつてゐるから、おまへ行つて交渉してこい」と言うんだ。

**武田** 何を交渉するんですか。

**大室** 演説会の。ブロックでやる演説会があるでしょう。会員は全部どこかに行くことになつてゐるんです。都合をつけて。ちやうどいいところだから。決まっていけないんですよ、会議が忙しいから。それで、「君行つて、交渉してこい」というわけだ。直接に交渉するのは違う係だから、私はやったことがないんだけど、そういう難しいことになることつちに来る。それで私は急いで、ワイシャツでいたのを上着を着た。大臣は一人ずつ部屋に入つていて休憩してゐただけで、最初に小磯さんのところに行つたんだ。小磯さんは前の精動のときに――。「この話は皆さんに」話しましたか、大阪の大会で――。

**清水** ありました。車に乗つていかれる話ですね。

**大室** ああいうこともある。それだから話をしたわけではないけれど、難しいということはよく知つてゐたんです。小磯さんに会つたら、なぜ難しい顔をしてゐたかといつたら、小磯さんが言つたのがはねられちゃつたらしいんだ。推薦がうまく行つていなくなつたらいいんだ。あとで聞いたらね。そういうときにやらされたから、ご機嫌が悪いんだ。だけど、「閣下ご承知の通り……」と言つて。もう行くことはみんな決めてゐるんだから。だからどこへ行つてやるか。あのとき仙台だったか、幾つもあったんですけれどね。そうしたら、「おれは忙しくて行けないから駄目だ」という。ずいぶん粘つたけれど駄目だったんです。

今度は末次さんのところに行つた。どこでもいいと言つてゐたんじゃないから、末次さんのところに行つたときには仙台を指定したんです。地元の仙台、「東北方面にはぜひ閣下においていただきたい」ということをやつたんだ。そんなことを言つてきて

ゐるんじゃないんですよ。そうしたら末次さんは「僕は仙台や東北の方には関係ないから知らないけれどな」と言うから、「いや、ぜひとも」と言つたら、ニヤリとして、帳面を出して、いつだと言つたら、「その日は結婚式の仲人か何かをやつてゐる」と言うんだ。ほかの日のことは決まっていけないから駄目だったんですが、だいたい話して、「それは残念だな」なんていう。だから大将も普通の人間だな、と思つたんですけれどね。そういう、図々しいんですよ。

## ■推薦候補者への応援

**清水** 支部から推薦が上がつてきて、結局いまの委員会では最終的な決定をするということですが、支部から推薦が上がってくる段階で何かお耳にされたことはありますか。

**大室** 支部からというのは、直接こつちではなくて、来ますでしょう。支部で決まるということが一番の問題なんです。いま言つたように、増えたところがあったり、減つたところがある。ゴタゴタして、とうとう、いつまでに持つて来いというときまでに決まらないところもありましたよ。沖繩だったかな。沖繩は直接行きませんでしたからね。応援も出ませんでしたから。そのころは船だから間に合わないんです。

**武田** 支部には、推薦候補者として、「時局にふさわしい人間」とか「定数以内」という申し合わせをしたら、全部任せるんですか。

**大室** 支部に推薦は任せるわけです。ところがその支部でも、スムーズに決まるところと決まらないところがあるわけです。三月三十一日を期限にしたんだけど、三十一日までに来たのが全部ではないんです。残つたのは、「四月」五日の午前六時頃までかかったというんだから。

**武田** その来なかつたところはわかりますか。

大室 わかりますよ。資料がありますから。一道二府一九県。

これを読んだ方が早いかもしれません「大室氏草稿を読む」。「三月三十一日の期限を前に、（これは三月三十一日までに推薦を決めなさいというわけですね）内申が出て来たのは、最初は神奈川、茨城、栃木と六県あつたんですね。これは三十一日の第一回の候補者銓衡特別委員会を開いて、検討の結果、推薦候補を決定し発表を行なった。引き続き二日には山梨県ほか四県、三日、四日には、青森県ほか八県の推薦者を決定したが、約半数の道府県分が残っていた」。やっぱりなかなか決まらなかったんですね。「四日には選挙公示が行なわれ、立候補者の受付も始まっていた」。おかしいですよ。「四月」四日に公示があつてから推薦を決めている。いまとは全然違うからね。われわれも最初は勘定がよくわからなかったんだ。三十日に投票ということだけははっきりしているでしょう。決まらなければいけど、四日には公示が行なわれるから、それまでに決めなければいかなんという事で、後から出て来た。四日夜の十時半から推薦決定をやつて、朝の五時までかかったというんです。偉い人たちが、大したものですよ。やっぱり、多少入れ替えなんかがあつたのかもしれないですね、時間がかかるという事は。「特に定数に対して増減の内申のあつた大阪、兵庫、新潟、島根及び沖縄の五府県については会長一任として、特別委員会の最重要案件の作業を終了することとした」というから、そういうこともあつたんですね。

最後に沖縄を除いて全部決まるんですが、沖縄は内申が来たら、それを認めてやろうということで、待つていたというところですね。ただし、四六六名を推薦したことになっているでしょう。ところが増えたところと減ったところがあるから、この通り当選しても、四六六名にはならないわけですね。ただし、増員区は十二区なんです。それから減員区は九区。その増員区と減員区の結果について調べたものもあります。

この中で一番の問題は、最後のことで、先に言つたらどうかと思いますが、選挙結果で一番負けたのは青森県なんです。青森県は一区、二区とあるんですが、定員三名ずつなんです。一つの減員一区は、三名のうち二名当選したんですか。たいてい、からんで難しいのは、前職というか現職ですね。それと新人との問題なんです。

武田 立候補は自由なわけですからね。推薦されなくても立候補することはできるわけですね。

大室 できるわけです。だから立候補者は多いですね。

武田 千何名になるんですね。

大室 ですから、推薦以外で当選したのは前職が多いですね。

武田 推薦候補、非推薦候補で、何か覚えていらつしやる方、印象に残つていらつしやる方はいらつしやるか。

大室 ずいぶんいたんですけれどね。われわれはどちらかというと、新人を重点的に応援していましたね。

武田 それは、翼協全体として新人を応援するという雰囲気だったんですか。

大室 いや、そういうことは言いません。それは言えないけれど、弱い者を応援する。この推薦をするときにも、翼協の四六六名のうち、新人が二一五名、現議員が二三〇名、元議員が二一名なんです。現元合わせて二五一名ですから、新人より多いんですが、どうしてこう多くなつたかという、大麻さんだの前田米蔵さんがいて、推薦のときに頑張ったものがあるけれど、いざ本番でやってみると、片方は選挙上手です。「前に選挙を」やっていて、地盤を持つていられるでしょう。新人でも、名前の売れている有名な人はいいけれど、そうでない人はとても太刀打ちできない。そこで銓衡の段階で、当選するというに相当重点が置かれることになった。そこでこれ「現・元議員」が多くなつたんです。これは間違いなんです。それから、頑張りもあつたでしょうけれどね。

実際に秤にかけてみて、当選可能だということになると、片方は地盤を持っていますから。この前の選挙でこれだけ取っているし、落ちたってこれぐらい。それを応援すれば大丈夫だと。だから全体的に現議員の方が強くて、当選の結果もそうですね。現職は何名当選しているんですね。

武田 現職の当選は二四七ですね。

大室 全部で、ですか。非推薦は何名かわかりますか。

武田 非推薦が全体で八五名で、現職は四七名ですね。

大室 そうしたら、八五の半分以上でしょう。結局、この推薦のときに、東京でもそうですが、革新系で常識のある人がいるじゃないですか。河野「密」さんとか、杉山元治郎とか、松岡駒吉とか、いろいろいましたね。ところが東京一区は河野さんでしたか。東京の支部長は平生鈺三郎さんで、平生さんはずいぶん推薦したんだけど、なかなかうまく行かない。本人も最後には断わったのかな。そういう人が何人かいましたね。

それからもう一つ、現職と新人の場合、トップ当選は新人の方が多いんじゃないかと思うんです。これは調べていませんが、比較的多いんです。ただ、当選率から言えば、現職の方が強いですね。

武田 先生が新人を応援するという理由は何なんですか。

大室 やはり政治を改革しようというつもりがありますから。

武田 最初のころにおっしゃった、政界を刷新するというのも同じ意味ですか。

大室 そのころは「改革」「革新」という言葉が、新聞を見てもずっと出ていますよ。

武田 「革新」ですね。

大室 改革ができそうだ、ということですね。われわれはそういう印象じゃなかったんですね。少しでもよくしようということがあった。事務局の連中はみんな一癖ありそうな人で、そういうことがあると思う。そのころ現職の議員は、少し霞んでいましたか

らね。斎藤隆夫以来。それから軍部の圧力というのは、選挙のときには何も感じませんでした。むしろこちらが、大将、中将、少将の閣下をうんと使いましたからね。

武田 そうですね。気分がいいですね（笑い）。

大室 厳しいぐらい、気の毒だけれど、次々とやるんです。出先はどうなったことかわからないけれど、心配だけれど、普通なら閣下というのは大変なんだ。それはずいぶん協力してくれましたね。ただ、いまの官憲の問題などがありますけれど、よく情勢を調べてはいたね。どこでもそうじゃないかと思う。落ちそうだから、落ちそうではないとか。

清水 それは連絡部ではなくて、警視庁、警察なんですか。

大室 東京の場合は警視庁。それで東京は東京で情勢を見ているやつがいるんです、こっちの職員でも。そういうのは警察に行つて聞いたりもするでしょうけれど。そんなにどうこうということはない。

もう一つは、さつきも申しあげましたが、頭から言つて、こいつはやつちやいかんとか、これに投票しろ、なんていうことはできるものじゃないですよ。私なんかもちょうど学校を卒業するとき、みんなアルバムをつくりますね。そのときに、文句は覚えていないけれど、「ピストルを向けても友情を奪うことはできない」と書いている。ドイツの学者か何かか言っていますよ。これと同じなんです、選挙は。金を積んでやっているといっても。金をもらう人は、千葉県だの山梨県に行くと何かくれなきゃ投票しないだけだ。

武田 そうだったんですか（笑い）。

大室 いまでもそうですよ。いや、最近は一。だって、「今度は何が来るの」といつて待っているんだから。だから捕まるときはいっぱんに捕まるでしょう。特にひどいのは千葉と山梨なんだ。買取するとかいろいろありますけれど、そういうことはあまりやり

ませんね。この選挙のときには、そういうことはあまりなかったんじゃないですか。そういう違反はあまりなかった。形式犯はあったでしょうけれどね。

**武田** ただ、中林さんの談話にもありましたけれど、やっぱりお金は本部から持っていくわけですね。一つは、内務省からお金が出たんじゃないかという話もあるんですが、臨軍費から出たんじゃないかという話もあるんですね。そのへんは、先生何かご存知ですか。

**大室** これは本当は極秘だから言っちゃいけないんだけど、このあいだ連絡部の人に聞いた。私も何か資料を持っていたと思うけれど、見つからなかったけれど、ある会社の、会員になっている人ですが、領収書があるんだ。五万とか十万とか。だからそういう人がみんなお金を出したと思うんですよ。政府は政府で、勝手に調べているところはやるけれど、非合法的なものを出せるわけがないでしょう。だからこの会員名簿を見ればわかりますけれど、みんなそういう財界人、その地域ごとの有力者が入っているんです。それは一つか二つだけけれど、ちゃんと領収書を見た。私は一つ持っていたと思うんだけど、王子製紙のものだったけれども。藤原銀次郎さんのところ。

**武田** 藤原銀次郎さんのところですね。

**大室** だからみんな、そういうのは出してたんですよ。金のこととは全然わからないし、また金を使ってどうこうというのではなくて、金をやって、そうすると文書をまた出すんですよ。だから最終的に全候補者に対して一万通の手紙を出すようにやっているわけだ。最初は当落線上にある者を応援していたけれど、やってみなければわからないから、全員に出すという指示が出ています。それは連絡部のおしまいの方に何か書いてあります。

**清水** 「大室氏のペーパーの項目として」「終盤戦における連絡部への指示事項」というのがありますね。

**大室** これは十日ぐらい前かな、終盤戦において連絡部に、こういう指示事項が出ているんです。「連絡部長から出先の班長に対して、新人一人当たり五千枚の推薦状を発し、その後若干増配のことを目論みつつありしが、結局一律に新人一万枚を追加することとした。先般現物を送付済み」。だから印刷したものを出したんです。宛先は向こうで書かなければしょうがないですからね。それから「最近さらに当落の境にある候補者、新人と限らず、一選挙区、一人当たり一万枚にあたる費用を支部に交付し、支部は最も有効適切と認める方法、すなわち推薦者名等は団体名、個人名と支部の決定に一任す。故にこれを利用する者として、二十一日支部に通告かつ送金したり」と書いてある。「本件の処理法は支部長に奨進したるをもつて、これが最初を期待し」なんて書いてある。それからこういう言葉が書いてありますね。「視察員（というのは情勢視察員、つまり応援弁士）の状況は逐日交渉難となり、今日においては策尽きたるの感あり。然るに、現地の焦急は逐日増増の傾向なるをもつて、本支部間の食い違いが一層目立つこととなる。なにとぞ実践部、懸命の努力を支部に対して然るべくおとりなしをいたし」と書いてある。これはこっちが相当まいっているときなんだ。

**武田** そうすると、翼協が応援する候補者がいて、自分で勝手に非推薦で出る候補者がいて、ということになるんですか。

**大室** そういうことはないですよ。みんな基本は、支部で当落が怪しいとか、支部の情報、こちらが見た情報、それから第三者情報、いろいろ集めたものでやるでしょう。だからだいたい危ないというのは一致しますよ。

**武田** つまり、候補者の方では、翼協の側が推薦した候補者が選挙活動をしていますね。

**大室** ええ。

**武田** あとは非推薦で選挙運動をしている人もいますね。

大室 ええ。

武田 非推薦で選挙運動をしている人の情報は入ってくるんですか。

大室 当落を見るには相手を見なくっちゃ。両方を見て、ここまでは強い、ここではどうかということになる。それは、こちらだけの情報ではありませんから。定員四名に対して十名出ていれば、この五名ぐらいが当落線上で、あとは無理だとか。それは後半になりますとだいたい見当がつかますね。

武田 それは連絡部の人が情報を入れてくるわけですか。

大室 ええ、それから支部もちろん入れてくるんですよ。支部だけでは駄目でしょう。だから第三者が。もっと怪しいところは、またこちらから送り込んでいるわけです。

武田 そういう情報は、一般の選挙でもいろいろスパイみたいな者がいたりするじゃないですか。票読みをするのに。

大室 スパイということはないんですが、選挙というのはいろいろですから。自分の選挙区というのはそんなに広くないでしょう。だからそれをわかるような人というのは、どこの地区はどうなっているか頭に入っていないければ駄目だ。それを総合して見ることが大変なんだよ。だからいま一番大変なのは都会の選挙なんです。第三者みたいな、どっちを向いているんだかわからない人が多いから。

武田 例えば地区で応援する人も、推薦候補を応援する人もいれば、非推薦候補を応援する人もいるわけですね。

大室 だけどこのときになりますと、地区でもって非推薦者でいいというのは、たいてい現職でしょう。

武田 いいというのは、当選しそうだということですか。

大室 そうそう。それは地盤と看板を持ったりしているでしょう。それからもう一つ、新人で何人か当選していますね。両方合わせると二百名近くの新人が当選しているわけだから、その人たちは

それぞれ、こちらから言えば推薦落ちだったような感じの人が多いんじゃないか。

これは私は調べただけだけど、政党で一番入ったのは東方会でしよう。同じ政党でも、東方会は右翼で、中野正剛だからね。そういう連中は、ある程度共通点があるじゃないですか。だから他の社会大衆党とかいろいろ加わるけれど、その他の政党、要するにこちらの推薦の者以外で、非推薦で出たところでは、東方会が一番取っています。あとはほとんどが無所属ですよ。それから考えますと、東方会なんかは極端なことを言うから、こちらではないけれど、考え方としてはそんなに反対の方ではないでしょう。左じゃないから。

武田 東方会なんかまさにそうですが、非推薦候補の中にも、言っていることはあまり推薦候補と変わらないと言われているんですね。

大室 それはあとになって、翼政会になってからどうなっているか、私もよく知りませんが、見ていると、やはり時代の流れで。それから反対派でも大物はみんな入っているでしょう。例えば鳩山一郎さんとか、そういう人は非推薦でもみんな当選していますね。だからいろいろなことがあるんでしょうけれど、最終的に当選率が八〇%ぐらいですか。三八一ですか。八〇%というのが最上の目標だったと思いますよ。

武田 すごくですね。

大室 投票率が八〇%を超えたというけれど、そのころはそんなにびつくりすることではないんですよ。その前だってそんなに違わないんですから、八〇%近く行っているんですから。有権者が少ないもの。男だけで満二十五歳以上とかと言うんですから、そうなると思う人ばかりですよ。市町村の小さい選挙なんか九〇%なんてざらにあつたんですからね。勘定ができるんですからね。

武田 投票のときには、ある程度、投票しなさいという動員をか

けるんですか。例えば翼壮とか、町内会とか隣組とかを使って、みんな投票に行きましようというようなことはするんですか。

大室 投票しましようということは、きつと常会ではやっていないと思うんだ。だけど、選挙になって翼壮ができたところで、力が余っていますから。というのは、特定の候補者は言わないで、「こういう非常時だからいい人を選びましよう」ぐらいのことはやっている。ここ「府中」なんかでやっているのを見てみると、私はいけないけれど、みんなそういうことですよ。投票に行きましようという。投票に行きましようというけれど、有権者が少ないですから。そういう人がそこ「常会」にきているかどうかわからないんだ。たいてい女子供が多い、ということになっちゃうんです。だけど全国的には、この選挙のときなんかそうですが、先生方にご記憶いただきたいのは、戦時中であって、わりあいここまで来ているところなんですよ。その解釈が何か違うから、いろいろなことになっちゃうんだ。

清水 われわれはどちらかというと、その解釈の方ですから。

武田 私もそのつもりで聞いているんです。

大室 先生方はわかりですが、これ『資料日本現代史』を見ていても、もつともらしいことを言つて、前提が、頭からやつて、憲兵がどうしたとか、警察官がやつたとか。

武田 これは全然「私たちと考え方が」違う人ですから。

大室 警察官がやるなら、警察官がなればいいじゃないか、と言いたくなる。そんな甘いもんじゃない、選挙は。

武田 その選挙のときに、いろいろな人の回想録とかを見ると、やっぱり陸軍が逆に選挙を妨害したという話があるんですね。つまり自分の推薦したい人を当選させるように、推薦過程とか、選挙のときも妨害したという回想があるんですね。そういう例はお聞きになったことがありますか。

大室 全然聞きません。私も選挙は有権者としては初めての時で

知りませんけれど、そういう情報は全然ありません。たいてい、いろいろな情報が入ってくるんですけれどね。

武田 村田五郎さんについていらつしやいましたね。ちょうどこのころ群馬県の知事をやっていたらつしやるんですね。村田さんの回想録にそういうことが書いてあるんです。

大室 なんて書いてありますか。

武田 連隊区の司令官が、自分が推薦した候補と違う候補を立てて、ずいぶん選挙に干渉したというようなことを話していらつしやるんですね。そういうお話は、本部の方に来ているかな、と思つたんですが。

大室 いや、聞きませんでしたね。それは中にはいろいろあると思うんですよ、見ているとね。東京なんかでも、ずいぶん細かく情報を出していると思う。最初に適格者の情報をね。これはあとから見たんだけど、候補者になって、これは適任であるとかなんとかという内申を出しているでしょう。その角度がどこかというと、一般的でなくて、彼らが見ての角度だけれど、ほめている人はみんなやりはしませんよ、逆に言えば。選挙というのはある程度やりたい人がやるからね。

武田 出たい人より出したい人、ですね。

大室 この場合にはお願いして出した人が相当いるわけです。そういう人はたいてい当選。それが政治家として力があるかどうかは別ですよ。

## ■ 候補者たちを回顧して

武田 それでは少し、推薦候補者、非推薦候補者で、印象に残っている方のお話をしていただけませんか。推薦、非推薦を問わずに。

大室 東京の場合ですと、福家さんなんていうのもいましたが、



われわれは河野さんなんていうのをずいぶんあれしておりましたね。それからいつも選挙で強い前田米蔵さんなんかもあれでしたけれど、これは当然勝てるということでした。東京の場合、牛虎さんと言っていたけれど。

清水 牛塚虎太郎ですか。

大室 牛塚虎太郎なんかはトップで当然でした。それからやはり鳩山さんは強かったですね。これはトップですね。

武田 鳩山さんは人気がありましたか。

大室 それはまだありましたよ、このころは。ただあの方はおとなしいからね。鳩山さんというのはまた特別ですからね、大したものですよ。いろいろな中で、これはそうかな、と思ったのは第五区から出た四王天「延孝」という陸軍中將です。これは航空協会という、昔から航空関係の会長をやっている、航空の方の将官だったのかもしれないね。これは日本一だったんじゃないですか。七万八千「票」とか、そのころ取ってね。

武田 このへんは第七区ですか。

大室 いえ、ここ「四王天氏のところ」は第五区です。七区は、津雲「国利」さん、八並「武治」さん、坂本「一角」さんだったんですけれど。

清水 この府中地域は七区ですね。

大室 ここは七区ですが、私も初めて来て、やっただけです。そのときの投票のお話をしましょうか。郡役所の隣に二階建ての役場があったんです。

武田 いままでいうとどの辺ですか。

大室 いまはありません。こっちの小さな役場ですから。

馬場 いま府中の「郷土の森」に建物は持つて行っているんです。

武田 どのへんにあったんですか。

大室 忠実屋のところになるわけですね。

馬場 甲州街道の一本北側ですね。

大室 そのころ行くと、私も初めてだったんですが、二階が投票所なんです。普通は議場に使うところでしょうね。そこに行くと、日の丸が二本こうなっていて「二本の指を交叉させる」、階段を上がる場所に紅白の幕が張つてあるんです。そして上に行くとき、投票用紙が和紙の厚い紙なんです。それで縁がついているんです。それで筆で、墨で書くんです。それで注意されたことは、「一滴を落としても無効になりますよ、これ「縁」からはみ出たはいけませんよ」という。筆で書くんですからね。

武田 それはそのときだけ特別なんですか。

大室 普通の投票用紙があるでしょう、緑色の枠ができていて、枠から出ちゃいけませんという。余計なことを書いてはいけませんという。「滴を」落としても無効になるおそれがありますから気をつけてくださいという。それで筆で書くんですから。あとはそういうことはなかったですね。でも和紙で、厚い紙でしたよ。こういうような紙「コピー用紙を指す」ではなくて。

清水 昭和十七年当時で、ですか。

大室 そうです。

武田 物もないのに。

大室 それは逆に言えば、こういう物「コピー用紙を指す」の方がいいでしょう。手漉きの方があるかもしれん。それで、立会人は町会議員なんです。紋付き袴で怖い顔をしているんだ。そのころになると、府中だけの資料があったから、書いておいたんだけれど「草稿を読む」、「午前三時三十分が一番乗りをした……」。

武田 先生がですか。

大室 いや、私じゃないですよ。これは地方新聞に出ていたんです。一番乗りの人は、午前七時からの投票なのに、午前三時三十分が一番の席をとる。これは陣取って、いまで言う座り込みをやった。その人が岡野政吉、二番が島田清次、三番が海老沢栄一なんて、みんな知っているような人なんですけれどね。午前中は長

い行列もできていた。私は昼近くに投票に行った。これは、やっぱりおごそかなあれ「雰囲気」がありましたね。

**武田** そのほか、候補者はどうですか。その前に、先生はどなたか応援されていた方はいらつしやつたんですか。

**大室** 特にそんな余地はありませんけれど、七区の場合は、津雲国利さんと八並武治と坂本一角というのが出ていたんです。どちらも前職でしたが、坂本一角さんというのは拓大の講師か何かで、柔道五段か何かなんです。これが一番危ないというので、一番弱いやつを応援しようというので、初めて書いたのがある。なぜかという、そのときに社大党の中村高一つて知っているでしょう。私もよく知っているんですけれどね。これが次点で、あとで見ると千票違いぐらいで、中村さんは「定員三の」四番で落ちているんですね。たしかに危なかったというのは間違いがない。「坂本一角」一万七千と、「中村高一」一万六千で、ちょうど千票ぐらい違うんですね。あと「八並武治」は二万票以上取っていますから。津雲さんが三万一千ですね。津雲さんは、先生方もご存知の通り、翼政会になつてからずいぶんやるんです。

**武田** この当時から有名人ですか。

**大室** 活動家ですからね。活動家ということ、実力者でもあるんですよ。そのころはまだ若かったしね。

**武田** 津雲さんとは何かご関係がありますか。

**大室** いや、直接はありません。

**武田** 中村さんとはどういうご関係なんですか。

**大室** あれは学校の先輩であるけれど、そうじゃなくて、このときは現職でしたね。というのは、あの人は酒屋の出なんです。西多摩の酒造家なんです。シオヅルという酒で、それで知っているわけではなくて、初めて社大党が三多摩に出て来たときに、われわれの仲間ではないけれど、工場に勤めている人なんかの中村さんを応援したんですよ。それで私なんかシンパと思われていたん

じゃないのかな。そのときはまだ有権者じゃありませんから。そのあとで中村さんが当選しますね。中村さんもうそういうわけか知っていたし、私も知っていました。社大党としては、非常に常識のある素晴らしい人でしたよ。

**武田** 中村さんは最初は農民運動ですか。

**大室** 農民運動はあまりー。

**武田** 労働運動ですか。

**大室** 労働運動ですが、あの人は社大党内閣がきたら警視總監に擬せられていたんです、そういうわけだか。非常に穏健な人ですね。

**清水** このとき最初のころは児玉「九十」先生のお名前も上がってきたようなんですが、児玉先生は全然ー。

**大室** 児玉九十先生は「政治はやりません」という。みんなそのときに、先生に出てもらいたいというのがずいぶんあったんです。うちのおやじなんかもやっただけで、先生に断わられちゃった、なんてあとで聞きましたけれどね。児玉先生はそのころはいろいろな意味で非常に信頼されていたんです。あのころ、「主婦の友」か何かに体験教育といいますが、子供のことにについてずいぶん連載していた。非常に評判が良かった。

**清水** では推薦したい人ということで、出て来たんですね。

**大室** 出ていますね。

**清水** そうするとお父様は結局、どなたを推されたんですか。

**大室** うちのおやじは、決まっちゃってこっちではないけれど。いまの推薦するときには、そういう空気があったんです。終戦後もあったんだ。児玉先生に出てもらおうという話だ。そうしたら児玉先生は公安委員長に「推される者として」つかまっちゃった。最初の公安委員長をやられましたね。

**武田** このときの、小川孝喜という方はご存知ですか。

**大室** それは府会議員です、後で衆議院に入るけれど、落ちた。

これは立川の人です。元町長だったかな、立川ではなかなか名門なんです。

**武田** あと東方会で、佐藤吉熊という人はー。

**大室** それはその他大勢ですね。これはよく、何回も出ていましたね。このころは、われわれもそうなんだけれど、有名な人はほとんど名前だけを知っていたり、いろいろな行動を知っていますよ。右翼でもね。これを見ると、児玉誉士夫さんとか、中野正剛とか、橋本欣五郎なんかもやっているでしょう。ああいうのは精動時代から相当注目していましたからね。いい、悪いじゃないくてね。それからいまの革新系の連中も、われわれはすごいぶん注目していました。みんなそういう連中も当選しているでしょう。

**武田** このとき岸信介が出ていますね。何かご記憶はございますか。

**大室** そのとき同じ大臣をやった井野「碩哉」さん、農林大臣。岸さんは、私どもは精動時代から聞いているんだけど、新進官僚の総裁だった。そのころ、新官僚の親方は後藤文夫さんだったんですよ。それで岸さんが伸してきた。岸さんは軍部と良かったんですね。実際には、この選挙の裏を見ると、後藤さん系が中心になっている。橋本清之助はじめ、滝正雄とか、四人ばかり幹事が出ているでしょう。みんなあれは後藤さん系だ。後藤さんは前には出て来ないけれど、メンバーにはなっていますね。わりあいには穏健じゃなかったかな。

**武田** その後ろでは武藤章とか軍務局長がずいぶん関与したという話もあるんですね。

**大室** 軍務局長はそういう役だから、政治的なことをやるわけだけれど。その勝負は推薦のときでしょう。

私は、よくわかりませんが、終わってから翼政会になるときに、翼政会に入らないかなんて言われたことがあったけれど、「私は酒屋でやっていたから、臨時に応援したんだから」と言って断わ

った。一部事務局のやつで行ったのがありますが、そういうあれはなかったですから。

ここにもありますけれど、翼賛会の議会局なんていうのは、私はほとんど知りません。辞めちゃいましたからね。第三者的に見て、あのときには、この前も申しあげたと思いますが、中央協力会議というのは議会と同じような体制なんですね。それよりむしろ各層、職業とかなんとかを網羅して、非常にうまくできていたと思うんです。そういう中で、最初にやった協力会議なんてずいぶん活発で、いろいろ提言が出たりしたでしょう。私はあれだけで、すぐ辞めちゃったから知らないけれど。

この前戦争のお話が出ましたが、十二月六日に中央協力会議が招集されていたんです。私もすぐ飛んでいった。この前申しあげなかったけれどね。それで東京会館に行つて傍聴したら、東条さんが出て来て、宣戦布告したからという。そのとき行きました。

**清水** 十二月八日ですか。

**大室** 十二月八日の朝ですよ。なにしろ行きました。この前お話をし損なつた。仲間もいたせいかもしれないけれど、東京会館で傍聴していました。それでみんなと話しました。

## ■翼協時代のエピソード

**武田** そのほかご記憶にあることはありますか。

**大室** エピソードはたくさんあるんですよ。

**武田** では保利「茂」さんのお話を。

**大室** 保利さんはそのころ、上の方から私のところに持ってきて、これをどこかに使ってくれと言ってきたわけだ。使ってくれと言うと悪いけれど。会ってみたら、こんな大きな名刺なんだ。普通の名刺よりも大きいんですよ。それで「保利茂」しか書いてないんだ。だからよほど偉い人だと思ったんだ。頭は少し白い。そ

れで、派遣をするときに旅費が一等になっちゃったわけだ。そうしたら会計の方が気がついて、部長の方から、なぜこんなのを一等にしたんだと言うけれど。

武田 名刺が大きいからですか（笑い）。

大室 彼は佐賀県なんです。それで佐賀県から福岡の方に何日か行ってもらったんですけれどね。そして同じような、ここには書いていないけれど、失敗したのがあるんですよ。熱海か何かにやったやつで、もっともらしいことを言うので「旅費を」一等にしました。一等というのは、東海道線とか、いくつかしかないんですね。二等はあるけれど。それで叱られたことがある。

もう一つは、そういう意味では赤旗の編集長をやっていた、なんていったかな、木下半治。彼を困ったときに、頼んだやつが若いやつだったからそういう傾向があったのかどうか知りませんが、頼んだやつが、木下半治のところに行つて、転向したこともあったから、頼んで、山口県に応援に出すことになった。こっちも、これが赤旗の編集長とは知らなかったんですね。そうしたら上の方に会計から回ったら、「なぜこんなのを遣るんだ」といって、えらい怒られたんです。会計の方でチェックするのでね。そうしたら、交渉に行つたやつが蒼くなっちゃったので、しょうがない、おれが行つて断わつてやると言つて、幡ヶ谷でしたが、行きました。

お金を持つていってもおかしいので、菓子折一つ持つて飛ばして行つたんです。その前に旅費だの切符なんか持つていく「はずになつていた」わけです。行つたら、大きな家ではなかったけれど、奥さんが出て来て、「なかなか来ないから断わられやしないかと思つた」といって、ニコニコして奥のほうの木下さんに合図しているんだ。「ところが、実は急に中止になりました」と言つて、これは辛かったですよ。それを置いて急いで逃げてきたんですけれどね。そういうことがあった。それは赤旗の編集長に気の毒なことをした。

それから香椎浩平というのがあって、陸軍中将です。例の戒厳司令官です。この方はいぶん温厚な方で、一般の人もよく知っているものだから、よかつたんです。ところが後半もいぶん遅くなつてからですが、大阪の方で、こちらを通さなかつたんだけれど、会員が行くことになつていて準備していたらしいんです。これは個人の応援だろうと思うんですね。そうしたら急に都合でできなくなつて困つて、これじゃあ宣伝しているのに困るからなんとかしてくれと泣きが入つたんです。それで困つた。もう手持ちがないときですからね。調べたら、香椎さんが奈良の方にいることがわかつたんですよ。それで自宅に聞いたら、奈良ホテルにいつもお泊まりになってますという。これが特別電話の威力で、すぐに電話したところが、「おれの方も予定があるんだ」と言うんですよ。だけど考えてみたら「こちら」も困つた。それで「うちはこういうわけで困つていますから、明日現地のを遣りますので、ぜひ話を聞いてやつてくれ」と言つた。そしてすぐに大阪に電話して、「いま香椎中将が奈良にいるから、すぐに頼みに行け」と言つた。あそこは電車で行つてもそう遠くないですからね。それで行つて、やつてくれて助かつたんです。そういうトラブルみたいなこともいぶんありましたね。

派遣弁士、情勢視察員の中で変わつてゐるのは文士で、菊池寛さんと久米正雄なんかいりますよ。吉川英治ぐらいではまだお呼びが出なかつた。菊池寛はあまり進んではなかつたけれど、やつてみたら面白かつたんじゃないのかね。それから久米正雄さんは馬鹿に調子に乗つちゃつて、二回行つてもらつたかな。一回目は、まあしょうがない、戦争中だからつき合うなんていうつもりでやつたんでしょうけれど、やつてみると反響があるから。清水 吉川英治は、翼賛選挙の最初の方の文章を何か書かれていましたね。

大室 吉川英治さんは、東京市会議員のときに頼んだんです。そ

うしたら、応援には行けないけれど、応援の文章を書いてやろうというので、何か書いてくれた。それを私は持ってくれば良かったと思った（笑い）。そのころはそういうあれはなかったからね。それは出しましたけれどね。

**武田** そのほか翼賛選挙で、先生のご記憶にあることはございますか。

**大室** この選挙は、全国区を対象としてやったんですが、いまと違って連絡が大変だったということですね。それから行くにも汽車しかないわけですから。いまのように新幹線はありませんから、非常に大変だったということがありますけれど。そういう中でよくやったということじゃないでしょうか。私がではなくて、本部がですね。本部の中にはいろいろな人がいましたけれど、最後には本当に総動員で、みんな出してしまつて、主な人がいなくなるぐらいでした。

もう一つ、私が一番思つたのは、時局ですね。結果については、誰か書いている人がいて、こちらが取つたのが一千いくらで、片方が三十何%。推薦候補が取つた票が、有効投票の六五%ぐらいでしょう。だから三十何%あつたということは、それだけ反発が強かつたんじゃないかというけれど、当選した人の内容を見ると、そういうことはありませんね。さつきお話がありましたとおり、前議員が多いわけでしょう。それは、たしかに軍部に対する反発や何かはあつたと思います。それはあつて当たり前ですね。それから見ていると、推薦候補が取つたのは、私どもが見たところでは、本当のことをいえば予想以上で、良かった。ただ戦争に負けてしまつたから、それがどれだけの効果があつたかということとはよくわかりませんけれどね。

**武田** なかなか難しい問題ですね、どういう効果があつたのかというの。

**大室** 翼政会になつてもですが、その当時の議会の様子かどうか、

ということですね。翼政会に対するあれなんかも多少は持っていますよ。

**武田** 先生は翼政会の方はほとんどタッチされなかつたんですね。  
**大室** 全然やつていません。そんな話が出たけれど。最初はこういう案が出ていたんですよ「翼政会のいくつかの名称候補を書いたリストを示す」。

**武田** ほう、知らなかつた。先生はこの準備会も全く関係ないですか。

**大室** 全然、翼賛政治会は行きませんでした。

**武田** 翼協は選挙後は解散するということになつていたんですか。

**大室** 終わつたらすぐ解散ということは決まっていました。

**武田** それは最初から決まっていますか。

**大室** 決まっています。なぜかというところ、これをやったときに、私なんかもまた事務局にでも行くんじゃないかと思つていたけれど、私は最初から「行きません」と言つておつたんです。同じようなメンバーでやるんですね。結局議会というものになると、また感覚が違ふんですね。こういう案「いくつかの名称案」が出て、結局、「翼賛政治会」になつたんですね。

**武田** いろいろな候補があつたんですね。永井柳太郎などは、翼協をそのまま政党にしようというふうに思つていたと言われるんですが、そういうことは感じたことはありませんか。

**大室** 翼壮の人が何百人と当選しているというけれど、翼壮というの、そのころ残つた人の有力者なんですよ。若い人はみんな兵隊に行つていまして。まごまごするとみんな徴用になつたりする。そういう人たちが、こういう非常時でほかに勤めても、自家でやつたり農家をやつたりしている人は、翼壮以外にやることがないでしょう。当然結集してくるわけでしょう。そういう中で、働き盛りの優秀な者がいるんだけれど、政治力を大いに使つたというのは一部だと思ふんです。地域によつてそういうことが

あるんですね。

武田 翼賛政治体制協議会を、そもそも政党にしようと考えていた人もいたと言われるんですが、何か感じられたことはありますか。

大室 最初から、終わったら解散することになっていますからね。これは政党的な考えはなかったでしょうね。だからその次にあるんでしょう。

これはあとで私どもが東京市であるんだけど、結局議員をいいのをつくるでしょう。そうすると慣れたやつにみんなやられちゃうんです、取られちゃう、議会に入ると。

武田 議会に入ると、ですか。

大室 例えば、これは先に進んでしまいましたが、東京市の選挙をやった、これは六割五分ぐらいしか取れなかったんです。新人や何かには真面目な人たちが出たんです。その人たちを、古い派閥の人が集めちゃった。こちら「古い派閥」の大将の丸山鶴吉さんという、警視総監をやったり貴族院議員の人、そのころは市会議員と両方できるんです。それが大将だった。「新人議員は」真面目でしょう。片方「古い派閥」はそういうの「新人」を連れてきて一杯飲ませたりしてね。東京市というのは疑獄が多かったり、いろいろあつてね。

武田 伏魔殿と呼ばれていましたからね。

大室 今度は良かったなと思ったら、なんのことはない、二日ぐらい経ったら、みんなそっちの会合に出ている。市会議員は、東京都政ができるとおしまいですからね。

武田 その話は、今日は時間が過ぎているので、また次回ですね。

大室 その資料もまたございます。

武田 今日はこのぐらいにしたいだいて、次回の予定ですが、どこまでお聞きすればよろしいでしょうか。一つは東京市の翼賛選挙ですね。

大室 翼賛市政協議会というんですが、それもいまの話で、最初に「その仕事に」つかまった。こっちは全然そういうつもりがなく、これ「翼賛選挙」が終わったので、熱海でわれわれ実践部の若いやつが一杯やっていたんです。そうしたら電話がかかってきて、すぐに来てくれ、という。

武田 それでもう駆り出されたんですか。

大室 いや、それは断わったんです。だって私はどこにもあれがないんだから、呼びつけられる覚えはない、といったんです。そうしたらまた来て、「大室さんが来るのを待っていて、鉛筆だの紙を買っていいか」と言うから、「おれはそんなこと知らないよ」と言っただ。われわれが使っていた若いやつなんか「来たけれど」。それに疲れていたし、私の方は五月五日がお祭りでしょう。

清水 大國魂神社のお祭りですね。

大室 ええ。四日、五日、六日ぐらいは、いなければ困る。家に帰ってきて、休んでいたんです。そうしたらまた言ってきて、しようがないからおやじに言ったら、「まあしょうがないや。ひと月ぐらいやってやれよ」と言うので、また泊まり込みでやったけれど、これはもう疲れて駄目でした。だけど、最初は不思議なんだ。言ってきたやつが「鉛筆だとか書類を買っていいですか」と言うから、「冗談言うなよ、おれはそんな話は聞いていない」と言っただ。

武田 ではその話から今回はお聞きして。

清水 それから終戦ぐらいまで。

武田 東京市のお話を聞いて、そのあとセレベスに行かれますね。

大室 それは参考になりますか。

武田 ええ、それも含めてお話を聞かせていただいて、終戦の頃までのお話をまとめてお聞かせいただくということでもよろしいですか。

清水 復員ぐらいまで伺えればいいですね。

大室 それは珍しい話があるんですよ。軍政官としての話は大したことではないけれど、実際にいまそれをやっている方もいらっしゃるけれど、珍しいと思うんです。

武田 その話を次回まとめて伺いたいと思います。

大室 よろしいですか、何をしゃべっているのか。こっちは「資料を」持つてはいるんだけど、系統立てて話ができないので、本当に申し訳ないと思うんですけれど。

武田 では次回はそういう予定でお話を伺いたいと思います。どうもありがとうございました。

(以上)

# 大室政右 オーラルヒストリー

## 第6回

日 時：2003年1月28日（火）

14：00～16：20

場 所：大室政右宅（府中市）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

武田 知己（政策研究院特別研究員）

清水 唯一朗（政策研究院リサーチアシスタント）

馬場 治子（府中市郷土の森博物館学芸員）



## ■ 東京市翼賛市政確立協議会へ

大室 ……これはお役に立つかどうかわかりませんが、考えてみましたら、いろいろと知られていないことがずいぶんありますね。

武田 われわれも、先生がなんでこんなわかりきったことを聞くのか、と思われることを聞くかもしれませんが、こちらは本当にわからないんですね、先生にお話をいただかないと。ですから非常に素朴な質問をするかもしれません。

大室 やはりいまになってみますと、知らないのがあたり前ですからね。それから、これまでいただいたもの「速記録」はあまり読んでいないんです。いただいた最後の二つは読み切っていないんですが、お話をした後に見てみますと、どうもこつちがぼけているな、という話が多いですね。また何かあったら、最後に追加的に総括的に、先生方からお話になっていただくと。

前回問題になりました、領収書があったという資金の話がありますね。あれなんかも、相当もらっていますね。私の友だちにそれを知っている人がいたんですが、その人も死んじゃったんじゃないか。それは女の事務員の人で、精動にいて、われわれもよく知っている人ですけれどね。その人が処理していたみたいですね。

もう一つは、このあいだもほかの話のときにしたんですが、本当の空襲の話はなかなかわかっていないんですね。

武田 わからないですね。

大室 東京大空襲なんかわれわれは知りませんが、最初に来たときの話です。このあいだも知っているようなことを言っている私より少し若いやつがいました。兵隊に行っていたからもっともらしく言うんですが、機種が全然違うんですね。あとから来た大空襲の方の印象が強いから。いや、本当にいろいろと迷惑をかけます。

武田 いいえ。先生、お話しされると元気になるんじゃないですか。お若いときのことを思い出されますし。

大室 なかなかいろいろなことが出て来なくて。

武田 それではゆつくり始めましょうか。今日は、東京市の翼賛選挙に関わられてから、終戦、復員の頃ぐらいまでを聞ければと思うんですが、先生の体調に合わせて、ゆつくりお話を伺えればと思います。

大室 「紙袋に詰まっている「市政協議会」の資料を示しながら」東京市の関係でとつてあるものが、ここにございます。あまりまとまてはいません。この前、これ「『皇都翼賛市政確立運動概要』（伊藤博編 東京市翼賛市政確立協議会・一九四二）、以下『概要』と略す」をお貸ししましたね。これは最後の概要で、小山「忠義」という人がつくったんです。実際問題として、やっていたことは、この前と同じですね。私どもは演説会関係、言論戦というのをやりました。もう一人、文書の方は植草平八郎というのがやっていました。最初は事務局を私にやらせるような話だったようですけれど。

武田 先生は、国のほうの翼賛選挙のお仕事をされて、東京市のほうもそのままおやりになったんですか。

大室 あれ「国の翼賛選挙」が終わって、「翼協が」解散しましたから、そのあとで熱海かなにかで、うちの実践部が打ち上げで慰労会をやっていたんです。そうしたら電話がかかってきて、「大室君、すぐに来てくれ」と言う。来てくれといってもこつちは一介の浪人ではないけれど、関係ないから、「そういうふうに呼びつけられる覚えはないんだ」といった。その日は一杯やったりしていたものですからね。中には怪我をしたりした者もいたものですから。

それで明るる日に電話をしてみたんです。そうしたら、「今度市の選挙をやるから、来て手伝ってくれ」と言うわけですね。い

ったん家に帰って、ふた月ぐらい休んじやったから、「忙しいから相談しなければ困る」と言ったら、「いや、なんとか」と言う。

その責任者は伊藤博さんです。この人が市の選挙の実際の責任者ですね。その下に小山忠義というのがいるんです。それで堀切善次郎さんが会長で、堀切さんは精動以来いろいろお世話にもなっているから、直接どうこう、ということはないけれど、面識もありますし、知っておりましたし、手伝ってくれと言うものから、結局手伝うことにしたんですね。だから最初の経緯というのはおかしいんです。いま言ったように、私は何も知らないのに、例の翼政選挙をやった連中が、半分でもないけれど、何人かやっているわけですね。それがみんな、私の指図を受けてやるんだ、というようなことを言っているわけですよ。私はそんなことは聞いてないよ、と言って断わったんですが、そのうち、いまの伊藤さんや何かも、なんとか手伝ってくれというものですからね。

武田 先生は最初いやだったんですか。

大室 もうくたびれていたんですよ。私のやり方は、いつも全力投球だから、ほかの人は知らないけれど、やるべくたくたになるぐらいにやりますからね。ところが堀切さんの名前が出ると、こつちも弱いんですよ。伊藤さんもそうですけれどね。事務局も何も「翼協より」ずっとこぢんまりしたものですからね。

武田 だいたい、事務局の人数はどのくらいですか。

大室 人数はこれ『概要』にも書いてあると思いますが。

武田 『国の』翼政選挙のときよりも小さいですか。

大室 もう全然規模が違います。伊藤さんにはずっと昔からご厄介になっている。『概要』の事務局員名簿（一五二―一五三ページ）を示して「このへんに書いてありますが、全部でこれだけですよ」「約二十五名」。伊藤さんは全体的な応援だとか、「推薦候補が」弱いとか強いとかを含めて、総対的な指揮を執っております。それで実際の下の方の事務については、君たちでやって

くれ、ということだったんです。伊藤さんそのものは、私と一緒にそれをやらせようと思っていたらいいですね。ところが先に事務局の方がワーワー騒いでいて私待ちで、どうするのかということになっていた。

そのとき植草平八郎というのがいました。これは平野「力三」さんという農林大臣をやった人がいますね、後に平野さんの秘書をやった人です。あとになってみれば日教組系なんだけれど、その頃は小学校の先生なんかがたくさんそういうことをやっていたんですね。よく働いていた。歳は私より上ですが、植草君が「大室君、どうするんだ」と言う。スタッフが集まってどうするかというって、結局私にこれ「言論戦関係」をやってくれという。一番大事だとか知らないけれど、言論戦の問題があるから、それやることになった。あとは庶務や何かですからね。そのほかに何人かフリーみたいな人がいて、これが情報をとったり、連絡に行っていたようですね。実際の事務局というのは、『概要』の名簿を示して「これぐらいしかいなかったんですからね」。

清水 場所はどちらだったんですか。

大室 市政会館と「日比谷」公会堂と一緒にしよう。その反対側ぐらいのところですよ。二階か三階の、もとは小さなホテルか何かだったんじゃないかな。NHKがすぐ近くでしょう。その写真がありましたね。そういうスタッフで始めたんですね。今度は相手が東京市だけですからね。あの頃は二三区だけじゃなくて、何区あったのか、小さな区がたくさんありましたからね。『概要』の「最後に書いてありますね」。

そういうことから始まるんですが、その前にやはりこういう組織をつくりますね「資料12」。各区ごとに委員会をつくる。これ「会員」が一番上で、その次が各区の委員会です。各区に委員長をつくらせて、その中に選挙区がありますから、定員何名ということをやったわけですね。

**武田** この協議会の委員はどうやって決めるんですか。

**大室** 最初の委員というのは、翼政が決めたのと同じように、全体的な中から会員を選ぶ。みんなで話し合いをした。そこで堀切さんが中心になってやられたんですね「以下、『概要』の『市政協議会・会員名簿』（二二二―一五二ページ）を見ながら話す」。

**赤木** 「朝治」さんというのはご存知でしょう（**武田** 内務官僚ですね）。そうですね。それから井田盤楠というのは男爵で、右翼系の人ですね。それから入江種矩というのは宮内庁の何かをやっていたでしょう。入江という侍従長が何かがいるでしょう（**武田** はい、入江相政さん）。あの関係です。大塚栄吉というのは、元府会議員か何か、国会議員をやったか。岡田周造は知事ですね。亀岡「豊二」さんはなんだったかな。岸田「国土」さんなんかも入っていますね。香坂「昌康」さんも入っているし、桜田「壬午郎」さんは誰だったかな。みんな知っているような人ばかりです。膳「桂之助」というのは、例の財界の有名な人でしょう。田中都吉というのは新聞関係の会長です。高岡「宣次」というのはなんだったかな。鶴見「左吉雄」さんも、わりあい有名な団体の人ですね。中野金二郎というのも、経済連といいますが、中小企業の経済界のたしか代表でしたね。

**挟間** 「茂」さんは内務官僚。広瀬「久忠」さんもそうですね。広瀬さんは前の選挙で国会議員になったところですね。それから藤沼庄平は元警視庁の総監。藤山愛一郎さんはご承知の通りです。藤井丙午さんもさんもそうですね。それから二荒「芳徳」さんは、ボーイスカウトの会長です。船田中さんは、現職のあれですね。松永東さんというのも国会議員になった人ですね。それから三輪善兵衛というのは石鯨屋の社長です。みつわ石鯨ですね。それから築田次郎はご存知でしょう。有名な人ですよ。山口保次さんというのは知らないな。安井藤治は、あのころ大臣はやらなかったけれど、えらい人です。それからこの吉田茂は目白の吉田さん

ですね。だからわりあいと揃えて、東京の関係の人を会員として、そのほかに各区に委員長を設けたんですね。

**武田** この委員長は、協議会が指名する感じですか。

**大室** やはり各区から選ばれたというのが多いです。それぞれ自分たちのなわばりみたいなものがありますからね。だから同じ人がやっているのが多いでしょう。藤山さんは芝区をやるとか。

**武田** 船田さんもやっていますね。

**大室** このころはたしか区が小さいんです。二十三区の前ですからね。

**清水** 品川区、大森区、蒲田区という感じですね。

**大室** 麹町区、神田区、日本橋区なんていうのはいま一つの区です。それから京橋、芝、麻布、赤坂、四谷、牛込、小石川、本郷、下谷、浅草、本所、深川、品川、目黒、荏原、大森、蒲田、世田谷、渋谷、淀橋、中野、杉並、豊島、滝野川、荒川、王子、板橋、足立、向島。城東なんていうのはあとからできた。葛飾、江戸川と、これだけです。いまからみるとずいぶん小さく、定員もわりと少なかったですね。その各区の中に、それぞれ委員長を中心にして委員をつくって運営をするわけですね。

**清水** その各区の委員はどうやって選ばれたんですか。

**大室** やっぱり各区で有力者が区の中でやるわけですね。

**武田** そのへんは、区で決めたものをだいたい承認するという感じですか。

**大室** 地元の者を別にしてはできませんからね。それで、その人たちに推薦候補をつくらせるわけです。それを答申したものを、こっちの会員のほうで「承認する」。だいたい通りますけれど、ちつとは「変更も」あるんです。内申をこちらがするわけですね。全部が決まるわけではありませんよ、ということですね。

そのときで面白ものがあるんですよ。これは各区委員長に対して、こういうものはこうだとかあるんです「資料ファ

イル」の中から、各区委員長宛の通知を出して示す【資料13】が、これはあとでごらんになっていただければわかります。

武田 内示があるんですね。

大室 そういふものとか、いろいろ細かい指示が出ているんですね。

## ■候補者の選考と選挙活動

武田 先生はこういうもの「各区委員長への内示」もつくられたんですか。

大室 私ではなく、こういうものは上の方でだいたいやっている。

武田 委員の堀切さんたちですか。

大室 私どもがやったのは事務的なこと、例の情勢視察員を出すのが主で、それから演説会をやることですね。演説会も各区ごとにやったり、連合でやったり、いろいろしましたね。ただ、同じ区の中でも推薦候補者が何人かいるでしょう。これが調整が難しいところだったわけです。「各区委員長宛の通知を示して」こういういろいろ細かい指示が出ているんです。委員長をやったものは立候補してはいけなとか、いろいろなことがあるんですね。この委員会ができて、今度は推薦候補ができるわけですね。

武田 推薦候補の名簿はありましたね。

大室 「『概要』」の選挙結果一覧（一五四―一八七ページ）を示して「書いてありますね。これは数字「得票数」が確実ですから。ただ、いまお話がありました通り、昔は区がいろいろあるでしょう。麹町区なんかだと、三千票とか千票でも当選できるとか、いろいろあるんですね。麹町では推薦が二人当選していますが、このときは「推薦候補の」当選が七割何分かですね。ここに書いてありますが、たしか八割は行かなかったと思います。だいたい定数だけ推薦するということになっているんですね。ですからこれ

「『概要』」の選挙結果一覧を示して」は落ちているわけですね。

武田 非推薦で出た人が当選しているんですね。

大室 だから中村高一、ご存知ですね。われわれもよく知っていますが、これも推薦に漏れています。社会党系だということですが、これは当選していますね。

武田 これを見ていたら、浅沼「稲次郎」さんは次点でしたね。

大室 浅沼さんは深川の方です。この「選挙結果の」内容をよく調べると面白いんですね。当選がいろいろありまして、私どもも初めて名前を聞く人がずいぶんいましたね。その後、それが都会議員になったりする。この時もそうなんですが、国会議員と市会議員と両方「ひとりの人間が兼ねることが」できるんですね。このころまだ、二つできるんです。

武田 東京市の翼賛選挙以外に、地方で翼賛選挙が行なわれたということはあるんですか。

大室 それはあまり聞いていませんけれどね。ちょうどこの時期、国会の推薦をやったあとすぐだから、最初はわれわれもそういうのを知らなかったんですが、推薦をやるといふ。やっぱり真似して推薦選挙にしたんでしょうね。だから全然組織も弱いし、いままでの地盤を中心にしてやるような選挙になる。それじゃあいかなというので、だいたい新しいのを出したんですね。

武田 この本「『概要』」の後ろの方に、座談会の記事が載っているんですね。朝日新聞社が主催した「翼賛市議選に臨む」、石渡莊太郎さんとか堀切さんも参加していますね。

大室 ここ「資料ファイル」にもありますけれど、いままでの疑獄の実績だとか、そういう選挙用の資料をほうぼうにまいてるんですね。この「資料ファイル」の中にあると思いますけれどね。「資料を示しながら」こういう「現状と概観」とか「選挙の基準」かな、こういう注意書きもあります。

武田 この本「『概要』」でもそうなんですが、東京市には疑獄も

あるし、汚職もあったし、だから翼賛選挙でいい東京市政をつくるんだ、というような意見があるんですね。

**大室** 市は非常に疑獄が多かったんですね。利益の関係が多いので、それをなんとかなくそうということで「翼賛選挙を」やったんですね。推薦選挙をやるからには、候補者の選定がなかなか大変だった。実際問題として、細かく具体的なものになると、なかなか難しいですよ。こいつは駄目だ、というのは、たいいてい大物でしょう。またそういうのは如才ないから、押さえちゃうわけです。そのときにいろいろ経緯はあるんだけど、結局当選させなければしょうがないということやるんですね。例えば推薦で、芝なんかではほとんど一人以外は推薦が当選しているんですが、そういうところもあれば、落ちていくところもあるんですね。

これは後のことですが、選挙が終わって「推薦候補の」七割五分だけが当選ができた。そのときにこちらは、元警視總監の丸山鶴吉さんが、そのときに衆議院に当選しましたね。その方を大將にして、新しい市政をつくらせようとしたわけです。ところがいざとなつて、みんな当選なんかすると大騒ぎをして祝杯をあげたりしているわけでしょう。そうするといつのまにか昔の親分連中のところにみんな連れて行かれちゃうんです。

**武田** その選挙のときは、国の翼賛選挙のときと同じで、やはり新人を当選させよう、推薦しようということですか。

**大室** そういうこともありまじ、ここまで来ますと、推薦人を主にしてやるわけですよ。だから推薦者の中には、古いのもあれば新しいのもあるし、いろいろありますね。

**武田** なかなか思い通りに行かなかったんですね。

**大室** これはなかなか有名な人がいるんですよ、後になってみると。さっきの浅沼稲次郎さんもそうですが、あれは落ちましたね。だから途中で辞めたり、そういうのがいたり。

**清水** 地方で推薦者を決めて、それを内申という形で上の会員の

ところに持ってくるということですね。

**大室** ええ。

**清水** そこで内申が受け入れられないという形もあるんですか。

**大室** ときどきあるんです。

**清水** 具体的にはどなたがあつたか、というご記憶はありますか。

**大室** それはちよつとわかりませんけれどね。

**武田** 『概要』で名前を見ていてどうですか。

**大室** 相当ゴタゴタしました。いつでもそうですけれど、推薦が一番のヤマですから、大変だったと思いますよ。推薦から落ちると、なんだあんなもの、ということになってやるわけです。この内容をごらんになつていただくとわかるんです「以下『概要』の選挙結果の一覧を見ながら話す」。

これは最後に江戸川があるでしょう。島村一郎なんていうのは、のちに衆議院議員を長くやつたでしょう。こういうふうには三人のところでは二名しか推薦していないんですね。そういうところはわりあいには穩便に落ち着いているわけです。葛飾区は、三人のところ、一人落ちていくわけですね。

**武田** 三人が定数のところ、三人推薦をして、一人落ちていくんですね。このへんはそう問題になる人がいない。

**大室** 城東区、冠木「栄吉」なんて、このころ有名な、いろいろことをやっていた人でした。ここは全員当選ですね。これは向島です。大澤梅次郎なんていうのは、やつちゃ場「青物市場」の大將ですよ。八百屋さんの大將だ。

**武田** 非推薦ですね。

**清水** トップ当選。

**大室** こういうのが推薦になつていないのは、ちよつとあれなんです。

**武田** そういう推薦の状況がわかるような資料は、ここにありませんか。

大室 その中に多少あるかもしれませんがね。この新井京太なんていうのもそうなんだね。

武田 足立区ですね。

大室 足立なんていうのは、そのころ新しいところですからね。鯨岡兵衛というのは知っていますか。「衆議院」副議長をやった鯨岡さんのお父さんなんですよ。

武田 鯨岡兵衛さんですね。

大室 ええ、あとで聞いたら、鯨岡「兵輔」さんはその息子なんですね。だから、こつちがずいぶん歳をとっていると思って。そのおやじさんを推薦しているんですよ。何故かというと、鯨岡なんていう名前は珍しいから非常に印象的で、最初から知っていたんですよ。こつちのほうは金魚屋さんなんかが多かったんだけど。この王子でも、鈴木仙八という人は有名でしょう、国会議員で働いていますね。高木惣市もわりあい有名だ。富田直之というのはのちに国会議員になって、議長なんかやっている男ですね。こは半分しか当選しなかったですけど、富田さんは当選している。この北島義彦というのは、のちに医師会の会長なんかやった。これは推薦漏れだったんですね。

清水 三人の定員のところには、三人の推薦者を立てるのが基本だったということですね。

大室 定員通りに推薦をしなさいというのが本則なんです。ところが、中にはどうしても、三人のところ二人しかできないところもあるわけだ。

清水 「各区から」上がってくる段階で、もう二人だったりするわけですか。

大室 そういうところは、いくつもありませんけれどね。ほとんど定員ですね。ただいろいろな理由がありましてね。『概要』の選挙結果一覧を見ながら「荒川区というのは、こんなにたくさんいたのかな。」

武田 大きかったんですね。「上位当選の得票数が」一万票。

大室 定員も多いですね。天野頼義さんなんていうのは有名ですよ。

武田 どういう方ですか。

大室 国会議員をやった。山口久太郎も林「連」も、みんなこのへんは有名な人ですね。遠山丙市というのは学校の校長だったかな。この春日井秀雄も後に国会議員をやった人です。

武田 推薦するのが大変だったというご記憶はありますか。

大室 これ『概要』の選挙結果一覧を見て、新しい人が当選できないということは、推薦のときにいろいろあるんでしょうね。むしろ推薦されていない人がいいところで当選していますでしょう。滝野川区、豊島区。みんなあとで国会議員をやったりする人が多いですね。これはすぐに都会に移行しますからね。

武田 前の翼賛選挙の推薦のときと比べて、どつちが大変でしたか。

大室 国会の推薦のときと違うのは、地元が細かいでしょう。どうしても、実力者というのがいるわけですよ。それに推薦するときには地元の委員会がやるわけですから。あとになってみると、推薦はしたけれど、大物に内容をさらわれたような感じがあるんですね。これはまことに残念だったと、そのときすぐに思いました。

『概要』の選挙結果一覧を見て「花村四郎さんなんて弁護士なんだけれど、のちに国会で相当やっていますでしょう。この人なんか推薦にならなかった。」

武田 何区ですか。

大室 中野区です。国会ではずいぶんやっていますでしょう。森俊成もそうだし、窪寺伝吉も。内田秀五郎もあれか。ですからこの割合から行くと、三割以上が非推薦ですね。

清水 七割の当選というのは、市政協議会の中ではどういうふうにごらんになったんですか。

**大室** やっぱり、最初の「国の」翼賛選挙のときの八割三分は、本当のことを言えば予想以上なんです。よくても八割。ところがだんだん様子がわかってきたんですね。最後にわれわれがいっぱいやったときも、「八割以上で本当によかった」と本音を言っているわけですからね。実際には八割に行くかどうかがヤマ場だったわけですね。だから大きなことを言えたわけですね。ところが市議員の選挙になると、われわれとしてもトーンが落ちていきますし、スタッフもそうでしょう。それで、このころはなかなかやかましくて、演説会以外にはあまり応援ができないでしょう。ところが三人の候補者が同じ区内から出ている場合、三人を一つに集めて演説会ができないでしょう。これが一番困るんです。同じ推薦でも、みんな別々でしょう。

**清水** さつき先生は、連合で演説会をやる場合があるとおっしゃっていましたね。

**大室** それは区なら区で一つ最初に全部集めてやったわけですね。最初はそんなことをやったわけですね。

**武田** 連合というのは、いろいろな区をまたいで、ということですか。

**大室** そうじゃなくて、区の中の候補者を全部集めて、「○○区」ということですね。

**清水** 推薦・非推薦両方、ということですね。

**大室** ええ。それをやって、いろいろやっているんですけどね。『概要』の選挙結果一覧を見ながら「深川区がありましたね。さつきおっしゃったように、浅沼さんが次点になっている。この菊池武治というのが、この前お話ししたように、そのころ翼賛壮年団の団長をやっていたんですが、もともとは学者なんです。私はこの応援に行ったことを覚えているんですけどね。そのころは灯火管制下で、学校の講堂でやるんです。裸電球に袋をかぶせてあるでしょう。だから薄暗いところでやっているんだけど、けっ

こう人は入っているんです。そこに行つて私は応援演説をやりました。最後の頃でした。菊池さんも知っているし、おやじの友だちでもあるから。最後に手が足りなくなつて、「大室君、理事長の代わりに行つてくれ」というんです。メッセージを読むわけです。堀切さんのタイプで打ったものがあると思います。その前に国会議員の人が、鹿児島県か何かの人が「応援演説を」やっていて、そのあと私が受け継いでやったときには、ばかに受けて調子がよかった。「こういうときだから人を刷新して、太いやつてくれなければ困る」なんて言つた。それで、いまのメッセージを読むわけだ。いざとなつて見ようと思つたら、薄暗くて読めないんだ。それはもう大変で、メッセージなんて持つて来なければよかったと思つた。

**武田** どうされたんですか。

**大室** それはまいっちゃつた。最初のうちは少し覚えているからいいけれど、細かいことになつたら、まいっちゃつて、さすがに冷や汗でしたよ。読む前の演説はばかに拍手喝采で、うまいこといったのかも知れませんがね。でも、なんとか菊池さんが当選された。浅沼さんとの差は百票かそこらですね。

**馬場** 山哉さんですね。

**大室** そう、山哉さんが翼壯団長なんかも引き受けて、そういうことをやらされていたんです。その頃はそういう人はみんなそういうことを引き受けざるを得なかったんですね。

**馬場** 『菊池武治』菊池山哉氏は「府中の郷土史家なんです。戦後、『府中市史』の編纂をされました。

**大室** なかなか有名な実績がある方です。加賀の前田家の下屋敷が深川にあったでしょう。深川のあたり一帯はみんな前田さんの地所だったわけですね。下屋敷があつて、そのあと、長屋をつくつていないけれど、貸家をつくつたりして、その管理を引き受けていたわけだ。そのあいだに勉強しながらやっていたわけですね。そ

れが戦争になったものだからつかまって、団長なんかやっていました。初めて「選挙に」出たので、なかなか大変だったんだ。だからよく当選したと思っていたんですけれどね。そういう新しい人がずいぶん入っているんですね。

話が違って申し訳ないんですが、前に翼壮と選挙はどうか、という話がありましたね。その頃の翼賛壮年団というのは、わりあい年配者も多いし、四十歳から五十歳ぐらいの人も入っていました。その下の若い人はほとんどいませんでしょう。その人たちが中心になって、防空訓練もやれば、隣組のことや何かもやっていたわけです。翼賛壮年団の組織が、地区的にはどこにもあるんですが、その内容があるかないかというのは、人間の数にもよりますが、それから選挙でどれだけになるか。こういうときに、菊池さんなら菊池さんのような新しい人を出そうという空気の中でやったんです。ところが、さつきもお話がありましたけれど、定員が一人か二人でやっているわけではないでしょう。五人も六人もいるわけですから、どうしても新しい人には厳しいんですね。

そんないろいろなことがありまして、市会議員の選挙というのは、なかなか大変なものです。このころも、演説会をやって弁士を応援するというのもありますが、だいたいその地区でやっていますから、『概要』の中にみんな書いてありますね。

武田 いや、でも先生にお話しただかないとわからないところがありますので。

大室 こういう当選の表や何かを見ながらやっていくと、だいたい見当がつくんですが、その中でもさつきお話の通り、推薦の難しさがあるんですね。市会議員の選挙になると、推薦とかなんともありますが、やはり地元の問題ですからね。特に地元の中でも、町内が違おうとどうだということがありますから、なかなか難しいところがある。

清水 やはり町内会とか翼壮とか、そういう組織が比較的利いて

いたということですか。

大室 町内会はその頃ちゃんとできていますから、これは断然一番の組織です。翼壮なんかより町内会です。町内会は東京でも全部できましたから、それは上手にみんな使った。もうやらざるを得ないわけですね。

武田 先生も町内会に訴えかけたんですか。

大室 ここならこの町内会にやって、その町内会に隣組があるわけです。組長さんをつくって、大きな町内は町内会をやる。その頃になりますと、隣組というのは毎日に近いぐらい何かやっていたんです。その頃はゴミはないけれど、配給だとか何々とかとあって、わりあいよくやっていましたね。

武田 つながりがよかったですね。

大室 ええ。

清水 町内会が、例えばさっきの推薦の話とか選挙のときに大きく働いたということはあったんでしょうか。

大室 町内会で、最初に推薦するような人をどういうふうに出すかということが問題になるわけです。町内会でもって、今度あの人を出せるとかなんとかとなるわけですね。ですから、新人というの、そういう人から出ている場合が多いわけです。それに対して、古い人は面白くないわけでしょう。新人がたくさん出ていくところは、そういう意味ではわりあいうまく戦いながらやってきたということになるんじゃないでしょうか。

清水 先生、先ほど丸山鶴吉さんがこのとき当選されて、丸山鶴吉さんを中心に新しい会派のようなもの——と考えていいんでしょうか——をつくられる動きがあったとおっしゃっていましたね、それは従来の東京市会の会派とはまったく違ったものですか。

大室 会派というより、市ですからグループみたいなものですが、丸山さんは真面目な方だし、警視総監もやっていた方だし、あの人は渋谷が何かでトップ当選していますね。こちらもそういう人



が中心に、というつもりでいたわけですね。そういうやり方でやってきたわけですね。ところが、いざ蓋を開けて当選が決まると、いろいろ報告会とか慰労会をやりますね。そうすると、その頃はまだ戦時中ですから、仕事が早くて、そういう人たちが集まって、会派じゃないけれど、つくるわけですね。そういうことをやるのが、古い人は早いんですね。

武田 グループをつくるんですね。

大室 そう、当選したんだから、市のために頑張ろうなんていつてみんなを集めて、わけのわからない連中はみんな一緒にいつて行っちゃったわけだ。

武田 丸山さんを担いでも。

大室 やっている方も、どっちについているのかわからないわけだ。最初からそれで決まりというわけではないけれど、なんだかんだやっている、しきたりや何かについては、そういう連中にはかなわないですね。それはあとで非常に反省したことだったんです。この市会議員の選挙が終わったときの写真があるんですけど、持って来なかったのかな。

## ■選挙法と応援活動

武田 市政協議会はそもそも選挙が終わってしまうと解散ということですか。

大室 ええ。

武田 それで先生も離れてしまったんですか。

大室 ええ。もう帰ってきませんでした。

武田 この本『概要』は十一月に出ているんですが、これには先生はタッチしていないんですね。

大室 これは私はやっていないので、この人「小山忠義氏」が一人でやったんです。資料を持っていつて、この人は事務的なこと

をやっていたんですが、選挙が終わった結論ですからね。何票取ったとかいうことはみんなわかっていますからね。あとはみんな決まった理事長の挨拶だとか、そういうようなことだけを集めたわけですから、特にありません。実戦的な問題をやったのは、私の組と植草君の（清水 文書ですね）組でやったんだけど、結局最後になるとみんな私のほうであれになった。

そのころ推薦書が出せるんですね。ただしお金がかかるものだから、一候補者に何枚ぐらいと決まっているわけです。ところがそこでトラブルが一つありまして、浅草区だったと思うな。そのころ、そういうものを出すのにも専門家に任せなければいけないというんですね。どこかにそういうものがありましたよ。そういう規約があったのか。

武田 どういうことですか。

大室 専門家というのは筆耕屋さんとかですが、そういう者に書いてもらうという意味で、自分たちで書いて出してはいけないというようなことでした。ところがその筆耕さんが、浅草で書いたときに、「様」をつけずに出しちゃったんです。

武田 宛先に、ですね。

大室 そう。そうしたら有権者がえらく怒ってきて、「なんだ、ふざけんな」ということを言ってきた。そのときはまいりました。私も直接ではなかったけれど、終盤でしたので急いで書き直して、全部謝り状を出して、謝って歩いた。

武田 先生がやられたのは、演説会といまの推薦の手続と、そのほかに先生が関わられたことはございましたか。

大室 この時の選挙は、こちんまりとやっていましたから、最初は演説会をやる段取り、その講師の問題、あとは個々に弱いところに対する要請があれば、あれ「応援」を出すわけですね。情勢視察員の派遣なんかも出ていましたね。何人でもないですね。二百人か三百人、延べにすると多かったですけれど。

武田 視察員を派遣するのも先生のお仕事ですか。

大室 ええ。総体的にいざ本番になるとそうなっちゃいますね。「資料ファイル」の中から、視察員派遣の冊子を出す」これを見るとわかるように、何回も出している人は専門的に出せるんですが、一回か二回しか行つてくれない人もありますね。

武田 この視察員は事務局の人とは違うんですね。

大室 これはみんな情勢視察員です。

清水 どういうことをされるんですか。

大室 情勢視察員という名前であるけれど、みんな応援の弁士なんです。応援の弁士にこういう人をお願いした。これ「情勢視察員の名簿」【資料14】を見ると、伊達義三郎なんていうのは本部でやってた連中ですね。

武田 本部というのはどこですか。

大室 翼協の本部でやっていて、それがみんな大政翼賛会に帰つたりした連中です。「情勢視察員の名簿を見ながら」この佐藤清勝なんていうのは陸軍中将なんです。これにお願いしている。水野「嘉雄」君というのもわれわれの仲間です。多田勲生も、みんなどこかの大学の教授か何かになりました。谷実夫というのも陸軍中将。田代辰之助は。それから、坂西平八というのも陸軍中将。山田秀蔵もそうだったな、中将か少将。植草平八郎はわれわれの仲間、あとから応援に行っている。

武田 これは手が足りなかったんですか。

大室 やっぱり場所によつては行つたりね。ほとんど夜ですからね。「情勢視察員の名簿を見ながら」柴「貢」君というのは、話が出ましたね。例の選挙のときの連絡係で、その仲間なんです。これもみんな昔の連中。

武田 これは大室先生が個人的に頼まれるんですか、例えば柴さんとかには。

大室 応援演説をやるスタッフがいて、交渉をしたりなんかして

いるのはいますけれど、みんな私の下でやっているわけです。その中にはえらい人もずいぶんいる。「情勢視察員の名簿を見ながら」山口正熙なんていうのは陸軍中将。津雲国利なんかもいるでしょう。

武田 これは先生が、ここは津雲さんに行つてもらおうと。

大室 それに合わせて、派遣するのはみんなこつちでやっているわけです。

武田 人選するのも先生なんですか。津雲さんにやつてもらおうというの。

大室 それもあるし、そういうことを交渉に行くやつもいるわけですね。だけどたいてい、例えば津雲さんと呼ぶときは、津雲さんも来てくれなければ困るというのと同時に、津雲さんにしてみれば、これ「応援に行った場所」は神田ですが、神田に人脈があるわけです。そういうところだから、ちよいどいい、頼むわけですね。陸軍中将、ずいぶん陸軍の人を頼んでいますね。菅野和太郎さんもそうだな。

武田 菅野和太郎さんは戦後代議士をされる方ですね。

大室 なりましたね。仙波安芸も陸軍中将ですね。私の「資料の」中にみんな入っていますけれどね。

武田 翼協のほうですか。

大室 情勢視察員派遣のなんとかがありますね。藤山愛一郎さんとか、橋本清十郎も。井上貞蔵なんかもありますね。

武田 有名な人は弱いところに派遣するとか、そういう感じですか。

大室 そういうのを重点的に、そういうところには有名な人を持つて行かなければいけないし、それをお願いする。みんな陸軍の中将級ですよ。

清水 まず名前ですが、「情勢視察員」という名前になっているのは何故なのでしょう。

**大室** その頃、なかなか選挙法がやかましくて、応援に行くのは翼賛選挙のときもやっていました。情勢視察員というのをそのまま踏襲してやっていました。その行ったところで、たまたま演説を頼まれたからやったんだ、という意味のことを言わせるんです。何か馬鹿馬鹿しい話なんですけれどね。だから派遣弁士を情勢視察員という。選挙区の情勢を視察に行ったときに、たまたま話が出て応援したんだ、というような、何かややこしいんですけれどね。

**清水** それは市政協議会という団体が特定の候補に肩入れするのはいけない、という考え方なんでしょうか。選挙法としては。

**武田** そもそも翼賛選挙のときの選挙法というのは何ですか。

**大室** 昔の選挙法は私もよく覚えていないんですが、この「資料ファイル」の中にそういうものがあるかもしれませんよ。注意書きみたいなもので、これは気をつけなければいかんとかね。ちょっと見たときに、二つばかりあったような気がします。従来の選挙法は、戦前の選挙法でしょう。いま思っているような、トラックに乗ってやつたり、スピーカーでやつたりというのはあまりないわけでしょう。それでいろいろな条件があるわけです。それから必ず臨検というんですか、警官席があるんです。それで「もし、もし」というんですね。

**武田** おっかないですね。

**大室** それは市のときもそうです。

**武田** 国のときもそうでしたか。

**大室** そうです。国のときだって、演説会は全部そうです。簡単に演説会はやっていないんです。

**清水** 情勢視察員という形で出す場合は、当然この市政協議会がお願いすることになると思うんですが、謝礼とかを出すような形になるんですか。

**大室** 翼協のときには全部出しているわけです。

**清水** この時もまったく同じ形ですか。

**大室** この時には私は出したあれがないんですが、こちらが派遣するという格好にしていますから出せるんじゃないですか。

**清水** 演説会の話ですが、本「『概要』」を見ていても出て来たんですが、第三者運動というのがあって、第三者として演説会に行つて応援演説をしてもよい、というのは会員の中にあつたんですね「『概要』」の該当ページを示す。

**大室** 「個人共同で推薦演説会を開くため、第三者運動の制限に從うこと」というのがありますね。なにしろこのころやかましいことばかり言っている。

**武田** 第三者運動というのは何ですか。

**清水** 「第三者（出演者）」と書いてありますね。

**大室** これ「『概要』」をよくお読みになつていただければわかると思います。

**武田** 第一者は当然本人ですね。第二者というのは誰でしょうね。

**清水** 推薦人。

**武田** 協議会ですか。

**清水** そうすると、市政協議会の肩書きだと第二者になるから、その肩書きでは。

**大室** ちょっとそのときの選挙法についてはよく覚えていなくて、ただやっていただけですけれどね。ずいぶん面倒くさいことを言っているな、と思つたんです。何か、協定がありましたか「資料15、16」。

**清水** 情勢視察員という形で出したのは何故なんでしょうね。

**大室** それは選挙法に基づいて。翼協をやるときに最初に言われたんですよ、これはみんな情勢視察員なんだ、と。情勢視察員に対しては費用を出しているでしょう。旅費だとか、どんどん。そういうこともあるから、本部派遣という関係じゃないでしょうか。それも形式的なもので、全部情勢視察員と書いてあるわけですよ。

清水 これは財源はどうなっていたんですかね。

大室 財源はあとになってみると、はっきりしたことはわかりませんけれど、例の推薦選挙の本部のほうは、財界人がほとんど出していると思うんですよ。

清水 翼協の本部に財界人がずいぶん入っていますね。

大室 あの中を見ればわかる通り、財界人が大勢いるでしょう。それが出していると思うんです。さつきも申しあげたかどうか、事務員で前田房子というのがいて、これが領収書の係だったんだ。それから私が聞いて、私も知っているし、石井君という人もいますが、領収書を出したというんだ。どこかに私は一つ持っていたんだな、王子製紙か何かの領収書を。ほかの人から聞いたときも、同じようなことを言っていた。前田さんというのが事務員で、その人が担当ですつとやっていたんです。

清水 その前田さんは、翼協のときも、東京市のときも、両方やっていらしたんですね。

大室 市のときはやっていませんでしょう。

清水 市のときも、名簿には名前が拝見できるんですが。

大室 載っていますか。『概要』の事務員一覧を見て「ああ、そうだ、応援で来ているんだ。なにしろみんな、もとの精動の關係で、慣れた人たちがやらされているんですね。前田房子は、翼協のときのあれ「領収書關係」はほとんどやっていたんですよ。これはイシイ君にも聞いたんですけれどね。

武田 東京市のときもそうですか。

大室 東京市のときもやっていたと思うんですが、本部の会員と、各区の委員長や委員の中からやはり出しているんじゃないですか。

武田 この市政協議会という組織は、東京市の市長の管轄下にあるんですか。

大室 協議会というのは、これ「協議会」が一番の会でしょう。

その下に会員があるわけです。

武田 その上はいないんですか。市長は大久保留次郎さんですね。

大室 大久保留次郎は一番上じゃないですよ。

武田 大久保さんと堀切さんの關係はどうなるんですか。指揮命令系統ではありませんか。

大室 大久保さんは警視總監とか市長であって、選挙はできないでしょう。

武田 協議会と市長さんはどういう關係になるんですか、全然關係ないんですか。

大室 これ「翼賛選挙」をこっち「協議会」が引き受けているわけですよ。これ「協議会の会員」をつくって。ですから実際の市の選挙は、堀切さんが仕切っているわけです。その資金や何かも。

武田 市の方から出ているんでしょうか。

大室 やつぱり同じようなことをやっているんですよ。弱いところに対して応援するでしょう。総選挙のときでも、特別に応援に行くのと同じですね。お金は、そのころよくわかりませんが、資金的に応援しているというのも聞いていますよ。本当はそれを私にやらせようとしたんだけど、私がこっち「言論戦」のほうでつかまっちゃったものですからね。あれ「資金關係」をやっておけば、いろいろ内容がわかって、もつと面白かったかもしれませんね。

## ■海軍民政府へ——任地への出航

武田 「東京市議選については」だいたい伺いましたかね。これは「昭和十七年」五月に始まって、六月の初めぐらいに終わりますね。それが終わって、協議会が解散すると、先生は何をされたんですか。

大室 解散してもう帰って来ちゃいましたよ。

武田 じゃあそれからちようど一年経って、海軍の民政府ですね。

大室 それは十八年ですからね。家にいる間に、地元の翼賛壮年団なんかをやらされたんですよ。

武田 ではそろそろ海軍のほうの話に移りますか。

清水 先生の本『秘境ボルネオ戦記 生き残り海軍民政要員の手記』（総和社・一九九六）ですと、十八年五月に辞令を受けたという話になっているんですが、そのときはどういう経緯でお受けになったんでしょう。

大室 それは前の年の十二月頃かな、海軍がまだ調子がよかつたんでしょうね。軍政の関係の本拠地を、いままであつたセレベス民政府の本拠に宣伝的なもので情報課をつくらうということになったんです。

武田 これは宣伝部ですか、広報課みたいなものですか。

大室 情報課と称していましたが、宣伝課みたいなものなんです。そういうものをつくりたいというので、その当時の小松東三郎さんに、第五課長か何かをやっていたところが白羽の矢を立てられて、海軍から交渉を受けていたわけです。その交渉の途中で、中部日本という統制になった新聞の編集長をやってくれと言われたけれど、それを断わってやるわけですね。その話が十二月頃ですね。そのときに私も、「おまえも行くか」と言われて、「ぜひお願いします」ということで、暮れにはマレー語の講習が何かに行っていったんです。

武田 どこにあつたんですか。

大室 千代田区といいましたか、小さなビルの中にありましたね。麹町のほうでした。

武田 日本人が教えるんですか。

大室 日本人が先生で、マレー語は多少ー。みんな多少の予備的な勉強をしました。

武田 マレー語の受講生はけっこう多かつたんですか。

大室 そうですね、百人はいないけれど、五、六十人はいたような気がしますね。

清水 どんな方がいらつしゃっていましたか。

大室 みんなわれわれと同じように、向こうに行く人です。

武田 軍人さんもいるし、民間の人もあるし、という感じですか。

大室 まあ、いろいろですが、みんな聞きかじって勉強してましたからね。

清水 軍の方もいらつしゃいましたか。

大室 そのへんはわかりませんでしたね。

清水 服装とかで明確にわかるといことはなかったですか。

大室 そういう人じゃないみたいでした。要するに、マレー語の基礎的なものですから。マレー語というのはわりあいやさしいですからね。

武田 いや、私は勉強したことがないからわからないんですが、文字も違うんでしょう。

大室 発音がらくなんです。

武田 先生は行く前に、少ししゃべられるようになったんですか。

大室 けっこう向こうでは通用して、やっていましたけれどね。

武田 バイリンガルだ（笑い）。

大室 いまはもう忘れましたがね。マレー語というのは発音がやさしいから。

武田 ご自宅ではそのとき何をされたんですか。

大室 ところがそれをやっているときに、自分のことで恐縮なんです。上の兄が戦死していますね。そういうときだから、父が、「小松さんについていつて向こうへ行くのはいいけれど、嫁をもらってから行け」と言うんですよ。そうでなければ駄目だと言うんです。そんなこといったって、急にどうこうということはないけれど、知り合いがいたんですね。

武田 お父様の、ということですね。

大室 ええ。私も知っていましたけれど、調布の山岡という家が酒屋をやっていた。酒屋の仕事はその後統制が起こって、うちのおやじがしょっちゅう往ったり来たりして、いろいろなことをしていたんですね。あの娘ならいいということだったんでしょう。それで急に見合いをしまして、話が決まったわけだ。

武田 それは年末ですか。

大室 結婚式をやったのは二月です。そのときに小松さんに仲人をやっていたことになるっていたわけです。ところが二月の前に小松さんだけ辞令が出まして、えらい人だから飛行機で行っちゃうわけですね。任地に行っちゃったんです。奥さんに、代わりに一人でやってもらったんですね。その頃は質素なものですからね。鯛もなければ、大変なときでしたから。

武田 結婚式は地元でされたんですか。

大室 地元で、大國魂神社が結婚式を始めた頃で、最初の頃じゃないでしょうか。

武田 神前ですか。

大室 ちょうど雪が降って、ずっと歩いてくるのが大変だったことを覚えていますね。なにしろ披露宴なんていうのは大変なもので、魚がないんですから。知っている親戚の方で、「松本」という旅館がありまして、料理屋なんかやっていたんです。私の結婚式だから、かわいそうだから何か魚をということですが、魚は統制でないでしょう。印旛沼だったか、あっちの方に行って、鮒か何かを仕入れてきたんです。

清水 尾頭付きですか。

大室 それを全部並べてもらって、私なんかの前には、鮒でもこんなに「二〇センチぐらい」大きなやつなんです。下の方に行くと、こんなに「七〜八センチ」小さいんです（笑い）。

武田 宴席には何人ぐらい呼ばれたんですか。

大室 でも四、五十人いたんじゃないですか。そんなことを覚え

ていますね。

武田 ちょうど、昭和十七年から十八年にかけて、だんだん日本の戦況は思わしくなくなるときじゃないですか。ミッドウエーがあり、ガダルカナルがあつた。そのことはご存知でしたか。

大室 それは十八年になるといろいろありますが、私にしてみると、十八年には現地に行かなければならんというときでしょう。ところが私は置いて行かれちゃったんです。われわれのスタッフがだいたい揃って行つたのは、後で気がついた。鎌倉丸に乗って先に出かけちゃったわけです。

武田 先生は結婚式があつたので遅れたんですか。

大室 それはあとで考えてみたら、かわいそうだからというので、ひと船遅らせたんでしょうね。

清水 新婚だから、ですね。

大室 ええ。私はそれを知らないから、海軍省に行つて、担当の将校に、どうして私だけ置いていったんだと怒ったわけですよ。そうしたら、いやこの次に入れるから、というわけなんです。だから決まっていたんですね。ところがそのうちにわかったんだけれど、どうも様子がおかしいなと思つたら、鎌倉丸が途中でやられちゃうわけです。だからそれに乗っていればおしまいだったんだけれど、助かったんですね。

武田 当時は日本の戦争は、報道では勝っていることになっていきますね。

大室 そうです。まだ十八年はよかつたんじゃないですか。

清水 鎌倉丸が沈没されたとか、そういうよくない情報は、どういうふうにして先生はご存知だったんですか。

大室 鎌倉丸が沈んだというのは、そのころ全然出て来ないでしょう。でもみんなわれわれの仲間、それからほかの人も、出て行ったことは知っているでしょう。いつまで経つても、着いたとか着かないとか連絡がない。それは私どもも逆に聞いたんだけど、

先に行っていた人がいるでしょう。私の任地、セレベス島のマカッサルに。その人たちがなかなか来ないからおかしいぞ、と思って調べたら、どうもやられたらしいという話になったんですね。私が鎌倉丸がやられたと知ったのは五月の半ば過ぎじゃないでしょうか。どうもおかしいということは聞いていたんですが、全然発表しませんでしよう。その鎌倉丸には、三千人近くの人が乗っていたんでしよう。私も情報課の要員が二十名ぐらい乗っていたんです。私だけが助かった。それは全部が同じところに行くんじゃないくて、それから分かれてセレベス島に行くとか、分担があったようですね。本部詰めの方もいたんですが、それは一人を残して全員が死んじゃったんです。

**清水** そのあとはどうするんですか。当然、組織は必要なのでね。人の補充をしなければいけないでしょう。また二十名をどこからお願ひしなければならぬわけですね。

**大室** それができないんです。二十人が死んだというのが正式にわかるのはずっとあとになってでしょう。それで補充をしようとしてもなかなかできない。また生死もはっきりしないでしょう。あとで助かった人もいる。何百人か助かってるんですね。

中では、文部省から出て行ったのが助かったんですが、大火傷をした。その人に後で会って聞きました。のちに高知大学の校務主任か何かをやっておりましたが、火傷をして大変でした。あまりこういう話は気の毒なんです。結局、筏や何かにつかまるでしょう。定員がいっぱいになると、追い出されちゃうということもあるんだそうです。大変らしい。それから飲むものがない。塩水だとやられちゃうでしょう。そんないろいろな話を聞きましたけれどね。そういうことがあったけれど、こちらのスタッフは一人を残して全部亡くなった。残ったその人は、われわれのセレベス島の本部に来る人ではなかったわけですね。

ですから、われわれはひと船遅れて、鎌倉丸がやられて浅間丸

で行ったんですが、そのときも、着くまで途中が大変だったんです。本当に大変なんです。

**武田** 日程は、どのぐらいかかるものですか。

**清水** 普通に行ったらー。

**大室** 結局、正式に出航したのは七月の初めぐらいになるんですね。そのあいだ準備があつて、呼ばれて、船に乗る前は神戸に集まりました。

**武田** 神戸から、ですか。

**大室** 神戸からですが、荷物だけ置いて、明くる日集まれということでした。われわれの仲間が何人かいましたから、その連中と高野山に行った。それで明くる日船に乗ったんですが、そのとき驚いたんです。こんなにたくさんの方が乗れるのか、と思った。行列しているんですから。それがいつのまにかパタパタと入った。われわれは準士官みたいなものでしたから、同じ部屋でも六、七人ぐらいの部屋だったのか、一人余計になっているだけなんです。下にマットを敷いて寝る。だから毎日交替でやるわけだ。それは船室からいってもいい方なんです。中には、下のプールに寝ているのもある。人間ばかりで、大変なんです。

**武田** ずいぶん長旅でしたか。

**大室** 神戸を出てから呉に寄つて、呉に何日かいて、それから佐世保に行つて、そこからいよいよ本番で、出て行つた。そのころはわりに早いんですが、有明湾の辺りにいったら、あのころの堂々の輸送船みたいなものが十何杯か揃っているんです。これは大したものだ、と思ったけれど、それから船団を組んで、ずっと出かけて行つた。

それで夜、鹿児島沖だといっていました。何回も潜水艦でやられる訓練をしているわけです。ほとんどそればかりやっているわけです。それがいよいよ本番で行つた。そういう情報は早いんですな。月の出る夜は怖いんだという。今日は何時頃だといったら、

今日はちょうど十二時頃だというんです。だからみんな寝られやしません。初めてですから、緊張もしている。そうしたらその通り、ドカンとやられて、飛び上がるぐらいです。さあやられたというと、非常ベルが鳴るんです。それはいまみたいにピーッというんじゃない、小さな音なんです。それでみんな、靴なんか履いていましたからね。簡単な荷物だけ持って、デッキに上がるわけです。ところがそのあいだにドカン、ドカンと爆雷の音がする。船が直接やられたと思ったら、隣の船だった。ちょうど蛇行するでしょう。「浅間丸が」曲がったところだったから、隣の船がやられた。狙いは一番大きな船だからこつち「自分の乗っている浅間丸」だったけれど。そうすると、爆雷を撃っているの、駆潜艇が追いかけて回しているけれど、何回かドカンドカンとやられて、船は急速に逃げるといふか、こんなになって「大きく揺れて」進む。デッキへ上がるまでが大変なんです。上がれないんです。みんなワーツと来るでしょう。それはひどいもので、足が宙に浮いちゃうんですからね。

**清水** それでデッキに出るといふのも怖いですね。

**大室** それでやつとデッキに上がると、みんな部署が決まっているわけです。ブイなんかがたくさんあって、流せるもの、つかまるものがある。われわれはいい方で、ボートを持っていました。五十人乗れるのか、百人乗れるのか知らないけれど、そのボートに乗る人数も決まっているわけです。「私たちは」そのボートの前に待機しているわけです。そのボートをつないでいる綱を海軍ナイフという大きなナイフで切るんですね。それが私の係で、大きなナイフを胸からぶら下げていたんです。

**武田** それは、切れという指示があつたら切るわけですか。

**大室** 危なくなれば、切つてボートに乗つて逃げるわけですね。ところが船はこうなったり「大きく揺れたり」して、本当に傾くぐらいで、蛇行して逃げる。片方では爆雷がある。ひよつと見る

と、やられた船が「SOS」をさかんに出しているわけです。これも沈没しなかったんですけれどね。それでどの辺だと聞いたら、鹿児島沖だということですね。だからその頃いかに大変だったか、ということですね。庭先みたいなところでやられているんですね。それから、体制が整つてから、逃げに逃げた。阿波丸という陸軍の徴用船の一万トン級のものがあつた、鎌倉丸も二万何千トンという、その頃では最大の船でしょう。その二つが快速艇で、ほかの輸送船団の遅い船に合わせていつているわけでしょう。間に合わないの、優秀船だからその二つを先頭に、駆潜艇が一つついて、逃げ回つたわけです。とうとう大陸の近くまで行つたのか、台湾の高雄港に逃げ込んだんです。

そこで私は大変な経験をしたんですが、人間というのはだらしがないもので、いざとなつてドカンとやられると、みんなボートの中で待機しているわけですね。震えが止まらないですよ。筋肉が震える。自分で一所懸命こうやる「太腿の震えを押える」けれど、駄目なんだ。そのとき震えながら、ああこれが武者震いかなと思つた。それは私ばかりではない、何人かいたんです。そう思っているけれどこれ「震え」が止まらないんです。止まるまでにずいぶん時間がかかりましたよ。

**武田** 高雄に行くまではずっと警戒中ですね。またやられるかもしれない。そのあいだ中、ずっと待機しているわけですか。

**大室** そうでもないけれど、一日ぐらい経つてからか、高雄まで二日ぐらいかかったんじゃないかな。どんどん逃げて、高雄に逃げ込んだ。

**武田** 高雄はとりあえず安全なんですか。

**大室** 高雄に行くと、海軍の飛行機がいたり。

**武田** そこで一度降りたんですか。

**大室** そこで降りはいませんが、そこで泊まった。大きな船が二艘入るのはやつとこさなんです。体制を立て直すまで時間



がかかるので、そこで休んで、それから応援団というか駆潜艇が何か来て、警護されて行くんです。途中までは飛行機が応援してくれる。明るいうちはいいんですけどね。いっぺんやられると、人間は度胸ができて震えが止まるんですね。あれは驚きですよ。その前はみっともないくらいに震えた。それで、航海が十日ぐらいかかるんです。シンガポールまで。

清水 ひとまずシンガポールまで行ったわけですか。

大室 シンガポールまで行くんですね。あのころ徴用船というのはだいたいシンガポールに入って、それからバリック「バパン」とか、ほうほうに行くんですね。そのコースが決まっていました。シンガポールに行くまでもずいぶんかかって、波が荒れたり、いろいろなことがありました。潜水艦がいくつか出たこともありました。途中で、夕方でしたが潜水艦が出たという。あのころ船でも大砲が二基ばかりついているんです。その専門家もついているんですね。それが撃つたりして、煙が出たところをドカンとやって、また始まったな、というので、われわれも甲板に上がっていったんですね。そうしたら、味方の潜水艦だった。

武田 撃っちゃったんですか（笑い）。

大室 当たらなくてよかった（笑い）。それで上がってきて、わかったんだ。本当にそういうことがあるんだ。

清水 逆に言うと、それだけ警戒していたということですね。

大室 それから、南シナ海の波の荒さはすごいものです。それは、いろいろな船に乗っている人はあまり話さないけれど、一万トンとか二万トンもあるような大きな船が、波にこういうふうに入っちゃうんですから「両手を波に、頭を船に見立て、両手で頭の両側を囲むようにする」。これはちょっと想像がつかないでしょう。北斎の絵がありますね。あれと同じようにこうなっちゃう。「波が船よりも高く聳える」。そのときも、これは北斎の絵だなと思った。私は船に強いものですからね。今度は逆に上がるとなる

と、ウワツと上がる「船が波に押し上げられる」。それでたいてい、まいっちゃうんですよ。それがこう行ったり、こう行ったりでしょう。護衛の駆潜艇なんて、「波の下に」潜っちゃうんです。あれっ船がいなくなっちゃったと思う。護衛どころじゃありません、必死ですという。大きな船だからまだいいんですね。

## ■ 浅間丸コレラ事件

武田 先生は船で長旅をするのは、そのときが初めてですか。

大室 初めてですね。その途中で高雄に寄ったときに、「人が」いっぱいなのに、またそこで徴用工みたいなのが百人ぐらい乗ったんです。これ以上乗せるなんて、と言っていたんだけど、便（びん）がないものだから待っていたんでしょね。ところが、シンガポールに着く一日か二日前に、中で一人死んだ人がいたわけですよ。なんだかわからんけれどね。それを水葬にした。われわれも立ち会ったけれど、水葬というのはこういうものか、海軍というのは大したものだと思った。ちゃんと花束でも冷蔵した本物を持っている。それでみんな敬礼して、厳かなものだな、と思った。そしてそれが終わってからシンガポールのセルトー軍港のところに着いたんです。

私たちは民政要員で軍政府をやっているから、ぜひ陸軍の關係を見せてもらいたいといったら、許可になったんです。七名ぐらいですね。軽便鉄道みたいなものがありまして、シンガポールから市内に行くのに一時間ぐらいかかる。それに乗って、市内を見学したりして、初めてそこで向こうの細長い外米を食べた。米はあるから、食い物はなんとかなると喜んで、いろいろなことを勉強しながら帰ってきたら、すぐに足止め。どうしたんだといったら、コレラが発生したということです。それで検便したり、大変なんです。お腹をこわしたやつには張り番をつけておく。申告しな

いでしよう。それでガラッと変わっちゃった。それを二日ぐらいやっていたところが、次々と保菌者が出るんです。

武田 先生は大丈夫だったんですか。

大室 われわれは大丈夫、われわれの仲間はなかった。けれどもとうとうその船もろとも、港外のウェストジョンストン島だったか、名前は変わっているかもしれないけれど、無人島に横付けになった。

清水 隔離ですね。

武田 船ごと隔離ですか。

大室 それはどういうことかという、日本軍が占領したときに、外人か何かがずいぶん捕虜になったりして、それを送り込んだときに使った島なんですね。だいたい伝染病が出たときの隔離島だったらしい。そこにみんな揚げられて、とうとうそこでひと月半ぐらいいた。

武田 そこは宿舎とか、ちゃんとあるんですか。

大室 それはちゃんとあった。吹き抜けだけれど、キャンプみたいになっていて、何千人か泊まれるようになっていた。みんな一ブロックが六、七十人で、二段ベッドみたいなものがあって、そこに泊まり込む。毎日朝昼二食で、変な話ですが、毎日検便ですよ。朝から晩までやられるわけです。それしかないでしょう。

武田 全部で何人ぐらいだったんですか。

大室 三千人近くですよ。

武田 ちよつとした町ですね。

大室 それが一切秘密だから、発表にならないでしょう。戦後、浅間丸の事件というのは、郵船の会社の何かに出ていますけれどもね。

清水 衛生関係の研究をしている者のあいだでは、「浅間丸コレラ事件」というのは一つの大きな謎らしいんですね。

大室 あとからわかってきましたが、内地の人も、われわれより

あとに行ったマカッサルの人も全然知らなかった。浅間丸が行方不明になったという。大勢乗っている人がどこに行ったかわからんということだった。それでやつと落ちて、菌も取れて、死ぬ者は死んだ。保菌者が三百人だったかな。最初のうちはコロコロいきましたよ。

武田 コレラというのはどうやって治療するんですか。

大室 その頃、コレラとチフスともう一つ何か「天然痘」、三つの注射をしているんですよ。

清水 出る前に予防注射をするんですか。

大室 そう、予防注射を全部しなければいけないわけだ。ところがいざとなると、そういうものがあまり役に立たないんだ。コレラにもいろいろあるんです。最近起こるコレラと違うみたいね。昔コロリと言ったコレラみたいな感じでしたね。どうしてそういうものが起こったのか。内地でもないのに、台湾でもないのに、どうしてそういうことが起こったのか。要するに、高雄で百人ぐらい臨時に乗せたでしょう。その中にいたみたいね。みんな本島人が多いですから。その中にいたんだね。それで水葬したのは、それみたいです。コレラが怖いのは、なんで感染するのかという、便（べん）や何かもあるけれど、そうではなくて、デッキヤなんかのこういうところ「手すり」を触るでしょう。そういうところからうつるんだ。だからちよつと消毒をしてもどうしようもないですよ。

清水 じゃあ、とりあえず船じゅう消毒をかけるような形にするわけですね。

大室 向こうの島に上がってからは、人間も荷物も全部消毒される。だから皮を持っているやつは、皮が縮んじゃうんですね。それで最後になんとか風呂「カルキ風呂」という消毒用のものに入れて、外に出す。それでも保菌者が最初は出た。もっと驚いたのは、三千人もいるわけでしょう。そうすると、物資とか食料を対

岸から運んでこなければならぬ。それを運んでくる人足のシンガポールの人間だか、それが何人も「コレラに」かって死んじやいました。同じことでも日本人の方が強いんですよ。

武田 そうですか。最近逆ですね。日本人は弱いといわれていますね。

大室 驚きましたよ。

武田 先生が遅いのがよくわかりました。すごい話だな。

大室 それが落ちてくまで、とうとう五十日間。いや、まいったですよ。そろそろおかしくなってきた頃、やっと解放されるようになったんですね。

武田 そのときの生活はどう感じですか。

大室 毎日、やることがないんですから。

武田 将棋をやったり、碁をやったりとか。

大室 朝晩検便をする。

武田 娯楽は何ですか。

大室 娯楽も何にもなし。だって何もありませんから。最初のうち、煙草だけくれるんだ。私は吸わないけれど、煙草を吸いたい人を呼ぶんですよ。それは海軍の連中はうまいんだ。「煙草を吸うやつは表に出て来い、整列！」なんてやるんだ。また、しばかれやしないかと思って、吸うやつも黙っている。そうすると「番号！」といって決めると、「はい、これだけ」といって配給する。

武田 少ないから。

大室 煙草代一本だつて大変だつたんだ。われわれは煙草を吸わないから、黙っていたけれどね。

武田 そのときの煙草は日本製なんですか。

大室 日本製もあつたけれど、外国の。でも日本のものを持っていたのかもしれないね。

武田 お米とか食事は、全部向こうの物ですね。

大室 それは現地にありますから、食べる物は一応大丈夫でした。

武田 主食は米だつたんですか。

大室 米です。

武田 おかずは何だつたんですか。

大室 おかずというのははるくな物がないけれど、一番あるのは危険汁というんです。

武田 危険汁って何ですか。危険なんですか。

大室 魚を骨が何かついているのをそのまま煮込んだ汁。骨や何かがあるから危なくてしょうがない。

武田 それじゃあ、ご飯とその危険汁ですか。

大室 だいたいそういうようなものだね。それを海軍だと主計がいますね。それがいるものだから、七十人ぐらいがブロックで何百人かずつに主計が来て、われわれ七十人ぐらいのものを、交替で運んだりするわけです。

武田 自然に、リーダーというのか、朝起きるとか、寝ろ、というような人が出て来るわけですか。

大室 それはちゃんと指揮官がいますから。

武田 いや、また大室先生がいろいろ仕切ったのかと思ひまして（笑）。

大室 いや、とんでもない。そこで余談になりますが、最後になりました、みんなある程度元気になってくると、人心がなんとか、ということになるでしょう。落ち着かなくなってくる。早く帰りたいという。それで最後に演芸会をやるうということになった。みんないろいろ演芸会をやる人が大勢いるでしょう。

清水 船に慰問団は乗っていませんでしたか。

大室 中にはいたけれど、慰問団はやらなかった。女優で森光子さんがいたわけですよ。森光子が二十歳ちよつとぐらいでね。

武田 先生はお会いになつていますね。

大室 マカッサルに行つてからもやりましたね。その頃は有名じゃないけれど。歌手で林伊佐緒というのがいたでしょう。それが

団長で慰問団がいた。中には女の人もいれば、男の人もいるけれど、女の人はごく一部、別に何かやっているけれど。それが毎日毎日お尻を出して検便だ。それで最後に演芸をやって、和やかにしてなんとかということ、千人ぐらい集まったかな。舞台みたいなものをつくってね。

武田 島の中にみんなでつくったんですね。

大室 そういう点はなかなかはしっこいですからね。バックは天然の椰子の実で、非常によくできた。そこで演芸会をやった。私なんかは民政部関係でしたが、その連中でやる。そのときにNHKのアナウンサーをやっていたやつがいるんだ。それはいまでは引退していますけれどね。それから海軍とか、北海道から来たり、島根から来たり、いろいろな人がいたけれど、民政部の連中だった。そういう連中で何かやろうということになって、集団でバラエティみたいなことをやりました。

武田 何をやりましたか。

大室 歌もあり、踊りはないけれど。その頃コントみたいなものをやった。

武田 先生もやられたんですか。

大室 私と、そのアナウンサーがプロデューサーみたいなもので、私なんか歌も――。

武田 宴会部長ですね。

大室 これはおまけのところですが、いいんですか、こんな話をして。

武田 もちろんです。それこそ本人に聞かないとわからない話ですから。

大室 それはみんな、浪花節をやったり、落語をやったり、歌をやったり、いろいろあるでしょう。昔は特に浪花節が上手な人がいたりした。その審査員の中に林伊佐緒がいたのかな。そうしたら、われわれが優勝しちゃったわけだ。これはうまいものが食えるぞと

思っていたけれど、もらったのはテーブルセンターなんだ。こんなものをもらったって、食べられないじゃないか(笑い)。それでみんなもいらたがらないんだ。船にあった備品か何かだからね。

馬場 初步的な質問ですが、浅間丸は海軍の船になるわけですね。

清水 徴用船ですね。

大室 徴用船だから、その中に陸軍もいるし、便乗するわけです。えらい人はみんな海軍でも陸軍でも飛行機で行くから。

馬場 いわゆる民間の人は乗らないわけですね。

大室 民間の人も乗っています。陸軍も海軍もいろいろいる。陸軍はごく少数ですが、現地に行っているいろいろ働く人、技術屋もいれば、いろいろな人がいる。

馬場 いわゆる軍属とか、そういう人たちですか。

大室 軍属とか徴用工とか、いろいろですね。

清水 民間の非軍人が乗っているのは、そもそも当時、便船がほとんどないからです。

大室 船がもうないんです。大きなもので、龍田丸がやられて、鎌倉丸がやられて、最後が浅間丸だったんです。浅間丸は、これをやって、もう一回航海をしてから、やられるんです。

武田 さて、どうしましょうか。終戦どころか、まだセレベスに着いていませんからね。

大室 雑談になって申し訳ないけれど、本当のことを知っている人がいないんだ。

清水 さっきお話ししましたが、浅間丸コレラ事件というのは、衛生関係をやっていての方にとってはすごく重要な事件のようなんですね。実際に経験された方で、先生のようにお元気でいらっしゃる方はそんなにいらつしやらないんですね。

武田 コレラにもかかわらず(笑い)。

大室 一番驚いたのは、浅間丸でコレラが出たでしょう。医者はもちろんだけれど、経験があるものとか薬剤師とか、みんな手伝

いに出るんです。中に神戸から行った薬剤師がいて、進んで行つたわけです。行ったら、たちまち感染しちゃって、上がってから第一号か二号ぐらいで亡くなっちゃった。だから怖いものですね。みんな、彼だっちゃんと注射しているんじゃないのか、と言っていたんだけれどね。

清水 さつき先生は検便の話をされていましたが、衛生の人が聞くと、それをどうやっていたか知りたいと思うんです。外地でまさに何もなかったところでやるわけですから。

大室 これはねえ（笑い）、馬場さんの前では言えないけれど（笑い）。毎日お尻を出して、ガラス棒を突っ込むんですよ。

武田 それは朝晩ですか。

大室 いえ、一回だけです。一日に一回は必ずやる。だから中には痔の人だのいるでしょう。痛いとか痒いとか、そんなことを言ってもー。

馬場 軍医さんがやるんですか。

大室 兵隊に衛生兵みたいなのがいるわけです。ガラス棒ですよ。こんなに長い「二〇〜三〇センチ」。それをやって、全部消毒しなければ大変でしょう。それはやる方だつて大変ですよ。何百人じゃないんですから。そのときに誰かに言われたんだけど、女の人はどうしているんだろうと言われたけれど、これはわれわれは関係ありませんでしたから。

清水 三千人分の検査をすることは大変なことですね。当然採取して検査するわけですね。その検査だけでもすごく大変ですね。

大室 大変ですよ、だからもう大事業ですよ。

清水 そう考えると、検査用の資材とか薬品も当然いるはずですね。

大室 それがもともと、隔離島にそういう設備があつたんですね。だけど、船に乗っていたやつが全部来たんだから。

武田 毎日検査だと、日課みたいなもので慣れちゃいますかね。

大室 終わってからだけれど、やっと解放されたというか、船が出るということになったときには、みんなそれこそ大喜びだった。それは大変でした。船の方も大変ですよ。消毒はするしね。そういうことが一切「外に」出なかったものですから、わからないんですよ。終わってから、「出航した」浅間丸はバリックパパンというところで終点なんです。バリックはご存知でしょう。石油の基地があります。ところがわれわれはそこからマカッサルの方に行くものですから、バリックで降りて、乗り換えて、マカッサルに行くんです。そのときに、何という名前だったか、水上機母艦、水上機に飛行機があるでしょう。その船がありました。徴用した聖川丸とかいっていたけれど、それが改装されて折りたたみ式になっていて、フロートがついた飛行機があるんですね。それを何十機か積み込んで輸送する船だったんです。その船がブーゲンビルの方に行く。その船を護送するために、駆潜艇が一隻か二隻ついていて、マカッサルに行くというので、われわれは便乗したんです。そのときにはもう百人もいなかったかな。

武田 それは全部民政府の要員ですか。

大室 そればかりではありません。いろいろです。マカッサル方面に行く人なんですね。

武田 どういう方が行くんですか、民政要員以外の方は。

大室 われわれは十人足らずでしょう。百人もいないから、何十人だったかな。喜んだのは、酒保が使えたということで、そういうことが先だった。ところがそれがすぐに出航して行ったところが、まもなくだったと思いますが、進軍ラップみたいなラップが、タカ、タカ、タカと鳴るんです。敵飛行機が来たというんです。そうするとみんなそのころ船に乗っている人は、いつでも死んでいいというのか、一番いい一装用の服を着ているんですよ。作業服じゃないんです。その連中がダダダと出て行って、それぞれ配置に着くんです。われわれは、ここに大砲の弾があるから、い

ざというとき。人数が少なかったんだ。四、五十人いなかったのかな。またここでやられるのかな、と思った。ところが幸いにして、またこれも味方の飛行機でした（笑い）。

清水 撃ち落とさなくてよかったですね（笑い）。

武田 オチがきました。

大室 それから一晩経って、マカッサル港にやっと着いた。それでやれやれと思っていたところが、われわれはコレラの疑いがあるというので、病院に隔離されちゃった。

清水 先生、今度はシンガポールを出られたところから、また改めてお伺いしたいんですが、次回を決めてよろしいですか。

大室 ああ時間ですね。いいんですか、こんな話ばかりしています。

武田 ええ、いいですよ。次回は、今日の大旅行の補足があればお聞きして、実際にこの民政府の情報課の話と、タラカン州の知事庁の時代の話を聞いて、ぜひ終戦のところまでお話を聞けたらと思います。

大室 私は本当は、ボルネオの未開のところの話をしたいんですよ。

清水 それを次回いただければ。

大室 いま日本からもういぶん学者が行って、現地地いろいろなことをやっていまして、その方から本をもらったりもしています。が、本当の現地のことは知らないんですよ。われわれだって普通には行けないけれど、やむを得ず行っちゃったわけでしょう。

武田 ぜひ聞いてみたいですね。楽しみです。

大室 それは、もう少し元気だったら先にやろうと思ったけれど、とうとう行けなかったですからね。行く機会があったんだけど、どうも行けなかった。例えば一つの例で、私もが知っていて、これはほかの人は知らない。刀をやるときに、砂鉄をやるでしょう。日本でも島根県なんかでやっている。それと同じように、現地で原住民が鍋だの釜みたいなものをつくっているところがある

んですよ。それは秘密の場所で、それを作るときには村を挙げて行くわけです。そして、どこどこに行くと、アエルバトという石炭のようなものがある。どこどこに行くと鉄がある。それでもって自給自足していたところが一部あるんです。

武田 先生は文化人類学者ですね。

大室 そういうことを知っている人はいない。秘密だから教えないでしょう。

武田 じゃあ、ぜひ次回お願いします。

大室 それは、先生方の範囲じゃないので申し訳ないんですけど。

清水 いえ、記録に残しておきます。

武田 先生のお話を聞いておかないと。

大室 だからタラカンの山の中に入っていったら、ブナン族というのがいるんですが、いろいろあって、狩猟民族なんてよく言っていますね。山の中に住んでいるんですが、そういうところには行けないですからね。こっちはやむを得ず行きましたでしょう。

清水 最後に一件だけ、小松東三郎さんに誘われていくときに、先生がぜひ小松さんと一緒に行きたいとおっしゃったというお話がありました。それはどうしてですか。

大室 小松さんのほうも、「今度行くことになるからぜひ」と言ったのは、その頃は家にいても徴用になるか何かでしょう。私はそのころ、甲種合格の次の第一乙種なんですよ。だけど、兵科は騎砲兵というんですよ。騎兵で大砲をやっているというので、小さな大砲をつけて、馬と一緒にやる部隊はぎりぎりぐらいでして、習志野に一つあって、ハイラルにあって、二つか三つしかない。府中の人がわりあいに行っているんですね。「馬場氏に向かって」コバヤシテツオを知っているでしょう、コバヤシさんなんか先に行っちゃったんだ。あれも同じ騎砲兵なんだ。だからちやうど徴兵検査の頃、騎砲兵をとったんでしょうね。そういう関係があって、いつ来るかと思っていたけれど、私だけなかなか来なか

った。そのうちに海軍の話が出ましたから、急いでやらないと、またそっち「騎砲兵」に召集されても困るな、と思っていたんです。海軍にきっちり決まったのが五月でしょう。そのあいだに陸軍の方と話がついているのか、心配だったんです。

武田 やはり海軍のほうがいいんですね。

大室 その頃は大陸より、海外に出たほうが天地が広いような気がしてね。

清水 わかりました、ありがとうございました。

大室 ただ私はいろいろな危ない目に遭っている。そういう意味では、本当に上手にやると、経験が、面白いドラマになる。もったいないと思う。だって飛行機で乗り損なったり、船であれになったりとか、そんなことばかりでしょう。おまけがずいぶんある。

武田 コレラにもかからない、丈夫なお体で。

大室 水艇「水上飛行艇」という飛行機があるでしょう。フロートの付いた、四発の。それにも乗ったしね。それに乗ったところが、途中でエンジン故障で、川の真ん中でおかしくなっちゃって、そういうおとはちよつとないものね。たまたまそうなっちゃった。そうして歩いたら、狭いところでワニに会いそうになった。

武田 どうもありがとうございます。大変楽しいお話でした。

馬場 面白い、と言ったらいけませんけれど。

武田 次回の日程を決めさせていたでいてよろしいですか。

大室 どうもこっちは少し怪しいので。

馬場 いえいえ、お元気になってよかったですね。

大室 まだ、本当のことをいうと、駄目なんですよ。だから言っていることがおかしいでしょう。

武田 いえ、全然おかしくありませんよ。

馬場 おつらいですか。

大室 いや、つらいといいますが、すらすらと出て来ないんですよ。

武田 それはしょうがないんじゃないですか。私もまだ三十ですけれど、ときどき出て来ないこともあるので（笑い）。

大室 字が書けないんですよ。それから資料は必要ですか。

武田 先生のお話を冊子にまとめるときに、必要な資料をいただいたんですが。

大室 もしなんでしたら、市会選挙「の資料」はここにありますが。あと精動と翼壮年団のもあります。少しまとめてあるけれど、ちゃんと見たりできないんですよ。

武田 こちらのほうでいたしますから。これはうちの大学のお金で送れる伝票なんです。ですから、空いている段ボールがあれば、宅急便の準備をして送ることもできますし、先生の方でやっていただいてもいいんですが、もしよろしければ私がやりましょうか  
「資料を段ボールに入れる」。

（以上）

# 大 室 政 右

## オーラルヒストリー

### 第 7 回

日 時：2003年2月19日（水）

10：00～12：30

場 所：大室政右宅（府中市）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

武田 知己（政策研究院特別研究員）

清水 唯一朗（政策研究院リサーチアシスタント）

馬場 治子（府中市郷土の森博物館学芸員）



## ■ マカッサル到着

**清水** それでは先生、今日のお話をお願いしたいと思います。前回は「昭和十八（一九四三）年九月に」マカッサルに到着されるまでのお話いただきました。

**大室** ああいう話でいいんですか。非常にいろいろな波乱がありましたでしょう。マカッサルにやっと着いたところまでいったんですかね。着きましたのは、聖川丸（きよかわまる）という、フロートのついた飛行機の水上機母艦みたいなものですね。聖川丸はもともとは海軍の徴用船なんですが、七千トン近い船でした。それに折りたたみのあれ「水上機」を積んで、ブーゲンビルのほうに行く途中だったんですね。それに便乗して、われわれがマカッサルの任地にやっと着いたのは、出航してから五十幾日かかっていますね。七月十日頃に呉から乗っていますからね。

**清水** 隔離されていた一ヶ月間も合わせて五十幾日ということですか。

**大室** 全部で五十日以上だと思いましたね。

**清水** すごく長い船旅ですね。

**大室** あいだに約三十日間、コレラで「シンガポール沖ウエストジョンストン島に」封じ込められたしね。それから今度はバリクパパンというところへ行って、そこで浅間丸はおしまいなので、いまの聖川丸に乗り換えました。これは護衛が二隻ぐらい付くんですね。飛行機を積んでいますからね。それでマカッサルに着いて、その日にすぐに宿舎みたいなのに入っただけです。そうしたらすぐに「コレラ組はいったんは」といって、郊外の病院に入られてしまうんです。入れられたけれど、やっと助かったといつてみんなのびのびとしていたんですが、その晩が空襲なんです。夜だったんですが、われわれは最初は防空演習をやっているのかなと思ったら、そのうち本物が来まして、えらく派手に銃撃戦

みたいなものがあつたんです。われわれはみんな、防空壕に入れないといわれる前に、海岸線に出たんですね。マカッサルの海岸線の一キロ以上離れたところがやられている。敵の銃撃とこちらの銃撃が何かがよく見えて、火花を散らしているのが実にきれいで、花火よりきれいだつた。これには驚きました。機関銃の音がするでしょう。

あとになつてわかつたんですが、ほとんど向こうが撃つていた。こちらは護衛の船、駆潜艇が戦つたんですが、聖川丸などは逃げたようですね。ところがそれが激しい銃撃戦で、われわれも花火大会をずいぶんやりたり見たりしていますが、すごくきれいなものだな、と思いました。そのうち、急いで防空壕に入れなんて叱られたんですが、さすがに日本軍はやるな、と思つていたら、あともなつたら、ほとんど向こう側が撃つていて、こちらには大砲などもあまりないわけですね。護衛の船が撃つたのが主だったんですね。あくる日聞いてみたら、護衛の駆潜艇が沈没して、乗っていた人が戦死しているんです。それが始まりなんです。

**清水** 聖川丸というのは、どういう船ですか。

**大室** 日本海汽船だったかな、そこからの徴用船だけれど、最新鋭の船を改装したんですね。二十〜三十機、普通の飛行機ではなくて、折りたたみの戦闘機を載せていた。

**清水** 比較的大きな船だったんですね。

**大室** 大きいんです。大きいけれど、軍艦みたいな船ではないんですね。普通の船なんです。それが戦場のほうへ輸送をするわけですね。途中で、間違えて戦闘ラッパを吹いたのでびっくりしたんですが、敵飛行機発見、というのが出るんですね。あとで間違いだということがわかつたけれど、そのときに私が「もし来たらどうなんですか」と聞いたたら、「航空燃料をたくさん積んでいるから、一発でお願いします」と言っていましたね。でもこの船は戦後まで助かつたんです。

マカッサルに着いたその日から夜は空襲で、市内は火事になったりしました。私どもの宿舎は、この間からお話しした情報課長の小松「東三郎」さんが同じ宿舎で、もう一人、秦泉寺さんという人と三人でいたんです。空襲があると、おまえは慣れていないからといって、待たされちゃうんです。他の人はみんな自転車で郊外に飛んでいく、原住民は逃げる、こちらは―。

**清水** 先生は民政府には行かせてもらえなかったんですか。

**大室** 最初は、防空壕がないでしょう。そのころは乾季ですから、大きな下水道の中に入らんです。幹線道路「の下」がずつと下水道になっているんですね。こんな大きなあれ「直径二メートルぐらいの管」があるでしょう。それが宿舎の近くにあるから、そこに入って待機している、というわけです。

**武田** 人が立てるぐらいの大きさですか。

**大室** 道路の下が下水道になっているんですが、その管が大きいんです。なぜかという、乾季の時には水は全然ないけれど、雨季になると大変なことになるんですね。

**清水** ちなみに雨季の時はどこに逃げられるんですか。

**大室** 雨季の時は空襲がないから助かるんですけれどね。雨季になると違うんです。われわれは九月の初めに着いて、それから一ヶ月ぐらいでちょうど雨季の時期になるわけです。雨季というのは、朝から晩まで降っているわけではないんです。スコールなんです。これがつきりしてまして、今日から雨季になったよという、雲が出てくるんです。どういうわけだろうと思っていると、そのうちに雷が鳴ったりする。それであくる日からスコールが来るわけです。それが一日に三回も四回も来て、ザーッと来たときには、傘を持っていても何をして、びっしょりになります。ところが何時間かですぐ上がるわけです。そうすると涼しくていいんですが、それが一日に三回も四回もあるんですね。

**清水** そうすると空襲は来ないんですね。

**大室** 雨なんか降っているから、わりあいにかかっている。月夜の晩には空襲があるけれど、そうでないときは来ないわけです。雨季には雨が多いでしょう。だからわりあいに助かるんですね。

**清水** 先生はマカッサルに着かれて、「南西方面艦隊」民政府「総務局」情報課ということなるわけですね。そして情報課長が小松さんということですね。

**大室** それで初めての課員です。戦局は十八年ですから少しおかしくはなっているけれど、民政とか、こちらでいうと軍政だったんでしようが、その組織がだんだん整ってきて、まだ平和的な段階だったんですね。それが着いた頃から怪しくなったわけです。

**武田** 戦局が、ですか。

**大室** ええ、というのは十八年になってから、私たちが乗っていた浅間丸はやらなかったけれど、その前の鎌倉丸はやられた。鎌倉丸というのは、浅間丸と同じぐらいの大きな船だったでしょう。それがやられているということは、ほかの輸送船も、潜水艦に相当やられているということなんです。それで、四月に山本「五十六」元帥が前線で作られているでしょう。そのように、戦局が急に変わりつつあるところだった。

ところが向こう「マカッサル」ではそうではないから、十七年から用意していたんです。小松さんを課長にして、情報課といっても広報課みたいなものをやろうということで、NHKのラジオのスタッフとか、いろいろなことをする新聞の関係を集めてきたんでしようね。

## ■情報課の活動

**清水** 情報課という名前でも、活動の内容は広報課だったというお話ですが、具体的にどんなことをされたんですか。

**大室** そういうことも含めて、大きな意味でいろいろやっている

のは、新聞報道の検閲をかけるとか、日本館をつくるとかいう構想があつたんですね。軍政というか、治める中で考えていたわけです。それがだいたい変わってきた。第一に、着いたときに聞きましたが、鎌倉丸がやられている。情報課のスタッフは全部で二十人ぐらいいて、そのうち本部に行く者、ボルネオ民政部に行く者、セレベスに残る者、セラムの民政部に移動する者がいたんですが、そのうち一人か二人しか行けなかったわけです。本部のわれわれの仲間については、そのころ専任で来たのは、NHKの要員が二人ばかりいただけ。あとは現地採用の事務員みたいなもので、私が行ったときにもう一人、秦泉寺さんという奏任官待遇の人がいました。この人は北か南の方に行つてから海軍に入ってきたんですね。

**清水** 秦泉寺さんは、官僚ではないんですか。

**大室** 奏任待遇者だった。秦泉寺さんは非常に器用な方だった。その方と小松さんが同じ宿舎だったので、私もそこに入れてもらった。秦泉寺さんとはずっと一緒にやりました。最初にやった仕事は、講習を受けていろいろやりましたが、情報課というのは二階建ての広い建物を使っていたんですね。本庁と離れて、別室みたいになっていた。課長は本庁のほうにいましたが、現場のほうですね。ところがいま言ったように、スタッフは来ないし、秦泉寺さんと私で、あとNHKの人はラジオをやる人たちだったんですね。

行つてまもなく、「大室君、これを頼む」と、堀さんという後にNHKエンタープライズの社長をやられた、帰つてから総務局長をやられた方から言われました。その方が非常にいろいろなことを知つていて、検閲だとか新聞報道は、それから私が引き継いでやつたわけです。

**武田** 現地には日本語の新聞があつたんですか。

**大室** いやそのころ日本語の新聞というのは、セレベスはセレベ

ス新聞、ボルネオはボルネオ新聞、セラムのことはよくわからなければ、セラムにもあつたと思う。それは三社が分担でやっていたわけです。ボルネオは朝日とか、セレベスは毎日とか、セラムは読売とか、みんなスタッフが行つていて、現地で新聞を出していた。

**清水** それは日本語の新聞ですね。

**大室** そうです。われわれがやっていたのは、官庁もあれば、民間もいるでしょう。だいたい同盟通信がそのころ中心だったんですね。同盟通信の書いた記事を内地に送るときに検閲するわけです。だいたい記事がわかつていますし、これとこれはいかん、ということがありますから。

それをやって、失敗したことがあるんです。私は検閲の内容を知っているでしょう。セレベスといつても、こちらは本部民政府で、もう一つはセレベス民政部というんですが、NHKのアナウンサーが、民政部の方でラジオをやっていたわけです。一緒に船で行った連中でしたから、「何か材料がないか」と言うので、「いいものがあるよ」と言つて、同盟通信の記事を見せちゃつたわけだ。検閲したものだけれど、これから向こうに送るものだ。そうしたら同盟の支局長に怒られた（笑い）。同盟の支局長でも小松さんとは昔から仲がいいですから、怒鳴り込まれて、小松さんも困つたけれど、こつちはひたすら謝つたんですね。

**清水** そのNHKの方は、民政部付ということであつたんですか。

**大室** それは情報課の要員で、ラジオを専門にしていたんです。アナウンサーも、こちらのほうのスタッフはいなかったけれど、ラジオの関係、NHKなどは先に別に配置していたんですね。あのころは短波でもないんでしょうけれど、有線のラジオを主なところでやっていたわけです。マカッサルはセレベスの中心でしょう。マカッサルの中心の広場に何ヶ所か「有線ラジオを」引つ張

って、日本の音楽を聴かせたりしていたわけですね。

**武田** 当時日本人はかなり多かったんですか。

**大室** 相当いたと思いますね。マカッサルというのはセレベス島でしたが、ボルネオに比べると開けていた方ですね。そこが、ボルネオ、セレベス、セラムを押さえていた中心になっていたわけですから、都会的なものがありました。それからタマリンドというきれいな樹並木がありまして、そこにはサルがたくさんいました。人間が住んでいるところにサルが来たりしましたけれど、きれいな町でしたね。海岸のいいところに海軍民政府がありました。が、もともとはオランダの役所だったわけです。それがそのまま残っていたので、使っていたわけです。その近くにマカッサル研究所といって、現地の農業の指導とか、農産物の研究をするところがあつて、学校の先生とか大学の教授も来ていました。ほかに生物などの研究もしていたのかもしれませんが、マカッサル研究所という研究機関が付属的にあつたんです。

**清水** 野球の試合と一緒にやられたところですね。

**大室** そうです（笑い）。ところがそういうものもみんな、少し経つと機能発揮どころではなくなるわけです。

## ■マカッサルでの日常生活

**武田** 日常生活は日本語でもだいたい事足りるわけですか。

**大室** 普通は日本語でやっていますね。原住民を使うときに、マレー語を使うわけです。現地の物売りは華僑の子供が多いんですね。商人は華僑が多いんです。その華僑の子供たちが、最初のうち、われわれが行った頃はまだ空襲があつても「物売りを」やっています。朝早く「カッチャンゴーレン」なんて言つて、三角の袋に入れた落花生を売っていた。それから「トロール」といって卵を売っていたり、朝早くずっとやっていたんでしょうね。そ

のうちになくなつてしまひますけれどね。同時に華僑の連中が、われわれの宿舎に来る。新しいのが来たとわかると、時計だとか売りに来るわけです。

**清水** 日常に必要なものを持つてくるわけですね。

**大室** いくつも見本みたいなものを置いていくんです。「そんなものは要らない」と言つても、置いていつて、「これを見てください」なんて言う。ときどき冗談を言つて、「そんな物を預かったことはないよ」なんてやるんです。こんな小さい子がやっているんですから「二メートル二〇センチぐらいの高さを手で示す」。大したものですね。

**武田** それは日本語ではなくてマレー語でやるんですか。

**大室** いや、ほとんど日本語でやっていましたね。そういうものとか、普通のあれ「生活」では困らなかった。最初のうちは果物はおいしい、食料には困らない。米は外米でしたけれどね。

**清水** お食事は宿舎なり民政府なりの中でされるんですか。

**大室** われわれは昼になるといったん「宿舎に」帰つて来るんですよ。最初は贅沢なことをしているなと思つただけで、なるほど、それをやらなければもたないんですね。

**清水** 暑いから、ということですか。

**大室** 昼は二時間ぐらい休憩して、みんな帰つてきて、マンデーシャワーのことですねーをして、そして食事をするんですが、ちようど食べた分ぐらい消耗してしまふ。暑いから汗びつしより。カロリー「が必要です」。そのあと三十分ぐらい仮眠をするわけです。そういう時間がとつてあるわけです。だから昼「休み」は二時間半ぐらいあるのかな。最初は、戦時中に何をやっているのか、と思つたけれど、だんだんそれがわかつてきたわけです。それからまた六時ぐらいまで仕事をしに行くんですね。

一番いい例が、最初にわれわれ新米が行くと、役所まで一キロぐらいあるから、自転車を自分たちで購入するわけです、幹旋し

てくれるけれど。それに乗って行くんです。最初に行ったやつはみんなこうやって「激しくペダルを漕いで」走るんです。ところが慣れた人は絶対に力を入れないんです。だから、ああ新米が来たな、ということはずぐわかるわけです。

**武田** 一所懸命漕いでいる人「が新米なん」ですね。

**大室** それだけ労力、エネルギーを使うと、一食分すぐになくなっちゃう。空襲の時は別で、飛んでいきますけれど、日本から来ると普段の癖でしょう、こうやって「一所懸命」漕ぐでしょう。そういうことがなくなつて、こうなっちゃう「ゆっくり漕ぐようになる」んです。

**武田** 服装も、半ズボンに半袖みたいな感じですか。

**大室** そうです。夜空襲があると長いのを着て行っていましたけれどね。最初のうち、私どもがびっくりしたのは、花が四季に咲いていることです。一年中咲いていると気になるものです。枯れたりして、変わらないとつまらない。そのうち雨季になると世の中変わってきて、水はいっぱいになるし、海岸の近くの溝からは魚がどんどん上がってくるんですね。下水が枯れていたでしょう。そこに水が来ると、大きな魚ではないけれど、これぐらいの「両手を十センチぐらい開く」魚が下水から上がってくるんですね。

**清水** 自然が豊かなところなんですね。

**大室** 最初のうちは、空襲があつても優雅だった。そのうち空襲が激しくなると、それは大変なんだ。「優雅だったのは」半年ぐらいだったんじゃないでしょうか。

**清水** 先生、さきほど同盟通信が内地に送る記事を検閲されているというお話だったんですが、現地のマレー語の新聞というのはないんですか。

**大室** マレー語の新聞もあつたんじゃないかと思えますけれどね。

**清水** それは民政府の方ではノータッチですか。

**大室** そのころやっていたときは、現地向きの日本語が多かった

みたいですね。

**清水** 現地に対する日本語の新聞を出すのをどうするか、ということなんですね。

**大室** ええ。あそこは基地ですから、何人でもないけれど海軍の兵隊もいるし、飛行機も多少あつたし、いろいろなことがありましたからね。マカッサルというのは重要な基地ではあつたわけです。

**清水** 日本人と地元の方たちとの関係というのはどうでしたか。

**大室** 行っている日本人というのはだいたい何かをやっている人で、ただ行っている人はほとんどないわけでしょう。徴用されているとか、商社関係だとか、みんな半分軍人みたいなものですけれどね。そういう連中は、そのころは空襲はあるけれど、映画館も有料でやっていたわけです。連中「原住民」もなるべく日本人に買ってもらったりすることをやっていましたね。それが空襲が激しくなると、みんな逃げ出しちゃつて、変わってくるわけですね。

## ■ 当時の生活と戦局概観

**武田** 先生は、戦局のわりと詳しい様子までわかるような立場にいたわけですか。

**大室** 戦局というのは難しいんですけど、いろいろなことがありました。われわれは例えば大本営発表でもあるとすぐに短波で聞いて、私は速記録はとれないけれども、急いで書いて、発表するようなことも何回かやりました。それから、全体的なこととはだんだんみんなわかってくるわけです、大変だということが。

だからわれわれがタラカンに行ったときは、その覚悟で行っているわけだけれど、タラカンに行っていた連中はそれがわからないわけです。のんびりしているんですね。われわれが、「戦略的に見てもタラカンは石油の基地だから一番先にやれるよ、そういうときはどうこう」ということをいくら言っても、現地の連中に

はなかなかわからない。わかったときは、もうおしまいになったときですからね。マカッサルへの爆撃といっても、マカッサルは軍事的な基地はたいしたことがないんです。要するに民政府の中心でしょう。それを狙ってくるのは、ニューギニアの方を最初に取りれたからでしょう。ニューブリテンか何かを豪州組に取られるでしょう。それがだんだん上「北西」にあがってくる。あそこは何とていうか、豪州領の近くに向こうの基地があるんです。それだんだんこちらにあがってくるんですね。

武田 そういうことは民政府で発表するわけではなくて、仕事をしているとなくわかってくるわけですか。

大室 戦況というのは毎日のように来ます。大本営発表のときはね。一番失敗したのは、ミッドウェーの戦いだったんです。私なんか一番先に景気よく軍艦マーチをやるものだから、急いでこいうやって「短波を聞いて」、航空母艦なんかやられて大破とていうのがあるけれど、向こうばかりやられたと思っていた。よく見ると、こちら半分ぐらいやられている。本当はあれが負けた一番の原因なんですね。それから戦局というのはいくらも変わってくるんです。

あとになってこれは大変なことだとわかったのは、そのころ一番日本が遅れていたのはレーダーなんです。これは日本でもやっただんですが、向こうのレーダー「の測定距離」がこれだけあると、日本のはこれぐらいしかない「アメリカのレーダーより測定距離が短いことを手で示す」。山本元帥がやられたのもレーダーでしょう。それで急いでやって、軍艦のところにそういうあれ「レーダー」をつけているんですけれどね。

私どもは途中で、これはタラカンに行つてからだと思ひますので十九年だと思ひますが、軍艦の「比叻」というのが来たんです。そのころ巡洋戦艦といつていたんですが、改装して四万吨ぐらいになっていた。特別の艦隊が何かで、六、七隻の船を従えて寄

つたことがあるんです。船が寄るとみんなで歓迎したりする。そのころは日本人だつて何十人、そんなにたくさんいるわけじゃないですが、そのときに話を聞いたんです。要するにレーダーが大変だったという。

船の一番高いところは、大きい船だと百メートルぐらいあるでしょう。長さが二百メートルぐらいありますからね。その一番上に若い将校がレーダーの係として乗っているんですね。ちょうど三疊ぐらいのところに二人ぐらいで乗っている。普通に船が動いていても、こいうやって「傾いて」動いているでしょう。戦闘になるとこいうなる「さらに激しく傾く」ものだから、普通だったら座つていられないんだそうです。それで「体を」縛つてやつてい。慣れないうちは戦闘どころじゃなくて、自分の身が危ない。こいうところに行つて話を聞いたことがありますね。そのときに、レーダーの威力が向こうと比べると、なかったんですね。

清水 タラカンの町には日本人が何十人ぐらいで、そんなに多くはいなかったということですが、マカッサルには軍がいたんですね。

大室 マカッサルは警備隊といひまして、第二十二根拠地かな、根拠地隊といひのがあるんです。根拠地隊があるし、何百人はいたのかな。それから一般の日本人もいひましたよ。

清水 軍の方と民政府の方はどういひうお付き合ひ、交渉があるんですか。

大室 海軍の民政府といひのは、全体を見ているでしょう。民政部といひのは現地の税金のことをやつたりしているわけですね。われわれ「民政府」のほうは、それよりも全体的なことでしたね。清水 そうつすると、海軍の部隊との連絡はそんなにとることはないんですか。

大室 民政府でやつていたことは、部隊なんかとは関係ないですね。ですから、普通の住民の管理みたいなことを民政部がやつて

いたわけですね。役所みたいなことですね。

清水 先生がマカッサルにいる頃に会われた方で、特にご印象に残っている方は、小松さん、秦泉寺さん以外にどなたかいらつしやいますか。

大室 そんなに広いところではないですからね。そのとき一番上の総監は山崎「巖」さんという、後に内務大臣が何かをやった人がいるでしょう。それは民間人が登用されていました。その下の政務課長というのは、海軍の軍人がいるんです。柳原「増蔵」というのが政務課長でした。それから、少将ぐらいのものがいたな。トミナガ「富永昌三カ」もいつべんいたんだな。最初は海軍民政府を中心にして、あの地区の軍政をやっていた。それが軌道に乗りだしたんだけど、そのうちに全体がおかしくなった。

武田 先生は、ちょうど戦局が悪くなる端境期みたいなときに行かれたんですね。

大室 一番の問題は、ガダルカナルの戦前から、あの近くのブーゲンビル島というのは離れた島なんです。それを死守するため一個兵団ぐらいがいて常駐していたけれど、最後にはそれが置いて行かれて、こつちに来たわけでしょう。その頃から戦線が伸び過ぎていたんですね。

武田 当時の印象としても、戦線を広げ過ぎだという印象でしたか。小松さんとか大室先生の話の中で、そういう感じがありましたか。

大室 最初のうちはそういうことを考えていなかったけれど、一番は輸送ルートがやられてしまっているわけです。現地に行ってみて初めてわかったことは、しょっちゅう輸送船がやられているということ。フィリピンに小さな海峡があつて、そこを、日本の陸軍などの大きな船でなくとも、輸送船が通つても、毎回やられちゃうんですね。やられた連中は、爆撃されたりしても全部死なないんですね。多いときは半分ぐらい生きています。そ

の人たちが集まつて、島に上がつてきて、残った兵隊を集めて部隊を作るわけです。それがいくつもあるんです。なかには二回も三回もやられた人もいます。気の毒に。そういう兵隊をまとめて、こちらに送り込んでくるわけです。向こうが駄目になると、ボルネオ―私なんかが行つていたタラカンもそうだし、あとからバリクパパンにも一個大隊、約千人ぐらい来る。ところがほとんど武器を持っていないんです。みんなやられているでしょう。現地調達したりしているけれど。確かに陸軍は強いんだけど、われわれがタラカンに行つてからもそうですが見ていると、敵の飛行機が来て爆撃されても、こちらは撃つことができない。

そのとき機関砲というんです。高射機関銃みたいなものが何基ありまして、これが大変な威力を発揮したんです。これはタラカンの場合です。タラカンは小さな島ですから、飛行機が来るとわかるんですね。ところが来る飛行機も、遠くの方から来るわけだから、島に入ってくるルートがあるわけです。小高い山がずっとありますから、その山のいいところにこちらが高射機関銃を用意しておく。ちょうど回つてきて、飛行機の腹と言つていましたが、横切ったところにそれが当たるものだから、非常に威力があつたわけです。今度はそれが狙つてくると、こちらが移動するとかね。ところが大砲はないんです。あとになってみて、タラカンでは高射機関銃で何十機と落としている。変な計算をする人がいたけれど、日本人がやられたよりも、向こうの方が犠牲が多かつたんじゃないかという。タラカンは最後でも三千人もいないかな、最後にはやられますが、全部が死ぬのではなくて、三分の一に近い人が捕虜になるわけです。その人数を考えると、向こうと比べてうんと少ないでしょう。

武田 先生は敵軍の捕虜の管理みたいなことはやられたんですか。

大室 捕虜になつてからはそういうことはありません。最後になつてタラカンが爆撃されるときにはずっとおりました。タラカン

の爆撃が始まった頃、われわれが小松さんの後を追ってタラカンに着いたわけです。タラカンに着いたときには、小松さんだつてそういう覚悟をしていたけれど、やられるということを知っていたわけです。

ところが現地に行ったら平和で、夜になると散歩に出たり、長いものを着なくても、ジャラン・ジャランという半袖半ズボンで、戦闘的ではないんです。そういうところに赴任して、少し経ったときに小松知事が、「みんなこれから大変なんだから」と言っても、それが受け入れられないんです。「平和なところに来て、そういうことを言ったら困る」という感じなんですね。もう危ないんだ、今度来るんだと言つても、そういう認識がないんですね。最初に食料増産を考えて、自給自足しなければならぬといつて芋をつくつたり、勤労奉仕みたいなことをやらせるわけです。いまのうちからやつておかなければいかんというわけです。ところが、最初はずいぶん反対されましたね。「そんなことをやると人心を動揺させるからけしからん」というんです。

清水 どなたが反対されるんですか。

大室 内部の課長連中だとか、前から来ているでしょう。

清水 先にタラカンに行つていた人たちですね。

大室 知事は替わつたけれど、下の連中がさんざん言うんですよ。私なんかはお供で行っているから、さんざん言われた。「おまえたちは余計なことを言っているんだ」という。そのうちに爆撃が始まつて、みんなわかってくるわけです。海軍の守備隊というか、現地の人も、情報は毎日入っているから知っているんでしょが、一般的にはそういう点では認識不足だったんですね。しまいにはそれどころではない、みんな体当たりの戦術などを教わるようになったんですけれどね。

## ■ 民政部の事業

清水 先ほど、輸送路が断たれていることが一番まずいことだった、というお話がありました。が、すぐく孤立しているような感じを当時はもたれていましたか。

大室 例えばボルネオだけとつても、バリクパパンが中心で、すぐ近くにバンジェルマシとかいろいろあるでしょう。そういう中心部はいいんですが、周りの船がお米を運んできても、船がやられちゃう。人間が乗ってきてても、小さなものでもやられるというように、安定したものがありませんね。しょっちゅうやられながら行くわけです。それがフィリピンに行くと、もつとひどいわけです。

清水 そうすると、比較的南の方にいらつしゃつても物資は少なくなつていく感じですか。

大室 場所によつてはさうとう困つていくということです。われわれのほうはまだよかった。タラカンで最後のときには、決死の覚悟で、とよく言われていたけれど、米を運んでいた小さな船が一艘来たんです。これで当分もつと言つて、荷揚げするのは大変でしたけれどね。敵の空襲が来るものだから大変だと言つて、夜中にわれわれも動員されて、米を担いで荷揚げしたことがあります。

清水 タラカンはお米がとれないところだったんですか。

大室 全然とれなかったです。

清水 マカッサルの周辺ではとれたんですね。

大室 マカッサルではとれますね。その輸送ができないわけです。船もないし。しまいにはどうしようもない、ということではないですか、大局的に考えて「どうしようもない」。

われわれが知つたのは、最後にタラカンに行つてからです。スラバヤが海軍の本部だったわけです。陸軍もいますけれどね。それ「海軍」は、第二南遣艦隊、南西方面艦隊とかいろいろあつて、



それが旗艦になつてゐるけれど、船はあまりなかった。けれども、そういう「食料増産の」指令が出てゐる。その参謀がタラカンに來たことがあるんです。今度はタラカンの番だということを向こうは知つてゐるわけですよ。それでどうするかというと、警備隊がいて、「敵が」來た場合には山の中に引つ込んで防衛するという。陣地を作つてそういう用意をしてゐるんだ。

そのときに参謀の話を聞いたんです。私どもは民政部でしたけれどね。そのとき私どもがいちばん驚いたのは、いろいろな戦局の話をして、「なにしろ敵は横綱級だけれど、われわれのほうは小結まで行かない前頭ぐらいで戦つてゐるんだ」ということです。少なくともこつちは、大関までは行かなくても関脇ぐらいの力があるのかなと思つてゐただけで、そんなに違ふのかと思つた。だからそれはどうしようもないから、これを破るには、最後に人間魚雷じゃないけれど、特攻隊以外にないという。それである程度「戦況がわかつた」。

もう一つは、私が庶務主任ということをやつてゐると、海軍からいろいろ文書が來るんです。それはどういうわけだか早く來るんですな。その中に、機密書類というのがあるんです。

清水 どんなことが書いてあるんでしょう。

大室 「秘」というのがある。それから「軍機密」というのがある。これが一番上になる。「秘」だとか「機密」があつて、船の艦籍というんですか、どここの船がやられたので、これは抹消するという。やられてからずいぶん間をおいてですが、艦籍を外すわけです。同時に新しくなつたものは、艦籍に加える。もう一つは、いろいろな委員会をやつてゐる。われわれが期待してゐたのはア号委員会とか、イ号委員会とかで、原子爆弾みたいなものを研究してゐたことがあるんですね。私もそれは多少聞いてゐた。そのうち必ずいいのが出るよ、という。

清水 多少聞いてゐたというのは、來る電報の中からわかるんで

すか。それとも周りの方とお話の中でわかるんですか。

大室 いや周りの人なんか知らないですよ。そういう書類は、私どもや、知事とか上の人しか見ませんからね。ところが、知事やなんかは認識が違うから、全体的なことを知つて、これはこうだということはおわかりだけれど、ほかの課長連中は「わからない」。民政府に來る人は各省の關係なんです、民政部になると府県の単位が多いわけです。

清水 内地と対応してゐるんですね。

大室 そういう關係が多い。「民政部に來てゐるのは」府県だけれど、県庁ばかりではなくて、各省から縣に來てゐる専門家もいます。民政府の人は各省から來てゐる連中なんです。それと同じように、タラカンならタラカンに行くといふいろいろな省の人が來てゐるけれど、税金關係なら国税局の下の方、地方の税務署のような人が來てゐるわけですね。その連中は大局を知らないんですね。それは氣の毒でした。

清水 先生、このときマカッサルの民政府の方にいらした司政官に、どういふ方がいたかご記憶ですか。

大室 大勢知つてゐますよ。

清水 どんな方がいらつしやつてゐましたか。

大室 マカッサルの場合は、総監が山崎さんで、課長ぐらいの人も知つてゐましたね。私が印象に残つてゐる人では、カイデさんという人がいた。労働省の關係なんです。なぜかというところ労働省というのは新しくできたわけでしょう。労働行政をやつてゐたわけです。現地で何かやろうと言つてゐたわけです。私はその発表をする原稿を書いたことがあるんです。そうしたらその連中が來て、「この原稿はどなたが書いたんですか」という。「いや、みんなで相談して」といつたつて、みんなというのはいないんだけれど、「相談して書いたんだ」と言つたんです。そうしたら、「いいことを書いて助かりました」と言われたことを覚

えているんです。それは現地の人を徴用して、というなかなかいい案だったんですね。話を聞いて、私がそういうようなことを書いたのを覚えていらっしゃるんですね。

それから農業関係で、奈良の人で、校長をやっていた人はなんと言ったかな、それも司政官でしたね。そのころは農業関係の専門家を呼んで、野菜を作るなどの指導をしていましたね。私の仲間では、いまの秦泉寺さん、それからNHKの堀さん、もうひとり椿さんという人がいました。これは位（くらい）はあつたけれど、役に立たない。何か知らないけれど、民政府というのはお役所的な立場でしたから。われわれ情報課の方は、そこに行くともんな別派だった。

清水 先生は放送された原稿を書いたりもされたというお話ですが、ほかにはどんなことをされていらつしやいましたか。

大室 検閲の問題、これが大きな問題なんです。もう一つは秦泉寺さんが一人でやったんですが、パッサル・マラームという日本の文化的なものの宣伝機関をやったことがあるんです。セレベスでやると空襲でやられるものだから、ずっと郊外の方で、大きなイベントをやったことがあるんです。これはどこかに書いてあります。これはわれわれも一緒になって企画したんです。パッサルというのは市場ですね。

武田 マレー語ですか。

大室 普通バザールと言いますね。パッサル・マラームというのは、夜の市場ですね。

清水 マラームは夜のことなんですか。

大室 そうだったと思います「タイプした原稿の中から、パッサル・マラームについて書いたものを探し読む」。「安定と宣撫を目的として、現地語でパッサル・マラーム」。これはずいぶん広いところで、竹で作ったんですね。この基本的なものは秦泉寺さんが指導してやったんです。その中に日本を紹介する日本館を作る

というので、そのころ日本画の関係で、判任待遇で日本画の先生も来たんです。

武田 博覧会みたいなものですか。

大室 博覧会みたいなのは、大きな建物を竹でつくったんです。竹が豊富ですからね。そういうことは原住民が早いですからね。そういうものを指導して、竹のかごみたいにして、大きな塔までつくったんです。

武田 これはいつ頃ですか。

大室 行つてからまもなくでしょう。

清水 まだ十八年のうちですかね。

大室 十八年のうちか、十九年の初めぐらいか知りませんがね。このときはずいぶんわれわれもやりました。

清水 日本館というのは、どんなものを展示していたんですか。

大室 いろいろ現地のものを集めるけれど、日本館を作つて、海軍の偉容だとか陸軍の偉容をはじめ、文化的なものです。材料がないんですよ。ほとんど現地調達です。われわれがちょうどあつたポスターを貼つたり切つたりして、うまくつくつて、わりあいによくできたんですけれどね。そのほかに、目玉の一つに、日本画の先生が描いた日本の着物を着たものがある。縮緬のこれだけで千何百かかったんですよ、なんていうようなことをやつたり、いろいろありました。

そのときに一番驚いたのは、現地の人は雪を知らないことです。それで日本館の中にいろいろ出したときに、雪景色を出したんです。そうしたら多くの人が、「日本は豊かでない、こんなにたくさん塩や砂糖がある」という。説明してもわからないんだ、見たことがないから。それは驚いた。えらく豊かだと言った（笑い）。そんなエピソードがありましたけれど、そのときに落雷があつた。これ「パッサル・マラーム」を見に行つてやっていると、われわれは現地を視察したり、いろいろ指導したりしたんです。

そのとき、まだ途中だったんですが、竹でもってこうやる「塔をつくっている」でしょう。スコールが来ると逃げ場がないんです。竹の塔の下が、水たまりもなくてよかったなと思って、みんな集まってきたわけです、十人ぐらい。向こうの落雷はすごいんです。たくさん鳴らないんです。いきなりバリッとくるんですね。そうして、あとになって気がついたら、その中で二人ばかり死んじゃったんです。日本人は何人かいたけれど助かった。というのは、日本人は靴を履いているでしょう。向こうのやつは裸足でしょう。あれは驚いたですね。同じ塔の中にいたのにね。

このときに、いろいろな人を集めるのが難しいので、何をやっていいかと思ったのが、ギャンブルをやらせようということなんです。向こうはそういうことが好きなんですね。大喜びなので、何でもいからやれと言ったら、いろいろなものを持ってきましたよ。

**武田** 現地の人にアイデアをもらうんですか。

**大室** それで現地でやらせるわけです。許可をする。それまでは博打なんかやらせませんからね。みんなやっていますけれど、それを公式に、何でもいからやりなさいといったら、日本の博打と同じように、いろいろな種類があるんです。それをずっとやらせたら、みんな喜んでやっていました。やつぱり同じようなものですね。

**武田** トランプですか。

**大室** トランプなんて一番やさしい方でしょう。いろいろなものがある。もっと驚いたのは、連中が教えてくれたんだけど、独楽みたいに回るのがあるでしょう。針がクルッと回って、ここに来ると当たり、というのがあるでしょう。それをお金をかけてやっているわけです。そうしたら、これを見てくれという人が、テーブルの下で足で操作しているわけです。ちよつとやると、そこで止まるわけです。それを教えてくれたんだ。

**清水** いかさまですね。

**大室** それを原住民に許可したでしょう。輪投げみたいなものとか、勘定があつて入れるといくらだとか、博打がいろいろある。あれはみんな好評でした（笑）。それはみんな秦泉寺さんのアイデアなんです。

**武田** 麻雀とかもやっていましたか。

**大室** 麻雀なんかは、あまりやらなかったですね。それはやってたのもあるんでしょうけれどね。これ「パッサル・マラーム」はわりあい成功した方ですね。成功したんだけど、ときどき空襲があつて、空襲があるとみんな逃げ込んだりして。そういうことをやる時では、最後のイベントみたいでした。だからよかった。

**清水** だいたいマカッサルでされたお仕事はそれぐらいですか。ほかに、特にこれは、ということはないですか。

**大室** マカッサルでは空襲が多くなつたでしょう。

## ■ タラカンへ

**清水** その次にタラカンに移られるのは、本で拝見しますと昭和十九年六月ですか、先に小松さんが移られたわけですか。

**大室** それはいろいろな経緯があるんです。小松さんはだいたい民間人から情報局に入った。民間といっても新聞社ですけれどね。それがほとんど役人でしょう。役人でも知事になるというのは、司政官から司政長官になるわけです。まだ司政長官までいきませんでしたけれどね。知事というのは長官で来ていたわけです。今度小松さんがなるといので、いろいろあつたんでしょう。小松さんが経過を自分で書かれた書類を持っていたんだけど、それで知っておつたんですが、いろいろな経緯があつて、結局、小松さんを起用してタラカンの知事にしたわけですね。

**武田** それは役人の反対があつたんですかね。

**大室** そうらしいようでしたね。いろいろあったみたいです。それで向こう「タラカン」に行かれて、前の知事と替わったわけですね。さつきも話しましたが、そのころ全然様子が違うわけですよ。危機感がないわけです。マカッサルの方ではそろそろ疎開をしようというわけですが、「タラカンでは」現地が実際にやられていないのでわからないですね。それを小松さんが行って、びしびし始めたものだから、なかなかあれだったんですね。だけどそれは、私なんかと言わせると、やっぱり玉碎のつもりで行ったのかな、という気がするんですよ。

**清水** 小松さんが、ですか。

**大室** ええ、もうある程度やむを得ないという気持ちがあったんじゃないでしょうか。タラカンがやられるのは知っていたんですから。今度は「タラカンの」番だよ、ということですから。戦略的に見ても、順序としてそこに来るわけですから。

**清水** 石油があつて、非常に大事なところですが、その知事になぜ小松さんが選ばれたのかということは、先生はご存じなんですか。

**大室** それは海軍の中でいろいろあったと思うんですね。海軍もどうかしている、われわれはそう思ったんだけど、情報課はある程度任期が来ると次々に替えるんですね。役人でも内地に帰ったり交替するんです。小松さんも十八年、十九年と二年ぐらいいましたね。消防隊長をやったりして、いろいろ活躍をされて、上の方とも非常によかったんですが、その次の課長候補、林謙一という後任が来ていたんです。『おはなはん』というのをご存じですか。テレビの連続ドラマで、非常に人気のあった番組ですが、その原作者です。原作者というか、その人の関係がモデルなんです。原作者みたいになっていたので、私もよく知っていました。その人が後任で来ていたわけです。小松さんはそのころは、階級というと大佐です。閣下のすぐ下のところ。林さんは中

佐で来たのかな。これもなかなか器用な人でした。だから後任の課長が来ちゃったわけですね。

そこでわれわれが一番困ったのは、小松さんはどうするんだろう、われわれはどうなるんだろうということでした。そのときはマラリアになっちゃったんですよ。二度目のマラリアですが、その代わり、ありがたいことに転地じゃないけれど、山に療養に入った。そこが珍しいところなんです。山の中で、こちらでいえば軽井沢みたいところに二週間か三週間、療養に行っただけです。余計な話ですが、珍しい話ですから。山の中というか、高いところですから、軽井沢みたいに涼しいんです。水もきれいです。水がきれいというのは、南方ではあまりないんですよ。それだから珍しいでしょう。鳥は飛んでいる。それを管理しているのは、ロシアの領事か何かをやった人の奥さんで、料理はうまい。こちらもだいたい健康になって、現地の子供たちの小学校に行つて教えた、いろいろなことをやっていました。

**清水** そんなこともされたんですか。何を教えられたんですか。

**大室** 小学校でも歌なんかやっています。向こうには二十人ぐらいしかいませんからね。先生が一人でやっているから、いろいろなことを教えたりにしていたんです。

そこは天国なんです。鳥が来ます。いろいろな鳥です。もともとは避暑地で、オランダの別荘地だったんですね。道路もよくて。そこだけアスファルトだし、プールもあるし、いろいろあるんですが、朝になると鳥がいろいろ飛んでくる。それが一緒になって遊んでいるんですね。黄色い鳥だの、赤い鳥だの、青い鳥だの、ちよつと想像ができないでしょう。インコがいるでしょう。いろいろな鳥が一緒に遊んでいるんです。あとでわかったんですが、タカが怖いから一緒に遊んでいて、来ると一斉に逃げるんですね。私がそのときに一番印象に残ったのは、いろいろな鳥が

いたときに一番きれいなのは黒い鳥だということです。九官鳥みたいな色ですね。九官鳥ももちろんいるんですけどね。青い鳥とか黄色い鳥とかいるけれど、カラスの濡れ羽色ではないけれど、それが一番印象的でした。夜になるとイノシシが親子連れで来るんです。朝起きると、シカがパイヤを食べている。すごく特別なところですよ。

**清水** ここには療養で行かれたというお話でしたが、温泉はあるんですか。

**大室** 温泉はないんです。そうしていたところが、月夜の晩になつて驚いたんです。空襲になる。夜、爆音がするんです。外に出てみたら、飛行機の編隊がマカッサルに向かってずっと行くわけです。それは山の方から平地の方に行くわけでしょう。行く途中にずっと狼煙が上がるわけです。飛行機を誘導しているわけです。それは驚いたことに何十キロと続いているんです。これは大変だと思ったんです。そうとう「原住民を」押さえているつもりでも、向こう「敵」に付いているものがある。それはあとで海軍の特務班みたいなのに聞いてみたら、広いからわからないというんです。ところが夜になると、線になつて狼煙が次々に上がるんです。これには驚きましたね。

それで帰ってきて、なるほどこれは大変だと思っているうちに、小松さんの転勤が決まつて、私もボルネオ行きということになつたんです。林さんの話のこのものもなかなか面白いんです。これは番外ですけどね。

**清水** 先生はそれでタラカンの方に行かれますが、タラカンでは総務科の庶務主任でよろしいんですか。

**大室** 総務科というんですね。向こうでは小さいから、総務課ではなくて総務科なんですね。そこで庶務主任をやりました。そのころ庶務主任というのは、海軍の大尉級の人、少なくとも中尉級の人が各隊でやっているわけです。われわれが守備隊に行くと、

同じぐらいの人がやっているわけです。

**清水** このときはどんなお仕事をされたんですか。

**大室** 仕事は総務課的なものですが、全体的なあれを見るような格好で、まあ半分、知事の秘書のような格好でしたね。

**武田** 小松さんに、来てくれ、と言われたわけですか。

**大室** 小松さんが知事ですからね。小松さんの知事官舎に私も秦泉寺さんもいたんですから。秦泉寺さんはあとからだから、最初はいなかったのかな。

**清水** タラカンには秦泉寺さんは行かれなかったんですか。

**大室** あとから来たんです。私は最初からね。ただ辞令が違いますからね。私もはいったんボルネオ民政部に行つたわけですが、ボルネオ民政部の主任、士官がいて、私のやっていた仕事を知っていたのかどうか知らないけれど、「大室さん、あなたどこでもいいんですよ、あなたの好きなところに行ってください」というから、おかしなことを言うな、と思つていたんです。「タラカンに」と言つたら、「タラカンじゃなくていいですよ」とさかんに言う。知つているわけですよ、タラカンが大変だということ。さかんに言われたけれど、「いえ、私はタラカンに行くので来たんだ」と言つたら、「わかりました」と言いましたね。このあいだ亡くなりましたが、佐野さんという士官で、この人とはあとでもつき合っていました。立派な方です。

それでボルネオ民政部からタラカンの州知事庁に、辞令をもらつて行くわけです。ボルネオ民政部には、タラカン州とか、バリク州とか、バンジュール州とかポンチナソク州とか四つの州がありまして、そのうちのタラカン州なんです。

タラカン州に行くときに、いよいよ発令になつて、便がいつたら、ちょうど水艇、水上飛行機といって四つ羽の飛行機があるんです。それがその近くの川にある。向こうの川は大きいですが

らね。川幅が四キロぐらいあるのが普通ですから。そこまで自動車ですら送ってもらって、それからランチで三十分ぐらいかけて、川の中に泊まっている飛行機のところまで行くわけです。その飛行機に乗ってバンジェルからバリクの方に行くわけだったんです。行って、その飛行機に乗った。そのときお客は三人ぐらいしかいなかったんですね。川上に向かって滑走して飛び立つんですね。ところがそれをやってもなくエンジンが火を噴いた。四つのエンジンがあるわけですが、そのうちの一つが火を噴いて、燃えだしたんです。

清水 まだ飛び立つてはいなかったんですね。

大室 それであわてて飛行機を止めて、消火器なんか持ってこんなことをやっていましたが、下を見たら、最初にいた操縦士の下をやつが先に飛び込んでしまっているんだ。

清水 操縦士が（笑い）。

大室 操縦士だかなんだか知らないけれど、一人飛び込んで、それがまた泳げないんだ。「水上飛行機の」足につかまってバタバタやっている。私も乗せていってもらっている人も、あわてちゃいけないというんだけど、あわてて、立ったり座ったりしながらいたけれど、しょうがない。そして窓を開けて外を見た。そうしたらそこはワニがいそう、すごいところなんだ。ジュラルミンでしょう、それが熱くて焼けていて、さわれないんです。手袋をしていましたからね。だから外へも出られない。下を見るとワニがいそうだし、どうしたらいいのかと思っているうちに、バタバタやってエンジンが消し止められまして、やっと落ち着いたんです。

そうしたら、ちょうどわれわれを送ってきたランチのやつが向こうで見ていたんですね。引き返してきた。飛び立たないからおかしいな、と思っているうちに、火の手があがって騒いでいる。それから迎えに来てもらって、一時間ぐらいかかってやっとまた

帰ってきたんです。

清水 それでまた別の便で発たれたんですか。

大室 それでもう飛行機は駄目で、船で行く。船というのは、小さな、沿岸を回っているものがあるんです。これがまた波がひどくて、死ぬ思いでいたのを覚えています。そういう珍しいことばかりです。

清水 バリクパンからタラカンまで、沿岸を行く船で行かれたんですか。ずいぶん長いですね。

大室 これが大変なんです。それで夜になると空襲のおそれがある。あのへんのバリクパンという名前ですが、バリクパンというのは板がひっくり返ることなんです。日本の大きな船なら関係ない海が波で荒れるということなんです。日本は大きな船なら関係ないですが、小さい船ですから、すごく揺れるんです。われわれは、これよりちょっと大きいぐらいの、何トンもない定期船みたいなものに乗っているわけでしょう。そのとき日本人は三人だったのかな。三人は特別に、上の方の屋根のあるところで座っているんだから。このぐらいしかないけれどね「高さ一メートルぐらい」。下の連中はぎゅうぎゅう詰めで、船倉みたいなところにいるわけです。みんな大変です。フジタという司政官がいたんです。みんな一度バンジェルに行きましてから、バリクのほうへ、それぞれ任地に行くんですが、これは文教関係の司政官でした。この人は船酔いで大変でしたよ。この人は何をしに行ったのかというと、宝石を探しに行ったんです（笑い）。

清水 文教関係の司政官が、ですか。

大室 司政官で、いちおうボルネオ民政部について、それからタラカンに行くとか、バンジェルに行くとか、バリクに行くとかするわけです。それで一緒になつて、バリクまで行く飛行機に乗ったわけです。あとで話を聞いたたら、バンジェルマシシから行くんですが、バンジェルマシシというのは、そのすぐ上「北」のマル

タプーラ川というところで、ダイヤモンドが採れるところがあるんです。だからみんな、いままで現地でもこれ「採掘」をやっていたわけです。日本が行ってからもやっていて、一つ大きなあれを探して、皇后陛下に献上するんだ、なんていつていたのがあるんです。そういうところだった。われわれはそこまで行かないけれど、そういう話は聞いていた。

いまのフジタ司政官というのは、任地に行くまでのあいだにだいたいあるでしょう。便がないものだから。そのあいだ、パッサル・マールランじゃないけれど、泥棒市場みたいなものがある、いろいろなものがあるんです。そういう話を聞いていて、一所懸命探したらいいのがありました、と言っていました。

清水 じゃあ、フジタさんはお持ちだったんですか。

大室 私は知らないけれど、その人は専門に見て歩いていたらしいんです。ひどいものです。泥棒市場、ショートルバサルと言っていました、いろいろな品物があるんです。中には日本の海軍の軍服まであるんですよ。あれはよく黙っているな、と思つた。そういうものが出てくるんですよ。われわれが一番欲しかったのは、万年筆だった。そういうと、中味と違うんですね。安いやつがある。私は何も買わなかったけれど、ずいぶん暇があつて、時間があつたときに、見て面白かつたんですよ。

これはおまけの話になって申し訳ありませんが、一番驚いたのは、ツバメが電線にザーツといるんですよ。このツバメはどうして向こうに帰らないんだらうと思つた。日本に行くツバメではないツバメもいるんですかね。それが電線にいつぱい、ズラツといるんです。でもバンジェルマシンというところはスツポンの名所なんです。

武田 食べられましたか。

大室 それはもう、みんな食べました。ご馳走になるんだけれど、「原住民の多くは」水上生活なんです。われわれの宿舎はそれでも

なかつたけれど、みんなその方が涼しくていい。その下に「スツボン」がいつぱいいるんです。ところが生血を飲んじゃ駄目だよという。ほら、よくスツボンというのは、クビを切つて血をやる「飲む」でしょう。それをやつたらいけないよ、最近そういうあれ「寄生虫」が多いから。すき焼きにして食べればいいと教わつて、ずいぶんご馳走になりましたよ。夜はきれいなところでした。

清水 先生はそれでタラカンの方まで船で行かれるんですね。

大室 バリクへ行つて、バリクに着いたら小松さんがまだいたんですよ。警備隊だとか、ほうほうに挨拶に行つておられたんですね。それでたまたまバリクで一緒になったんです。そして一緒になったその日に空襲警報が鳴つたりする。よくわれわれが行くと空襲になるものだ。バンジェルでもそうなんです。行つたときに空襲警報が鳴つた。偵察だつたということですからね。バリクに行つてもそうだった。バリクというのは基地ですから、兵隊も大勢います。小松さんはいろいろえらい人に挨拶に行つた。夜ご馳走になつたら、日本料理みたいなものがちゃんとあるんだ。そのときに向こうの士官が一緒になつて、私も連れて行つてもらつた。それでバリクから今度は例の水艇で、最初にトラブルが起つたのと同じような四発の水艇で、タラカンまで行つたんです。

清水 じゃあ船に乗られたのは、バンジェルマシンからバリクパンまでなんですね。そこまで沿岸の船でいらして、バリクパンで小松さんと会つて、そこからは飛行機で飛ばれたんですね。

大室 そうです。ちょうど一緒になつてよかつたと思います。

## ■ タラカンの軍政と戦局の悪化

清水 着かれてからあとの話なんです、私はちよつと南方の軍政のイメージがわからないんですが、タラカン州ということは、タラカンの町だけではなくて、ボルネオの四分の一をカバーして

いるんですね。

**大室** タラカン州は、バリクパパン州、バンジエルマシン州、それからもう一つマリナウか何かあるんですが、タラカン州はタラカン、マリナウ、ブラウ、「ブロンガンの」四つの県から成っているわけです。タラカンは島ですが、人口が一番多いわけです。やはりオランダが支配していましたから、いろいろな文化施設があるし、電気もある。ガスは来ませんでした、水道もちゃんとあるし、町としてはよかったです。

**清水** そうすると、各県にも日本人の役人が行っているんですか。

**大室** そうなんです。各県には監理官というのがいる。その監理官の下に、日本人が、多いところでも四、五名派遣されているんです。あとでいろいろ事件があつて、首切りなんかでやられるマリナウ県というのは、「日本人は」わりあいになかったんですね。真ん中のブロンガン県はタラカンの対岸で、われわれが上陸したところです。もう一つはブラウ県です。みんな人口は少ないけれど、非常に広いところなんです。

**清水** そういう意味では、県レベルまで日本の統治が行き渡っているような感じなんですね。

**大室** ちゃんと組織ができていたんです。県の監理官がいて、全体的なものを州が見ていたわけです。だから組織はだいたいできておったんですが、実際には各県から農産物とか、必要なものを納めさせていたんですね。

**清水** 納税というよりは現物という感じなんですね。

**大室** 現地の特産物とか、必要なものをなるべく出させるんですね。

**清水** そういう物資を持つてこさせる以外に、各県ではどういう仕事をされていたんでしょうか。

**大室** それは人数も少ないけれど、いろいろありました。一番先にタラカンでやっていたのは、山の中の人を集めて徴用したんで

すよ。軍の徴用をしたりね。

**清水** それは軍隊として使うということですか。

**大室** 軍隊じゃないんですけれど、人足みたいにして、ニューギニアの方に送っているんです。ところがあとでほとんど帰ってこなくて、困ったことがあるんですけれどね。われわれも、そういう人間をずいぶん使いましたけれど、それでも珍しいことがたくさんあつた。非常に頑強な体をしておつて、みんな手漕ぎで操るわけです。

**武田** 言葉は通じないんですか。

**大室** われわれはそれを使っていたけれど、向こうとこつちといふ勝負なんです。だいたい通じます。

**武田** そういうものですか。

**清水** 向こうも若干日本語を理解するのでしょうか。

**大室** 日本語というか、向こうも現地語です。現地語というか、ダヤク語が多いでしょう。普通のインドネシアはインドネシア語ですが、そういう連中は、そういう言葉も持っているけれど、インドネシア語を使うとなると、われわれといふ勝負になるんですね。われわれよりもちろんあれですけど。

**清水** では、インドネシア語のような言葉を共通言語にして話されていたということなんですね。

**大室** そういうことですね。やっぱりこちらがそのときは力があるわけですから、こちらの方が優先的になつて、向こう「原住民」が付いてきているんじゃないの、言葉でも。だからテニヲハが違つていても、向こうが「それなりに理解する」。

タラカンの軍政府でもそうですけれど、組織がだんだんできてきてよかつたんですが、だんだん戦局が厳しくなつてくると、タラカンに集中的に爆撃が来て、そろそろ上陸というんですが、上陸までにはだいたい時間があるんです。その前に、爆撃に來た敵の飛行機が、撃ち落とされるといふことはないんです。こちらで



したあれ「武器」がありませんから。しかし損害を受けると、その飛行機が沿岸の近くとか逃げるだけ逃げるわけです。逃げる向こうのやつはゴムボートを持っていたりして、全部死なないんですね。ある場合には、向こうの飛行機が来て助けて持つて行くけれど、山の中で助けられない場合がある。そういう連中がたくさん集まって、反乱を起こすわけです。それがいわゆるマリナウ事件です。あの話をするとー。いいんですか、そういう話で。

武田 ええ。

大室 何機かやられた連中が、そこで死なないんですよ。ゴムボートか何かで沿岸に集まりまして、だんだん増えてきて、十人とか二十人になったわけです。それで原住民はキリスト教的なものが多いから、「アメリカ軍の兵士とは」うまく行つたんでしよう。波乱の兆しがあるというので、こちらが討伐に、兵隊を十人か二十人出すわけです。ところが行つたところがー。

われわれの仲間だったら監理官というのは、則近さんといったか。その人がちょうど内地に帰還を命じられていたんです。その「帰還の」ための便を待つためにタラカンに来ていたんです。ところがその事件が起こった。そうしたらそのノリチカさんが、「私がいたところで一番よく知っているから、私が警備隊と一緒に行って調べます」というんだ。私はちょうどそのときのあれ「担当」だったから、「いやそんなこと言わないで」といった。というのは、その人の奥さんが亡くなって、小さい子供がいるから内地で困るから、帰してくれという話だった。そういう手続きをしておつたわけです。ところがその事件が起きたものだから、「いや、おれが行かなければわからないから」といって、こちらが止めたんだけど、どうしても行くんだという。知事も「しょうがないだろう」というので、行つたんです。川の中で搜索して反乱しているところに行つたところが、待ち伏せをくつて、みんなこれをやられちゃつた「右手でクビを斬る手振りをする」。

武田 反乱というのは具体的にはどういうことなんですか。向こうの人を集めてー。

大室 向こうの人「原住民」が向こう「アメリカ軍」に同調した面もあるんでしょうね。それであちらに何人、こちらに何人ということで。日本の方も相当おかしくなっていますから。みんな「原住民は」そういう点では敏感ですからね。それもあつたと思います。

武田 実際に部隊を襲撃したりしたことがあつたんですか。

大室 襲撃するのが一番先にわかつたのは、こちらから二十人ばかりの兵隊を遣つたわけでしょう。そうしたら、川でやつているわけです。そのうちに、首を取られて兵隊が川に浮いているのがわかつた。見たら指揮官の服を着ているんだ。

武田 二十人全員ですか。

大室 クビを取られて流れてきたわけです。下流の船着き場に。そこで、これは大変だということ、いろいろ調べてみたら、行つていた二十人が全員やられていた。それで今度は第二次搜索隊が行くわけです。その第二次搜索隊がまたやられちゃうんです。それが映画と同じなんです。川を渡るときに、そのまま船に乗らずに向こう側に行こうとしたんですね。そうしたら川の途中からウワツと声が出てきて、向こうは槍だとか弓を使いますから、「こちらには」みんなやられちゃうんだ。だまし討ちみたいなものだ。朝、顔を洗っているときにこうやられたりね「右手でクビを斬る手振りをする」。

武田 生き残つた人はいないんですか。

大室 その連中はみんなやられちゃつた。後から行つた連中も、新しくなつた監理官も、二、三十人行つたんだけど、みんなやられちゃつた。マリナウ事件というんですね。

タラカンの町の中ではよかつたわけですけれどね。その後始末に行つたのが秦泉寺さんなんです。秦泉寺さんが応援に行つたわ

けです。

清水 マリナウへ、ですか。

大室 マリナウへ。先に派遣した友田君というのは、やっぱりやられちゃって、途中で別の方でやられたんですね。秦泉寺さんは後から行ったんですが、最後に陸軍と一緒に帰ってきた。これは長い話で、話し出すときりがないんですが、あれは本当に残酷なものです。

武田 結局、反乱を起こした方は、鎮圧されたわけですか。

大室 それはわからない。そのうちに日本も全部引き揚げて、北ボルネオのほうに行きますからね。その中で生き残って、私たちの仲間で、一年にいつぺんぐらい会った若い者がいますけれどね。片方でそれをやられて、われわれも現地に手紙を出した。現地というのは、ボルネオの中に遣いを出して、どういう具合か、秦泉寺さんなんか行つたときには手紙を出したんですが、とうとう向こうに着かなかつたようですね。山の中ですからね。

それからこちらはタラカンから外に出た。命令が出て、タラカン民政部は全員が食料増産をやれというんです。補給のためですね。そのために対岸に移動しますね。移動が終わったとき、だいたい全員、知事から全部移動したあくる日から艦砲射撃です。残っている連中がいるから、最後に私が連絡に行つて、「どうしてもこつちに来なさい」と言うんだけれど、みんな、最初の話じゃないけれど、事態が切迫しているということを知らないんですね。だから「いや、まだ仕事か」という。仕事なんかあるわけないんだけれど、なんだかんだと言つて、残った。それで私が帰つてきたら、その晩から艦砲射撃です。

清水 艦砲射撃でしたら、対岸に渡つて、食料を増産している場所にもいられないわけですね。

大室 艦砲射撃が始まった日が、昔でいう天長節の日なんです。『昭和二十年四月二十九日』。そのときにイベントをする。原住民

のサルタンといつて、酋長の親方みたいな人がいるわけです。土侯というのか郡長というのか、えらいのを集めて、天長節ではないけれど、一つのイベントをやるうとしていたんです。ところが艦砲射撃が始まった。その日に、いくらか原住民を集めていた。そのときやったのが小松さんの名演説なんです。こういうことがあるけれど、必ず日本軍はなんとかだという。『当面の戦局はわれわれに有利ではないが、最後の勝利を確信している。われわれはひとまず奥地に待避して再起を期す。アジアはアジア人の手によつてこそ興すべきであり、サマサマヒタム（同じ皮膚色）の日本とインドネシアの紐帯はこれを断つ事は出来ない。天長の佳節に当たりインドネシア民族の上に栄光のあらんことを祈る』（大室政右『秘境ボルネオ戦記』一五一ページ）。

そのときに初めてわれわれが知つたことですが、小松さんはインドネシアの国旗を出したんです。独立をやりなさいという。それはマカッサルでは決まっていたわけです。インドネシアの国旗を与えた。

清水 先生はそれまでは、インドネシアの独立運動と日本の関係については特にはご存じなかつたんですか。

大室 いや、知っていました。というのは、この前ちよつと申し上げましたが、最初の大統領はスカルノでしたか。スカルノかなにかがいつもマカッサルに来ていたんです。われわれはそういう情報も知っている。彼を中心にやらせようということで、応援していたわけですね。

武田 海軍も応援していたんですか。

大室 陸軍も海軍も、日本としてはそういう方針を決めておつたんじゃないですか。だから軍政の中で、こちらを押さえていても、そういうものに任せようという構想があつた。それがみんな崩れていきますけれどね。そのときにインドネシアの国旗なんかを渡してやる。小松さんはずっと用意して、持っていたんだろうと思う。

天長節の時のイベントで、みんなを集めて、飲めや歌えやじゃないけれど、やったんです。砲声殷々というのではないですが、遠くの方から聞こえるんです。一部のものは先に船で上流の方にいなくなつた。小松さんや私の方だけが残つて、後始末をしてから行つたんです。そのときの小松さんの言つたことはどこかに書きましたかね。名演説でした。

**武田** 小松さんから大室先生にご相談があつたんですか。

**大室** いや、だけどほとんど一緒にやっていましたからね。私がそのとき、これでいよいよ奥地へ行きますということを、ボルネオ民政部の上の方に通信しておいたんです。「通信の機械を」持つていたわけです。だけどいよいよ電文を打つたら、持つて行けないから、沈めてしまおうということになった。最後の電文を書くとき、私は日本海海戦の真似じゃないけれど、そういう意味のことを書くかと思つて、一所懸命考えていたんだ。そうしたら小松さんが事務的なことで、本日こうする、と書いて出された。それは向こうに残っていましたね。それからあれ「タラカン州知事庁からの連絡」が絶えちゃうでしょう。その後見ていると、「タラカン州知事以下、行方不明」ということになる。

**清水** 山の中をずっと逃げられているときは、電報がないので連絡が取れないということですね。

**大室** 最後に暗号書を破つたりしてみんな廃棄して、川の中に沈めちゃつたんです。最後まで機械は持つていたんですが、しょうがない。そのとき、帰る前に、あのころはルピアですが、日本製のルピアを燃したりしてね。

**清水** 軍票ですか。

**大室** 軍票です。こんなに大きな「箱に入っている」。お金は重いもので、台湾銀行の支店長と一緒に رفتんです。それが管理していた。どうしようといつて、焼くよりしょうがないということで、石油をかけて焼くんだけれど、なかなかお金というのは焼けない。

とうとう間に合わなくて、ある程度置いて来ちゃつたんです。あとで、周りが焦げているお金を原住民が使っていたという。

**武田** 先生は、自分たちもやられるかもしれない、帰れないかもしれないというお気持ちでしたか。

**大室** われわれは帰れないという気持ちはないけれど、大変なことはわかる。どうなるかというまではいかなけれど、そういうときはわりあい遅いものなんです。ところが遅くない人間がうんといるので、困るんだ。戦々恐々としている。例えば最後に知事が演説しているときに残っていたのは四、五人なんです。そういう連中は暗号書を埋めたりしているんだけど、同じ仲間でも先に帰つて、何もしない「人もいる」わけです。自分の命が大事で、荷物なんか大事に持つていく。

それである朝、マリナウ農園に着くわけです。そこには先に農地を開拓したり野菜を育てていた連中がいて、海軍の士官もいた。それと合流して、奥地に行く。奥地まで行くのに、向こうの川は蛇行しているものですから、ずいぶん上に行つたと思つても「なかなか着かない」。農園に着くまで、ずいぶん心配だったんです。

**清水** 船で行かれるわけですか。

**大室** 手漕ぎの船です。私なんかは最後に三人ぐらいで乗つていったのかな。二人の漕ぎ手をつけてね。

**武田** 奥地に行かれたのは、時期的にはいつ頃ですか。昭和十九年ですか、二十年になつていますか。「昭和二十年四月三十日」。

**大室** 奥地に行つて、敵の様子はわからない。爆撃をやられるのはわかつてる。敵が入ってくるだろうというので、これから奥地で行くか、ということが問題になる。けれども、小田原会議ではないけれど、中には早く逃げたい人もいるし、なかなかゴタゴタしたんです。それで最後に、川の分かれ目のところに来ました。オランダが逃げたときに拠点をつくつたところです。そこで右に行くか左に行くかで、ずいぶんもめたんです。右へ行くと

山の中に行かなければならない。簡単などころではないから、大勢で行くと危険なんです。ところが、何でもいから逃げたいという人もいる。さんざんやっているうちに、そこに陣地を構えて斥候を出そうということになった。下流の方にいって、山を下ったブラウ県には守備隊がいるんです。日本人が相当います。そこに行つてどうなのか、見に行かせたところ、大丈夫だということで、そっちに回ったわけです。

**清水** そうすると、先生が終戦を迎えるのはどこになるんでしょうか。

**大室** それはサマリンダですから、ずっと先ですね。

**武田** しばらくは奥地にいるわけですか。

**大室** タラカンを出たのが四月の末日ですから、まあ五月と言つてもいいですね。それからずっと山の中にいって、半月ぐらい山の中にいるんじゃないのか。それからブラウの方に行くわけです。ブラウの方に行くわけですが、私どもは引き返してきて、いわゆる謀宣班というのをつくっていくわけです。

**清水** 謀宣班というのは何をやるんでしょう。

**大室** ブラウというところに着いてから、敵がまた上がってくるだろうといって、機雷をやったりして、用意しているんですが、全部で何百人ぐらいしかいないんだから、何にもならないわけです。警備隊とか、そういうものがあっても、その連中には大局がわからないんです。それから、だいたい現地の人と馴染んでいる場合が多いんです。例えば県の監理官なんていうのは、チンダというのわかりますか。これ「左手の小指を立てる」を持つているわけです。そうするとごやかになつていて、そこを離れたくないわけです。わからないわけです。それで、「こんなところにもでも蟠螂の斧だから、駄目なんだ」と言つても、わからない。そのうちに本部から、マハカム川のほうの本部の方に来なさいという命令が来る。知事は、すぐにそうしよう、といったけれど、

ブラウの連中はそれをしないんですね。残っちゃうんです。あとになって全部来ますけれどね。そこにいるというのは、いろいろなことがあるんです。そこで知事が、命令が出る前、まだ「ブラウに」いるときに、「私どもは下流に來たけれど、上流から攻めてきたらどうするんだ。挟み撃ちになっちゃうじゃないか。それこそやられてしまう。それで、グループでどうなっているか偵察に行こう」というので、謀宣班というのを七人ばかりでつくつて、上流に戻ったわけです。

いまから考えればかばかしい話で、上流に戻つて、また川を下つて、敵方の様子がわかったところで、殴り込みをかけようとするでしょう。いまになつてみると、なんでそんなことを考えたのかと思う。だいたい敵が百人ぐらいいるという情報をとったわけです。チョコレートを取つたりして、よくしていたので。よし今晩行こうといつて、百人のところに五人で行こうというんですよ。それも大した銃器を持っていないのにね。殴り込みをかける目的は何かというと、敵をやつつけるのではなくて、食料と武器を取ろうというんですからね。ところが途中で「敵に」見つかったから、やめたんですが、よかったです。そうでなければみんなこれ「首」を取られていた。

### ■終戦・抑留・復員

**清水** それで先生はサマリンダで終戦ということになるんですが、終戦の情報はどうやつて知りましたか。

**大室** 終戦の前に私どもはサマリンダに着いた。八月はじめの頃サマリンダに行つてからは、相当治安がこう「悪く」なつていて、いろいろなことがあるものだから、そういうことも警戒するといふことで、われわれは特務班みたいなもので市内を警戒したんです。そのうち、例の終戦の詔勅が出るわけです。そのときには私

どもは立ち会わなかったけれど、今日それがあるということは聞いていたんです。幹部が集められて、ラジオを聞いているわけです。みんな涙をこぼして帰ってきて、「いいいよやられた」という。ところがサマリンド地区の戦闘は「続き」、本当は終戦は八月ですが、ひと月おくれるんです。

清水 それはなぜですか。

大室 それまで戦闘をやっているんですから。様子がわからないし、現地での戦闘でしょう。どんどん逃げてきて収容したりしているけれど、すぐにサツとやめるわけにはいかないわけです。

清水 詔勅を聞いたので、すぐに武装解除とか、降伏という形にはならなかったわけですか。

大室 われわれは早くから終戦を知ったでしょう。その日からいろいろなことがあったけれど、一般的にはまだ終戦を知らないんです。戦闘状態です。幹部は知っているわけです。正式に、もうやめなさいといってきた、その地区でやめたのが九月十五日だったか。スラバヤはもう降伏していますから、そこから飛行機で参謀が来て、「こういうわけだから、こうしろ」と言ったわけです。

清水 参謀が来るまでは、事態の收拾がつかないということですか。

大室 それもありますが、現地の軍もどうしようかわからないんですから。斬込み隊がいたりして、みんなうるさいんだ。

武田 最後まで勝つんだというつもりでいましたからね。

大室 それから奥地へ逃げて疎開する用意をしたり、物資を運んだり、いろいろなことをしていた。そういう一番奥の方にいたやつが逆にやられたり、いろいろなことが起きた。ちょうど私たちはサマリンドにいたものですから、終戦になって落ち着くところまで知っていたんですね。

清水 時間ですが、もう少しよろしいですか。ご帰国されるところまでお伺いしようかと思います。そのあと抑留されるわけですが、どのような形でされたんでしょうか。

大室 最初にサマリンドに集まって抑留されるわけです。それも主力は、テンガロンというところですよ。聞いたことがあるでしょう。昔の王様がいた王宮のある対岸ぐらいのところにキャンプをつくりました。自分たちでつくるんですが、そこに収容されるわけです。これがサマリンドの地区では多い方ですね。千人ぐらいいたのかな。その中の民政部の中の一部屋がわれわれのところだったんですね。

清水 占領に来たのは何軍ですか。

大室 そのとき来たのは、アメリカもいましたけれど、だいたい豪州軍です。あとからオランダですね。

武田 抑留されているときの生活はどういう感じですか。

大室 これは大変だったんです。最初はあれ「よかった」ですけど、「豪州軍からオランダ軍に替わってから」食料で、まいった。どこでもそうだろうと思うんですが、戦闘中よりも戦後の方が死んだ人が多いんです。特に最初のうちはまだよかったです。だんだんひどいことになって、片栗粉みたいなもの「タピオカ粉」の配給なんです。でんぷんには違いなければ、それが食べようがない。最初のうちはそれでもお米が少し入っていたんだけれど、そんなものはなくなりました。柔らかいお餅みたいで、おいしそうに見えるわけです。それを一食ぐらい食べると、二食目から手が出なくなるんですね。

清水 味がまずいということですか。

大室 まずいというか、喉を通らなくなるんですね。それを受け入れられるのは、百人に一人ぐらいしかいないんですね。そこでもつて上の方でも考えて、これでは大変だということで、ふすま「コムギの胚乳部が小麦粉となり、残りの外皮・胚芽のうち、胚芽を取り除いた部分」というのがありますね。そのふすまにはビタミンがちょっとあるんでしょうか、それを混ぜたらどうかといってやったんですが、どのよう

すが、馬糞みたいになる。やはり食べられないんです。そのときは相当バタバタと死にましたね。それでみんな困って、自給自足を考えたんです。そのころでもわれわれは、川の縁ですから、水草みたいなもので食べられそうなものを取るとか、川でエビを捕るとか、いろいろなことを考えて、ほかのものを食べることを考えた。少し経ってから、夜になると原住民が船で物資の交換に来るわけです。例えば砂糖を持ってきたりする。グラメラというんですが、真っ白いものではなく、固まった黒糖みたいなものを持ってくると、それを自分たちが持っているものと取り替える。そういう意味では、われわれは自分のものを持っていたほうです。それでなんとか凌いだけれど、それは惨めなものでした。

**清水** 自給自足というのは、畑で何かをつくられるということですか。

**大室** 畑もつくるんですが、すぐにできないでしょう。芋はわりあいに早くできるんです。ひところは大変でした。粉を出されたりして。それから食料が少し変わったのかな。そのうちに帰ってくることになるんですけれどね。

**清水** 特にオーストラリア軍に労働を要求されるということはなかったんですか。

**大室** それは当然、毎日何かある。最初のうちは、対岸にある炭坑に行くんです。炭坑に十日間ずつ交替で行く。優秀な無煙炭の出る炭坑なんですね。ところがかつてスパイ事件があったときに日本軍がこれをやって「スパイ容疑者を殺して」、炭坑に放り込んでいたんです。それがあとでわかるでしょう。それで報復的に、そのときの戦犯を捕まえてこうやるのか、家族をこうやるのか。最初に行った人はひどい目に遭った。手でやる「死体を掘る」わけです。臭いも大変だった。それで剣だとかピストルを持ったやつがついていて、脅かすんだ。それをやったやつ「スパイを殺した軍人」とは違うんだけど、そのときの使役は本当に大変だった。

それからだんだん経って、だいぶ遅くなってから、行く人がだんだんいなくなつて、私なんかもしようがなくて行ったことがあるんです。知事は、「君は行かなくてもいい」なんて、さかんに言ったんだけど、仲間同士で行かないとまたいけないから。そのころはずつとそういうことがなかった。本場の石炭を掘る。一番下に行つて、掘る道具もある。向こうも親切だった。それから使役に行くと、食料がいいんです。缶詰を幾日分かくれる。だからその点はみんな大喜びなんだけれど、行った人は大変だった。私も十日ばかり行っているから知っているんですけどね。それがロアクール炭坑というんです。戦犯の人もあとになってみんなやられましたけれど、大変だった。そういうこともありましたが、あと食べ物がいりありました。そこで特筆すべきことは、これは書かなかつたと思うけれど、オランウータンを食べたということです。その話はここにはないですね。

**武田** それは食べ物がないで、ですか。

**大室** そうじゃなくて、最後に、収容所は大きいもので、何千人といえるんですから、警備のために銃を何丁か持っていてよろしいというわけだ。原住民もいるから。ところがその必要がなくなつたから、銃も返せということになった。それじゃあもつたないから、弾を撃つて何か食料でも取つてこようとして、兵隊が山の中に行つた。そうしたら大きなサルが出てきたというんです。われわれはオランウータンだとかゴリラだとか知っているわけでしょう。ゴリラはいないけれど。彼らは知らないから、大きなやつが来たというので、狙つて撃つたわけだ。撃つたらこれ「肩に手を触れる」か何かに当たつたんだね。そうしたらそれ「オランウータン」がひるんだけれど、もう一匹いたのが襲いかかつてきたんだ。それで撃つ暇がない。それで銃の台座で渡り合つたという。だけど結局は、最初に撃つたやつだけを取つて、一つは逃げた。あくる日に行つて、またそれを取つてきた。それがオランウ

ータンだったんです。それは大きなものだった。背はそんなに大きくないんだけど、ちょうど日本人の農家のおっさんという感じなんだな。

**武田** 風貌が似ているんですね（笑い）。

**大室** あれは驚いた。それで、発動機とか、本部にはいろいろありましたからね。夜になって川の上で解剖したりするわけです。みんないやだから、そんなのは見なかったけれど、明るる日ちゃんと食事にその汁が配給になったんだ。

**武田** どうでしたか、味は。

**大室** 七十人ぐらいが一つのブロックにいたんだけど、食べた人は二人か三人しかいない。手を着けないんだ。私と知事ともう一人の三人。というのは、前にサルを食べて知っているわけです。山の中にいるときに、原住民が取ったサルを食べた。むかし勝山さんという、三十年だか四十年だか現地にいた人が持つてきて、「知事さん、おいしいものをもらつてきたから」といつて、私と一緒にご馳走になった。これはうまいものだ、と思った。何だと聞いても、食べたあとになつても言わないんだ。それで味を測っているから、これはいいだろうと思つたんだけど、これは大味でした。塩しかないんですからね。スープもいくらか飲んだ。ほかの人はいっぱいあるのに食べない、手を着けない。だけどオランウータンを食べたというのはあまりいいでしょう。それからワニの卵。

**武田** ワニはおいしいんですか。

**大室** ワニの卵というのは、思つたより小さいんです。ガチョウウの卵よりちよつと大きい程度です。これも珍しいね。ゆで卵なんているのはあまり食べたことがないでしょう。

**清水** それで帰復員されるのですが、便船はなかなか見つからなかったんでしょうか。

**大室** それは例のリバイ船というのが改修されてきまして、な

かなかすぐには来なかったんですが、五月何日ですよ。やはり、船の中ではいろいろありましたね。将校だとか、みんなと一緒にしよう。こんなことは言っていないかどうか知らんけれど、いじめられたからお返しをする、というようなことがあつてね。一番悪いのは、荷物を海に放り出しちゃうんだ。小松さんなんかはやらなかったけれどね。あの人もえらい方だから特別室にいたりね。心配だったんだけど、こつちはなかった。

それからもう一つは、船に乗つてから、みんな食料に困るわけですよ。二食なんだけれど、大した食事じゃないし、数も少ない。そこで、船乗りはみんな日本人なんだけれど、売りに来るんだ。みんな時計とかを持つていよう。その交換で、食事をどうですか、というんだ。残つたやつをみんな持つていよう。ね。われわれも契約をして、いろいろなものでやつた。そのうち大勢出てきたら、打ち切られちゃつて、取るものだけ取られちゃつた。みんなそのそき、いろいろな物をもつていた最後の物を取られた。

リバイ船の中はすごいです。船倉までいっぱいいるわけでしょう。汗のしずくでびっしょになつちゃうんだ。でもそのうちに内地にきました。乗るときも大変だったし、いろいろなことがありましたね。

**武田** 日本はどこに着いたんですか。横浜ですか。

**大室** 名古屋です。そのころは名古屋が多かつたんですね。それで消毒をした。みんな裸にされて粉をかけられた。それから幾日か泊まつて、お金を全部取り上げられて、千円ずつくれたわけだ。だいたいみんな貯金とかしているわけですよ。何千円とか、中には何万円という身上（しんしょう）を持つていた人もいたけれど、みんな取られて、千円ずつくれる。それは軍票じゃない、日本円です。千円でも、そのときは大金だと思つていたわけだ。家に帰つてきて、歓迎会だといって同窓会の人があつてくれたけれど、

会費が三百円だったので、あれっと思った。その違いがわかった。

**清水** 先生、帰っていらして、日本に着いたときのことは、どういうお気持ちだったか、ご記憶はありますか。

**大室** それは名古屋から特別の列車で東京駅に着いたんですが、われわれが一番先に思ったのは、海軍士官なんかでわけのわからぬのがある。贅沢三昧をやっていたようなやつだ。船の話ではないけれど、「こいつらは非常識で生意気だからやつつけちゃおうかな」と言っていたけれど、「よしの方がいいよ、ここまで来たんだから」なんていったんだけど、中にはそういうものがいましたよ。東北に帰る商社の連中なんかも、本当にふざけている。本当にそうなんだ。みんな物資に困っているときに、自分たちだけは贅沢三昧をやっていたんだね。それはいろいろなことがありましたけれど、捕虜になってからはなかなか大変でした。

一番印象に残っていますのは、正月になって、それまでに帰れるかなと思ったら、また延びるというのでがっかりしたんです。そのとき慰安会をやつてよろしいというので、やろうといった。兵隊というのはみんな器用な人がいて、太鼓でも三味線でもみんなつくっちゃうんですね。それは驚きましたよ。太鼓なんかは、ボストンバッグのような皮でつくるんですね。そんなにいいバッグではないけれど。「太鼓の胴体は」木をくり抜いてつくるんですね。三味線は糸でやる。いろいろな人がいるんですね。正月の三日間はゆつくりやれということで、太鼓をたたいて、三味線を弾い

ていた。やった人は秋田とか青森の人です。そのうちの一人はまだ生きていますけれどね。

**武田** 遅いですね。

**大室** ええ。それからいろいろ演芸なんかをやりましたね。そういう点では器用ですね。かつらなんかを椰子の実でつくっちゃうんです。東京の芸者屋の子なんていうのもいたけれど、宇野千代か何かの原作の芝居か何かをやつて、みんなうつとりした。半分望郷の念があるから、すばらしかった。映画で加藤大介がやった『南の島に雪が降る』というのがあるでしょう「一九六一年、制作」東京映画製作、配給「東宝、監督「久松静児、原作・主演「加藤大介」。あれと同じような風景がどこにでもあったんですね。器用なものです、兵隊というのは。とりとめのない話で申し訳ありません。

**武田** 次回は日本に帰ってからの話をちよつとお聞きたいと思います。今日は二時間半ですから、終わりにしたいと思います。

**大室** これで本当にいいんですか。

**武田** たいへん面白いです。

**大室** 全部体験談ですからね。いろいろ考えてみると、あと精動の話と選挙の話は、両方ともあまりないかもしれませんね。

**武田** 当時どういう形でやっていたのか、ということですね。今日はこのあたりで、終わりにしたいと思います。どうもありがとうございます。

〈以上〉



# 大室政右 オーラルヒストリー

## 第8回

日 時：2003年4月17日（木）

14：00～16：20

場 所：大室政右宅（府中市）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

武田 知己（政策研究院特別研究員）

清水 唯一朗（東京大学先端科学技術研究センター特任助手）

馬場 治子（府中市郷土の森博物館学芸員）

## ■マーケットの出現

### ——商店街連合会の活動

大室 この前、南方の話がありましたね。先生は小松「東三郎」さんをよくご存じですね。これは小松さんが亡くなったときに、私がつくったというか、本があります『死線を越えて（タラカン民政部ボルネオ縦走記）』を示す。これは、よく見ると非常に参考になるものです。これはみんな配ってしまつて、あまり「在庫が」ありませんので、よろしければ、どうぞこれをお調べください。

武田 タラカンに行かれた方が寄せ書きをされているんですか。

大室 編集は私がやったんですが、小松さんの部下だった者たちみんなの原稿が入っていて、珍しいものもありますよ。

清水 「小松氏は」私の高校の先輩なんですね。長野中学ですから、長野高校の前身です。

武田 それは「後輩としても」調べないと。

清水 確かに。

大室 それは戦争の話だけれど、あとになってみると珍しい話が多いんですよ。

武田 ではよろしいでしょうか。前回、日本に帰って来られるところぐらいまでの話を伺ったんですが、前回の帰って来られるときの話に、先生のほうから付け加えられることはありますか。

大室 帰って来てからだいぶ時間がありました。最初の子は様子がわかりませんが、食べるものも大変で、配給みたいなことでしたが——一番先に野球を始めたんです。芋を食べながら、ほかにやることもないし、グラウンドがあるので、野球をやるうといつて仲間が来ました。もちろん軟式野球です。半年ぐらい経ってからじゃないでしょうか。

武田 「日本に」帰ってきてから半年ぐらい経ってから、ですね。

大室 ええ。帰ってきたのが「昭和二十一年の」七月初めですね。

武田 府中は爆撃はされなかったんですか。

大室 何回か空襲を受けたけれど、近くに鉄道の線路がありまして、そこにいくつか落とされています。それから駅の前で銃撃を受けて亡くなった人もいます。あとは、そういう被害はあまりないんです。

武田 野球チームは戦争から帰ってきた人たちでつくったんですか。

大室 帰ってきた連中で、若い者もいましたし、いろいろずいぶんやっておりまして。ほかにやることがないわけではないんですが、やっていたわけです。最初のうちはそういうことをやっていました。

あれは何年からですか、最初の町長選挙がありますね。自治法が変わってからですね。最初の町長選挙は、私が帰ってきたばかりで何もわからなくて、何か手伝ってくれといわれて、少し政策的なものを書いたけれど、全然様子がわかりません。このときには、森谷「森三」さんと秋元「秀雄」さんがやったんですが、「秋元さんが」負けたんですね。

馬場 昭和二十二年ですね。

大室 森谷森三というのは、世田谷の助役か何かをやっていた。どっちも私の親戚筋みたいなものだったんですね。私はアキモトさんのほう「の応援」をやっていたんです。そのときには負けたんですが、なかなかいい勝負だったんですね。そのときは私も帰ってきたばかりで、演説会を聞きに行ったりしました。何か公開立会演説会みたいなことをやりましたね。できたばかりの映画館でやったんです。初めてのときだから超満員でしたね。

そのときは負けたんです。というのは私どもも帰ってきたばかりでほとんどわかりませんでしたからね。帰ってきてわけがわか

らないと思ったのは、引き揚げて帰ってきますと、お金をくれるでしょう。自分たちが持っていた貯金なんかはみんな取られて、現金で千円ずつくれるんですよ。

武田 それは日本の政府がくれるんですか。

大室 日本の金を千円もらったから、われわれはこれは大したものだと思っていた。家に帰ってきたら、同窓会をやるというて、会費が三百円だといわれてびっくりしちゃった。

武田 もう、インフレがすごいときでしたからね。

大室 みんな気の毒でした。われわれは五、六千円貯めて持っていました。中には全財産を取られちゃった人もいた。これは本当にお気の毒で、あとで外務省に行つて話をしたんだけど駄目でした。引き揚げて来たあとの話ですね。

武田 引き揚げて来た人たちで、府中の年表を見ると、青年団が再建されているんですね。

大室 私は青年団はやりませんよ。翼賛壮年団をやつてー。

武田 戦後はまったく関わっていませんか。

大室 青年団の時期は過ぎていきますから。そのとき帰つてきて、野球もやっていたんですが、二年ぐらい経つてからか、商店街の復興ということで、たまたま役員が替わつたりして、みんなやろうということで商業連合会というのをつくりました。これは商店としてはその頃では非常によくやりました。

武田 先生は帰られて、すぐに家業を継がれてお酒屋さんをやるわけですか。

大室 それは商売をやっていましたから。

武田 先生が戻られて、すぐに継がれるということですか。

大室 まあ待っているということですが、その頃は物資もありませんし、やってもいろいろでした。だから一年ぐらいのあいだは相当困つて、芋で食っていたんじゃないですかね。配給が終わつたのかな。

大室 闇物資じゃないけれど、問屋さんなんかはちゃんとした正規のものがありませんから。向こうで「品物が」揃うといくらか回してくれるんですよ、実績のある者に対して。だけど、半日ぐらい商売すると、あと売る物がなくなつたりした。そのうちいろいろと、味の素だとかなんとか、そういうものを卸している人がいたり。そのころいろいろなことがありました。でもなんとかやれていたんですね。

武田 私は戦後すぐの食糧がないときとか、物がないうちというのは、話を聞くだけで、本当にわからないんですね。

大室 もうわれわれが帰つてきてもー。私は畑は持つていなかったけれど、隣の人が戦争中に貸してもらつて、一反ぐらい。米は作らなかつたけれど、野菜を作つたり、粟をつくつたり、たいていお芋をやつていた。それで間に合わないものだから、うちのおやじもよく知っている人が、長沼という稲城のほうにいたんですが、その山の中にお願ひして、芋なんです。われわれが帰つてきたら、そういうところに収穫に行きましたからね。一、二年は、どうもよく覚えていませんでしたが、大変でした。

武田 基本的に自分でつくつて自分で食べる、自給自足ですね。

大室 みんなどこでもそういう感じでしたね。

武田 さつき闇という言葉が出ましたが、闇市とかも想像がつかないんですね。

大室 われわれのほうは、みんなそういうことをやらないわけですよ。

武田 このへんにもあつたわけですか。

大室 それは少し経つてから、ここに「マーケット」というのができました。「馬場氏に向かつて」知っているでしょう、昔のマーケット、銀座街。

馬場 大室さんのお店があつたあの一帯ですね。

大室 後ろのほうのところに、是政の人の地所だったんだけど、

空き地があつたんです。そこにだいたい、主として第三国人がバラックみたいなものをつくって、ずっと店舗をつくって、貸したんですよ。それをマーケットと称していたんですが、いろいろなものをやっていて、ひと頃はずいぶん盛んだった。

武田 そこに行けば食糧も手に入るんですね。

大室 いろいろなもの。まあこの辺は爆撃を受けていないから、チェンジする物があるんですね。衣料品もまだある。一番困ったのは食べるもので、ひと頃はリュックサックを背負って、この辺の農村あたりに芋なんか買い物に行きましたよ。

武田 この辺でもそうですか。

馬場 「都会から人が買い出しに」来る場所ではないんですか。

大室 この辺でもいくらか。そのうちわりに落ち着いて、自分たちでみんな野菜なんか作っていましたし。

武田 闇市、マーケットというんですか、そういうところでは進駐軍の物資を売っていたという話も聞くんですが、この辺のマーケットでも売っていたんですか。

大室 このへんはそれはなかったですが、燃料廠か何かに進駐軍が来ていましたからね。例の北朝鮮との戦いがあつたときが一番ひどかったんですけれどね。それで、マーケットができて、闇市というほどではないんですが、いろいろそういう物が集まってきた、その頃は非常に賑やかだったんです。甲州街道でも優秀なぐらいに賑わっていました。それを押さえていたのが向こうの人なんですよ。

清水 府中のいままでの有力者の方たちは、そのマーケットには関われない、それとも関わらないんですか。

大室 ほとんど新しい人でした。近所の人もたしか入っていましたよ。関わった人もいますよ。

武田 つまり、府中の人ではなくて、外から来るわけですね。

大室 いや、いろいろありまして、府中の関係はだいたい日本人ですから。その一番のものは朝鮮の人で、もうすぐ威張っていて、いろいろやっていましたね。そのうちだんだん盛大になってきたんです。そのころから一般商店街の振興ということを考えて、商店街連合会というのが、いろいろなことを始めたんです。

武田 それはマーケットとは別ですね。

大室 別で、商店街といっていた。

武田 それは地元の人が中心ですね。

大室 昔は商店街というのは町内ごとに、合同だと共栄会かな、番場（ばんば）とか新宿（しんしゅく）とか、それぞれ小さいものがあつたんですね。それを統合して商業連合会というのをつくった。それはその頃、復興というか、商業をさかんにするために大変な働きをしました。

武田 それは定期的に集まって、どういうことをやるんですか。

大室 一番先は、売り出しを共同でやるとかね。そういうことをやつた中で連合売り出しというのをやりまして、お宮の前に大きな抽籤所をつくった。普通の抽籤はこの「大室宅の応接間」ぐらゐのところでやっているでしょう。そうじゃなくて、広いところ「抽籤所を」つくって、大きな物を持ってきました。しまいは点数制というのをやつたんです。

武田 ポイントカードですか。違いますね（笑い）。

大室 売り出しをやつて、抽籤券を出すでしょう。当たると、昔は末等が亀の子だわしだとかつまらない物ばかりなんだ。だから、それをいくつか持っている、点数でもって高い物を取れる。だから亀の子だわしをとらなくてもいいわけです。点数を集めておけばいい。もちろん特賞は、少し経つてからはテレビとかですが、その前に点数制を採用した。これは大変なアイデアなんです。

武田 それは先生のアイデアですか。

大室 ほとんどがそうです（笑い）。

武田 仲間はだいたい若い方ですか。

大室 みんな商店街の商店主が入っていて、よく協力をしました。

武田 戦争から帰ってきた人ばかりではなくて。

大室 だいたい地元の人で、みんな困っていた。だから、売り出しをやって抽籤券を出すには、どのくらいの経費でできるかというのが一番の問題だった。だいたいその頃は4%でやった。

馬場 何の4%ですか、売り上げの4%ですか。

大室 百円に対して四円ですか、なにしろその経費を出さなければいけませんから。それによって景品を出したり、抽籤所をつくったりするわけです。

馬場 お店が百円の物を売ったら、四円分はそちに回すというやり方ですか。

大室 ですから抽籤券を持っているわけでしょう。百円券なら百円で一枚とすると、その何%が経費になるわけです。

武田 事務所なんかもつくったわけですね。

大室 商店街連合会が一番先にやっていたのは、われわれの仲間の事務所の前に明治天皇の行在所がありまして、そこを最初に利用させていただいた。すぐに独立しましたけれど。あとになってよく言われたんですが、その頃やっていた抽籤券とか、そのデザインとか、やり方とかというのは、教えてくださいという人がずいぶんいましたよ。

武田 府中以外で、ですか。

大室 府中以外ですよ。

武田 どの辺から来たんですか。

大室 それは圧倒的な関東一の景品所なんて言っていたんだから。抽籤をやるときには、間口を五間も六間もとってつくるわけでしょう。そのチラシなんかも残っている物がありますよ。それは少し経ってからの物ですけれどね。でもずっと最初からやった。

武田 それは評判になって、新聞なんかに載ったわけですか。

大室 その頃新聞には載っていないけれど。

武田 口コミですか。

大室 どこでも年末とか年始とか中元にはやりましたね。そういうことだった。ですから、抽籤会をやるときには、大國魂神社の神楽殿をお借りしたり、回しているのを弓で射たり。そういうときにはたいがい日活から女優さんが来るんですよ。

武田 どういう人々を呼んだんですか。

大室 中には、のちに有名になった人もいますよ。その頃はまだ新米ですけど。

馬場 女優さんと呼ばうというのも、大室先生のアイデアですか。

大室 それはアイデアというか。なぜかというところ、そのころ野球を始めて、軟式野球がさかんだった。そうだと、大映ですね。大映の連中がみんな野球仲間、よく知っていて、撮影所に挨拶に行くんです。そのころ山本富士子なんか売り出した頃で、それがセットでやっているところなんか見せてくれるんだ。驚いたのは、そのときに本物の涙を出しているんだ。見てみると「涙が」わかるでしょう。「われわれが」音を出すと叱られちゃうけれどね。「山本富士子の映画デビューは一九五三年」。

武田 じゃあ、やっぱり「抽籤会」のときの女優さんは先生が連れて来られたんですか。

大室 まあその商店街の連合会ができたために、ずいぶん活気がありました。それは戦後、みんなで作ったんですが、例えば街路灯をつくるとか。それができてから、ネオンの小さい広告をそれぞれでやろうとか、防犯ベルをつくるとか、ずいぶんいろいろなことをやりましたよ。最後の打ち上げみたいなことは花火大会だった。それは国際花火大会と言って、ここに「小勝」（丸正屋）という花火店があった。ところが途中で爆発しました。二回やりましたね。それで何人か死んで、大変でしたよ。

武田 それはいつごろですか。もつと後ですか。

馬場 爆発はもつと後ですね。

大室 ずっと後です。それで花火大会をやってからだったか、二回爆発したんです。一つは新町というところで、もう一つは、自分たちがつくっていた小柳町でやったんですが、それで花火が怖くなつてやめたんです。だから国際花火大会というのは七回ぐらしかやらなかったのかな。そのころのアイデアとしては、国際花火大会といつて外国の花火をもつてきて、どういうものか、ということでしたが、珍しいものがありましたよ。栈敷みたいなものをつくつてみんなで観たんですが、花火が足下に来るから、これは面白い花火だなと思つたら、不発弾みたいなものだった。花火に関してはずいぶん詳しくはなつたんです。花火の名前もずいぶんつけてやりました。

## ■戦後選挙の応援活動

武田 そのほか、何かありますか。

大室 それと並行して野球をやっていました。オール府中とか、ノンプロ、社会人野球としてはずいぶんやりました。

武田 先生もプレイしたんですね。

大室 やりましたよ。

武田 ポジションはどだったんですか。

大室 私はサードかショートをやっていました。

武田 四番か五番ですか。

大室 ええ。だいたい先輩が監督で、その次が私でしたからね。その頃の野球は大変なんです。よそに行く資金から集めなければならぬんだから。野球もよそに行くお金がかかるんです。

武田 よそで試合をやるということですか。

大室 大会がありますよね。普通の試合は大したことがないんですけど、遠征したりするとね。ですから「私は」マネージャー

兼選手なんです。大変でした。結局、資金のあるところが強いんです。

武田 なんとチーム名なんですか。

大室 オール府中です。

武田 けっこう強かったんですか。

大室 強いですよ。惜しかったんですけどね。そのころ、東芝とか日本精鋼とか、普通は軟式の時とは別々にやっているんですが、全部こつちに入りまして、なかなかいい線に行つた。終いにはプロの選手がずいぶんいたんですから。いまのプロ野球の選手と格が違うかもしれないけれど、八王子あたりからもプロ野球の選手が誕生した。うちのチームでも、のちに有名になったのは山田伝。阪急で、もともとハワイが何かにいた。ヘソ伝といつて有名です。これは殿堂には入っていないけれど、それに近い人です。それとかその阪急の連中で、いま生きているかな、下村「豊」君とか二、三人いましたね。あとでも、そういう連中がいました。われわれのレベルはプロ野球ではないけれど、ノンプロのわりには高い方だった。

武田 それはたまたまい選手がいたんですか。それとも先生がスカウトしてきたんですか。

大室 いや、スカウトというのではなくて、地元から始まって、そうなるのだんだん集まってくるんですよ。八王子の古谷「倉之助」なんていうのは、名古屋のプロで金鯱というのがあった。名古屋と金鯱というのがあった。その金鯱のピッチャーをやった古谷はなかなか有名でした。これは八王子の出身で、のちにうちのチームにも入ってきています。

馬場 野球ができると、市役所の試験に通つたという話がありますね。

大室 ええ、ずいぶん通つた。いろいろなことがありました。府中の野球史で、向山さんという私たちの先輩が、本当に最後までよ

くやったけれど、それを支えたのは、私なんか支えた方ですね。

**武田** 先生は戦争から帰ってきて商店街のこととか野球のこととか、そういうことが中心ですね。

**大室** それをやっている、その次に酒屋の仕事ですね。こういうことが参考になるのかどうか知らないけれど、そのあいだにいろいろな選挙がありまして、肝心な選挙はほとんどやらされたんです。やらされたんじゃないな。

**武田** どういうことをやられたんですか。

**大室** それは総指揮です。

**馬場** 選挙参謀みたいなことをされたんですか。

**大室** そうです、実際にはね。二回目の町長選挙から始まった。一回目は負けました。その次から本格的に私が関係しているんです。

**武田** それは何年ぐらいのことでしょう。新憲法になってからですね。

**大室** 最初の府中町の選挙があつて、まもなく合併しますね。

**武田** 「合併は」一九五四年ですね。

**馬場** そうです。昭和二十九年ですね。

**武田** 一九四七（昭和二十二年）四月が最初の選挙ですね。

**大室** そうです。

**武田** このときはまだ帰ってきたばかりなので、それほど活躍されなかったんですね。

**大室** いまだから申し上げますけれど、帰ってきたときに、「おまえ、町長「選」に出たらどうだ」と言われたことがある。だけど、何もわかりませんし、最初に三百円にびっくりして、物価の価値がわかりませんからね。ですから最初の選挙のときには、ほとんど応援的なことはできなかったんです。政策を何か聞きに来て、あのころ観光的な話をしたことがあるけれど。私の友達、同級生が現職でいましたからね。

**清水** 現職というのは。

**大室** ここにいて、いろいろなことを知っていた。われわれのように帰ってきた連中ではなかったから。その町田晴治君というのが主としてやったんです。

**武田** 選挙をやったということですか。

**大室** それをやったんですが、そのとき残念ながら負けた。負けたときに、みんながこれは残念だということで、その次を期して奮起したというのが本当じゃないかな。その次の選挙はいつですか。小林「茂一郎」さんがやってから市長選に出るわけでしょう。

**馬場** 森谷さんの次が小林さんですね。

**大室** そうだ、これは大接戦だったんです。

**武田** それは昭和二十六（一九五二）年ですか。

**大室** 森谷さんと小林さんが町長選挙をやったときは、大接戦で勝ったんですが、そのとき覚えてるのは、まだ私はメモを持っているんだけど、四、五千票だったでしょうか。そのとき私が予想してちゃんと調べ上げてやったものと三十六票違っただけですから。

**武田** それは神業だ。すごいですね。

**大室** それぞれに当たってみるでしょう。そのときの指揮というのは、そういうことはいまでも言えないんですね。その次の市長選挙なんか。知っている人はみんな知っているわけですよ。私は威張ったりしないけれど、実際のことをやるでしょう。だからみんな私の顔色を見ているわけです。大丈夫そうだとかね。その代わり、逆に言えば、よくついて来てくれるわけだ。普通の選挙はいつもそうなんですが、夜は一番最後までいて、朝は一番早いですもの。寝る暇なんかないぐらいやるでしょう。

**武田** 先生は国の選挙のほうは――

**大室** 国の選挙は地元のほうはやります。それはいくらか頼まれてやりますけれどね。だけど一番やったのは、私の失敗でもある

んだけど、細田義安さんという、東京都の民政局長をやっていた人だ。これはのちにもちろん代議士に当選しましたが、田中角栄さんと懇意だったんだ。田中角栄が初めて大蔵大臣になったときに、葬式に来ましたね。細田さんは惜しいことに早く死んじやったんです。

武田 それは何年ぐらいですか。

大室 細田義安の前に栗山長次郎がやったのかな。

武田 二十二回、二十三回「総選挙」で、栗山長次郎さんは当選されていますね。

大室 みんな栗山さんの応援のほうで、うちの親父なんか、このころはよくやっていました。

武田 先生のお父様と栗山さんが親しかったんですか。

大室 栗山さんは、毎日新聞のニューヨークの支局長をやっていたなかなか切れる人で、帰ってきて、地元がないというので、うちのおやじだとか何人かで、それじゃあやむを得ない、みんなやってやろうというので始まったのが栗山さんだ。三回か四回当選していますね。なかなか優秀な人でした。

武田 細田さんはもう少し後になるんでしょうか。

大室 ずっと後かもしれません。

馬場 選挙の一覧があります「大室氏に『府中市史』の総選挙の一覧を示す」。

大室 「松谷」天光光なんか、栗山さんのときですね。細田さんは帰ってきて。なにしろそのときわれわれは失敗して、一緒になあって捕まっちゃうんだ。こちらが悪いんじゃないくて、やられたんだから、私は堂々としていたんですけれど。

清水 細田さんが当選するのは、昭和三十五年の第二十八回選挙ですね。

大室 三十五年ですか。そのころ、栗山さんの後でこの辺で出ていた人は福田篤泰さんなんですね。この辺の人はみんな福田篤泰

さん「の応援」をやったんですが、われわれは細田さんが来たというので、二回ばかり「細田さんの応援を」やったんですが、早く亡くなってしまうたんですね。残念でしたがね。

武田 ということは、後の話ですね。一九四七、八年だと、先生のお父様が栗山さんを応援していて、何かお手伝いをされていたんですね。

大室 われわれも栗山さんをやっていましたけれどね。

清水 お手伝いというのはどういことをされたんですか。

大室 それは本部に行けば、本部のことをいろいろやるけれど、スケジュールを組んだり、いろいろあつちにやるといようなことは本人がやるんだけど、だいたい支持者が来ますから、それに対する応接だとか、頼むとか、そういうような、人と人との交流が主ですよ。

清水 事務所の外では。

大室 このころの選挙というのは、だいたいトラックに乗って、スピーカーでやっていましたからね。

武田 拡声器を持ってやるんですね。

大室 そういう選挙ですからね。だけどどこかで集まって、大きなものをやるわけです。

武田 そのころの府中のかたとか地元のかたは、集まって演説を聴くものですか。

大室 それは、そのときになれば聴きますよ。それぞれ支持者がいますからね。ですけどもこの辺は、戦後、最初に天光光がいましたね。そこにいまでも住んでいますけれど。それで栗山さんが長くやっていて、そのあと、並木芳雄というのが西多摩町から出ましたね。並木さんもまた特殊な人で、ハガキ戦術の上手な人で、一杯飲みに行っても、女中さんや何かにすぐハガキを出すんだ。「昨日はご苦勞様」。この人は三井物産のロンドン支店にいた人ですけれどね。よく言われたんです、自分のことのために国会



なんか休んじゃうんですよ。ずいぶん非難を受けたことがあるんです。人は悪くはないんですけどね。そのあとで、細田さんが亡くなって、われわれが主としてやったのは、その前からやっていた福田篤泰さんなんだ。福田篤泰さんというのは、吉田茂さんが推薦した人で、外務畑でしょう

武田 側近ですね。

大室 何か大臣になりましたね。小笠原諸島が早く返ってきたのは、福田さんの功績なんです。そういう点ではよくやられました。われわれも福田さんの私宅のほうに行ったこともありますけどね。

武田 先生、松谷天光さんはどういう人でした。

大室 松谷天光さんというのは、餓死「防衛」同盟というのを。早稲田を出たんですけど、おやじさんが変わった方で、娘をどうか一人前にしたいということから、松谷さんは天光、妹が松谷天ななとかという同じような名前ですね。それで府中の競馬場の下のところにのちに居を構えた。最初はそうじゃない。だからもんぺか何かを履いて、餓死同盟ですね。

武田 この辺でも演説したんですか。

大室 ええ、この辺が地盤でしたから。

武田 その前は、松谷天光さん自体は、全然有名な方じゃないですね。

大室 そう、全然有名じゃない。

武田 その演説ぐらいから有名になったんですね。

大室 演説というか、そのころ女の代議士は少なかったし、みんな好意は持っていましたよ。

武田 いろいろな本を読むと、松谷さんが、道ばたで演説をしていると一日目はこのぐらい「手振りで示す」の人が集まって、次のときはまた大きくなって、その次はもっと大きくなって、という話があるんですが。

大室 そういうこともありますね、そのころは。いまでも私は懇意なんですよ。

清水 まだお元気なんですか。

武田 まだ九十何歳ですね。

大室 あれは熊本の園田「直」さんとー。

武田 白亜の恋ですね。

大室 だからいまでも園田天光光といっていますね。

武田 園田さんと恋に落ちたときも、先生はご存じですね。

大室 いや、そのときは直接は関係ないけれど、天光光さんには最初からみんなが好意的だったですよ。ほかにちゃんといえるんですけどね。ここには番頭格のやつがいたんです。ヤマトやといって、いま亡くなった金物屋さんなんかね。なぜ知っているかと言ったら、そのおやじは金貸しか何かやって、その関係で天光光さんだから、というので、おやじさんがついたんだな。

武田 それで先生もおつき合いがー。

大室 いやいや、私は手伝いなんかしません。その後、お互いに知ったということですから。

武田 栗山さんはどういう方ですか。

大室 栗山さんは、もともとが毎日新聞のニューヨークの支局長か何かやっていた人で、なかなか使える人で、GHQなんかに対してもさうとう顔が利いたんですね。府中の五月のお祭りのときに、危ないからやめろ、と言われたことがあるんです。

清水 GHQからですか。

大室 GHQから。その頃いろいろあって、お祭に軽機銃を持って警護するんだから。

馬場 民間の人が警護するのに、それを持っているんですか。

大室 いや、お祭をやっているのに、アメリカがきてこうやっていた「銃を構える格好をする」わけです。というのは、そういう噂があったんです。何をするかわからないという。あの頃は夜でも

やりましたからね。だから、そういうお祭は伝統的な物で、そういうことはないんだということで、栗山さんが行つて話をしたら、それじゃあいだろうということで、できたんです。

武田 栗山さんは地元の方なんですか。

大室 栗山長次郎さんは、だいたいこの地区の人ですから、みんなよく存じています。

馬場 府中のかたですか。

大室 いや、府中じゃない、狛江です。一番先に、うちのおやじなんか頼つて来たんですよ。何か関係があったのか知らないけれど、うちの奥座敷というか奥の方で、さんざんやってたことを知っています。ただ、その頃外国に行つていたものだから、地元のがないんですね。ただ立派な人でしたけれどね。

武田 年表を見ると、昭和二十三（一九四八）年に児玉九十九さんが東京都の公安委員長になられますね。これも先生は少し関係されていますか。

大室 児玉先生は私の中学校の恩師なんです。児玉先生とは非常に懇意で、いろいろな学校の問題のときに、卒業してからもお手伝いしたことがあります。それより前に、精動運動が終わつて大政翼賛会に移ったときに、第一回の協力会議をやるでしょう。そのときに、私は例の事業概要を官邸でつくつていたときに、誰が来たのか理事か何かが来て、大室君は児玉先生の弟子だから、行つて話をしてくれと言う。何かというと、協力会議の議員に教育関係の推薦で出るんだから、いつてきてくれという。ちょうど明くる日、日曜日に学校に行った。ちょうど先生がいらっしゃつて、話したら、快く受けていただいたということがあった。

武田 戦後帰つてこられてからも児玉先生とはおつき合ひはあったんですか。

大室 児玉先生とは亡くなる近くまでいろいろありました。

武田 児玉さんが公安委員長になられたというのは、どういう経

緯なんでしょう。

大室 そのころ公安委員長。児玉先生は私学の教育界の第一人者だったわけですね。それで非常に公平な人でしょう。ものも欲しがらない人で、内閣が推薦したんだか、警視庁が推薦したんだかわかりませんが、それでなられたわけですね。そのあと、堀切善次郎さんがなられたのかな。その前だったかな、堀切先生も公安委員長をやっているでしょう。その関係があつて。公安委員長になる前に、私が東京市会議員の選挙をやらされたのは、堀切さんなんですよ。

武田 東京市の選挙のときですね。

大室 そのときに堀切さんが会長でやられたんですね。だから堀切先生が、府中の警察署がこつちにできたとき、あれは何年ぐらいいになりますか、公安委員長で来られたんです。ちょうど私も、行つていてたまたま堀切さんに会つて、「ああ、大室君」なんて話をした。

清水 ちょうど同じ頃に、警察が全部解体という形で、自治体警察ができましたね。あれは府中ではどんな感じでしたか。

大室 最初に自治体警察が、府中警察署と府中町警察署と二つになったことがあるんです。すぐにそれはなくなりましたけれどね。それで自治体警察というのは、府中町の元の役場の跡の、京王電車の向こう側にできたりしましたね。そのときにガタガタしたのが、森谷さんと二回目の小林さんのときの選挙なんです。

武田 警察が分かれたので「ガタガタしたんですか」。

大室 警察が分かれて、署長もおとなしい人で、両方でもつてこなつて「喧嘩になつて」、ちょうどお祭騒ぎになつちゃつて、夜には殴り合いなんかもあった。助役をやった黒田「要」さんという人がいたでしょう。あれが相手方で、こつちが私なんだ。それで両方とも署長に呼ばれて、「おとなしくやれ」と言われた。「おまえのほうで自転車を取つたじゃないか」「置いておいたやつ

がかつばらわれたんだ」「何を言っているんだ、おまえのほうはこうじゃないか」なんてやっただけだ。それで手打ちにして、「そういうことがないようにお互いに気をつけよう」ということでやっただけだ。黒田さんというのなかなかうさぎだ。

**武田** 選挙のときに力になる勢力は、消防団もあれば、商工会もあるでしょうが、ほかにはどういうものがありますか。

**大室** 府中の場合には、あまり派閥的なものはないんです。わりあいきれいなんですね、もともと。まあ、ローカルなことですからね。ただ大きな選挙は、全体的な指揮はできませんが、地元の選挙は、難しい選挙は私がやらせてもらいましたよ。一つだけ失敗したんだ。いまの市長のおやじさんがやっただけの選挙の選挙だけは現職に負けたんだ。どうしてもこれは負けなんだ。

**武田** それは先生のとこに、手伝ってくださいというふうには。

**大室** そんな程度じゃないですよ。自然にやらざるを得ないし、またやるべきなんです。できないときもある。だからいま私がそういうことを言うとおかしいけれど、いろいろな話で、私は人の面倒見がいいというんじゃないけれど、人が自然とついてくるんです。悪いことをしないからだ、といまになって思っているんだけれど。だから私の選挙のときには、みんな安心していいですよ。

府中の選挙でもいろいろあって、矢部「隆治」市長がおしまいの頃やったときに、国会議員の選挙のあとだったんですが、京都の市長選挙だか知事選挙だかが終わって、共産党が勝って、その勢いで府中に乗り込んで来たんだ。それはもう大変な選挙だった。そのころ、選挙法がいい加減で、共産党の連中が、オルグというんだか何だか知らないけれど、総動員してきた。普通なら宣伝車が二台ぐらいだけれど、そうではなくて、民間のものも使って、七十台ぐらいで来た。だからこの路地に行ってもこれ「車での

応援演説」をやっているんだ。だからあのときはずいぶんいい加減だった。それで府中が乗っ取られるようだった。

そのときに、今だから本当の話をするけれど、矢部純一、「市長の」弟さんと、福島という商工会議所の会頭をやった人が責任で、やっていたわけだ。それで手がつけられなくて、「私のところに」来て、「どうか助けてください」というので、私が途中から乗り込んで行って、今までの「やり方」をガラッと変えたんだ。

**武田** どういうふうに変えるんですか。

**大室** いままでやっていた選挙というのは、パンフレットをつくって、こんなこと「パンフレットを配る手振り」をやったりしているけれど、それじゃ絶対についてこない。全体的な空気を。要するに選挙というのは口で表せないんだ。全体的な空気、私は得意がそういうところなんだ。全体を見ながらやるでしょう。

**武田** 空気をつくるんですね。

**大室** 空気もつくるし、自然にそういうふうになって来なければ、できないでしょう。それで、あの頃が一番さかんときだから、朝昼晩パンフレットをこんなに「大量に」配って歩く。

**武田** 向こうが、ですか。

**大室** 向こうが。人員もいる。都営住宅なんかに公会堂があったでしょう。そういうところにみんな泊まり込みで来ているんだから。

**武田** 向こうは百人ぐらいの単位ですか。

**大室** 百人やそこらじゃないでしょう。車だけだつて七十台ぐらいあるんだから。それが夜になると、農道みたいなところに突っ込んだり、あっちに行ったりこっちに行ったり。行ってみると、驚く。あの頃は美濃部「亮吉」じゃないだろうけれど、都営住宅なんかの公会堂、集会所がみんな、彼らの寄り場になっちゃった。それは革命的な話でしたよ。

**武田** 先生はどういうふうに変えたんですか。

**大室** それは内部を固めると同時に、向こうにやるだけやらせて、

最後に私がバンと手を打ったんだ。府中のことは府中のものがあるんだといって、チラシみたいなものを出したんです。それは今でも残してあるわけです。あとで国立（くにたち）か何かの選挙のときに、教えてくださいと言って来たけれど、気持ちが違うからね。それは大変なものでしたよ。最後に、やるだけやらせておいてから、こちらは今までやっていないそういうチラシとか、パンフレットじゃないけれど、各戸にみんなが一所懸命に配って歩いた。ところがみんな引つ張りだこなんだ。それがありましたね。それは選挙史上一つの歴史的な出来事です。

**武田** 先生はパンフレットを最後に配るときまで――

**大室** それは原稿を書いて、ちゃんと用意しておく。印刷の手配は自民党の都の本部でやってくれたんだけど、原稿は全部私が書いた。あの頃は、書くのも達者でしたし、言うのもできたんですけれどね。これは画期的ですよ。

**武田** その選挙は、何年の話ですか。

**大室** 矢部さんの三期目か四期目ですね。

**馬場** 最後だとしたら、いまから二十五年ぐらい前じゃないですか。

**大室** そういうことはメモを持ってくればよかったです。あれは革命的な選挙でしたね。向こうも勢いに乗ってきて、共産党の本部で、そのときに勝った参議院のあれ「議員」なんかも、ここに泊まり込みできていましたよ、京都から。

**武田** ちょうど美濃部さんが始まったぐらいですか。

**馬場** 矢部さんの一番最後だと、昭和五十三「一九七八」年ですか。

**大室** 一番最後ではない。その前の前ぐらいです。

**武田** 昭和四十九年ですか。

**清水** ちょうど美濃部都政のときですね。

**大室** 五期やっているでしょう。ですから三期目ぐらいじゃないかな。

**馬場** そうすると四十五年ですね。

**武田** 府中は戦後、革新系は強いんですか。

**大室** 全体的に見ると、三多摩は革新がいつも上だったんです。票数で行くと、わりあいに多かった。

**武田** 戦後ずっとそうですか。

**大室** 国会議員の選挙というのは、三多摩一区でしたから。そのころは五名の定員でしたから、二人取るか三人取るかということでしたね。

**武田** 地方選挙のほうでも革新が強かったんですか。

**大室** わりあいに強かったほうじゃないですか。最初的美濃部さんのときなんか、三多摩で負けましたからね。

## ■戦争をふりかえって

**武田** そうですか。先生が戦争から帰られると、民主主義とかで世の中は変わったような感じだったと思うんですが、先生ご自身はどういうご印象でしたか。

**大室** 最初のうちは何もできないし、お互いに犠牲者が出たり、戦犯がいたり、遺された人がいたりしましたから、ほとんど野球とか商売のことしかない。そのうち、だんだんいろいろとやったんですが、私の戦争の一番のあれ「想い」は、戦争というのは勝ったり負けたりするものだという事です。われわれが教わっていたのは、すぐに腹を切るのではなくて――つまり、捕虜は駄目でしょう、すぐ自殺するとか。しかし、それは間違いだ、ということを思いましたよ。勝ったり負けたりするのがいいのだ、と思いましたが。なるほどな、と思うのは、将棋の駒と同じで、将棋では取った駒をまた生かして使えるでしょう。碁は駄目でしょう。

陣地の取りっこでしょう。それを考えますと、昔の人はよくやっているなと思いますよ。

**武田** でも戦争でお仲間が亡くなられたりとかされて、戦争から帰って来られてすぐにそういう気持ちになるものではないかな。

**大室** 最初のうちはよくわかりませんね。だけど、このあいだのあれ「前回の速記録」をごらんになればわかりますが、私どもも終戦になったときに、お恥ずかしいけれど、われわれも責任を取らなければならぬ、と思った。いまから考えれば何もないんだけれど、腹を切らなければいかんと思って、マハカム川の川辺で、刀でやろうとしたことがあるんだ。

**武田** それはタラカンで、ですか。

**大室** タラカンではなくて、マハカム川に行つて、サマリンドのところで終戦になるんですよ。だけど、一ヶ月あるんですよ。そのあいだに、われわれも負けたので責任があるということより、これからどうするかということもありますからね。そのときに、夕方でしたか、ちょうどマハカム川の川岸に宿舎から一人で行つて、日本刀でこれ「腹を切る仕草をする」をやろうとしたんだ。ところができるもんじゃない、というのがよくわかりましたね（笑）。そのくらの覚悟はあつたんじゃないですか。

**武田** 戦争が終わつてみると、生き残つた、という感じですか。

**大室** いまになってみると、あのときに死ななかつたから儲け物だ、という感じはみんなあるでしょうね。

**武田** 戦争が終わつてからの人生は、儲け物だ、余生だ、という感じですか。

**大室** ですから、わりあいに悪いこともしない代わりに、他人の足を引っ張つたりなんかすることもできないし、やらないですね。  
**武田** そういうものですか。戦争に行かれた人のいろいろな話を聞いていると、やっぱり戦争の経験はすごく重要だったんだな、と思うんですね。私などは全然わからない世代ですからね。

**大室** 戦争のときの話は、この前も端折つた話ですが、何回も死に目にあつているでしょう。それが当たり前なんですから。それを怖がつているほうが、かえつて危ないんですね。いま言つたように、腹を切ろうなんていう気持ちというか。犬死にはしないけれど、何かのときには最初に逃げるほうでした。爆撃なんかを受けて、すぐに防空壕に逃げるといふのと、あたりの様子を見てから行くのとはずいぶん違いますからね。

**武田** 先生は戦争から帰られて、これから日本をもう一回新しい国にするんだというふうなお気持ちはあつたんですか。

**大室** 帰つてきて最初のうちはどうしようもなかったし、どうなることかな、ということだったけれど、そのうちいつの間にか野球を始めてごまかしていたわけですね。それから商店街で引つ張り出されていろいろやつた。やると、いろいろなことがある。

そういう中で、戦争というものの反省はずいぶんしています。私どもが一番思つたのは、日本人だか日本軍だか知らないけれど、負け方を知らないと思ひましたよ。帰つてきたときに一番先に思つた。負けることと勝つことはうんと違いがあるけれど、負け方を知らないな、とつくづく思つた。向こう「日本の占領地か」の連中は、こちらが勝つているときにはみんな揉み手をしてちやほやするけれど、ちよつと負けるとひっくり返るでしょう。日本人だつて後になるとたくさんそういうのが出て来ますよ。ひっくり返つて、スパイじゃないけれど、揚げ足を取つたりするようやつがたくさん出ますけれど、最初はそういうのはあまりいなかったでしょう。

**武田** 戦争が終わつてから少し冷却期間というか、気持ちを整理する期間が必要なものですね。

**大室** そうですね。ただ私どもは、いろいろやってみると、民主主義というのが一番合理的なような気がするんですね。ところが現在の民主主義を見ても、ヨーロッパと日本では基本が違うみた

いな気がする。今度のイラクの戦争なんか見ても、いろいろご指摘があると思いますが、私どもはヨーロッパにずっと行ってみて思ったのは、向こうの人は何かというとすぐに実行するでしょう。助けに行くでしょう。日本人は災害みたいなものがあっても、みんなが行った後からそろそろ毛布を送ったりして、そのうち、これじゃあまずいといつて、いろいろやる。あの違いというのは、ヨーロッパというのは大したものだと思うね。

**武田** 先生も精動「国民精神総動員運動」で、助け合いみたいなことをずっとやっていらしたんじゃないですか。

**大室** こうやってみると、一番充実しているときは精動の時代じゃないですか。

**武田** 戦後帰られてから、先生が戦前になされた精動のお仕事とかは、やはり役に立ったんですか。

**大室** 私は帰ってきたときから、帰還名簿を持ったり、遺骨を復員省に持って行ったりして、後始末をしていますからね。さっきの本『死線を越えて』にもそういうことが載っているかもしれないませんが、私は海軍でいえば司政官なんです。そのころは司政官じゃないんですよ。もう向こうにいるうちに、昭和二十年に辞令が出ていたわけです。帰ってきて復員省に行ったら、「大室さん、辞令が出ていますが、持っていけますか」と言うので、「いや、もう結構です」と言っただけで、後になってみたら、辞令だけはもらっておいたほうがよかったかな、と思ったけれど。嘘をついているようですけれど、本当はそうじゃないんです。というのは給料を見ればわかるわけです。給料がもう直っているんです。

**清水** 司政官級になっているということですね。

**大室** 自分ではもらっていないけれど、向こうから送ってくるのは、司政官何等となっているんですね。ボルネオの関係で、小松さんがやっておられて、亡くなってからあとを私がやるような感じでやっていて、いまでもボルネオなのか会というのをやってい

ますが、もう辞めさせてもらおうかと思って。みんな亡くなってしまいましたから。

## ■ 都議選出馬と自民党支部長

**武田** 先生は先ほど、帰ってすぐに町長選挙に出ないかと言われたとおっしゃいましたが、そういうことはずっとあつたんですか。

**大室** それは町長選挙のときにはあつたんですが、もちろんあの頃はわけがわからなかった。その後いろいろあつたんですが、私は他人の選挙をずいぶんやりましたし、いろいろなことをやりましたが、自分でやろうということは一。まだ戦争責任じゃないけれど、仲間同士のこともあるし、そういうあれもあつたんでしょうが、やる気がなかった。ところが、たまたま都議員の選挙のときには、こちらが二回ばかり失敗しているんですよ。公認みたいなものを出したのが。

**武田** 失敗したというのは、落選したということですか。

**大室** そういうことです。というのは、いい候補者が出なかったわけです。議長をやった川崎雄治というのがいたでしょう。あれが出たけれど、みんなが、あんな者を出したって駄目だといって、実際の応援はろくろくしないんですよ。だから落選してしまった。その二の舞を演じてはいけないというので、私も仲間同士で。もう亡くなったから言えるけれど、私が出るときに、向山敏治さんが出るのではなくて、「どうしても君が出なければ勝てないし、やってくれ」ということになった。私は辞退していたんです。だいたい話が決まったら、向山さんが出るということになった。ところが向山さんが出たのでは勝てないんだ。川崎雄治の二の舞になる。それは知っていたわけです。やるとなると、決意を持ってやらなければならぬですからね。

**武田** でもそれは、先生が参謀でいたのが表に出るわけですね。

だいが気持ちが変わられたのではないですか。

大室 自分の選挙は難しいけれど、他人の選挙をやるほうが楽なんですよ。

武田 そうですか（笑い）。

大室 自分の選挙は、なんで「難しい」かというのと、「候補者は黙ってろ」とか、「余計な口を出すな」となるでしょう。それもそうなんです。これは内輪話だけれど、さっきいった助役さんの黒田さんという人がいた。そこに、私が出るといって市長をやったたら、「大室さん、よかった。あなたにいつべん市長をやってもらいたいと思った。だけど都議会議員はけっこうだから、ぜひ出てください」というんだ。

それで今度は、向こう側の向山さんの代弁者と、私のほうの代弁者の第三者が話し合いをしてくれというので、市政会館でやったんだよ。そして向こうは黒田さんが来ているんだ。うちは田中敏夫君という千代鶴の人と行ったんだ。そしていろいろ言うんだ。

黒田さんが「大室さん、この際、向山さんにやってください」という。本人がいる前ですよ。向こうもこっちも、本人がいるわけですよ。だから「黒田先生、おかしいじゃないですか。私があるところのところに挨拶に行ったら、手を取って、ぜひやってください」と言っただけじゃないですか。どういふことなんですか。こちらも決意した以上は退くわけにはいきませんよ」と言った。そうしたらぐうの音も出ない。

この黒田先生というのはお医者さんなんですけれど、東京都の医師会でもずいぶん暴れたほうなんだ。有名なんだ、うるさがたで。ところが私の前ではおとなしいんだ、その後でも。二回か三回やりましたけれどね。けれど、その後言わなかったけれどね。その前に、さっき話した町長選挙のときにもやっているでしょう。案外そういう点では、私は普段は喧嘩もしないし、おとなしいんだけれど。

武田 やるときはやる。やるときやらないと大変ですからね。

大室 いやいや、そんなことはないんですけれどね。おとなしいほうですから。喧嘩したことがないんだから。

武田 ちよつと信じられませんか（笑い）。

大室 どうも、つまらない話ばかりしまして。

武田 先生が都議に出られるのはずいぶん後の話になるんですね。

大室 昭和四十八年です。

武田 それまでずっと選挙のお手伝いをされたりすることが続いていたので、先生の名前が出てくるということでしょうね。

大室 ほとんど縁の下の方の力持ちをいつもやったわけです。例えば事務長とか責任者という名前を私にやったことがないんです。実際の指揮をやっている。責任者でもみんな来ちゃうんですから。

武田 先生は都議になられる前に、自民党の府中の支部長をやられていますね。これはどういう職なんですか。

大室 自由民主党の府中支部の支部長です。

武田 これは党員になるわけですか。

大室 党員が正式なんですけれど、党員ばかりではない。そういう組織や党員は、ほとんど私がまとめたんです。

武田 先生が呼びかけて党員に勧誘したんですか。

大室 それはほかの人とちがって、桁違いに集まってきたんです。

武田 このころはまだ党員拡大まで行っていないですね。

清水 ちよつと前かもしれませんね。

武田 戦後、自民党の党員は代議士が呼びかけてもなかなか増えないと言われますね。

大室 いまはね。ひところはずいぶん増やしたんですよ。私がやっているときは。こういうときだから本当のことをどんどん言っていると、私がやっている市会議員でも何でも過半数以上とつちゃうんです。定員が三十名のところ、十五名以上取ることが目標でや

るでしょう。全部の人が当選できるようにする。弱い者もいるでしょう。それを適材適所じゃないけれど、上手にやるから、私がやっているうちは、いつでも勝っているんだ。「私が」代わったら、すぐにこうだよ「ひっくり返った」。いまなんか、話にならない。党員だってそうですよ。そういうことは自分で言うからおかしいんだけど、そういうことを私はふだん言わないでしょう、ほかの人には。

**武田** こういうときに言っていたかないとわからないんです。

**大室** だから、みんな知らないんですよ。このあいだも府中の前の市長に会ったんです。彼なんかの本当の裏の仕事は、ほとんど私がしてやったんだから。難しいことは。

**武田** さっきの話に戻りますが、先生はよく全体を考えるとおっしゃっていますね。それはいま言ったような意味でしょうか。適材適所というか、関係する人をみんな当選させるというか、うまく配分するとか。でも、そういうことはできるものなんですか。**大室** 配分するとかなんとかではなくて、候補者が十五人なら十五人いる。そうすると、強いやつ、弱いやつと地盤がある。弱いところにはこちらから応援する。強い者は強い者でやらせておく。それが、みんな感情が走って、できないんです。それが見えないわけです。本当に弱いか強いかが。

**武田** やっている本人が見えないということですか。周りが見えないということですか。

**大室** 一番簡単な例を言えば、市長選挙は一人でしょう。勝つか負けるかでしょう。ところが複数の選挙になると、それを見るのはなかなか大変なことなんです。強いやつと弱いやつがいます。ある程度標準以上のやつは、そのままにしておけばいい。特に弱いやつが五、六名いるわけですよ。

**武田** それは強いところから持ってくるわけですか。

**大室** いや、そういうことはしては駄目なんです。新たに取るこ

とを考えなければならぬ。そこに技術があるわけです。それはふだんのわれわれ、応援者で、どっちをやってもいいという人がいるわけじゃないですか。今度はこれが弱いからやってくださいよ、という。私のやり方は、一票もらうというようなことでは間に合わない。それを応援してくれる人を掴むのが私の技なんです。だからみんなだかんだといつても、私がやっているときには、お調べいただければわかるけれど、負けたことがないです。中には変なを出したこともありますけれどね。

**武田** 府中市になるのが一九五四年、そのときには三町が合併するんですか。

**馬場** 一町二村ですね。府中町と両側の村です。

**武田** 先生には、ほかの西府村とか多磨村にも顔が利いたというか、お仲間がいたということですか。

**大室** 一町二村の中で、最初に「市長選挙を」やったのは合併してからでしょう。そのときに一番先の問題は、市長選挙をやるけれど、両方の村長を助役にしたわけです。市長は選挙でやったけれど、西府と多磨は村長を助役にした。これがまた仲が悪くて喧嘩ばかりしていた。どちらもなかなか優秀な人だったんですけれど、そういうことがあった。それから前に衆議院をやったこともあるし、わりあい仲間もいますし、肩入れになるようなやつがほうぼうにいますからね。

**武田** 先生は、一九五四年にはまだ三十歳代ですね「府中市制施行時、三十七歳」。すごいですね。

**大室** この前もお話した通り、だいたい私よりも上の人を私は使っているわけです。使っくんじやないんです、みんなついてきてくれるんです。それはいまだから言えるけれど、なかなかね。そういう点はどういうわけか。

話が飛びますが、例えば田中角栄さんが、私の最初の昭和四十八年の都会議員の選挙のときに応援に来てくれたんです。前に選



挙が始まる前にも府中に来たことがあるんだ。この近くの候補者を集めて、われわれも挨拶に行つて、お見合いしたことがある。

武田 それはなんで来たんですか。

大室 総理大臣のときに来たことがあるんだ。それで、初めて選挙のときにまた来てくれたんだ。最初の日じゃないかと思ひますけれど、お宮の前でやったときに、田中さんが来て、「君は何年市会議員をやっているんだ？」という。「いや、議員はやったことはありません」。「都会「議員」は？」「いや、今度初めてです」。「惜しいな、君は国会をやったらどうだ」というんです。「とんでもない、私は議員というのは初めてなんです」と言つたんです。それから田中さんとは、いろいろ応援してもらつたり、おつき合いをした。

そういう中でもう一つは、宏池会というのがあつたでしょう。池田「勇人」さんの。虎ノ門のこつち側にあつたでしょう。最初に都会議員が出ると、挨拶に行つたり、呼ばれたりするんですよ。武田 都議になると、各派閥に行くわけですか。

大室 向こうから呼んでくれるんだね。中には、それをあれにしてうまいことをやるうなんていうのもいるけれど、そういうものではなくて、行かなければしょうがないというところで行く。そのときに私が驚いたのは、宏池会に行つたら、「大物が来た、大物が来た」と言うんだ。「大室」のことを言っているのかな、と思つた。私なんか初めてのときですからね。だから誰かがそういうことを言つていた。そう言つては悪いけれど、竹下さんも「私を」特別扱いですよ。渡辺美智雄さんも、田中さんもそうでしたよ。

武田 それは都議になる前からのつき合いなんですか。

大室 いや、都議になつてからです。それはどういうわけだろうと思つているんです。竹下さんなんか、他の人の選挙の応援に行つたときも、私なんか行くと一番先に呼んできて、「大室君が」なんて言ってくれるんだ。こつちも驚いちゃうんだ。それはなん

となく。

馬場 それこそ、衆議院、という話はなかつたんですか。

大室 いや、衆議院というのも何回もあつた。私は衆議院はできないから。政治をやるうというつもりはなかつたからね。そうしたら、みんな都会議員は政治家だと思つているんだ。そういう気持ちじゃなければできないだろうね。

清水 さつきから、そういう活動をされているときのお仲間が多磨にも西府にもいたというお話ですが、そういうネットワーク、人と人のつながりというのは、どういうものを中心にしていくんですか。例えばさつきは商業連合会の話がありましたけど、そういうつながりでできていくものですか。

大室 やっぱ自然にできるんじゃないですか。つくろうとしてもできないし。なんというか、やっているうちに自然にリーダーみたいな格好になつちゃうわけでしょう。

武田 いろいろな活動をしているうちに、なんとなくできてくるものなんですか。

大室 結局、よそから実力を見ている、というところでしょう。都会「議員選挙」がそうなんです。私がやると集まつて来ちゃうんだ。派閥じゃないけれど。私はそれ「派閥的な動き」をやらないうだからね。よく言うんですけれど、私どもは衆議院の先生なんか厄介になつたことがないというつもりなんです。こつちが厄介してもね。

武田 先生が世話をしているんですね（笑い）。

大室 陳情に行つたりなんか「しないから」ね。それは、酒屋のときに、大蔵大臣が田中さんのときに、国会に行つて追いかけて回したことがあるけれど、ふだんそういうことに対しては、こちらからどうこうということではない。そのときそのときですけどね。

武田 先生が一番頼りにしていたお仲間というのはどういう方な

んですか。具体的なお名前でもいいんですが、例えば商工会の仲間とか、お酒屋さんの仲間とか、戦争に行ったときの仲間とか。

大室 頼りにするんじゃないくて（笑い）、向こうが頼ってくるわけだ。失礼ですけど、レベルが違うんですよ。そういうことを自分で言うのはおかしいけれど、本当にそうなんです。だって、勉強が違うもの。その一番のあれ「根っこ」は、いまから見ると国民精神総動員運動でいろいろなことをしたことだ。

清水 先生は党籍をいつごろお持ちになるんですか。

大室 党籍というか、みんな自民党に入っていますけれど、そういう点でわれわれは喜んだりはしないし、その程度で、逆に言えば、そのときそのときによって、やらなければいけないということで、一番いい人をやらなければならぬ。だから国会議員の応援「の依頼」が来たときも、いつでも事務長をやってくださいとか、責任者をやってくださいなんて言ってくるんだ。私は自民党を応援しているので、三人出ていれば三人がなんとか当選するようにやるんだ。

清水 自民党ができる前、保守合同以前には、先生はどちらかに所属されていたんですか。

大室 だいたい自民党系ですからね。もともとそういう意味では、基本は変わらないです。

武田 自民党ができる前はいかがですか。進歩党とか自由党とか。大室 そういうものは全然知りません。だって、津雲「国利」さんなんかのときだから、政友会といったのかな。

武田 戦前はそうですね。

大室 そのころは、われわれは直接にはやりませんから。

武田 そうですか。先生は、社会党はまったく関係ないですか。

大室 この前も話したけれど、中村高一だとか山花秀雄とかは、向こうも知っていますし、こっちも知っています。

武田 それは知っているとこの程度の関係ですか。先生は、社会党からちよつと選挙を手伝ってくれといわれたことは全くないわけですか。

大室 そういうことはないけれど、人間的に知っているんじゃないの、向こうもこっちも。だから会えば一目置いてくれますよ。

武田 それは先生が自民党を支えているからですか。

大室 そうじゃなくて。私はいつも思うんだけど、私なんかみたいな田舎者がどうしてか、というと、やっぱりなんとなく知っているんじゃないですか。さっきの宏池会の話でもそう思うんだけど、こちらでは意識していないけれど、そういう点は何かあったんでしょうね。みんながついてくるものが。何か変な話ですね。本当は、そういう意味ではありがたいんですよ。私はものを欲しがらない。ものというのは、物質じゃなくて、役職でも欲しがらないし、適材適所にやる。だけど実際の仕事はいつもやる、という考え方ですから。ほかの人に見れば、非常に重宝じゃないでしょうか。やるときには、何をやっても全力投球ですから。

武田 ちよつとまた話が戻りますが、自民党の府中支部長をやられたのは行きがかりであって、何か特別の意味があるわけではないんですか。

大室 あれは、都會議員をやったので支部長になったんだと思いますよ。

清水 一九七三年に都會議員になられるんですが、その一年前に支部長になっているんですね。これは都会に出馬する含みで支部長ということですか。

大室 それもあつたし、それまで副支部長か何かやっていましたよ。だから順番で、そのころはある程度は覚悟をしていたんですよ。組織を作ったりね。

馬場 大室さんの前の都議さんは、このへんではどなたでしたか。

**大室** 小泉武雄がいたでしょう。そのあと、宇津木善次郎。そのあいだに、東芝から出た宮下武平がいるんです。

**武田** 先生が都議に出られるということが決まって、一期目の選挙はどうだったんですか。もう、楽なものですか。

**大室** いやいや、選挙というのはいつとも大変ですよ。特に最初なんかわけがわからないし、相手方がいましたし、大変でした。選挙というのは大変ですよ。本当はみなさん、選挙をいつぺんやってくださいというんですけど。

**武田** そうかもしれないですね、政治学者としては（笑い）。本当にそう思いますね。

**大室** やると人間がわかるし、社会がわかるでしょう。

**武田** ずいぶん前から準備をされましたか。

**大室** 私は選挙は自分でやったことがないから。自分でいうのと、人がやる選挙と違うでしょう。

**武田** 先生は、ご自身の選挙になると、誰か参謀に任せるわけですか。それとも先生ご自身でー。

**大室** 全部みんなでやっているわけですけどね。選挙というのはいろいろありまして、やり方もいろいろあります。複数の選挙と、単一のもの、やり方がいろいろあるんですね。

**武田** 都議の場合は複数ですね。何人か候補者がいて。

**大室** 最初は一人区でした。しまいに、二期ぐらいやってから二人区になって、社会党の尾崎正一君というのが「府中市のもう一人の都議に」なった「昭和六十年」。これは半分こつちが抱えていたんだ（笑い）。だから彼が当選すると、党の本部の国会議員が、「おかげさまで、ありがとうございます」とお礼を言われた。

**馬場** 票を分けたとか、そういうことですか。

**大室** いや、そういうことはしないけれどね。いまでも彼は一番先に挨拶に来ますよ。いま「都議会」民主党の代表とか何かになっているけれど、みんな私の兄弟分なんていつているけれど、そ

うじゃないんだ。よく知っていますから、向こうも。

**武田** 先ほど田中角栄さんが応援に来てくれたという話を伺いましたが、そういうことはお願いをするんですか。

**大室** それは党が決めるわけです。ずっと一まわり回ってくるわけです。

**武田** 党のほうでも、中央には派閥があるじゃないですか。

**大室** 選挙をやっているときは、派閥ということは別で、自民党がどうするかということですよ。だから三多摩にはいついつ行ってやろう、とかね。そのほかに、代議士だとか閣僚になる人が、情勢によつては来るし、そうではなくて自分が行きたい、というところがある。竹下さんなんかいつもそうなんだ。大雨のときに来てくれて、こつちが恐縮するようなことがありましたよ。「大室君のところに行つてから、埼玉のどこどこに行くんだ」とか言っていましたね。

**武田** 先生の最初の選挙のときに来られた代議士の方は田中角栄さんだけですか。ほかの方もいらつしやいましたか。

**大室** 農林大臣の桜内さん。

**武田** 桜内義雄さんですか。

**大室** 農林大臣だったんだ。あそこの白糸台の小学校か何かでやったんだ。薄暗いところでしたが、来てくれました。これは私は関係があつたんです。あの秘書をやっているのが、私の従兄弟だったものだから。初めての選挙だといって、来てくれたんだ。桜内さんの秘書だったのは、従兄弟の小室慎吾というんだけど、このあいだ亡くなった。そのときに渡辺美智雄さんが来ていて、私がいるものだからびっくりしていたけれど。

## ■都議一年生

**武田** それで最初の選挙は無事に終わって、終わつてからは本部

のほうに挨拶に行ったり、先ほどありましたが、宏池会のほうに呼ばれたりとか、そういうことをするわけですか。

大室 そういうのはずっと後ですね。最初のうちは、当たり前のこと、みんながやっていることはやらざるを得ない。

武田 最初に都議になられて、こういうことをしようとか、こういう政策をやるうとか、そういうことを考えたんですか。

大室 議員というのは、最初に何をやるか、公約とかいろいろなことを言いますね。たいてい決まり切ったことで、いいことを言いますが、最初に何もできるわけではないですよ。一番先にやるのは質問です。これでその人の価値がわかる。

武田 そのときは知事は美濃部さんですね。

大室 美濃部さんのときだね、私が初めてやったときは。いままで議員もやったこともなければ質問もしたことがないでしょう。だからビールを一杯飲んで行ったのを覚えているんですがね。そのとき、この前も申し上げたかもしれないけれど、総務委員をやっている、理事が何かをやっていたでしょう。その理事会、役員会があったときに、総務局長とか、総務局のえらいやつと一緒に理事会に行ったら、「大室先生、声がいいですね」という。何をほめるかと思ったら、声をほめる。

武田 質問されるときは、勉強されて、準備されてから行くわけですね。それは先生お一人でやられたんですか。

大室 そうです。でもそのとき、第一回は何をやったか、二回目だったか。いまの基地の向こうに道路があるでしょう。多摩の街道が。

馬場 東八道路ですか。

大室 そうではなくて、昔の道路。基地があった跡に学校とかできましたね。

馬場 警察学校のほうですか。

大室 そう、あの通りのあたりは「キラ―街道」といわれていた

んです。というのは、あそこに進駐軍なんか来ていまして、昔の道路で狭いので、トラックや何かが通ると、こうやってやらなければ「道路脇に背中を押しつけるように車をよけなければ」通れない。それで危ないからというので、陳情があった。地元から言ってきたものだから、それを材料にして質問したことがある。これはすぐにできましたよ。美濃部さんのときだけれど。これが最初にできたものですね。いまは立派になりましたけれどね。

馬場 浅間山のところですか。

大室 近藤勇の「生」家のほうに行くところですよ。

馬場 調布、三鷹と三市がぶつかるあたりですね。

大室 あそこはずっと基地だったものですかね。

武田 そのほか、一期目のときのご記憶はございますか。これは先生からいただいた経歴なのですが。

大室 事務局が、こういうことをやっていたということですね。私もよく覚えていないんだけど。

武田 みなさん覚えていらっしやらないんですね、最初の頃は。こちらでこんなことをやられていますね、と言っても全然覚えていない。「書類を指で示して」この部分が一期目、ここから二期目ですかね。先生、美濃部さんはどういうご印象でしたか。

大室 美濃部さんというのは人が好きな人なんです。それだけの人物ではなかったんでしょうけれど、人が好き。予算委員会なんか、私は最初からよくやったけれど、楽しみだった。美濃部は人が好いから、引つかかっちゃうんだ。向こうで言っていることと違って、「これはこういうことでしょう、知事。どうですか」なんて言うのと、「はい」なんて言うから、副知事が飛んでくる。ずいぶん面白かったですよ。そういうのは私なんか得意なんです。一年生のときから、委員会なんかをやるからね。

武田 美濃部さんのときの副知事は、磯村「光男」さん、田坂「益夫」さん、志賀「美喜哉」さんですか。美濃部都政が元氣だ

った頃ですかね。

**大室** 一緒に二期ぐらいやったのかな。美濃部さんの悪口なんかではなくてー。大内兵衛さんとか、あの学者のグループが美濃部さんを推したんでしょう（**武田** そうです）。

その一人に、東村山から行った人がいるんですよ、比留間さんという人だ。議員はやっていないけれどね。何か知らんけれど、首都高速道路か何かやっている人でした。私も懇意で、おやじも知っていたせいで、いろいろなことを教えてくれた。「美濃部にはしまいに困りました」と言う。先生もみんな困ったというんだ。能力がなくて、遊ぶことばかり覚えちゃったという。秘書で後ろについているのがいたでしょう。小森「武」というのが後ろでいろいろなことをやっていたんだけど、二期目か何かのときに聞いたら、「本当に弱りました、今度は辞めさせようと思うけれど、周りの社会党なんかがそうはいかないので、二期目をやっただ」と言っていましたよ。みんなそっちのグループですね。「先生も非常に困っていましたよ」なんて言っていました。でもこの人は、人が悪くはないから。

美濃部さんのときの一番の問題は、美濃部さんが、ではないんだけど、美濃部都政を巡る問題で、部落解放同盟があるわけだ。それが東京に乗り込んできた。あの頃は、共産系と社会党系がある。社会党系が解放同盟、片方がなんとか「↓共産党系は全国部落解放運動連合会」というんだ、それに自民党系「↓全国自由同和会」だの、いくつもある。それで大騒ぎになって、都庁が乗っ取られそうになったんだ。

**武田** それは何かきっかけがあったんですか。

**大室** 部落解放同盟が、いままです関西方面で主としてやっていたけれど、東京に乗り込んできたわけだ。ところがそれに、共産党系が反対だったわけだ。それで、子供なんかを連れてきて、事務室でおむつを取り換えたり、いろいろやるので、困っちゃって大

変だったんだ。それでわが党のほうでも対策を講じて、といったら、陳情にたくさん来ることに驚いたですよ。それは私が一年生のときなんですよ。ところが自民党系で、部落解放同盟とか同和問題について、知っているやつがないんだ。

**武田** 自民党の中に、ですね。

**大室** 自民党の議員の中にろくろくいない。先輩に、田島という、都議会では有名で、美濃部いじめだといってフランスの新聞に出たぐらいの人がいる。そのときちょうど私は一年生だったけれど、私が学校の先輩だということで田島さんが言ったので、「私は」総務委員会の理事になっていたんですね。それで役員会でよく知っていたから、その話をしたときに、私から田島さんに「これは大変な問題だから」と言ったら、それから非常に慎重にやっていた。それに関連して、たくさん陳情が来るんだ。それを本部でやるのに、私が係になったわけだ、一年生で。

それで、最後にはどういうことかという、船橋「俊通」という担当の副知事がいて、酒席をおごられたよ。「あなたただけだ、わかっていてやってくれたのは」と言つて。こつちじゃあ危ないものだから、青梅のほうに行つて、一席というほどじゃないけれど、晩飯と一緒に食べた程度だけれど、「おかげさまで」という。これは大変だったんだよ、本当は。

**武田** 先生は翼賛選挙のときでしたか、部落出身の方とー。

**大室** いまの話は美濃部のときです。その前に知っているというのは、精動時代にあったでしょう。それで私もよく知っているんだ。そっちの関係の人も知っているし。なぜかという、これは言っているのか悪いのか。都庁が占領されそうになったんですよ。**武田** 物理的に庁舎が、ということですか。庁舎はまだ丸の内ですね。

**大室** そのときに副知事に聞いたのかな、「どういふことになるんだ」と聞いたら、共産党の応援団でなければ動員できないんです

って。向こうが万人ぐらい来れば、こっちも万人ぐらい用意しなければならぬ。ほかではできないというんだ。それは驚いたよ。

武田 ちょっとよくわからないんですが、共産党側が万人ぐらい動員することですか。こちらに対抗するには動員したいんだけれど、なかなかできない、ということですか。

大室 いや美濃部さんのほうの与党側が共産党を頼りにして、これに対抗するには、そういうことをあまり言ったらまずいんだけれど、警察官なんかあてにならないと言った。それでその人数を動員するには、共産党以外にないという。

武田 なるほど、わかりました。大変ですね。

大室 いや、これは大変なことだと思った。それでそれを準備しながら、こつちの幹部にはいつも言っていたんだ。気をつけなさいよ、ということ。それを知っているのは。一過性で大したことがなかったから。あと、住宅を造ったりなんかして、特別なことで。なにしろ特別ですからね、学資の問題でもなんでも。そういうことは別としても、占領されちゃうというんだ。そういうことがあったんだ、まあ知らないでしような。

武田 知らないですね、全然。

大室 うちのほうだって、みんな知らないでしょう。私ぐらいじゃないの。船橋副知事が担当で、大変だったんだ。船橋さんというのは弁護士さんだったんだね。「あなただけしかわからない」と言うんだ。

武田 自民党は部落の方々とのつながりは、戦後はほとんどないんじゃないか。

大室 普通は、どうっていうことはないですよ。だって、われわれの支持者だつてうんというんだから。どこだって。いまはわからないですからね。だからずいぶん頼りにしているし、友達なんかもいるけれど。

それがまたやり方がすごいんだ。一番先にやられちゃうのは、学校に行っている仲間なんだ。デモをやったりなんかすると、行かないでしょう。そうすると、すぐ学校で呼び出しをやるんだ。そのときにひどいんだ、「部落の○○君」というんだ。そういうことをやるんだ。それから学資の補助があるんです、住宅とか。そういうのを取り上げるとか、相応いやがらせをやられる。だから、出て行かないと大変なんですって。いろいろなことがありましたけれど、そういうのはカットしてください。どうも余計なことばかり言っちゃって。

馬場 知らないことですから。

武田 知らないことがたくさんありますからね。

大室 ありがたいことに、「私は」いろいろなことをそのころ知っていましたね。

武田 先生はずいぶん経験も豊富ですからね。

大室 そんなことはありません。私は出しやばったりしない方だし、欠点であり長所であるけれど、役を欲しがらないから。幹事長だけはやりたいと思つてやつたんですけれどね。

武田 幹事長になれるのは三期目ですか。二期目に副幹事長をやられて、三期目で幹事長をやられるんですね。

大室 いまは役職なんかいろいろあつて、いまはだいぶ変わってきたけれど、幹事長だけです。政調会長とか総務会長とか、いろいろつくっているけれど、本当の仕事は幹事長なんです。どこでも、いつでも。だけど、そうじゃなくて、政調会になるとお祝いをやつたりして、それはそれでいいんです。

武田 そろそろ二時間になりますので、次回、幹事長になれるまでのお話とか、幹事長になられてからの話とか、都庁移転のお話などをお聞きしようと思いますが、次回一回で終わるでしょう。

大室 話の内容が、何を言っているのかわけがわからないことで、

申し訳ないと思ってるんですが。

武田 いえ、ちゃんとわかります。

清水 非常に興味深く聞かせていただいております。

武田 では、今日は時間になりましたので、今日のお話の補充の質問もつくらせていただいて、次回は幹事長のときのお話と、都庁の移転のお話を伺いたいと思います。鈴木俊一さんのインタビューをわれわれの先生方がやっていらっしゃるので、そういうものも少し準備をさせていただきます。先生のほうは、なんとなくこういう話をするんだと覚えておいていただければ構いません。こちらのほうで準備させていただきます。

大室 こちらのほうで、よほど用意してくればいいんですが、わけがわからなくて、申し訳ありません。

馬場 確認だけさせていただきたいんですが、さっきの商店会連合会なんですが、商店会というときは、新宿（しんしゅく）と番場（ばんば）と本町（ほんまち）ですか。

大室 最初ですか。商店街連合会になったときは、一つになったわけです。

馬場 府中町の商店会ですか。

大室 府中商業連合会。これは非常に仕事をした。

馬場 その商店がある場所は、旧甲州街道沿いですか。

大室 全部一緒に、全部入れてやったんです。こっちが主ですけどね。

武田 じゃあ、すごく大きいんですか。

大室 いままで、部落じゃないけれど町内ごとにあったのを一つにしたわけですね。その後、規制ができてから、それをまた入れたわけです。

馬場 樺並木沿いにも商店はあったんですね。

大室 みんな一緒だったんです。

馬場 でもマーケットができたのは、駅の前ですね。

大室 そのマーケットの連中も、連合会には入っているんです。

武田 マーケットも連合会に入っているんですか。そのマーケットはいつまであったんですか。

大室 戦後ずいぶんありましたね。

馬場 マーケットというのはー。

大室 銀座街とかいう名前になりましたからね。マーケットというのは、闇屋みたいな感じでマーケットと言っていたんです。

馬場 それはどの辺の部分を指しているんですか。

大室 いまで言うと、六社堂という本屋があるでしょう。あそこから入ったところ。

馬場 六社堂があつて、伊勢丹があつて、フォリスがありますね。

大室 六社堂のこのあたりです。

馬場 いまの伊勢丹ですね。

大室 道路があつて、両側にあったわけです。

馬場 「地図を書きながら」前の「注連内（しめのうち）」さんがあるのがこのへんで、このあたりにコンクリートの二階建ての建物がありましたね。マーケットというのは一つの建物ではないんですね。

大室 「馬橋の地図を指しながら」こういう道路があつて、六社堂はここ。ここがヤマカワさんという、そば屋をやっている再開発の会長のところ。この一帯が商店街で、このあいだにも道路があつて、ここが駅。だからこの辺がだいたい主だったわけです。ここに道路があつて、ここが私のところだったんです。ここに三階建てのビルがあつて、こっちに金魚を売っていたりした。それでいまの金子園なんていうのは、この中にあった。

馬場 「地図を指しながら」ここは全部、注連内さんですか。このへんがパチンコ屋さんですね。

大室 パチンコがあつたわけですね。

馬場 さっきおっしゃったのは、この辺のパチンコ屋さんとか、

「さくら」。

大室 「さくら」がみんなこの辺にあつたわけです。このへんには肉屋さんとかがあつたけれど。

馬場 ああ、焼肉屋さんとかがありましたね。

武田 マーケットというのは、屋根とかがあるわけではないですね。バラックが建っているんですね。

大室 バラックでやっていて、だんだんちゃんとしたものになった。昔は危なかったんです。本当のバラックで、だんだんそれぞれ直して、自分たちで立派な家をつくったんです。

武田 じゃあ再開発が進むまであつたということですかね。

大室 この辺は非常に賑やかで、さつきもお話ししましたけれど、毎日が縁日というか、何かやっているんじゃないかというぐらいに、下高井戸からこちらでは一番賑やかだった。そのうち、ほうほうにできますからね。

武田 広さでいうと、いまの伊勢丹が全部ですか。

馬場 通り沿いですね。奥の方はそうではないんですね。

大室 われわれでもわからなくなっている（笑）。それは地図や何かもありますから。

〈大室氏一時中座〉

武田 次回の日程だけ決めさせていただいてよろしいですか。

〈次回の日程を決定〉

大室 どうも何を話しているのかよくわからないんですが。

武田 いえ、先生ご自身が思われているよりも、お話はずいぶんはつきりしていますから、速記を読み返してみると面白いです。

大室 いや、本当のことをいって、あとになってみると精動のときは、いろいろな意味で内容があるときなんです。ただどういうわけか、いまの選挙の話でもそうなんです。考えてみると、私が若いときなんです。このあいだお終いになりましたけれど、これはいけない、早く辞めなければいけないと思ったのは、

鯨岡兵輔さんのお父さんを応援しているんですもの。ただ普通に見ていると、その選挙のときにわれわれが行ってやっている、実際にはほとんど事務的というか、応援の半分以上はわかるわけでしょう。考えてみると、亡くなった鯨岡さんというのは私より二つ上なんです。そのお父さんから、相当の歳だったわけですね。ですから、こつちも骨董品になりすぎているから、これはいかな、と思っているんですよ。

武田 先生にはまだまだお話を聞かせていただかないと（笑）。

大室 話はこのあいだ端折りましたが、あのときの市会議員の選挙を見ると、基礎になるような人がいっぱい出て来ますね。

武田 翼賛選挙のときのお知り合いの方とか、精動の方は、戦後もずっとおつき合いがあるわけですか。何かのときに思い出したりされるわけですか。

大室 いま翼賛会の人には生きている人が一人しかいないです。これがやっぱり本を書いたりしているでしょう。同じようなことばかり何回も言っているし。このあいだ、例の連絡部の資料がありましたでしょう。あの中にもあるけれど、それぞれみんないろいろですね。

馬場 府中の話で、多少知っている人間がいると言にくいとお思いかも知れませんが、私は府中市民ではないので、教えていただく、人的関係が少しわかるので。

大室 そういう府中のことは府中で、その当時のことは。本当のことを言つて、府中市ができるときだって、小林さんが町長で、矢部さんがあれですけど、そういうときは、ほとんどわれわれが現役みたいなきですからね。

武田 府中市ができる話、詳しく聞くと面白そうですね。

馬場 そうですね。こういうもの『府中市史』には一行しか書いてありませんからね。

武田 いまにもつながる問題かもしれませんからね。



清水 しかも、昭和の町村合併の大ブームもあるんですけど、それよりも前なんですね。

大室 合併のときも本当のことを言えば、稲城が一緒だったんだ。多磨と西府と稲城だった。稲城は最後になって、「とても間に合いませんから勘弁してください」と言ってきた。

馬場 一町三村だったんですか。

大室 多磨、西府、府中でしよう、それに稲城も入っていたんです。ところが稲城のほうはそれだけ受け入れ準備ができていなかった。地域的には多摩川を越すから、こちらでも、どうか、という話があったんです。だけど、ぎりぎりになって謝りに来たんだ。それで、これで決めてやってしまおうということだ。もちろん、自治省が何かの指導を受けているわけですからね。その点はどうも良かったです。われわれも下働きで、全然役はありませんけれど、小林さんを担いでいましたから。稲城はそのときに、一番のあれ「問題」になったのは村会議員ですね。村会議員は、それぞれ二十名とか二十何名いるわけですね。今度一緒になつてし

まうと、それが少なくなってしまうんですね。

清水 「府中が」市になったとき、市議会議員の定数はどうしたんですか。

大室 合併するときは、その通りにみんな入れるんです。だから六十何名か七十何名になるわけです。

清水 三〇+二〇+二〇とか、そのままになるわけですね。

大室 ええ。ところがその次になると、定員三十六名ですから、大変なんですね。

武田 別の機会、別の場で、そのお話を聞いてもいいですね。

大室 でもいまの府中の話なんか、何かお役に立つんですか。

武田 それはもう、わからないことばかりですから。

大室 だいぶほけてきて、言われたときに出てくるんですけれどもね。

清水 全然、ほけてはいらつしやらない（笑い）。

武田 臨場感もあるし。

（以上）

# 大 室 政 右

## オーラルヒストリー

### 第 9 回

---

日 時：2003年5月12日（月）

14：00～16：20

場 所：大室政右宅（府中市）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

武田 知己（政策研究院特別研究員）

清水 唯一朗（東京大学先端科学技術研究センター特任助手）

馬場 治子（府中市郷土の森博物館学芸員）

## ■ 都議一期目

### —— 同和問題・企画総務理事

武田 「速記録は」あとで少し字句の修正をさせていただいて、ぜひ冊子にして記録をまとめさせていただきたいんですが、そのときにまた先生にまとめて見ていただきたいと思います。

大室 いま「速記録があるのは」八回までですね。

武田 今日は第九回ですから。

大室 これまでのものは一応見ておきました「第八回までの訂正速記録を渡す」。

武田 今日は、先生が都議会に出られてからのご活躍のお話を、続いてお聞きしようと思うんですが、前回のお話で少し補充させていただいてよろしいですか。

大室 はい。

武田 前回、解放同盟が都庁に来たというお話を伺いました。

大室 その話をしましたね。

武田 そこで少しわからないところがあるんですが、それは一九七四年のことですか。

大室 私も時間的なことはよくわかりませんが、話をしているとだんだん出てきます。その解放同盟の話は美濃部さんの時です。私が四八年に「都議会議員に」なって、その「最初の」四年間の話です。

武田 一期目のあいだですね。

大室 そう、一年生の時でしたね。

武田 最近出た本の中で、先生がお話ししてくださった、まさにそのことが触れてあって、非常にタイミングがいいと思ったんです。

大室 なかなかデリケートなところで、細かいことは言えないんです。それはもうひどいものでした。そのころはわれわれもずい

ぶん勉強していたし、現実の問題は、「解放同盟の人たちが」都庁へ来て、いろいろ嫌がらせをしている程度で、あとは「私は」陳情ばかり受けていました。その内容的なものについては、当事者以外、周りの人は知らないんですね。わが党のほうも、役員であつても、みんなわからない。

私は一年生だったけれど総務部の理事をやっていて、そのとき実力者の都議会議員で田島衛という人がいました。これは聞いたことがあるでしょう。美濃部いじめということで、パリに行ったら有名でした。「あなたですか！」なんて言っていましたね。そういう実力者ですが、私の学校の後輩だったんですね。それで私は一年生だけれど、わりあい立ててくれた。その田島さんが総務委員の理事が役員をやっていて、私もそこに入っていたわけです。総務委員会というのは総括的なことがわかるところですから、それを希望して最初から入っていたんです。それで、一年生だけれど理事にしてもらったんですね。いろいろ話を聞いたり、指導してもらいました。

その解放同盟の問題が出たときは、「私が」むかし国民精神総動員運動をやっていたときに、いろいろ話を聞いたり体験したり「したことを思い出しました」。自分がどうこうということではないんですが、いろいろなことをやりました。あのころは融和事業といっていましたね。融和事業中央会「中央融和事業協会」というのがあって、それがやっていて、うちの方の団体とうまく行っていたんです。そのときまたまたトラブルがあったことは、この前お話ししましたね。国民精神総動員運動のときの本部「中央聯盟」の話です。たまたま、慶應の先生だったか、どこかの大学の教授が行って、差別的な言葉を平気で言った。そうしたらエライ反発を食って危なくなりました。こちらもびくつきして、それをなんとかしようとした。ところがたまたま融和事業中央会という団体の本部があったんです。それが加盟団体だから、そこから

手を回して、事無きを得た。

それで「都議時代の話に戻って、解放同盟の問題が出たときは」大変なことだ、ということになった。だんだん調べてみると、あまり言えないことで、都政でもそうですが、特別待遇なんです。いまでもそうじゃないかと思えます。例えば田舎の方の話ですが、小学校なんかつくるでしょう。その請負は全部そっちの団体がもつ。値段もだいたい決まっているわけです。そういうことがたくさんあるんですね。

**武田** 東京都では、同和事業・同和対策というのは、この一九七〇年代より前からあるわけですか。

**大室** 同和対策というのは最初からあるけれど、そのころは例えば住宅を特別にやるとか。これはずっと、きつといまでもやっている。それから奨学金を出すとか。都営住宅でも、特別にそっちの割り当てがあつて、ほとんど入れるとか。

その問題が起こったときは何もなかったんですが、部落解放同盟の本部は関西でしょう。それが東京の方は手ぬるいといって乗り込んで来たんですね。それから始まるんですね。

**武田** それがちょうど先生が「都議」第一期目のときだったんですね。

**大室** そう、一年生の時だった。何年でしたか、日にちは調べればわかると思います。

**清水** このときは具体的には何が問題になっていたんですか。

**大室** 具体的にどうこう、ということはないんです。そういつては悪いんですけど、普通でないような話をして頭から押しつけたり、いろいろやっていたわけです。ところが東京はなかなかそうは行かなかつたわけです。

**武田** つまり同和対策として、それほど部落出身者の方に――

**大室** いろいろやっているけれど、普通のやり方ではなくて、今度は団体で乗り込んで来たわけです。そのころ、同和対策の中で、

部落解放同盟は社会党系ですが、共産系はそれに対して（**武田** 全国部落解放運動連合会）、そういうものがある。それから自民党系もあるんです（**武田** 全国自由同盟）。いろいろあるので、私もびつくりして、その陳情を受けて、いろいろなことを聞いていたんです。

それで乗り込んで来て、それに対して美濃部都政は革新系だからということ、頭からそういうことで来たところ、なかなか言うことを聞かない「都が解放同盟の要求を容れない」でしょう。普通のことはやっても、特別なことはやらない。そこで実力で脅しをかけてきたわけです。それはあまり言えないんだ。あのころは福祉関係は何という局だったか、しょっちゅう局「の名称」が変わったのでわかりませんが、だいたい福祉関係の局に来たんですね。

**武田** 民生局ですか。

**大室** 民生局でしたか、その連中のところに来て、赤ん坊なんかを連れてきて、そこでおむつを替える。おむつを替えるぐらいならいいんだけど、平気でそこらでわざとやるんですよ「子供を前に支えもつ格好をする」。それから、私は後で聞いたから実際には見なかったけれど、ヘビをもってきたりカエルを放したり。そんなことは大したことじゃないんだ。それでだんだんやっていくうちに、こう「大きな騒ぎに」なつてきて、これじゃあいかん、ということになつたんでしょう。それでどういうわけですか、国会関係の部落解放同盟ではない連中なんかもみんな立ち上がった。だから共産党系と自民党系が一つみたいになつてね。

**武田** それで社会党系の解放同盟に対抗する――

**大室** 部落解放同盟というのはいちばん大きいですから、それに対抗しようとしたんですな。私は、なぜおれが「その関係の仕事」をやるんだと思った。いつもそうなんだけれど、一年生なのに「同和問題について」わかっている。それからほかの人が言うと

危なくてしょうがないんだ。みんな口を滑らすんだ。本当のことを知らないから。その頃でも、禁句になっていた言葉がうんとあるんだけど、つい言ってしまうわけでしょう。そうするとやられちゃいますからね。だから、そのうちわかってくると、みんな怖がって逃げて、ほとんど私の担当みたいになった。陳情だの何かが来たときに、なるほどこれはいろいろある、全国的なものだな、と思った。

一番驚いたのは、自民党系の代議士の秘書がみんなその代理で来るわけだ。自分の方も関係があるわけでしょう。例えば群馬県なら群馬県にそういう団体があつて――

**武田** 同和の関係の団体があつて、ということですね。

**大室** そう。同和関係をやっている人を見ると、その人が直接同和関係ということではないけれど、それに近い人が全国にたくさんいるということがわかったんだ。

**武田** 代議士の中に、ですか。

**大室** 国会議員の中に。その秘書がみんな来るわけだ。昔からいますけれどね。それは、この前お話ししたか知らないけれど、私どもの精動のときにも、湛増庸一さんという名前が出たでしょう。この人は岡山県なんだけれど、そっちの方の関係の人なんです。私も非常に懇意で、この人が「精動本部」の事業部長で来て、一緒になってやつたり、ずいぶん使われたりもしました。この方は、もともとがアメリカか何かに行っていたんですが、岡山新聞だったかの編集長をやっていたんですね。その方が精動に乗り込んできたときに、やつぱり岡山の人で宣伝課長をやったやつがよく知っていて、「この人はこういうことをやっていたんだ。大した実力者だから、怖いんだよ」なんて言う。われわれは怖いなんていうことはありませんでした。最後のお葬式も行きましたけれどね。そういう人がたくさんいるんですね。

その後もいろいろありますし、いまもたくさんいますが、それ

はいまは問題ではないんです。ただ、同和問題の運動というのは、いまだって皆さんの常識外なんだ。あまり知らないでしょう。例えば、関西を中心にして、神戸とか大阪の方で、大きな商社が行くでしょう。その商社の、向こうに出向した人はみんな講習を受けるんだ。講習を受けるというのは、向こう「解放同盟？」の幹部が来て、もちろん講習料を取るわけだ。それで訓練する。それをやっておかないと危ないんだ。やられちゃうんだ。授業料を出しているから、それでパスしているわけだ。何かの時にいい。それを会社を知っているから、必ずそれをやる。だから保険会社でも、こちらから向こうに行った連中は、全部それをやっています。ひところよりはずつとやさしいんですけどね。そのようなことから、関東に乗り込んで来たというのが本当なんです。

**武田** 都庁の庁舎に来て、物理的に場所を占拠してしまうんですね。

**大室** 嫌がらせてそこに居座る。仕事の邪魔になるわけでしょう。動かなかつたりするから。そのうちに、変な動物を持ってきたり、カエルを持ってきたりするものだから、みんな怖がって大変だったんだ。ところがその程度のうちは大したことはない。そんな嫌がらせは初歩ですからね。

**武田** このときに知事室の前も占拠したという記事があるんですが。

**大室** 知事室もやったかもしれないですね。われわれも知事室は方へは行かなかつたけれど、船橋「俊通」さんという、弁護士の副知事がいたんです。この人が担当だったんです。

**武田** 同和担当の副知事ですね。田島さんというのは――

**大室** 田島さんは都会議員です。

**武田** 総務委員会の関係者ですか。

**大室** そのときは副委員長か何かやっていたかもしれませんが、なにしろ自民党では実力者です。その人も、最初は何かやってい

たけれど、だんだんわかってきて、言わなくなった。私は歳をとっているものだから先輩ということ、一年生だけれど、向こう「田島氏」は二年生だったんだけど、あまりタッチしなくなっただけですね。

武田 最終的にはどういふふうに解決したんですか。

大室 最終的にはどうなったのか、うやむやみたいになってよくわかりません。これは半分オフレコにしてもらう方がいいけれど、皆さんもお調べいただければわかるんだけど、戦争、内戦じゃないけれど、実力行使をやるという。それに対する対抗の人間を集めることになったわけだ。そうしたら、共産党以外いないというんです。美濃部の方に、共産党はしつちゅう出入りしているいろいろなことをやっていましたよ。それで驚いた。私は副知事から直接聞いていますから、ほかの人は知らないですよ。自民党なんか、そのとき手が出ないでしょう。だから共産党系「対社会党系」と、向こう同士でやるような格好ですね。ひところ動員して、最後には向こうもこのぐらい来るから、こちらもこのぐらい来るといって、それで一人というのを知っているわけです。

武田 それはお互いに一人ずつ、ですね。

大室 相手の出方によって、そのぐらいいなければ対抗できないというんですね。だからそのぐらい、向こうは動員するつもりだったでしょう。それは尋常じゃないですからね。ゼッケンを背負ってやっているうちはいいんですけれどね。そういうこともあったけれど、表面に出なくて済んで、なんとかあった。でも一ヶ月か二ヶ月、ガタガタやっていたんじゃないですか。

終わってから私に船橋さんが「どうも大変ありがとうございました、おかげさまで。議会の中でわかる人はあなたしかいない」と言うんだ。そうかもしれないですね。それで、あとで一席でもないんだけれど、「いっぺんお食事でも」というので、このへんだと危ないからといって、青梅の小さな小料理屋でやりました。

小料理屋といっても、こっちの料理屋とは違って、田舎ですからね。そこで懇談しながら、話を聞いたことがあるんです。

武田 先生は、仲介・調整役のようなことをされたんですか。それとも、いまの一連の出来事の中で、先生は相談役だったんですか。

大室 何もそういうあれ「役割」はないです。自民党の理事である。総務委員会というのは同和関係も「所管に」入っていますからね。だけど、役員はみんな怖がっちゃったから、大変だったんじゃないですか。

武田 先生は実際に同和の方と交渉したり、ということもやられたんですか。

大室 そういうことは私はやらない。ただそれを応援するというか。それから、陳情に来るのがたくさんいるんです。

清水 陳情に来るのは解放同盟のほうですか。

大室 解放同盟じゃない方が来るんです。みんなその関係の人たちだ。代議士は来ないけれど、秘書と一緒に来るとか。

清水 陳情のところにいくんですか。

大室 都議会の自民党の控え室というか事務所のほうに陳情に来るんだ。入れ替わり立ち替わり来る。それを捌くのが、「私の」ほかにいないんです。別にどうっていいことはないんだけど、難しい問題ではないんだけど、そういうことを知っているから。「よろしくお願いします」とか、「しつかりやってくださいよ」という程度で、なんでもかんでも喧嘩しようという事で陳情に来るのではないけれど、それだけ、その連中は情報を知っていたわけでしょう。

武田 先生はそういうお仕事をされていて、七四年に解放同盟が占拠したときも相談を受けた、ということでしょうか。

大室 いざとなると、こちらもどういふふうに対抗するか、ということは秘かに考えていたんですね。きっと、何人かの上の人に

は話したと思うんですけどね。わりあいそういう情報を知っていましたからね。こっちには副知事が、しょっちゅう来るわけではないけれど、こちらに仲間がいるな、ということを知っているでしょう。事が収まればなんでもないことなんだけれど、ひところは占拠されるというと、対抗しなければならんということとで、共産党の方も一人近く用意したんだ。そういう話は「本に」出ていますか。一人なんているのは知らないでしょう。

武田 それは見つけた本にも書いてなかったですね。

大室 どういうわけだか、共産党は解放同盟の幹部とうまくないんです。何かあるとすぐに「やり過ぎだ!」とかいう。委員会でも同和の問題が出ると、「少しやり過ぎだ!」とかいう。普通はみんな一緒にやっているんです。

武田 先生は「一九七三年に」企画総務委員会の理事をやられたということですが、一期目で理事をやられるのは異例のことですか。

大室 異例だかどうか、一年生のときにはそう思いませんが。何か知らないけれど、仲間がいて、実力者がいた。そういう意味では政調会の副会長なんているのも早い。

武田 すごく早いですかね。

大室 それはみんな「私が」年配で、そのころ五十を超しているかな。ということと、なんとなくみんな知っている人が「実力者だった」。政調会の会長をやっていた高橋「一郎」さん、このあいだ勲一等をもらった、建設の副大臣をやっていた人。それは中野から出ていた。その人が政調会長だったんだ。何か知らないけれど、「私が」おとなしいからかどうか知らないけれど(笑い)。

武田 逆じゃないでしょうか(笑い)。総務委員会、政調会副会長時代に、何かご記憶に残っているようなことはありませんか。

大室 高橋さんは政調会長で、そのころは大物なんです。陳情に来たって、うん、うん、なんてやって「身を反らして頷く格好

をする」、えらい人だな、と思った。そのくらいで通る人だったんですね。われわれが行くと、それはこうだろうとかあだとか、細かく本当のことを指導するけれど、貫禄充分だね。

高橋さんは幹事長だったかな、そのあと平山「洋介」さんというのが政調会長になった。お医者さんだった。その人が政調会長になったときに、私は副会長だったのかな。だから高橋さんは幹事長だったのかな。そう、幹事長だ。政調会長が平山さんだ。その下に私が行って、いまから生意気なことを言うようだけれど、結局はお守り役なんだ。

武田 それが基本的な仕事ですか。

大室 最初からいろいろやるんだけど、非常に几帳面な人なんです。お医者さんで、データを作って、こんなに「指を開く」厚いものを書いてはいるんだけど、仕事そのものになると、なかなか。われわれがアドバイスしたりしてね。考えてみると、そういうことになっていたね。私は一年生でね。

武田 政調副会長になられてから、財務主税委員会理事とか、予算特別委員をやっていたらつしやいますが、これは議会の方ですか。

大室 委員会というのは一年ごとに交替するんです。やりたければそれをやる。私は最初に総務委員会をやって、それから財務委員会をやっているわけですね。だから自分で希望するところ。希望してもできないときもありますけれどね。私はそういう意味では、ちゃんとそういうところ「総務、財務など」だけを歩いているんです。

武田 財務委員は、先生がやりたいというご希望でなられたんですね。

大室 それは総体がわかれば、財政のことをやりたいと思う。わりあいに、ほかの人は企業会計とか、そういうことをいろいろなことがあるものだから、行きたいとかいう。そういうことは私も全然やらなかったですね。でも最後には、みんなひと回りや

らなければならぬ。でも委員会としては、私は全部はやらなかったですよ。総務委員会と財務委員会とか建設委員会。建設委員長はいつだったか、二期目かな。

武田 そうですね。「一九七七年に」建設労働委員会委員長をされていますね。

大室 名前が変わって、建設委員会が建設労働委員会になった。

武田 その前に、第一期目には総務委員会の副委員長をされているんですね。これも早いですね。

大室 そうですか。

武田 そういふものなんですか。

大室 自分ではそう考えていないけれど。私が面白かったのは、美濃部さんが知事の時「一九七九年四月まで」の予算委員会ですよ。そういうときにはずいぶんやりましたけれどね。予算委員会が一番楽しみだったね。ただし、われわれには時間をいくらもくれないんです。五分とか十分ぐらいしかもらえない。でもこちらが早く言って向こうに言わせれば、向こうの答えは「質問時間とは」別ですからね。こつちでしゃべるときだけです。要領よくやればいい。美濃部さんは人が好いから。予算委員会でも本当のことはよく知らないでしょう。

武田 細かいことを、ということですね。

大室 細かいというより、いろいろなことをやっていて、「それは知事さん、こういうことじゃないんですか」というと、「ええ、その通りです」なんて言うから、副知事が飛んでくる（笑い）。それが何回もありました。それはこつちが引っかけなんだ。

武田 ちょうどこのころは、東京都の財政が問題になっているんですかね。

大室 最初は財政問題をずいぶんやりましたよ。

武田 それは予算委員会です。基本的にやるわけですか。

大室 予算委員会です。ずいぶんやりました。いろいろな問題が出て

いましたね。細かいことは忘れましたが、総務委員会は総合的なことでいろいろなことがありました。その中で一つの大きな、いつでも問題になるのが同和問題ですね。だからわりあい詳しいんですね。それから財務委員会のときにはいろいろやった。あのころ、田辺「哲夫」君という、都議会議員から国会議員をやったのがいたでしょう。弁護士です。最後は参議院をやったのかな。

清水 自民党ですか。

大室 私と同期生で、私のほうが歳が上なんですけれど、彼の方が地元でいろいろな幹事長をやったりしてね。参議院だったか、国会議員をやっていますよ。早く亡くなりましたけれどね。

武田 ちょうどこのころ「一九七五年四月」、東京の二十三区で区長を公選で選ぶことになっていますが、何かご記憶はございますか。

大室 特にないですね。そのころになると、公選制は当たり前のようになっていた。だから中の当事者は大変だったかもしれないけれど、全体的には普通ではなかったでしょうか。都政の中ではいろいろなことがありましたけれど、本当のことを言って、私は幹事長をやったでしょう。二期目だったかな。

武田 二期目に副幹事長で、三期目に幹事長をされていますね。

## ■都議二・二期目

### ——幹事長・都知事選

大室 幹事長をやる前に副幹事長をやっているわけです。その副幹事長の時「一九八〇年八月～八一年七月」に、予算の中で、復活予算ではないけれど、特別に暫定の陳情して復活する、知事が持っているものを「私に」任せてくれるんだ。最初は百億ぐらいでしたが、それを任されたことがある。

武田 それは副幹事長の仕事ですか。



**大室** だから幹事長がやるけれど、幹事長は若松「貞一」さんだったかな、私に全部任せた。それから財務局が知っているんだ。だけど、「全部任せます」と言うんだ。普通はそうじゃないんですよ。復活予算という追加予算というものは、各団体の陳情なんか、取ってあるものをその枠内でやる「配分する」わけです。最初のうちは、その中に飛行船を入れるとか、何を直すとか、もうすでに十億ぐらい決まっているものがあつたりして、そういうものをこちらがやつたんだ、ということにする。

だけど実際にそれを三回やっているの「人」は、「私のほかに」いないんじゃないかと思うよ。私は自分が副幹事長の時と、幹事長の時と、終わって誰かの時にもう一回やつた。そういう中に手を入れてやっている。だから団体なんかの復活予算はみんな私がやってやった。それは大したことじゃないけれど、財務局長、主計部長とスタッフが十何人ついて来て、そういうところでやらないうんだ。都庁の別室みたいなところでやるんだ。

そのときに、いろいろ陳情や何かあるでしょう。「これはどこから来ている、仲間はこうです。これは先生、どうしますか」という。陳情なんかをして、ぜひ頼むというやつの名前がある。「その人の名前がいいよ」と言ったら、向こうのやつ「財務局の役人」が驚いたね。

**武田** よくわからないんですが。

**大室** 例えば陳情で、これを増やしてくださいと言ってくるでしょう。それを査定して、ということ、いままであまりやらないんです。いい加減なんだ。全部見て、これはやってやりなさい、これは「やらなくても」いい、とかいうことをやつたんだ。それで、私が決めておく。その中に、これとこれは誰々から陳情に来ています、ぜひお願いします、金額はともかく「というものがある」。それから、党から来ていますというものがある。私は「それはその通りやってやりなさい。実際にできればいいじゃないか」

と言ったんだ。普通はそうじゃない、おれがやってやったとか、誰がやってやったとか言うでしょう。そうしたら向こうの財務局のやつが驚いて、「そんな人はいませんよ」と言うんだ。「いいんだ、できればいいじゃないか」と言ったんだ。

そのときに私がずいぶん変わったことをやったのは、被爆者が東京にも何人か来てるんです。東京で受けたわけではないけれど、来ているでしょう。それがどうだ、こうだというと、たいいてい共産党がそれをやっている。普通に来るのならちゃんと受け止めるけれど、何か変な話になるものだからね。それは「金額としては」いくらでもないんだ。何を面倒見る、なんてあつたときに、「これはやってやつたらしいじゃないか、こんな金額が小さいんだから」と言ったら、「いいんですか」と言うから、「いいよ、これは党派じゃないよ、やってやりなさい」と言った。それが一回つく、その次ずつと予算がつくでしょう。

**清水** それは都の自民党の副幹事長に、ということであつたという話ですが、党ごとにいくらという予算があるわけではないんですか。

**大室** 復活予算といったかなんといったか知らないけれど、そういう団体とかをやることについて、最初は百億ぐらい、その次は二百億円でしたよ。

**武田** 「二百億円というのは」二回目の時、ということですか。

**大室** そのころ約一兆円の予算でしょう。それで取つてあるわけですよ。どうしようかといって。議員だとか、陳情の意向を聞いて、あげてやるとか下げるとか。枠は向こうで持っているわけだ。それが百億だった。その次は二百億だった。その本当のことを知っているやつがいらない。そんなことはやらないから。そのうち、これとこれをなんとかしろとか、こうだ、とかいうのはあつてもね。

**武田** 先生が副幹事長をやられたのは、もう都知事が鈴木「俊一」さんになって「一九七九年四月」からですね。

大室 鈴木さんになってからだろうね。

武田 だから自民党に「そういう予算配分の役割が」来たということですかね。

大室 美濃部の時にはそれをやらないから。美濃部さんの次は鈴木さんでしょう。

清水 ええ。じゃあ知事与党の副幹事長だから、その差配ができるといふ形だったんですかね。

大室 それは第一党の幹事長がそれをやる。だけど、各種団体から陳情なんかが来ているわけです。そういうものを見る。いま思いう出すと、私学にはずいぶんやってやったんだ。私学の助成とかね。そういうことがあった。いつもその連中がよくついてきていたな。

武田 そういう予算を差配するときには、代議士の先生は全然タッチしないんですか。

大室 それは都議会ですからね。

武田 都議会ですから、自民党本部の方からの指示は全くないんですね。

大室 そういうことはありません。都政の問題ですから。

武田 副幹事長になる前なんですけど、先生は都の駐留軍関係離職者等対策協議会委員をされていると書かれているんです。

大室 これはみんな交替でやるんだけど、これは関係があったものだから。普通の常任委員会でない中小企業対策とか、労働問題とか、駐留軍対策とかあるんです。駐留軍対策は横田基地ですか、西多摩にあるでしょう。

武田 立川基地ですか。

大室 立川じゃなくて、いまでもあるでしょう、横田基地は。横田基地の関係のことですよ。駐留軍関係でいろいろあるわけですよ。いままでやめるとか、やめたとか、いろいろなことがあった。その関係ですね。これは内容的にはそう難しいものではなかった

と思いますよ。

武田 一九七七年に立川基地が日本に全面的に返還されるんですね。そういうことには先生は全く関わっていないんですか。

大室 そういうことはわれわれがタッチすることではない。そういう流れの中でやりますから。特にわれわれがどうこうということはありません。

武田 美濃部さんの次に鈴木さんが「都知事に」なりますが、この「一九七九年の」都知事選挙について何かご記憶はございますか。

大室 選挙ですか。美濃部さんが辞めて鈴木さんになったとき、それはこちらは大変な選挙をやったわけです。美濃部をひっくり返すにはね。

武田 鈴木さんに決まるまで、自民党の方で候補者が何人か入れ替わりますね。

大室 誰でしたかね。

武田 例えばウシオ電機の牛尾治朗さんなんか名前が挙がっているんですね。

大室 名前が挙がったりするのはたくさんいますからね。牛尾さんというのは例の電機屋でしょう。ウシオ電機。立派な人ですよ。鈴木さんは、行政官としては断トツの人なんです。

武田 鈴木さんのことは前からご存じですか。

大室 鈴木さんは前から、といっても詳しくは知らないけれど、いろいろ関係があるのは、昭島から出ているわけです。山形県出身なんだけれど、お父さんが農業指導員か何かで昭島に来ていて、昭島から二中、いまでいう立川高校に行っているわけです。なぜ鈴木さんという名前を知っているかというと、そのころうちの方の都議会議員で、鈴木という府中から出た人がいたんです。鈴木平七かな。われわれが一所懸命応援したんですけれどね。その鈴木さんが、鈴

木「俊一」さんが知事になる前ですが、「東京の副知事にはこの鈴木「俊一」が一番いいんだ。ところがいろいろな都合があるし、鈴木さんの声が出て来ない。これはどうしてもやらした方がいい」なんて言って、そのうちに自分の方が落ちて、辞めちゃったけれどね。それで鈴木「俊一」さんの名前を知った。同じ鈴木でね。それから、昭島が地元なんだということも知っていた。

清水 それは鈴木さんが副知事になられるときの話ですか。

大室 鈴木俊一が副知事になったつけ。

武田 なっています。

大室 何か知らんけれど、オリンピックのときは東「龍太郎」さんが知事でしょう。

武田 そのときに鈴木さんが副知事ですな。

大室 鈴木さんは実際の仕事をほとんどやっているから。鈴木さんの仕事というのは、あれ「東京オリンピック」と「大阪」万博ですね。万博をやってから、こつち「東京都」に来たんだね。万博なんか見事なもので、ああいうものはもつとよく調べて。その次に筑波でやったもの「科学万博―つくば85」とは雲泥の差でしょう。その点は鈴木さんというのは素晴らしい人なんです。人を使うのが上手なんです。役人ばかりではなくて、いろいろな人を混ぜてやるからね。オリンピックをやって、万博に引つ張られていったけれど、そのときにいろいろな人材を登用しているんです。それを筑波の時にやりたかったんでしょうけれど、全然スタッフが違う。鈴木さんというのは細かくいろいろ配慮しますからね。筑波の時なんか、すぐ困ったのは、自動車を置くところがないなんていう話があったでしょう。全然違いましたね。

武田 鈴木さんは、前任者の美濃部さんともタイプが全然違いますね。

大室 美濃部さんというのは、社会党・革新系が強くて、そういうところから来ている。そのときの時代がある。この前もちよっ

とお話ししましたね、美濃部さんというのはだいたいお坊ちゃんでしょう。それを指導したのが――。

武田 大内兵衛さん。

大室 いや、丸の内に住んでいて秘書みたいな影武者。

武田 小森「武」さん。

大室 そう、小森が実際のあれ「政策決定」をやっていたわけですよ。これはオフレコにしてももらった方がいいけれど、なにしろ美濃部さんは、真面目であるけれど、遊び人じゃないけれど、毎日の時にこんなに厚い「指を一センチ以上開く」ステーキを食べるんだから。なんで必要か、わかるでしょう（笑い）。すごいなあ、あれだけの歳でよくこんなもの。それは自分たちの仲間もよく知っていますよ。どこのレストランで、というのも知っていたけれどね。

武田 「美濃部さんは」都庁の職員にも評判が悪かったという話を聞きますね。

大室 それは細かいことを知らないからだけれど、「評判が」悪いといつても、みんな都庁の職員なんかが担いだんだから。それで美濃部さんは勝ったんだから。このへんの地方事務所でもみんな総動員で、普通なら選挙違反とかいうけれど、役人がみんなやつたんだから。

武田 それは最初の時ですか。

大室 最初的美濃部の時ね。二回目のときにも対抗馬がいなくて、結局二回やったわけでしょう。その二回目の時に、この前もお話した比留間さんという東村山から出ていた人。都会議員も一回やったと思ったな。これはそつち「美濃部」の方のスタッフの一人なんです。のちに日劇のそばの高速道路のところにあったなとか公社をやっていましたけれどね。ヒルマ、名前は何といたかな。その人も私のおやじがよく知っていたものだから、私が都会議員に出ても、ずいぶんいろいろなことで教えてくれたりし

た。そのときにたまたま、「美濃部には弱った」ということを聞いたわけです。どこかで食事でもしたのかな。非常に好意的にいろいろなことを「話してくれる」。向こうも、私がやっていることをよく知っているんです。だからずいぶんいろいろなことで相談を受けたりしました。

そのときは困って、大内さんたちも困って、「今度は美濃部を辞めさせよう、こんな遊んでばかりいて、ろくろく仕事もしないのに」といって、大内さんなんかそれをやっただんです。ところがそれが社会党から反発を食ったわけだ。こっちが責任を持つとかいって。だけど、「やるからには応援しなければしょうがない。落とすわけにはいかないし」と言っていました。裏話として、向こうの内部でそうだった。どこで集まったか、大内さんなんか五、六人集まってやっただんです。その話を私は直接聞いたんです。そういうことがあったんですね。「だけど選挙になれば、しょうがない、やります」と言っていました。

**武田** 前に読んだ本の中で、東さんの次は、当然副知事だった鈴木さんが知事になるのがいんじゃないかというのが都庁の意見だったと聞いたことがあるんですが、実際はどうだったんでしょうね。

**大室** 東さんのあと、それは鈴木さん待望の声があったんです。鈴木さんが実力者だということはみんなよく知っています。使える、という意味ですね。だけど、どういうわけか表に出て来ないんですね。万博の時だったか、こちらから何回か使いを出して、知事を頼むといって頼んでいるんですよ。鈴木さんはそのときに乗り気にならなかったんです。確か二回、うちのほうの都会議員の先輩が行っているわけです。いろいろ情勢を見て、機が熟していないと見たんですかね。

**武田** 先生ご自身は美濃部都政に対してはいかがですか。

**大室** 美濃部都政に対しては、われわれは野党でしたからね。野

党の時ぐらい楽しいものはないですよ。質問はできるしね。与党なんてやるものじゃない。美濃部さんの時に、私は一番先に仕事をしたでしょう。この前お話しした、府中基地の隣のキラード路ですね。あれは、私が一年生で質問をしたら、すぐにやってくれましたよ。美濃部さんというのは人が悪くないんだけど、側近がね。その一番の側近が小森なんですよ。それを見かねて、大内さんなんか「これはいかな」と言っただんです。

**武田** 先生は、鈴木俊一さんが都知事の候補になったときには、これは当然だと思いましたか。

**大室** もう第一線でやっていましたからね。東京をどう活かすかということをやっていましたね。鈴木さんの最後の選挙の時には、都内と三多摩と分けまして、三多摩は美濃部のときでも社会党系が多かったわけです。それをなんとか取り返さなければいけないというので、最後の鈴木さんの選挙の時には、私が三多摩の実際の事務の総轄をやっただんです。石川要三が都連の会長でいて、三多摩のほうは実際に私が事務総長ということになって任せてもらってね。これは会心の作の一つですよ。

**武田** 鈴木さんの最後、四選の時というのは、一九九〇年代に入ってからですね。

**大室** 鈴木さんは四回やっているんですけど、何か知らんが、最後の前の時でしたかね。磯村「尚徳」が出たときだ「一九九一年四月」。

**清水** 逆に先生が、都議会議員の最後の頃ですね。

**大室** まだ都議会をやっているときですからね。それで私が三多摩の事務総長なんてやっただんですけれどね。だけど、これは本当のことをいって、会心の作です。

**清水** どんなことをやっただんですか。

**武田** またあとで聞きましょう。いや、さわりだけでもいい。

**大室** 三多摩でどういうことをやったかという、自民党でこう

やられちゃった「足を引っ張られた」わけですよ。自民党が鈴木さんに反対したわけです。それで磯村が出た。そうしたら、事務局を貸さないですよ。いままで自民党の本部の中に都連があった。そういう嫌がらせをやられて、講堂も貸さないし、いろいろなことがあった。それでみんなこっちは必死でやったわけです。

だいいち、資金がないんだ。それでみんなで献金をしようとかいって、みんなを集めてやろうといったんだ。三多摩では、私のほうで各市に全部指令を出してね。ただし、一人の人が余計出しではない。そうじゃなくて、みんなで応援する。これは選挙戦術の一つなんだ。困っているということはわかってるわけだ。それをみんなで持ち寄って出そうじゃないか。お金を例えば百円でも出せば、自分たちの仲間になる。それを利用しようとしたわけだ。都内ではこんな箱を作って、演説会の際にお金を集めたけれど、金額なんかいくらでもない。こちらはそうじゃなくて、多くの人から「集める」。それは私が指令を出したんだけどね。面倒だからお金のあるやつがいっぱい持つてくる、というのは駄目だと言ったんだ。みんな一万円でも百円でも、そういう人をたくさん集めると言った。百円というのはないけれどね。

**武田** 数が多い方がいいということですね。

**大室** これは、もう言ってもいいかどうか、こっち「三多摩」だけで二億ぐらい集まったかな。ちゃんと名前が入っているから、選挙費用で出しました。それから私が、三多摩のほうに知事が来るとずっとついて歩いているけれど、「大室さんはどうして一緒に歩いて歩いているんだ？」と言うんだ。知らないんだ、本当のことを。それで何か来ると、サインをしたり、どうだこうだというときは、みんなほかの人にやらせるでしょう。「大室さん、駄目だよ、こっちに来说てくれなきゃ」と言われる。三多摩からみんな来ていて、もつともらしい人が来ればね。そういう点は、私は自分は陰に隠れていて、やらせる方だから。これが

会心の作だな、最近では。選挙はずいぶんいろいろやりましたけれど、大きな選挙は、国会議員の選挙は私が直接責任者になってやったことはないですね。

**武田** また戻りますが、鈴木さんが知事になったときに、一つは都の財政を再建するんだということがありました。あと有名なのは「マイタウン構想」ですね。先生は鈴木さんのマイタウン構想については、どういうふうにお感じでしたか。

**大室** 選挙公約が「マイタウン」で、わかったようなわからないような話だけれど、実際には鈴木さんはいろいろなことを堅実にやる人なんです。ずいぶんよくやったんじゃないですか。

**武田** 基本的に、先生は鈴木さんの政策を支持する側のわけですね。

**大室** もちろん鈴木派で、つい変なことを言うけれど、最後の四期目に、いま参議院なんかやっている保坂「三蔵」君なんかが若手でいたんですが、「次、鈴木さんどうする？」と言うから、「もう四期で辞めなければいけない」と言ったんだ。保坂「あなた、鈴木派の頭領がそんなことを言っていたらしょうがないでしょう」、私「いやそういうものじゃないんだ。首長というのは長くやってはいけないんだ」、保坂「あなたにそう言われたら困っちゃうけれど」なんて言っていたけれど、その方がいいんだ。鈴木さんは「生涯現役です」なんて言っていたから、面白くなかったのかもしれないけれど（笑い）。

**武田** 鈴木さんは人を使うのが上手だったというお話でしたが、このマイタウン構想の懇談会の座長は池田弥三郎さんですね。そして財政委員会は稲葉秀三さんですね。

**大室** 池田弥三郎というのは慶応の教授でしたかね。

**馬場** 慶応の先生でしたね。

**大室** こういうことは、われわれは直接タッチしません。これは知事のほうの話です。

武田 それで先生は自民党の副幹事長になる。これは先生が自分で希望されたんですか。

大室 人事は希望がないんですよ。みんな自然になるとか、今度頼むとか、こうだとか、でなる。そのときによっていろいろ違うけれど、だいたい自民党は幹事長と政調会長です。いま総務会長が来たりしますけれど、そのうち幹事長と政調会長では、仕事の面でも、こんな「両手を上下に開く」違いがあるんですよ。

武田 幹事長のほうがー。

大室 実力をもつて、いろいろなことをやるんです。政調会の方は政調会だけれど、人によつては違います。ですから政調会の副会長なんていつても、何もしないこともあるし、使われていろいろやるときもあるんですね。幹事長だつてそうですよ。筆頭副幹事長は代行みたいになるし、それが使えるものもいれば、ただ並び大名みたいなものもいる。

武田 副幹事長というのはどういうふうに決まるんですか。例えば代議士だと、副幹事長は、ある程度派閥によってポストが決まっているとか。

大室 都議会は派閥といいますが、だいたい年季をいつて、幹事長が決まると、幹事長とのコンビがありますから。だから代行とか、そういうものはだいたい幹事長とコンビでやっているわけです。

武田 筆頭副幹事長は「幹事長との」コンビでやるんですね。

大室 そのときそのときで、実力者というか、使えるものがやることになるんですね。

清水 このときの幹事長はどなたですか。

大室 私が副幹事長をやったときは若松さんじゃないですか。副幹事長は二回ぐらいやっていますか。

武田 昭和五十五年八月から五十六年七月まで副幹事長ですね。それで五十七年七月から幹事長をやられるんですね。

大室 そのとき「五十七年七月」は失敗で、手術をしたりしてね。

武田 先生が手術されたんですね。

大室 これをやった「腹を切る格好をする」。だけど、そのころは「都政は」落ちていましたからね。でも幹事長の仕事は一番やり甲斐があつて、ぎりぎりまでやっていました。そのあとですぐに鈴木さんの選挙になるでしょう。そのころは半分病人だった。

武田 そうですか。幹事長の時に入院されたんですか。

大室 定期検査じゃないけれど、ときどき「検査を」やるわけです。どうしても手術しないと「いけないというので」、じゃあ夏休みにやろうというわけです。

武田 胃を切られたんですか。

大室 そうです。このまま行くとなんかが残ると言われまして、じゃあひと月ちょっと夏休みだからいいだろうと思って「手術を」やったんですが、一ヶ月ものを食べたりしないから、痩せましてね。途中で八月頃、会議に出たんですが、「幽霊が出てきた」なんて言われた（笑い）。

武田 そういふときは筆頭副幹事長に仕事を任せるわけですね。

大室 そうですね。ある程度、基礎が決まっていましたからね。

武田 このとき、先生は筆頭副幹事長にどなたを選ばれたんですか。

大室 木村茂が副幹事長で、代行で、いろいろやっていました。これはのちに幹事長になります。例の千代田区長になった人です。このあいだ辞めましたね。

武田 同じときに議院運営委員会の委員長もされていますね。

大室 議会運営の委員長というのは、第一党の幹事長に決まっています。

武田 議会の方も安定した感じですか。

大室 そのときは公明党が与党的だから。

武田 都議会に公明党が出てきたのは、ちょっと前、七〇年代か

らですか。国の方でもそうですね。先生は公明党の議員さんとは仲がいいんですか。

**大室** いや、それはあまり言うてはいけないな。私がやっているときは、難しい都政の問題でも何でも、たいてい公明党の幹部とこちらと話し合いをした。幹事長を辞めてからも向こうの一番の長老が来て、「今度はどうする？」と言うから、「今度はこう行くじゃないか」というと、「わかった」となる。だから、向こうは向こうでどう思っているか知らないけれど、私なんかおとなしいから我慢していることがあるけれど、いろいろなことがあるんだ。どうも、本当のことをだんだん言っちゃう。

**武田** まずいところはあとで削りますから、言ってください（笑い）。

**大室** 昔の自民党はいろいろなことがあったけれど、最近の自民党はわりあいきれいな事なんです。公明党のほうは、専門の料理屋を持っていたりする。われわれはそういうところまで呼ばれたりして、一緒に行った。たいていそういうときは、私と木村君が一緒だった。どっちが幹事長だったかわからないけれど、私は「幹事長職が」終わってから「公明党との交渉を」やった。公明党で言えば、藤井「富雄」というのがいまでもいるでしょう。いま歳をとっているから、顧問か何かになっている。今度辞めたのかな。

それからもう一人、創価学会と喧嘩した藤原「行正」というのが幹事長だった。これは公明党で池田「大作」と喧嘩をしていた。大橋敏雄という公明党の国会議員がいたのを知っていますか。池田がなんとかしたとか、こうだとかいって「学会・公明党に造反した。藤原はそれに同調」。終いにはその一族といろいろあつて、とうとう「大橋と共に藤原も公明党を」追い出されたんだ。それ「藤原」は実力者だった。その「藤井と藤原の」二人ですね。

**武田** 先生が幹事長をやられているときには、公明党との関係は

だいたい決まっていたんですね。七〇年代からですね。

**大室** だから幹事長をやらなくても、わりあいにそういう点は、難しいことになる、「今度はどうする？」ということになるんです。それは先輩もいるし、そのときの現職もいますからね。何でもないときは私は余計なことと言わないけれど。

**清水** 先ほど、都政は自民党本部からは、比較的自立しているというお話がありました。が、幹事長になられるときの幹事長人事も、都議会自民党の中で決めるわけですか。

**大室** こっちで決めるわけですね。「党本部には」挨拶ぐらいには行きますけれどね。

**清水** 都連というのがありますね。各県連の中でも都連というのは位置づけが違ってくると思うんですが、党中央と都連の関係はどういうふうに作られているんでしょう。

**大室** 東京都連というのは、普通の府県の単位と同じでしょう。それを構成しているのは、国会議員もいるし、都会議員もいるわけですね。たいてい何かの役をやらされるんです。都連には都連の会長とか副会長がいる。少し歳をとってくると、政調会長をやるとか総務会長をやるとか、誰かが必ずやっている。その点は、いままではわりあいにスムーズに行っていると思うんです。

**清水** 都議会自民党と東京都連の関係はどうなっているんですか。  
**大室** 東京都連と都議会自民党は、関係があります。上下の関係ですから。都は都で、同じ自民党の本部の中に、都連の部屋があるわけです。そこにいつもいるんです。

**清水** 「大室先生が都議会自民党の」幹事長になると、そこによくお出かけになられたりするんですか。

**大室** 幹事長というのは都議会を代表しているわけですから、なんだかんだということがあつて、ただでいい、向こうでよほどのことがあつて問題がない限りは、政策的なことについてはこちらが「都連に」相談することがあつても、「都連が」口出しする

ことはあまりないですよ。そういう問題は減多に起こらないですね。

**清水** 先生がいらつしやった頃、都連から何か言われたことはありますか。

**大室** みんな協力していますからね。一番問題になるときは、向こうの役職の総裁選がどうなるかとかいうときで、なんとか応援を頼むというようなことはあります。総裁選挙なんかをやるのと、田中角栄さんから始まったのかな、福田さんとか大平さんとか、向こうも挨拶に「来るし」、こちらも行ったりして、巻き込まれます。

**武田** 自民党の中央との接点は、選挙になりますか。

**大室** ふだんは都連の事務所がありますからね、たいてい普通にやっていますけれど、それは都連の関係の仕事であって、党本部ではない。ときどき陳情とかには行きますけれどね。いまの話で、磯村さんが「都知事選に」出たときがそうなんです。これはよくお調べいただいても面白いですよ。小沢「二郎」さんが幹事長だったんですよ。これは私なんかは、角栄さんに次ぐ実力者だと思いました。ところが彼の一番の欠点は、人の使い方が下手なんだね。それから参謀がいらないんだ。ずいぶん私なんかも行つて、「議論を」やりましたよ。「鈴木じゃ駄目だ、駄目だ」と言うんだ。

**武田** 小沢さんが、ですか。

**大室** 小沢さんが言うんだ、「鈴木じゃ勝てない」と言うんだ。「そんなことはない」といつて、入れ替わり立ち替わりだけれど、われわれもずいぶん動員されて行きました。私なんかも言いますから、「小沢先生、それは失礼な話だけれど、それじゃあ話にならない」とか言つて、よくやりました。その前にも東京都連の関東ブロックとかいろいろ役員がある。あのときは私も監査か何かやっていたんだけど、小沢さんとは本部の会合でもよく会いましたね。小沢さんは如才ないからお酌に來たりして、いろいろや

っていたけれど、惜しかったと思うな。ところがこれは大変な対立なんですよ。これは歴史的だったでしょう。すごい選挙でしたよ。磯村さんと「鈴木さんの都知事選」、ですね。

**武田** そのときは、大室先生の側と小沢さんの側で、完全に意見が対立したわけですね。先生は鈴木さんを応援するわけですね。小沢さんは鈴木さんでは駄目だという。

**大室** 東京都連は鈴木で行こうという。だから負ければ腹を切る覚悟だったわけです。最初は少しモタモタしていたけれど、これ以外ない。一番困ったのは資金を断たれたことで、事務所を貸さないとか、いろいろ嫌がらせをずいぶんやられた。

それで、そういうときには公明党がいろいろ謀略をやるんだ。見え透いた選挙戦術だ。例えば奥多摩の山の中に行つて、檜原「村」ですか、山の中でもどうだこうだといって、みんな公明党のサクラが行くんだ。そのころテレビに出たりしたけれど、東村山でお風呂に入っているところで大勢いた、なんていうのは、公明党のお風呂屋があつて、みんな追い出して、サクラだけ入れておいて、庶民と一緒に風呂に入っている、なんてやっている。

**清水** 有名な映像ですね。

**大室** そういうのをみんな、私なんかはスッパ抜いた。それはなかなか油断できないんです。そういうものをスッパ抜いた情報を私なんかは出したけれどね。あのときの小沢さんたちは資金が豊富なんだ。東京都連でもパンフレットみたいなものを出すでしょう。一回やると、一千万の世帯でしょう、十億かかるんだ。それをどんどん出すんだもの。こっちは資金カンパでやっているんだから、それは大変でした。それはいろいろあつた。でもあれは会心の作だったな。

**武田** また幹事長の時代に戻りますが、先生はもう一つ予算特別委員会の委員長をされています。これも幹事長がやることになっているものですか。



**大室** いえいえ、幹事長がやるとは決まっていない。それは予算特別委員会の委員長で、なかなか権限があります。そのときの話では、そのころ朝日の記者がいたんです。理事は各党から出ているわけだ。野党も与党もいる。それで、何か揚げ足をとるようなことを言うんだ。その朝日の記者に、「大室さんがいると、すぐにビシャツとおしまいになりますね」なんて言われたんだけれど、やつらも顔を見て、私には逆らわないんだ。共産党も。

**清水** それはなぜでしょう。

**大室** そこまで言ったらいけないけれど、共産党が来て、「大室さん、今度われわれも議長に推しますから」と言うんだ。「冗談言うな、おまえのほうに言われなくても、やりたければやるよ。おれは議長はやらないんだ」と言ったんだ。だって、いまだから言ってもいいけれど、社会党だって、幹部なんてみんな来て話していたんだ。そういうのがいないんだ。それは先輩がいたりするから言えないんだ。

社会党だって、いまの尾崎「正二」君だってそうだけれど、あれなんか当選したら、都会議員から国会議員になった本部のやつが来て、「大室先生、ありがとうございます、おかげさまで当選させていただきました」なんて言う。そのくらのあれがあるんです。だから国会議員の中でも、山花「秀雄」さんだって、いまは息子「貞夫」がやっていて、息子はあまり知らないけれど、向こうは「私を」知っている。わりあいになんか点ではあれがある。案外そういう点では、信用があつたというのかな、違った意味で一目置かれていたんじゃないの。それはありがたかったと思う。だから歴代の総理大臣だって、大平さんなんてここに来たことがある。総裁選の時に。

**武田** 先生の家に、ですか。

**大室** 家に来た。有名なんだ。大室さんのところに行つてトイレを借りた、というんだ。都会議員だけれど、選挙だからみんなや

らなければならぬでしょう。護衛がたくさんついてきたけれど、わざわざ私のところに来たんだ。

**武田** 大平さんとは前からの知り合いなんですか。

**大室** 大平さんは、大蔵大臣をやっているときなんか陳情に行っているけれど、それは酒屋の話だ。その前に消費税の問題なんかずいぶんやったんだけれど、とうとう消費税はそのまま通っちゃった。大平さんというのはもう大変な大物でしょう。田中角栄さんも、私なんか別の意味で、われわれが言うとおかしいけれど、特別待遇してもらつた方じゃないの。竹下さんがそうでしょう。渡辺美智雄さんがそうでしょう。いまだ少し元気になつたら、竹下さんと渡辺さんだけはお墓参りに行つてきたいなと思つてゐるんだ。

**武田** それは幹事長になる前からですか。

**大室** 幹事長とかなんとかは関係ないです。福田さんが総裁をやつたときも、われわれみんな仲間で自宅に行つていろいろなお話をしたことがあつたけれど、そういうことと違って、本当に私がご厄介になつたり、特別に親しくしていただいたのは田中角栄さんもそうなんだけれど。ごく懇意ということではないけれど、行くとやつてくれる。田中さん、竹下さん、渡辺美智雄さん。大平さんは早く亡くなつちやつたからね。

中曽根さんだけだった、われわれがあまりあれだったのは。中曽根さんが総裁の時は、私なんかずいぶん応援したんだけれど、いまの話で都会議員の中でまとめたあたりしたんだけれど、それを代行するようやがっているんだ。うちの仲間なんかでも、昔からやつているのがある。本当にそういうのが実力があるわけではない。上手にこうやるけれど、本当のあれは違うんですよ。中曽根さんとは私はあまりなかったな。

**武田** 接点がなかったんですか。

**大室** ええ。中曽根さんと三木さんだ。三木さんは、奥さん「陸子」はよく知つていたけれど。こつちに住んでいたからね。

武田 吉祥寺、東女「東京女子大学」の近くですね。

大室 吉祥寺か。よくこのお祭の時に奥さんが植木を買いに来たんだ。なかなか厳しい人だ。それはおまけの話だけれど、わりあいにそういう意味では、いろいろとかわいがられているんです。

武田 先生が幹事長をされているときに鈴木さんの「二期目の」選挙があるんですが、これは先生は――。

大室 これはみんな一緒になってやったということです。その次の、磯村とやるときが一番大変だったわけです。

武田 先生は夏に手術されて――。

大室 秋まで。ちょうど夏に、議会が終わったからいいなと思って、事前に入ったことにして、ぎりぎりで行ったんですがね。でも回復するには一ヶ月以上かかりますね。

武田 先生は幹事長に五十七年七月になられて、五十八年八月までやられるわけですね。

大室 それは一回で終わりです。

武田 それは慣例で、そういうことになっているわけですか。

大室 ええ、もう決まっています。

武田 そのあと、幹事長を辞められてからは何をされるんでしょう。

大室 別に普通じゃないですか。いわゆる長老的になっちゃいますからね。

武田 幹事長が終わるとだいたいそういう立場になるんですか。

大室 だいたいね。

## ■ 都議四期目

### ―― 都庁移転・長期計画

武田 それで昭和六十（一九八五）年に、都議会議員の四期目になるわけですね。先生ご自身の選挙はほぼ毎回順当でしたか。

大室 まあね。だけど本当は辞めたくなかったのは、最後の前だったか、二人区になったとき、いまの社会党の尾崎君が出たんだ。

このときは自民党に風当たりが強いときだった。何かあったんですね。それで全体的に困った。その選挙の時に、私より尾崎君の方が余計に「票を」とったんだ。何も仕事もしないければ、何もないでしょう。それで、もういやになったんだ。選挙っていうのは馬鹿馬鹿しいと思った。

武田 それが四回目ですか。

大室 四回目のときかもしれませんね。それから負けているわけではないけれど、彼も半分抱えていたんだけれど、一般の空気がそうなんだ。こんなに真面目にやっているのに馬鹿馬鹿しい。不遜な言葉で申し訳ないけれど、そういう感じを持ちました。そのくらい自負していたのかもしれない。

武田 それで昭和六十年になると都庁の移転問題がでてきます。

先生はこれにはどういうふうに関わられましたか。

大室 これはいろいろやりました。裏でもやりました。最初は、速記録を見ればわかりますが、いろいろ質問もしています。それでいよいよ固まってきた、都庁が移転するほうがいいだろうということになりましたね。ところがそこで内部調整が大変だったわけです。というのは、下町の連中が反対でしょう。特に、都庁移転が決まった明くる年か、選挙があるわけだ。地元の下町の人はみんな反対なんです。

その反対をどうするかということだけれど、そのときの幹事長は千代田区長をやった木村茂さん。私と一番のコンビですから、私は「役職は」何もしていないけれど、実際には二人でやったんです。だからその動向をずっと見ていたんです。都庁の中でも、鈴木さんは別として、そのころは企画調整局長といったか、筆頭副知事と、財務局長の三人が主としてやっていたんです。

それでいろいろなことがあって、われわれはほとんど情勢を――。

いよいよ移転するかどうかを決める前の時には、夜帰ってくる、新聞社がついているんだ。というのは、反対派の十何名かと、われわれはしょっちゅう接触していたんです。私と幹事長の木村さんとでね。それはどこでやるかという、最初は浅草でやるんだ。牛肉屋か何かで。浅草のなんといったか（清水 「今半」ですね）。「今半」ですか、そこでいろいろな話をしながらやっているんだ。そして十時頃になると、悪いけれど失礼しますといって、彼らは上野のホテルか何かで泊まり込みでやるんだ。それを何回もやっていた。その情報は、われわれも泊まり込みしてずいぶんやっていたけれど、追いかけて回されましたよ。

**武田** それは反対派を説得することですか。

**大室** 説得というか、反対派に聞いて、これはどうなんだ、というのを様子を見ながらやっただけです。だけど、だんだんわかったのは、彼らにもメンツがあるし、これで取られてしまうと自分たちの選挙のときも大変だということだった。中には、まあしょうがないだろうというのもあるけれど、脱落すると、地元としては弊害があるというか、なにかやられるでしょう。ですから十何人が結束し始めた。何回かやっていてね。その会合について、私ども最後までやっていて、彼らも一緒になってやってくれたんだ。

それでどうするんだということで、最後の段取りぐらいになつて、やはりこれは反対するなら反対するんだという腹を決めたんでしょう。ところが、その十何名が反対して、社会党や共産党と一緒になつて反対すると、あれは三分の二か何か取らなければ駄目なので、足りなくなってしまう。棄権してくれといったんだけれど、とんでもないということで、いろいろ問題になったんです。それを心配したんだけど、鈴木さんは樂觀していたんです。早くやれ、という。田辺という元の都会議員、そのころは幹事長は上がっていたけれど、それと水村「二郎」なんていう副幹事長がいて、なんでもいいから力で押し切ってしまう、ということだ

った。ところが鈴木さんも、なに、最後には全部賛成してくれる、と軽く思っていたんだね。ところが片方はそうじゃないんです。こういう話をするともまずいのかも知れないけれど、あれは九月か十月の定例会にかけたんですね。

**武田** 九月三十日ですね。

**大室** そのころ私は福祉関係の団体の会合があつて、小田急ハイアットにいたんです。そうしたら、「大室さん、面会です」といわれた。秘書が来て、車が来ているけれど、ほかの人にはどこにいるなんて言っていないから、おかしいな、と思つたけれど、「ぜひお願いします」という。出てみたら、都庁のえらいやつが三人ばかり来ているんだ。「ぜひお目にかかつて」というので、じゃあまあといって、下へ降りていつて話を聞いた。

「このままで行くと、都庁の移転問題は崩れてしまいます。というのは、定数に満たないと駄目だから。これをひとつ大室さんから知事に話をしてくれ」と言うんです。「何を言っているんだ、おまえら幹部がいて、筆頭の副知事だの、企画調整局長、財務局長が慌てて来て、それができないものを、おれがやっただけで、承知しないぞ」と言ったら、「あなた以外には話ができる人はいない。そういう段取りをつけますから、ぜひ会つて話をしてください」という。

それで明くる日だったか、東京会館で知事は会合があつた。昼飯か何か一緒にやっていた四、五十名の会を早く切り上げて、その場所を借りて、「私が」臨時に鈴木さんと会つたことがあるんです。向こうが段取りした。大きな広い部屋に二人しかいないんだ。誰もいない。みんな外に出ちゃったんだ。

鈴木さんが「どういうことですか」と言うから、「このまま行くと、反対派の勢力が強いから、流れてしまいます。せつかくこまで来たんだから、一つ検討していただきたい」と言つたんだけれど、最初は、「何を言っているんだ、私が会えばそんなもの

はできるんだ」というような顔をしているんだ。それでだいぶや

ったんだけど、話があれで、私が言ったのは、「その証拠ではないけれど、知事がもしお望みなら、反対派の連中を私は連れてきます。本当の話を言えるやつを連れてくるから、誰を呼べと言え連れてきますから、聞いてやってください」と言ったんだ。

それで一番先に松井「ひろみ」さんという女性の都會議員と会わせた。目黒から出ていた人だ。それがまた強いんだ。知事は「まあそういうけれど」なんて軽く考えていたんでしょう。私が言えば説得できると思っていた。二人ぐらい連れて行つたかな。

武田 それは後日の話ですね。

大室 後日です。その日のあと、まだ議会が始まるまで時間があつたんですね。それで二回ぐらい会わせたんです。そうしたらあとで財務局長から報告があつて、「最初に大室さんに会つたときは、『何を言っているんだ』というような怒つたような顔をしていた。明るる日になつて『ああ、これでよかった』と二回言つた』というんだ。知事はあまり認識していないけれどね。

それで、「それじゃあここでやらないで、春まで延ばしましょう。移転問題は、いま検討中でやりません」と、ピタツと切つたわけだ。選挙が終わつてから、ということになつた。最初は、どうしてもやるんだ、ということだつたんですよ。そういう裏話があるんです。最初からこういうことですよ、という話になつていくんだけど、本当はそうじゃないんです。それを言ってきたのが、横田「政次」副知事と、企画調整局長と、財務局長は花田「二憲」かな。それで延びたので、選挙が終わつてから、「移転反対派の」連中も、今度は欠席しようということで、出席しなかつたんだ。出席しなければ合うわけでしょう。

武田 それが昭和六十年九月ですか。

大室 いっぺん決めないで、そのまま継続にしてしまつたでしょう。武田 六十年九月には「東京都庁の位置を定める条例」というの

が可決されていますが。

大室 何か知らんけれど、そのときには大変なあれだつたんです。本当のことをいって、それを知っているのは今の三名だ。みんなほかの局長連中もヒヤヒヤしていたらしいけれど、誰かがやっているな、というのはわかつていたんでしょう。

武田 先生、鈴木さんのこの本「回想―地方自治五十年」（鈴木俊一・ぎょうせい・一九九七）を読まれたことはありますか。

大室 鈴木さんはわりあいには本當のことを――。

武田 ここに先生の名前が出ています。読みましょうか。いろいろ都庁移転については問題があつたということで、「もうひとつ、当時の都議会自民党の幹事長で（先生のことを幹事長だと思われているんですね）今も親しくおつき合ひをしている大室政右さんから、移転問題について考え直して欲しいと言われた。大室さんは戦時中には翼賛壮年団の幹部で、インドネシアのセレベスあたりに出征をしたこともある人で、なかなかの人物である。この人から連絡があつて、『特にお願いしたいことがある』というので、どこかのホテルで会つた。

行つて、『何ですか』と尋ねたら、『いや実はシティホール問題なんだけれども、ご存知のようにいろいろあるんだが、知事さん、やつぱりこの機会に一度お考え直しを願えませんか』と（大室先生が）いう。（鈴木さんが）『そういうお話が出るというのもわからんじゃないけれども、私としては今日の段階でこの問題を考え直して方針を変更するということはとてもできません』と答えると、『そうですか』といつて、それ以上の話はこのときにはなかった。ここがちやうど大室さんが出ているところなんですね。

大室 それはいつになつています。

武田 これは九月の議会の前ですね。先生がおっしゃつたそのお話じゃないかと思うんですね。それから、「副知事からも助言・意見を伝えられた」と書かれています。副知事の方も、やつぱり

状況がよくないので考え直したらどうかと鈴木さんに言っているんだけど、鈴木さんはこのまま行くんだ、今僕が考えを変えたらそれで政治生命は終わりだといって、九月三十日の議会で議決されて、先生がおっしゃった欠席する人がいて、「東京都庁の位置を定める条例」が可決される、と書いてあるんですね。

「このときに賛成者が八十八、欠席が八、三分の二という数が八十、それで八づくしだ。それで三分の二で多数決が成立したということとで数字をよく覚えてる」。このときに鈴木さんは、「反対者を鈴木さんの自宅に呼んで説得したんじゃないかという噂があったんだけど、そういうことは全くしていない」と書いているんですね。先生がおっしゃったこととはちよつと違いますね。

**大室** そんなことが書いてあるのは知らなかった。たいていの「本」は見ているんだけど。鈴木さんは押し切るつもりが強かった。新宿だの、こつちの方の連中は、そんなことは構わないからやっちゃまえという。ところが私もはその情報を知っているものだから、もしやって本当に反対になったら足りないでしょう。しまいには、その連中が勘定して、欠席したわけでしょう。どうして欠席したか、そういう格好にうまくしたからよかったんだ。みんな、どつちも困っていたんだ。

**武田** この鈴木さんの回想の裏に先生のご活躍があったということですね。このあと、平成二年に「新都庁舎移転対策会議」というのができるんですね。やはり少しタイムラグがあつて、少し延ばしたような形なんですね。

**大室** だいたいその通りなんですけれど、一番心配したのは、向こう「都庁」の幹部の連中だったんですよ。ところがね、だんだん本音を言っちゃうけれど、情報網が大したものだと思うのは、向こうの連中が上野で「会議を」やるんですよ。その情報が朝七時になると私のところに電話が来るんだ。

**武田** それは誰から来るんですか。

**大室** (笑い)。それは大したものだと思つたよ。誰と誰が出席して、こういう発言で、こうなりました、というんだ。そういうことは、木村さんと私でやつたんだ。木村さんもずっと一緒に歩いてたけれど、知事と私が直接話したのは、私しか知らないんですよ。誰にも言わないから。役人は知っているわけだ。だからそのへんはまあ(笑い)。

**武田** この昭和六十年というのは、都庁移転、シティホール問題が最大の問題だったんでしょうか。

**大室** 最終的にはそういう問題になりましたね。どつちも困ったわけですよ、味方同士だから。野党が反対してこうだというのならないけれど、そうじゃないんです。

そのときに「木村さんは」幹事長だったか、終わったあととか忘れたけれど、名演説をやっているんだ。江戸開府以来の東京の歴史的な話をして、ここで時代が変わったからやむを得ないけれど、これを大事にしてどうだろうだ、といって、反対とも賛成ともつかないような演説をやっているわけだ。というのは、地元が千代田区だから積極的に賛成したら困るわけです。だけど大勢的にはしょうがない。あのころ都庁が来ないといふん直さなければならぬし、役所が幾つにも分かれていた。分室や何かで十幾つになつていたんでしょう。その費用だけでも大変だから、新しくしたほうがいい。そのために元の水道局の跡地があつたんですから、そういう点はうまく行つたんですね。

**武田** あとはこの時期に何かご記憶に残っているようなことはございますか。あと、弔辞起草特別委員という不思議な職をされているんですね。

**大室** これは昭和天皇の亡くなられたときの――。

**武田** 八五年ですからね。天皇が亡くなったときと間違つて入れたのかな。

**馬場** 賀詞起草というのもあるんですね。

清水 それはだいたいわかりますね。

武田 あとはだいたい委員の仕事が想像できるんですが、弔辞というのは――。

大室 賀詞というのは、新しい天皇ができたときですね。そうだと、それで宮内庁に行ったんだ。そのころは年寄りだから、そういうことをやるんだ。

武田 それから、東京都の長期計画が第一、第二とありますね。

大室 いろいろな外郭的な委員会がありまして、それはずいぶんやりました。

武田 先生は長期計画の審議にも実際に参加されているんですか。

大室 それは委員会で相当発言しています。それとか、さつき進駐軍の話がありました。労働問題というか、雇用問題があったと思うんですね。職安関係もやっています。

清水 都の地方職業安定審議会に入っていますね。

大室 もう一つ、文化財とかそういう関係もずいぶんやりました。

武田 都埋蔵文化財ですね。

大室 埋蔵文化財とか、教育庁関係のことですね。

武田 それで、鈴木さんが八七年に三選されて、「臨海副都心開発基本構想」が出されますね。

大室 臨海副都心、これは本当に惜しい。どうもこういうことはあまり言えないんだけど、失敗したのは――。臨海副都心の構想は良くて、これをやったら成功したと思うんです。そういう構想で着々と進んでいるときに、建設大臣をやった金丸「信」さんがまだ生きているときに、金丸さんが視察に来たんだ。それで船を貸してずっと回って、これは大変なものだということで、こちらとは関係なく投資的な方面に話が行っちゃって、変な話が出たりして腰を折られたことがあるんだ。これは本当の極秘の話だけれど。

武田 でも、ありそうな話ですね。先生はこれはどういうふうに具体的に関わるんですか。委員会の審議の過程でいろいろな意見

を述べるとい形ですか。

大室 それぞれの委員会で、普通の常任委員会は常任委員会ですが、そういうことは必要な時に話をします。いろいろ質問したりしますけれどね。

武田 議会で速記をとるような形で話すのではなくて――。

大室 速記はみんなとっているでしょうけれど、これは常任委員会とは違いますから。まあ普通は、関係がないようなところに出ていて話を聞いているという場合も多いんですが、必要によっては行きます。それを選ぶのは、そっちに関心があったりするからです。

## ■都議五期目へ引退

武田 それで、八九（平成元）年に先生は都議会の議員の五期目になるわけですね。このときの選挙も順当でしたか。

大室 この選挙は、もちろん――。

武田 五期務めるといのは長い方ですか。

大室 議員としてはいいんですが、私の考え方は、本当は三期ぐらいで辞めなければ――。ところが三期では仕事はできないですね。議員はいいと思うんです。ただ七期、八期というのは無理だと思っ

うんです。それは本当に骨董品になってしまいますね。だからやつぱり五期ぐらいまでじゃないんでしょうか。

武田 このあいだに、国の選挙、衆議院とか参議院のほうに出てくれ、という話はなかったんですか。

大室 そういう気持ちはありませんでした。最初は参議院もあつたし、衆議院もありましたが、そういう気持ちはなかったですからね。器じゃないですよ。最初の参議院の時に言われたことがあるんです。若いときですね。

清水 戦後すぐ、ということですか。

**大室** 参議院というのができたでしょう。東京からは西川なんとかという人、昭島の資産家の方がやったことがありますけれどね。それと同じように、このあいだ話が出たけれど、細田「義安」さんのときに、「大室君、今度参議院をやったらどうだ。われわれが段取りをする」と言うんだ。「いやとんでもない、そんなつもりはありません」と言った。

その後、酒の中央会で酒造組合があるでしょう。そこで「全国区でやるから、ぜひどうだ」という話が会長からあったことがある。「いや、そういうことはやりませんから」と言った。それは誰だって、代議士はどうだ、という話がありますよ。

**武田** 先生、最後の五期目の時には何か印象に残っているようなことはございますか。例えば国の方ではリクルート事件がありました。政府の方はリクルート問題でてんやわんやしているときですが、都の方では何かありましたか。

**大室** 私は都会議員をやっているんですけど、最初になった頃、先輩の人からよく聞いたんです。その前に自民党が大負けに負けていることがある。革新系がうんと増えることがあるんです。一つ変わったときにわれわれが出て行ったんです。刷新の都議会ということだ。いぶ変わった。そのときに先輩の人から聞くと、そのころの自民党は、議会が終わるとみんな熱海とか伊東に行くんだそうです。そうすると浴衣でも何でもみんな名入りなんだ。うだ。それで議長から別に小遣いをくれるんだ。うだ。その人が言うんだ。もうそういうことは、昔は本当にー。

それは、ブラジルに国会視察をしたときもそうだった。同じことを言っていた。だからあつちからもこつちからも引つ張りだになるんだ。こつちの党の人でも、こつちが勝っているところこつちに入っちゃうとか。あそこはとも変わっているところでしょう。議長が上の方で手が届かないようなところについて、上から見下ろしている。出ているのは秘書だとか代理が出てくるんだ。ずいぶ

ん変わったところだなと思って、いろいろ聞いて、勉強になったけれど、ずいぶんまだ後れているな「と思った」。東京の都議会でも、われわれが出るまではそういう傾向があったんですね。それがすっかりなくなつた。そういう意味では、私どもはおかしなことがなかつたと思うんですね。

**武田** それで平成三年に新庁舎ができますね。

**大室** 新庁舎ができたときに何かやりたいということだけれど、私どもはそういうつもりはなかつたし、ちょうど引退時でよかったと思つたんです。

**武田** 最後に鈴木さんの選挙ですね。

**大室** 最後に鈴木さんがいいよやるということになったときに、ほかの連中というか、反対派じゃないけれど、地元や何かの連中がいろいろな話をして、委員会に鈴木さんに来てもらつて、よく話を聞こうじゃないか、質問しようじゃないかということになった。そのときに私が、「ようし、おれが代表でやるよ」といって、都庁がこつちに來るときに委員会、どうしてこうなるんだとか、これがどうなんだという質問をやつた。八百長じゃないが、やつたけれど、それは真面目な話でしたからね。それでみんなわかつたようだったんだけど、最後に、うちに帰ると反対になつちゃうんだ。それはそうですよ。地元でもつてね。

**武田** それで九三年七月に、都議会議員を引退されますが、これは選挙はやらないということですね。これは先生ご自身で、だいたいこのぐらいで、ということですね。

**大室** その前に、四期で辞めたいと思つたんですね。それでその精勤の本『渦巻く時流の中で』を書き出したんですよ。早く、忘れないうちにやろうと書き出した。夏から書き出して、だいたい行つたところで、ほかの人は「私に都議を」辞めさせるつもりがない。「あとがどうしてもできませんから、もう一回」という。そんなこと言つたつてもう間に合わないじゃないか、全体的な空

気から言つてね。しょうがない、どうしても、というのでもう一回やろうということになった。

武田 九三年の時は、先生の方でもうこれで終わりだということですね。

大室 今度はそういうつもりで、だいぶ地元でも叱られましたけれどね。ほかの人は、だいたい辞めろと言つても辞めないんだから。

武田 「大室先生は」辞めるな、というのに辞めたんですね。

大室 それは、今度出たつて選挙に勝ちそうもないというのならあれだけど、そういうことじゃなくて辞める、ということはみんな考えないんですよ。私なんかは潮時だし、あれだと思つたものですからね。

武田 先生は都議会を辞められてからは何をされるんですか。

大室 辞めてからも結構いろいろやつていましたけれどね。帰つてきてからやつたのはお宮の関係だったかな。

武田 都議会をやつていたときは、あまりお宮の方はできないわけですか。

大室 お宮の役員はやつていましたが、そういうのは定例的に出ればいい。ふだんはあまりそういうことも、二足の草鞋ではないですけれど、お宮の方の話はほんの小さなもので、片っ方はこう「都議の方は仕事が大きい」でしょう。

お宮の関係というか、そのころ北多摩の総代会があつたんですね。その会長のワタナベさんが亡くなったものだから、あのときはまだ議会をやつていたのかな、何か知らんけれど、みんなでき、「どうしてもやつてくれ」ということで、それから北多摩の総代会を引き受けたんです。北多摩の総代会をやつていると、そのうち東京都の総代会の会長をやれということになって、今度は全国の神社の関係の役員をやつてくれとか、伊勢神宮のなんとかとか、ということになる。これは全国的な組織ですから。「いま」

ここで全部辞めさせてもらおうかと思つて。

武田 でもまだ辞めさせてもらえないんじゃないですか（笑い）。

大室 いや、もうさうとう毫碌しているから、危なくてしょうがない。話をするのも危なくてしょうがない。何をしゃべるかわからないから。

武田 また選挙を手伝つてくれとか、少し相談させてくれという話はあつたんじゃないですか。

大室 最新の選挙は市長選挙ですよ。現市長の選挙だ「二〇〇〇年一月」。

武田 それはどうでしょうか。ちよつと生臭いですか。

大室 それはざつくばらんに言えば、私がいなければ勝てない。問題にならない。だつて向こうは現職の市長と都会議員と商工会議所会頭と現職の議長がついて、相手は私一人なんだ。だからたいていの人はどっちが強そうだと考える。それを一番間違えたのは東京都連なんだ。都連もそっちが勝つと思つた。公明党だつて間違えた。公明党の藤井なんか、言うことを聞くんだけれど、「いや地元聞いて」という。みんな向こうが勝つと思つていたんだ。それは生々しい話だけれど、私がやるときには命がけでやりますからね。全体の空気を見て、ついてくる。そういうとおかしいけれど、ほかの人じゃできないんです。

武田 いちおう先生が都議会をやられたときのお話はザーツと聞いたんですが、ちよつと時間をおいて、今までの速記を読み返してみても、もう一回補充があるかどうか考えさせていただいて、ぜひ九三年以降のお話も出していただければと思います。

大室 もうさうとうおかしいから。あとでこれ「速記録」を読ませていただいても、ずいぶん長いもので、二時間で読めないんですね。ずいぶんおかしいことを言っているな、と思うけれど。

武田 いえいえ。冒頭にも言いましたが、ぜひ記録をまとめさせていただきたいので、そのためにひと月おかせていただいて、



そのあいだにちよつと見ていただければ。

大室 それは結構ですよ。私もいまの翼賛選挙の、自分のやつが間に合わないものだから、東京市を少し入れて補充しようかと思つて。書けないんですよ。

武田 先生、書かないで、話してくださいれば、それでちゃんとまゐりますので。

大室 どういうわけか、書き始めると変な字を書いたり、その字がすぐ出て来ないんですね。

武田 先生からお借りしているいろいろな資料を、できれば冊子の中に、必要な部分は使うような形にしたいと思います。

清水 そういう資料を入れるという形にすると、先生の速記録自体が、精動をやる人なりにしても、それ一冊である程度のことかわかるというものになると思うんですね。

大室 よくわかりませんから、そちらのほうは――。あとになってみると、私も生意気なことを言っていて申し訳ないと思つて。だけれどやっていたことは、自分で今から考えると、えらいことをやっていたんだな、という気がしますね。

武田 今日のお話だつて、すごいお話ですよ。

大室 いやいや、その中で特に私は戦争中の話を三部作ということでまとめたと思つているけれど、みんな半端でおしまいになつちやうたわけです。だから残念なんですけれど、あの三つは本当の史料になるんじゃないですか。南方の話は誰でもあるんですが、ボルネオのいろいろな地域の特長とかは、いますいぶん大

勢の人が行つて調べたりしていますが、誰か本当のことをもう少し教えた方がいいんじゃないかという気がしないでもないですね。

武田 ではこちらの方でも、もう一度勉強させていただいて、もう一回補充させていただければと思います。とりあえず長いお話で、今日で九回目ですが、だいたい聞かせていただいて、ありがとうございます。

大室 いやいや、なんですか、申し訳ない。

武田 少し日程を調整して、ご連絡いたします。だいたい七月の初めぐらいになりますかね。二ヶ月おけばいいかと思っています。

清水 あまり暑くならないうちに。

大室 そのくらいまでもちそうだから。

武田 先生はまだまだお元気ですよ。先生が手術されたのは、今日のお話にあつた手術だけですか。

大室 何回も入院していますけれどね。長くはないけれど。このあいだもちよつとありましたけれどね。このあいだの市長選挙の時も、いざ本番の時に救急車を呼ばれちゃつて。

武田 それは先生が命がけで働かれるから。

大室 私どもは四月の選挙を正月ごろからやっているでしょう。もういろいろ言うんだ、「もう限界ですよ」と言うんだけれど、ほかの人にはわからないんですね。

〈以上〉

# 大室政右 オーラルヒストリー

## 第10回

---

日 時：2003年12月25日（木）

14：00～17：00

場 所：大室政右宅（府中市）

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

武田 知己（政策研究院特別研究員）

清水 唯一朗（東京大学先端科学技術研究センター特任助手）

馬場 治子（府中市郷土の森博物館学芸員）

## ■ 大國魂神社との関わり

**武田** 今日は、第十回目で、最終回のつもりで伺いました。いままでのお話の中で少し抜けているところについて、先生からぜひお聞きしたいことをいくつか質問票に挙げさせていただきました。最初に、先生と大國魂神社との関わりについてお話をお聞かせいただけたらと思うんですが。

**大室** 大國魂神社とは、前からのことはよくわからないんですが、あまり大した役をやっているわけではありません。社家ではありませんから。ただ本家筋が、資料を見ると、興守（こしもり）ということをやっているんですね。お神輿の関係で、これはちゃんとした役なんですね。私は前に、そんなことをやっていると聞いたことがあります。前の禰宜（ねぎ）さんがいたときに、「もちろんそういうことをやっていらつしやるよ」と言っていました。あとは普通の出入り程度だったと思うんです。

いま大きな事項としては、例の門前町をつくったとき、明治の初めからですね。それは私の祖父が関連していたようですね。その話は入っていましたか。

**武田** 一番最初の頃、少しお話しいただきましたね。

**大室** その中でわれわれが不思議に思うことは、神社の境内を借りて、休憩所のようなものをつくりますね。それも、三之宮というお神輿の休憩所であったところを買っているんですね。境内の中の建物を買って、そこに休憩所を作るようになるんですね。神社の土地を借りていたのが、八幡宿の町内の「誰と誰か」名前も全部わかっています。買ったのではなくて借りてやったのかどうか。そういうことはみんなお宮が主導でやっているわけですね。ただそのときに払った証文なんかがあるんですが、その頃で百円だということだから。あんなバラックみたいなところで百円だから、町内との関係でそうだったんでしょうね。

**武田** それはいつ頃ですか。

**大室** 明治の十年前後ですね。

**武田** 先生のおじい様の代になるんですね。

**大室** そうですね。それがこの前お話ししたのは、祖父が、その前の養子に來たのがいましたね。それが孫であるおじいさんをよく連れて都内に行っているものだから、明治になりましてから、いろいろなことを知っていたんじゃないですか。それが帰ってきて、宮司につかまって、いろいろなことをやるわけです。そのころまだ若いんですよ。二十歳ちょっと過ぎのやつが、以前は茶店というか、本当にお茶を出すぐらいのお店だったものを、そこで食事ができるような、食事ということはいいけれど、そういうのをやったり、団子を出したり、飲み物を少し飲ませてもいい、ということにしたんでしょうね。要するに商店街をつくらうとしたんでしょうね。そのときから、明治四十年に全部返すまで、よくやっているんです。それに関連して、神社のいろいろなことをやらせていただいているようですね。

**武田** 先生のお父様も同じようなことをされているんですか。

**大室** 跡を継いでやったときには、もうその店がありませんから。だからおやじさんというのは、よく話に出るけれど、露天商のねー。そのころの露天商というのは、いまでいう露店と違うわけですね。家でやっていたのが、お祭りになると、いわゆる高市（たかまち）というでしょう、そういうところへ来て商売をやるわけですね。おもちや屋さんをやったり、団子屋をやったり。

**武田** ふだんは自分の家で別の商売をやっているんですね。

**大室** ええ。これは大きなお祭りや、人が大勢出ますから。「うちの」おじいさんというのは、その元締めみたいなことをやっていたんです。おじいさんがやっていて、おやじが跡を継いでやっているけれど、その時「父が祖父を継いだ時」はこっちは自分の店でやっていますからね。

武田 酒屋ですね。

大室 ええ、だから「露店市の」面倒を見ていただけなんです。お祭りの行事についてはいろいろなことがあった。

もう一つは、おじいさんがやっていただけではつきりしていることがある。いまお酉様というのがありますね。大鳥神社「大鷲神社」というのがありますね。節分「十一月」に熊手を売る神社がありますね。大国魂の拝殿の右側にありますけれど、いま住吉神社と二つ一緒になっている。住吉神社というのは、酒屋さんのほうの関係の神社ですが、いまは大鷲神社が主になってしまいました。

これは馬場先生のお話になるけれど、「大鷲神社は」昔は天神山のほうにあったんです。昔はお酉様になるとお囃子とかを連れてきて、余興みたいなことをやったりして、ひところはだいぶ賑やかだったけれど、場所が場所だから、廃っちゃったんですね。それをうちのじいさんたちが復興を図ろうと思って一回やったら、結局駄目で、明治二十何年かに、「大国魂神社が」官幣小社になって内務省の管轄になってから、大国魂神社に合祀してもらったんです。それは正式なことです。その時にいろいろ面倒をみているのが、おじいさんのようですね。何人かでやっています。世話人というのがありますけれどね。

武田 世話人の方は、当然この地域の方々ですね。

大室 やっぱおじいさんと関係のある人だった。天神山でやっているお酉様や何かは、祭典があるときには露店が出るから、そういう人たちの面倒を見ていたのと一緒になんでしょうね。

武田 だいたいどのぐらいの範囲から来るんですか。

大室 それをやっているのは府中から、いまの国立、武蔵村山、調布の近くぐらいまで、要するに大国魂神社の社領の関係ですね。ですから大きいんです。そういう名前が出ている古文帳なんかがありますけれどね。そういうときに、最初に決めたんだかなんだ

か「規約があるわけです」。香具師（やし）というのは、いまと違って、その頃はなかなか難しいんです。規約や何かをよそから持ってきて見ていては、何をやってはいかんとかこうだとか、いまのやくざの露店などとは違うんですね。府中の大国魂神社の露店があるものだから、よそから来るけれど、こちではそういう挨拶をしないわけです。何か歴史的に見ると、香具師というのは江戸時代にそういういわれができていたようですね。いまわれわれが知っている露店とは違うんですね。神社のお祭りや何かで主としてやっています。「馬場氏に向かって」あそこの鏡をもらいになったことがありますか。

馬場 はい。

大室 武州の地図を描いた、こんな大きな鏡が奉納してあるんです。だから、それだけ商人や何かが来ていたんですね。特に大きな五月の大祭の時は特別ですから、近郷近在から来ていた。「祖父は」そういうものの世話役をやっていたんですね。そして自分では、昔の私の家には土蔵があつて、そこで白酒と言っていたけれど、麴をやっているから、どぶろくを造っていたんでしょうね。その証拠になるようなものとして、この近所の地主さんから田んぼを借りているんです。人数が少ないのにやっていると、これは、その米で醸造をやっていたんじゃないでしょうか。家族がそんなにいるわけではないのに。昔はなんでもたいてい節季勘定でしょう。それを一分（いちぶ）ずつぐらい払っているんだ。受け取りがあつて、足りているんですね。一分というのは馬鹿にできない金額だといいましたね。そんなことがあつたようですね。あとは、どういうわけかお祭りのことを手伝っていましたから、その影響で私なんかいろいろなことをやっていました。

武田 先生が小さいときには、大国魂神社というのは一番の遊び場になるわけですか。

大室 いや、大国魂神社の境内には遊び場が多かった。いまのコ

ミヤド様というのがありますが、駐車場か何かになっているけれど、このへんはみんな草が生えていて、バツタがいたりキリギリスがいたり、いろいろなものが鳴いていたんです。ところがその広場のところは、五月のお祭りだとか、七月二十日の「すもも祭り」の時には、よそから見世物や何かも来るんです。特に五月のお祭りとは、東京のほうからいろいろ来た。その頃われわれが覚えているのは、有名な蝦蟇の油だとか、そういうものがたくさん出るわけです。大正時代になると、パイオリン弾きが来る。ちょうど枯れススキ「『船頭小唄』」が流行ったり、「籠の鳥」とかが流行って、そのころは楽譜を売ります。われわれは買ったことはないけれど、学生服を着て、苦学生のような格好で「楽譜を売る」。また、居合い抜きだとかいろいろなものが出るんです。片方では見世物も出ていたわけです。だからずいぶん昔から大変でしたよ。

**武田** 当時の見世物というと、どんなものなんですか。

**大室** いや、もういろいろなもの。軽業があつたり、しまいには動物園みたいな動物が来たり、桶でオートバイをグルグルやるのがあるでしょう。桶みたいな大きなものをつくって、そこに單車を走らせるんですよ。

**武田** それはけっこう場所も必要ですね。

**大室** いまの相撲場があるところとかでいいですね。それやっていた。だって動物園も来たり。小屋掛けをしてね。そういうことはずいぶん最近までやっていたんです。

**馬場** いつごろまでやっていたんですか。

**大室** だって私どもが知っている頃までだから、戦前までじゃないでしょうか。戦後になってからあまり出なくなつた。戦後でもずいぶんまだ見世物は来ていたんですけれどね。それはいつも、いろいろなものがありましたね。

**清水** そういう見世物の場所も、取り仕切りは、お父様とかお祖

父様がやられたいたんですか。

**大室** だいたいそういうことをやる役員がいるわけです。何かの時にうちに集まって相談したりして、やるんですけれど。例えば店割りなんていうのは、五月にはよそからたくさん来ますから、あれはちょうど天長節の頃だから、四月二十九日ですか、そのころにやった。だけどうちのおやじは、そういうものに立ち会っているわけではないんです。何かの会長だか帳元になっているけれど、そういうことは実際に商売をする人がやっているわけです。

**武田** 商売をする人が自分たちで店割りをしているわけですか。

**大室** それはちゃんと組合があつて、組合の指揮下で毎年決まっているわけです。ここは植木屋さんだとか、ここは金魚屋だとか、たくさん出ていたんです。いまは出ていないけれど、金魚屋さん、ずいぶん来たんですよ。それはみんな下町のほうから、桶で担いできた。それが来ると、いまの交番のあたりに十軒ぐらい出るんです。それで私のところの裏に来て、井戸の水をもらいに来ます。そして帰りに金魚を二、三匹置いていくんです。そういう点で、いまの露店と全然違いますからね。いまのやくざみたいなものとは違うんですね。

**武田** 先生が小さい頃までは、昔からのやり方でやっていたんですね。

**大室** ずっとありましたよ。それはもっと、おばあさんから聞いたときに、いろいろな見世物が出ていましたね。

**武田** 先生が国民精神総動員運動とかに関わられた頃も、だいたい同じような感じでしたか。

**大室** その頃やっていたでしょうね。五月のお祭りとかね。

**武田** いつごろから変わりは始めるんですかね。

**大室** やつぱり戦後、だんだん変わってきたんじゃないですかね。昔は軽業とかなんとか、茨城県の下館のあたりにいたサクライという興行師がいるんですよ。そういうのが来て、小屋掛けをする。

その小屋掛けをするには、近所の材木屋に行つて、竹だとか材料を借りるわけです。それで雨なんか降ってできなくなったり、勘定が払えないと、うちのおやじとかが面倒を見てやっていたみたい。それは後から、もちろん返しに来るけれどね。天気が悪くてできなかったとか、そういうことがあるわけです。そういうのは、材木屋のどこで借りてきたとか。そのころは損料「借用料」でやるんですね。

**武田** いまはそうじゃないですね。見世物もないし。

**大室** 来ても大したものじゃない。みんな自分たちで持ってきてやっている程度で、見世物らしいものはないよね。前はいろいろな人形で、岩見重太郎のなんとかとか、いろいろなものがあつたんですよ。その大がかりなものを、靖国神社の境内でずいぶんやっていたんですね。ここが終わってから靖国神社に行くのか、順序があるから、ここでやる場合には時間が短いんです。だからなかなか大変なときがあるんだ。七月の「すもも祭り」の時には、動物園みたいなものが来たと思うんだ。昔は珍しいでしょう。動物が来て、多少芸をするサルだかイヌだかりましたが、それは十日ぐらいやっていましたね。

**武田** 大國魂神社の一番大きなお祭りが五月の大祭で、七月に「すもも祭り」があるんですね。

**大室** 大きな行事は、二月三日に「節分「祭」」があるんですよ。これはお祭りというより豆まきです。その次が五月のお祭りになるわけです。ところが五月の「例」大祭というのは、町内では四月の初めから始まるんですよ。提灯調べとか、そういう行事が始まって、月番という当番が毎年決まっているわけです。そういう人たちが来て、道具調べといって、倉庫にあるやつを出して、提灯が幾つあって、これは破れているから新しくするとか、そういうことをやるんですね。それがだいたい四月初めなんです。昔の青年団なんかそうですね。一月になつてからお祭りの行事

を用意するわけです。それは大変なものでしたよ。

**武田** 「くらやみ祭り」というのがそれなんですね。

**大室** それなんです。われわれが知つたのは後からなんです。五月三日の「競馬（こまくらべ）」「式」といって、何頭かの馬で、甲州街道、昔はもつと向こうからあつたんだけど、いまの三菱銀行の前ところで走る。そういう行事がありました。

**武田** こまくらべというのは競馬（けいば）みたいなものですか。

**馬場** 競馬ですね。

**大室** 四頭ぐらいでしたかね。町内で持っていて、昔は農耕馬を使っていたようにだけど、いまは競馬場の馬を借りてくるんですけれどね。これもなかなか盛大です。それから四日に「御綱（みつな）祭」という前夜祭があつて、これは子供の宵祭りみたいなもので、ずいぶん賑やかだったんです。五日の夜が「暗闇祭」で、六日が「おかえり」なんです。六日の昼に、いろいろなお神輿が納まるまでがお祭りだったんですね。ほとんど徹夜でやったんですから。

**武田** お神輿は町ごとに出すわけですね。

**大室** そういう神輿じゃないんです。ご神体が入っている、一之宮から六之宮と、御本社というのと御領之宮というのがあって、ご神体というのは例えば一之宮は小野神社です。これは小さな神社ですが。

**馬場** 式内社ですね。

**大室** 式内社ですか。それから二之宮が西多摩のあきる野「小河神社」、いま生妻祭りで有名ですけど。三之宮は埼玉の氷川神社、官幣大社になっていますけれどね。昔、向こうに行くと、武蔵の総社だといっていますね。でもこちらのほうが上なんです。それから四之宮が秩父神社。このあいだ花火をやったでしょう。それから五之宮というのは埼玉の金佐奈神社というんです。それは群馬県との境にある鬼石というのがありますね。三波石（さ

んばいし)をつくっている。その隣にあるんです。児玉というところ。『六之宮は横浜の杉山神社。』昔でいうと、氷川神社は官幣大社なんです。それから金佐奈神社は官幣中社なんです。大國魂神社は官幣小社だったんです。

**馬場** 明治になってからですか。

**大室** 明治になってからです。それだけの人が来て、そのお神輿のご神体というのを、各町内で持っていたわけです。昔は、いまの氷川神社なんていうのは、大宮のほうから何日かけて担いで持ってきたわけです。それで泊まるのが人見なんです。人見に中継所があります。もちろん府中の領分の中ですが、人見という部落がある。一之宮の小野神社というのは、そっちから出てくるんですね。

**武田** 先生もお神輿を担いだりされたんですか。

**大室** お神輿を担いで喧嘩したりするというのは明治になってからですね。その前は行列をやるお祭りだったようですね。明治になつてから、お神輿は町内で預かっているものだから、ぶつかるでしょう。神社の東側と西側がちょうど半々になるんです。それでこつち同士は喧嘩しないけれど、向こう側とはぶつかる。何人か死んだりしてね。そういう記録があるんです。そうすると警察がうるさくなつて、何がいかん、かにがいかと、その都度言うことになる。大きな太鼓はごらんになりましたか。

**武田** 私は見ていないです。

**大室** 『馬場氏に』それはいつへんご案内してくださいよ。日本の一の大きな太鼓が幾つもあるんですから。太鼓もいろいろありますけれど、一本の木をくり抜いた太鼓の大きいものですね。昔から大きかったんですが、よそでだんだん大きなものができるものですから、負けずにやっています。その太鼓のバチ、叩く棒、それは講中(こうじゅう)といって太鼓を叩く近郷近在に講があるんです。このへんですと、一番遠いのが世田谷あたりかな。もう少

し先かもしれません。石神井だとか上井草だとか、みんなあつちのほうでしょう。いまでもそういう名残がありますけれどね。そういう人たちが来るときに、みんな自分たちでつくった太鼓のバチを持つてくるわけだ。それがいざとなると、こうなる『刀を振る身振りをする』ものだから。

**武田** 武器になるわけですね。

**大室** それでこのごろは、太鼓を叩く棒は、神社の焼き印を捺した一膳に限ることになった。一膳というのは二本ですね。そんないろいろなことがありますけれどね。

**武田** 戦後になつてからも、お神輿同士で喧嘩したりすることは続いているわけですか。

**大室** もうこのごろはあまりありませんけれど、戦後もずいぶんやりましたよ。

**武田** じゃあ、つい最近のことなんですか、少しおとなしくなつたのは。

**大室** 最近は事務的になつちゃつて、警察がうるさくて、交通規制があるでしょう。だから何時から何時までに入れなければいけないとか。また先達が、こんなことを言うといけなければ、お神輿になると総代というのがいて、赤い提灯を持っていて、お神輿についているわけです。その人たちが行けば、喧嘩していてもなんでも、中に入つて分けることができます。そういう人が総代になつていた。いまはそうじゃないでしょう。何かあると逃げちゃうから、それができないんですね。だからやくざが来る。ひところは、彫り物がついたやつがたくさん来て、そういうのに乗っ取られそうになつたりしたこともあつたんですが、いまはそういうことはありません。非常に静かになりました。

**武田** 先生も総代をやられたんですね。

**大室** ええ、やりましたけれどね。

**武田** それは戦後のことですか。

**大室** まだ若いときだから、帰ってきてからでしょうね。最後に、昭和十八年ですか、南方に行く前ですが、まだその時は戦争中だけれどやったわけです。でもその時に私が、ちょうどお宮の前のところになカムラさんというのがあって、そこに塀があったものですから、そこに「お祭りだからわっしよい、わっしよい、元気でやろう」というスローガンみたいなものを書いて、それを翼賛壮年団の一部でやったわけです。というのは、戦争中に仲間同士で喧嘩したんじゃないじゃないか、そういうことをさせないために、お祭りは賑やかにやりましょう、ということですよ。

そのお祭りだって、戦争中、みんなほうほうから来るわけですよ。そのころ、立川なんかには航空廠とか陸軍の関係の軍事工場があるんですよ。川崎方面にもある。そういうのがお祭りになると、寄宿舎から脱走して来るわけです。それで、あれっ、また来ているな、と思う。罰を食うんだけど、太鼓の音を聞くとね。それが何人も来るんだ。川崎のほうから来たとか、立川のほうから来たとか、「あなた大丈夫か」と言ったら、「どうせ捕まって叱られるんだから」と言っていた。そういう人もいたくらいです。夜ですからね。十二時からですから。それは勇壮なものでした。

**武田** 戦争が始まっても、お祭りはあまり小さくはならなかったんですね。

**大室** それが、これは歴史になるんですが、マッカーサーが来て、そういうものをみんなやめさせたわけです。ところがここから出ていた栗山長次郎という衆議院議員がいた。これは毎日新聞のニューヨークの支局長をやったから、詳しいんです。彼がGHQに話をして、「このお祭りはそういうものじゃないよ。みんな五穀豊穡であるとか、平和のためにやるんだから」と言って、特別に許可してもらったんだ。それで戦後もやれたんです。ところが機関銃を持ったやつが警備しているんだ。

**武田** 進駐軍ですか。

**大室** ええ。それはもうびつくりした。「お祭りには」勢いがあるでしょう。また反乱でも起こすんじゃないかということだけれど、ここだけの話だというんだけれど、みんなこれ「銃を構える身振りをする」を持ってきて、警備していたんだ。

**武田** 日中戦争が始まってからのお祭りは大きかったですか。

**大室** 私は十八年のお祭りまでいたけれど、十九年はいませんからね。その前は普通にやっていたんです。それで一番困ったのが、次々に戦死者が出るわけですよ。お祭りも大変だったと思うんですよ。

**武田** 担い手がなくなるといことですか。

**大室** ええ、だんだんね。

**武田** 担い手が少なくなつて、どういうふうになっていたんですか。

**大室** その程度じゃなくて、全体的な問題ですからね。ほとんどの家から、出征兵士（とそこ言っていたけれど若い人）が出ているわけでしょう。どうしても年配者がやるとかね。昔は義務的ですから、みんなやつてくれたんですよ。

**武田** あとはご婦人方ですか。

**馬場** 女性はお祭りには、表だつては出ないですね。

**大室** そういうときにはあまり出ません。戦後はみんな女の子が山車を出したりしていますが、最初のうちは女の人はないですね。戦後、何人かはお神輿を担いでいるのがいましたね。いたずらされたけれどね（笑い）。いまはもうたくさんいるでしょう。

**武田** 先生からお借りした精勤の資料とか、府中の壮年団の資料を見ていると、戦争中にこの神社でいろいろな行事をされているようなんですが、やはり神社がこの地域の中心になっているんですか。

**大室** 神社に対しては戦勝祈願だとか、出征兵士が出るとここにきて必ずこうやって「お詣りをして」、そこで挨拶をしてから行くとかね。それから何か行事があると神社の前に来て、昔ですか



ら宮城遙拝から始まって、戦死者に対する黙祷とか、決まった行事があるんです。私なんかがやっているときもそうだけれど、その時はまだ矢部「隆治」さんが総務課長で、その矢部さんか、私か、矢島源太郎さん、元議長をやっていた人なんです。これは兵隊から帰ってきた人なんです。司会はだいたいこの三人のうち誰かがやっていました。

**武田** 大國魂神社が行事をやるときを中心になるわけですか。

**大室** お祭りや何かはまた別で、行事があつたりすると、なんとか記念の大会だとか、みんなお宮の境内を借りてやったわけですから神社がやったわけではないんだね。こっちがそこを使つて、やっているわけだ。

**武田** 集会とかも神社でやるわけですか。

**大室** いや、その前に来てやることは、式みたいなことが多いですね。大会みたいなこともやったこともあるかもしれませんが、ど、まあわれわれがよく覚えていたのは、南京の陥落なんていうと提灯行列をやつたり、昼間は旗行列。そういうのはだいたい町がやるわけです。それはたいいてい神社から出て行って、ずっと町内を回つて帰ってくる。なんでもみんな、ここが始まりです。

**清水** 特にその行事を、自分たちの鎮守様の前でやられるという意識より、場所があるからやるという感じですか。

**大室** それは当たり前に考えていて、特別ではありません。

**清水** ちなみに先生が南方に行かれるときは、お詣りをされてから行かれたか。

**大室** ええ、もちろんやりました。

**清水** それも、そういうことが当然だったんですか。

**大室** われわれが行ったときには個人ですが、その前に私の兄貴が死んだときなんかは、二、三人ずつ一緒になっていくと、幟を立てたりして、神社でご祈禱をしてもらつてから、いまの鳥居の前ぐらいに来て挨拶をするわけだ。これから行ってまいりますと

いつて、京王電車で行つて、その日には行かないものだから、東府中ぐらゐのところに駅がありますね。そこで降りて帰ってくるんだ（笑い）。みんな、その日は行事をやっているから。それで明くる日、朝早く出るわけです。

**清水** 先生はご自身で南方に行かれるときにもお詣りをされたというお話でしたが、どんなお詣りをされたかご記憶にありますか。

**大室** いや、普通。だけどそのころはご祈禱をたいていやるんですね。行くと、これ「紙を開いて読む手振り」を読んでもらつてね。

**武田** その時にはご家族の方とかも一緒ですか。

**大室** 私が南方に行くときは、集合場所が神戸だったから、東京駅まで誰か送つてきたと思いますけれどね。いまの神社でのご祈禱は必ずやっていると申すんです。誰でもね。ここの神社はいわゆる武運長久を祈るといふので、わりあい戦死者が少なかったんです。

## ■府中翼賛壮年団への関与

**武田** 神社のお話はよろしいですか。次に府中の話を伺いたいと思います。先生は戦前から、大室家代々、府中との関係が非常に深いと思うんですが、先生ご自身の足跡を見ても、府中の壮年団に関わられたり、大政翼賛会の推進員をやられて、戦後は都議になられ、ずいぶん府中との関わりは深かったと思います。いままでのお話で、これは忘れていたということで、お話しただけることがございましたら、少しお話しただけならな、と思つてゐるんですが。

**大室** 私は、在郷軍人は関係なかったですけど、青年団なんかでも、運動会があると応援するとか、一緒になってやりますが、私は次男だったから、そういうことはわりあいしていない。学生だったものですからね。ただ、そういう行事について、ほとん

ど関連はありましたね。

それに私は、特に野球ばかりやっていたから、野球のほうでは、最初の頃の府中で野球がさかんになった頃の、自分で言うとおかしいけれど、指導者の一人ですよ。いまも残っていますが、昔はクラブ組織でやったわけですからね。青年団のことは直接はあまりないですね。

武田 前にもちよつとお話しいただいたんですが、府中の翼賛壮年団について先生からお借りした資料には、かなり面白い資料がたくさん残っていますね。

大室 それはざつくばらんに申し上げますと、企画から何から全部私がやって、規約も全部私が作った。そういつたら悪いけれど、役員をつくるときでも団長、副団長はみんなにやってもらっているんですが、実際には先達で全部やったわけです。だから組織や何かがきちんとできているのは、本当に大したものだと思うんです。

武田 先生がご自身でまとめられた、府中町翼賛壮年団の「ファイル1」ですが、最初の「結成要綱」【資料17】があるんですね。これは非常に貴重な資料だと思いますが、赤が入っているのは、先生なんでしょうか。

大室 いえ、私じゃない。みんなこれは私がつくったものですけど、これを書いたのは、中村という元読売の通信員で、戦争中に市役所の書記をやっていたのがいるんです。それがほとんどこれを書いたりしているんです。よく言うけれど、字が下手で、なんだかよくわからないんだけど、それが早いです。その人が書いたんだけど、内容は全部私がつくったもので、私のを写してやっているだけなんです。このころ「私」は、いろいろな要項をつくるとかなんとかということが得意なんです。精動では全国的な組織をやりましたからね。だからすぐに、「基本に関すること」とか「団員に関すること」とか、もつともらしいことをやってしまうんですけれど、いいか悪いかは別です。それはほかの

人に聞いてもわからない。翼賛壮年団は、組織や何かは全部「私」がつくって、やっているんですよ。

武田 役員の名簿を見ると先生は総務をやられているんですね。

大室 それはいつも申し上げているけれど、私は表に出るというのではなくて、企画をいろいろやるけれど、実際には誰かに団長をお願いしているでしょう。この前お話ししたでしょう、三顧の礼をもつて、なんていうことを。みんなこれは私がつくっているわけです。一番必要なものは（団長、総務というのがありますが）、委員というのが中心になるんですよ。それをみんな役割分担させるわけです。私のやり方はそうなんですが、なるべくたくさんの人を使う。組織がうまいといつてあとで褒められたのは、それじゃないかと思う。

武田 班長というのがありますね。

大室 その下に各班の班長とか、実際にやる事業の班長とかがあるわけです。部長があるでしょう。これは役割分担ですね。総務部長は副団長がやっている。この鎌内「長治」さんというのは経理でしょう。それで実践挺身部長「大室氏が就いている」というのは事業部長なんです。実際に仕事をやるのは、戦争中は実践部と言っていましたから、肝心のことはみんなこっちがやっているわけです。やらざるを得なくてやっていることもありますけれどね。だけど、これを見たらすいぶん上手にやっているわけです。企画委員というのが、実際に仕事をやって相談するときの人たちです。その中にえらい人たちが入っているわけだから。

武田 その後ずっと府中を支えていくような方々ですね。

大室 それから細かく分担しているわけです。宣伝部だとか何部だといってね。そのほかに班長というのが部落ごとにつくってあるわけです。要するに組織がちゃんとできているわけです。だから何かをやるときには、そういうことがワツとできるわけだ。いまの選挙ではそれができないから困っているんだ。だらしない。

馬場 もうすぐですね。

大室 話にならない。

武田 こういう組織は、翼賛壮年団をつくるときに任されるわけですか。

大室 その企画というか、こういうものをつくることから相談したのは、委員の中で、小林茂一郎。古川参朗もうそうかな。矢部隆治。宇津木「雅一郎」さん、これはあとからだな。なにしろ、そのころ府中で一番話ができそうなやつをみんな集めているわけです。あとで話が出たけれど、在郷軍人の中で威張っているやつは入っていないんだ。それで叱られた。だけど、えらい人はいるんだよ。在郷軍人の酒詰「明光」さんなんかは分会長だったんですから。明光院の住職で、大正大学を出た、先生方と同じような教授で、えらい人なんです。奈良に真言宗の豊山派で、大きなお寺があるでしょう。その管長の下に総務部長を言われたんですよ。それを断わって、その代わりに中野の住職が行ったんだけど、その人に会ったら、「本当はこれは酒詰先生がやるのに、先生が受けないので、私のほうに回って来ちゃった」と言っていた。これは学者なんです。

武田 それでは在郷軍人会ですか。

大室 そのころは兵隊に行って、帰って来られて、分会の会長をやっていたわけです。だからそういうのはみんな私の先輩なんです。企画委員というのは、野口栄治が団長でしょう。小林茂一郎が副団長でしょう。野口さんはその時は警防団の団長だった。小林さんは何かやっていたかな、この人は市長になった人でしょう。島田「栄之助」さんというのは、そこにいた薬剤師の人で、インテリだったんだ。酒詰さんはいまの人。秋元諒一というのは、日本精鋼の課長だか部長だかで、会社から出向して、地域に協力しなければいかんことだった。宮崎平太郎さんは「馬場氏に向かつて」あなたご存知でしょう。

馬場 ええ、俳句の方ですね。

大室 俳句の先生だし、東京都の畜産関係か何かのことをやっていたんです。要するにみんなインテリ、知識人です。矢部さんはのちの総務課長。古川参朗というのは、ここにいた鈴木平七さんの工場にいた。宇津木雅一郎というのは毎日新聞の新聞記者です。「馬場氏に向かつて」この人は知っているでしょう。

馬場 直接には存じません。お名前だけは。

大室 この人は一番よくやってくれた。それから合木「北海生」さんというのは、会社の関係の人だったと思いますね。それから中田平は、分会のその次の人だったんだ。小澤亮は町の収入役かな。それから郡司秀さんはお宮の神主さんで、茨城のほうから関係がありまして、来ていたんです。この人が奨励部長なんだ。そのほかに文書活動「文書活動主任は大室政右氏が就いている」とかあるけれど、これは具体的なことで、何かあるとたいいていみんなこつちに押しつけられちゃうんだ。こういう組織を作っているから、やるのが早いんだ。全部できるんだ。

武田 先生からお借りした資料の中に、会合がありますという通知がたくさん残っているんですね。こういうものも先生がつくったわけですか。

大室 みんな指示をして、いまの中村さんが書いた。私が見て驚いたのは、「府中翼壮」何号というのがあって、一年で百号ぐらい出ているんですよ。一年間に百号というと、三日にいつべんぐらいですね（笑い）。

馬場 翼壮の活動の頃は、大室先生は地元でそういうことをやる時間がおありになったんですか。

大室 ええ、だからそれをほとんどやりました。そのうちにだんだん組織ができてきた。班長というのがあるでしょう。部落の班長というのが実際にやるわけです。それは自分たちの常会というのがあるんですよ、隣組の会合ですね。そこに行って話をする。

両方同じ人がやっている場合もある。だから組織の手足をもっているわけです。そういうきちんとした組織をやっていたのは、私は全国でもあまりないんじゃないかと思っていますがね。途中で手を退いちゃっているけれどね。

武田 これは翼賛会とはどういう関係になるんですか。

大室 翼賛会というのは、東京府の翼賛会、それから北多摩の翼賛会とあって、だいたい市町村長が翼賛会の支部長なんです。それで町会議員なんか役員になっていて、指令が来ると、それによってやるという程度で、翼賛壮年団ができてから具体的なことをやるようになったんです。

武田 そうですか。先生にもお話のためにコピーしてきたんですが、最後のほうに、先生の「推進員報道」【資料18】の記録がありますね。これは翼賛会なんですね。

大室 これは翼賛会で、壮年団ができる前でしよう。壮年団ができる前に、推進員というのを各市町村に一名ずつぐらい（二名の場合もあったようですが）言ってきた。辞令がちゃんとあって、「推進員を命ず、大政翼賛会」という本部の名前で来ているんですよ。それで推進員がやることは、報告ですね。こういうことをしょっちゅう報告するんですよ。

武田 このコピーは昭和十七年二月三日ですが、先生が「翼賛会に対する一般の動向」ということで、結成当時は翼賛会には極めて無関心であったが、最近には壮年団および選挙対策への期待から注目されている、と書いていらつしやいます。三、四枚残っているんですが、だんだんみんなやるようになってきた、というご報告をされているんですね。

大室 それは推進員なんです、私は精動の本部にいて帰ってきたでしょう。だからなんだと言つては、こっちに相談に来る。それで捕まっちゃったわけです。まだそのころは元気がいいから、何でもやっただけですね。

武田 もう一つ、翼賛壮年団のことでお聞きしたかったことは、先生にお借りした資料の中に、「団運営体験発表会要項」【資料19】というのがあるんですね。

大室 これは東京府です。東京府で、団の経験についての座談会みたいなことをやったことがある。

武田 これは東京府の翼賛壮年団がやるんですね。

大室 ええ、こっちでは関係ありません。出席したかどうか忘れました。ほうほうでそういう機運ができて、どこでも壮年団をつくってやっていたわけです。ただ、うちのように、きちんと組織的なものはあまりなかったと思う。それはできませんね。

武田 これには府中は出ていませんね。

大室 各地区でそれぞれ趣向を凝らしてやっていますから、そういう機運の盛り上がりがあったわけです。

武田 一つ西多摩郡五日市町の翼賛壮年団の方が出ているんですが、ほかの地域の壮年団とのつながりもあったんですか。

大室 全体的にはその傘下ですが、特に個々にはありません。それぞれがそれぞれの立場でやるということです。こういうことをときどきやるんですが、やっているうちにだんだん人間が減っちゃうわけです。それが一番辛いところでした。少し立つと召集を受けますからね。

武田 それから、よくわからなかった資料なんです、先生の精動の資料を拝見してましたら、「翼賛壮年団ニ如何ニシテ協力スルカ」【資料20】という資料がありました。これは大変面白い資料だと思ったんですね。これは「写し」なんですね。

大室 これは私がつくったのではなくて、本部のほうから来ていると思うんです。こういうことを考えてやりなさい、ということだと思いますね。

武田 これは先生の精動のほうのファイルに入っていたんですね。

大室 これは翼賛壮年団をつくるときのあれ「資料」ですね。翼

賛壮年団というのは、名前は早くできていたけれど、実際に活動をするまで半年ぐらいかかるでしょう。そういうための資料だと思っています。

武田 こういうものは本部から来るわけですね。

大室 そうだと思いますね。

武田 もう一つあるんですが、昭和十六年九月二十六日に「翼賛壮年団結成ニ関スル道府県六大都市組織部長会議々事要項」【資料21】というのがあるんですが。

大室 これが始まりなんです。これで六大都市の組織会議をやるわけですね。こういうものでやるからどうだこうだ、ということが始まるんです。よくこういう資料がありましたね。

武田 ありましたよ。僕もこんな資料がある！と思って感動しました。見たことがない資料です。

大室 「組織部長会議出席者調」を見て、群馬の組織部長である「小此木左馬太なんていうのは、名前を知っているな。これは珍しい名前で、群馬県で、この関係が誰か村長だか町長だかやっているな。この頃からだんだん、みんな集めてやるようになったんですよ。機運が出て来てね。最後に本当にできるのは、翌年の二月か三月でしょう。

武田 そうですね。これは中央から来た資料なんです。

大室 翼賛会の組織局「地方部」がやったんだ。でも翼賛壮年団というのが、最後には戦力があつたのはたしかですね。選挙の時なんかは、場所によるんだろと思いますが。当時はそういうふうには思っていなかったですけどね。いろいろな資料がよくありますね。

武田 それは先生が集められていたんです。たいへん貴重な資料です。

大室 いや、こっちはすっかりぼけちゃっているから、わからない。

## ■精動時代、輿論調査について

武田 先生の資料の話が出て来ましたので、コピーしてきたものの中で、精動の補足の質問をさせていただきます。先生は精動時代に世論調査について企画されたということで、関係するものが「国民精神総動員中央連盟」の便箋に書かれた『輿論調査に就て』【資料22】というものです。その次に手書きのものがありません【輿論とは】【資料23】。これは「大政翼賛会」の便箋に書かれているんですね。それが表裏二枚あります。その次に、『輿論調査に就いて』【資料24】ということで、「榛原製」の便箋に書かれているものがあるんですね。この三つの資料があつたんですね。先生がどれか書かれたか、すべて書かれたか、だと思んですが。

大室 これ「手書きの『輿論とは』は私の字ですね。

武田 これ「精動の便箋に印刷されたものと榛原製の便箋に印刷されたもの」はどうでしょうか。

大室 これはみんな私です。輿論調査については、私が企画部に入ってからいろいろやって、アメリカを調べたり、ドイツを調べたりして、いろいろやり始めて、新聞社と大きな図書館にアンケートというか、お願いをしたんです。そうしたらどちらも何もわからないという返事でした。そういうハガキを持っておりますけれどね。

それで一番参考になったのが、「文藝春秋」が何かに出ていた、外務省の嘱託の人が書いた、アメリカのギャラップについて、という記事でした。それを参考にしたんですが、この輿論調査についての趣旨は、私が全部書いたんです。それを書いて、まだ公にしているのではないけれど、ちゃんとやらいうちにおしまいになっちゃったんだ。だからこの輿論調査をやりたいということとは、私が企画部の中で持っていたわけです。だからほかのやつは誰もやっていないです。その資料は、最初の趣意書を書き始めたところ

るなんです。

武田 三番目のものはどうですか。榛原製の便箋のようですが、これも先生ですか。先生からお借りした資料にあったものです。先生はお一人でやられたわけではないですよ。

大室 いや、これは私が全部一人でやっただけです。

武田 じゃあ、これも先生が書かれたのかもしれないですね。

大室 輿論調査はほかの人はやっていないんですから。こういうことをやりたいという気持ちがあつたんですよ。ずいぶんいろいろなものを調べました。

武田 最初の『輿論調査に就て』と三番目の『輿論調査に就いて』はだいたい趣旨は一緒なんですね。ただ少し詳しくなっている感じがするんですね。

大室 これはほかの人がやっていなかったから、「三番目の」文章をよく見ると、アンドレ・モーロアとか「を引用してあるから」、これも私「が書いた」みたいだ。そういうものを読んで、それを参考にしてやっているから。

武田 これがすごく面白かったのは、最初のところで、先生もさつきお話になりましたが、一つ考えているのがアメリカで、もう一つがドイツなんですね。アメリカとドイツを選ばれたのは、何か理由があるんですか。

大室 アメリカはギャロップの話で、向こうは輿論調査が進んでいると見たわけです。そうしたらドイツもそれを真似してやっているというのを、何かの資料で見たわけです。これ「を書いたの」は私だな。みんな調べたものです。

武田 最初の『輿論調査に就て』にたいへん面白いことが書いてあるんですね。「我国の政治は維新より現在まで国民より遊離した或る階層に依つて担はれて来たことは万人の均しく認めるところである。政党政治の排撃、重臣の政治的責任の問題等現時の国内事情はこれまでの一切の陋習を断ち切つて国民政治に還元すべ

きことを要請してゐる」。

大室 これはみんな私だな。

武田 これは非常に感銘を受けたんですが。

大室 こういうことを言えるというのは、これを見てもわかるんですが、私は下情上達、上意下達を非常に重く見ているわけです。輿論調査はこれが基本でしょう。それで中央協力会議の時もみんなこれをテーマにしてやるように考えているわけです。

武田 先生は当時の日本の政党政治は駄目だとお考えだったんですね。

大室 (笑い)。ある程度ね。それは私と、小西「利雄」君という翼賛選挙の時の企画をやっているのがいますね。報知新聞の記者だった。だからそのころ、いろいろなもの、進んだ本なんか読んでいるんですね。あの頃の一つのあれ「走り」で、地政学というのはいまでもあるんですね(清水 はい)。地政学というのはあのころ珍しいんだ。ドイツの人か何かを書いたのかな。

武田 ちょうどそのころ翻訳されるんです。

大室 何がなかいかいま覚えていないけれど、その本はまだ持っているかな。そういうものを見たり、彼がいろいろな新しいものを持つてきたりするんですね。そういう中で、輿論調査というのはドイツが進んでいることと、アメリカが進んでいることを知っていたわけです。それで新聞社にこうやったら「輿論調査についての質問を出した」ところが、新聞社には何も資料がありません、ということなんですね。だから、いまのいろいろなものを見ていると、これはみんな私だなと思う。

武田 手書きのものが、『輿論とは』というところで、輿論の構成、輿論の分析、輿論の指導ということをお書きですが、これは何か本を見てお考えになったんですか。

大室 この頃は「世論(せろん)」と言わないで「輿論」といったんですね。そのころ輿論調査に近いことをやっていたのは商工会

議所の系統だったんです。どこかにそういうものはありませんでしたか。それを真似して、その組織をいっぺん使ってやりたいと思っていたわけです。それはどこかの商工会議所が、自分たちの傘下のあれ「団体」に出しているわけです。どこかに書いてあります。

**武田** 榛原製の便箋に書かれたものでは、「情報局、内務省、企画院、其他陸海両省」ということが書かれていますね。

**大室** 輿論調査をするという雰囲気はあったんですね。何かやらなければいかんという。最初に出てくる上意下達、下情上達というのが、輿論調査なんですね。

**武田** そういうふうに、先生はお考えなんですね。

**大室** 何か陸海軍でもそんなことをやっているように聞いたことがあった。だからみんな気にはしているんですね。

**武田** そういう輿論を中央の政治に上げてくるんだ、ということをおっしゃっていて、それが国民政治なんだというお話ですから、先生がずっと精動というのはこういうものだ、とおっしゃってきただこととピツタリするようなお話なんですね。

**大室** これはそのころとしては、民間では、さっきの新聞社もわかっていない。輿論という民の声を聞いて政治をやるべきではないか。それには、こういうふうに下から行く。最初に精動では、講習会をやって、すぐアンケートをとっていますからね。それをまとめたものをよく出すんです。こういう意見があった、ああいう意見があったという結果ですね。その大きなものが、協力会議の時の議案書ですね。

**武田** もう一つ先生がおっしゃっているのは、「われわれは輿論を指導しなければいけないんだ」ということなんですね。ですから、きちんと時局を伝えたり、ということをおっしゃっている。最後のアンドレ・モーロアの言葉「『輿論を指導すること——指導者は民に行くべき道を示すもので、民に従ふものではない』」は

まさにそうですね。

**大室** これを見て、ああこれは私だな、と思った（笑い）。内容はどうか知りませんがね、そのころとしては、どうしても一席ぶちたかったわけですね。

**清水** 調査の方法もずいぶん検討されたんですか。

**大室** それはとりあえずは、商工会議所がやっているような組織を利用しようかなということですね。

**清水** アメリカでやっているからといって、アメリカのギャラップのような方法を日本に持ってこようという考えではなかったんですね。

**大室** そこまで内容的には行かないんですね。ただ、これを見ていて、輿論調査が必要だということから、どうしたらいいかということですね。戦後ですが、毎日新聞が向こうの真似をしてやっただものがあるでしょう。府中の地区の輿論調査をやって、何かあると、無差別にどこどこに行つて、といって、稲城のほうに雪が降るときにいったことがありますがね、そういうことも何回かやっただのを覚えています。向こうの真似をしてやってきたな、と思ったんですよ。こちらはそこまでは行かなかったんです。基本でした。

**武田** もうひとつ面白かったのは、輿論を喚起させるものとして、先生が「目、耳、口」と書かれているんですね。手書きのものでですね。つまり、映画とか演芸を積極的に使おうと考えていらつしやっただんですね。新聞、雑誌、ラジオ、演芸、講演会、座談会、集会と書かれていますね。

**大室** そういうものを利用しようということだったんでしょうね。

**武田** 国民がどう思っているかということを知ると同時に、こちらの方からもいろいろと情報を伝えようということですね。これは何か種本があつて考えたというよりは、本当に先生がご自身で考えたことなんですね。

大室 そういうものを集めてやったんですが、未完だったんですよ。これ『手書きの『輿論とは』はメモ的に、こういうものが必要だということで書き始めたんですね。最初の『輿論調査に就て』というのをやって、細かく出したいと思っていたんですね。このタイプのものは、『精動の組織の』上の方に一回あげたかな、まだそこまで行かなかったかな。そのころはまだこちらも幼稚ですからね。

武田 これはすごく面白い文章だと思いましたね。

大室 ただ、そのころやっていないから、日本でも組織的なものをつくりたいなという感じだったんですね。

清水 戦後すぐ国の組織で世論調査所ができますからね。

大室 いまの世論調査というのは私もよくわからないけれど、いろいろ適当につくっているのかな、という気がしないでもないけれど、どうなんでしょうね。

武田 まあ、世論調査というものがどれだけ国民の世論を示しているのか、なかなか反応が難しいところじゃないでしょうか。

大室 新聞なんか、いろいろやっていますけれど、数じゃないのはわかるけれど、どうなんですかね。ただ、このころの輿論調査は、軍部の独走ではいけない、ということがあるわけなんです。私もそのころはそう思った。いまの私のやり方で行くと、選挙でも何でもみんなで行きましょうということが基本なんです。そうするとみんながついてくる。その意見を聞かなければいけないでしょう。聞くと同時に、こちらが与えるような感じになるから、ついてくるんじゃないかな。

## ■精動から大政翼賛会へ

武田 それでは次の資料ですが、『精動は新政治体制を如何に考ふべきか』【資料25】というものと『部落会と町内会、その常会の

話』という資料なんですが、精動が解消されて大政翼賛会ができる、ちようどそのぐらいの時期の資料だと思うんですね。『精動は新政治体制を如何に考ふべきか』というのは、国民精神総動員本部の便箋に書かれているものですが、この資料については記憶がありますか。

大室 これは私が書いたものではないと思いますね。このころ、『新体制』という動きが出るわけですよ、それが大政翼賛会に移るわけですね。

武田 これは、新体制なんていうのは要らないんじゃないか、という文書なんですね。

大室 新体制という一つの大きな動きがあったときで、それが大政翼賛会になるんだけれど、実際にできたものはどうかというところ、また別ですけれどね。それに対してある程度対応すべきことですね。これは私じゃない。

武田 内容として、大政翼賛会のようなものができそうなんだけれど、『この翼賛形態は国民の総意に合つたものでなくてはならない。今日欧米各国に於て見られる行政府の権限強化による独裁的傾向は我国としては断乎避けなければならない』ということですね。これは先生の精動のファイルにあったものです。少なくとも精動の中でこういう議論がされていたことは間違いないですね。

大室 ええ、やっていました。それはわれわれが、精動から新体制という中で、それに対する反論じゃないんでしょうけれど。

武田 反論ですね。すごい反論です。

大室 きつと、われわれの仲間で行っていたと思うんです。われわれ企画部の話だな。どうもいまと違って、昔はもう少し頭がよかつたんだけれど。

武田 次の資料もだいたい同じぐらいの時期なんですが、『部落会と町内会、その常会の話』【資料26】は伊藤博さんが放送されるんですね。



**大室** この人は精動の最初の主事なんです。それが本部になってから幹事になるんだけど、この人が実際には昭和十二年から十三年は中心になって、よくやったんですよ。

**武田** これは精動ニュースといったかな、ラジオで放送した原稿のようなんです。

**大室** ああ、そうかもしれませんね。

**武田** 「精動特報ニ於ケル放送分」と書かれています。ここでも新体制の話をしている、新体制は別に要らないんじゃないか、むしろいまある実践網を活用して、常会を活用すればいいんだ、という話なんです。

**大室** それは片方で、新体制、新体制というけれど、最初に精動本部ができたときには、連盟でやったわけでしょう。団体を集めた。ところがそれで間に合わなくなって、府県を使うようになって、一体になってきたわけでしょう。最後には、精動本部では知事が本部長になるということになったんです。やっている人は、あとで筑紫「熊七」理事長というのが出て来ますが、その時にわかる通り、向こうの人たちは、アジアを考えるような大きな考え方なんです。精動はそうではなくて、こっちだけでやっているんだ。

だからのちに、韓国だとか台湾だとか、そういうものが精動の真似をしてやりますが、こちらとは直接には関係ないわけです。こっちでやっていただけではないんです。向こうが真似してやっているんです。ところが満州に行っている人から見ると、物足りないわけです。それで筑紫さんが理事長になったときに最初にやったのが、大連と青島か何かの商工会議所を呼んできて、アジア経済を含めたものをやる。だから精動がやっていただけと違うんです。

一般的にも、昭和十二年のときは、わずか十数万円で「精動は」あれだけ大きなことをやっている。だから本当のことをいうと、

身の丈に合わないような大きなことをやっていたんですね。その次になって、昭和十三年から十四年ぐらいは予算が百万円ぐらいです。予算のわりにはすごい仕事をやっているわけです。しまいにそこを持ってきたて、官庁の仕事でやるべきものをみんな、実際の具体的なものになるとみんな、精動がやっていた。よそから見ると、もつとやるべきだと言ってくれど、実際には身の丈以上のことをやっていた。

そこで新体制運動というのができてもつとやらなければいかんというのが、大政翼賛会になるわけですね。じゃあ大政翼賛会は何をやったのか、ということになるけれどね。その経緯というのは、一番の問題は、始まりから見ると、支那事変が始まってこんなに拡大するつもりがないのにこうなってしまった、これは大変だ、という時局認識から始まっているんです。いろいろなことがありましたが、その時、その時に、時代が変わっているものだから、あとになってみると、何をやっているんだ、ということになるけれど、その時は目一杯じゃないですか。

私が先にこんなことを言って申し訳ないけれど、私は戦争前にやった精動の実績は大したものだと思うんですよ。あれだけの少人数で、いろいろなことをやった。最後には具体的なものをやりすぎたぐらいになっていますけれどね。

**武田** 先ほどの伊藤博さんのニュースの原稿を見ても、新体制というのは一体どういうものになるのかよくわからない、精動のままでの組織を使っただけが有効じゃないか、ということが書いてあります。もう一つここで面白かったのは、最初に近衛「文麿」さんが新党をつくるという話があったんですね。新党をつくったら、精動がつくっている実践網とどういう関係になるんだ、というお話をされているんですね。

**大室** その二つは全然違うんです。実践網という言葉がみなさんによくわからないからあれなんだけれど、いま翼賛壮年団がつく

来ていたんでしょね。

## ■都議時代について

つたのと同じように、部落組織みたいなものからずっとやっているのと同じような意味で、日本中の隣組、町内会組織を作ったわけです。そういう組織ができていますから、精動がどうだこうだということは別なんです。

武田 先生は、近衛さんが新党をつくるといったときに、どういうお考えでしたか。

大室 新党をつくるというのはずいぶん噂があつたりしたけれど、われわれとしては、その前に政党を解消するとかしないとか、いろいろあつたでしょう。だけど、それだけの指導者はなかなかいませんね。だから誰かが批判しているけれど、近衛さんというのは人が好いから、みんな乗っちゃうわけです。

武田 新党があつてもなくても、実践網があれば、というお考えですか。

大室 いや政党と実践網と一緒の考え方はないですね。実践網というのは、隣組やなんかの組織があるから、それを利用する。だから政党はまた考え方が別じゃないか。その頃は、大政翼賛会をごらんになればわかるけれど、大政翼賛会が新体制でいろいろ始めたときに、一番先に目玉になつたのは議会局でしょう。

武田 廃止になっているわけですね。

大室 あのと時の大將だったのは有馬頼寧さんですけど、実際にやっていたのは後藤「隆之助」さんでしょう。後藤さんは組織局長がクビになったか辞めたか知らんけれど、そういうことを見ると、一つの経過的なもので、だから大政翼賛会は早くおしまいになっちゃう。あまり広げすぎですね。

武田 先生も大政翼賛会の最初の頃に少しはタッチされるんですね。

大室 そのころはみんなでやろうというつもりがあるから。ところがやってみたら、見当違いになつてきて、政府の向こうを張っているような。だからあのころは政党に対する不満や何かから

武田 そうでしょうね。この資料を見ると、たくさんお聞きしたいことがあるんですが、あまり時間もないので、次の話題に移ります。いままでのお話で、先生が都議だった時代のお話は一回分だけなんです。

大室 いや、都議の話はあんまり。何故かっていうと、自分が言うとおかしいけれど、私は役を欲しがらないでしょう。しかし、やることはやるでしょう。それから、どちらかというと正論でしょう。ですから、具体的なことを言うけれど、府中のことだつて、道路だつて何だつて、みんな私がやったといえれば、そういうことになるんです。だからそれを言つたらいけないですよ。

例えば一つの例で、予算を組むでしょう。最後の追加予算みたいなものが、われわれがいる頃は最初は百億だったんですが、その次は二百億になった。それを政党の代表とか何かと相談しながら、要望や何かに対処するんです。ところがその全部のあれ「仕切り」を、私が三回「『三年度分』」やっているんです。あまりそういうことを書いてもらつても困るんだけど、財務局長がいて、主計部長とか予算関係のやつを連れて別のところを借りて、「査定してください」と言うんだよ。「なんでもいいから、あなたが言う通りやりましょう」と言うんだ。だけど、決まっているんですよ。十億は飛行船を買うとか、何がこうだとか、大きなものはあるわけだ。ところが小さな団体や何かについては、いままでちゃんと見ていないんです。私がみんな見てやつて、これはこうだ、とやったわけです。あとでもって、「これはどうしますか、誰と誰が言つてきますから」と言うから、「言つてきた人のあれでやりなさい」と言つたんだ。

**武田** 言ってきた人の何ですか。

**大室** 誰かが言ってきたんでしょう。「そういう紹介者、都会議員なら都会議員、それが共産党でも誰でもいいよ」と言ったんです。これはびつくりしたね。その人の功績ではないけれど、それでやったんだという「ことにする」。それで財務局長はびつくりしちゃって、「そういうことを言う人はいませんよ、みんな俺がやった、と言う」というんだ。「できればいいじゃないか」と言ったんだ。

その時に私が一つ覚えているのは、原爆の犠牲者が東京にもいたのね。それが共産党か何か、あつちのほうから出ている。こちらには関係ないから、というんだけれど、いくらでもない予算「要求」が来ていたんだ。「こんなもの、やってやりなさい」と言ったんだ。そうしたらびつくりして、「いいんですか、共産党から出ているんですよ」という。「そんなことじゃないじゃないか」と言ったんだ。そんなことをたくさんやってやったから、このあいだうちまで、お礼が来ていたよ。そういうことは言ったらいけないから、私はやらないんですよ。そういうことを三回やったなんて言えないじゃないの。

**武田** それは先生が頼まれて三回やるわけですか。

**大室** いや、任せられちゃうわけだ。私が幹事長の時はもちろんやった。最初は幹事長の代行をしたときにやったんだ。その次に、次の幹事長がやったときに、こつちにやってくれというのでやったんだ。そういうことは言えないし。一番得をしたのは、ローカルで言えば府中なんです。言えないんですよ、そんなこと。市長や何かもつともらしい顔をしていつているのに。どこを見たってそうでしょう。道路一つ見たって、橋だって、みんな先にやってくれるわけです。協力してくれるわけです。

**武田** 府中の道路というと、有名なところはどこですか。

**大室** 甲州街道はこう決まっているでしょう。例えば関戸の橋か

らずと来て、三鷹のほうへ行く道があるでしょう。あの道路をやって、白鳥寮という寮があつて、そこからずっとやってる。

**馬場** バイパス的なものですね。

**大室** 道路そのものもあるけれど、その間にネックがたくさんあった。だから知っている人はみんな感謝していますけれど、できればいいんです。一番いい例は、国分寺街道。樺並木のところをまっすぐに行くでしょう。国分寺のほうへ行つてごらんさい、府中から向こうは切れちゃうじゃない。

**武田** 並木が切れるということですか。

**馬場** 道が狭くなるんですね。

**大室** それはどういふことかという、いろいろありますけれどね。例えば明星学苑があるところはわかりますか。いまの国分寺街道。あそこだつて道路を拡張して、都営住宅があつた。その都営住宅と学校と、建設局と住宅局の縄張り争いになって、うまく両方を「調整して」やったんですけれどね。あれなんかだつて画期的なもので、あとで局長から言われましたよ、「こんなことをやったのは初めてです」ということですよ。

**武田** 住宅局と建設局で。

**大室** 住宅があつて、その住宅をこちらにやるのをこちらにやるとか、それで道路を広げるので、縄張り争いでなかなかできないわけです。明星のほうも拡張するとか、いろいろあつて、懸案事項だったんです。

**武田** そういうことはどうやって調整するんですか。

**大室** それは私なんかやるのは、担当の者が、私どもが正論じゃないけれど、ちゃんと言うから、反論できないんですよ。最後にどういふことを言ったかという、「住宅局と建設局ではなくて、私は東京都を相手にしてやっているんだよ。そっちはそっちの話じゃないか」ということです。そうでしょう。

**武田** まあ、正論ですね。

**大室** われわれは住宅局であろうが、建設局であろうが関係ない。

ところがみんなそういう人たちを、あとになってみると変なことは言えないけれど、いろいろなことをこつちも応援しているわけですよ。局や何かでもネックの問題があるでしょう。そういう細かい問題ではなくて、大きな問題がある。だから私だけじゃないですか、局長とかそういう連中からあとで感謝される。もちろんお金や何かはもらわないけれど、そこらでこれ「ナイフとフォークを扱う身振りをする」をやって、菓子折の一つをもらうぐらいだけれどね。建設局、教育長、みんな局長級だけれど、いくつもあったね。

**武田** 先生は府中の市民運動とか、そういうものにはご関係はないですか。

**大室** 市民運動というのは、私は特にやったことはありません。

**武田** そういう団体を支援するとか、会長になるとか、そういうこともないですか。

**大室** そういうことは何もやってないね。他人のことはやるけれどね。道路の問題でもそうですが、われわれがやるとみんなが協力してくれるんですよ。東京都でもなんでもね。だから私が最近でもないけれど、最後にわりと苦労してやったのは、再開発ですよ。再開発で高架を上げるといことなんか、いま小田急が騒いでいるでしょう。本当は向こうが先にやるやつを、こつちが先にやった。

**武田** 再開発は先生の現役の時代ですか。

**大室** 再開発自体ではなくて、再開発をやるには道路を上げなくてはならないでしょう。これが一番予算がかかるわけです。東京都でも、高架や何かをやるときには。いま小田急が騒いでいるでしょう。あれなんか、もつと早くやるべきだったんだ。

**武田** 道路を高架にしたのは、先生が現役の時代ですか。

**大室** そうです。

**武田** 再開発の前の段階ですね。

**大室** いやいや、再開発に関係しているわけです。再開発をやりますから道路を上げてください、ということ、長年陳情に来ていたわけだ、市長から。ところが、上げることは予算もかかるし、いろいろなことがあるんです。最終的に建設局長が、私が建設委員長か何かやっているときだけれど、「大室先生、今度やつぱり高架を決定させていただきましたから」とちゃんと報告に来てくれるんだから。そういうことを言うと、いけないんですよ。ほかの都会議員だっているでしょう。私はそういうことは、あれ「あの議員」もやったよ、これ「この議員」もやったよと言ってやるわけです。

最終的にはハローワークという職業安定所があるでしょう。あれを府中に持ってきたんだけど、これは大変だった。職業安定所というのは厚生省の管轄でしょう。いまは厚生労働省か、国なんです。それで早くからぜひ欲しいと言っていたんです。三鷹にあつて、八王子にあるんです。立川にもあるかな。

**馬場** 立川にもあります。

**大室** それでここに持ってくると、都内のどこから取らなければできないんです。考えてみたら、上野だとか渋谷だとか池袋だとかというところは絶対に必要でしょう。飯田橋が本部みたいになつていて、やったんだけど、できなくて、苦労して、これは私が厚生大臣のところに行了きましたよ。ところが、そういうときに案内してくれる人がたいてい誰かいるんだよ。府中の市長をやっていたりとか、喜んでやってくれたけれど、なかなかできなかった。

それが山口か何かの安定所が一つ閉鎖して、こつちに来ることになった。そのときに、鈴木さんの時に副知事をやった人がいるでしょう。それが労働経済局長だったか何だったかで、来て、「大室先生、今度安定所が府中にできることになりました」と言

うので、「何を言っているんだ、これは何年も前からやっていることだよ」と言ったら、明くる朝七時頃ここに飛んできたよ。「その通りでした。すいませんでした」という。そういうことを言ったらいけないんですよ、何をやったとかいうことは。だから三多摩だつてずいぶん得をしているんですよ。

武田 三多摩もそうですか。府中だけではなくて。

大室 なるべくよそこには手を出さないようにしているんだ。みんないるから。総合的に問題があったときですね。だから道路なんかでも話ができないんですよ、気の毒で。ほかの都会議員は府中にいて何をやったの、ということになつたら、ないでしょう。それでありがたいのはなぜかという、担当者が応援してくれるんです。だから橋の修理や何かでも、多摩川にはいくつもあるけれど、必ず府中が先になっちゃうんだ。

武田 いまでもそうですか。

大室 いまは私が言わないから。いまでも来るけれど、後を引かないように、恩に着せることはしない。前の道路なんか新しくしたでしょう。宮西町からそこまで、あれなんか本当は大変なことなんだ。そういうことを言ったら、みんなお礼に来なくちゃしょうがない。そういうのが私のやり方だから、いろいろなものがあるけれども早くできちゃうんです。

警視庁の府中警察署だつて、新しくなったのはみんなそうだ。それはね、警視総監までわざわざ調べに来た。警察だっているいる応援してやったもの。私は「いまの公務員で命がけでやるというのは警察と消防しかないじゃないか」と言っただ。「そういう人たちを当たり前だと言わないで、特別に考えなさい」ということを委員会とかで言う。理事懇談会で、警視総監の次の総務部長が担当していると、そういう連中と委員会なんかをやる、よく言ってるんです。「そんなことを言ってくれる人はいません」なんて言われた。ふだんは余計なこととは言わないし。いざという

ときはけっこう強いんですよ（笑い）。

武田 そうでしょうね。そういう感じがいたします。

大室 おとなしいんですよ。喧嘩はしないし。私の信条は、「恩は石に刻み、恨みは水に流す」というものだから。そういう考え方なんですよ。もうこれで駄目ですから、毫碌してー。

武田 まだまだ、次の選挙でもがんばっていただいて。

大室 いや、悪いことはしていないから。いま言ってもいろいろなことを。ただし、そういう人はみな年寄りだけれどね。だから役人にあれされた「嫌がられた」ということはないんじゃないの、感謝されたことはあつても。

## ■府中の選挙活動

清水 先ほど翼壮の話が出て来ましたが、あの当時名簿に載っていらつしやつた方は、先生より少しお年が上の方ですね。ということは逆に戦争には行かれなかつた世代の方が多いですね。

大室 でも後から召集を受けたりしてね。みんな召集を受けて、内地であつてもね。例えば団長の野口さんだつてそうだし、鎌内さんだつて後から召集を受けている。外地に行った人もいますけれどね。

清水 お伺いしたいのは、戦後の選挙の話も先生にお伺いしましたけれど、革新系の候補がこのあたりでも出て来ますね。そのときに、革新系の候補のほうに流れた人たちもいたのか、それともいままでも先生と一緒に活動してこられた人はどちらかというと保守的なほうで活動されたのか、そのあたりはいかがでしょうか。

大室 あのときには政党は解消しているけれど、政党はあるわけです。推薦というのはこつちの団体が勝手に推薦しているわけでしょう。推薦の時にいろいろあるんです。例えばあなたがおっしゃるのはきつとそうだろうと思うんだけど、東京から出ている

河野密さんなんかは、革新系であるけれど、常識派なんです。

その時に商工会議所の会頭をやっていた、なんといったかな、有力な方が、「この人はぜひ推薦してください」とやるんだ。ところがなかなかそういう人たちは推薦しなかったんだ。そのうち河野さん自身は、「いや、推薦なんか要らないよ」ということでやめたけれど、当選しています。中にはそっちの系統であるけれど、推薦されている人も何人かはいるんだ。

武田 府中の中ではどうですか。

大室 国会議員の選挙だから。

武田 先生と一緒にずっと仕事をされてきた方は、先生の支持者か、先生が支持する人の支持者になっていくわけですか。

清水 戦後の話ですが。

武田 戦後、精動とか翼賛壮年団とか、先生と一緒に仕事をされてきた方は、だいたい先生の応援をするとか、先生の知り合いを応援するとかということになりますか。

大室 私は、やりたくてやったんじゃないんですよ。しょうがなく。前にこちらでみんなで推薦した人が、こんな人が出たって駄目だよと言っただけ。具体的に言うと川崎雄治だったわけだよ。「それはこちらが推薦しても絶対に勝てないよ」といった。だけど出たけれど、負けて、社会党にとられちゃった。

その次に向山「敏治」氏がそういうことだった。しょうがなく、私がそのとき支部の幹事長をやっていたのかな、どうしても今度やりなさいと言う。大勢から見たら、やらざるを得ない。府中から出られなくなる。また取られちゃう。それでやったわけです。選挙というのは甘いものじゃないですからね。最初は府中だけだったのかな。

清水 逆に、戦後から先生が立候補されるまで二十年ぐらいありますね。その間の府中の自民党は、先生が従来一緒に活動をされてきた方が、そのまま府中の組織になっていたわけですか。

大室 いや全然違うけれどね。

清水 まったく別ですか。

大室 これはあんまり言うといけないけれど。府中町は戦後単独だったわけですよ。そのときに町長選挙を新しい選挙法でやる。そのときに府中で、二つの政党ではないけれど、二つのグループで「選挙を」やって、森谷「森三」さんがなって、秋元「秀雄」さんが落ちた。そのときはまだ私は外地から帰ってきたばかりで、何もお手伝いできなかった。

その次の選挙の時に、小林茂一郎さんが出た。そのときから私がやっているわけです。そのころは先輩がいろいろいるけれど、結局企画から何から、選挙は自動車でやり始めた頃ですが、アナウンサーの原稿を書いてやったり、全部ね。最後に市長が立会演説をやった。そのころの立会演説はすごいものです。喧嘩みただ。

清水 小林さんの時に対抗候補の方は保守系だったんですか、革新系だったんですか。

大室 小林さんの相手はみんな保守系ですよ。

清水 その前の森谷さんと秋元さんの選挙の時も二つのグループに分かれたということですね。それまではどちらかというと、戦争に向けて一緒にやった人が分かれた。これは地域で分かれるんですか、それとも違う要素で分かれるんですか。

大室 それはやっぱりグループがあるわけですよ。

清水 それはどういう色分けなんでしょうね。難しいところだと思いますが。

大室 町長選挙をやって、勝ったんだ。それは私の若いときですが、実際のあれは私がやったんだ。そのときはいくらでもないですよ、四千票と三千いくらかだった。いまでも私はメモを持っているけれど、私の予想より少なかったのは十六票だよ。そのころから、私は各部落ごとに組織を作るのが上手だった。

それが終わってから、合併して市になる。第一回の市長選挙。その選挙も、反対側はあなたがおっしゃったような人が出てくるわけだ。いまはそういうのはなくて、みんなわが党であるけれど、どちらかというと、そういう人が出て来た。

清水 合併されて市になったときには、旧町村の単位で顔役の方がいらつしやって、それをつないでまた組織化をしていくという感じですか。

大室 顔役というのは、府中にはないですよ。向こう側の人はそういうのが多いんだよ。こちら側の人は、いま辞めたけれど、野口栄治さんという酒屋がいたでしょう。彼はパージになつちやって、再選できなかった。本当は彼が第一回の市長になるべきなんだ。ところがパージになつちやった。その責任はこっちにあるんだ。翼賛壮年団長に引つ張り出したからだ。だけど、あの人についている人が多いんですよ。体育協会とか、真面目なところが。金も使うし、言葉もうまいし、お酒も上手だし、自然に集まってくる。あの人は陸上で東京都の短距離の記録を持っていたんですね。そのころ「百メートルの記録が」一一秒三で、一〇秒台というのはなかったからね。府中は陸上というのはそれは強かった。そういう人たちといういろいろあつてね。

その後パージが解けて、都会議員をやったときに、残念ながら落ちちゃったんだ。それが本当に気の毒でしょうがない。どうしてもうまくいかなかった。相手方が現職で、いろいろ使つてね。そのころ現職というのは強いんだ。違反みたいなことをやっても捕まらないんだ(笑い)。こっちは真面目だったからやられちゃった。

その次の市長選挙は、小林さんが二回やつて、今度は矢部さんになった。矢部さんの時には二つ「のグループの対立」がなくなつてきているから、私はあまり手を出さなかった。矢部さんが何回も来たけれど、「大丈夫だから」と言った。

清水 もう先生が出て行かなくても大丈夫だということですね。

大室 いや、側近がいろいろいて、そっちの人が中心になってやるから、それはやらなかった。

武田 二つのグループがまとまるきっかけは何だったんですか。

大室 私が行っているときには、二つのグループが府中では一本になつていたんだ。ところが辞めちゃったら駄目なんだ。使えないんだ。残念ながら。

清水 両方が一緒になつたのは、矢部さんが立たれるから一緒になつたということなんです。

大室 それもありますけれど、前の市長が矢部さんを応援して、みんなをやつたんだ。だからみんな一つでやっていた。ところがその連中のスタッフが多いわけだ。しまいは、こんな話をするといけないけれど、矢部さんの何期目かに共産党が来たのを知っていますか。共産党が伸びているときで、京都で市長選挙だか参議院選挙だかで勝つて、一月か二月に、三多摩だけではなくて、共産党のあれがみんな府中に来たんです。大変な選挙だったんだ。

そのころ選挙法が変わつていたんだ。向こうは金があるから、毎日パンフレットを配るんだ。こっちはそれに対抗できなかった。それで矢部さんの側近が、矢部純一と福島実だったんだ。それが来て、「どうしても応援してくれ」と言うんだ。向こうは大動員して、そのころ車を七十台近く府中に持つてきていたんだ。あの頃はそういうことができたんだね。それで都営住宅や何かにみんな泊まり込んで自炊しているんだ。中には橋の下になんか車を突っ込んでやつたなんて、それぐらい大変だった。だから府中が取られちゃう。

それで、いろいろやつたときに、泣いてきて、どうしても私に応援してくれという。いままで矢部さんのほうで、トラック一台ぐらいパンフレットをやつてきたけれど、それをやめさせた。こっちがやめろと言つたんじゃない、向こうでやめて、新しくした

んです。それは歴史的なあれなんだ。何回も向こうのパンフレットや何かが来るでしょう。最後に満を持して、「地元の選挙はこうです」という印刷物を出したんだ。それでひっくり返したんだ。大変な選挙だった。そういうのは私はわりあい得意なんだ、他人の選挙は。

武田 パンフレットでー。

大室 その頃、できたんです。印刷物。それで赤旗の支局が来ていて、演説会をやるわけでしょう。

武田 向こうは向こうでパンフレットをつくるわけですね。

大室 こっちは金がないから、そんなにできないんです。だからやったってしょうがない。

清水 それで最後に勢力を動員するんですね。

大室 最後に用意しておいてね。これははっきり言えば、自民党の都連に行つて、印刷をしてもらったんですよ。原稿はもちろん私が書いた。

武田 どういうことを書かれたんですか。

大室 それは府中のことは府中の人でやりましょう。向こうはどこかよそから来ているわけですね。いまでもどこかに取つてあるけれど、そのリーフレットは、引つ張りだこで、みんなが取つてくれた。そのころはマンションはないけれど、アパートでもどこでも引つ張りだこでね。そこまで抑えに抑えていたんです。

それと、もう一つ言っておくけれど、このあいだの都知事の最後の選挙の時、最後の三多摩は私がやったんですよ。石川要三さんが本部長で、衆議院の小沢さんがあれだけれど、実際は私が事務総長ということをやったんです。これは内容的にも、歴史に残る選挙なんだ。みんな私に任せてね。小沢さんなんか、「そんなこと言ってもいいのか」というけれど、最後には私は「絶対に大丈夫だからこうしなさい」と言つた。選挙の時に大丈夫だということ駄目でしょう。向こうは本当の選挙のやり方を知らないんだ。

小沢さんだつて最初のときは私が応援したんだから。だから他人の選挙はすぐ上手。

このあいだの知事選挙の時には、相手方がNHKの（清水 磯村「尚徳」さんですね）。そうでしょう。あれは公明党が応援していたわけだ。ずいぶんいろいろやられてね。向こうは小沢一郎がついていたから資金豊富でね。こっちは別派だったわけでしょう。資金がないから困つて、一般の有権者に資金を応援してもらおうと思つた。「できるだけ多くのの人から資金をカンパしてもらえ。ただしたくさんもらっちゃいけない、千円でもいいよ」と言つた。「多くちゃいけないよ、数を取りなさい」と言つたんだ。ところが面倒なものだから、たくさん持つてくるやつがいたけれど、駄目だと言つたんだ。というのは、みんなが一票ずつ出すということがあれなんだ。

武田 重要なんだ、ということですね。

大室 それがうまく行つて、都内ではカンパをやつていたけれど、何か持つていつてそのときにこんなことをやっていて、こっちはそうじゃなくて、一般に外でもやつたしね。こっちが二倍以上資金が集まつたよ。だつて車を追いかけてきて、千円札を持つてきてくれるんだもの。そうなるんだよ。「私は革新系ですけれど、これはどうしてもこつちに出てもらわなければ困る」なんて言つてね。

そういう選挙は私は得意だったんですよ。これは真似ができません。だから府中の市長選挙、町長選挙、調布の初代の市長選挙、そういうのはね、画期的なあれで、ひとところ東京都連で話に来てくれというけれど、そういう話じゃないから。

しかしもう駄目ですよ。それは全然やり方が違うんですよ。だから選挙というのは、いまの翼賛選挙の時でも、一部どこかで憲兵がどうしたとかいうけれど、警察官が情報は取つても、実際の票をとることはできませんよ。情報は、「選挙区で誰が」強い



とか弱いとか。みんな一番先に候補者の状況を見るわけですよ。これはこのくらい取れるとかあだとか。警察なんかはそういう情報だった。そんなもの、当たりはしないですよ。だいたいの見当はつくけれどね。

選挙は金で動くというのは山梨県と千葉県なんだけれど（笑い）。これは別なんだ。いまはもうないでしょうけれど、山梨県は「今度は何を持ってきます」というんだ。それで部落でもって、「今度は醤油が二本来たからこれで行くよ」なんていう。だから捕まるときはみんな捕まっちゃうんだ。千葉県は現金なんだよ。ところが私のほうは、そういうしきたりがないから助かっているんですね。いまはもうないですけどね。こないだうちまではいろいろあった。そういう話だけはできて、ほかは駄目なんだ。

## ■これまでの足跡を顧みて

武田 時間も二時間を一〇分ほど過ぎましたが、いままでずいぶん先生のお話をお伺いしてきました。最後に、先生はご自身の足跡を振り返ってどういうふうにお考えかということをお聞きしたいんですけどね。

大室 私はいろいろなことを言って、すこしおかしいかと思いますが、私がいまになってみると一番幸いだったのは、国民精神総動員運動から始まったときでしょうね。

武田 それが原点なんですね。

大室 あのときには否応なしに何でもやった。もう本当に何でもやらされて、それで覚えたんでしょうね。それから、相手がみんなえらい人でしょう。理事会なんかには出られないけれど、委員会でも資料を取ったりしていたから、そういう知識があったんじゃないでしょうか。そういうことの中から、翼賛選挙の時でも、われわれは少しでもいい候補者を出したいということで、腹の中

ではみんなそう思いながらやっていたんですけどね。あれだって戦争に勝てば、私なんかよく、「君、これは金鵄勲章ものだよ」なんて言われたけれど、そういうつもりでそのころやっているわけじゃないからね。だってあの特別電話の話と言っても、なかなかおわかりにならないんじゃないですか。

清水 ちよつと想像の範囲を超えますね。

大室 だって総理大臣と内務大臣しか持っていないものを、私が一本使っていたということは、あれがなければ選挙にならなかったですよ。そういうことを考えたときに、中では早くから時局認識があった。私どもはそのころも「時局」という言葉と「非常時」という言葉で「考えていた」。いろいろな大勢の中にいたから、時局認識をよく理解できたんでしょうね。これがいろいろな意味で早いと思うんです。

いまでもそうなんですが、新聞をスツといい加減に見ても、フツと感じるものがあるんです。これは基礎があったせいじゃないでしょうか。それはありがたいと思っています。ただお役に立たかどうか知りませんが、最終的にはいろいろなことをやって、地元のこともやりましたが、総体的に見て悪いことは一つもなかったな、と知っているんだけど、なかなかそうはいかないので。

武田 先生、こういうことは後の世代に伝えたい、ということはございますか。

大室 いまは時代が変わってきたと思うんです。だからその変わり具合をどう見るかということですね。もういままで通りのわれわれの仲間では駄目だと思っただけです。これは私も、そういうことは学生時代に教わったことがあるんですけど、五〇年ぐらいで波があるんですね。戦争をずっとやって、最初に文化史をやっていた本多浅治郎先生が言っていたんですが、なるほどそうだった。やっぱり五〇年ごとに大きな事件があるんですね。何かあるんです。

戦争がいままで大きかったけれど、大きな流行ものペストがあったとか、コレラがあったとか、大震災があったとか。

こう見ていくと、いま大きな転換期に来ているんじゃないですか。そういうことを考えますと、われわれの出る幕じゃないけれど、そういう流れを認識する必要があるという気がしますね。

武田 ずっとお話を伺いしてきて、先生ご自身が、そういう転換期を過ごされてきたわけですね。戦争もそうだし、戦後もそうだし、先生からお話をいろいろお伺いしてきて、それを読む人は、のちのち、われわれと同じ経験をしている人がいるんだな、と思われるんじゃないでしょうか。

大室 どうもこつちもぼけちゃっているから、よくわかりませんが、私は何かというと、悲観をしないんです。しかし困ったときだとか、いろいろありますよ。人間それぞれの山がある。その山を上手に越えるか越えないかが、あれ「分かれ目」じゃないかと思うんですね。いま一番心配しているのはテレビです。でもひとつころよりはだいぶ直ってきましたね。テレビの主導というのは油断できないですよ。

武田 番組の内容ですか。

大室 番組を見ていて、普通のものはいいんですが、ニュース的なものとか解説的なものを見ると、差がありすぎるでしょう。もう少し勉強したやつが出てくればいいけれどね。いまの世の中はどっちに行くかわからないからね。ひところよりは良くなりましたけれどね。けどいまの子供たちは、みんなテレビが責任を持たなければならぬと思うんですけれどね。

武田 だいぶ長くなりましたが、まだ先生のご活躍の場もたくさんあると思います。来月の選挙がまず（笑い）。

ではとりあえず、これで録音のほうは終わりにしたいと思います。

一同 どうもありがとうございます。

## ■渡辺美智雄氏との関係

「オフレコーディングで談話中、大室氏が、「私が墓参りに行きたいのは、竹下さんと渡辺さんだ」と言い、都議会の中で渡辺美智雄氏の後援会をつくり、その会長になったという話になった。そこで武田氏が録音の許可を取り、再開された」

大室 「……渡辺美智雄氏の息子の喜美氏が」代議士になって、派閥のあれになるでしょう。それが若いのを集めている。このあいだ四国に行つたときに、元警察庁長官なんかをやった後藤田さんの甥か何かが若くて「国会議員に」なっている。それと会つたら、挨拶に来て、「私は渡辺さんと一緒にやっています」なんて言っていたよ。だから「帰ったら、大室がそう言っていたよと言って」と言つただけで、言つたか言わないか。

清水 後藤田正純さんですね。

武田 渡辺さんと知り合つたのは、東京都の――

大室 国会議員の渡辺美智雄のなんとかの会ですよ。それからずっと、向こうも立ててくれてね。こつちが応援しているんだから。

武田 先生が会長をやられているんですね。

大室 そうそう。だからしょっちゅう会っていましたね。

武田 その会のメンバーの中にいらつしやつたのが醍醐さんですか。

大室 醍醐さんと高橋さんは一番の年寄り役なんです。醍醐安之助さんは都会議員としては有名ですよ。どちらも「都議会」議長をやっているけれど、大ボスです。高橋一郎さんは、このあいだまで衆議院をやっていたんです。今度辞めましたけれど、私も懇意です。

武田 二人とも中曽根さんと近いんですか。そういうわけではな

大室 私は中曽根さんとは近くないです。

武田 大胡さんと高橋さんは？

大室 それは中曽根のほうの関係でしょうね。

武田 ほかにその会にいらっしゃった方も、中曽根さんに近い人ですか。

大室 みんなそういう連中が、十何人かいたわけですよ。

武田 先生が会長になられたのは、なぜですか。

大室 こっちはやりたくてやっているんじゃないから、つかまっちゃってね。その会ができたときに、私が一番先なんだから。辞めたときがおしまいなんだ。渡辺さんも死んじゃったでしょう。渡辺さんは中曽根派だけれど、私の従兄弟で小室恒吉というのがいたんです。これが衆議院議長をやった桜内「義雄」さんの秘書をやっていたんです。私より二、三年上なんですけれど、しょっちゅういろいろなことで応援してくれたりしてね。こっちでずいぶん役に立ったこともあるし、私は国会議員にあまり頼んだことはないけれど、桜内さんの関係でね。小室が死んだときに葬式に行ったら、渡辺さんが来ていて、びっくりした。「あれ、どうして大室さんは関係があるのか」と言っていたけれどね。

武田 桜内さんは中曽根派の事務総長をやったりして、代貸しですよ。

大室 桜内さんは義雄さんと、兄弟が昔いたんですね。どっちがお兄さんか知らないけれど。桜内さんは島根ですね。

武田 その当時は、渡辺さんが次の総理になるという感じでしたか。

大室 渡辺さんは、私どもも立派で力もあるし、田中角栄に次ぐ人だと思ったんだ。だからなんとか総理大臣にしたいと思っていたんだ。そのうちに病気になっちゃって、残念だった。あれは本当に残念だったですよ。だけど、葬式にこっちは行けなかった。いろいろあったからね。

武田 都会議員の会というのは、二人の長老の方の肝煎りで始めたんですか。

大室 それがお膳立てをして、私を会長にしちゃったんだ。私はそのとき、「俺がやったつてしょうがないじゃないか」と言っただけで、「そんなこと言わないで、やりなさい」と言っただね。

武田 先生が幹事長ぐらいの時ですか。

大室 そのころ幹事長だったか何だったか忘れたけれど、いまの話、あれは何会といったかな、無理やりじゃないけれど、「大室君、頼むよ」と二人に言われた。だって私がやらなくなつて、中曽根派では小林莞爾なんて、もつともらしいのがいたんだ。だけど高橋さんと大胡さんは、私が一番いいと言っただ。最後には渡辺さんもそう思っていたんじゃないの。非常に信頼していたんですね。

武田 その会はどういう活動をするんですか。

大室 そういうあれじゃないですよ。何かの時に集まったり、総裁選挙の時に応援するとか、しょっちゅう会いましたよ。でも一年に何回かですよ。そんなに毎年やるという会じゃないですよ。

武田 じゃあ、数年は続いたんですね。

大室 そういうのは同志的なあれで、何かの時に呼ばれて行くとかね。だけど最初に総裁選挙が一回あったでしょう。渡辺さんも立候補して、そのときは誰が相手だったか、勝てなかったけれど。そのときに、私もずいぶん地元の有権者に。あれは自民党でやりますからね。あとでお礼に来たよ、「おかげさまで」と言っつて。すぐにわかつちゃうんだね、どこの地区でいくらぐらい取ったかということがね。

## ■ 国会議員との関係

武田 先生が一番好きだった国会議員はどなたになりますか。

大室 やっぱり竹下さんがずいぶん面倒見てくれた。それから渡

迎さんもそうだね。

武田 その二人ですか。

大室 あとは逆なんだ。地元の国会議員や何かだつて、言つてきたことがあるんだよ、石川要三なんか、「府中からは何も頼みに来ない」と言うんだよ。頼む必要がないんだよ。吉野「和男」市長が言うんだよ、「大室さんがいるから、何も頼む必要がない」と。頼んだのは国会見学だけだ（笑い）。

武田 竹下さんというのはどういう方でしたか。

大室 あの人は如才ない人で、最初から「次の総理は竹下登」なんて、歌の文句にしていたりね。残念ながら「内閣は」短命だったけれどね。さつき言つた木村茂という千代田区長をやつた、都議会議員で私の一番の親友で、いまでもあれして「つき合つて」いますが、これが竹下さんが初めて代議士になったときに、いろいろと教えたやつたりしたんだね。田中なんとか「栄一」という東京から出た衆議院議員がいたでしょう、警視總監をやつた人。その人の秘書を木村さんがやつていたんだ。それで片方は参議院か何かで辞めちゃつた。その頃は竹下さんはまだ若造だから、それを木村さんが教えたということがあつたので、あとになつて、「竹下氏が」総理大臣になつてからも、「木村氏の」後援会長は竹下さんなんだ。竹下さんというのも温厚な人でね。

武田 先生と比べると、竹下さんなんかすごく小さい方でしたよね。小柄で。

大室 でも如才なく、よくやつた人ですね。福田さん、竹下さん、大平さん。海部さんもそうだし。

清水 宮澤さんは？

武田 ああ、宮澤喜一さんがいますね。

大室 宮澤さんは私はあまり関係がなかったな。あれは宏池会かな。それじゃあ「関係が」あるわけだな。宏池会は虎ノ門に事務所がありましたでしょう。ご存知ですか。

武田 場所はわかります。

大室 あれは選挙が終わつたあととか何か知らないけれど、都議会議員が呼ばれたことがあるんですよ。そうしたら、若い代議士が案内したり受付をやつたりしているわけだよ。私が行つたら、「あつ、大物が来た、大物が来た」と言うから、あれ、大室が来たと言っているのかな、と思つたんだよ。不思議だつたんだけどね。そのころは大物じゃないんだけど、何か知っていたのかな、と思つた。

武田 しよつちゅう国会議員と関係ができるとか。

大室 そういうことはない。私はそういうことはあまりやらないしね。

武田 でも実際にやる人はいるわけですか。例えば選挙の手伝いをするとか。

大室 普通は、自分のことでみんな忙しいしね。こちらが応援に行くことがあつても。だいたい大勢呼ばれるということは向こうが派閥のあれがあつて、それをなるべく押えておこうということがあるんでしょね。中には、こういう話をしちゃあいけないけれど、ニツカ、サントリーという話があつたんだよ。

武田 ええ。

大室 ああ、知ってますか？

武田 ニツカ、サントリー、オールドパーですね。

大室 どこにでも顔を出すのがあるんだ。そういうのもいたけれどね。

武田 先生は竹下派と近いんですか。

大室 私は無派閥だから。それをよく知っているんですよ。田中角栄さんが私を呼んで、陣中見舞いじゃないけれど、選挙の時にもらったことがあるけれどね。そのときに念を押して言うんだ、「これは派閥じゃないよ、君が当選してくれればいいんだ」とね。ほかの人から見ると倍ぐらいなんだよ。

武田 いくらぐらいもらうものですか(笑い)。

大室 (笑い) それに対する何か「見返り要求」というのは、ないんだよ。ただ相談事があったけれどね。これはどうなんだ、という事でいっぺん代議士の候補を紹介してやったことがあるけれどね。田中さんというのは、そういう点では秘書を上手に使っていたよ。

武田 当時は早坂「茂三」さんですか。

大室 大勢いるんだ。それで、よその秘書もみんな面倒を見るんだ。だから強いんですよ。田中さんというのは図抜けていた。あの人は惜しかったですよ。

武田 そのあとロッキードで駄目になって行くじゃないですか。どういふふうにごらんになっていましたか。

大室 ロッキードのときは、われわれもよく知りませんでしたけれど、考えてみると、ロッキードから金が来ているけれど、自分で使っているわけではないんですもの。田中さんは、どうしてこんなに金があるかな、と思うぐらいにあるんだ。あそこに秘書で佐藤なんとかというのがいたでしょう、女の人で。

武田 佐藤昭。

大室 金庫番ですね。何かあると、金庫番を呼んで、「これだよ」「右手の指を二本立てる」とか、「こうだ」「同じく三本立てる」とかやるんだよ。

武田 これ「指二本」は二千元ですか(笑い)。

馬場 ゼロがいくつくんでしょうね。

大室 そうやっているから、若い代議士なんか佐藤さんの前に来ると、みんな最敬礼をしているんだ。たいてい何かお土産を持ってくるんだ。よそに行ったときのお菓子だとか酒を持ってきたりしている。大したものだと思っただけで、私どもは何も持っていないから。そういう点では田中さんはズバ抜けていましたね。

武田 田中さんとは何回も会われているんですか。

大室 ここにも何回も来ましたしね。

武田 それは首相を辞めてからも、ですか。

大室 いや、そういう頃は会いません。秘書がいまして、田中さんは馬を持っていたしね。そのほかに調教師会とか馬主会とか、その事務長をやっていたのが、私のおやじが世話をしたやつで、その競馬場にいました。だから田中さんが来たときに、それが来て挨拶していましたよ。

武田 本場に田中さんはどこでどうやってお金を稼いでいたんでしょうね。いまロッキードのお金だって、三回か四回かに分けてもらったと言われているけれど、どう考えてももらっていないというのが、いまの一番新しい説なんです。

大室 三木さんが「田中批判を」やったんでしょう。

武田 そのあと、三木さんがやりましたね。

大室 あの頃いろいろあって、われわれはそういうことはわからないけれど、田中さん自身は金を集めるのがすごくあれ「上手」だったんでしょう。やっぱりほうほうに持っていたんでしょうね。だから使うのが派手なんだ。それは桁違いじゃないですか。

武田 前に、ある国会詰めの記者にお話を聞いたことがあるんです。その方はたしか通産省付きか何かの経験もあったのかな。その人から話を聞いたときに、田中さんが通産大臣をやったことがあって、そのときには記者にまで盆暮れにはボーナスをくれるんですって。それで、嬉しかったと言っていましたけれど、嬉しいですよ。

大室 そういう点の配慮はすごく強かったんじゃないかな。それは別に悪気がないんですよ。同じように、各代議士の秘書にそれをしていったんだ。それが何百人といたんだ。それにみんな小遣いをやっていたんじゃないの。どういふことかというところ、この選挙で危ないとなると、みんな応援してやってくれという。秘書は

みんな選挙が上手でしょう。

**武田** 上手じゃないとクビになっちゃいますからね（笑い）。

**大室** 秘書会というのがあって、それをやったんだ。私もいつぺん、田中さんに言われて、ある候補者をやったんだけど、その候補者というのは三木派なんですよ。三木派なんだけど、田中さんは、「この前の時にもう一步で当選するところだったんだ。これを応援してやれば今度はとれる。いやそれでいいんだ」と言うんだ。私もその話に立ち会ったことがあるからいろいろ知っているけれど、落ちちゃったんだね。やっぱりやり方が下手だったんだね。そういう意味では田中さんというのはしょっちゅういろいろ考えていたみたいね。だから強いわけですよ。

**武田** 田中さんからお金をもらうと、封筒に「田中角栄」と書いてあったという神話とか逸話があるんですが。

**大室** そんなことはなかったな。私は選挙費用として渡すんでしょうけれど、それは逆なんだ。「いいんだよ、君が勝ってくればいいんだよ。絶対に派閥じゃないよ」と、しつこく言うんだ。もつともこつちはよく顔を知っているし、懇意ではあるけれど、私は無派閥だから、そういうことをやらないとよく知っているんだらうね。見ると、あまり大きな金庫ではないけれど、しょっちゅう札束がいつぱい入っているんだ。だから一日で相当使っているんじゃないですか。

あと私は小沢一郎というのは非常に買っていたんですよ。彼が幹事長の時には、鈴木「俊一」知事の時にも行った。話がわからないから行ってくれなんて頼まれて、本部に行って、小沢さんとやったことがあるんだけど、あの人は一步も退かないんだ。小沢さんは、今度どうなるかわかりませんけれど、あの人の側近がみんな離れちゃう。私なんか知っている人もみんな辞めちゃうんだ。だからやっぱり、ずっと見ていると、孤立するというのは無理もない。何か欠点があるんでしょうね。あれは本当は大物で

ですよ。今はそう思わないけれど、何回か一緒になったことがあったけれどね。

**武田** でもある時期は、次は小沢さんだと言われていましたからね。私もそう思っていましたよ。

**大室** それだけの人物だったんだけど、やっぱりみんな側近が辞める。和歌山から出ていた人で秘書みたいにしていた人も辞めちゃった。みんな優秀だと思っ人が辞めちゃうんだ。何かあるんだらうね。小沢一郎が鈴木知事の時、磯村をやって、われわれも行って生意気なことを言ったけれど、言うことを聞かないんだ。「鈴木さんじゃ勝てない、勝てない」と言うだけなんだ。あの選挙は、本当に歴史になる選挙だ。

**武田** その当時の資料なんかも、先生はお持ちですか。

**大室** 資料ということはないけれど、なにしろ小沢さんのほうは金があつて、東京全部の世帯にパンフレットを配ると、一回に何百万ではないんですよ。大変なんですよ。だからこちらはそれができないわけだ。それでえらい、やったけれどね。いろいろなことがあつたよ。あれは公明党が支援したんだ。

## ■ 都議会との関係、都知事のことなど

**武田** 先生は日記はつけられているんですか。

**大室** 日誌らしいものじゃないけれど、ひところはつけていたけれど、見たらわけのわからないことばかり書いてあつて、いまはつけていません。ただメモはつけていますけれどね。このところは飛び飛びです。

**武田** じゃあ、それを見ると書いてあるかもしれない。

**大室** いま言った鈴木さんが知事で、こういう話をしたという、その頃はちゃんとわかっている。全然違う。何月何日誰と鈴木知事に会うように言った、というのがね。

武田 あつ、まだそのときの名前を聞いていないんだ。

大室 ただ、現職の人がー。

武田 現職でしょうね。

大室 どっちでもいいし。みんな相当ぼけていますよ。こつちだつて相当ぼけているんじゃないかと思つていけるけれど。

武田 先生は鈴木さんは買つていらしたんですか。

大室 われわれは鈴木派だけれど、四期目が何か、辞めるときに、保坂「三蔵」君という参議院「議員」をやっているのが来て、「大室先生も鈴木さんはおしまいだと言うけれど、あなたがそんなこと言つたらどうするんですか」と言うから、「それは四期以上やつたらいけないよ」と言つたんだ。人間が立派な人であつても、首長というのは長くやらない方がいいんだ。「あなたがそう言うんじゃないでしょうか、どうするんですか」と言われたことがあるんです。彼がまだ参議院議員になる前ですけれどね。われわれのほうの優秀な選手だったけれど。

だけど鈴木さんとは、両方が終わつてからもよく会いましたね。このあいだ、本『官を生きる』に書いてあつたでしょう。あれと同じように、よく会いました。私もあの本を持っていたんだけど、あまりよく見ていなかった。だけれど、見たら半年違うな、と思つた。あのときに私が、鈴木さんに反対派のあなたの思っている人を連れてきますからといって、二人ばかり連れて行つたんだ。それであとでもつて「鈴木氏が」「あわてなくてよかった」と言つたということを、花田「一憲」というそのときの財務局長が議会で言つたのは、その話なんだ。「大室さんから言われて、何を言っているんだと思つたけれど、あとになってみると、あれで助かつた」「鈴木氏が」「二回言つた」ということを、花田が言つていたというんだ。この話はしましたか。

武田 ちよつとだけ伺いましたかね。

大室 どうも変なことを言い出すから危なくてしょうがないけれど。

ど。いまの話は、私が言っていることだけれど、本当のことを言うと、東京都の幹部には、私が一番信頼されていたんじゃないの。だから何かやつてくれちゃうわけですよ、頼みもしなくても。そういうことを言うといけないけれどね。私も派閥的なことや利権的なことは一切やらないし。

武田 先生は都庁の移転には最初から関わつていらつしやるんですか。

大室 移転は全体的な問題で大きな問題だから、ずいぶん長くやつていたんです。だから速記録をこらんになればわかりますが、われわれの委員会ですべて特別に知事と呼んで、代表的に質問したりしている。ただ、下町の人は反対で、これは無理もないんだ。だから、少し時間をおいてやつたらどうかと言つたんだ。「これ以上やつていると本当に反対で、否決になりますよ」と言つた。それを副知事なんか心配して、われわれのところに来た。知事がそう思つていなかったというのは、副知事の中にもこつちとこつちがある程度いるわけですよ。早くやつてしまえというのがいる。その大將が、参議院をやつた田辺「哲夫」君というわれわれの同僚、山梨から出た都会議員。そのときの幹事長だった水村「一郎」というのがいて、その後ろが副知事なんだ。

武田 田辺さんは早くやつてしまえというほうですか、逆ですか。

大室 田辺君は早くやれというほうなんだ。自分が地元だから、全体的なことを考えていないわけですよ。全体的なことを考えると、これは心配だ。それだから、都庁の幹部が本当に往つたり来たりで大変だった。その大変な役を、こちらの木村という幹事長と私がほとんど受けながらやつていたわけだ。両方を見ながらね。

そのときに延ばしたからできたんだ。そうじゃなければ駄目だったんだ。その延ばしたときが一番の元凶というんじゃないけれど、知事に話したのは私なんだ。そんなことは一般には知らないもの。知っているのは副知事とか政策局長とか財務局長だ。とこ

ろが幹部はみんな知っているのね。

**武田** あれも時間をかけたからできたんでしょね。

**大室** 実際には、都庁をつくらなければいけないということはみんなわかっていたんだ。だけど、片方の立場があるから、半年延ばしてもいいじゃないか、ということなんだ。それがなかなか説得できなくて、難しいところだった。どちらかに都庁はつくらなければいけなかった。場所がなくて困っていたわけだ。分室はたくさんあるし、古い建物が多かったから。場所が、水道局の跡があったから、できたわけですよ。

**武田** あそこはなんとか水道場というんですね。

**馬場** 淀橋水道場ですね。

**大室** もう時代が変わってきて、いま石原「慎太郎」さんを見ていると、非常に強引でいいところもあれば、大変だなと思うときもあるね。

**武田** 青島さんはどうでしたか。

**大室** 青島なんて、ああいうものをタレントがやるから、都庁はうんと損するんですよ。いまよその県知事だって、そういうのが多いんだから。やっぱり県政とかなんとか、じっくりやらないとね。見てくれでやられたらかなわないですよ。みんなそうなのちゃうでしょう。これは油断できないですよ。府中だって今度は油断できないですよ。

**馬場** そういう人が立つんですか。

**大室** そういう人がね。みんなよそで困っているけれど、困ったって、それを投票する有権者がいる。それが世の中なんだからしようがないですよ。やってみて、あとでもって困ったといっても、四年も五年もやる。たいてい二期ぐらい、やられちゃうからね。いまそれを見ればわかるじゃないですか。大阪だって知事の問題が出ているし、役に立っているかどうか知らないけれど。千葉だってそうだし、本当に力のある人か。力のあるとかないかとい

う問題じゃないんですね。だから石原さんみたいに格好をつけてやっているけれど、あれじゃあ長くもたないよ。

**武田** でも石原さんの後に誰が来るかという問題もありますね。先生が辞められてからも、都庁の方が先生に相談に来られたり、ということはあったんですか。

**大室** 最近は全然ない。私は都議会にも都庁にも行かないから。向こうは知っているから、会うと挨拶に来るけれど、私はそういうつながりはなるべくやらないんです。いまでも前の副知事なんかと年賀状の出し入れぐらいはしているけれどね。向こうは心得ていますよ。それは思ったよりいろいろなことを。私の場合にはわりあい相談してくれる人が多いんですね。こっちも、相当頭に「ぼけが」来ているんじゃないかな。こんなことを言うようじゃ。相当おかしいんじゃないかな。

**武田** でも府中でも都議会でも先生はご活躍されているから。

**大室** 都議会の話でも、私どもはみんなを立ててやっているけれど。私がやると、一都議会議員であつても、各党の人がみんな一目置いてくれるんですよ。共産党までね。そういう人がないんですよ。それは言っちゃったからおしまいじゃないですか。向こうは来るけれど。一番ひどいのは、共産党のやつが来て、「今度、大室さん、議長になつてくださいますよ、われわれも応援しますから」と言うから、「冗談言うな、君らの力を借りなくたって、やりたければやるよ」と言つた。予算委員会で理事で共産党のやつがなんだかんだといつて痛めつけるわけだ。あまり変なことを言っているから、「もうどうだい、このへんではいいじゃないか」なんて言うのと、やめちゃうんだ。そういう人はいないでしょう。

**武田** 超党派というのか（笑い）。

**大室** いまは全然雰囲気が違うから。そういうことを知らないでしょう。前に教育長が予算委員会のとくにやって、なんだかんだと言つたら、助けて、「何を言っているんだ、それは俺が言つて



「やったんじゃないか」と言ったら、「申し訳ありません」と、あくる日来说っていただけれど。合いの手を入れたり、チャチャを入れたりということが出来るのは美濃部都政の野党の時なんだ。野党というのはらくですよ。言いたいことをなんでも言えるから。ただ私はここ「首を絞めるような手振りをする」までやらないから。「これおかしいじゃないか」と言って、それを直せばいい。だから向こうが感謝をして逆に来るわけです。こう締めちゃったからおしまいですからね。だから、国会と同じように議会に来ている新聞記者がいるでしょう。廊下でやっているやつがいて、「大室さん、あそこまでいったら、キュツとやつちやつたらいじゃないですか」と言うんだけれど、それをやらないんです。だから向こうが感謝して直すでしょう。そういうこともあったというんですが、それは昔の話で、いまはそういうこともわかりませんから。すいません、いろいろなことを言って。遅くまで引き留めて

しまいました。

武田 また年明けに、馬場さんと連絡をとりながら、連絡させていただきます。

馬場 資料を見せていただいて、整理をどうするか、ご相談したいと思います。

大室 府中関係はまたいつペンごらんいただいてー。

武田 馬場さんのところに預けられるのが一番安全だし、府中の資料だったら、見たい人がたくさんいると思います。

大室 いまはそっちのほうに関心が行かないんですよ。本当の出たとこ勝負で、この仕事もそのときだけはしゃべっているけれど、本当に駄目なんですよ。だからその話はそのときにー。

馬場 また選挙が終わった頃ですね。

一同 どうもありがとうございます。

〈以上〉

# 大室政右 オーラルヒストリー

資料編

【資料1】「民衆教化動員史料集成第二巻国民精神総動員中央連盟『国民精神総動員運動』」所収  
 国民精神総動員運動 加盟団体 (昭和十三年三月末日まで)

会名	役員名		
・全国神職会	会長 主事	水野 鍊太郎 太田 眞一	
・全国町村長会	会長 主事	岡崎 勉 福井 清通	
・全国市長会	会長 事務理事	川淵 治馬 阿南 常一	
・中央報国会	会長 参事	一木 喜徳郎 松井 驥	
・選挙肅正中央聯盟	理事長	田澤 義鋪	
・中央融和事業協会	会長 常務理事	平沼 騏一郎 小山 三郎	
・協調会	会長 常務理事	徳川 家達 町田 辰次郎	
・大日本消防協会	会長 理事	末次 信正 緒方 惟一	
・愛国婦人会	会長 事務総長	本野 久子 小原 新三	
・全日本方面委員聯盟	会長 総務部長	清浦 奎吾 原 泰一	
・中央社会事業協会	会長 総務部長	清浦 奎吾 原 泰一	
・全日本私設社会事業聯盟	理事長	丸山 鶴吉	
・日本赤十字社	社長 副社長	徳川 家達 中川 望	
・日本医師会	会長 理事長	北島 多一 中山 壽彦	
・日本歯科医師会	会長 理事長	血脇 守之助 奥村 鶴吉	
・日本薬剤師会	会長 副会長	河合 龜太郎 石井 絹治郎	
・時局協議会	議長 世話人	井田 磐楠 小林 順一郎	
・国体擁護聯合会	委員長	入江 種矩	
・純正日本主義青年運動全国協議		中川 裕	
・愛国労働組合全国懇話会	常任委員	高山 久蔵	
・日本労働組合同議	議長	松岡 駒吉	
・愛国農民団体協議会		平沼 力三 吉田 賢一	
・全国農民組合	執行委員会	杉山 元治朗	
・愛国労働農民同志会	会長	松本 勇平	
・帝国在郷軍人会	会長 総務	井上 幾太郎 小泉 六一	
・大日本国防婦人会	会長 理事長	武藤 能子 久世 為次郎	
・帝国軍人後援会	会長 理事長	松平 頼壽 鎌田 彌彦	
・恢弘会	会長 副会長 同 同	大井 成元 筑紫 熊七 高山 公通 佐藤 鐵太郎	

・海軍協会	会長 飯田 忠一 副会長 今村 久恒 総務理事 和田 信次郎
・海軍有終会	理事長 竹下 勇 副理事長 中島 資朋
・愛国恤兵会	会長 奈良 武次 理事長 平松 英雄
・全日本司法保護事業聯盟	会長 鹽野 季彦 常務理事 森山 武一郎 主事 大石 三良
・壮年団中央協会	常任理事 田澤 義鋪 同 丸山 鶴吉 同 大島 正徳 同 後藤 隆之助
・大日本聯合青年団	理事長 香坂 正康 常任理事 生駒 高常
・大日本聯合女子青年団	理事長 吉岡 彌生 理事 野田 松平
・帝国少年団協会	理事長 鈴木 孝雄 理事 大沼 直輔
・大日本少年団聯盟	理事長 二荒 芳徳 理事 三島 通陽
・中央教化団体聯盟会	会長 清浦 奎吾 理事長 松井 茂
・勤労者教育中央会	会長 大久保 年武 理事長 池田 宏

・大日本聯合婦人会	会長 三條 西信子 常務理事 堀口 きみこ
・帝国教育会	会長 永田 秀次郎 専務理事 藤井 利譽
・日本文化協会	理事長 伊東 延吉 常務理事 松谷 元三
・日本文化中央聯盟	会長 島津 忠重 常務理事 松本 學 理事 岡部 長景
・日独同志会	代表者 松本 徳明
・明治神宮体育会	会長 有馬 良橘 栗本 義彦
・大日本体育協会	会長 下村 宏 副会長 平沼 亮三 事務理 郷 隆
・神道教派聯合会	代表者 佐野 常羽
・佛教聯合会	主事 市橋 覺俊
・日本キリスト教聯盟	総幹事 海老沢 亮
・社会教育協会	会長 阪谷 芳郎 理事長 穂積 重遠
・社会教育会	理事長 佐野 善作
・修養団	主幹 蓮沼 門三
・大日本武徳会	会長 林 銑十郎
・講道館	館長 嘉納 治五郎

・大日本報徳社	社長	一木 喜徳郎
・帝国農会	会長 幹事長 主任者	酒井 忠正 山田 險 渡邊 忠吾 東浦 庄治
・産業組合中央会	会長 副会長 常任理事 総務主事	月田 藤三郎 有働 良夫 千石 興太郎 濱田 道之助
・帝国水産会	会長 副会長 主事	野村 益三 高草 美代蔵 高木 衆太郎 小林 基
・日本中央蠶絲会	会長 副会長 主事	松平 頼壽 岡本 英太郎 長岡 哲三
・中央畜産会	会長 副会長 常任理事	砂田 重政 横山 泰造 恒松 於菟二 河野 一郎
・全国山林联合会	会長代理 理事 監事	尾崎 元次郎 鈴木 覺四郎 平沼 彌太郎
・帝国馬匹協会	会長 副会長 同	松平 頼壽 西尾 忠方 八田 宗吉
・日本獣医師会	会長 副会長 同 常務理事	内村 兵蔵 葛西 勝彌 渡邊 正照 加藤 眞吾

・工業組合中央会	会長 主事	梶原 仲治 佐野 卓男
・商業組合中央会	会長 主事	鶴見 左吉雄 稻川 宮雄
・輸出組合中央会	会長 事務理事	兒玉 謙次 荻田 才之助
・日本実業組合联合会	会長 副会長 同	星野 錫一 中山 信弘 上甲 斧之助 秋山 之助
・日本商工会議所	会長 理事 副理事	門野 重九郎 木村 増太郎 依田 信太郎
・全国産業団体联合会	会長 常務理事	藤原 銀次郎 膳 桂之助
・日本経済聯盟会	会長 常務理事	郷 誠之助 高島 誠一
・日本海員掖済会	理事 常務理事	水野 鍊太郎 角谷 揆一
・帝国水難救済会	会長 副会長 同 同 同	松平 質壽 松平 保男 島巢 玉樹 木下 義介 石樽 辻五郎
・海外移住組合联合会	理事 専務理事 主事	宮坂 國人 島巢 玉樹 千浦 節
・満州移住協会	理事 常務理事 同	大藏 公望 佐藤 貞次郎 永雄 策郎

【資料2】『民衆教化動員史料集成第二卷 國民精神總動員中央連盟『國民精神總動員運動』所收  
銃後後援強化ニ關シ上申ノ件  
(昭和十三年二月二十二日附發第一四二號・第一四三號)〔説明・理由等省略、旧字は新字に直してある。〕

本聯盟兼ネテ銃後後援ニ関シ調査委員會ヲ設ケテ調査中ノ処此程右調査終了理事会ノ審議ヲ經テ別紙十項目並ビニ希望事項ヲ決定致候ニ付テハ左記 項ノ実施ニ関シ特ニ閣下ノ御高配ヲ仰度此段上申候也

#### 記

- 一、軍事扶助ノ私設ニ関シテハ其ノ統制ニ就キ一層力ヲ用ヒラレタキコト(内務、厚生兩省)
- 二、青少年ヲシテ銃後後援ノ實際運動ニ参加セシメラレタキコト(文部省)
- 三、市区町村ニ軍事相談所ヲ設置サレタキコト(内務、陸軍、海軍、厚生各省)
- 四、戦死者、其ノ遺族及傷痍軍人ニ対スル感謝ト尊敬ノ念ヲ一層深カラシメ且ツ之ヲ持續セシムル為適當ナル措置ヲ講ゼラレタキコト(内務、陸軍、海軍、厚生各省)
- 五、遺族及傷痍軍人ニ対スル社会的待遇、職業ノ保護並ニ其ノ子女ノ教育ニ関シ適當ナル措置ヲ講ゼラレタキコト(内務、陸軍、海軍、文部、厚生各省)
- 六、傷痍軍人ノ結婚問題ニ関シ適當ナル措置ヲ講ゼラレタキコト(陸軍、海軍、文部、厚生各省)
- 七、出生及応召軍人並ニ其ノ家族ニ対シテハ必要ニ応ジ職業ノ斡旋(職業案内所)ノ設置モ一法ナルベシニ力ヲ用ヒラレタキコト(陸軍、海軍、農林、商工、厚生各省)
- 八、銃後後援強化ノ実績ヲ挙グル為都市及農村ニ五人組ノ如キ隣保相扶ノ組織ヲ設ケラレタキコト(内務、農林、商工各省)
- 九、軍事扶助ニ関シテハ從來ノ軍事地方委員會ヲ擴大強化シテ專ラ其ノ活動ニ当ラシメラレタキコト(内務、厚生兩省)
- 十、銃後後援ニ関スル各種団体ハ其ノ設立ノ目的及事業ノ範圍ヲ明カニシ且ツ相互ノ連絡ヲ緊密ニシテ遺漏重複等ナキ様一層統制ニ努メラレタキコト(内務省)

#### 銃後後援強化ニ關スル希望事項(厚生省)

- 一、遺族及傷痍軍人ニ対スル國民ノ感謝ト尊敬ノ念ヲ一層深カラシムル為ノ希望事項
- 二、遺族及傷痍軍人ニ対スル社会的待遇及職業ノ保護ニ就テノ希望事項
- 三、市区町村ニ市区町村長・小学校長・警察署長・方面委員・在郷軍人分會長・傷痍軍人分會長等数名ヲ以テ組織スル銃後後援強化ニ關スル軍事相談所ヲ設置シ、出征者ノ遺家族間ノ紛議ニ關スル調停其他出征者ノ遺家族並ニ傷痍軍人ノ医療其他軍事扶助ニ關スル問題ヲ取扱ハシムルコト
- 四、傷痍軍人ノ結婚問題ニ関シテハ(イ)女子ガ進ンデ傷痍軍人ト結婚スル氣風ヲ養成スルコト(ロ)軍事相談所各婦人団体等ハ積極的ニ之ニ協力スルコト(ハ)政府ハ結婚後ニ於ケル生活ノ保証ヲナスコト

【資料3】『民衆教化動員史料集成第二巻国民精神總動員中央連盟「国民精神總動員運動」』所収  
各調査委員氏名

一、銃後後援会二関スル調査委員

(委員長) 担任理事	小原 直	今井 健彦	小泉 六一
大日本聯合青年団	石原 治良	帝國馬匹協會	山田 仁市
大日本聯合女子青年団	松平 友子	大日本国防婦人会	杉山 得一
大日本聯合婦人会	井上 秀子	帝國水難救助会	木下 義介
中央融和事業協會	榊山 保一	全日本方面委員聯盟	生江 孝之
中央社会事業協會	原 泰一	全日本司法保護事業聯盟	福澤 常吉
全日本私設社会事業聯盟	三谷 此治	日本藥劑師会	森山 武市郎
帝國在郷軍人会	小泉 六一	愛國婦人会	小原 新三
帝國軍人後援会	田岡 美賀之助	日本商工会議所	依田 信太郎
日本医師会	内ヶ崎 騰次郎	日本齒科医師会	廣瀬 武郎
帝國少年団協會	大島 長三郎	大日本少年団聯名	酒井 幾造
団体擁護聯合会	山根 謙一	陸軍省 陸軍歩兵中佐	佐々 眞之助
海軍省 海軍中佐	川崎 進	農林省 經濟更正部長	堀田 權一
内務省 軍事扶助課長	福本 柳一	内務省 傷兵保護課長	多湖 實夫
内務省 警保局警務課長	数藤 鐵臣	東京府 学務部長	浅田 良逸
東京市 助役	篠原 英太郎		江藤 源九郎
	伊豆 凡夫		志賀 和多利
	漢那 憲和		

二、社会風潮二関スル調査委員

(委員長) 担任理事	井田 磐楠	岡部 長景	松村 謙三	松井 茂
大日本聯合青年団	田中 確一	大日本聯合女子青年団	吉岡 彌生	
団体擁護聯合会	蓑田 胸喜	修養団	座間 止水	
勤労者教育中央会	山根 儀重	全国神職会	太田 眞一	
中央報徳会	松井 驥	選挙肅正中央聯盟	赤木 朝治	
時局協議会	永井 了吉	日本文化協會	松谷 元三	
純正日本主義青年運動全国協議会	菊川 忠雄	愛國労働組合全国懇話会	永野 友章	
日本労働組合會議	杉山 元治郎	愛國農民団体協議会	北山 亥四三	
全国農民組合	加藤 咄堂	愛國労働農民同志会	松本 勇平	
中央教化団体聯合会	杉山 謙治	日本文化中央聯盟	川原 次吉郎	
日独同志会	武内 紫明	神道教派聯合会	新井 無二郎	
佛教聯合会	佐々井 信太郎	日本キリスト教聯盟	宇野 藤熊	
大日本報徳社		内閣情報部 情報官	小貫 弘	

三、農村漁村二関スル調査委員

(委員長) 担任理事	月田 藤三郎	酒井 忠正	松村 謙三	一ノ瀬 福巳
全国町村長会	市村 高彦	帝國水産省	加藤 知正	
産業組合中央会	宮城 孝治	日本中央蠶絲会	深田 雅治	
中央畜産会	河野 一郎	全国山林会聯合会	佐藤 貞次郎	
日本獣医師会	加藤 眞吾	満州移住協會	東浦 庄治	
愛國農民団体協議会	北山 亥四三	帝國農會	長谷川 良次	
愛國労働農民同志会	中澤 辨次郎	全国農民組合	市來 鐵郎	
内務省 内務事務官	小林 千秋	内務省 内務事務官	山口 啓市	
文部省 督学官	山根 忠好	文部省 社会教育官	田中 康茂	
農林省 經濟更生部長	小畑 權一	企画院 調査官	近藤 康男	
	横尾 精一		國枝 益二	
	高田 軫平		三善 信房	
	大石 大			

○十二月二十五日 委員山根儀重氏死去す  
○委員富田謙治氏は内務省警保局長に転出のため新任内務省警保局長清水重夫氏を委員に委嘱す

内務省 警保局保安課長	富田 謙治	内務省 警務課長	数藤 鐵臣
文部省 社会教育局		警務課長	石井 昂
成人教育課長	清水 芳一		
教学局 教学官	志水 義暉		
	山下 信義		
	三輪 田元道		
	安藤 正純		
		山本 良吉	
		久布 白落實	
		添田 敬一郎	
		安岡 正篤	

#### 四、家庭実践二関スル調査委員

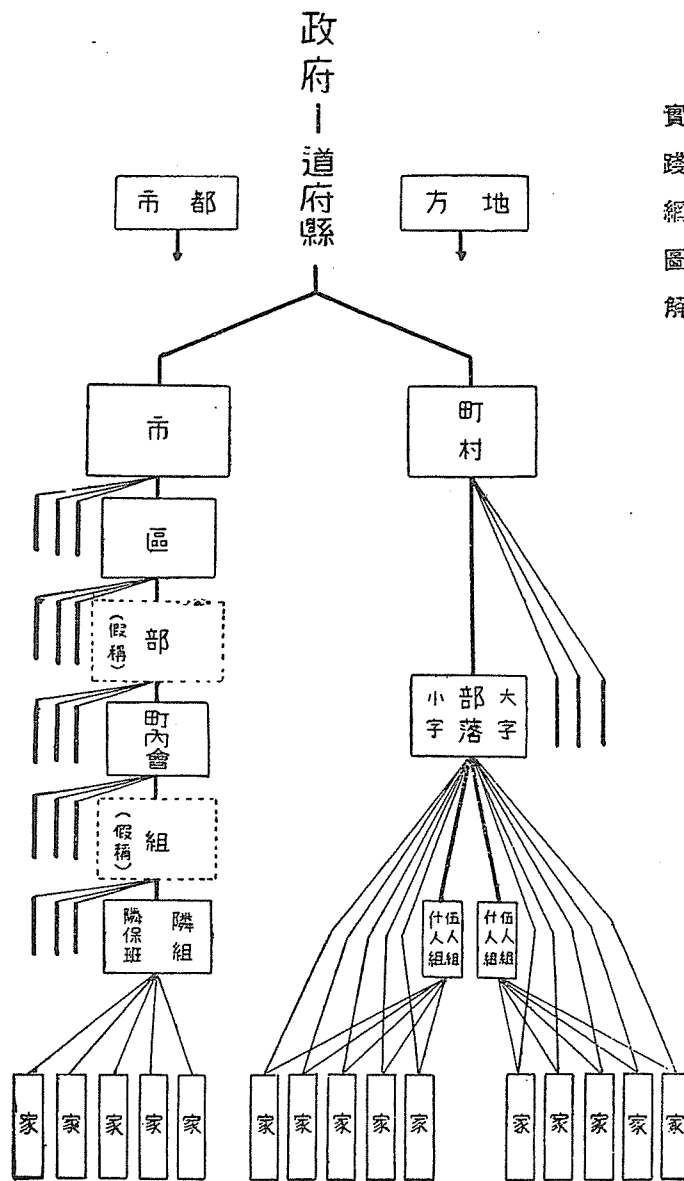
(委員長)担任理事	松井 茂	月田 藤三郎	今井建彦
大日本聯合婦人会	大倉 繁子	大日本國防婦人会	杉山 得一
愛国婦人会	本野 久子	大日本聯合女子青年団	楠守 ふみ
産業組合中央会	丸岡 秀子	日本赤十字社	棚橋 源太郎
勤労者教育中央会	小尾 範治	全日本司法保護事業聯明	森山 武市郎
帝国教育界	石川 ふさ	社会教育協会	武部 欽一
社会教育会	關屋 龍吉	修養園	二木 謙三
帝国農会	千葉 蓉山	中央教化団体聯合会	高島 米峰
団体擁護聯合会	三武 錠治	文部省 社会教育官	水野 常吉
	赤松 常子		市川 房枝
	吉岡 彌生		倉橋 惣三
	堀口 きみこ		戸田 貞三
	暉峻 義等		吉田 久
	道家 齊一郎		星島 二郎
	増田 義一		守屋 東

#### 五、実践網二関スル調査委員

(委員長)担任理事	中川 望	月田 藤三郎	佐々木 信太郎
選挙肅正中央聯盟	松原 一彦	大日本報徳社	宮城 孝治
帝国農会	青鹿 四郎	産業組合中央会	栗原 美能留
全国町村長会	市村 高彦	大日本聯合青年団	小林 千秋
中央教化団体聯合会	古谷 敬二	内務省 内務事務官	柴山 直
文部省 社会教育局	清水 芳一	文部省 社会教育局	
		青年教育課長	
文部省 成人教育課長	不破 佑峻	農林省 經濟更正部總務課長	三浦 一雄
内閣情報部 内閣情報官	小貫 弘	内閣情報部 内閣書記官	西村 直己
東京府 総務部地方課長	廣橋 眞光	東京市 市民動員部國民精神	林 清
大阪府 監査部長	大塚 辰治	總動員課長	市川 房枝
(臨時委員)東京市監査部	平林 廣人		



實踐網圖解



【資料5】『民衆教化動員史料集成第二卷國民精神總動員中央連盟』國民精神總動員運動』所收  
國民精神總動員本部事務局組織概略圖

事務局

總務部

秘書課

經理課

調查部

調查課

企画課

資料課

地方部

地方課

都市課

連絡部

連絡課

団体課

事業部

事業課

宣伝課

出版課

精動指導者練成所

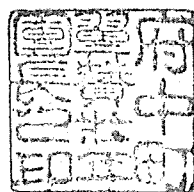
【資料】6 『民衆教化動員史料集成第一巻国民精神総動員中央連盟『国民精神総動員運動』所収  
 賛澤全廃委員会委員

本部理事長	委員長	堀切 善次郎	常任理事	小泉 梧郎
商工省物価局総務課長	美濃部 洋次	農林省官房調整課長	和田 博雄	
内務省警保局經濟保安課長	赤羽 稔	厚生省社会局生活課長	武島 一義	
警視庁保安部長	岡本 茂	東京府総務部長	中村 四郎	
東京市市民局長	上原 六郎	大日本青年団総務部長	熊谷 辰治郎	
帝國在郷軍人会代表	今井 金一	愛國婦人会代表	力石 喜乃子	
大日本国防婦人会審議員	大瀬 菊子	大日本聯合女子青年団主事	岩崎 文江	
大日本聯合婦人会常務理事	中野 萬龜	同盟通信社編輯局次長	岡村 一二	
日本百貨店組合理事長	關谷 延之助		大妻 コタ力	
	高良 富子		河口 愛子	
	金子 しげり	戰時物資活用協會主幹	横山 正一	
本部事業部長	小松 東三郎	地方部長	村田 五郎	
連絡部長	高山 一三	調査部長	野村 重臣	
東京府地方課長	中西 久夫	東京市社会教育課長	木村 利夫	
本部都市課長	伊藤 博	事業課長	黒田 力造	
団体課長	成瀬 正勝	調査課長	多田 勲生	

府翼共壯第一〇部

昭和十七年十一月五日

府中町翼共壯年團長 野口栄治



大皇政右殿

第一回本團總會開催ニ関スル件

本月八日午後六時府中國民學校ニ於テ標記、總會開催  
ニ致候間時局下御繁忙中洵ニ恐縮乍萬障御差繰リ御  
出席被下度此段及御通知候也

追而當日ハ團許可證並ニ團員章授與可致候條必  
御出席相成度候

大政翼賛會地方部長殿  
大政翼賛會東京府支部長殿

推進員 報道

昭和十七年 三月 三日

北多摩郡 府中町 支部報道責任者 大室 政 右

一、推進員の活動は二回に亘る（二月七日、十日開催）推進員	常會の開條により漸く活潑となりてあるが、その活動方針	は第二回の常會の際に決定せる別紙「推進員運動展開	方針」に基き、その第一歩として「翼賛運動の強化促進」と	町民會の組織、運営の整備強化に主眼を置き、目下	「紙芝居」等の啓蒙運動から展開中である。	二、推進員の活動の第一歩が、この啓蒙運動から起	された事、又それが大衆的な紙芝居等から行はれた	事は一般町民の好感と歓迎を受けつゝある様である。	三、尚運動の増進が支部役員の人選如何により非常な
------------------------------	----------------------------	--------------------------	-----------------------------	-------------------------	----------------------	-------------------------	-------------------------	--------------------------	--------------------------

大政翼賛會地方部長殿  
大政翼賛會東京府支部長殿

推進員報道

昭和 年 月 日

郡市

村町 支部報道責任者

印

影響を受けるところから、今回役員の改選する機会に、眞に活動的な清新なる人事の断行方を、推進員の意向として世話係外一名により支部長に具申した。

四、運動展開の具体性と徹底的なりしむるため、推進員中より七名の部員を選任し企画部を設けり。

以上



府中町翼賛壯年團昭和十七年度事業報告書

三月二十六日

大國魂神社ニ於テ午前九時ヨリ本團結成式挙行ス

四月九日

府中町松竹館於テ開會、翼賛選挙貫徹大講演會

ニ本團宣傳班員出動シ紙芝居ヲ實施セリ

四月二十一日

府中町内各要所街路ニ本團宣傳部隊が出動シテ翼賛

賛選挙街頭宣傳紙芝居ヲ午後一時ヨリ断行セリ

四月二十日

翼賛選挙標語ポスターヲ作製シテ各町内要所

ニ貼付、奉仕ヲ断行セリ

九月十五日

本團第一回常會ヲ開催（午後七時）シ之ニ準ビテ

各町内分團毎ニ常會ヲ開催セリ、其後毎月同日

ヲ始メトシテ各日之レガ常會ヲ續行スツ、アリ、

八月

第一回干草棚森包勤勞奉仕ヲ二十四日ヨリ二十六日

東京府北多摩郡府中町役場



マテ續行して四〇九梱（三二九貫）ノ梱包ヲセリ。

九月二十二日

府中町常任會ニ公会堂建設並ニ省電常時運轉費  
施促進運動建議案ヲ提出セリ。

九月

又ニ固子草梱包作業勸勞奉仕ヲ平五日ヨリ二十六  
日マテ斷行して一六梱（一〇〇貫）ヲ梱包セリ。

十月

第一回鉢城講習會ヲ十三日ヨリ十四日マテ（泊二日間）東  
郷寺ニ於テ開催セリ。

十月十七日

増産事業ノ一端トシテ松葉種子ヲ無償ニ町民  
ニ配布セリ。

十一月三日

町民大運動會開催係員トシテ勸勞奉仕セリ。

町民大運動會開催係員トシテ勸勞奉仕セリ。

# 翼賛隣組数へ歌

府中町翼賛壯年團撰定

一つとせ……一つ心に打揃ひ  
國民儀禮を致しませう……隣組

二つとせ……不斷の訓練怠らず  
すは、空襲に備へませう……隣組

三つとせ……皆で心も氣も合せ  
出征家族を扶けませう……隣組

四つとせ……嫁の晴着も祝着も  
質素にしませう切符制……隣組

五つとせ……慰問袋や慰問文  
真心罩めて送りませう……隣組

六つとせ……無駄な電氣は消しませう  
生産資源の護りなら……隣組

七つとせ……何がなんでも國債を、  
買ひませう、力の續くまで……隣組

八つとせ……やたら買溜、賣惜み  
統制素すは恥と知れ……隣組

九つとせ……子供は強く健やかに  
育て、皇國へ御奉公……隣組

十とせ……東亞の平和を永久に  
築くは我等の底力……隣組

田島虎洲作

(東海362)

翼賛政治体制協議会事務局職制

一 事務局ニ事務局長ヲ置ク

事務局長ハ會長之ヲ任命ス

事務局長ハ事務局ヲ管掌ス

ニ 事務局ニ左ノ三部一室ヲ置ク

總務部

連絡部

實踐部

企画室

三 各部及室ニ部長及部員若干名ヲ置ク

部長及部員ハ事務局長之ヲ任命ス

部長ハ事務局長ノ指揮ヲ承ケ部務ヲ掌ル  
部員ハ上司ノ命ヲ承ケ事務ニ従事ス

事務局事務分掌

一 總務部ニ左ノ二班ヲ置ク

庶務班

會計班

二 庶務班ハ左ノ事項ヲ掌ル

(一) 秘書、文書ニ關スル事項

(二) 人事ニ關スル事項

(三) 諸會合ニ關スル事項

三 會計班ハ左ノ事務ヲ掌ル

(一) 豫算決算ニ關スル事項

(二) 用度、出納ニ關スル事項

四 連絡部ニ左ノ地方班ヲ置ク

但東京府地區ハ本部直屬トス

第一班（北海道、青森、岩手、宮城、福島、山形、秋田地區擔當）

第二班（神奈川、千葉、茨城、栃木、群馬、埼玉、山梨地區擔當）

第三班（靜岡、愛知、新潟、長野、富山、石川、福井地區擔當）

第四班（大阪、京都、和歌山、三重、滋賀、奈良、岐阜地區擔當）

第五班（岡山、廣島、山口、島根、鳥取地區擔當）

第六班（愛媛、香川、高知、德島、兵庫地區擔當）

第七班（福岡、熊本、鹿兒島、佐賀、長崎、宮崎、大分、沖繩地區擔當）

地方班ハ左ノ事務ヲ掌ル

（一）地方支部ノ組織ニ關スル事項

（二）本部、支部連絡指導ニ關スル事項

六 實踐部ニ左ノ二班ヲ置ク

宣 傳 班

實 踐 班

七 宣傳班ハ左ノ事務ヲ掌ル

(一) 宣傳啓發ニ關スル事項

(二) 講演會、演說會等ノ開催ニ關スル事項

(三) 講師、辯士ノ派遣斡旋ニ關スル事項

(四) 其他一般宣傳ニ關スル事項

八 實踐班ハ左ノ事務ヲ掌ル

(一) 推薦狀ニ關スル事項

(二) 支那ニ於ケル推薦運動ニ關スル事項

九 企畫室ハ左ノ事務ヲ掌ル

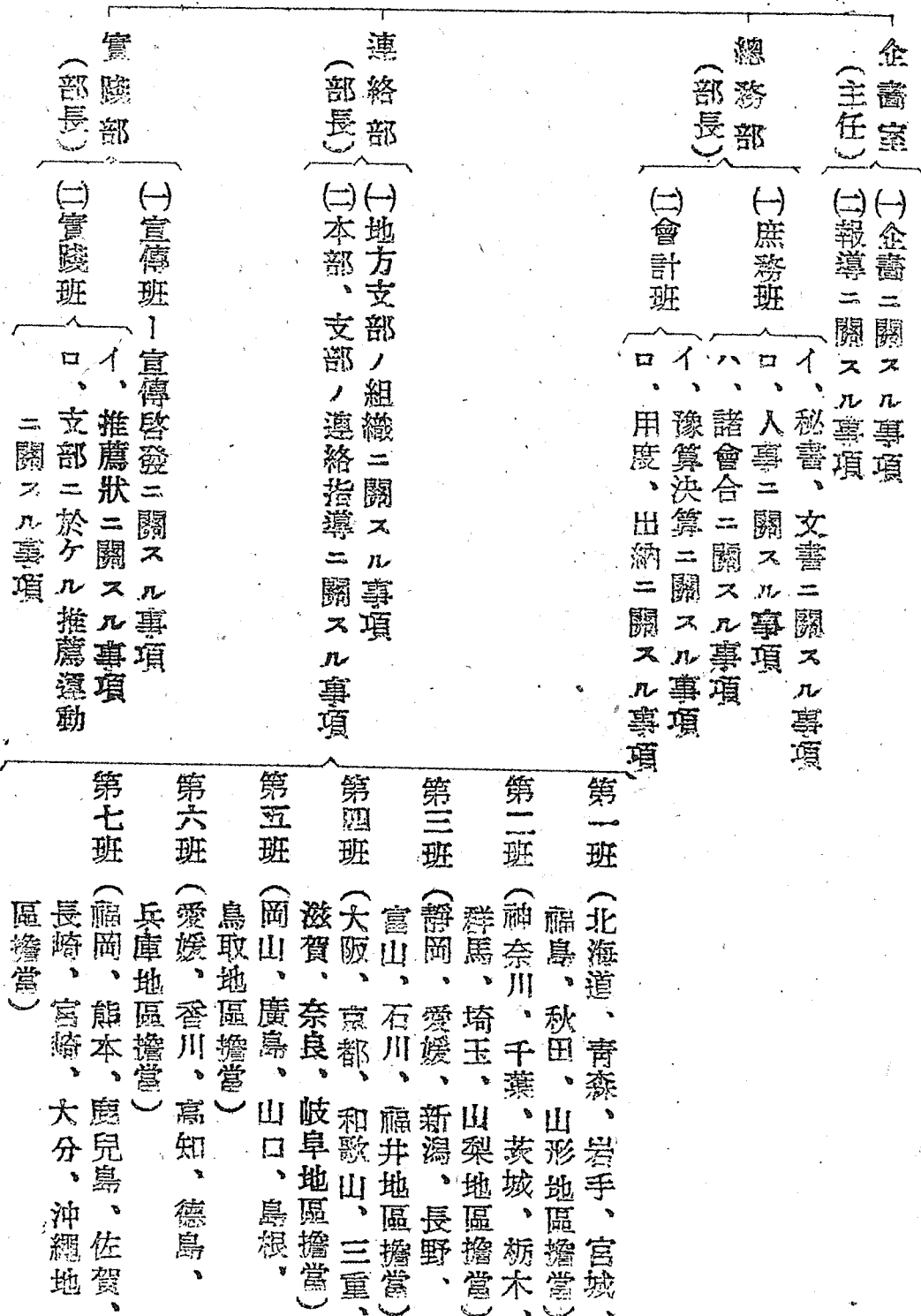
(一) 運動企畫ニ關スル事項

(二) 報導ニ關スル事項

可 各班ニ班長ヲ置ク班長ハ部員中ヨリ事務局長之ニ任命ス  
班長ハ當該事務ノ責任者トス



事務局  
(局長)



服 務 心 得

一 本事務ノ性質ニ鑑ミ嚴ニ機密ヲ守リ言動ヲ慎ムコト

二 本事務ハ何レモ緊急處理ヲ要スルヲ以テ簡潔敏捷ヲ旨トスルコト

三 上司ノ指揮ニ從ヒ事務ノ統制ヲ恪守スルコト

翼賛政治體制協議會

一 幹 事

遠藤 藤柳 作 氏

太田 耕造 氏

瀧 正雄 氏

横山 助成 氏

二 支部結成ニ關スル委員

大 麻 唯 男 氏

岡 田 忠 彦 氏

後 藤 文 夫 氏

伍 堂 卓 雄 氏

下 村 宏 氏

千 石 興 太 郎 氏

永 井 柳 太 郎 氏

末	高	山	藤	平
次	橋	崎	山	生
信	三	達	愛	鈺
		之	一	三
正	吉	輔	郎	郎
氏	氏	氏	氏	氏

(他二一氏旅行中ニ付歸京ノ上交渉ノ豫定ナリ)

## 翼賛政治體制協議會何道府縣支部規約

### 第一條

本支部ハ翼賛政治體制協議會何道府縣支部ト稱シ何市ニ置ク

### 第二條

本支部ハ何道府縣ニ於テ本協議會々則第二條ノ目的ヲ遂行ス

### 第三條

支部長ハ本支部ノ會務ヲ統理ス

幹事ハ支部長ヲ輔ケ會務ヲ掌理ス

本支部ニ事務所ヲ置キ支部長ノ命ニ依リ會務ニ從フ

### 第四條

本支部ノ經費ハ會員ノ負擔及寄附金ヲ以テ之ニ充ツ

### 第五條

本支部ハ昭和十七年四月施行ノ衆議院議員總選舉終了後殘務整理ノ上解散ス

## 支部設置手續要領

一 本會長ハ各道府縣ニ於テ支部會員トシテ適當ト認ムル者（十五名乃至二十名ヲ基準トス）ニ對シ依囑狀ヲ發ス

二 右會員ハ廣ク各界ニ亘リ國體ノ本義ニ徹シ大東亞戰爭完遂ノタメ翼賛議會確立ノ熱意ニ燃エ人格顯見高ク部分的利害ニ因ハルルトナク信望ヲ有スル者ノ中ヨリ之ヲ選定ス

但シ官吏又ハ其ノ道府縣ニ於テ立候補ヲ豫想セラルモノヲ除ク  
三 支部會員ハ會長ノ指名ニ依ル委員會ノ作成セル原案ニ基キ總會ノ議ヲ經テ之ヲ決定ス

四 本會長ハ支部會員ノ依囑狀ヲ發スルト共ニ支部長ノ指名ヲナス

五 支部設置ニ關シ本會長ハ本會員、其ノ他適當ナル者ヲ其ノ道府縣ニ特派スルコトアルベシ

資料 12 翼賛政治体制協議会名簿

翼賛政治体制協議会支部長氏名及會費數

(昭和十七年三月二十三日現在)

大室

道府縣	氏名	職業地位	住 所	支部會費數
北海道	吉田 貢一	靜内町長 北海道町村長會長	靜内郡靜内町	二二
青森	山田 金次郎	東奥日報社長 翼賛會縣支部常務委員	青森市浦町	一六
岩手	田村 丕顯	子爵 海軍少將 縣壯年團長	西磐井郡一關町	一九
宮城	高水 義人	陸軍中將 翼賛會縣協力會議長	仙台市北一番丁	一八
秋田	片野 重脩	帝國農會副會長 翼賛會縣協力會議長	平鹿郡横手町	二〇
山形	登坂 又藏	米沢市長 翼賛會米澤市支部長	米澤市桂町	一九
福島	大原 八郎	病院長 醫學博士 縣壯年團長	福島市大町	二〇

茨城	渡辺 覺造	貴族院議員 医学博士	水戸市裡五軒町	一五
栃水	渡辺 志郎	村長 縣會議員 鹽竈會縣支部庶務部長	河内郡城山村	一七
群馬	山口 權平	海軍大佐 鹽竈會縣支部常務委員	群馬郡六鄉村	一五
埼玉	岩田 三史	貴族院議員 医学博士 鹽竈會縣支部常務委員	川口市本町一丁目	二一
千葉	永井 準一郎	千葉市長 鹽竈會縣協力會議長	千葉市稻毛町三丁目	一六
東京	平生 鈞三郎	貴族院議員 前文部大臣	東京市小石川區 小日向台町二ノ一八	二六
神奈川	中村 良三	海軍大將	横浜市鶴見區 東寺尾一ノ五五九	二〇
新潟	白 勢量作	新潟商工會議所會頭 鹽竈會縣支部常務委員	新潟市本町通八番町	一五
富山	金 晒 又左衛門	富山商工會議所會頭 前貴族院議員	富山市袋町	一七



滋賀	三重	愛知	静岡	岐阜	長野	山梨	福井	石川
西田 太一郎	和 渡 豊一	坂 井 徳太郎	柴 山 重一	鳥 居 百三	倉 島 富次郎	名 取 忠彦	野 村 勘左衛門	千 田 規次郎
縣医師會會長 賀賀會縣支部顧問	海軍中將	陸軍中將 縣壯年團長	陸軍中將	陸軍少佐中將	陸軍少將 青少年團副團長	翼賛公縣支部組織部長 縣壯年團長	縣教育會副會長 翼賛會縣支部常務委員	陸軍少將 縣壯年團長
栗田郡大室村	東京市 世田谷區玉川尾山町七五	名古屋市東區白鰐町一九	磐田郡、餓井町	岐阜市大宮町	上田市北大手六三九八	甲府市山田町	坂井郡兵庫村	金沢市長町三番町
一八	一四	二〇	一六	一五	一七	二〇	一五	一五

三

廣島	岡山	島根	鳥取	和歌山	奈良	兵庫	大阪	京都
重岡信治郎	石原紀一	山崎定道	米原章三	藤田順	松井貞太郎	川西清兵衛	小倉正恒	稻垣孝照
海軍中將 翼賛會縣協力會議長	陸軍少將 翼賛會縣支部常務委員	縣會議長 翼賛會縣支部顧問	貴族院議員 翼賛會中央協力會議員	陸軍主計中將	貴族院議員 翼賛會縣協力會議長	会社重役 元神戸商工会議所会頭	貴族院議員 前大藏大臣	陸軍中將 翼賛會京都市協力會議長
廣島市白島中町	岡山市阿田屋敷	那賀郡今市村	八頭郡智頭町	和歌山市宇須	奈良市橋井町	神戸市須磨區 東細澤町一五	神戸市須磨區西垂水 五色山町一八一七	京都市上京區 小山下内河原町
一五	一七	二二	一五	一六	一七	二〇	一七	一五

四

熊 本	長 崎	佐 賀	福 岡	高 知	愛 媛	香 川	徳 島	山 口
赤 星 典 太	岩 井 敬 太 郎	高 取 盛	中 牟 田 辰 六	野 村 茂 久 馬	鳥 谷 章	十 川 登	大 久 保 義 夫	内 田 重 成
前知事 会社重役 翼賛会縣支部常務委員	平戸町長 翼賛会縣支部常務委員	杵島炭砒社長 翼賛会縣協力会議長	陸軍少將 翼賛会縣協力会議長	貴族院議員 会社重役	陸軍中將 翼賛会縣協力会議長	陸軍主計少將 縣壯年団長 翼賛会縣支部組織部長	股町長 全國町村長会副会長 翼賛会 中央協力会議員	貴族院議員 縣教育会長
熊本市手取本町	北松浦郡平戸町	唐津市城内 二五〇	福岡市烏飼町三丁目	高知市大川筋	温泉郡道後湯之町	高松市昭和町	美馬郡脇町	下関市清水
二〇	二〇	一五	二一	二〇	一六	一五	一六	二〇

五

大分	麻生益良	賣族院議員 会社重役	玖珠郡東飯田村	二〇
宮崎	新原貞次郎	陸軍少將 縣教育会副会長	宮崎市玄島通	一四
鹿兒島	坂口壯介	縣會議長、縣畜産聯合會長 翼賛会縣協力會議長	肝屬郡根白町	一七
沖縄	平良辰雄	縣翼賛壯年團長	那覇市前島町一三三一	

六

備考

- 一、支部會員數ニハ支部長ヲ含ム
- 二、空欄ハ未定ノモノ
- 三、本表ニ於ケル支部會員合計數ハ七八八名



【資料13】  
各区委員長に対する内示

各区委員長に対する内示

候補者銓衡の條件以外特に左記各項につき留意せられたる事

イ 國體意識を晦冥ならしむる虞なきや

ロ 聖戰完遂の舉國態勢を紊すが如き言動なきや

ハ ボスの手先となる虞なきや

ニ 素りに理事者に強要干渉する虞なきや

ホ 地位を利用して利權を漁る虞なきや

ヘ 職業議員に非ずや

ト 公私生活に於て指彈を受くる虞なきや

立候補の意思を有し又は候補者として推薦せらるゝ見込の者は何れも本會々員

各区委員長、委員を辭退せられたる事

【資料14】  
情報視察員名簿

本部会員

堀切 善次郎（会長）  
赤木 朝治  
井田 盤楠（男爵）  
入江 種矩  
大塚 榮吉  
岡田 周造  
岡田 豊二  
岸田 国士  
桑原 昌康  
桜田 壬午郎  
膳 桂之助  
田中 郁（九）吉  
高岡 宣次  
鶴見 左右吉  
中野 金次郎  
扶間 茂  
廣瀬 久忠  
藤沼 庄平  
藤山 愛一郎  
藤井 丙午  
二荒 芳徳  
船田 中  
松永 東  
三輪 膳兵衛  
築田 鈺（九）次郎  
山内 保次  
吉田 茂  
委員長  
大橋 誠一  
上野 兵松（麹町）  
柳田 涼三（日本橋）  
伊藤 琢郎（京橋）

瀧 正雄（麻布・貴族院議員）  
原 常成（四谷・陸軍中將・市協力会議員）  
緒方 勝一（牛込・陸軍大將）  
石渡 莊太郎（小石川・貴族院議員）  
牛島 実常（本郷・陸軍中將）  
向山 軍二郎（浅草）  
鈴木 金之介（本所）  
小関 虎三郎（深川）  
荷見 安（品川・産組中央金庫理事長）  
西郷 徒徳（目黒・侯爵）  
安満 欽一（陸軍中將・在原）  
下村 宏（大森・貴族院議員）  
真鍋 十蔵（蒲田・貴族院議員）  
大場 信統（世田谷）  
宮田 光雄（渋谷・貴族院議員）  
小原 直（中野・貴族院議員）  
大森 佳一（杉並）  
内山 新平（瀧野川）  
福岡 秀而（荒川）  
厚東 禎造（王子・陸軍少將）  
中村 四郎太（板橋・陸軍少將）  
横山 佐助（足立）  
眞田 千秋（向島）  
溝上 作民（城東）  
水野 熊雄（葛飾）  
中川 金蔵（江戸川・陸軍少將）  
大河内 正敏（下谷・貴族院議員）  
東京選出代議士  
稿本 祐幸  
中島 彌團次  
長野 高一  
駒井 重次  
川口 壽（九）  
頼母木 眞六  
渡辺 善十郎  
今牧 嘉雄  
眞鍋 磯十

瀧澤 七郎  
四王天 延孝  
大橋 清太郎  
牧野 賤男  
中村 梅吉  
前田 末藏  
山田 清  
支部委員  
多久 安信（麻布・元東京市助役）  
是松 準一（小石川・翼壯本部長）  
佐野 利器（小石川・工傳）  
鈴木 覚一（小石川）  
日暮 豊年（大森・海洋少年団理事長）  
三島 通陽（渋谷・貴族院議員）  
河村 恭輔（渋谷・陸軍中將）  
柴田 善三郎（中野・貴族院議員）  
山本 鶴一（杉並・陸軍中將）  
黒須 辰之助（杉並・陸軍中將）  
佐藤 直（杉並・陸軍中將）  
菊池 武夫（豊島・男爵・陸軍中將）  
赤間 信義（豊島・元文部次官）  
白石 傳助（豊島・陸軍少將）  
田中 稔（豊島・陸軍中將）  
中柴 末純（豊島・陸軍少將）  
伊藤 精司（牛込・陸軍少將）  
服部 保（牛込・陸軍少將）  
保科 正昭（牛込・貴族院議員）  
長谷川 正道（牛込・陸軍少將）  
東京在住代議士  
安藤 覚  
秋田 清  
上松 鍊磨  
牛塚 虎太郎  
内ヶ崎 作二郎  
小川 綿（九）太郎

大口 喜六  
太田 正孝  
岡田 忠彦  
喜多 壯一郎  
清瀬 一郎  
近藤 英次郎  
小平 権一  
櫻井 兵五郎  
白鳥 敏夫  
中原 謹司  
永井 柳太郎  
眞崎 勝次  
松野 鶴平  
松村 謙三  
松村 光三  
松本 忠雄  
三浦 一雄  
村松 久義  
山崎 達之輔  
蠅山 政道  
天谷 真次郎（陸軍中將）  
秋山 謙藏（国大教授）  
栗飯 原秀（陸軍少將）  
天川 信夫（早大教授）  
赤井 春海（陸軍中將）  
芹沢 敬策（陸軍少將）  
石橋 力次郎（スマトラ協会理事）  
石川 哲（早大教授）  
宇佐川 知義（海軍少將）  
牛島 貞雄（陸軍中將）  
江橋 英次郎（陸軍中將）  
稲毛 金七（早大教授）  
折口 信夫（慶大教授）  
荻洲 立平（陸軍中將）  
小畑 忠良（産報理事長）  
岡部 長景（貴族院議員）  
菅 圓吉（立大教授）  
河村 恭輔（陸軍中將）

香椎 浩平(陸軍中將)  
加藤 咄堂(評論家)  
小栗 一雄(元警視總監)  
葛生 能久  
工藤 豪吉(陸軍少將)  
熊谷 憲一(元翼賛会総務局長)  
桑島 主計(翼賛会東亜局企画部長)  
児玉 政介(厚生次官)  
小島 憲(明大教授)  
小島 政二郎(作家)  
佐藤 犀藏(海軍中將)  
佐藤 清勝(海軍中將)  
佐藤 久間 惣次郎(シヤンピー日本人会長)  
鈴木 春(カ)松(陸軍中將)  
仙波 安藝(陸軍中將)  
田中 胤次(海軍少將)  
田中 元一(陸軍中將)  
田部 聖(陸軍少將)  
高神 覺昇(智大教授)  
式部 欽一(帝國教育会専務理事)  
竹内 謙二(経済学博士)  
谷川 徹三(評論家)  
谷 実夫(陸軍少將)  
高瀬 兼介(国大教授)  
田代 辰之助(コタバル日本人会長)  
谷 壽夫(陸軍中將)  
高島 米峰  
中島 虎吉(陸軍中將)  
中野 登美夫(早大教授)  
中山 蕃(陸軍中將)  
野村 重臣(評論家)  
橋本 盛十郎(陸軍少將)  
原田 二郎(陸軍少將)  
原 泰一(全日本方面委員聯盟理事)  
早川 三郎(元警視總監)  
原 祐三(ダイヤモンド取時役)  
長谷部 昭信(陸軍少將)  
坂田 平八(陸軍少將)  
藤井 新一(早大教授)  
二子石 官太郎(陸軍中將)

深沢 友彦(陸軍中將)  
星 文一郎(陸軍少將)  
松下 元(海軍中將)  
松永 材(国大教授)  
松本 勇平(陸軍少將)  
松本 匠(海軍少將)  
三宅 俊雄(陸軍中將)  
向田 金一(海軍少將)  
兩角 三郎(陸軍中將)  
山口 正源(陸軍中將)  
山上 曹源(駒大教授)  
山田 秀藏  
安井 藤治(陸軍中將)  
吉村 正(早大教授)  
渡辺 良三(陸軍中將)  
渡辺 金造(陸軍中將)  
鷺津 鈔平(陸軍中將)  
和田 龜治(陸軍中將)  
皆川 治廣(元司法次官)  
小林 五郎(評論家)  
菊池 寛(作家)  
谷口 元治郎(陸軍中將)  
唐島 基智郎(陸軍中將)  
松井 七夫(陸軍中將)  
土岐 章(貴族院議員(ママ))  
阿部 賢一(経済学博士東日副主筆)  
鮎澤 巖  
井上 貞藏(商学博士日大教授)  
石田 馨  
小野 武夫(農学博士法政大学教授)  
大藏 公望(男爵・貴族院議員)  
大西 一郎  
唐澤 俊樹(前内務次官)  
城戸 權太郎(法政大学教授)  
北岡 壽逸(東京帝大講師)  
末弘 敬太郎(法学博士帝大教授)  
関口 泰(東京朝日新聞論説委員)  
関谷 貞三郎(貴族院議員)  
高橋 雄  
館 哲三

次田 大三郎(貴族院議員)  
林 忠美  
船田 中  
町田 辰次郎  
松井 春生  
安井 英二  
宮川 宗徳(元市厚生局長)  
大竹 虎雄(東商副理事長)  
上原 六郎(元市総務局長関東配電会社理事)  
荒木 猛(元市助役)  
近 新三郎(元市助役)  
市川 清敏  
近藤 操(東日論説委員)  
川西 實(元府知事)  
奥井 復太郎(経済学博士慶大教授)  
大須賀 徹  
岡野 文之助(元市政調査会課長)  
吉山眞棹(元市産業局長・日本ストリート統制会理事長)  
大村 清一(元文部次官)  
宮島 幹之助(医学博士慶大教授)  
新名 直利(元放送協会専務理事)  
穂積 重遠(法学博士・男爵)  
河原田 稼吉  
田沢 義鋪(選挙公正中央連盟理事長)  
塚本 清治(元内務次官)  
中川 望(日本赤十字社)  
山田 準次郎(元内務相衛生局長・中大教授)  
松本 重威(法学博士)  
丸山 鶴吉(貴族院議員)  
山田 わか  
村岡 花子  
生田 花世  
河崎 なつ  
吉岡 彌生  
鮎貝 ひで  
渡辺 とめ  
阿部 静枝  
勝目 てる  
新妻 伊都子

市川 房枝  
山高 しげり  
木内 キヤウ  
高良 富子  
竹内 茂代  
河口 愛子  
千本木 道子  
小林 珠子  
龜山 マツ  
平田 のぶ  
綾井 章江  
竹田 菊子  
大妻 コタカ  
小笠原 嘉子  
村上 秀子  
本田 トヨ  
宮川 静枝  
今井 けい  
澤西 しげ子  
前田 君尾  
山口 みち  
北川 千代  
高橋 千代  
坂本 真琴  
赤松 常子  
帆足 みゆき  
守屋 東  
奥 むめお  
ガントレット 恒子  
有吉 忠一(貴族院議員)  
有本 邦太郎(医学博士)  
井藤 半彌(経済学博士・商大教授市川源三(教育家))  
潮 恵之輔(貴族院議員)  
伊沢 多喜男(貴族院議員)  
伊福部 吉高(評論家)  
今井 登志喜(東大教授)  
大河内 一男(東大教授)  
川原 吉次郎(中央大学教授)  
松原 寛(文学博士・日大教授)

権田 保之助（大原社会問題研究部委員）  
杉本 正幸（経済学博士）  
塚本 清治（貴族院議員）  
圓谷 弘（文学博士・日大教授）  
中澤 辨次郎（日本農村問題研究所長）  
西野入 徳（早大教授）  
長谷川 万次郎（評論家）  
船作 安文  
蓮沼 門三（修養団幹事）  
田中 広太郎（元愛知県知事）  
寛 正太郎  
坪谷 善四郎（大稿図書館長）  
清澤 冽（評論家）



【資料15】  
東京市會議員選舉運動ニ關スル協定事項

東京市會議員選舉運動ニ關スル協定事項

一 演說會ニ關スル事項

(一) 演說會開催回数ハ全期間ヲ通ジテ二十五回以下トスルコト  
但シ共同演說會ハ右回数ニ通算セザルコト

(二) 投票當日ノ演說會ハ開催セザルコト

(三) 演說會場ハ公立學校、劇場其ノ他ノ集會場等アルトキハ成ルベク之ヲ利用シ殊更民家ヲ充ツルガ如キ事ヲ爲サザルコト  
尙公立學校ノ使用ハ候補者間ノ協定(別紙方法)ニ基キ公平ヲ期スルコト

二 文書圖書ニ關スル事項

(一) 選舉運動ノ爲メ有權者ノ發送スル文書ハ成ル可ク合同郵送スルコト

(二) 立候補告知ノ張札及演說會告知ノ張札並ニ新聞紙折込ミノ引札ノ數及規格ハ左ノ制限ヲ超ヘザルコト

イ、立候補告知ノ張札

規格 長サ 一尺八寸  
巾 一尺三寸 以内（曲尺）

ロ、演說會告知ノ張札

規格 前項ニ同ジ

ハ、演說會告知ノ引札

數 一演說會ニツキ三千枚

規格 長サ 五寸二分  
巾 三寸六分 以内

（三）演說會ノ告知ハ前項張札及引札ノ外一切ナサルコト

（四）文書圖畫ノ揭示又ハ貼付ハ可成警察當局ニ於テ斡旋シタル場所

ニ之ヲ爲スコト

（五）期日後ノ挨拶張札ハ選舉事務所ニ揭示スルモノノ外全廢スルコト

（六）名刺ハ全廢スルコト

東京市會議員選舉運動ニ關スル警告事項

一、選舉事務所ニ關スル事項

(一) 違反ニ陷リ易キヲ以テ選舉事務所ハ旅館、待合茶屋、料理店、飲食店、遊技場、貸席、結社、組合、團體等ノ本、支部又ハ事務所等多數人ノ出入スル場所ニハ之ヲ設ケザルコト

(二) 選舉事務所ハ濫リニ之ヲ移轉セザルコト

二、選舉運動者、勞務者ニ關スル事項

(一) 選舉運動者ノ人選ニ注意シ選舉犯罪ノ未然防止ヲ圖ルコト

(二) 選舉運動者ハ數ノ制限内ト雖モ濫リニ任免ヲ行ハザルコト

(三) 選舉運動者若ハ運動者タリシ者ハ投票立會人トセザルコト

(四) 勞務者ニ選任スル者ハ單ニ機械的勞務ヲ提供スルニ止マル人夫、

小使ノ類ニ限ルコト、シ地方有力者ヲ選任セザルコト

(五) 勞務者ヲ選任又ハ解任シタル時ハ其ノ都度氏名及住所並ニ選任解任ノ年月日時ヲ一定ノ帳簿ニ記入シ置クコト

(一) 演說會ハ警戒警報發令中夜間ハ開催セザルコト

(二) 夜間演說會開催中ト雖モ警戒警報發令アリタル場合ハ直ニ散會スルコト

尙此ノ場合候補者出演前ナル時ハ演說會ノ回數ニ算入セザルコト

#### 五 文書圖書ニ關スル事項

(一) 演說會告知ノ爲揭示セル文書ハ當該演說會ノ期日經過後ハ他ノ

掲出者ニ於テ之ヲ撤去スルモ差支ヘナキコト

(二) 張札ノ貼付ハ地上十二尺以下ノ箇所タルコト

(三) 承諾ヲ得ズシテ他人ノ工作物等ニ張札ヲ爲シタル場合ハ該工作物ノ所有者又ハ管理者ニ於テ之ヲ剥ギ取ルモ差支ヘナキコト

(四) 電柱其ノ他法令ニヨリ禁ゼラレタル場所ニ貼付シタルモノハ警察官ニ於テ剥ギ取ルモ差支ヘナキコト

(五) 選舉運動ノ爲揭示若ハ貼付シタル文書圖書ハ選舉期日經過後必

ズ責任者ニ於テ之ヲ撤去スルコト

六 選舉運動ノ費用其ノ他ニ關スル事項

(一) 選舉運動ノ費用ハ可成節約スルコト

(二) 印刷費用等ヲ明確ナラシムル爲印刷所名、印刷物ノ種別、枚數、價格等ヲ一定ノ帳簿ニ記載シ置クコト

(三) 自動車ハ可成使用セザルコト

府中町翼賛壯年團結成要綱

翼賛壯年團結成付テ、別紙翼賛壯年團基本要綱ニ據ル、外本要綱ニ基テ、結成スルコト

一、基本ニ關スル事項

1. 同心團結ヲ基調トシ、各々其ノ地域職域ニ於テ匡道實踐ニ挺身スル組織ヲラレムルコト
2. 主而壯年ノ自發的翼賛賛意ニ依リテ、結集スル同志精銳組織ヲラレムルコト

二、團員ニ關スル事項

1. 原則トシテ二十歳以上四十五歳迄ノ男子青年壯年トスルコト、但シ事情ニ因リ止メ得ル場合ハ五十歳迄ヲ認ムコトヲ得（後日具テ付テハ年令ノ上限ヲ附ヤス）
  2. 推進員ハ本來ノ性質ニ鑑ミ、總テ團員トスルコト
  3. 團員銓衡ノ基準ハ左ニ據ルコト
    - (イ) 思想信念ニ於テ團體ノ主義ニ徹シ、苟モ衆人ノ疑惑ヲ受ケルガ如キ者ニ非ラズ
    - (ロ) 個人的職業的團體の利害ニ因ハレムコトナク、國家目的ノ達成ニ率先躬行スル者タルコト
    - (ハ) 口舌ノ徒ニ非ズレテ日常地域職域ニ於テ實踐ヲ通ジテ他ニ重シキ郷土ノ信望篤キ者
    - (ニ) 現ニ政治團體ニ加入セザル者タルコト
- ホ、本町ニ於テ常時本團ノ實踐ニ當リ得ル者ニシテ政治犯ヲ除ク前科等ナキモノ

三、編成關之事項

1. 郡町村團綜合的系統組織タニシムルコト
2. 町團ヲ單位團トシテ以下ニハ分團、班等ヲ設ケサルコト

四、役員銓衡ニ關スル事項

1. 役員ハ實質的指導力ヲ有スル者ヲ簡拔シ、從テニ勢力均等主義、敵ヲニ陷ラザルコト
2. 本町支部長ハ當該團翼賛壯年團ノ名譽團長タルコト

五、團結手續ニ關スル事項

1. 郡翼賛壯年團、結成準備委員會  
郡支部長ハ、郡總團準備委員會（以下準備委員會ト稱ス）ヲ設置スルコト  
（準備委員會、構成ハ左ノ者トシ、郡外ノ町村數二十五ヲ加ヘタル員數以  
内トスルコト）

郡支部長

郡支部常務委員

敬言察署長

翼賛壯年團、結成準備委員會連絡委員

郡内各町村有志青年

鄉軍分會長

若干名

若干名

若干名（各町村ヨリ一各）

青年團關係代表者

例へば青少年團 大日本壯年團 聯盟 農林  
協同建設 同盟 農業 增産 推進隊 苗業  
報國推進隊 産業報國會等 若干名

民間有識者

若干名

(四) 準備委員會取扱事項

○團則ニ關スル件

○團員則ニ關スル件 地事情ヲ考慮シ上團則ヲ決定スルコト

○役員銓衡ニ關スル件

役員候補者ヲ決定シ速ニ府省長宛別記様式、役員候補

者名簿ヲ提出スルコト

○町團結成指導ニ關スル件

單位團、結成ニ付連絡指導上周到ヲ期スルコト

(二) 其他必要ト認メタル事項

(五) 町團結成準備委員會

(一) 町支部長

町常務委員

若干名



敬告 警察署長 又は 代ルベキ者

町内 會長

若干名

郷軍分會長

青壯年團關係代表者

即 準備 委員会

有志 青壯年

若干名

(5) 準備 委員会 取扱 事項

(4) 團則ニ關スル件

団進十則ニ其ニキ土地事情ヲ考慮シ上團則ヲ決定スルコト

(3) 役員候補者 銓衡ニ關スル件

役員候補者ヲ決定シ速ニ府團長宛別記様式、役員候補者名

ハ列シ提出スルコト

(2) 役員候補者 銓衡ニ關スル件

地域的ノ役員候補者ハ町内有志 青壯年並ニ推進員ニ同表ヲ推

薦セシメ其中ヨリ適格者ヲ決定スルコト但シ其ノ數ハ推進員ノ約

團ハ青壯年團、大日本青壯年團聯盟、  
農林快同建設同盟、農林協進會、  
推進隊、西農業教團、推進隊、産業教團、  
若干名

五倍トスルコト

各種団体より多量に団体候補者ニ付ハ特ニ所屬団体ノ意見ヲ尊重シ其団体代表より推薦セシムルコト団体候補者ノ推薦ニ副記  
様式ノ推薦書ヲ添付セシムルコト

(二)役員並ニ団体員候補者銓衡委員會設置ニ關スル件

銓衡委員會委員ハ準備委員中町支部町常務委員  
警察署長又ハ之ニ代ルヤ者ノ推進黨員有志青年壯年及其他ノ者  
準備委員會ニ於テ銓衡シ委員ノ數ハ七名以内トスルコト

其其必要ヲ認メタル事項

一 役員並ニ団体員候補者銓衡ニ就テ注意事項ノ項

1. 本団ノ団体員ニハ大日本青少年団ノ団体員タルニ一歳乃至二十五歳ノ者ヲ加  
ハスルコトヲ得

2. 役員ノ指名ニ付テハハ團準則ノ示スト工ザルモ其又ハ地方議會議員  
役員トスル場合ニ於テハ顧問ノ承認ヲ要メスルコト

3. 役員及団体員ノ資格ニ付テハ要綱ニ示セリ通リナルガ政治犯ヲ除ク前科  
ヲ有ス者ノ解釋ハ左ニ依ルコト

政治犯ニ雖モ現ニ檢事控訴中又ハ審理中ノ者ハ之ヲ除ク  
昭和十五年以降町會議員選舉年達及ハ其ノ輕重ヲ問ハズ之ヲ除ク

二、前科ニシテ政治犯以外ノモノハ嚴重ニ之ヲ審査シ特別ノ事情ナキ限

リ可成之ヲ除クコト

本刑ノ執行ニ于テ期間満了ノモノハ支障ナキモ追徴又ハ附帯ノ判決アリタル者ハリノ情狀斟酌シ上決定スルコト

ハ素行不良ニシテ兇角ノ世評アル者ハ除外スルコト

三、前科ト雖モ昭和十七年二月十八日公布ノ勅令第九十四號（復讐令）ニ

依リ公民権ヲ復権シタル者ハ此ノ限ニ非ズ但シ昭和十七年二月以降ニ再

四罰金以上ノ刑ニ處セラレタルモノハ之ヲ除クコト

四、關係警察署トノ連絡

ヤ直下各級警察署（駐在所ノ設置アル町ニ於テハ駐在所）ニ對シハ二

次加増職員壯年団役員並ニ團員銓衡ニ關シ協力別添ノ如ク依テ

運用レタキコト

五、参照通牒其他

量表ニ配布サル本部通牒

昭和十六年十月八日

組地才八六號

基本要綱ノ説明

昭和十六年九月廿六日全國組織部長會議ニ於テ扶間組織部長

組織方針ノ説明

昭和十六年九月廿六日全國組織部長會議ニ於テ小泉

地方部長ノ説明

地方部長ノ説明

大政翼贊會地方部長殿  
大政翼贊會東京府支部長殿

推  
進  
員  
報  
道

昭和十七年二月三日

東京市世田谷区  
府中  
町  
支部報道責任者  
大室政右

一、賀美賛会（支部ヲモ含ム）に對する一般の動向  
佳節多忙時に比較し一般には賀美賛会に對し極めて無関心  
であつたが、最近では、壮年団及び選擧対策への期待  
から、一部ではあるが、漸次注目されつゝある。  
然し本地方に於ける賀美賛会の活動が、ポスター以外には  
殆んど見られぬので、積極的な宣いは寄せられてゐない。  
二、賀美賛会劇団部者の活動  
現状に於ては殆んど見るべきものなし。  
近月（三月十日前後）第一回推進員常会開催の予定にして、  
本常会開催後の活動は期待されてゐる。

【資料19】

團運営体験発表会要項

昭和十八年三月十二日

於産業組合中央會講堂

團運営體驗發表會要項

東京府翼賛壯年團本部

次  
第

一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、
開	懇	體	團	祈	宮	開
		驗	長		城	
		發	挨		遙	
會	談	表	授	念	拜	會

# 團運營體驗發表會要項

——一八・三・一二日 於產業組合中央會講堂——

## 一、發表者及題目

### 午前の部

- |                     |             |       |
|---------------------|-------------|-------|
| 一、團長の訓示を体して         | 麴町區團副團長     | 本田秀行  |
| 二、團運動展開に顧みて         | 南郡由木村團長     | 吉田源太郎 |
| 三、委せ、議れの合言葉で        | 梁川區團副團長     | 後藤直雄  |
| 四、村民の健康問題と巡りて       | 南郡元八王子村團副團長 | 堀修一   |
| 五、翼賛自治体制の確立を目指して    | 立川市團長       | 紫野莊三郎 |
| 六、健康、生産、貯蓄の増強を基調として | 西郡氷川町團長     | 島崎巖   |
| 七、生産増強と中軸として        | 大島差木地村團總務   | 佐伯忠夫  |
| 八、文書活動を通じて          | 王子區團文書活動主任  | 北島義彦  |

## 午後の部

- |                  |           |       |
|------------------|-----------|-------|
| 一、翼賛一家体制の確立を目指して | 澁谷區團總務    | 須山岩松  |
| 二、翼壯塾の開設に就て      | 北郡田無町文化部長 | 保谷興四郎 |
| 三、分團活動の強化を期す     | 荒川區團總務    | 徳武行爾  |
| 四、指導者の錬成を中心に     | 八丈島團長     | 浅沼勤   |
| 五、尊皇敬神の楔行事を通して   | 大島元村團副團長  | 大島正二  |
| 六、團員の錬成を主としたる運営  | 西郡五日市町團長  | 山下新平  |
| 七、実践組織の強化を念願として  | 八王子市團副團長  | 鈴木龍二  |
| 八、集團錬成を基盤に       | 北郡東村山町團總務 | 肥沼武比古 |

## 二、發表表要項

團長の訓示を體して

麹町區翼賛壯年團副團長 本田秀行

麹町區は畏れ多くも 宮城を繞る一帯の地域であり靖國神社の鎮座ま



します地である。そしてこの聖域に最も相應しくも我團長井田磐楠男爵は國體の本義の闡明に畢生の努力を傾注された方である。こゝに本區團運營の根本的性格は存する。團長は分團結成式の折に、「出師の表を讀んで泣かざる者は人に非ずと古來言はれてゐるが、余は恐れ多いことながら宣戰の大詔を拜して、

「帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ」に至つて感泣せざる者は日本人に非ずと申上げたい。我々壯年團員はこの聖旨を体して蹶然起つて大政の翼賛に挺身すべきである。不許釐酒入山門、我々は同志精銳である。この覺悟なき方は唯今速刻此の會場から退席して貰ひたい。」と説かれた。

この烈々たる訓示が我區團の性格を決定してゐる。この訓示によって我々は翼壯の團員としての思想信念に缺くところなきや否や、「大君のへに生を享くる者としての實踐に不十分なる所あらざるかを常に反省し行動しなければならなかつたのである。そして團の運營は此の線に沿ふて行はれてゐる。次にその具體的な点について述べる

## (一) 思想

(イ) 現下の思想問題について綾川武治氏にお願いして詳細なる説明と、  
團員のこれに對處すべき道の指導を受けた。

(ロ) 敷島の道 御歴代の 天皇の大御心を拜し奉ること、古今の忠臣  
烈士の心境を端的に知るには敷島の如くものはない。そして自  
ら和歌をつくることによつて、自己の信念を益々堅くすることの大  
切であることを指導された。これは三井甲之氏等に三田御願ひした。  
(ハ) 歌披講に於いて行はるる朗唱指導、我々が御製御歌に自己流の曲  
節を附して奉唱することは恐れ多い。そこで藤枝男爵に御願ひして  
三田實施した。

(ニ) 作法 坐作進退の節度に適ひ、拜禮其の法に従ふことは、形より心  
を正すものであり、指導者としての品位をつくるものである。この  
意味で鍊成會毎に作法の指導を行つてゐる。

(ホ) 茶道 計畫中である。簡素な生活殊に戦時生活の在り方を導き日本  
的生活の深さを味はんとするものである。

(二)

## 實 踐

(イ) 團行事 從來祝日・大祭日は日曜と同じに休養日として一般に考へられてゐたのは遺憾なことである。我團は特別の行事はこの日に行ひ皇國の彌栄を壽ぎ 天皇歸一の精神を更に深からしめることにしてゐる。

(ロ) 浴場道德の確立 目下立案中であるが、その目的は混雜の緩和といふ点に局在するのでなく、浴場を襖場とする精神を起したい爲である。日本人の入浴を一種の襖行と考へて、一日の汗と垢とを流し、明朝 宮城を遙拜し、祈念をこらすための前提條件と考へて出發したいのである。

(ハ) 分團事業一、二、各分團も團長の意志を体して地域的にいろいろの實踐をしてゐる。夜警を行つてゐる分團は、單に火災防止といふ點に止らず、宮城に近い地域で火災を起すことは恐懼に堪えないといふ精神でやつてゐる。又町内清掃を行つてゐる者は聖域の汚れることを虞しんで清めるので單なる郷土美化ではない。

以上すべて思想信念の確立といふ團長の精神の具現化が團運営の中核となつてゐる点を述べたのである。

## 團運動の展開に顧みて

南多摩郡翼賛壯年團長 吉 田 源 太 郎

### 一、團の生ひ立ち

由木村は東西に長く山に圍まれた純農村で一般の氣風も純朴温健にして田畑も多く方法宜しきを得れば自給自足が出来、各部面とも向上發展の餘地は相當あるのであるが、文化的施設に恵まれぬ無醫村であり、利己的非協力的の所も多く、新舊の思想對立し、且つ時局の影響を受けて農業に専念するものも漸減の趨勢に在るのである。

本村壯年團は青年學校擴充を巡る村長問題に端を發し、近衛新体制聲明に呼應して結成され、大日本壯年團聯盟の一として發達し今日に及んで居る。

## 二、團運動の展開

平素は農村の常として政党的色彩も認められぬが、何か一つの事件起れば必ず對立する傾向今猶存續するので本團では先づ村の地域的政黨の對立を解消し、村治、文化、生活の各分野に亘つて翼賛一家体制の確立を念願して、(一)村常會と關聯して團の常會を開設すると共に村議を始め各種團體幹部と本團幹部との連絡懇談會等を催し、村會議員等の選舉に際して翼賛選舉の貫徹に最善を盡し、牛歩的乍ら翼賛村治新体制を確立せしめつゝある次第である。

次に生産力の増強こそは決戦に決戦を全勝に導く鍵であるので、村の鉄骨實踐組織を以て任ずる我等翼壯は團の総力を擧げ生産の増強に邁進することに決し、増産計畫を個人経営は勿論のこと、共同耕作協同經營へと推し擴げて之が實現を圖ると共に他面配給消費の合理化を期するため村に配給委員會等の設立を計り戦争生活實踐の徹底を促進してゐる。

文化厚生方面では取敢えず無醫村解消の運動を標的として、村立診療

所の設置と國民健康保險組合の開設を實現した次第である。

### 三、一ヶ年の成果を顧みて

我等は皇國稱榮の礎んたる我が村の興隆を目指して、團精神を發揮し村の捨石となり、椽の下の方持的存在として、村當局者の善政が実行し易い様に瞻立をなしつつあるのであるが、十分の成果を收め得ざるのを遺憾としてゐる。

今後一層人事の更新を断行し適材を適所に配置するに非ざれば國家の要請する高度國防國家建設の一翼としての村の更生發展は望むことが至難である。これが爲には翼壯自体の鍊成を通し、より強い同志結合を圖り、来るべき農業團體結合を期として、村に於ける指導的地位に在る重要な役員を善良有爲なる團員を以て獲得し、本村の御維新を行はねばならぬと決心して居る。

任せ。議<sup>ま</sup>れ<sup>は</sup>の合<sup>あ</sup>言<sup>い</sup>葉<sup>ことば</sup>で

深川區翼賛壯年團本部部長後 藤 真 雄

## ○組 織

七十三ヶ分團、三千名の團員を擁する深川區團は、運営上、その組織に於て相當の工夫が必要とされたのである。七十三ヶ分團を常に、團本部に於て完全な連繫を保つのみではなく、全く同志的結束を固くして行く爲には、その數に於て少し多すぎるばかりでなく、地域的に見て東西約二十六丁、南北約一里一丁の連絡はその徹底を缺く恐れがあり、職業教養、文化の諸點から見ても、総てを劃一的に運営する事は不可能である。そこで約十ヶ分團を單位に、七つの地區に分割、夫々總務一名宛を配し、地區總務の名稱を以て、その地區分團を統率し、團本部は先づ、各地區總務との全く同志的團結をかけた處、幸に、友松團長の人格、識見、徳望の下に全くその目的を達成することを得たのである。即ち、各團員は班長を中心にし、班長は分團長を中心に、更に、地區總務を中心

に、と組織を固めて、團全体の結束を強固にしたのである。

更にこの平面的組織を、組織部、庶務部、連絡部、健民部、鍊成部、扶翼部、文化部、文書部の本部八部制を中心に、各地區健民鍊成主任、扶翼主任、文化文書主任、各分團健民班長、扶翼班長、文書班長を置いて立体的組織網に進め、本部庶務部の下にある調査、人事、計理の各主任、組織部の下にある企劃、充員、教養、事業の各主任との相補的聯繫に於て、立體的相補的組織網を確立したのである。

その間、夫々「まかせ、はかれ」の合言葉で各々其の任に當り、相連絡して、團の運営をはかつてゐるのである。

### ○指導精神と信條

本團では如何なる會合に於ても、必ず左記の朗誦が行はれてゐる。

### 宣　　誓

一、我等ハ皇國臣民タルノ光榮ニ感喜シ、率先奉公ノ誠ヲ效サム  
一、我等ハ團規ニ遵ヒ、同志結盟ノ義ヲ重シズベシ



一、我等ハ帝都翼賛壯年團員タルノ令譽ヲ堅持シ、以テ翼賛運動ノ推進力  
タラム

右天地神明照鑑ノ下ニ之ヲ誓フ

### 翼賛憲章三條

一、和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す。人皆黨有り、亦違  
者少し。是を以て、或は君父に順はず、乍隣里に違ふ。然るに、上和  
ぎ下睦びて、事を論ずるに諧へば、則ち事理自ら通ず。何事か成らざ  
らむ。

一、詔を承けては必謹め。君を則ち天とし、臣を則ち地とす。天覆ひ、  
地載せ、四時順行して、萬氣通ずる事を得。地、天を覆はんと欲する  
ときは則ち壞る、ことを教さんのみ。

是を以て君言へば臣承り、上行へば下靡く。故に詔を承けては必ず慎  
め。謹まずんば自ら敗れん。

一、我に背きて公に向ふは、是れ臣の道なり。凡そ人、私あれば必ず恨

あり、憾あれば必ず同せず、同せざれば則ち私を以て公を妨ぐ。憾起れば、則ち制に違ひ法を害ふ。故に初章に上下和諧と云へるは、其れ亦是の情なる歟。(聖徳太子十七條法)

### 實踐 五條

- 一、禮を以て本とせよ
- 一、公私つねに分明なれ
- 一、賞罰を明かにすべし
- 一、善き事は直ちに行へ
- 一、獨り断すべからず

以上の信條が區團全体に一貫して流れ、時と處とを問はず、常に朗誦せられ、然も各分團を單位とし、其の地區々々に於て、獨自な工夫と創意が行はれ、夫々の特色を持ち乍ら活潑な活動が展開されてゐる。

勿論、相補的立体的組織の下に「まかせ、はかれ」の合言葉に依つて、常に團本部に緊密な連絡が保たれてゐる。

## 翼賛壯年塾（翼壯塾）

昭和十七年十月開設せられた翼壯塾は各分團より一名宛の塾生が入塾し、既に半ヶ年の課程を終へんとしてゐる。来る四月には更に第二期の塾生が入塾し、第一期生、第二期生が四月からの半ヶ年を共に錬成、共に教養と互に練磨し合つて行く事であらう。

塾生は強固な組織網の中に於て、各分團に於ける精銳であり、推進隊であり、實行力に富んだその意氣と熱意は、各分團の組織を倍々強化してゐる。

以上が組織上から見た深川區團である。

## 村民健康問題を巡り見て

元八王子村翼賛壯年團副團長 堀

修 一

元八王子村團の發足の歴史は部落内の青壯年の文化問題を中心として同志の結集がなされ、それが學村的に發展し厚生問題に進展しつゝ、壯年

團運動に、そして大壯聯傘下に組織を持ち無産婆は解消し保健協會の誕生を見、團の基礎は一應整ひ然して翼賛壯年團の現在の基幹は此の壯年團から生れたのであります。

保健施設の完成、殊に診療所建設は實に村團の發足以来の課題であり、活動の目標は厚生問題を中心として爲されたのであります。

其の一は翼賛選舉に對する團の活動であります。厚生問題を舉村的、國家的立場で採り上げ、然も食糧増産に農村生活体制強化に一連性を有つ農村共同責任協力体制確立を眼ざしての厚生問題解決には選舉を通じて眞の翼賛議員の選出を要求し活動を展開したのであります。不幸な事には此の選舉の選出に依つて登場致しました議員は、その大半は期待を裏切つて仕舞つたのであります。

その二は金屬回收と團活動であります。根強い個人主義、物質萬能主義離脱の爲め村の資産家層、指導層への集中協力開眼が團として採り上げられ、量的期待は達成し得られたのであります。指導層の三四は供出物件の藏入れがなされたのではあるまいかと思ひます。

此等の過程を村團として顧みます時に、元ハ王子村團は如何に動かざる原因ありやと探究すると同時に、現段階に於ける國家の重大なる時機に會しまして、一大轉換を必要とする結論に到達し、脱皮がこの一週間前行はれたのであります。

新陣營の性格は政治性の強化であります。人と人の特性のつながりであります。村團としては純正無雜な指導陣營の下に実践活動の中核として働く人と企劃性ある人との結合を求め、無理のない取り付けがましくない、新目標を着実に處理出来得る様、然も翼壯精神を着帶し行運を爲し得る事を斷言致す次第であります。

旧組織に於て第一の缺陷は創造の天地にあって実践する事の出来ぬ役場型翼壯であつたのであります。勢力均衡の上に立つ、或は立たざるを得ない機構の内での活動部面は行政翼賛面のみであります。此の上に立つて運動の全面的展開なくて壯年團運動は不可能と考へます。

村團は旧團長と新團長の見解一致の下に、他團に對し大きな方向と課題を與へ、更新團が發足したのであり、保健問題は單一なる問題として

の採り上げ方ではなく如何なる理由の下に厚生問題が必要であるかを村民の層から共同協力責任の面から動く様指導すると同時に具体化する様實踐を爲しつゝあります。

健康、生産、並に貯蓄の増強を基調として

西多摩郡氷川町團長 島

崎

巖

## 人町の概要

本町は本府第一の山林町にして山林實際面積一万町歩を超へ、戸數一千三百八十戸中の大部分は林業を以て生業とし、團員百二名中林業家は三十五名の多數に及び、理想の林業町建設を使命とし植林を基調としたる木材の増産、薪炭の供出を根幹とし町民の健康増進と戦争生活の徹底を期して貯蓄の増強を計り以て翼賛林業町の實現に一路邁進してゐる次第である。

## 2. 健康増進（國民健康保險組合）

病氣に罹ったが醫療を受けることが出来ないと謂ふ問題は独り個人や家庭の問題ばかりでなく國家としても如何程國力を損じてゐることであらうか。醫療費の支拂に堪へないが爲に速に治癒し得べき傷病も治癒せず、速に恢復し得べき健康も逆に之を悪化させて了ふ様な者も少くない実情にある。國民健康保險制度の趣旨徹底をはかり「共同の力」と「平素の用意」のために團員協力して町民悉く喜んで健民健兵に邁進する様努力してゐる。

## 3. 生産の増強

農村、林業町としての特色ある生産の増強に向つて、團員は各種團體に一層の協力を爲し將來は森林工業の計畫的建設をなすべく、今よりその基礎を固めつゝある次第である。薪炭供出、供水運動、農産物の増産等何れも國策線上の喫緊事であり團員は一層の自覺と実践を目指して結束、成績の向上を計つてゐる。

4. 貯蓄の強化

貯蓄強化が公債消化、物價騰貴防止の上から最も重要な國策であるのみならず、實に、我農村氷川町古来の醇風美俗を保持する上から極めて緊要なる問題であることはいふ迄もない。貯蓄は粒々辛苦の農民精神そのものである。團員は皇國農民魂再建の爲の精神鍊成事項として、町民に率先、一層の貯蓄報國をなしつゝ、ある次第である。

##### 5. 結 び

氷川町独自の傳統と性格の上に新時代精神を培養し、運営指定團として飽迄自主的創意性を尊重し先づ、團の組織強化、團員の訓練を通じて逞しき企劃力と動員力とを發揮し、一課題の解決を更にその延長線上に次々と補充せんとするものである。眞に負荷の大任を果すべき強固なる意志と實踐力とをもつ次代担當者の鍊成と、計畫ある植林對策、それと併行の木材工業の伸展とは將來目標の重要部分である。



## 文書活動を通じて

東京市翼賛壮年團企畫室委員

北

島

義

彦

王子區翼賛壮年團文書活動主任

昨年四月吾々が王子區翼賛壮年團の結成をして出發するに當り、鐵則として誓ひ合つた言葉は先づ第一に

「言葉より實行によつて祖國日本への忠誠を示せ」

云つたことはやつたことにはならぬ、どんな小さいことでもやることが尊いのだ。と云ふことであつたのである。

爾來一年！いろく<sup>と</sup>やつてきた私共として今考へてみても、その信條には變りなく、むしろ愈々益々その必要にこそ迫られておるのであつて吾が王子區の五千團員が一人残らず翼壯精神となり、更に進んでは全町會員が、全職域人が眞の日本人になることのためにする運動である以上、その文書は意味が徹底し最後の一人迄が納得出来るやうに書くといふことが最も大切な文書活動の要素であると考えざるものであります。本人にもわからぬやうな熟語を使ひ得意になつておる。むづかしく書いた文書はいくらでもある。少くとも國民運動としての翼壯運動が自己満

足的な一人よがりの運動、指導の押賣的、一方的なカラ廻り運動としてのそれであつては断じてならぬのである。

そこで王子區の文書活動は、手や頭で書くといふ考へ方ではなく常に足で書くのだといふ精神で、勉めて平易な、時には幼稚で笑はれるやうな文書を以てすることに勉めておる。

以下二、三過去に行つた例を書き添へ御参考ともなうは私共王子區翼壯の最も光榮と存するところであります。

### 講演會通知の序文

可 赤ちやんが泣く、赤ちやんが泣くには泣くだけの理由と原因とが必ずあるものである。

その赤ちやんの大聲をはりあげて訴へる、それが何であるかも探求せず、たゞ夢中になつてヒステリーを起すお母さまがあつたとしたら、

それは良妻ではあるかもしれぬが賢母とは云ひ難いのである。

それと同様のことで、ものの起り、事件のボツパツ、これ古今を通じて一貫したる理由と原因と環境と條件とを兼ね備へておるものであり

ます

今の日本の目標は勝つことだ!!

勝つために起ってはならぬ一切のことに向つて、吾々は國民の一人として常に反省し、警戒し、防衛せなければならぬ義務と責任とが負はされて居るのであります。

「新しき出發、新しき芽エへは、反省のみにのみ生ると。より大いなる出發、より大いなる芽生へは、より大いなる反省の中にのみ生れるものである。」

國民總反省の秋!!

(以下省略)

次は貯蓄増強に使用した壁新聞

### ◆我等の誓ひ

頼まれて、イヤとは云へぬが日本人、しかも

二三億の貯蓄戦!!

大藏大臣自ら王子區に出張せられてお話されてのお願です

あと一息だ!! あと一押だ!!

町會長に協力し

町會員に率先し

婦人の力を動員し

區の常會で決定した

◇貯蓄額まで持って行かう

二三〇億を突破しやう

◇銃後の義務を果しませう

頑張れ!! 團員!!

ハリキレ! 區民!

買溜めしませう國債を!

昭和十七年十二月八日（大東亞戰爭一週年記念）

王子區翼賛壯年團

最後に付け加へ申上げておきたいことは、やはり率先垂範と云ふことである。どんなに立派なよいことでも文書に、講演に指導者が如何に巧にそれを宣傳し、稱へても指導者自らが率先し実践に移してみせない限りは無駄である。

その點吾が王子區の翼壯は実行することに鉄石の如き意志を持たれた内田團長を戴き、又總務には三十代から四十代の少壯氣鋭の精銳が配されておき實に理想的な團運営がなされつゝあることを多少自慢して語る事が出来ると思ふ。開會十分前集合の如きことも、先づ團長が實踐した、そして總務が嚴守した、昨今では各分團とも各分團長のよき指導下に固く実行されておる。

これ偏に上級團幹部諸兄の指導よろしきを得た賜と感謝しておる次第である。  
（終り）

羽翼壯塾の開設に就て

北多摩郡田無町團文化部長 保谷 與四郎

(一) 田無町團概要

一、位 置 北多摩郡田無町

新市内に保谷町と隔て、板橋區石神井に接し新宿青梅街道と西方約四里（十六軒）

一、交 通 省線高田馬場駅連絡西武線 新駅あり省線中央線武藏境駅

連絡西武バス田無駅

一、創 立 昭和十七年三月十五日

一、團員數 二九七名（創立當時）現在三〇四名

内 訳 農 一六六 商 一〇九 官公吏 一七

其他 五

一、役 員 名譽團長 一 團長 一 參與 一六

副團長 二 總務 七

一、運 營 報 告

幹 事 一 二 部 長 七 副 部 長 七  
分 團 長 一 〇 副 分 團 長 一 〇

(イ) 昭和十七年四月三十日衆議院議員選舉及昭和十七年五月二十一日執行の町會議員選舉に當り其の重大性に鑑み違反並棄権の防止等之に啓蒙運動と翼賛選舉貫徹の爲め常會を開催指導に努む

(ロ) 七月十三日より一週間全國的に戰時國民防諜強化運動實施に當り文化部の指導に依り各部落常會に於て之が徹底に盡力す

(ハ) 輸送力確保に對する協力として不要不急の旅行を自肅すること  
自用荷物の輸送等を抑制する様常會に於て懇談すると共に七月、十月の二回に涉り田無駅に於て乗降車指導を爲す

(ニ) 大詔奉戴滿一週年ノ十二月八日午前五時曉天動員を行ひ田無神社に參集、大東亞戰爭必勝を祈願を行ひ長期戰に對する團員の覺悟、同志の結束を固める宣誓を行ひ、終つて由無國民學校迄國旗を先頭に大行進、郷軍分會と銃劍術鍛鍊會を開催（參戰員二三一名）

## (二) 翼壯塾の開設

イ 趣旨

刻下の急務たるは萬民翼賛体制の確立にあり然るに未だ其の不良分子の世に存在する亦尠からず、依つて茲に翼壯塾を開設し團員の精銳を選抜して塾生となし、肇國の大本に立脚し皇國民たるの自覺に徹し翼賛運動に挺身せしめ以て不良分子の撲滅覺醒を期すると共に將來幹部としての素養を鍊磨せしむるにあり。

ロ 開設  
ハ 塾生

昭和十八年二月十九日  
三十一名

内訳

商	九
農	一
其他	五

最高	四五
最少	二三
平均	二九

年齢



昭和十八年中受講月別時間一覽表

月別 課目	月別												計
	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	一月	二月	
政治	一	一	一					一	一				五
經濟	一	一	一	一	一		一	二	二			二	一二
歴史	一	一		一	一	一	一	二	二	三	一	二	一五
思想	二		一	一		一	一	一	二	三		二	一三
法律	一		一	一				一	一				五
座談	一	一				一	一	一	一	一	一	一	一〇
行事	一					一	一			一		一	五
計	八	四	四	四	四	四	四	八	八	八	二	八	六六

二、役員 名譽塾長、塾長、副塾長二、塾監一、主事二  
理事七

ホ、受講時間 六十六時間（一ヶ年）

ヘ、課 目 政治、經濟、歴史、思想、法律、座談、行事、

（別表参照）

## 一、今後ノ運営方針

イ、國民精神の昂揚

ロ、戦時生活の徹底強化

ハ、興亜運動の推進

ニ、國策遂行への挺身

ホ、國防思想の普及、銃後奉公活動の強化

ヘ、其の他翼賛奉公の實踐に必要な事項

右六項目を目標に直接團員に、或は常會に於て、或は街頭に所謂機關を通し、機會をつかみ翼賛運動に活潑なる活動を展開せんとするものなり。

## 分團活動の強化を期す

荒川区翼賛壯年團總務  
全區日暮里第九ぐらし分團長

徳 武 行 爾

荒川区は人口三十九万六千四百三十五名帝都隨一の人口に又帝都屈指の工場地帯で工業者多く、従来國民運動には比較的経験に乏しい。荒川区翼賛壯年團員數四千四百五名、聯合分團數七、分團數四十五、班數七百七十九にして、本部は本部長の下に庶務、鍊成、企画の三部制とし外に文書活動班及規律訓練班を西翼に抱き、九野團長日頃の訓示「私心を捨て公につけ」の旗の下に火の玉となり、上述の特殊性に顧み、團組織の整備、鍊成、翼賛選挙、規律訓練、皇都清掃、銅鐵回收、配給の是正、闇の調査、等花々しい活動を展開して居る。特に当区團に於ては末端的実践部隊たる分團の活動に力点を置いて盛り上げる力の培養に苦心を拂つて居る。

當区内の各分團は何れ考へず右の趣旨に割つて活潑な運営をしてゐるが府團の指示の儘に日暮里第九ぐらし分團、――省線日暮里、田端間の住宅地帯、

智識階級層の戸数三百四十八戸人口千六百十九名、團員四十三名、班数八一の分團活

動の實際について以下率直に述べたいと思ふ。

一、我ひぐらし分團は荒川区団の四月二日結成直後即ち去年四月十二日結成式を挙げた。式が終つて協議會を開いたところ、茲に二つの問題が投げられた。

(一)は壯年団は何を爲すべきか

(二)はこゝに集つた連れ合は一体どういふ人か。

の問題これであつた。協議深更に及んだが徹底しなかつた。そこで(一)の問題は宿題として考へ抜から。(二)の問題はなるべく會合を頻繁にしやうといふ事に決つた。尚分團の根據地をつくらうといふので町會事務所に椅子と机を備へ、それに日記帳と團員名簿とを置き輪番日直制を施いて團員は一日一人一時間でもこの椅子に腰掛け、町内の困つた問題の萬受所となる事にした。又會合はお互に融け合ふ迄毎日曜早朝七時より四十分間事務所に集合して協議會を開く事に決め、直ちに実行された。

この協議會はお互の切磋琢磨の機會たらしめやうと心掛け次の約束を

した。

1. 思索を練つて眞率簡明に述べろこと

2. 謙虚に聴くこと。

3. 感情に泥まず、末節に流れないこと。

開會前に出席を点呼し、開會並開會共に時間を豫告し、これが時間勵行を先づ第一着手とした。

二次に分團の部制を決定した。全團員の個性調査書を集め又熱意の程度を参酌して十五の班を造り、一人一役主義に準じて部制を施いた。總花的である、これは最初活潑であつたが次第に動かなくなり豫期の効果は收めなかつた。現在では庶務、鍊成、企畫の三部制とし責任を負はせ、分團長を中心として少數幹部制を採つて居るが、責任の所在が明白であり、且早く纏る。成功と云へようか。

三 九月十二日より二泊三日間奥多摩御嶽山麓禊道場で翼賛會東京府支部鍊成主任高橋先生を道彦として嚴格な模鍊成を行った。参加者約七割の二十八名。

禁煙・禁談 一日二食一椀の粥と梅干一個 拜神と振魂に、中日には凡ら十時間も正坐したであらう。完成した折の感喜、身心の清澄まことに表現の辞がない。

実は餘り最初の試としては嚴格すぎた爲、中日の夜遂に耐へ切れず無断下山した團員が居るが、鍊成は緩より嚴に入るべきか今も一つの疑をもつて居る。

十一月始め、吉田松蔭、橋本左内、頼三郎三郎、梅田雲浜等數十の明治維新勤王烈士の血を流し骨を埋めた墓所のある小塚原回向院で追悼会並に鍊成會をやつた。十二月には愛國百人一首を通して愛國精神を語る鍊成會、一月には坐禪による一日鍊成會、二月には「聖上陛下の御日常について」の御講演を謹聴し、三月七日には開成中学校配属將校指導で嚴格な規律訓練をして足を棒にした等生活に鍊成を取り入れやうと、鍊成の相續に努めて居るがなかく路遠しの感がする。

總じて協議會とか研究會には多く出席するが、行を主とする鍊成會には出席率が落ちる。

四、次に組織について云へば、最初我分團も御多聞に洩れず舊弊紛々とした人が居て同志精銳どころか、全くの寄合所帯であつた。

然し鍊成を繰返して行くうちに自然淘汰よりしく脱皮して行つた。退團を申込出者もあり、又勧めて退いて貰つた人もあつた。

そして新しく清流を吸収した。中には一度退團して貰つた人が三ヶ月后同志としてどうしても惜しいと云ふので分團長が節を屈して更に入團を懇請した人もある。

凡そ團の脱皮作用には二方面が考へられる。

①は積極的に強烈に同志意識の昂揚を図ること

例へば厳格な襖をすゝるとか、勤王烈士の墓前に誓ふとか、凡そ悲憤慷慨、正義心の發揚せらるることである。

②は消極的に同志性の稀薄化を防止すること。

例へば庶務部下各團員の出席率、活動量の採点表をつくるとか、清涼劑の注射である。我分団では、約八名の町内での模範的大学生を入團させ、大学挺身班なり一班を組織し、内部の革新劑として、又分団の外廓

として、約四十名の純真な中学生を以て組織する学徒報國団を育成し外部よりの清涼劑として促進を図った。

去年九月頃であつたか、地廻りの舊型の横暴見るに忍びず、これ等挺身班の八名が夜公園内に一本の蠟燭を中心は何クソと齒ざりして黙黙と錬成して居た。其の眼に正に大東亜維新の光を見た。この光によつて革新脱皮される如きでゐる。

かくて或る程度の組織も確立し、分団員の自信も高まり、団の存在も漸く市民に認めらるゝ今日では却つて入団希望者も相当多い。然し時流に敏なるカメレオン型の入団は警戒且嚴送せらるべきではなからうか。

當分団今日迄の組織整備の跡を顧れば、同志精銳主義と一億一心主義との互に一致する筈のこの二目標を如何に塩梅するかに終始した。勇氣が必要ではなからうか。

五、活動も自己錬成に始つて未だ自己錬成の域を多く脱しない。

六月始めから年中無休のラヂオ体操をして居る。所内出征軍人二十三



家族の寫眞を撮影し慰問文を附して前線に送った。町内常設消火ポンプを壮年団で担当して居る。先頃の耐寒錬成には毎朝木劍による剣道錬成を二週間行つた。士氣昂揚に役立った。道路の普清とか、街頭清掃、路上の犬の糞の處理等もやつた。これは去年七月頃であつたらうか。町内が住宅地で所構は多くの犬が糞をし、それに蠅が出盛る時で、小路くで蠅の密集に遇ひ實際に困つた。そこで壮年団がこれを取上げ犬の糞を片附けその跡に「犬の糞は飼主が處置して下さい」と町内各種団体を列記してポスターを貼つた。不思議に犬の糞はなくなつた。然しここに興味ある事件が起きた。其の殆ど二週間位あつた。つたらう。町内婦人団体会長なる一婦人が私を訪ねて云ふことに「成程壮年団が動いて犬の糞はなくなつたが壮年団員自身もする路上の立小便は何かならぬかしとの抗議である。驚いて早速協議会を召集した處、二、三の人が「ヤア」で犯跡まことに顯著なるものがある。直ちに「我等は今後路上の立小便を慎む」の決議をあげた。斯の如く団運動も経験を積んだ今日は町内とはなしに兎角始末に

因々仕事には壮年団の名を藉りたい、力を藉りたいの氣運が漲つて来た。最初は他の団体主催講演會等の席埋めの傭兵に過ぎなかつたこともあつたが、其の後牛乳、菓子等配給是正の具体的問題を持ち込んで来た。先月などは銅鉄回收、貯蓄奨励、掃掃除、風そ至難な仕事は壮年団が頼まれて出勤する。分団独自の活動、区団、市団の活動等で去る二月の二十八日間中に一般団員の出勤日が十日、班長以上の出勤日が実に十八日である。

然し壮年団が動けば国策が出来ろの確信が出来ぬにやり甲斐がある。去る三月四日の夜緊急協議會を開いた。

議題は「闇の対策」である。近時石鹼、砂糖、野菜、魚類其の他の闇の横行特に知名の士に多いこと等點視するに忍びない。これを分団が取上げるや否やである。時期尚早論と断行論とか深更に至る迄論議された結果、闇は我々団員の共同責任である団員は先づ率先自肅自戒を範すべきでなからうかとの意見に一致し「我等は一切闇行為を行はず」と決議し總員起立して神明に誓つた。直ちに壮年団員の目前には「敵

は米英、そして闇だ。日の丸のもと闇は無し。」又勝手口には「こゝは日本人の家です。闇屋お断り。」と壮年団の名入ポスターを貼り一家拳って闇撃滅に邁進して居る。今右一週間位一般市民の反響を見て各団員が各七名の一般市民を誘つて同一ポスターを門前に貼らせて擴大する方針である。又来る二十日迄に闇の生態を調査して取纏め区団長に報告し闇対策の資料に供する筈である。

六、以上さ、やかな体験を通しての団活動に就いての感想を述べるならば

一、指導者たる分団長は獨創力と氣魄力を兼ねた人たるを要する。

故に下級班の指導も劃一的であつてはならない。例へば活潑な班に對してはその自主性を充分尊重し、よろしく受身の分団長たるに甘んずる雅量が必要とする。又睡眠班に對しては多々益々指示するを要する。

又一般団員には私心を抛たせ、われ輩穀のもと帝都の壮年団員なりの自覺と、國內体制の革新運動の戦士たる信念を持たせなければならぬ。

壯年団運動にも波がある。運動の効果の如何や、世評や、反響に一喜一憂する輩では革新運動などは出来ぬ。

3. 運動の客体たる一般民衆に対しては勝ち抜くために国内革新の歴史の必然性をハッキリ認識させ、町内各種団体の綜合協力体制をつくらねばならぬ。

故に壯年団は翼賛の雰囲気を醸成するポンプの呼び水に甘んじ、成る可く表面に出ない様にする。壯年団の看板を掲げないで識らず識らずの間に壯年団のレールに乗せる様にしたら如何だらうか。

4. 活動の目標は大きな面から大らかに取上げて創意で練つて、決定したら具体的に判然明示するを要する。

そして一時一行主義がよくはないか。線香花火式は禁物である。結局団運動は適当な指導に基き盛上る力量の無限の培養に終始する所謂「頭は高く、手は低く」して雪だるまが大きくくなる様にあるにありたい。福助活動は禁物である。翼壯が挺身部隊である性格から、又少くとも帝都に於ては分団は翼壯の基底である。分團活動の強化

を因る爲にも、分団費用維持の点及大日本翼賛壮年団中に於ける帝都の分団の地位が内部組織の儘にといてよいか將又單位団となすべきかは今後に残された研究問題である。

7. 翼壯活動の如何は正に分団の活動如何に依る。

分団の活動力が強化しない限り如何に上級団が雄大なる企畫や動員を降すとも單なる畫餅に終る。正に団活動の源泉は分団にありと確信する。

故に分団の責任重大を痛感し、団活動の強化を期する所以である。

以上

團員鍊成を主としたる団運営

西多摩郡五日市所

翼賛壯年團長 山下新平

## 一、五日市町の概況

東京より西に十二里、省線立川駅下車南武線五日市線は多摩川の支流秋川の清流に添ひ走ること約一時間、其處に戸数一千、人口五千五百の山間の町がある、それが我が五日市町である、古くより半商半農の小邑であるが昔機業を良くし、五日市織（黄八丈）の名産がある

## 二、三多摩の思想的沿革と団結

1. 由来以上の如く一般に薪炭をひきぎ機業を糧とする純朴なる農山村民を背景とせる五日市は特に特記すべき思想もなし経綸もなかつた如くである

只然し只一つ明治末期に興つた自由民権の政治的動向は三多摩壯士の名に残る如く果然この地をして政争の中心地たらしめた

現在尚最も濃厚にその色彩を残して居る如くこの地方の政治、経済文化もこれに依つて、その動向を形づけられて来たことも事實である、大東亜戦争 否 支那事変勃發と共に地方壯年層の間にはこれ等地

方政黨關係の没落と共に異状なる革新的氣運は讓成されて来たのであるが、この機會に於て結団を見た。我等団員の總力結集に對する方途は、必然以上の見地より觀たる点より發足を見なければならぬことに考へなければならなかつたのである。

### 三 団員鍊成（楔 鍊成）

Ⅰ 団は先づ団員精銳を要求し、同志團結を總求した。然して百五十團員の本当に丹心報國の歸一と見る爲に団員鍊成に最大の主力を傾倒することとを決定したのである。且あらゆる社會的部門に於ける捨石たる自覺に依る団精神を把握することにとめた。

只第一回鍊成會に於て私は

「先輩の旧体制を難する前に先づ自己四十年の生活と反省せよ」と徹底的なる自己鍊成の必要を促したのである。

第一回の鍊成會は豫期以上の成果を以て終つた。果然団員相互の親和と結果は高速度に進展し、續々団の指令に依らば各班は鍊成會を續行、團長副團長はむしろその統制と指導に骨を折る有様であつた。

が、全団員は現れなく、何回もの錬成の洗礼をうけた次第である。  
 この間、団は幹部錬成を何回か決行した。

要するに、錬成は、幹部の企畫力、団員の実践力を培養する為に根本の意義に考へたからである。幹部は（班長以上）全員錬成會指導者たるの素地を体得した。

ホ、これと併行して勤労錬成の活発なる展開が見られた

一 勤労奉仕 所有山林の下刈

一 薪炭増産並供出運動

一 町内清掃運動

一 貯蓄増強実践運動

一 町會議員選挙に対する研究対策等に結団半歳に滿たぬ団が団長の下よくこれとなし得たことは徹底的な団員錬成の成果に外ならぬことも自負するものであった。

#### 四 結 論

イ、強力なる団活動の展開はとりもなほさず郷土の新秩序の建設にある。



町會に豫定通りの団関係議員を送つて過半数の力を獲得した。  
然しその裏面にはあらゆる宣傳謀略の陰があることを考へねばならぬ。これは大きい國と國との問題と同じである。これを強力に乗り切る爲には、団の使命、實にその責任の大なることを思ふ。

只團は國の政治を究めると共に、その町の政治を考へなければならぬ。經濟、文化、生活皆その通りである。これが爲には第二年の団の組織には慎重なる研究が検討されねばならぬ。  
一、革進氣鋭なる總務の陣容。  
一、団活動の尖兵たる班長の人材大物主義。

以上

### 實踐組織の強化を念願して

ハ王子市翼賛壯年團

副團長 鈴木龍二

一、団發足に際して

八王子市団の結成は昨年三月であつたが、当時団員数に付ては上級団の指示に基き、大政翼賛會推進員の数の五倍がその目標であつたが此の五倍を以てしては網羅主義となり団員が多きに過ぎるといふので千五百名程度に喰止めて推薦に着手したのであるが其の節千五百名の団員に對して円滑迅速なる連絡を取り、實踐活動を推進する爲には、組織要綱に指示された団の組織機構だけでは充分ではない、是非先下部組織としての分団並に班の實踐上の細胞單位を以つて活動を展開することにしたいと云ふので大体警防区域に準じて地区分団制を取り更に分団地区内の町内會区域毎に班を設ける事となつた。

## 二、分団班の結成指示さる

後に上級団から分団班組織要綱が指示されたが本団の場合には實際の必要上既に結団當時その組織を持つ事と相成つて居つた事は意を強ふする證明を得たような次第であつたが、その半面団運営といふ事から見れば富士山上の手旗信号を以つて裾野の団員に連絡するが如き困難に達着せざるを得なかつた。

### 三、分団、班擴充上の難点

それは組織を作る毎に問題である人の配置の問題であるが、殊に壯年団の如き特殊の性格を持った団体の幹部を決定する事の困難なるは言ふまでもない。しかも班組織の充員の爲に動もすれば当初より警戒した綱羅主義傾向に陥入った事がわが団運営を一層窮地に導いたと思ふ。而して更に結団直後にして總選挙に当面し引續き五月の市會選挙に際して翼賛選挙啓蒙運動を展開するや、未だ眞の団活動の礎石たる団員精神の鍊磨昂揚なくして此の實踐活動を担当したのであるから誠に華々しくはあつたが、それは遂に富士山上の手旗信号に終つたのである。現に此の期間に於いて分団長の更迭する者あり、中には翼壯の能事終れりといふ風に感ずる者も出て來た。それと同時に辞令傳達の事務的引續きの不円滑より翼壯に対する熱意が一部ではあるが冷却して來た。寧なる引續きであると放任すべきではない、鉄は赤き中に打てと痛感した次第である。

尚我々が分団常會並に班常會に参ると先づ翼壯とは一体何をやるのか、

趣旨使命は何かと尋ねられろ事が屢々であつた。そも／＼翼壯とは一体何をやるのかと団員の口から聞かれるといふ事自体が網羅主義の回答ではないか。今此の問ひに答へても、陸續として辯證法的疑問を繰返されたならば我が団は其の米英的思想の反問の爲めに絶えず動揺せねばならない。我々は熾烈なる青壯年の翼賛意欲を結集して起つた苦なのだ。然るに翼壯は何とすろのかといふ此の反問は期せずして団員にとつて、翼壯は専ら上級団の指令によつてのみ動くのだといふが如き觀念を知らず／＼の中に植付けて居つたかと思ふ時我々は誠に汗顔に堪へない。

### 実践組織強化の要領

我々は國策完遂に協力し大政翼賛運動に率先挺身して往く団員の創意と工夫が即ち団運営を推進し且つ団の実践組織の強化を促進し従つて此の団活動の投する波紋が國民全体を總力戦に推進する実践力なのだと自認し自覺せねばならぬものと信ずる。されば我々団幹部の鍊成と同志意識の結集こそ必要であると痛感され

て、その度々として九月奥多摩氷川の仙境に二日間を渉る幹部錬成會を開催し、終つて日原鐘乳洞視察の強行訓練を取行し其後毎月の分団長常會を設定すると共に各班に班常會を開催し、機會ある毎に上級団より講師を聘して徐々としていはあるが団運営強化に一步步前進しつつあるのである。

わが団の此の進行と共に当然脱落団員の止する事が豫想されるが、此の団員の脱皮更新は實踐組織強化に不可欠の要件で斯くして始めてわが団の強固なる結合と展開が期待される。此の一年を回顧する時各班の団員代表が市全敵に涉り町内會常會に列席して町會隣組の戦争生活態勢確立の運営に協力する事となれる如きは國民組織の中核的任務を担当する翼壯として一つの收穫であり、尚各分団構成団員数は百名乃至二百名で分団活動としては極めて地区的に集約せられてゐるので翼賛選挙貫徹運動を始めとして、銅鉄の回収に、國債消化、貯蓄増強に、補助貨の回収に、或ひは薪搬出勤労奉仕等にそれく有効適切な活動を展開中である。最近では各分団毎に寺院等を會場として団員錬成

會を順次開催し同志意識の昂揚と団活動促進に折角努力いたしてゐる次第である。(終)

## 集團鍊成を基盤に

北多摩郡東村山町團

總務 肥沼武比古

一、團を中核とする政治的結集を根本目標とし町自治の円滑なる進展を期せんとす。

1. 團の政治力強化に重点を置き其の手段として団結力、動員力に對して特に意を用ひ集團鍊成に依て目的達成を期しつゝあり。  
 2. 部落會、隣組、農事実行組合等町内各種団体に對する團の目標とす  
 高度純真なる政治力の滲透を期し着々と実績を收めつゝあり。

町會議員

二十四名(定員)  
 十八名(翼壯)

部落會長

二十二名（定数）

十六名（翼壯）

農事実行  
組合長

十六名（定数）

十二名（翼壯）

（ハ）毎月開催の翼壯常會並ニ總務會には

町長、産組長、農會長等の出席を求め、専ら意志の疎通を図ると共に各種団体との相剋摩擦を防ぎつゝ、田舎裡に全力發揮に努めつゝ、あ

## 二、集団鍊成の状況

（ウ）薪供出に際し全団員二日間の勤務鍊成を行ふ。

午前六時各鎮守境内に集合 神拜行事の後六時三十分作業開始

午後五時終業

（ロ）銅鉄回収 …… 一日ノ集団鍊成を行ふ成績良好

（ニ）鍊成講習は團結成以來二回行ひたしも修了後に於ける団員の活動力極めて活潑なり

(二) 十二月八日の曉天動員には団動員力の成否を決するものなりとの観点より幹部は周到なる用意を以て之に当り動員時間と特に指令時間より一時間繰上げて午前五時に変更し各鎮守境内に集合せしめたり。上各班行進を以て六時に町の中央國民學校に集合せしめたり。

全 団 員      二、六名      中出勤人員      二四八名

(四) 第二回動員大会を本年一月一日午前五時に施行

出勤率      六割四分      動員連続のため成績稍々不良

(イ) 目下計畫中のもの

荒廃地開墾作業

昭和十八年度  
昭和十九年度

三月着手

三段歩  
三段歩

主要農作物を栽培し供出量の實際的標準を研究調査す

### 三 団員に對する方針

現在の二七六名を更に嚴選し二〇〇名以内を目標とし不適格は整理し適格者加入、団の質的整備を図る。是れは穩健平和を旨とし適当な



る機會毎ニ行ふ。

以  
上

## 翼賛新体制の確立を目覺して

立川市翼賛壯年團

紫野莊三郎

大東亞戦争は曠古の大事業である。挙國渾然一体となり、國內に於ける一切の対立抗争を排除し、鉄石の結束を鞏固にし、必勝不敗の信念を堅持し以て、聖戦を貫徹し、各被圧迫民族を解放し、道義に基く世界新秩序を建設するは、神武肇國の一大理想であつて又帝國の國是なりと云はなければならぬ。武力戦のみならず、思想戦に於ても亦米英思想を大東亞の地域より掃蕩し、八紘爲宇の精神を顯現せなければならぬ。翼賛の理想は皇道精神の確立なりと確信す、而して其の本質は大東亞戦争を完遂するに障礙となる一切のものを破砕するにありと云はなければならぬ。抑々皇道は我が建國の初より現代に至迄及無窮の將來を通じて重せらる

可き最高の生活規範であり、我日本立國の根本精神である、又最高の理念である。即ち皇道は皇國に固有一貫せる万古不易の道であり、同時に世界の道なりと云はなければならぬ。

太東亞戰爭勃發するや有史以來見ざる大戦果と共に、時代は正に歴史的  
一大轉換をなし、政治に、經濟に、文化に、思想に、各方面に亘り、一  
新紀元を畫す。地方都市のみ旧態依然たるは絶体に許容し得ず、唯懼る  
自由主義的、個人主義的政治思想の觀念を脱皮し得ざる指導者の如何に  
多きかを。

自治体の首班たる市長は公共団体たる市の理事機關たると共に又國の機  
關たるの地位を有す、支那事變勃發以來國家の委任事務は益々多きを加  
へ、重要な地位を有するに至る。果して然らば市長の缺員が数ヶ月に  
亘るが如き事あらんか、決戦下寔に遺憾に堪えず吾人をして果然自失た  
らしむるものである。

此處に立川市政問題と引例せん。昨夏七月前市長辭任以來九ヶ月に及ぶ  
も後任市長の決定見ず、發展途上にある本市は、他面に於て航空都市な

り。又憲政発祥の地三多摩文化の中心なり、市民の代表たる市會が、市長と念頭に置かれ、金權と情実とに由り、旅閩抗爭に終始し、市政の滞滯具極に達し、市民路頭に迷ひ、十字街頭に立つ。時既に此處に至る、國運を睥して歎ひつゝ、ある時局重なるの秋、本市翼壯に興へられた緊要事こそ政治新体制即ち翼賛市政の確立なりとの確信に基き紫野團長統裁の下同志精銳を誇る翼壯は猛然蹶起し、決戦下旅閩対立の即時中止、渾然一体、全會一致を要望、再三再四市會の反省を促したるも何等其の効なく、昨年十二月廿七日決戦市會は、翼壯の要望を拒否する能はず終に流會となり越年せりも何等進展する處なく、一月十四日市會議長自ら府知事に面接市會解散の陳情をなし、同志と共に連袖辭職するに至り、市會の機能は辛ふして過半数を得るに止まり、遂に市制第九十一條の適用を受け、職務管掌を受く、一月三十一日に於ける翼壯大會に於て市會解散を決議し、即時決議を發動し、当局に対し、市會解散の要請をなし一氣可成翼賛市政の確立を企図したるは当然の責務なりと信ず、されど事志と違ひ実現し得ず眞に遺憾に堪えぬ處である。

市町村の豫算は年度開始の一ヶ月前即二月末日豫算市町村會を召集と規定せらる。而して豫算市會の召集すら不可能なりとせんが、市會の存在理由果して何處にありや。市制第百六十四條に依り知事の指揮を請はざる可からず、名譽ある立川市政に一大汚点印し、聖戰完遂を阻害するのみである。市會解散の聲澎湃として起る今日、市民の要望に應へ、断乎解散の陳情をなし、政治新体制の確立を図らねばならぬ。翼壯は政治結社に非ず、故に政治運動をなす可からずと。孰に其言や好し。越權行為なりとなす一部の所謂政治と何ぞや。市民の一員とし、又市民の中核体として、自己の選出せる議員の行動に対し反省を促すは当然の責務なりと確信す。翼壯は勅命を奉じたる國家の中堅なり、聖戰完遂の爲め、之を阻害する市會の存在を抹殺し、清新張力なる翼賛市會を確立し、市政の明朗を期し、挙市殫力となり大東亞戰爭完遂に邁進せざる可からずと信ず。



【資料20】

翼賛壯年團ニ如何ニシテ協力スルカ

翼賛壯年團ニ如何ニシテ協力スルカ

一、農建同盟ノ態度

1. 翼賛壯年團ハ地域職域ヲ包括シテ更ニ高イ立場ニ立ツモノデアルコトハ吾等ノ職域組織ヲ抱擁スル建前デアル。故ニ農建同盟ノ之ニ對スル參加協力スル方法ハ、同盟會員ガ壯年團員トシテ個別的ニ參加スルノミデハ不充分デ、夫レト共ニ農建同盟ノ組織トシテ積極的ニ參加スル態制ガ採ラレナケレバナラヌ。斯ル參加ノ仕方ニ依ツテ始メテ翼賛壯年團ノ正常ナル發展ガ期待サレ、軍・官並ニ翼賛會本部ノ企圖スル同志精銳組織トシテノ確立ガ實現サレルノデアル。

2. 本同盟ハ農職域ニアツテ農業ヲシテ高度國防國家体制ニ即應シ得ル様再編成シテ行ク處ニ主要ナ使命ヲ有スル推進組織デアル。此ノ使命ヲ貫徹スルガ爲ニハ全國農村ニ遍ク吾等ノ組織ガ存在セネバナラヌ。翼賛壯年團ノ結成ト共ニ同盟支部ノ結成、會員ノ獲得ガ全農村ニ互ツテ實施サレナケレバナラヌ。

斯クノ如キ同志ノ一体組織ヲ全國的ニ整備スルコトニ依ツテ始メ  
テ農職域推進組織トシテノ使命ヲ完フスルコトガ出來ルト共ニ・  
ソノ事自体ガ翼贊壯年團ヲ強化スルモノタル關係ヲ銘記スベキデ  
アル。

三、農村ニ於ケル職域推進組織ハ未ダ整理統合セラレタリトハ云ヒ難  
ク本同盟ノ實踐活動ヲ通シテ推進團體ヲ統合シ國民組織ノ中核ト  
シテノ青壯年運動ノ統一ニ邁進セネバナラヌ。特ニ農報聯ノ改組  
ト云フ形ノ下ニ増産挺身隊ノ全國的結成ガ農林省ヲ中心ニ目論マ  
レテ居ルトキ此ノ事ハ重要ナル農村青壯年團運動ノ課題ナリトイ  
ハナケレバナラヌ。

二、翼贊壯年團ノ設立ノ意圖ト基本要項並組織方針トノ間ニ誤解ヲ生シ  
易キ點ノ實踐的解決

#### ノ同志組織ト聯合体

翼贊會本部ニ於テハ壯年團ノ性格ヲ基本方針ニ於テハ同志組織ノ  
建前ヲ採ツテ居リナガラ、結成手續ノ項デハ單位組織ノミノ町村

ヨリ郡・縣團ノ設立ヲ圖ルヤウナ指示ヲシテキル。

同志組織トハ一体組織デアル。指導者原理モ一体組織ノ中ニノミ實現スル。町村ヨリ組織シ縣團ニ及ブ組織ハ聯合体デアツテ民主的組織デアルト云ヒ得ル。同志組織デアル以上、全國一体組織トシテ翬贊壯年團ハ結成サレナケレバナライノニ、今日マデ指示サレタ方針ノ中ニハ以上ノヤウニ矛盾シタ内容ヲ暴露シテキルノデアル。我々ハ敢テ言葉ノ端々ニ拘泥シヤウトスルモノデハナイガ、右ノ矛盾ハ何レニシテモ、今後ノ組織活動ノ實踐過程デ克服シナケレバナライ。ソノ爲メニハ次ノ二點ニ特ニ重點ヲ置イテ是非コレダケハ實際ノ上デ貫徹シナケレバナライ。即チ

#### イ・翬贊壯年團結成準備委員會ヲ實質的縣團タラシムルヤウナ構成トスルコト。

ロ・靑壯年ノ自治的性格ヲ發揮セシムルガ爲ニハ結成準備委員會ノ構成ヲ靑壯年ノ魅力ト信賴ヲ結集シ得ルモノタラシメルコト

翼贊會本部ハ組織方針ニ於テ翼贊壯年團ノ結成ニ當リテハ「必  
要ニ應ジ準備會ヲ設置スル」ト云ツテ居ルガ、寧ロ「絕對ニ」  
コソカラ組織活動ガ始メラレナケレバナナイモノデアル。  
準備委員ノ構成ハ小泉部長ノ説明ニアル如ク翼贊會、官廳、  
郷軍、既設青壯年團體、民間有識者トアルガ、此ノ人選ニハ  
特ニ慎重ナル態度ヲ必要トスル。農建同盟ハ優秀ナル指導的  
人物ヲ準備委員會ニ、責任ヲ以テ送り込マネバナライ。  
「既ニ地域職域ニアツテ自ラ實踐他ニ垂範スル」モノハ單ナ  
ル街頭の有名人士デハナク諸既存ノ團體ニアツテ其ノ組織活  
動ニ挺身シテキルモノデアル。準備委員會ヲカクノ如キモノ  
トシテ確立スルコトニ努力ヲ致サネバナライ。

## 2. 職域推進奉公組織ノ協力体制

職域推進組織ト翼贊壯年團ハ綜合一体ノ組織デナケレバナラヌ。  
ダカラソノ關係ハ

(一) 單ニ個々ノ分子ガ兩者ノ夫々關係シテキルトイフ形ノミデハ不  
十分デ(二) 農建同盟等ト云ツタ職域推進團體ガソノ組織全体トシ



テ翼贊壯年團ノ機關ノ中ニ入ツテ居ル形ノ採レルコトガ絶對必要トナル。

コノ點ヲ解決スルモノトシテ翼贊會ヨリ示サレタ方針中ニ「協力會」ヲ組織スルコトニナツテキルガ、ソレガ翼贊壯年團執行機關ノドコニツクカトイフコトニヨツテ非常ニ異タモノトナツテ來ル。

協力會ハ作ツタガ執行機關トハ全然別ノトコロニタゞ形式的ニ並ベタニスギナイヤウナ結果ニ陷ラヌヤウ、十分ナル注意ヲスル必要ガアル。前掲本部案トシテ提示シタ「組織方針」コソ最モ正シイ翼贊壯年團ノ組織形体ト考ヘル故、各縣ニ於テハソノ實現ノタメニ積極的ニ努力サレタイ。

### 3. 中央組織ト下級組織編成方針

翼贊會本部ニ於テハ指導者原理ヲ翼贊壯年團ノ組織原則トセラレテキルガ、其ノ具体的姿ハ縣支部長ヲ名譽團長トシ團長、役員ノ指名及重要事項ノ指示ニ止メテキルガ、コレハ單ニ翼贊會ト壯年團ノ監督關係ノ事務組織ニ過ギナイ。

眞ニ靑壯年ヲ翼贊運動ニ裸デ飛込マシメ其ノ方向ヲ一點ニ集結セシメソレガ爲ニハ地方組織ノ整備・役員・團員ノ簡拔ニ迄中央ノ指導力ガ及バネバナラス。

翼贊會ニ於テハカ、ルモノトシテノ中央團ハ近ク出來ルデアラウトシテキルガ・コレハ急速ニ其ノ實現ヲ圖ラネバナラス。然シ當分代行的ニ「中央指導本部」ヲ翼贊會ノ中ニ作ツテソレニヨツテ斯ル活動ヲ積極的ニ展開シヤウトシテキル。同盟本部ハコレニ對シテ積極的ニ協力ノ態勢ヲ採リツツアルガ・コノコトハ同時ニ縣ニ於ケル準備委員會ノ構成及ビ活動ニ對スル縣本部ノ態度モ同様デアル。

三、縣團並下級團ノ規約・事業等ニ對シ具體的計畫ヲ提示シテ翼贊壯年團ノ正常ナル發達ニ協力スルコト。

四、下級組織ノ整備ニ對スル組織活動ニ對シテハ壯年團等ト協力翼贊會ト一体トナリ活動ヲ展開スルハ勿論デアルガ・單ナル組織ノ簡易化ニ隨セントスル傾向ニ對シテ職域組織ノ重要性ヲ徹底セシムルコト。

五翼贊壯年團、事務局、協力會、審議室等ニ參加スベキ同志ノ人選ハ  
單ナル個人ノ優秀性ニヨツテ爲スベキデナク組織ノ一員トシテ責任  
ヲ有スルモノヲ選ビ名簿ノ準備ヲ爲シ置クコト。

以上ノ諸活動ヨリ翼贊壯年團發足ノ歴史的使命ヲ十全ニ生カス道デア  
ルト共ニ翼贊壯年團ガ現實ニ置カレテキル惡條件ヲ克服シ眞ニ軍官民  
ノ期待ニ副ヒ得ル翼贊壯年團タラシムル道デアリ、同時ニソレハ吾等  
ノ協力援助ノ積極的態度デアル。

## 義俠應援者の立場

余は此の候補者との間に何等、私的交際なく、従て態々應援しなればならぬ理由なく、又頼まれたわけでもない。然るにも拘らず、敢て此の壇に立つに至つたのは、左の理由によるものである。

一余は東京市政を常に憂へる一人である。從來の市政の實情よりして、市會の根本的改造を期待し來つた。

二今日迄幾多の市會改造運動が行はれたが、市會の大勢を動かす力とはならなかつた。然るに今度の推薦制は東京市始まつて以來の大規模を試みであつて、或は市會改造の爲めに殘された唯一の方法であるやうに思はれる。即ち此の點で是非とも成功せしめたい。

即ち推薦制の意義を有權者に訴へたい念願に驅られた事が一つの理由

三次に此の候補者自身に付ての理由である。即ち推薦によつて立候補せられた事であるから、一應信用して差支ないわけではあるが、

余の調べに於て、此の候補者の人物識見は、市會議員としての資格を十分に具へておらるゝ事を知り、かりに推薦でないとしても、信念を以て之を推したい位ひの心境になつたこと。況や推薦で以て保證の人物である以上、是非とも之を推し出すために微力をつくしたい氣持になつたことが理由の二つ。

四 余は、かくの如き信念の下に、頼まれもせぬに、敢て自ら進んで有権者諸君に訴へるべく、此の壇場に割込ませて貰つたわけである。即ち、候補者には御迷惑かも知れぬが、云はゞ義侠的應援といつた形で、自分から買つて出た應援なのである。

（大体右の如き立場に於ての演述なるが故に、同じ演壇に立つとは云ひ難く、他の辯士に比し資格が幾らか違ふことになる點に意義がある）

大戦下です。過去の市政について論議してゐる場合では有りません。要は、今です。今から先のことです。ふたゝび舊態依然なる市政を招いては、われら東京市民の面目はないと思ひます。

大東亞の中樞日本、日本の中核大東京は、正に、皇都をこゝに確え定められてから始めての重要性を迎へ、市民こゝに自治を持つてから始めての大使命を加へて來ました。

革清の急を、今日に聞くのは、市民諸氏にも、むしろ遅いくらゐに思はれるでせう。

千里の大陸に、萬里の大洋に、赫々、國運をして旭日の如く輝かしめてゐるわが皇軍にそれにくらべて、皇都の市政革新の業すらなほ遅々たりとあつては、汗顔怱怱、慚愧せねばなりません。

敢て云ひます。市會の制の惡しきに非ず、市政の機構が不備なるにも非ず、要は、それを奉じ、それを動かし、それを活かす人に、人を得なかつたからで有ると云へます。人を選ぶもの、それは市民諸氏です。故に今日この時、わが大東京の眞美の姿とその働きを、こゝに現すや否やの任は、懸つて市民諸氏の心ひとつにあるわけであります。

不肖、推薦の指名を辱ふし、こゝに候補して起つ以所は、一に市民諸氏の忠誠と愛市心を體し、輦轂の下に、市政の一兵たるまでの謙虛と勇邁をもつて、この大戦完遂の都市機能に仕へ、一面、このときを期して、大東京市會の清新草風を誓ふのほかに他意は有りません。切に、微衷お願みとり仰ぎます。

「吉川英治氏の作です。挨拶狀、推薦狀に参考にして自由に作り變へて用ひて下さい。」

府中町翼賛壯年團團則

第一條 本團ハ府中町翼賛壯年團ト稱ス

本團ハ本部ヲ大政翼賛會府中町支部事務局内ニ置ク

第二條 本團ハ大日本翼賛壯年團東京府北多摩郡府中町支團トシテ大政

翼賛運動ニ率先挺身スルヲ以テ其ノ目的トス

第三條 本團ハ大日本翼賛壯年團員ニシテ府中町ニ常住スルモノヲ以テ之ヲ組織ス

第四條 本團ニ左ノ役員ヲ置ク

名譽團長 一名

團長 一名

副團長 二名

總務 七名

第五條 名譽團長ハ大政翼賛會府中町支部長之ニ當ル

團長及副團長ハ東京府翼賛壯年團長ノ申請ニ基キ大日本翼賛壯年團長之ヲ指名ス



第六條 總務ハ團長ノ申請ニ基キ本團員中ヨリ東京府團長之ヲ指名ス  
團長ハ郡團長ノ指揮ヲ承ケ本團ヲ統率ス

重要團務ニ付テハ名譽團長ニ諮リ之ヲ行フ

副團長ハ團長ヲ補佐シ團長事故アルトキハ其ノ指定セル副團長  
之ヲ代理ス

總務ハ團長、副團長ヲ補佐シ本團ノ運営ニ參畫ス

第七條 役員ノ任期ハ二ケ年トス但シ再指名ヲ妨ケス

第八條 本團ノ經費ハ團費ニ依ルノ外補助金其ノ他ノ收入ヲ以テ之ニ充  
ツ

第九條 本團ノ會計年度ハ四月一日ニ始マリ翌年三月卅一日ニ終ル

第十條 本團ニ必要ナル規定ハ別ニ之ヲ定ム

#### 附 則

本團則ハ結團式ノ日ヨリ之ヲ施行ス

【資料21】

翼賛壯年團結成ニ關スル道府県六大都市組織部長會議々事要項

昭和十六年九月二十六日

翼賛壯年團結成ニ關スル

道府県六大都市組織部長會議々事要項

大政翼賛會組織局地方部

組 織 部 長 會 議 次 第

一 一同着席

午前八時五十分

一 開會ノ辭

午前九時

一 宮城遙拜

一 國歌齊唱

一 戰歿將兵ノ英靈ニ對シ感謝並出征將兵ノ武運長久祈念

一 事務總長挨拶

一 會 議

翼贊壯年團結成基本要綱説明 組 織 局 長

翼贊壯年團組織方針説明 地 方 部 長

質 疑 應 答 千葉縣より

一 事務總長挨拶

一 宮城遙拜

一 閉會ノ辭

一 散 會

午后四時半

組織部長會議出席者調

昭和一九二六

區別	組織部長	庶務部長	代理者	隨行其ノ他
北海道	佐々木義滿		事務局次長 森正男	
青森		三田三郎		小野田部員 時館部員
岩手				
宮城	小野寺廣亮			
秋田	西田金太郎			
山形	皆川健藏			
福島	矢部善兵衛			
茨城	橋口幾雄			岸部員
栃木	森田正義			
群馬	小比木左馬太			
埼玉	山口平八			
千葉	飯田謙次郎			千葉縣振興課 根本屬

東京	神奈川	新潟	富山	石川	福井	山梨	長野	岐阜	静岡	愛知	三重	滋賀	京都	大阪	兵庫
西田福次郎	田邊 信一	相馬 恒二	烏帽子田榮一	吉田 他吉	福島文右工門	名取 忠彦	宮下 周	日野 誠憲	柴田 忍	坂井德太郎	土屋 忠	信正 義雄	藤田 德松	城尾 五平	武井 勇次

林

喬

石井部員

間野部員

加答部員

鈴木部員  
吉田部員

熊本	長崎	佐賀	福岡	高知	愛媛	香川	徳島	山口	廣島	岡山	島根	鳥取	和歌山	奈良
深水吉毅		宇都宮三千雄	有富治人	中越義幸	藤谷隆太郎	鈴木義伸	一宮松次	國吉省三	田坂寧邦	森谷新一	田邊朋之	松本政一	木村隼人	高森榮喜三

中山民也部員

内田部員

島根縣振興課  
神田 屬

大分	柏木 幸一
宮崎	肥田 木暢
鹿兒島	笹田 裕次郎
沖繩	
東京市	東京市主事 立花 昌夫
横濱市	水島 藤吉
名古屋市	春見 京平
京都市	川端 道一
神戸市	伊藤 貞五郎
大阪市	

質 議 應 答

△事務總長

大きい問題から質議を願ひます

△群馬

同志組織といふが結局は網羅組織になるのではないか。入團希望者を一部入れないことにすれば種々問題が起ると思ふ。

△地方部長

銓衡標準並に準備委員會の手續等に表示した通りであるから網羅組織にはなるまい。

△長野

すでに網羅組織となつて出来てゐる縣は如何にすべきか

△地方部長

次第に同志組織の方向にもつて行つてもらひたい

△愛媛

在郷軍人と國の關係はどうなるのか



△地方部長

今後積極的に参加する方針に打合せてある

△熊本

壯年團を組織しないで推進員一本槍ではいけないか

△事務總長

推進員とは性格が違ふから全國に團を組織したい

△三重

本部は推進員より更に活潑な壯年團を作ることを用意してゐるのか

△組織局長

推進員は翼贊會の構成員であり、壯年團はその活動舞臺となるものである。又壯年團は高度の政治性は持つか政治団体ではないから選舉には直接關係しないけれども明朗政治の建設は其の任務であらう

△三重

壯年團が國民組織であるなら除外された青壯年層はどうなるか

△組織局長

壯年團は國民組織ではない、國民組織である爲には、網羅主義を必要とする

△三重

壯年團が國民組織でないことは、推進員と非常に類似なものとなつて、その區別が困難だ

△組織局部

推進員は本會の構成員であり、壯年團は本會の指導下におかれた外部組織である

△青森

壯年團結成の必要性が明確でない、推進員の數的增加によつて、目的は達成出来るべきはないか

△地方部長

推進員は翼賛運動の指導的役割を果すことになり、壯年團は運動の實際部隊である

△事務總長

推進員と壯年團の二本建の方針である

△岩手

從來の壯年團はその儘置き替へることになるか。役員任期は如何

△地方部長

從來の壯年團の組織を生かすことは考へてよいと思ふ。役員任期は準則決定の際決定したい

△福島

推進員は團の役員として同志精銳主義をとり、團員は全体を網羅する建前をとるべきだ。文化運動、興亞運動も壯年團の組織を活用すべきだ

△鹿兒島

推進員以外に同志精銳の人は僅少である。壯年團の活動據點として町内會、部落會を重視すべきである

△事務總長

壯年團組織は精銳主義を堅持したい

△地方部長

町内會、部落會は團の組織對象としてではなくて、運營の際、活用すべきである

△群馬

運動には動員すべき組織が必要である。本部の推進員簡拔目標如何政治團體が除外されるといふが、舊政民の黨派的組織はどうなるか政治活動を否定するが、燃烈なる政治意識は、どうしても政治活動となる

△地方部長

推進員は三十才の目標である

政治團體は過去のものはない。日常の實踐活動を通して政治意識を昂揚して行くべきだと思ふ

午 後 の 部

午後一時十分再開 柳川副總裁の挨拶、佐藤陸軍々務課長より陸海軍を代表して別項の如く翼賛壯年團の結成を全的に支持協力する旨の挨拶あり、次以て内務、文部兩省を代表して岡本内務省振興課長より協力支持の挨拶あり、終つて午前引續いて質疑に入る

田邊（神奈川） 市町村の結成準備委員會は誰が主宰するか

小泉地方部長 支部長が幹旋する

城尾（大阪府） 同志組織は銓衡が仲々困難である、結成後には漸を追ふて多數を參加させるやうにして貰ひたい。又制裁規定を嚴重にして除名の道を開くことが必要である、要はなる可く多數參加させるやうにしたいが如何

小泉地方部長 同志組織といつても何も固定したものではない、漸次擴大して行かねばならない

小野寺（宮城） 市町村團長は市町村の銓衡委員會の推薦に依り決定

した方がよくはないか

小泉地方部長 任命方法は縣團長の指名となつてゐるが、團員の意のある所を尊重することはよい、運用上注意して無理のないやうにして欲しい

山口（埼玉） 同志をふるひ分ける事は仲々困難である、選に漏れたものは他の政治國体に入つて、必ずや翼賛壯年團を對立するであらう、その場合は摩擦を覺悟して相手方を克服する態度に出てもよいか

選舉に對する態度を明確にせよ、はつきりした態度を確立しておかないと、魅力を失つて行く事になる、又長崎市會の選舉を翼賛會でやつたそうだが、詳細を承り度い

挾間組織局長 翼賛壯年團は大規模な組織を考へてゐるから、なる可く他を包容して對立なく結成して行き度い、然し敢て他の國体が對立して來る場合は、非常なる決意で敢然翼賛壯年團の發展のために努力せむばならない

選舉對策は先刻の話の通りである

長崎市會選舉は、詳細は聞いてゐないが、明朗なる市政を造ると云ふ立場を明かにし、選舉の肅正、正しい市政の確立を目標にして政治學識の昂揚運動をやつた、翼贊會で候補者を推薦したりその他の選舉運動はやつてゐない

飯田（千葉） 翼贊壯年團の指導は翼贊會本部がやるやうに命令系統を一本にして貰ひ度い、又町村費より補助金を出すやうにして欲しい

小泉地方部長 團の指導は翼贊會本部でやる、支部長たる知事が名譽團長であり、これは縣團長と表裏一体の關係に立つものであるから系統ははつきりしてゐる、又町村費の補助金は貰へれば貰つてよい

森田（栃木） 栃木の推進隊は編成變へをする必要があるか、既に同志的に横の連絡も出來てゐる

石渡事務總長 推進員を無限に多くする事は却つて質を悪くする、翼贊壯年團の中核体として推進員を考へたい

林（大阪府庶） 翼營壯年團は何をやるのか、國民保健の建前からの生活指導と、國民文化運動に重點を置き度いと思ふ

石渡事務總長 國民生活と文化にのみ限定は出來ぬ、經濟もある、その他多方面に亘つて地方の特殊性に従つて仕事を進めて貰ひ度い

橋口（茨城） 翼營運動は勤皇運動である、自由主義、利己主義、左翼思想を排除する事に全力を盡すべきである、舊体制的人物を排して革新的青年の指導者を團長級にもつて來る必要がある、各級支部長が團の各級團長になる事は何うか

石渡事務總長 翼營運動は革新運動である、中には舊体制の人物もあるが、又急激な所謂小兒病的革新人物もある、本部としても人物の點では考慮するが、翼營壯年團結成に際しては地方でも充分慎重に考へて貰ひ度い

挾間組織局長 各級支部長が翼營壯年團の團長になつてはならぬと否定的な原則を建てる事は窮屈な考へ方である



上野（山梨） 役員その他の準則を示して貰ひ度い、常務委員は國の役員と重複してもよいか

小泉地方部長 準則は速急にお示しし度い、常務委員が國の役員と重複する事があつても差支へない

藤谷（愛媛） 農林省の農業増進挺身隊等との關連は何うなつてゐるか

小泉地方部長 農林、商工兩省とも緊密な連絡をとつてやつてゐる  
石渡事務總長 各種團體にして統合出来るものは凡て翼贊會に統合したいと思つて非常に努力してゐる

宮下（長野） 市町村以下にも分團を作れるやうに特例を認めて貰ひ度い、既設の翼贊壯年團は改編を要するか

小泉地方部長 市町村以下には原則として組織は作らない、事情に應じて連絡方法を工夫して欲しい、既設のものは特例として尊重する、直ぐ改編する必要はないが漸を追うて改編して貰ひ度い

小泉地方部長 町村國から即ち下の方から結成して行くか、町村の結成準備が略出來た頃に縣團長を決める、斯様にして運用の妙を發揮して矛盾のない様にし度い

×

×

斯くて事務總長、總務局長、組織局長より挨拶あり眞摯なる協議を終り四時半散會

## 輿論調査に就て

### 一、主 旨

内政、外交の基調として國民的輿論を無視し得なくなつたのは現在の輻輳せる諸情勢に對する各國の傾向である。

アメリカは輿論の國とされてゐる。我々はそこに輿論に牽制された政策も見出し得るのであるが、大局から見て輿論に過らしめられずアメリカは今尤も自主的な外交を又内政を持してゐることを認めねばならぬ。

現在の各國の政治形態は逼迫せる世界情勢から必然的に統制的となり従つて獨裁制、官僚制となりつゝある。

獨裁制官僚制から生ずる偏向は國民的輿論の注入乃至吸収に依つてのみ緩和され得るものである。

輿論は自然發生的に形成されると同時に又より多く組織的に構

成されるものである。強力な政治遂行の背景には強力な輿論の構成が必要であることは論を俟たない。

現在のドイツ、イタリアの如き一國一黨制は正にかゝる意圖に基くものである。

構成された輿論にもその低流として前輿論的なもの、いひ得べくんば國民的感情、感覺の如きのあることを忘れるものではない。

今次歐洲戰の勃發前ナチはドイツ國民に對し「絶體にイギリスは立たない、我々は無血を以てポーランドを征服し得る」と宣傳しドイツ全民衆はこれを絶體信賴してゐた。（一旦戰端は開始されたがその後の適宜な宣傳省の處置によつて殆んど動搖も起さずしてドイツ國民は戰時體制に移つたのであるが）國境線の膠着狀態から最近漸く國民的感情に沈滞が見出されるに至つたので近く作戰的に何等かの變換を余儀なくされてゐるとのこと

とを聞いてゐる。

軍の行動が國民的感情に依つて左右される危険は嚴に戒しめなければならぬところである我々は爾余の各般の事項にこれを移してこれを了解出來得る。

アメリカとドイツに於けるこれらの例示によつて我々は輿論と政治の間には求心的及遠心的な兩作用のあることを見出すのである。

我國の政治は維新より現在まで國民より遊離した或る階層に依つて擔はれて來たことは萬人の均しく認めるところである。

政黨政治の排撃、重臣の政治的責任の問題等現時の國內事情はこれまでの一切の陋習を斷ち切つて國民政治に還元すべきことを要請してゐる。

黨面の精動は下情上達上意下達を以て強力政治遂行に協力すべきことを唯一の使命としてゐる。我々はこの意味から下情の精

密な測定を行ふべきものと考へるものである。

### 二 調査範圍

思想問題、内政、外交問題、財政、經濟問題等につきその都度調査事項を設定する。

例へば「重要物資の需給狀況」「勞務需給關係の圓滑不圓滑」等

### 三 調査組織

企畫部調査課所管の下に全國に調査員を配置す。

六大都市精動主務者、社會主事、精動實踐委員、一般識者より六〇名

右以外一四〇市の同様資格者より九〇名

精動鍊成會員より五〇名

一四六都市商工會議所主事、職業紹介所主事より五〇名

輿論といふ

輿論の構成

輿論の分析

輿論の指導

輿論と流言

生きた輿論としての輿論

輿論を喚起せしめるもの (眼、耳、口)

新聞、雑誌、ラジオ、映画、三才、演説

講演會、座談會、集會、多量

輿論調査

正確なる輿論

部分的なる輿論 (特殊) 各層、各職業、各階級

過去の事件論議

新聞、雑誌、映画、小説、講演、その他による

基本資料、後援、寄付、その他による

人、同、関係者

アメリカの事件論議

ドイツ、フランス、イタリア、その他

その他、その他

英、日、その他、その他

甲 號

大日本印刷



# 輿論調査に就いて

今日の輻轉せる諸情勢に於て國民的輿論を無視し得なくなつたのは獨り我國のみならず各國の傾向の様に思はれる。全體主義國ナチ・ドイツ及びファツシヨ・イタリアは其の統制された強烈な國民輿論によつて、全世界を驚到せしめつゝあり、又民主々義國アメリカは、流石に「輿論の國」の面目を發揮して、全國民の民主々義的輿論を背景に全體主義國に對する最後の挑戰者たらんとしつゝある。ドイツ、イタリアにせよアメリカにせよその強烈なる國民的輿論が、その内政、外交に於ける施策運用に夫々着々と成果を擧げつゝあることは今日何人も之を認めざるを得ぬ。

支那事變勃發以來我國に於ても精査なる國民的輿論の把握を屢々  
要望され來つた。經濟界、言論界等に統制が強化されるに隨つて、  
その聲は各内閣の更迭毎に高まつた。政府の外郭團體として事變間  
もなく誕生した精勵は、下情上達、上意下達を以て強力政治遂行の  
一使命となした。町内會、部落會、隣組等の下部組織整備に圖つた  
努力は全く此の爲と云つて良からう。精勵を吸収した大政翼賛運動  
もその主要なる役割が、上意の下達と下情上通による高度國防國家  
の建設にある事はその綱領中にもはっきり唱はれてゐる。

古來より仁政の布かれた歴史は數多いが、その前提條件として「民  
の聲を聞く」「民意の反映」と云ふ事實の數多くあつたことを見逃

す譯には行くまい。我國の政治が明治維新以來、國民より遊離した  
或る階層に依つて擔はれて來たと云ふことは、識者の屢々指摘せる  
ところである。然し今日の如き急轉せる社會情勢に於ては國民と遊  
離した政治があり得ぬと同様、内政、外交の基調として國民的輿論  
を無視し得ぬ事は云ふ迄もない。

#### 輿論調査の概況――

現下の諸情勢に對應して最も必要であり、又國民的要請ともなつ  
てゐる「下情上通」或ひは「國民輿論」は今日迄如何なる形式を以  
て、又如何なる程度に政府始めその當路者に聞かれたであらうか。  
勿論、直接見聞した事から放送、新聞、雜誌等を始め各方面に現は

れた國民の聲が、極めて概括的に調査され、測定された事は認めるものであるが、果してそれが眞の下情なり、眞の國民輿論であつたらうか。下部組織である隣組、部落會、町内會等が整備され、下から盛り上つた聲が中央に反映される時、我々はその危惧の大部分を取去る事は出来るのであらうが、下部組織の實質的未完成さと、當然あるべき議會機能の無力により、今日迄國民に納得の行く政治の行はれざるを遺憾とするものである。

我國に於ても決して、國民輿論なり下情が疎ぜられてゐた譯でない事は、現に情報局、内務省、企畫院其他陸海兩省等に於ても夫々獨自な立場から調査研究が行はれてゐる事を見ても判る。然し、そ

れらがいかなる組織で、いかなる活動をしてゐるかには知る由もないが、組織的な、より有効な活動を続けると云ふ點に關しては未だ検討の余地があるのではなからうか。民間で行ふ調査でも同様であるが、下情なり、輿論なりを調査する場合、その被調査條件の選擇に極めて無關心であり、所謂常識的である事も換言すれば輿論の本質に就て余りに無關心であると云ふ事が、眞の下情、眞の輿論を見出す事に遺憾の多い點と思はれるのである。

我々が輿論調査と銘記されてゐる新聞、雜誌等の内容を検討する時、それを精細に分析してみる迄もなくその多くが輿論調査と云ふ題名と凡そ懸離れたものである事を認識するであらう。即ち特

定の評論家、名士或ひは一部分の人々によつて述べられる意見等が  
屢々輿論として取扱はれてゐるが、斯くの如き調査が繰り返される  
理由として、直に襲にあげた輿論の本質に對する無理解と、同時に  
他に適當なる方法がないと云ふ事を挙げ得るのであるが、忘れ得ぬ  
一つとして當然、拙劣なる技巧も挙げねばと思はれる。

#### 輿論の分析

個人の意見をその正と輿論と云ふことの出來ない事は云ふ迄もた  
い。輿論は社會成員に共通な意見であり、公衆の見解であると云は  
れてゐる。輿論は社會成員の間の一致と云ふことが前提とされてゐ  
る。然し乍ら我々がともに最も注意すべきは、かかる完全な一致

の下に、且つそれが社會成員の一切を通じて確立されてゐるものであつた場合、そこに輿論が形成されるかどうかといふことである。我々は一致がこの様に完全で、廣汎な場合にはそれを基礎として成立した見解は特に輿論として現れることが出来ないといふ事を認識する必要がある。共通の見解が輿論として現れるためには却つて不一致が前提とされてゐなければならぬ。輿論が輿論として成立するためには、そこに何か此の見解に對する見解があつて、これと戦ふことが豫想される時のみであつて、即ち完全なる不一致に於てもなければ、完全なる一致に於てもなく、むしろ一致と不一致の中間に於てのみ成立する、と云ふことを知るべきである。換言す



れば、輿論は常に社會成員の一切を通ずる見解の如く見えるにも拘はらず、實は社會成員の一部のものゝ見解であると思ふなければならぬ。と云ふことである。

國民輿論がかゝる輿論の一つである事は云ふ迄もない。勿論國民輿論とは國民的輿論のことであつて、これが他と區別されるためには尠くともその内容が次の如き條件に當はまることを必要としよう。

(一)それが全國民の見解であると云はれ得るものであつて、例へば内政、外交等の施政運用の基調になる問題等國家的重要素を持つてゐること。

(二)國民生活の各般に亘る問題中特にそれが全國民又はそれに類似



する（例へば地域的、職域的等）廣汎なる對象を持つこと。

(三) 職域的立場に於けるものであつてもその内容が國家的意義を持つものであるか、又は全職域の重要問題であること。

(四) 地域的に成立したものであつても、その内容が國家的意義を持つものであるか、又はその地方の重要問題であること。

(五) 其他性別、年齢別等に於けるものであつてもそれが國家的意義を持つか、他に大なる影響を持つ社會的重要問題であること。

然し乍ら右の如き條件を以て輿論を検討する際に、我々はその適確なる判断を下す根據に多分の動搖を見出す事と思ふのだが、要するにそれは時代に對する認識と、その基底をなす人々とを良く検討

して、併せて右の如き條件を考慮することによつて判斷さるべきと思はれる。

國民輿論を斯く狹義に解する事には多分の異議もある事と思ふが、即ちそれが全國民の若しくは地域的、職域的廣汎なる人々の一致せる見解なり、意見であるとすれば、その内容がどうであらうとも當然それらを國民輿論と云ふべきではないか、と云はれ得るのであるが、然しこゝで云ふ國民輿論は、それら凡てを含まず内容によつて自ら限定されてゐるものである。

#### 輿論調査の使命

輿論調査の持つ使命は國民輿論を客觀的に適確に把握し、これに

對して、適切なる處置を執ることに資するにあるが、大別すると

(一) 各種機關を通じて直に施政運用其他に反映せしむる

(二) 綜合的に消化して適時考慮する

(三) 其の傾向により適宜指導又は是が意圖する正しい輿論の喚起を

圖る

の三點に歸する。(一)は要するに下情上通であり、(三)は積極的な指導により正しい輿論の喚起を促進するにある。即ち輿論調査の意圖する處は、國民の言はんとすることを聞くと共に、國民は斯くあれ、と指導するにある。徒らに輿論を重視して、輿論に迎合することの危険は、輿論を生命とする民主主義國家に屢々見受けられるところ

である。

アンドレ・モローアは「フランス敗れたり」の中で

「輿論を指導すること——指導者は民に行くべき道を示すもので、民に従ふものではない」と繰り返し注意を促してゐる。身を以て経験したこの眞情を輿論調査に當つて閑却することは出来まい。

精動は新政治體制を如何に考ふべきか

一、新政治體制は今迄に表はれたところを綜合すると新政黨の樹立  
國民組織の確立が核心のやうである。

しかし茲に新政黨といふも國民組織といふも互に關聯を有する  
ものであつて、純理論的には新政黨も國民組織の中に包攝さる  
べきものである。

然るに新政治體制立案首腦部の意向として傳ふるところによれ  
ば國民組織は萬民補翼組織であつて、政黨政治結社と何等關係  
ない。その中樞中央指導部下に議會、經濟、農村、文化、青年  
の各職能的な部が企畫、調査、宣傳、組織の各部と併置される。  
(八・一七東日)といふのである。

この組織ではいつどこで政黨と接觸するのであらう。或ひは政  
黨とは全然關係を持たず政府と直接關聯せしめその行政の受動

體たらしめやうとするのであらうか。

政治結社としての性格を有しない萬民補翼の組織としては精勵も一つの役割を擔つてゐる。新體制の所謂國民組織とは精勵とか産報とかその他各國體の改組、大同團結を意味するものであらうか。或ひはこれらと別個に一種の統制的機能をも有するものを新設するのであらうか。

精勵の不振は政治性を持たぬからだとは定説である。有馬伯などこの點を強調し精勵に政治性を與へることが國民組織といへるとさへいつてゐるのである。

政黨を除外して政府↓國民の關係にすることは獨裁制である。近來各國共國際政局の急速な轉移に對處するため行政部の權限強化が目論まれ、ドイツ、イタリイ、ソ聯を除くの外政黨、議會の機能は減少の傾向にある。ナチ、ファッショ、ソヴェートの獨裁を云々する民主主義國家が却て獨裁制への傾向を強め

てゐる。黨が眞に國民を代表するならば黨國家は獨裁制といふことは誤りである。我國は勿論これらの國々とその建國以來政治組織を異にし假りに立憲主義を採用するも歐米に於ける民主主義的立憲制ではない。すべての制度組織は天皇統治に對する國民の翼賛形態と見るべきである。

しかし乍ら、この翼賛形態は國民の總意に合つたものでなくてはならない。今日歐米各國に於て見られる行政府の權限強化による獨裁的傾向は我國としては斷乎避けなければならぬ。

新政治體制立案者側に於て考究中と傳へられるところを綜合すると政黨（新黨も含めて）の權限縮小化が顯著であることが認められるのである。

これは畢竟するに近く生るべき新黨も既成政黨と本質的には幾莫の差もなく又近き將來にその質を一變することも不可能と見ての深謀である。

然しこれは飽くまで變則である。政黨が國民の總意を代表するものであるならその權限は絶對に縮小すべきものではない。尤も茲に謂ふ國民の總意とは個々に分化した意思の總體ではない。さうしたいはゞ自由主義的な個人意思といふものは綜合されるものでもない。國民の總意は即ち組織された國民の意思である。茲に國民組織と政黨乃至政治との相關性が問題となつて來るのである

國民組織とはだから正當にも且て關れた如く國民の政治組織で



あらねばならない。政黨は、政治の國民化であらねばならない。かゝる意味に於ける國民組織は國民協同體といふ名を以て呼ばれ得るものである。

國民のすべてはまづ地域協同體に編入されねばならない。地域協同體は住居と表裏一體の關係にある。精勵實踐網は大體地域協同體と解していい。これは行政の受動體であるとともに政治組織（下意上達の線によつて國政に參與する）の基底でなければならぬ。次に國民はその職能に應じて經濟協同體に編入されなければならぬ。經濟協同體は經濟活動の實踐體であるとともに又政治組織（經濟領域に於て國政に參與する）を擔任する。

新黨は國民組織の指導機關であると、ともに國民の總意の結束されたものとして議會を経て政府に働きかける。又一方に於ては政府の機關と連絡し國策の企畫を行ふ。

新黨は國民組織の指導といふ見地から指導者制を採用する。指導者は専ら國民の世界觀の統一活動に従事する。

政府の行政官吏は從來の監督官の性格を脱し指導官の性格を與へしむる。

二、精勵はその實踐網整備活動を通じて既に國民組織を實踐し來つた。若し新黨が國民組織を擔當するならば本部はその黨部を擔當すべきである。

黨の構成を左の如きものとするならば精勵本部は組織局を擔當し精勵地方本部は黨支部を擔當すべきものである。

黨

黨部

總務局——總務部、國會對策部、法案審議部、

豫算案審議部

企畫局——政治部、外交部、經濟部、文化部  
政府機關（企畫院）と連絡國策の企畫立案に當る。

組織局——組織部、指導部、情報部、宣傳部

勞働報國聯盟

現在の産業、農業、商業各報國聯盟を改組し勞働統一職線を組織す。經濟協同體と密接に連絡する。

文化國體

社會事業國體

文化、社會兩國體共にその領域に於て地域、職能協同體の指導に當る。

地域協同体に對しては行政系統を通じて行政指導と黨組織を通じて組織、指導に關する黨活動が併行し經濟協同体に對してはその本來の指導系統と併行して黨の指導が行はれる。

【資料26】  
部落会と町内会その常会の話（資料）

部落會と町内會

その常會の話

（資料）

新體制の常會

部落會と町内會の常會

常會による實踐の事例

新體制に於ける中核體との聯繫

内務省の方針

部落會町内會等整備の要領

## 新體制下の常會

國民精神總動員本部

幹事 伊藤

博

### 部落會、町内會を中心とする常會

本日の話は「新體制下の常會」と云ふのでありますが、常會のことでありますならば、各種のいろいろな常會について、申すことゝなりますが、時間の關係もありますので、こゝでは、部落會、町内會の常會について、その意義と使命、その重要性について申上げる、ことゝ致します。

### 新體制下の下部組織

新體制の下に行はれる、大政翼賛運動は、全國民の、心からなる、一大、國民運動として、出發せんとして居りますが、この劃期的な、新體制の、重大時局に當面しまして、内務省は、曩に「部落會、町内會等整備要綱」を發表致しまして、これを全國市町村に完備せしめる

こととなり、内務大臣訓令を以て、地方長官にその整備を命じたのであります。この部落會、町内會が、全國民を、横に貫いた下部組織であります。これが、新體制に於ける、國民の下部組織となるのであります。即ち、これまでの國民精神總動員運動に於きまする、國民精神總動員實踐網と、同じ目的、同じ意義を、もつもので、ありますが、現在に於ける、その整備狀況は、全市町村のうち、整備されたもの約八割、その常會が運営されてゐるものは、其中の四割内外に過ぎないのであります。内務省は、新體制の下、その缺くべからざる必要性から、今回、この完備促進を圖ることとなつたのであります。

#### 組織體と、必ず開く常會

而して、この組織體である部落會は、村落に於ける部落を區域とし、町内會は、都市に於ける町、又は丁目を區域として組織され、その下に、更に十戸を單位として、部落ならば五人組を、都市ならば隣り組といふやうな、實踐體を組織して、それぞれの常會を、所謂部落常會、町内常會、五人組常會、隣り組常會を、必ず開くこととしたのであり

ます。又これを市、町村に於て統制するため、市に於ては、市の常會を、町村に於ては、町村の常會を開き、區制のある大都市では、區の常會を、必ず開くこととし、その管内の部落會長なり、町内會長なり、區長なりを、中心とし、これに、管内の各種團體長、有識者を出席せしむる方針をとつたのであります。更に部落會、町内會の區域が、非常に廣い場合には、これを適當の地區に分けて、五人組、隣り組の聯合會を組織し、又町村、市、區の區域が廣過ぎて、これを分割することが適當なりと見らるゝ場合は、これまた適宜に分けて、部落會、町内會の聯合會を組織することになります。此場合その上の各常會は、聯合會長を中心として、開くことになるのであります。

#### 組織體と活動體の區別

かやうな組織でありまして、この單位細胞とも云ふべき部落會、町内會、その下の五人組、隣り組はその組織體であり、常會は、その活動體で、ありますが、從來やゝもすると、部落の常會、町内の常會を、



組織體である部落會、町内會の如く考へられた向が少くないのであります。これには、種々なる理由や、事情もありまして、かうした解釋が出たのでありますから、止むを得無いくことでありましたが、今後は、この組織體である部落會、町内會が、組織される以上は、活動體たる常會と、これを鈎然と區別してをかなければ、これに伴ふ弊害が生ずるのであります。これまでの例を見ましても、常會を開くと云ふことは、別に、一つの會でもつくるかの如き誤解を生じ、いろいろの會が多くて困つて居るところに、更に新たななる會が出来ては、一層煩はしくなると云ふ、苦情のもとになつたのでありますから、此點は、組織體と、活動體と云ふことの區別を、ハッキリとつけてをく必要があります。

#### 組織體と活動體の意義

以上のやうな、理由でありますから、部落會と町内會、五人組と隣り組と云ふ組織體と、常會と云ふ活動體との意義を、簡単に説明することゝ致します。

## 部落會、町内會とは

初めに、部落會、町内會の組織體についての、意義を申しますと、部落會、町内會は、新體制の根本精神であります。萬民褒贊の本旨に則り、國民悉くを、國の政に參與せしめる組織であり、體制であります。

一、地域的に住民の結束を固めて隣保相扶、相互教化の機關であり、共同生活の實踐機關であること。

二、上意下達、下意上達（うへのことをつたへしもの心をうへにたつする）の傳達の機關であり、精動運動の實踐機關である。

三、市町村の自治行政に於ける補助機關（ぶらぐちやうたいのじちをてつだう）である。

四、常會の活動によつて國民が國策協力（くにのせいさくをしつこう）の態勢を確立強化する機關である。

五、地域的の、共同生活に必要な經濟的機構の發動機關であり、消費の規正、物資の配給の機關である。

と云ふことであります。

### 常 會 と は

部落會、町内會が、かような意義をもつところの組織體に對しまして、その活動體であるところの、常會の意義を簡単に、箇條的に説明すると、

1. 常會は、部落會と町内會、五人組と隣り組が、毎月一定の日に開く集りの會である。

2. 常會は向ふ三軒兩隣りの人々が集つて、互に語り合ひ睦み合ふ會である。

3. 常會は各戸一名は必ず出席し、萬民翼賛の誠を盡す會である。

4. 常會は上からの傳達を理解せしめると共に、國民の聲を纏めて上に申達する會である。

5. 常會は傳達や物の配給を戸毎に行ふ手数を省き、一つの集りで裁く會である。

6. 常會は無理を言はず、互に理解し合ふ會である。

7. 常會は教へる會でなく語り合ふ會、議決の會でなく實行の會、批判の會でなく歡善の會である。

8. 常會は、各種の會合の外に開くものでなく、各種の會を纏める會である。

9. 部落會と町内會、五人組と隣り組が、その共同生活の道場とすれば、常會は住民相互の實地訓練である。

10. 部落會と町内會、五人組と隣り組に常會の無い事は、佛像を造つても魂が入らないと同じである。

と云ふわけに、なるのであります。

#### 常　會　は　魂

かような解釋によつて、理解されるならば、組織體と、活動體の區別も、自ら判然するであります。常會の無い、部落會、町内會は、魂の無い佛像に、等しいと云ふことになるのであります。

以上のやうな意義から、新體制に於ける部落會と町内會、五人組と

隣り組とは、いよいよ其責務の重要なことが認識されるし、その活動體である常會の役割が、如何に大きな力と、なつてゐるかに氣がつくことであります。

### 常會の重要性

最近、部落會、町内會は組織されても、其活動に對し、時々非難や不満の聲が起り、特に、都市に於ける町内會隣り組等に對して、その聲を聞くのであります。例へば、天下りの傳達とか、又は專斷的な切符の配給とか、或は無理解な貯蓄の奨励、米の配給、等と云ふことであります。これ等は、何れも常會を開かない町内會、隣り組等に起るのであります。常會さへ開いて、事をはかり、事を勤め、事を行へば、總ては、互の話し合の下に理解し、納得し、決心し、實行となるのでありますから、決してさうゆう非難や不満は、起らないのであります。常會に課せられた役割の重要性は、こゝにあるのであります。部落會、町内會、五人組、隣り組の幹部役員が、かうした意義あ

る常會も開かず、その組織にのみ頼つてゐるとすれば、それは、新體制下の幹部役員として、その資格が無いものと批判され、又常會を開いても、これに應じない人があるとすれば、それは、新體制下の部落會、町内會の住民として、その自覺の足りない人と云はれても、致方ないのであります。

例を、物資の配給について、申すならば、常會で決定すれば、その實情に即して配給される譯であります。が、常會も開かず、幹部役員の、獨斷的な處置によつて行はれると、この爲に、思はざる弊害の生ずる原因となるのであります。例へば、配給の量は、數字の上では、公平でありましても、實際生活に於ては、不足な場合もあり、又は餘る場合もあります。かうした際に、その過不足を、お互に補ひ合ふことも、常會の語り合ひでこそよくなし得るのであります。節米にしても、米の供出にしても、贅澤の全廢にしても、そのなさねばならぬことを知らしめ、理解せしめることにより、例へば、原料が不足とか、經濟的に不利だ、等と云ふ、節米への不満も起らず、自分の米だから、

賣るも賣らぬも、自分の勝手などと云ふ、個人主義な考も改つて、米を賣る事は、國民同胞に、米を配給することであつて、國家全體のためであるとの考から、米の供出となるのであります。

贅澤の全廢運動も、國民の生活全面から、一切の贅澤行爲を取除き、戦時下の簡素生活の建設にあると云ふ、積極的の意味が判るのであります。かうした實例は、常會の記録に、いくらもありますが、其實例は、他の機會に於て、それぞれの實驗者の體驗談等で、御承知される事と存じますから、こゝでは省くことゝ致します。

### 常會の注意三つ

次に、常會について、特に注意しなければならぬことが三つあります。一つは上級常會と下級常會の連絡であり、一つは常會による各種の會合の、統合であり、次は、常會の指導者の人選であります。

#### 上級常會と下級常會の連絡

第一に、上下の常會の連絡と云ふことは、部落會、町内會にて、その常會が開かれても、上級常會である町村、又は市、區等の常會が開かれないのは、市町村を一體とする、上下常會の活動體制に於て、丁度頭を失つたこと、同じとなり、その意義を失ふこと、なるのであります。又市、區、町村の常會が開かれても、下級の部落會、町内會の常會が開かれないでは、丁度物が尻切れになつたと同じになるのです。あります。即ち、市町村の常會で決定したことが、下級の常會に傳達されて實行に移る。部落會、町内會の常會に表はれた意見が、國民の



聲が、上級の常會に反映する、こゝに上意が下達され、下意が上達され、これが國策の實現となり、國策の生み出し、となるのであつて、此事は、部落常會と五人組常會、町内會常會と隣り組常會に於ても、同じこととなり、上は市、町村から、郡に、道府縣に、政府に同じ體制に於て、相通ずることとなるのでありまして、常會の使命の尊さはいよいよ高まるわけであります。

#### 常會と各種會合の統合

第二の、常會と會合との統合は、部落會、町内會に於ては、その地域内の、各種團體の個別の會合は、出来るだけ避けて、その常會に於て、これを統合することあります。又市町村に於ても同様に、各種の委員會や、團體の會合は、その常會に統合することあります。常會に各種團體長の出席するものも、かうした理由にあるのであります。前にも申したやうに、各種の會合の外に、常會を開くと云ふ弊に陥らぬやう注意し、常會は、各種の會合を統合するのでありまして、例

へば、婦人團體の會合も、同業組合の會合も、産業團體の會合も、出来るだけ常會に合せて、一緒に開く事にするのであります。この結果は、婦人でも、産業團體の事業が判り、同業組合の人であつても、婦人運動のことを、知る事が出来るし、又産業團體の人が、青年團の事業を理解し、青年團の人が、在郷軍人の事を認識する、ことゝなるのであります。要するに、男も女も、團體や組合に、關係の、有る無しに拘らず、總てが常會で知り合ふことが出来るのでありますから、總て、互の協力となり、強き實踐となるのであります。婦人運動は婦人ばかりでなく、産業運動は産業人のみでなく、農業の事は農民ばかりでなく、團體の相違や、業態の差別が無く、互の理解となり、固き一體となつて、強力なる實行となるのでありまして、常會の重要な意義も、又こゝにもあるのであります。この事は市、町村の常會に於ても、又はそれ以外に、上級の常會、或は此種の協力會議等にも相通ずる意味であります。

## 大切な指導者の人選

次に指導者の事ではありますが、常會の活動を完全なものにするには、指導者、其人に、適任者を得ることが、又大切なことであります。これは部落會、町内會の會長、又は幹部の人が、其の任に當るのは原則であります。それのみ因はれることはなく、かうした役割の適任者を、選ぶことであります。即ち部落會、町内會の事務をとる者とは全く離れて、常會の指導者を求めることが、最も大切である、と云ふ事を、考慮することが、必要であります。

以上によりまして、新體制下に於て、部落會、町内會を中心としました、常會のもつ意義と使命、その重要性を、申上げたのであります。更に常會を開くについての注意、苦心等もありますが、こゝではこれだけに止めて置きます。

## 組織の完備と、全常會の活動

内務省が部落會、町内會を完備し、これを中心とする常會の活動を

促すのも、此時局下、かゝる理由にあるのであります。新體制下の下  
部組織であります部落會、町内會が、全市町村に完備され、その組織  
の下、一つ残らず常會の活動が普及され、萬民翼贊の道が開かれん  
事を切望して、止まない次第であります。

（註）以上ハ十月四日午後四時卅分精動特  
報ニ於ケル放送分。其外ハ精動本部機關新  
聞「精動」其他ヨリノ拔萃デアル

### 部落會と町内會の常會

部落會と町内會、五人組と隣り組の常會は、どうゆう具合に開くがよいか、これには、いろいろな注意もあるし、苦心もあるのである。

即ち、常會の區域はどの位がよいか、それから日時、出席者、會場、進行、發言、議題、司會、一人一役、經費と云ふ區別に於て、簡單に解説すること、致しますが、その基準は、五人組と隣り組の常會にをき、更に、部落會、町内會の常會にも關聯し、それぞれの常會に對し、適宜に按配し、考慮を加へ、利用されるやうに致したのであります。以下區域から順次説明致します。

### △ 區 域

常會の區域は、理想としては、五戸乃至十戸を適當とするが、村落の如く、一定の會場のある所は、三四十戸位までは差支いない。

若し部落會の區域が、五十戸から百戸にもなれば、常會の區域はこ

れを二十五戸づつの四班に分けるなり、又は三班にして、常會を開く工夫をしなければならぬ。餘り多くなると、膝を突合はせて語り合ふといふことが出来なくなる弊がある。

特に、都市ではまづ十戸位が限度である。それ以上で常會を開くときは、村落と異り、一定の會場がないから、役員宅を會場に使ふことの弊害に陷るので、會場は輪番で持廻ることの出来る十戸内外が理想である。若し適當の會場があれば、十戸以上二三十戸とするも差支ないのである。

#### △ 日 時

常會の時刻は、大部分は夜間にして、日没後一時間の頃とし、時間は二時間とする。また婦人の常會は、午後に、夕食の支度前一時間位に、閉會する時間を見て開くこともある。また朝常會といふのがあつて、早起勵行により、又は興亞奉公日の朝に、神社參拜の後で開く所もある。この場合は、大體は屋外の常會が多い。何れの場合にも、開

會と閉會の時間勵行は嚴守すること必須條件である。

#### △出席者

常會の出席者は、必ず一戸一名以上とし、主人或は責任ある人が出る。又主婦、その他男女青年も出るやうにしたい。尙小供を同伴する常會もある。この場合學童の學藝會をやる所もある。特に、常會は出席者が少くは、その意義が薄らぐから、出来るだけ多く出席するやう工夫することが必要である。その方法としては多種多様であるが、何れも、その土地の事情に即して考慮さるべきであるが、まづ常會のあることを知らせることが第一である。

#### △會場

理想としては、村落と都市とを問はず、輪番に致したいのであるが、村落では集會所、神社、寺院等を利用する所が多い。役員宅に一定することは、當番に迷惑をかけるのみでなく、又集められると云ふ気分

を起させることは感心しないのである。

席順は、先着順に前から座り、年上であつても、資産家であつても、遅く行けば後に座るといふ風に、階級、資産といふ差別を避けて、平等の資格で席に着くことである。席の形は、會場の模様にもよるが、一定の講話の型にするのもよいが、行事が終つてからは、車座になつて懇談の形にすることも必要である。

### △ 進 行

常會の進行は始めに行事を行ひ、次に講演講話、傳達報告、協議、懇談、申合せ、散會となるが、その行事は教化常會、報徳常會といふやうに、一定の形式もあるが、敢てそれに囚れることはない。事情に即して決定すべきであるが、遙拜、祈念、詔書奉讀は行ふべきである。この行事を行ふ人は、正しい服裝で行ひ、行事は最も嚴肅に行ふことが肝要である。行事が終れば、一同打ち寛いだ氣持になつて、和かな、朗らかな會を進めて行くこととする。行事を面倒が



る向もあるが、これは一つの方式であつて、憎れればそんな気分はなくなるので、最初が肝腎である。次に傳達或は報告といふ際に教へる言動は避け、知らしめる風にやる。

協議懇談には、必ず議題を出して、議題を中心に話を進め、議題外の雑談は嚴禁する。時間勵行のため、議題が餘つた場合は次會に廻すことにする。申合せは、一つでも二つでも決めるやうにし、それは必ず實行する。尙講演、講話は傳達の前を原則とし、それ以外は申合せの次ぎにするが、時間は二十分乃至三十分位の簡單な話にする。

#### △ 登 言

發言は公平にして、一人や二人で獨占しない様氣をつけなければならぬ。日頃沈黙を守る人があれば、時にはその人をして發言せしめることも必要である。此場合は其人の自慢話でもよし、旅行談でもよし、體驗談でもよいから話させることが最も效果的である。

## △ 議 題

常會の議題は、部落會町内會における色々な關係から、精勵運動の徹底と、團策協力の方針といふことになりがちであり、現下の運動として、これも當然ではあるが、常に住民の日常生活に必要な問題を取り上げる必要がある。

常會に行けば、貯金だ、金の集中だ、廢品回収だ、節米のみだといふ心持が起らぬやうに努め、お互の家庭生活の上に必要な事もきかれるし、又定めることが出来るやうに、指導者は努めなければならぬ。

## △ 司 會

司會者は、五人組隣組等の幹部で結構だが、別に幹部とか有識者といふことに拘らはれないで、さういふ司會に適當な人を選ぶことである。

又司會する人も、常會指導者も、其の人の言動は「滅私奉公」の精神につきるのである。かりにも自分が常會の主役とか、指導するとい

ふ風な氣持があつてはいけな。所謂お手傳をする、お世話をするといふ氣持、縁の下の力持でやらねばならぬ。

#### △ 一人一役

常會を開くには色々仕事があるが、これは一人ではなきれないから、皆なで爲すやうにして一人一役主義でやる。これが責任の分擔ともなり、責任感による自發的な活動ともなり、總員協力の態勢ともなるのである。

#### △ 經費

經費は、部落會町内會又は五人組隣り組等自體の負擔とするところもあり、市町村、又は道府縣等上級機關の補助によるものもあり、まちまちであります。が何れにしても、その地方事情や、内部情勢に應じて、無理の無い方法によることに工夫をこらすことが必要である。要するに經費は極力輕減し、負擔の加重に苦しむが如きことは絶対に避けるやう注意することが第一要件である。

### 常會による實踐の事例

常會の運営によつて、いろいろな事が實踐に移るのであるが、その實例として、簡単なもの數項をあげれば、左の如きものである。

#### △東京市麴町區一丁目町會

同町會は、常會の申合せて、節米運動を實踐し、町會で代用食混食等の原料を共同購入し、これを各家庭に配給し、その配給した原料だけが節米となつてゐる。

#### △神戸市湊區の大同町

町内の各隣保常會にて、代用食混食の體驗談をお互に發表し、實行を共勵し、節米の實を擧げてゐる。貯蓄も町會としての標準を申合せて、それによつて共同貯金を實行してゐる。

#### △千葉縣安房郡主墓村荒戸

荒戸部落では、此春の常會の時、東京の<sup>で</sup>小学校學童が木炭の不足

から風邪を引き、缺席児童が非常に多い事を新聞で知つたので、學童が炭不足のために缺席する親心の憐れに同情し、一袋でも多く製炭して、東京の子供を、木炭飢饉から救つてやりたいと、共同製炭を申合せ、直ちに共同竈を造り、共同製炭をして出荷した實例がある。

#### △兵庫縣神崎郡粟賀村加納

部落常會の申合せで、從來の非衛生的な竈所改善を實行し、貯蓄組合の共同運動で、三年間に四十戸全部を改善した例がある。

#### △山形縣東村山郡天童町

二萬圓の町税滞納が、常會の申合せで一年で完納した實例がある。それは各部落の常會で、小學校の教室の破綻や、教材不備に對する不満が起つた所、原因は滞納のためであることを説明され、可憐い我子の教育のために、滞納しては居られないと云ふ全町民の申合せとなり、實行となつた。

そう

### 新體制に於ける中核體との聯繫

部落會、町内會は、新體制の下部組織として、重要な組織網であり、その常會は、萬民翼賛の本旨に則る翼賛體制の重要な活動の機關とも云ふべきである。

而して、新體制と下部組織との關係について見ると、新體制に於ける大政翼賛運動は、中央に中央本部が設置され、其下に道府縣、郡、市町村とそれぞれの支部が出來、中央本部を初め下部の各支部には協力會議が併置されて、これが新體制の中核體となるのであつて、市町村支部とその協力會議はその最下位となるから、部落會、町内會の下部組織の上位である市町村とその常會とが、こゝで相合致し、こゝに中核體と下部組織が市町村の一線に於て統一されて、こゝに密接不可分な體制が出來るのである。即ち下意上達も上意下達も、この一線に結ばれた縦の體制に於て一體となり、それぞれの使命が果されるのである。

## 内務省の方針

内務省が、既に訓令を以て其整備を圖る部落會、町内會更に、これに伴ふ常會の運営を奨励するもの、その重要性から、これが完備促進を圖るわけであつて、~~その部落會、町内會の整備といふことは、總ては、~~新體制に於ける萬民眞實の本旨に則<sup>レ</sup>てこの組織を完備し、これによつて、萬民悉くを國の政に參與せしめると云ふ、高遠なる國體に基くものである。その目的とするところは、大きくわけて四つになるのである。即ち

一、地域的に住民結束の基礎とし、隣保團結の下に所謂共同生活を實踐し共同の任務を遂行すること

二、組織の中に在つて精神的に固く結び合ひ、各人相互に人格の陶冶を圖ること

三、所謂常會によつて國策を國民に徹底せしめ、それによつて國政の運用を滑かにすること

四、國民生活の安定に必要な經濟機能を發揮せしめる。言ひ換へれば

消費の規正、物資の配給の機關にするといふこと

といふのである。この方針によつて新體制の下部組織である部落會、町内會の組織が整へられ、常會の活動となり、萬民翼贊の實が完うされるわけである

以上の如くして、四つの大方針によつて、部落會、町内會の下部組織が整ふわけであるが、内務省としては、此組織については、飽迄も舊來の慣習を尊重し、部落會、町内會の區域に於ても、市制、町村制の上諭の一節にもある「隣保自治<sup>はろ</sup>の舊慣を尊重し、益々これを擴張し」と示されたこの精神に基き舊來の部落的の團體的地域を參酌し、その地域的なる團體活動に有利なる方法を、とらしむる方針である。又五人組、隣り組の區域に於ても、昔の五人組十人組の如き舊慣を尊重して、適當と思はるものは、これを存置せしめる方針である。

次に、部落會、町内會の名稱は、適宜定めるところとした外、代表者たる會長の人選についても、出來るだけ地方の方針に應じて、舊來の慣行によることを認め、その方法は、推薦其他の適當なる方法による



こととしたが、手順上に於ては、~~形式は~~、市町村長の~~委任~~は告示によつて決定するゝやうになつたのである。

五人組、十人組に於ても、其代表者を置くこととしたが、その人選は任意の方法を認めたのである。

尙内務省の「部落會、町内會等整備要綱」はこの基本方針であるので別に添付することとする。

## 部落會町内會等整備の要領

内務省が訓令第十七號を以て、地方長官に命じた部落會町内會の整備の要領竝に訓令の全文左の如くである。

### 内務省訓令（第十七號）

應 府 縣

隣保團結ノ精神ニ基キ市町村內住民ヲ組織結合シ萬民翼贊ノ本旨ニ則リ地方共同ノ任務ヲ遂行セシムル爲左ノ要領ニ依リ部落會町内會等ヲ整備セントス仍テ之ガ實績ヲ舉グルニ努ムベシ

昭和十五年九月十一日 内務大臣 安 井 英 二

### 部落會町内會等整備要領

#### 第一 目的

一 隣保團結ノ精神ニ基キ市町村內住民ヲ組織結合シ萬民翼贊ノ本旨ニ則リ地方共同ノ任務ヲ遂行セシムルコト

二 國民ノ道德的鍊成ト精神的團結ヲ圖ルノ基礎組織タラシムルコト  
三 國策ヲ汎ク國民ニ透徹セシメ國政實施ノ圓滑ナル運用ニ資セシムルコト

四 國民經濟生活ノ地域的統制單位トシテ統制經濟ノ運用ト國民生活ノ安定上必要ナル機能ヲ發揮セシムルコト

## 第二 組織

### 一 部落會及町内會

(一) 市町村ノ區域ヲ分チ村落ニハ部落會、市街地ニハ町内會ヲ組織スルコト

(二) 部落會及町内會ノ名稱ハ適宜定ムルコト

(三) 部落會及町内會ハ區域内全戸ヲ以テ組織スルコト

(四) 部落會及町内會ハ部落又ハ町内住民ヲ基礎トスル地域的組織タルト共ニ市町村ノ補助的下部組織トスルコト

(五) 部落會ノ區域ハ行政區其ノ他既存ノ部落的團體ノ區域ヲ斟酌シ地域的協同活動ヲ爲スニ適當ナル區域トスルコト

(六) 町内會ノ區域ハ原則トシテ都市ノ町若ハ丁目又ハ行政區ノ區域ニ依ルコト但シ土地ノ狀況ニ應ジ必ズシモ其ノ區域ニ依ラザルコトヲ得ルコト

(七) 必要アルトキハ適當ナル區域ニ依リ町内會聯合會ヲ組織スルコトヲ得ルコト

(八) 部落會及町内會ニ會長ヲ置クコト會長ノ選任ハ地方ノ事情ニ應ジ從來ノ慣行ニ從ヒ部落又ハ町内住民ノ推薦其ノ他適當ノ方法ニ依ルモ形式的ニハ尠クトモ市町村長ニ於テ之ヲ選任乃至告示スルコト

(九) 部落會及町内會ハ必要ニ應ジ職員ヲ置キ得ルコト

(十) 部落會及町内會ニハ左ノ要領ニ依ル常會ヲ設クルコト

(イ) 部落常會及町内常會ハ會長ノ招集ニ依リ全戶集會スルコト但シ區域内海保班代表者ヲ以テ區域内全戶ニ代フルコトヲ得ルコト

(ロ) 部落常會及町内常會ハ第一ノ目的ヲ達成スル爲物心兩面ニ亘

リ住民相互ノ教化向上ヲ圖ルコト

(ハ) 部落會及町内會區域内ノ各種會合ハ成ルベク部落常會及町内常會ニ統合スルコト

## 二 隣保班

(一) 部落會及町内會ノ下二十戸内外ノ戸數ヨリ成ル隣保班（名稱適宜）ヲ組織スルコト

(二) 隣保班ノ組織ニ當リテハ五人組、十人組等ノ舊慣中存重スベキモノハ成ルベク之ヲ採リ入ルルコト

(三) 隣保班ハ部落會又ハ町内會ノ隣保實行組織トスルコト

(四) 隣保班ニハ代表者（名稱適宜）ヲ置クコト

(五) 隣保班ノ常會ヲ開催スルコト

(六) 必要アルトキハ隣保班ノ聯合組織ヲ設クルコトヲ得ルコト

## 三 市町村常會

(一) 市町村（六大都市ニ在リテハ區以下同ジ）ニ市町村常會（六大都市ノ區ニ在リテハ區常會以下同ジ）ヲ設置スルコト

(二) 市町村常會ハ市町村長ハ六大都市ノ區ニ在リテハ區長ヲ中心トシ部落會長、町内會長又ハ町内會聯合會長及市町村內各種團體代表者其ノ他適當ナル者ヲ以テ組織スルコト

(三) 市町村常會ハ市町村內ニ於ケル各種行政ノ綜合的運營ヲ圖リ其ノ他第一ノ目的ヲ達成スル爲必要ナル各般ノ事項ヲ協議スルコト

(四) 市町村ニ於ケル各種委員會等ハ成ルベク市町村常會ニ統合スルコト

## ■あ と が き

大室政右氏は、早稲田大学を卒業されて直ぐに国民精神総動員運動の事務方となり、二十代の若さで全国的な国民運動の事務をこなされた。その後、大政翼賛会の事務局を一時経験されるが直ぐに辞められ（氏は翼賛会には極めて批判的であった）、翼賛選挙確立協議会の事務局を補佐された。また、府中町の翼賛壮年団を実質的に結成され、東京市の翼賛選挙を手伝われた後、南方に出征された。復員後は、戦争でお兄様をなくされた為、家業を継がれるが、美濃郡都政下で都議になられ、鈴木都政を支える自民党都連の幹事長などを務められた。都議を引退されてからも神社関連の役員などを歴任されている。

本冊子に纏められたオーラルヒストリーは、府中郷土の森博物館の馬場治子氏が、政策研究大学院大学教授でオーラルヒストリープロジェクトの研究代表者であった御厨貴先生（現東京大学教授）にお話を持ち込まれたのがきっかけで始まった。武田と、当時、政策研究大学院大学リサーチアシスタントであった清水唯一郎氏（現東京大学特任助手）が聞き手となって、平成十四年七月に第一回目を行った。記録は丹羽清隆氏に作成をお願いし、お話の中に出てきた、普通ならば記録に残らないような大室家の見取り図なども再現してもらうことにした。それから約一年半、大室氏が体調を崩された為に若干の休止期間があったが、平成十五年十二月までに、一回につき二時間から三時間、計十回に亘ってお話をお聞きした。途中からは、大室氏紹介の労をおとりいただいた馬場氏にも随時参加して頂き、特に府中関連の事柄について助けて頂いた。また、本文にもあるが、大室氏は、早稲田卒業直後の国民精神総動員運動時代の体験が、その後の仕事の原体験であ

ったと繰り返し言われ、そのお話に大分熱をこめられた。しかし、我々は、戦争を挟んで波瀾万丈の人生を送られた大室氏から、政治に必ずしも関係のない事柄も、また戦後の都議時代のこともお話しさいとお願いした。従って、これは大室氏のライフヒストリーというべきものに仕上がっている。我々若手研究者の拙い質問に、根気よく且つ丁寧に答えてくださる大室氏の話はとても魅力的であり、あの戦争の時代から、地元のために尽くされると同時に、国家規模のプロジェクトの裏方としてご苦労をされた経験談に、我々は度々聞き入ったものである。

ところで、お話の途中で、大室氏が所蔵されている戦時期関連の史料の存在を知った。大室氏が自ら書庫から持ってこられ、それを見せながらお話しされたこともあった。途中でその史料をお借りして仮目録を作成させていただき、（目録作成には、川越美穂、石田沙矢香両氏の協力を得た）、最終回ではそれらの史料を基礎にして総括的なお話をうかがった。そこで、インタビューで用いたものの一部を、長くなることを厭わず、巻末に掲載した。インタビュー記録を理解する際の参考になればと思う。

大室氏には、既に『渦巻く時流の中で』（現代史調査会、昭和六三年）、『秘境ボルネオ戦記』（総和社、平成八年）の二冊の著作があるが、二〇〇四年三月に緑蔭書房から『翼賛選挙』を公刊された。これで、氏の三部作ということになる。これらの本と本冊子は相互に補完する関係にある。併せて一読をお願いする次第である。

二〇〇四年三月三十日

政策研究院特別研究員 武田知己

平成15年度 文部科学省科学研究費補助金〔特別推進研究(COE)〕  
研究成果報告書〔課題番号12CE2002〕  
発行：2004年3月30日《無断転載禁》

---

政策研究大学院大学(政策研究院)  
C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

〒162-8677 東京都新宿区若松町2-2  
Tel：03(3341)0458 Fax：03(3341)0446